

小野市黍田町所在

勝手野古墳群

-勝手野遺跡-

-勝手野古墳群-

-勝手野窯跡群-

平成14年3月

兵庫県教育委員会



勝手野古墳群遠景（航空写真・南から）



勝手野古墳群から加古川対岸（正法寺山）を望む



勝手野遺跡（旧石器）断面



勝手野遺跡（旧石器）遺物出土状況



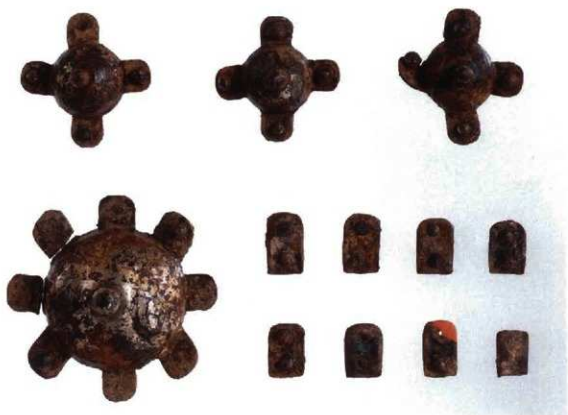
3号墳石室内遺物出土状況



3号墳石室内馬具出土状況



3号墳出土の馬具（鏡板・杏葉）



3号墳出土の馬具（雲珠・辻金具・革金具）



6号墳装飾付須恵器出土状況



6号墳装飾付須恵器設置状況の復元



6号墳出土の裝飾付須恵器



裝飾村須惠器小像
右個體 1「狩獵」 2「男女對面」 3「相撲」 4「不明」
左個體 5「狩獵」 6「不明」



2号窑坑出状况



3号窑坑出土状况

例 言

- 1 本報告書は、山陽自動車道（三木～姫路）建設に伴って実施した、小野市黍田町字勝手野に所在する勝手野遺跡・勝手野古墳群・勝手野竈跡群の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査及び整理作業は、日本道路公団大阪建設局の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
- 3 現地における発掘調査は、平成4年度及び平成7年度に確認調査を行い、本発掘調査は、平成7年5月8日～平成8年3月22日の間に実施した。
- 4 本報告書に掲載した周辺の遺跡位置図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1の地形図、明治26年大日本帝国陸地測量部測量（大正7年改版）の「北条」「高砂」、及び明治19年同測量部測量の2万分の1の地形図「小野町」を使用している。
- 5 遺跡の地形図及び遺構の実測図は、国土地理院V系を基準とし、実測図の方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均水準を基準としている。
- 6 本報告書の遺物番号は、原則として古墳・竈跡単位とし、通し番号を付していない。ただし、図版遺物については、混乱を避けるため、各古墳・竈跡の号数を並記している。
- 7 本報告書の執筆・編集は、井守徳男・久保弘幸・松岡千寿が行った。各執筆分担は、第8章の依頼原稿を除いて、以下のとおりである。
井守 徳男 第1章第1節・第2節1～2、第2章、第4章、第9章第2～4節
久保 弘幸 第1章第2節3～5、第3章、第4章第4節4、第5節3・4、第7節4、第7章、第9章第1・5節
松岡 千寿 第5章、第6章、第9章第6節
- 8 第8章については、青木哲也・壇原徹・養科哲男・三辻利一・（財）元興寺文化財研究所各位から、玉稿を頂戴した。感謝申し上げたい。
- 9 本報告書にかかる遺物・図面・写真等の資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所及び魚住分館に保管している。
- 10 発掘調査及び整理作業にあたっては、以下の方々からご指示・ご指導を得た。

（五十音順、敬称略、所属は当時）

青木哲也（立命館大学講師）、伊藤隆夫（京都大学教授）、岡本一士（加古川市教育委員会）、小川真理子（神戸女子大学大学院）、小野山節（京都大学名誉教授）、粕谷修一（小野市立小野好古館）、黒田叔正（小野市立小野好古館長）、小網豊（三木市教育委員会）、後藤博弥（神戸女子大学教授）、佐藤良二（香芝市教育委員会）、柴垣勇夫（愛知県立陶磁資料館）、立花聡（加西市教育委員会）、田中真吾（神戸大学教授）、千賀久（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、永井信弘（加西市教育委員会）、中西信（小野市教育委員会）、西田猛（小野市教育委員会）、菱田哲朗（京都府立大学助教授）、榎本誠一（兵庫県立歴史博物館）、間壁成子（神戸女子大学教授）、松藤和人（同志社大学助教授）、松村正和（三木市教育委員会）、山口卓也（関西大学講師）、山田邦和（同志社大学講師）、藤坂光彦（広島県教育委員会）、和田晴吾（立命館大学教授）

目 次

第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	3
第2章 周辺の環境	
第1節 地理的環境	12
第2節 歴史的環境	12
第3章 勝手野遺跡（後期旧石器時代）の調査	
第1節 概要	17
第2節 微地形と層序	18
第3節 遺構	20
第4節 遺物	24
第5節 小結	34
第4章 勝手野古墳群の調査	
第1節 勝手野古墳群周辺の古墳時代の様相	37
第2節 古墳群の分布と構成	42
第3節 1号墳	49
第4節 2号墳	58
第5節 3号墳	73
第6節 4号墳	108
第7節 5号墳	121
第8節 6号墳	139
第9節 7号墳	159
第10節 8号墳	167
第11節 未調査の古墳（9～11号墳）	173
第5章 勝手野竈跡群の調査	
第1節 調査の概要	175
第2節 1号竈	176
第3節 2号竈	181
第4節 3号竈	185

第6章 古墳群再利用時の遺構と遺物	
第1節 調査の概要	191
第2節 1号墳	191
第3節 3号墳	191
第4節 4号墳	197
第5節 5号墳	198
第6節 6号墳	198
第7節 7号墳	199
第8節 8号墳	199
第9節 小 結	200
第7章 その他の遺構と遺物	
第1節 勝手野遺跡（上層）の遺構と遺物	202
第2節 縄文・弥生時代の遺物	205
第8章 自然科学的分析	
第1節 勝手野遺跡の地形環境（青木）	208
第2節 勝手野遺跡における土壌中テフラ抽出分析（檀原他）	216
第3節 勝手野遺跡出土サヌカイト製遺物および 黒曜石製遺物の原材産地分析（高杉）	239
第4節 勝手野古墳群出土須恵器、土師器の蛍光X線分析（三辻）	257
第5節 金銅装馬具の分析（元興寺文化財研究所）	267
第9章 総 括	
第1節 後期旧石器時代初頭における勝手野遺跡の位置付け	273
第2節 勝手野古墳群の築造過程	279
第3節 3号墳出土の馬具	287
第4節 6号墳出土の装飾付須恵器	289
第5節 3号墳出土家形石棺底石に見られる加工痕	292
第6節 勝手野竈跡群の採集時期及び竈の構造	297
英文サマリー	314

挿 図 目 次

第1章 調査の経過	2号墳
第1図 昭和28年出土の遺物…………… 2	第31図 墳丘(調査前)…………… 58
第2図 平成4年度確認調査トレンチ配置図… 4	第32図 墳丘(表土除去後)…………… 59
第3図 本発掘調査範囲設定図…………… 6	第33図 須恵器甕埋設坑…………… 60
第4図 古墳地区割り図…………… 7	第34図 墳丘断面…………… 61
第2章 周辺の環境	第35図 横穴式石室…………… 62
第5図 地形分類図…………… 13	第36図 遺物出土状況…………… 63
第6図 周辺の遺跡分布…………… 15	第37図 遺物出土状況(部分)…………… 63
第3章 勝手野遺跡(後期旧石器時代)の調査	第38図 遺物出土状況(模式図)…………… 64
第7図 確認調査TP位置及び本発掘調査範囲設定図… 17	第39図 家形石棺(1)…………… 66
第8図 地層断面図…………… 19	第40図 家形石棺(2)…………… 67
第9図 石器ブロック区分図…………… 21	第41図 出土土器(1)…………… 69
第10図 石器分布図(器種別)…………… 22	第42図 出土土器(2)…………… 70
第11図 石器分布図(石材別)…………… 23	3号墳
第12図 石器(1)…………… 25	第43図 墳丘(調査前)…………… 73
第13図 石器(2)…………… 27	第44図 墳丘(表土除去後)…………… 74
第14図 石器(3)…………… 29	第45図 墳丘断面…………… 75
第15図 石器(4)…………… 30	第46図 横穴式石室…………… 77
第16図 石器(5)…………… 31	第47図 敷石残存状況…………… 82
第17図 接合・母岩別資料分布図…………… 32	第48図 家形石棺底石…………… 83
第4章 勝手野古墳群の調査	第49図 家形石棺(1)…………… 84
第18図 勝手野古墳群周辺の主要古墳・寺院跡… 39	第50図 家形石棺(2)…………… 85
第19図 勝手野古墳群の位置…………… 42	第51図 家形石棺(3)…………… 86
第20図 勝手野古墳群の位置…………… 43	第52図 家形石棺組み合わせ復原状況…………… 87
第21図 勝手野古墳群測量図(調査前)… 45	第53図 土器出土状況(模式図)…………… 88
第22図 勝手野古墳群測量図(表土除去後)…………… 46	第54図 鉄器出土状況(模式図)…………… 89
1号墳	第55図 土器出土状況…………… 91
第23図 墳丘(調査前)…………… 50	第56図 鉄器出土状況…………… 91
第24図 墳丘(表土除去後)…………… 50	第57図 出土土器(1)…………… 96
第25図 墳丘断面…………… 51	第58図 出土土器(2)…………… 98
第26図 横穴式石室…………… 52	第59図 出土鉄器(1)……………100
第27図 遺物出土状況…………… 53	第60図 出土鉄器(2)……………102
第28図 遺物出土状況(模式図)…………… 54	第61図 出土鉄器(3)……………103
第29図 出土土器…………… 55	第62図 出土鉄器(4)……………105
第30図 出土鉄器…………… 56	第63図 出土装身具……………106

4号墳		第99図	裝飾付須恵器小像(右個体) ……154
第64図	墳丘(調査前) ……108	第100図	裝飾付須恵器小像(左個体) ……156
第65図	墳丘(表土除去後) ……109	第101図	裝飾付須恵器小像(腕残片) ……156
第66図	墳丘断面 ……110	第102図	出土鉄器・装身具 ……157
第67図	横穴式石室 ……111	7号墳	
第68図	第2次床面検出状況 ……112	第103図	墳丘(調査前) ……159
第69図	第2次床面鉄器出土状況(模式図) ……113	第104図	墳丘(表土除去後) ……160
第70図	第1次床面遺物出土状況 ……114	第105図	墳丘断面 ……161
第71図	第1次床面遺物出土状況(模式図) ……115	第106図	横穴式石室 ……162
第72図	出土土器 ……117	第107図	遺物出土状況 ……163
第73図	出土鉄器(1) ……118	第108図	遺物出土状況(奥壁付近) ……164
第74図	出土鉄器(2)・装身具 ……119	第109図	遺物出土状況(模式図) ……164
第75図	出土鉄器(3) ……119	第110図	出土土器 ……165
5号墳		第111図	出土鉄器 ……165
第76図	墳丘(調査前) ……121	8号墳	
第77図	墳丘(表土除去後) ……122	第112図	墳丘(調査前) ……167
第78図	墳丘断面 ……123	第113図	墳丘(表土除去後) ……168
第79図	横穴式石室 ……124	第114図	墳丘断面 ……169
第80図	遺物出土状況(前庭部) ……126	第115図	横穴式石室 ……170
第81図	遺物出土状況(模式図) ……127	第116図	遺物出土状況(模式図) ……171
第82図	家形石棺 ……129	第117図	出土土器 ……172
第83図	出土土器(1) ……131	未調査の古墳(9~11号墳)	
第84図	出土土器(2) ……132	第118図	出土土器 ……174
第85図	出土土器(3) ……134	第5章 勝手野宮跡群の調査	
第86図	出土鉄器 ……136	第119図	竈跡の位置 ……175
第87図	出土装身具 ……137	1号竈	
6号墳		第120図	平面・断面 ……177
第88図	墳丘(調査前) ……139	第121図	灰原出土土器(1) ……178
第89図	墳丘(表土除去後) ……140	第122図	灰原出土土器(2) ……179
第90図	墳丘断面(上半) ……141	第123図	灰原出土土器(3) ……180
第91図	墳丘断面(下半) ……142	2号竈	
第92図	横穴式石室 ……144	第124図	平面・断面 ……182
第93図	箱式石棺 ……145	第125図	竈体出土土器 ……183
第94図	遺物出土状況(模式図) ……147	第126図	灰原出土土器 ……184
第95図	裝飾付須恵器出土状況 ……148	3号竈	
第96図	出土土器 ……149	第127図	竈体内土器出土状況 ……185
第97図	裝飾付須恵器(右個体) ……150	第128図	平面・断面 ……186
第98図	裝飾付須恵器(左個体) ……151	第129図	竈体出土土器 ……187

第130図	灰原出土土器……………	189	第155図	分析データシート(6)……………	233
第6章	古墳群再利用時の遺構と遺物		第156図	分析データシート(7)……………	234
第131図	1・3・7号墳再利用時の 土器出土状況……………	192	第157図	分析データシート(8)……………	235
第132図	3号墳石室内再利用時の土器……………	193	第158図	分析データシート(9)……………	236
第133図	3号墳墳丘出土土器……………	195	第159図	サスカイト原産地の分布……………	241
第134図	4・8号墳再利用時の遺物出土状況…	196	第160図	黒曜石原産地の分布……………	242
第135図	5～8号墳再利用時の土器……………	197	第161図	勝手野1号宮出土須恵器の両分布図…	260
第136図	6号墳再利用時の遺物出土状況…	198	第162図	勝手野2号宮出土須恵器の両分布図…	260
第137図	近世以降の遺物……………	199	第163図	勝手野3号宮出土須恵器の両分布図…	261
第138図	再利用時の鉄器……………	200	第164図	勝手野1号墳出土須恵器の両分布図…	261
第7章	その他の遺構と遺物		第165図	勝手野2号墳出土須恵器の両分布図…	262
1.	勝手野遺跡上層の遺構と遺物		第166図	勝手野3～5号墳出土須恵器の両分布図…	262
第139図	遺構……………	203	第167図	勝手野6～8号墳出土須恵器の両分布図…	263
第140図	3号墳付近遺構位置……………	204	第168図	正法寺古墳出土須恵器の両分布図…	263
第141図	3号墳付近遺構配置……………	204	第169図	和田神社遺跡出土須恵器の両分布図…	264
第142図	土坑1・ピット1と土器……………	206	第170図	No70金銅装鏡板 ①②のXRFスペクトル……………	269
2.	縄文・弥生時代の遺物		第171図	No70金銅装鏡板③、No77金銅装杏葉 ①のXRFスペクトル……………	270
第143図	弥生土器・ハンマーストーン……………	206	第172図	No77金銅装杏葉 ②③のXRFスペクトル……………	271
第144図	表面採集の石器……………	207	第173図	No77金銅装杏葉④、No71金銅装吊金具 ①のXRFスペクトル……………	272
第8章	自然科学的分析		第9章	総括	
第145図	地形分類図……………	209	第174図	東播磨地域における 後期旧石器時代遺跡の分布……………	274
第146図	勝手野遺跡付近の地形と 石器・古墳の分布……………	211	第175図	兵庫県内出土の台形石器……………	275
第147図	調査区における堆積物の パネルダイヤグラム……………	212	第176図	台形石器の形態分類……………	276
第148図	6号墳下の地質断面図(スケッチ)	213	第177図	鏡板付響復原案……………	287
第149図	土壌中火山灰(火山ガラス) 抽出分析処理順序……………	216	第178図	装飾付須恵器小像展覧園……………	290
第150図	分析データシート(1)……………	228	第179図	工具刃部の形態……………	293
第151図	分析データシート(2)……………	229	第180図	平安時代の露跡分布図……………	301
第152図	分析データシート(3)……………	230	英文サマリー		
第153図	分析データシート(4)……………	231	fig.181	The situation of the site……………	314
第154図	分析データシート(5)……………	232			

図 版 目 次

巻首図版		図版 6	1号墳	1	調査前
巻首図版 1	上 勝手野古墳群遠景(航空写真・南から)			2	完掘状況
	下 勝手野古墳群から加古川対岸 (正法寺山)を望む	図版 7	1号墳	1	右側壁
巻首図版 2	勝手野遺跡(旧石器)断面			2	左側壁
	勝手野遺跡(旧石器)遺物出土状況			3	石室全景
巻首図版 3	上 3号墳石室内遺物出土状況	図版 8	1号墳	1	墓竈
	下 3号墳石室内馬具出土状況			2	石室内遺物出土状況
巻首図版 4	上 3号墳出土の馬具(鏡板・杏葉)			3	石室内遺物出土状況
	下 3号墳出土の馬具(鬘珠・正金具・革金具)	図版 9	2号墳	1	調査前
巻首図版 5	上 6号墳裝飾付須恵器出土状況			2	完掘状況
	下 6号墳裝飾付須恵器設置状況の復元			3	断面
巻首図版 6	6号墳出土の裝飾付須恵器	図版10	2号墳	1	右側壁
巻首図版 7	裝飾付須恵器小像			2	左側壁
	右個体 1「狩猟」 2「男女対面」			3	石室全景
	3「相撲」 4「不明」	図版11	2号墳	1	墓竈
	左個体 5「狩猟」 6「不明」			2	石室内遺物出土状況
巻首図版 8	2号竈検出状況			3	石室内遺物出土状況
	3号竈遺物出土状況	図版12	2号墳	1	石室内遺物出土状況
				2	石室内遺物出土状況
				3	作業状況
図 版					
図版 1	航空写真(昭和27年米軍撮影)	図版13	3号墳	1	調査前
図版 2	1 調査着手前の勝手野古墳群(平成4年)			2	完掘状況
	2 調査着手前の勝手野古墳群(平成7年)			3	断面
	3 確認調査の状況(平成4年)	図版14	3号墳	1	断面(横断北東側)
図版 3	勝手野遺跡(旧石器)			2	断面(縦断奥壁裏)
	1 旧石器出土状況			3	右側壁
	2 a : 旧石器出土状況(B-5グリッド)	図版15	3号墳	1	左側壁
	b : 旧石器出土状況(C-5グリッド)			2	奥壁
	3 a : 台形石器出土状況(C-5グリッド)			3	石室完掘状況
	b : 使用面のある圓片出土状況(B-5グリッド)	図版16	3号墳	1	墓竈
図版 4	1 地層断面(A-5グリッド南壁)			2	石棺出土状況
	2 地層断面(B-5グリッド西壁)			3	石棺出土状況
	3 地層断面(C-5グリッド西壁)	図版17	3号墳	1	石棺出土状況
図版 5	勝手野古墳群			2	石棺出土状況
	1 航空写真(表土除去後)			3	石棺出土状況
	2 航空写真(墳丘除去後)				

図版18	3号墳	1 a : 石棺奥壁側小口板遺存状況 b : 同細部 2 奥壁付近遺物出土状況 3 奥壁付近遺物出土状況	図版30	6号墳	1 調査前 2 天井石遺存状況 3 完掘状況
図版19	3号墳	1 石室内断面 2 a : 羨門部臺出土状況 b : 同細部 3 遺物出土状況	図版31	6号墳	1 断面 2 右側壁 3 左側壁
図版20	3号墳	1 遺物出土状況 2 石槽除去後 3 馬具出土状況	図版32	6号墳	1 奥壁 2 石室全景(右側壁修復後) 3 墓壇
図版21	3号墳	1 馬具出土状況 2 馬具出土状況 3 排水溝検出状況	図版33	6号墳	1 石槽検出状況 2 石棺内装身具出土状況 3 裝飾付須恵器出土状況
図版22	4号墳	1 調査前 2 完掘状況 3 断面	図版34	6号墳	1 裝飾付須恵器出土状況 2 裝飾付須恵器出土状況(右側体) 3 裝飾付須恵器出土状況(右側体小像)
図版23	4号墳	1 右側壁 2 左側壁 3 奥壁	図版35	6号墳	1 裝飾付須恵器出土状況(右側体) 2 裝飾付須恵器出土状況(小像) a : 左側体猪 b : 左側体鹿 c : 右側体猪 d : 右側体男性
図版24	4号墳	1 石室全景 2 墓壇 3 石室 第2次床面	図版36	6号墳	1 裝飾付須恵器出土状況(左側体) 2 裝飾付須恵器出土状況(左側体) 3 裝飾付須恵器設置状況推定復元
図版25	4号墳	1 石室 第1次床面 2 a : 第2次床面遺物出土状況 b : 石室内断面 c ~ f 第1次床面遺物出土状況	図版37	7号墳	1 調査前 2 完掘状況 3 断面
図版26	5号墳	1 調査前 2 完掘状況 3 断面	図版38	7号墳	1 右側壁 2 左側壁 3 奥壁
図版27	5号墳	1 右側壁 2 左側壁 3 奥壁	図版39	7号墳	1 墓壇 2 石室内遺物出土状況 3 石室内遺物出土状況(奥壁付近)
図版28	5号墳	1 石室全景 2 墓壇 3 石室内遺物出土状況	図版40	8号墳	1 調査前の状況 2 完掘状況 3 断面
図版29	5号墳	1 石室内遺物出土状況 2 a ~ f 石室内遺物出土状況	図版41	8号墳	1 右側壁 2 左側壁

		3 奥壁	図版58	4号墳	土器 (1)
図版42	8号墳	1 石室全景	図版59	4号墳	土器 (2)・5号墳 土器 (1)
		2 墓塚	図版60	5号墳	土器 (2)
図版43	8号墳	1 石室内断面	図版61	5号墳	土器 (3)
		2 石室内遺物状況	図版62	5号墳	土器 (4)
		3 石室内遺物出土状況	図版63	5号墳	土器 (5)
図版44	1号窟	1 調査前	図版64	5号墳	土器 (6)・6号墳 土器 (1)
		2 窟跡全景	図版65	6号墳	土器 (2)
		3 断ち割り状況	図版66	6号墳	土器 (3)
図版45	2号窟	1 検出状況	図版67	7・8・10号墳	土器
		2 窟跡全景	図版68	1号墳	鉄器・3号墳 鉄器 (1)
		3 床面断ち割り状況	図版69	3号墳	鉄器 (2)
図版46	3号窟	1 検出状況	図版70	3号墳	鉄器 (3)
		2 横断面	図版71	3号墳	鉄器 (4)
		3 窟体内遺物出土状況	図版72	4・5号墳	鉄器
図版47	3号窟	1 窟体内遺物出土状況	図版73	1・3～7号墳	鉄器・装身具・その他
		2 灰原土層縦断面	図版74	3号墳	鉄器 X線写真
		3 窟体内遺物出土状況	図版75	2号墳	石棺材 (1)
図版48	勝手野遺跡 (上層)		図版76	2号墳	石棺材 (2)
		1 全景	図版77	3号墳	石棺底石
		2 ビット1土器出土状況	図版78	3号墳	石棺材 (1)
		3 土坑1石棺材出土状況	図版79	3号墳	石棺材 (2)
図版49	旧石器 (1)		図版80	5号墳	石棺材
図版50	旧石器 (2)		図版81	3号墳	石棺底石 加工痕 (1)
図版51	旧石器 (3)・その他の石器		図版82	3号墳	石棺底石 加工痕 (2)
図版52	1号墳	土器	図版83	1・2号窟	土器
図版53	2号墳	土器 (1)	図版84	3号窟	土器
図版54	2号墳	土器 (2)	図版85	古墳再利用時	土器 (1)
図版55	3号墳	土器 (1)	図版86	1.古墳再利用時	土器 (2)・陶磁器
図版56	3号墳	土器 (2)		2.2.勝手野遺跡 (上層)	土器
図版57	3号墳	土器 (3)			

写真目次

写真1	分析サンプル偏光顕微鏡写真(1)	237
写真2	分析サンプル偏光顕微鏡写真(2)	238
写真3	金鋼鉄器具分析部位およびSEM像	268

表目次

第1表	「毛狐山3号墳発掘調査報告書」掲載の勝手野古墳群の概要	1
第2表	「小野市遺跡分布図」掲載の勝手野古墳群の概要	2
第3表	各年度の整理事業の体制	9
第4表	ブロック別石器組成表	26
第5表	勝手野遺跡サンプル1地点における火山灰濃集層率とその特徴	219
第6表	勝手野遺跡サンプル2地点における火山灰濃集層率とその特徴	220
第7表	勝手野遺跡サンプル3地点における火山灰濃集層率とその特徴	220
第8表	保存用試料一覧表	221
第9表	重鉱物組成	222
第10表	火山ガラス屈折率測定結果一覧表(1)	223
第11表	火山ガラス屈折率測定結果一覧表(2)	224
第12表	勝手野遺跡サンプル1の土壤中火山灰抽出分析結果	225
第13表	勝手野遺跡サンプル2の土壤中火山灰抽出分析結果	226
第14表	勝手野遺跡サンプル3の土壤中火山灰抽出分析結果	227
第15表	各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(1)	246
第16表	各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(2)	247
第17表	原産地不明の組成の似た石材で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	248
第18表	岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果	249
第19表	和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果	249
第20表	和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果	249
第21表	各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(1)	250
第22表	各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(2)	251
第23表	各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(3)	252
第24表	各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(4)	253
第25表	各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(5)	254
第26表	各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(6)	255
第27表	勝手野遺跡サヌカイト製石器、剥片の元素比分析結果	256
第28表	勝手野遺跡採集黒曜石製剥片の元素比分析結果	256
第29表	勝手野遺跡出土のサヌカイト、黒曜石製石器、石片の原産地推定結果	256

第30表	須恵器胎土分析試料および分析結果（1）	266
第31表	須恵器胎土分析試料および分析結果（2）	267
第32表	金剛装馬具より検出された元雲	268
第33表	勝手野古墳群総括表	280
第34表	兵庫県の煙管状窯	299
第35表	勝手野遺跡出土旧石器基本データ	304
第36表	勝手野古墳群出土土器の器種構成	305
第37表	勝手野古墳群出土土器観察表	306
第38表	勝手野窯跡群出土土器観察表	311
第39表	古墳再利用時の土器観察表	313

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

1 調査の概要

勝手野遺跡・勝手野古墳群・勝手野竪石群は、兵庫県小野市黍田町字勝手野に所在する。遺跡の中心をなすのは、横穴式石室を埋葬施設とする11基から構成される古墳時代後期の群集墳である勝手野古墳群で、その他、旧石器時代遺跡及び平安時代後期の竪石群から形成される。

このうち、勝手野古墳群では、日本道路公団が施工する山陽自動車道建設工事の事業地内に存在する8基の古墳の発掘調査を実施した。また、確認調査で判明していた古墳群隣接地での後期旧石器時代遺跡及び古墳墳丘盛土斜面等を利用した平安時代後期の竪石3基と、それに付随する遺構についても合わせて発掘調査を行った。以下、本報告書では、旧石器時代遺跡を「勝手野遺跡」、古墳群を「勝手野古墳群」、竪石を「勝手野竪石群」として記述することとする。なお、3時期の遺跡を包括した記述部分については、遺跡の中心を占める「勝手野古墳群」を総称として使用することがある。

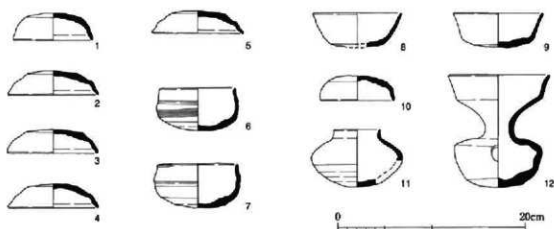
2 勝手野古墳群調査前史

勝手野古墳群は、少なくとも明治時代にはその存在が知られていた¹⁾ようで、磨石等に利用するため石室の石材が持ち出されていたらしい。

昭和10年に栗山一夫は「播磨加古川流域の古墳及び遺物調査報告」において、黍田集落の南方の「印南郡境を為す桶筒山中に横穴古墳あり。殆ど崩壊し、漸く残存せる石材によって推定されるのみである。」と報告しており²⁾、勝手野古墳群の記載であるとすれば、昭和初期にはすでに横穴式石室は崩壊した状況にあったと推定される。

古墳名	墳形	東西径	南北径	高さ	埋葬施設	外部施設	備 考	本報告番号
1号墳	円墳	10.5	9.2	2.0	石 室	周 溝	石材露出	6号墳
2号墳	円墳	8.2	8.2	1.8	不 明	周 溝	墳頂部に6.1×2.3の凹地	7号墳
3号墳	円墳	8.2	8.4	1.3	不 明	周 溝	盜掘痕3.6×1.3	1号墳
4号墳	円墳	9.8	7.5	1.0	石 室	周 溝	石材露出	2号墳
5号墳	円墳	12.8	11.5	3.0	横穴式石室	周 溝	半壊S50°w	5号墳
6号墳	円墳	11.1	11.8	2.8	石 室	周 溝	石材露出	4号墳
7号墳	円墳	15.5	16.0	3.5	横穴式石室	周 溝	半壊S75°w	3号墳
8号墳	円墳	11.0	10.0	2.0	不 明	周 溝	墳頂部に2.9×1.2の凹地	9号墳
9号墳	円墳	12.5	10.8	1.8	石 室	周 溝	墳頂部に2.8×1.3の凹地	10号墳
10号墳	円墳	8.2	7.6	2.5	石 室	なし	石材露出	8号墳

第1表 「毛無山3号墳発掘調査報告書」掲載の勝手野古墳群の概要



第1図 昭和28年出土の遺物

遺跡番号	地図番号	遺跡名	所在地	立地	地目	種類	遺跡の概要ほか
143	20	勝手野1号墳	黍田町字勝手野	山裾	山林	古墳	径11m、高さ1mの円墳、横穴式石室、古墳後期
144	20	勝手野2号墳	黍田町字勝手野	山裾	山林	古墳	径8m、高さ1mの円墳、横穴式石室、古墳後期
145	20	勝手野3号墳	黍田町字勝手野	山裾	山林	古墳	径18m、高さ3mの円墳、横穴式石室、古墳後期
146	20	勝手野4号墳	黍田町字勝手野	山裾	山林	古墳	径13m、高さ2mの円墳、横穴式石室、古墳後期
147	20	勝手野5号墳	黍田町字勝手野	山裾	山林	古墳	径12m、高さ2mの円墳、横穴式石室、古墳後期
148	20	勝手野6号墳	黍田町字勝手野	山裾	山林	古墳	径10m、高さ1mの円墳、横穴式石室、古墳後期
149	20	勝手野7号墳	黍田町字勝手野	山裾	山林	古墳	径10.5m、高さ1.4mの円墳、横穴式石室、古墳後期
150	20	勝手野8号墳	黍田町字勝手野	山裾	山林	古墳	径11.7m、高さ1.8mの円墳、横穴式石室、古墳後期
151	20	勝手野9号墳	黍田町字勝手野	山裾	山林	古墳	径7m、高さ0.7m円墳、主体部不明、古墳後期
152	20	勝手野10号墳	黍田町字勝手野	山裾	山林	古墳	径11m、高さ1mの円墳、横穴式石室墳古墳後期
153	20	勝手野11号墳	黍田町字勝手野	山裾	山林	古墳	径11m、高さ1mの円墳、横穴式石室、古墳後期

第2表 「小野市遺跡分布地図」掲載の勝手野古墳群の概要

その後、昭和28年には地元の人たちによって、黍田公民館の礎石として石室の石材が持ち出された際に、須恵器等が出土し、現在、小野南中学校及び黍田コミュニティーセンターに保管されている（第1図）。昭和34年に刊行された『祖先のあしあと』Ⅳでは「加東郡の最南端委の田には、郡境の勝手野に六基ほどの横穴式石室があり、金環や須恵器が出土している。」と述べられている³⁾。また、この事情を詳しく記述している『毛無山3号墳発掘調査報告書』では「勝手野1号墳」から出土したもので、合わせて「磚」が出土しているとされた⁴⁾ことから、注目される古墳となった。なお、今回の発掘調査結果からすれば、これらの遺物が出土した古墳は、黍田集落に最も近い2号墳であり、「磚」とされたも

のは家形石棺片であることが判明した。

一方、勝手野古墳群が行政的に埋蔵文化財包蔵地として周知されたのは比較的最近のことで、昭和40年発行の『兵庫県道跡地名表』⁴¹及び昭和47年度発行の『道跡分布地図及び地名表』⁴²からは観測している。また、この『道跡分布地図及び地名表』を基本とした文化庁発行『全国道跡地図 兵庫県』⁴³にも記載がない。

ようやく、先にふれた昭和57年3月刊行の『毛無山3号墳発掘調査報告書』の付載に勝手野古墳群が紹介され、10基から構成されるとされた。その概要は、第1表のようにになっている。

その後、平成4年に刊行された『小野市道跡分布地図』⁴⁴に11基（道跡番号143～153）の古墳から構成されているとされ、勝手野古墳群の構成基數全体がようやく明らかとなった。この道跡地図では古墳番号の付し方に混乱もみられるが、煩雑さを避けるため、本報告書ではこの道跡地図に付された古墳番号を踏襲することにする。この分布地図に記述された勝手野古墳群の概要は、第2表のとおりである。

第2節 調査の経過

1 確認調査および保存協議

確認調査の経過

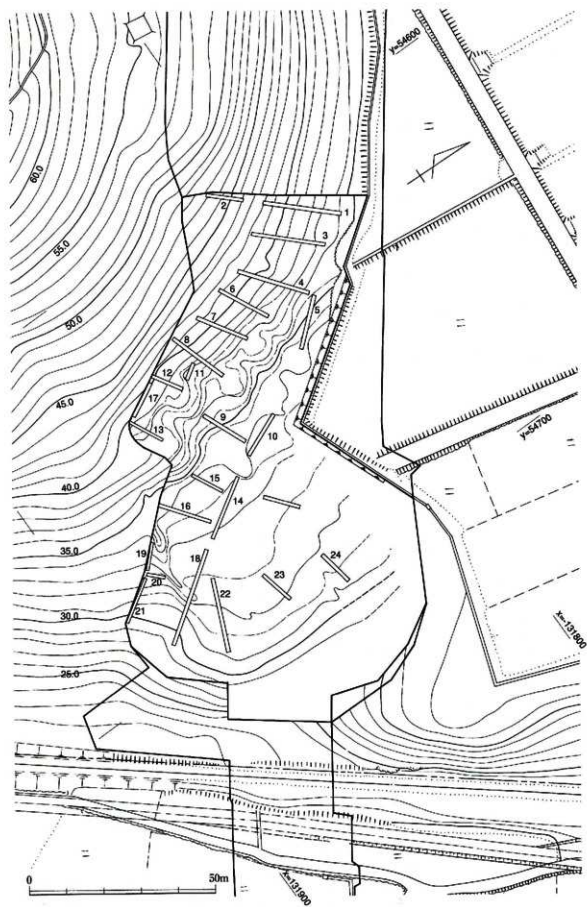
勝手野古墳群では、『小野市道跡分布地図』及び県教育委員会が行った山陽自動車道建設に伴う計画路線内の分布調査結果に基づき、事業地内に所在する8基の古墳の墳丘規模の確認と、既発見以外の古墳の有無及び地時期の遺跡の可能性についての資料を得るため、平成4年2月1日～3月18日にかけて、埋蔵文化財調査事務所久保弘幸、深江英恵の両名を担当者として確認調査を行った。この結果、3号墳上方の山腹斜面に設定された17トレンチで平安時代後期の須恵器を伴う焼土面、13トレンチで灰原が検出されたことから、須恵器窯跡の存在が予想された。また、加古川に面する段丘面の東側に土塁があるとされたほか、平安時代とみられる柱穴・土坑が検出された。さらに、8号墳南側に隣接する段丘面にあたる22トレンチ等でヌカイト・チャート製の石器・剥片類が出土し、後期旧石器時代の遺跡の存在が予想された。

平成4年度の確認調査結果を受け、古墳群に隣接する段丘面で認められた旧石器時代遺跡の残存状況と範囲確認のため、平成7年4月に久保弘幸、井本有二を担当者として15か所のテストピットを設定して確認調査を実施した。その結果、TP2で原位置を保った石器が3点出土したほか、3か所で剥片が出土し、後期旧石器時代の遺跡が存在が明らかとなった。

保存協議の実施

平成4年度の確認調査結果を受けて、平成5年3月31日付け教文第1476号で、兵庫県教育委員会から日本道路公団大阪建設局に対し、「調査の結果、古墳9基及び平安時代の遺跡等が建設予定地に存在することが判明しました。ついては、別添図赤色で示す範囲（報告者注：平成7年度本発掘調査に対応する範囲を示す）の保存について、兵庫県教育委員会と協議をお願いします。」との保存に向けた協議要請をおこなった。

その後、平成5年6月に勝手野古墳群等の保存について、日本道路公団神戸工事事務所と協議を行い、再度、古墳群の残存状況が良好であり、また、かつて「1号墳（執筆者注：本報告書で記載する2号墳）」



第2図 平成4年度確認調査トレンチ配置図

から、県内ではほとんど例のない「磚」が出土したと伝えられていることから、保存の検討を進めるように要望した。この要望に対し、公団からは、東側に隣接する加古川を跨ぐ橋梁高が寸でに決定していること、また、当該地の詳細設計を準備中であることから、詳細設計作成後に改めて協議したいとの回答があった。

こうした公団との保存協議をふまえ、県教育委員会では、県もしくは小野市が主体となった公園整備等の保存方策の可能性について、県土木部に対し検討の要望を行った。これを受けた県土木部からは、県が整備を行う場合については、面積が狭小であること、周辺に広域公園が存在していること、小野市が整備を行う場合については財政的理由等から、ともに難色を示され、県・市以外の第三者が公園整備を行うという条件であれば、公園化は可能であるとの見解が示された。

その後、平成5年12月に、公団、県土木部、県教育委員会の3者で協議をおこない、公団から古墳群の全面保存は事実上困難であり、一部の古墳について保存するとの検討案が示された。具体的には古墳群上を跨ぐ案、カルバートボックス案、路線迂回案の3案が示されたが、いずれの案も工事計画、経費、地元との再協議等の問題があることが明らかにされた。

その後、さらに勝手野古墳群の保存について協議を重ねたが、最終的には古墳群全体を保存することは困難であるとの結論に達し、記録保存のための本発掘調査を実施する方針が決定された。

2 本発掘調査

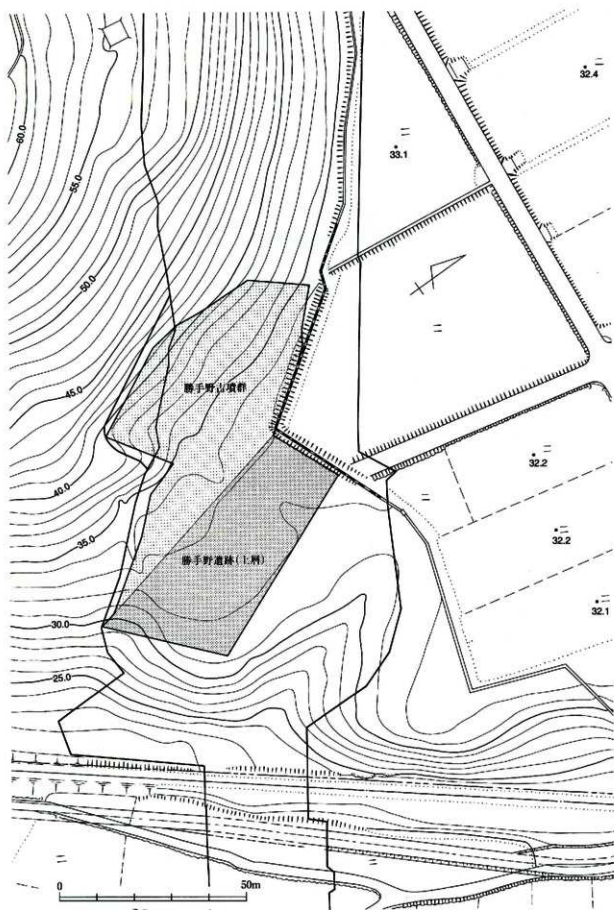
確認調査結果を受け、日本道路公団との協議の結果、工事計画の進捗状況に併せ、平成7年度に約3,800㎡を対象に本発掘調査を行うこととなり、平成7年5月8日に発掘調査を開始し、平成8年3月22日にすべての発掘調査を完了した。本発掘調査の体制は下記のとおりである。

【本発掘調査の体制】

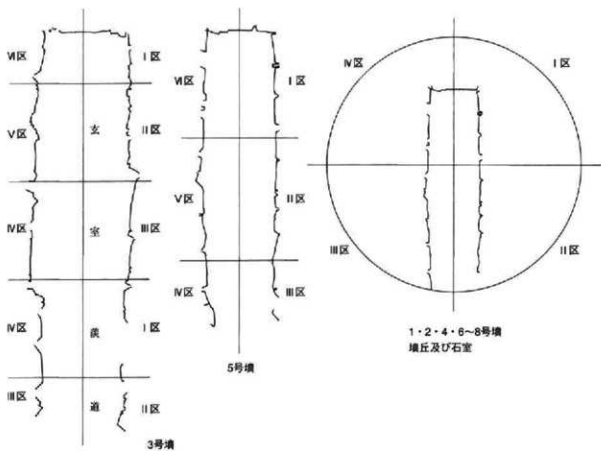
1 調査期間	平成7年5月8日～平成8年3月22日
2 発掘調査主体	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
3 発掘調査担当者	調査第2班 調査専門員 井守 徳男 主 査 久保 弘幸 技術職員 松岡 千寿 研 修 員 井本 有二 調査補助員 大石 雅一、石松 崇、住本 剛史、 山本 真土、中村 真也 室内作業員 五百蔵道代、大田八重子

本発掘調査は、工事工程との調整の結果、調査完了を急ぐ確認調査で中世期の遺跡とされた段丘面の発掘調査から開始したが、3号墳南東部平坦面で須恵器焼片を埋設したピット等が発見されるにとどまった。その間、古墳群の調査前の現状地形について、縮尺1/100、25cm間隔の等高線での平板測量を行ったが、斜面の高低差が大きく作業は難渋し、12日間を費やした。

平板測量終了に合わせ古墳の発掘作業を開始したが、掘削残土等の運搬を考慮し、3号墳から調査を



第3図 本発掘調査範囲設定図



第4図 古墳地区割り図

開始し、順次2・4号墳の調査を進めた。

墳丘の調査にあたっては、掘削前の現況観察でおおよそ石室主軸方向と考え得る方向を基準線として墳丘中央で4区に分割し、開口部から石室に向かって右側をI区として、時計回りにI～IV区とし、墳丘表土層と石室内の攪乱土の除去から始めた。その結果、正確な石室主軸が判明しない調査前に設定したため、基準線の設定が石室主軸とズレを生じることがあり、石室内の堀土をある程度除去した後、石室主軸が判明した時点で墳丘の地区設定を修正した。石室内は石室主軸を基準線として4区分し、基準線から奥壁右側をI区、時計回りにI～IV区として、床面から遊離した遺物等を取り上げた。なお、3・5号墳は石室規模が大きいと判断されたため、第4図のようにして遺物等を取り上げた。

墳丘盛土除去し、築造時の墳丘盛土面を確認した時点で、再度、調査区内についてのみ、縮尺1/100、25cm間隔の等高線で平板測量を行った。

石室内は堆積土の断面を記録しながら順次、掘り下げ、石室床面を検出した。床面に接した遺物については、写真撮影と縮尺1/10を原則として遺物出土状況の実測を行い、石室、墳丘全景を写真で記録した。

全景撮影後、墳丘は側壁側2方向及び奥壁側の畦畔を残し、墳丘盛土の除去を行った。ただし、田表土層の識別が困難なものもあり、地山面まで掘削してしまったものがある。石室の実測は縮尺1/10で行い、実測終了後、石材を除去し、石室墓標を記録し、本発掘調査を完了した。

発掘調査では、発掘調査工事を請け負った業者の提供する作業員の多くが発掘調査に参加した経験がなく、発掘調査の遂行と調査精度の確保に支障を来すことが多々あった。

発掘調査が進行した9月初旬に、6号墳から極めて遺存状態のよい小像を配した装飾付須恵器が出土しことから、10月31日に記者発表を行ったところ大きな反響があり、新聞各紙の1面に大きく掲載されるとともに、テレビ、ラジオ等でも報道された。記者発表後の11月3日には現地説明会を開催したところ、交通の便がよくないにもかかわらず、兵庫県教育委員会主催の現地説明会では最多の約1,200人の参加があった。その後、3号墳の調査が進むにつれ、金銅装馬具が多量出土したことから、平成8年2月7日に第2回目の記者発表を行った。この間、文化庁記念物課西田調査官、小野市史編纂委員、兵庫県議会文教常任委員会等の現地視察があった。

確認調査の際に見え、本発掘調査着手時点ですでに知られていた3号墳墳丘上方の窯跡（1号窯）は、古墳群の本発掘調査に先がけて調査を実施した。その後、8号墳の墳丘西側斜面で2・3号窯が相次いで検出され、合計3基からなる勝手野窯跡群であることが判明した。

現地調査が終了した直後の平成8年4月19日から5月6日の期間、小野市立好古館において「特別公開 速報勝手野古墳群—小野市から出土した装飾付須恵器—」展を開催し、装飾付須恵器、金銅装馬具を始め、主要出土品約122点を展示した。なお、会期中の平成8年4月28日には調査担当者の井守が講師となって講演会「勝手野古墳群発掘調査について」を開催した。

その後、6号墳出土の装飾付須恵器は、文化庁主催の「速報展」にも出品し、東京国立博物館など全国8館で巡回展示され、図録表紙、展示会ポスターにも使用された。

3 整理事業

整理事業は、平成10年度～13年度にわたって、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。各年次の整理事業の体制は、第3表に示すとおりである。整理実務は、調査を担当した久保・松岡が主にこれをおこない、非常勤嘱託員が中心となって業務を実施した。

なお、各年次を通じて整理事業に参画した非常勤嘱託員は、下記のとおりである（職は当時）。

主任技術員	八木 和子、池田 悦子、古谷 章子
企画技術員	香川フジ子、本窪田英子
図化技術員	村上 京子、前川 悦子、木村 淑子、前田千栄子、横山キクエ 鈴木まき子、竹内 泰子、小野 潤子、松本 嘉子、尾鷲都美子 奥野 政子、小寺 恵美子、大前 篤子
図化補助技術員	三好 綾子
日々雇用職員	芦田 実美

【整理事業の体制】

年度	整理事業の体制	主要な作業
平成10年度	整理普及班 調査専門員 岡崎 正雄 主 査 森内 秀造 主 査 加古千恵子	金属器保存処理 遺構写真整理
	整理担当職員 主 査 久保 弘幸 技術職員 松岡 千寿 研修員 井本 有二	
平成11年度	整理普及班 調査専門員 岡崎 正雄 主 査 森内 秀造 主 査 加古千恵子	金属器保存処理 出土遺物接合・補強 遺物固化 遺構写真整理
	整理担当職員 主 査 久保 弘幸 技術職員 松岡 千寿 研修員 井本 有二	
平成12年度	整理普及班 調査専門員 岡崎 正雄 主 査 岡田 章一 主 査 加古千恵子 技術職員 岡本 一秀	金属器保存処理 遺物写真撮影・遺物固化 トレース
	整理担当職員 主 査 久保 弘幸 技術職員 松岡 千寿	
平成13年度	整理普及班 主任調査専門員 池田 正男 主 査 岡田 章一 主 査 加古千恵子	遺構図トレース レイアウト
	整理担当職員 主任調査専門員 井守 徳男 主 査 久保 弘幸 技術職員 松岡 千寿	

第3表 各年度の整理事業の体制

4 金属器の保存処理

今回の調査で出土した金属器の大部分は、埋蔵文化財調査事務所において保存処理を実施した。処理工程の概略は以下のとおりである。なお、3号墳で出土した金剛装馬具類については、(財)元興寺文化財研究所に処理・分析を委託した。

- ① 台帳作成 出土金属器個々のカルテを作成し、処理前の観察と写真撮影を実施。
- ② 事前調査 X線透過試験、実体顕微鏡による観察等を実施。処理前の観察と写真撮影を実施。
- ③ 脱塩処理 水酸化リチウム法により、埋没中に生じた塩化物イオンを除去する。インプロビアルコール・水酸化リチウム・メチルアルコールを混合した溶液に遺物を浸し、塩化物イオンを溶出させる。
- ④ 錆取り 小型精密グラインダー・エアブレイシブを用い、物理的に錆取りを実施。
- ⑤ 樹脂含浸 アクリル系樹脂NAD10を用いて強化処理を行う。
- ⑥ 接合整形 エポキシ系樹脂により、接合、充填を実施。
- ⑦ 台帳作成 保存処理後の経過を把握するため、個々の遺物カルテを作成。
- ⑧ 梱包保管 梱包用フィルムを用いて、脱酸素剤とともに封入・保管する。

5 自然科学的分析

調査にあたっては、下記のような遺跡・遺物についての自然科学的分析を実施した(敬称略)。分析をお願いした各先生方には、コメント・玉稿を本報告書に掲載させていただいた。

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| ① 勝手野遺跡周辺における地形形成 | 立命館大学文学部地理学科 講師 青木 哲哉 |
| ② 勝手野遺跡における土壌中の降下火山灰 | 京都フィッシュトラック 榎原 徹也 |
| ③ 勝手野遺跡出土サヌカイトの原産地推定 | 京都大学原子炉実験所 助手 薬科 哲男 |
| ④ 勝手野古墳群・窯跡群出土須恵器の胎土分析 | 大谷女子大学 教授 三辻 利一 |
| ⑤ 勝手野古墳群3号墳出土土具の成分分析 | 財)元興寺文化財研究所 |
| ⑥ 勝手野古墳群3号墳出土土具付着木質の同定 | 京都大学木質化学研究所 教授 伊藤 隆夫 |

青木氏には、調査現地における深掘トレンチの断面観察及び航空写真を用いた地形分析から、遺跡周辺における地形形成史の復原を試みていただいた。

火山灰分析にあたっては、調査担当者が調査区のグリッド線上に設けられた断面観察用畦畔から、柱状連続試料を採取し、これを分析していただいた。

サヌカイトの原産地分析は、実施にあたり遺物の風化面を除去する必要があるため、まず図化・写真撮影をおこない、終了後、エアブレイシブを用いて片面の風化層を除去し、分析を行った。

須恵器胎土分析には、すべて本書に記載された図化資料を用いるとともに、各古墳・窯跡からの出土遺物を確認することにつとめた。これは、個々の遺物と分析データの対応を明示すると同時に、古墳単位の傾向を把握するためである。分析用試料は、図化作業終了後に調査担当者が資料の一部(1cm程度)を工具で割り取って採取し、これを分析していただいた。

[注]

- 1) 岸本直文他『小野市史』第4巻資料編Ⅰ 小野市史編纂専門委員会 平成9年
- 2) 栗山一夫「播磨加古川流域の古墳及び遺物調査報告」『人類学雑誌』第50巻第5号 昭和10年
栗山一夫「播磨加古川流域の古墳及び遺物調査報告(續)」『人類学雑誌』第50巻第6号 昭和10年
- 3) 神戸新聞社会部編『祖先のあしあと』Ⅳ 昭和36年
- 4) 高島信之他『兵庫県小野市 毛熊山3号墳発掘調査報告書』小野市教育委員会 昭和54年
- 5) 兵庫県教育委員会編『兵庫県遺跡地名表』 昭和40年
- 6) 兵庫県教育委員会編『兵庫県権蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表』第2分冊 昭和48年
- 7) 文化庁文化財保護部編『全国遺跡地図 兵庫県』 昭和57年
- 8) 小野市教育委員会編『小野市遺跡分布地図-小野市内遺跡詳細分布調査報告書-』 平成4年

第2章 周辺環境

第1節 地理的環境

加古川は長さ86.5kmの兵庫県最長の河川で、但馬との国境にある栗鹿山付近に発し、最上流域にあたる丹波地域では在治川とも呼ばれ、丹波・播磨境界付近で篠山川が合流し加古川となる。播磨地域では杉原川、東条川、万願寺川、美濃川などの主要な支流のほか、中小の支流を合わせながら、播磨平野の東部を南流し、瀬戸内海東部の播磨灘に注ぐ。

播磨地域のみに限定した狭義の加古川は、一般的には河口から美濃川との合流点付近までの旧加古郡域を下流域、杉原川の合流点付近までの旧賀毛郡域を中流域、篠山川の合流点付近までの旧多可郡域を上流域と便宜的に分けられることが多い。

中流域にあたる小野市域北部では右岸の青野ヶ原台地、左岸の小野台地に挟まれた地域に段丘面と低地が形成されている。段丘面の形成は左岸側で顕著に認められ、市域の中心部もこの段丘面上にある。市域南端部の右岸には西から延びる緩やかな山地（法華山地もしくは来住山地）があり、加古川と接している。

加古川右岸では、古代賀毛郡域の中心地と考えられる加西市方面から青野ヶ原台地の縁辺部に沿って流れる主要支流の一つである万願寺川が合流する。一方、左岸では北部で合流する東条町方面から西流する東条川のほか、万願寺川、山田川、桜谷川などの小河川がある。

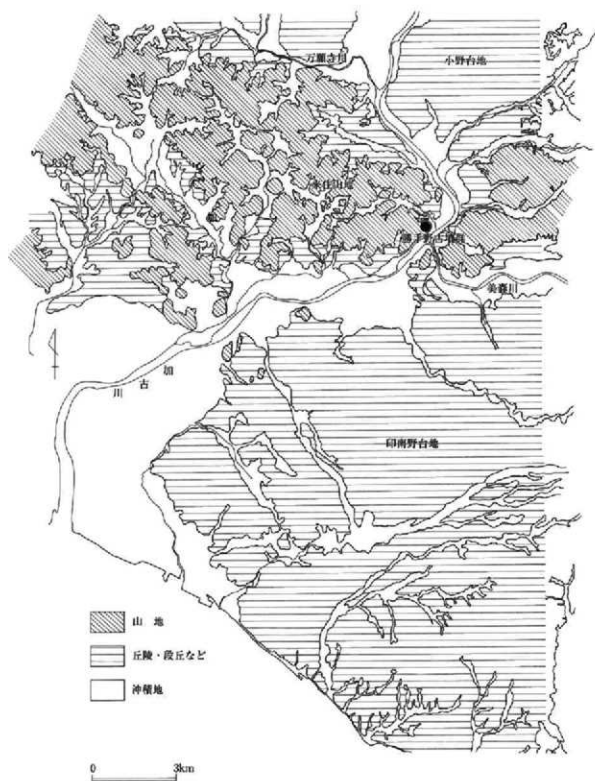
下流域にあたる加古川市域北部では、右岸側で先述の加西市方面から延びる法華山地が右岸付近まで延びている。河岸には段丘面と低地が形成されているが、顕著なものではない。左岸地域には印南野台地が東方へ大きく拡がり、台地縁辺部には段丘面が形成されている。

加古川左岸には中流域と下流域を分ける主要支流である美濃川が西流し、美濃川に沿って三木市域となっている。美濃川両岸には河川に沿うように東西方向に丘陵が延び、河川との間に段丘面と低地が形成されている。

美濃川右岸の加古川との合流点付近には標高152mの正法寺山地が加古川に接し、対岸の来住山地とともに、河口から上流に向かって初めて山地が加古川に迫る狭隘な場所となっている。

第2節 歴史的環境

勝手野古墳群は播磨東部を南北に貫流する加古川現河口から約15km上流の右岸に位置し、現在の行政区画では小野市委田町字勝手野にあたる。勝手野古墳群の所在する委田町は、小野市域の南端に位置し、古墳群から南へ約100mの丘陵稜線上で加古川市域となっている。また、加古川を挟んで対岸部南側は、三木市域となっていて、勝手野古墳群は行政区画上、小野市域にあるとはいえ、ほぼ3市の境界線上にあるといえる。ところで、この地域の現在の行政区画は、おおむね古代律令制下を踏襲されたものであり、律令制下では加古川市域等の加古郡・印南郡、小野市域等の賀毛郡、三木市域等の美濃郡の境界線上に位置していることになる。



第5図 地形分類図

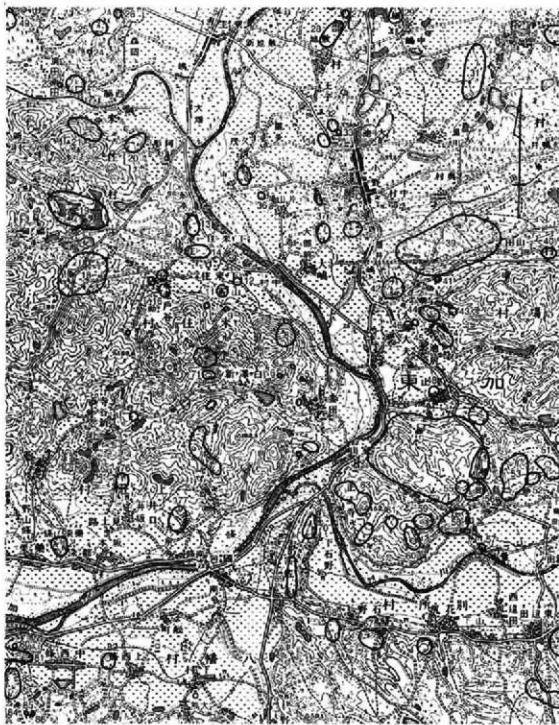
勝手野古墳群の発掘調査で明らかとなった旧石器時代遺跡、古墳、平安時代後期の窯跡については、それぞれの関係各節で触れることにして、本節では周辺に分布する遺跡について、簡単に紹介することにしたい。

後期旧石器時代の遺跡は、勝手野遺跡周辺に広がる段丘・丘陵上に分布が知られている。踏査による遺物の採集例がほとんどで、特に窟池周辺での採集例が多い。小野市青野ヶ原台地にある窟池、逆池遺跡では、国府型ナイフ形石器、角錐状石器をはじめ、多数の石器が採集されている。また、鴨池遺跡でもナイフ形石器が採集されている。加古川市七ッ池遺跡では、ナイフ形石器、台形石器等が、複数地点で採集されている。

縄文時代遺跡の状況は、不明な部分が多い。縄文時代草創期の有舌尖頭器は、小野市窟池遺跡、加古川市七ッ池遺跡で採集されている。早期以降の遺跡としては、小野市域では、青野ヶ原で石鏃が数多く採集されているほかは、高田小山ノ下遺跡で後期に属する土器がみつまっている程度である。三木市域では、これまで縄文遺跡は発見されていなかったが、最近、志染川流域のいくつかの遺跡から、縄文土器が発見され、今後、さらに資料の増加が期待される。一方、加古川市域では、加古川下流左岸に広がる印南野台地の末端部にある宮山遺跡では後期の住居跡や集石遺構が発見されているほか、右岸の岸遺跡で晩期後半の土器と弥生時代前期前半が共存して出土している。他に、加古川の最も下流域にあたる高砂市域では、前期後半から晩期の日笠山貝塚、晩期の埴田遺跡などが知られている。

弥生時代になると、遺跡数が多くなる。小野市域では、加古川左岸の段丘面で、いくつかの遺跡が圃場整備事業に伴う調査で発見されている。高田古苗代遺跡は、前期末から継続的に営まれた遺跡であり、後期の竪穴住居跡が2棟発見されている。垂井遺跡では、後期の五角形で張り出し部を持ち、高床部がある大型竪穴住居などが発見されている。その他、中期の高田地蔵ノ木遺跡、久保木遺跡などが知られ、万壽寺川流域の小田城遺跡で後期後半の竪穴住居跡が発見されている。

加古川右岸では青野ヶ原台地裾部の沖積地にある河合中カケ田遺跡では、前期の袋状土坑、中期前半に遡るものを含む円形溝溝墓群、後期の竪穴住居跡が発見されている。青野ヶ原台地の縁辺部、標高94mにある金鐘城遺跡は、平地との比高差が約60mあり、中期後半を中心とする6棟の竪穴住居跡が発見されており、高地性集落と考えられる。大寺遺跡は中期から後期にかけての営まれた遺跡で、金鐘城遺跡の母村とも考えられている遺跡である。加古川市域では、縄文時代晩期の土器と弥生時代前期の土器が共存する遺跡は先述の岸遺跡のほか、右岸の砂部遺跡、東神吉遺跡、溝之口遺跡などがあり、多くは古墳時代以降にまで継続する。また、溝之口遺跡に近い美乃利遺跡では前期の水田跡が発見されている。ほぼ前期に限定される東神吉遺跡を除くこれらの遺跡は、集落の規模、継続性などから加古川下流域の拠点的な集落とみてよい。中期には印南野台地の先端の段丘上に西条庵寺下層遺跡や中西台地遺跡、平遺跡などの集落が現れ、高地性集落とする意見がある。印南野台地では北辺の眺望のよい地点で扁平型6区変安模紋銅鐸が出土しており、望塚銅鐸といわれている。三木市域では、前期の遺跡は多くないが、中期になると市内各地域で遺跡数が急増する。特に、美霧川右岸に接する丘陵先端部は山陽自動車道建設事業に伴う発掘調査によって多くの成果が得られている。年ノ神遺跡では、美霧川に向かって延びる丘陵尾根先端部付近で中期後半の竪穴住居が発見されている。年ノ神遺跡に近い大二遺跡では溝等から土器が出土しており、近辺に集落遺跡が存在すると考えられる。年ノ神遺跡の西丘陵上にある貝谷遺跡からは溝で区画された墓域から木棺墓、土器棺が検出されており、年ノ神遺跡の墓域である可能性



標高	地名	標高	地名	標高	地名
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

第6図 周辺の遺跡分布

が高い。後期では年ノ神遺跡と同様の立地にある右岸の和田神社遺跡で壑穴住居が発見されているほか、沖積地では鳥町遺跡が知られている。また、加古川との合流点に近い正法寺山の東方鞍部から中継c類に分類される銅剣が出土しており、注目される。

古墳時代に入ると、加古川下流域を中心に、大型の前方後円墳が築かれるようになり、播磨地域の中心的位置を占めていたと考えられる。一方、中流域では大型前方後円墳は少ないが、それぞれ特徴ある古墳が築かれている。小野市域では、古墳総数は約600基程度が存在したとされ、大多数は後期のものであろう。前期の様相は不明確であるが、中期では、左岸の段丘上に敷地大塚・小野王塚古墳などが代表的である。中期末から後期にかけて焼山古墳群・櫻山古墳群等に代表される100以上に及ぶ小型の木棺直葬墳が築かれている。一方、右岸の後期古墳は、横穴式石室墳を中心とするようで、勝手野古墳群もこの右岸地域に築造された横穴式石室墳からなる群集墳の一つである。集落遺跡では、左岸低位段丘面で古墳時代初頭の敷地西遺跡、前期の王子城ノ下遺跡、中期後半の敷地西遺跡、中期後半から後期の高田宮ノ後遺跡などが存在し、大部古墳群を築造した集団の集落と考えられている。加古川市域では、古墳総数は約300基ほどが知られている。既に失われた古墳もあり、実数は400基を超えたと考えられる。加古川下流域に所在する古墳の分布状況から、揖保川下流域とともに古代播磨地域の中心的な勢力圏があったことがわかる。三木市域では、最新の資料では約430基の古墳が発見されているが、そのうちの大半は後期古墳であるとみられる。

律令制下では、瀬戸内海沿岸部に沿って、主要官道である山陽道が整備された。国府・国分寺・国分尼寺は、西方の市川流域に存在するが、古代山陽道と加古川両岸に沿って、多くの古代寺院が建立されている。また、この地域には、7世紀後半以降、加古川市北部を中心に須恵器窯が数多く知られている。

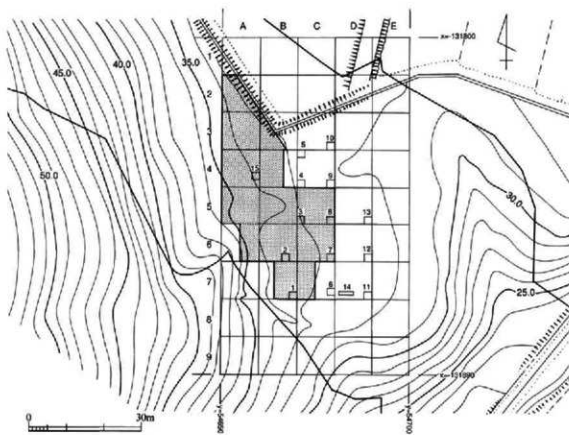
第3章 勝手野遺跡（後期旧石器時代）の調査

第1節 概要

1 調査に至る経緯（第7図）

勝手野遺跡における後期旧石器の検出は、平成4年の確認調査を端緒とする。この調査は勝手野古墳群の範囲確認を目的としていたが、調査途上いわゆる「地山」である黄褐色砂質シルト層より、サヌカイト製剥片及びチャート製台形石器が出土したことから、後期旧石器時代の遺跡も存在することが明らかとなった。しかしこの時点では、一連の層序中での石器包含位置と広域火山灰層との関連は明らかではなかった。

上述の成果を受けて、平成7年4月に、あらためて旧石器時代遺跡の確認調査を実施した。確認調査は、調査対象範囲全域に10mグリッドを設定し、この軸線に沿って設けられた、原則2m×2mのテストピットによって実施した。合計15か所のテストピットのうち、TP2においてサヌカイト製石核・砕片等の出土をみたほか、TP4・9・15の二次的堆積層からもチャート製剥片が出土した。さらにこの確認調査時点で、グリッド断面の観察により顕著に火山ガラスを包含する層準が識別され、石器出土位置がこれより下位にあることも確認できた。火山ガラスについては、東京都フィッシュントラックの標



第7図 確認調査TP位置及び本発掘調査範囲設定図

原徹氏のご厚意により、予備的な測定を実施していただき、始良Tn火山灰であることがほぼ確定された。

こうした経緯により、勝手野遺跡が後期旧石器時代前半期の遺跡であることが明らかとなった。このため石器を包含する堆積物が遺存していると判断されたA-3~5、B-4~7、C-4~7グリッドを本発掘調査の対象とすることとなった。調査面積は約1,000㎡である。

2 調査の方法

後期旧石器時代勝手野遺跡の上層には、2・3・8号墳の墳丘が存在し、さらに勝手野竈跡群・勝手野遺跡（上層）の遺構面も存在することが明らかであったため、これらの調査が完了した平成7年12月より調査を開始した。調査は、国土座標に沿って設定された確認調査時のグリッドを用い、各グリッドは確認調査時と同様、アルファベットと数字の組み合わせによって呼称した。

調査はまず幅1mの先行トレンチをグリッドの境界に沿って縦横に掘削し、グリッド壁面を精査して層序関係とその傾斜などを明らかにすることから開始した。この過程で数点の遺物が出土し、遺物の包含層序があらためて確認された。その後、各グリッド面の掘り下げを行い、遺構・遺物の検出を行った。掘り下げは、原則として石器を包含する黄褐色砂質シルト層を完全に除去するまで実施した。一部のグリッドでは、さらに角礫層を除去して下層の黄褐色砂質シルト層を掘削したが、一部で土壌化した堆積物を検出したものの、遺物は出土しなかった。

遺物の取り上げは、光波測距儀とパーソナルコンピューターを使用して、遺物の個体番号と遺物出土位置の三次元座標（国土座標に基づく。標高はT.P.を基準とする。）を同時に記録する方法で実施した。

また、調査の最終段階において、グリッド壁面3か所（A-5南壁・B-5西壁・C-5西壁）より火山灰分析のための柱状連続資料を採取した。火山灰の分析は、（株）京都フィッシュントラックに委託し、結果を本報告書第8章に収録している。

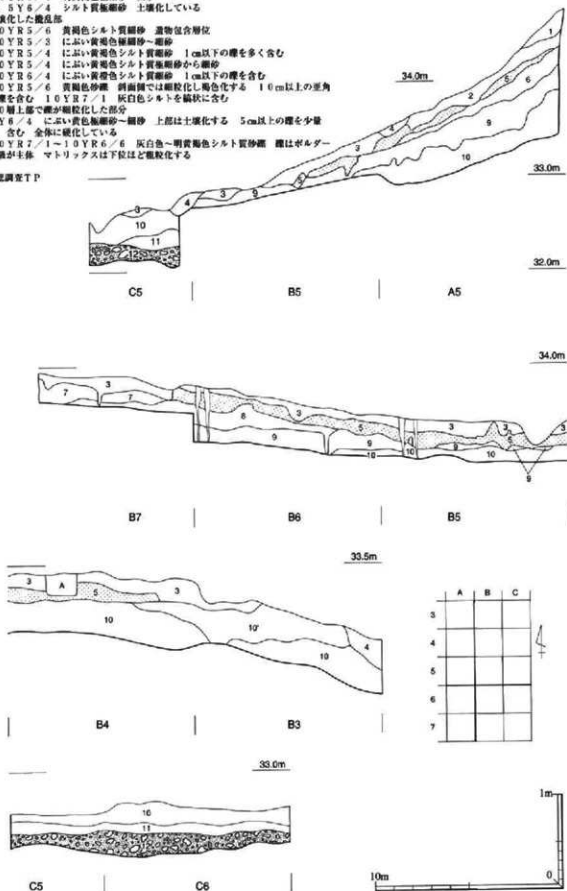
第2節 微地形と層序（第8図）

旧石器時代遺跡は、勝手野古墳群の立地する丘陵北東裾緩斜面の下部に位置する。この丘陵は流紋岩質溶結凝灰岩を基盤としている。丘陵は東西に延びるが、その東端は加古川に向かって突出し、対岸の正法寺山に相対して、加古川中流域と下流域を画する。したがって遺跡からは、南～西～北西方向への眺望はまったくなく、南東～東～北方向へのみ視野が広がっている。実際には東～北方向は段丘面が広がっており、もしこの領域が森林であれば、加古川方向（南東）にしか展望のきかない立地であったこととなる。遺跡の北側は丘陵に沿った広い谷となっている。近隣の丘陵地には、白沢遺跡、鴨池遺跡、セツ池遺跡等、類似した立地条件にある遺跡が散見される。

丘陵北東裾の緩斜面は緩やかに標高を下げつつ、50m×35mほどの範囲に広がっており、北側は加古川に開く小谷によって限られ、東側は標高31m付近から加古川に向かう急斜面となる。この緩斜面の上部は、麓斜面として形成されたものであり、平坦部は段丘面と考えられる。現地地形面を形成した角礫層の上位には、黄褐色砂質シルト層（第8図5層）が堆積しており、遺物はこの層中に包含される。さらにこの上位に、始良Tn火山灰を含む土壌層が認められる（2・3層）。始良Tn火山灰層は風成層と

- 1 2. 5 Y 6 / 4 におい黄褐色細砂～細砂
- 2 1 0 Y R 6 / 6 明黄褐色細砂～細砂
- 3 2. 5 Y 6 / 4 シルト質細砂 土壌化している
- 4 土壌化した礫層部
- 5 1 0 Y R 5 / 6 黄褐色シルト質細砂 遺物包含層位
- 6 1 0 Y R 5 / 3 におい黄褐色細砂～細砂
- 7 1 0 Y R 5 / 4 におい黄褐色シルト質細砂 1cm以下の礫を多く含む
- 8 1 0 Y R 5 / 4 におい黄褐色シルト質細砂から細砂
- 9 1 0 Y R 6 / 4 におい黄褐色シルト質細砂 1cm以下の礫を含む
- 10 1 0 Y R 5 / 6 黄褐色砂礫 河床面では細粒化し局化する 10cm以上の歪角
礫を含む 1 0 Y R 7 / 1 灰白色シルトを礫状に含む
- 10' 10層上部で礫が細粒化した部分
- 11 5 Y 6 / 4 におい黄褐色細砂～細砂 上部は土壌化する 5cm以上の礫を少量
含む 全体に土壌化している
- 12 1 0 Y R 7 / 1 ~ 1 0 Y R 6 / 6 灰白色～明黄褐色シルト質砂礫 礫はゴルデー
礫が主体 マトリックスは下位ほど粗粒化する

A 確認調査T.P



第8図 地層断面図 (横1/200・縦1/40)

考えられ、厚さは最大で20cmを測る。土壌化が進行しているが、火山ガラスは肉眼でも識別が可能で、一部には黄褐色のブロック状を呈する未風化火山灰も認められた。

A T層準の上位の堆積物は遺存状況が良好とはいえず、分析の結果、A T後の広域火山灰は降灰層準を確定することができなかった。これは古墳時代以降に行われた人為的な地形の改変にも影響されたものであろう。

遺物包含層の下位には、細粒の砂～砂質シルトないしシルト質砂（6～9層）が堆積しており、その下位に礫層（10層）がみられる。礫層の下位にはふたたび極細砂～細砂（11層）の堆積がみられ、その上部には土壌化も認められたが、遺物は出土しなかった。

さらに下位には、ボルダー級の礫を主体とする硬化した礫層（12層）が堆積している。

なお調査の手順上、第8図には、現表土以下古墳時代の堆積物に至る数10cmが示せなかったことを附言しておく。

また遺跡周辺の地形形成についてのデータを得るため、調査終了時に調査区内で重機による深掘を実施した。その成果については、立命館大学の青木哲也氏に現地での断面観察を実施していただいた上で、第8章にご寄稿いただいている。

第3節 遺構

1 概観

今回の調査で検出されたのは、石器類36点である。また、この他に確認調査出土資料・採集資料・古墳封土からの出土資料を含めると、合計52点となる。遺物は調査範囲全域にわたり、標高32.6m付近から33.5m付近にかけて、おおむね等高線に沿うように帯状に分布している。分布状況は散漫で、明瞭な集中を形成していないが、わずかながら密度の差が認められることから、これに基づいて3ブロックに分離した。石器ブロックは、北側からブロック1～3と呼称した。

2 石器ブロック（第9～11図）

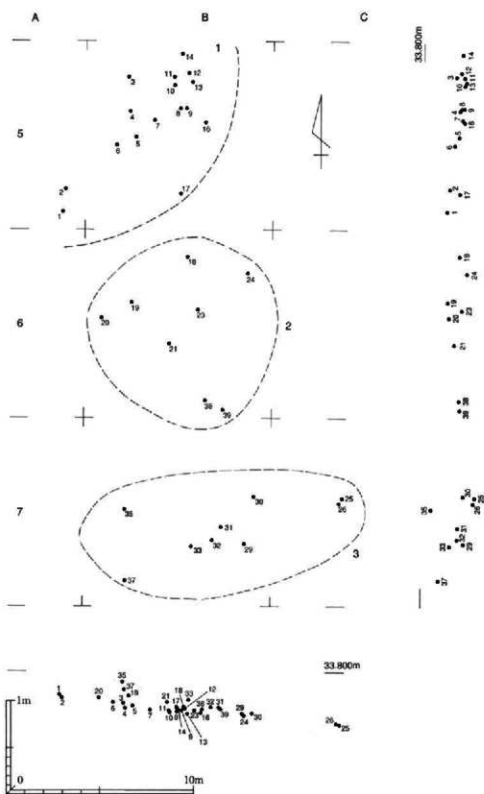
上述のように、石器分布から3ブロックが識別された。出土遺物数が少なく、各ブロックも明瞭な集積の中心をもたない。各ブロックの内容は第4表のとおりであるが、特にブロック2は非常に散漫な分布を示している。通常の後期旧石器時代遺跡でみられるような剥片・碎片を多く含むブロックとは、やや異なる印象が強い。

垂直分布は、地層の傾斜に沿って傾斜している。任意の地点における垂直分布の幅は20cm程度であり、その分布状況から、各ブロックは同一面に形成されたものと判断された。

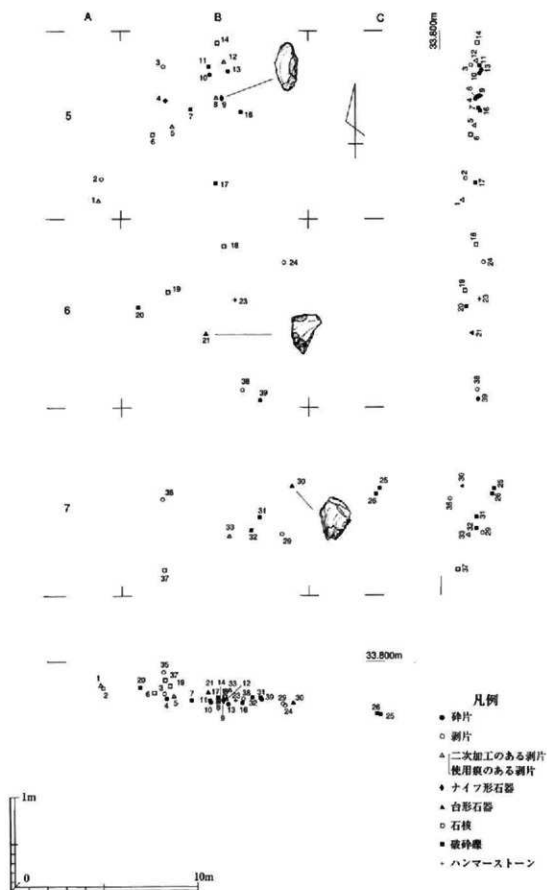
石器ブロックに伴って、チャート・砂岩などの破砕礫・自然礫の出土が少数みられたが、いずれも礫群等を形成するものではなく、石器類同様、散漫な分布を示している。

ブロック1

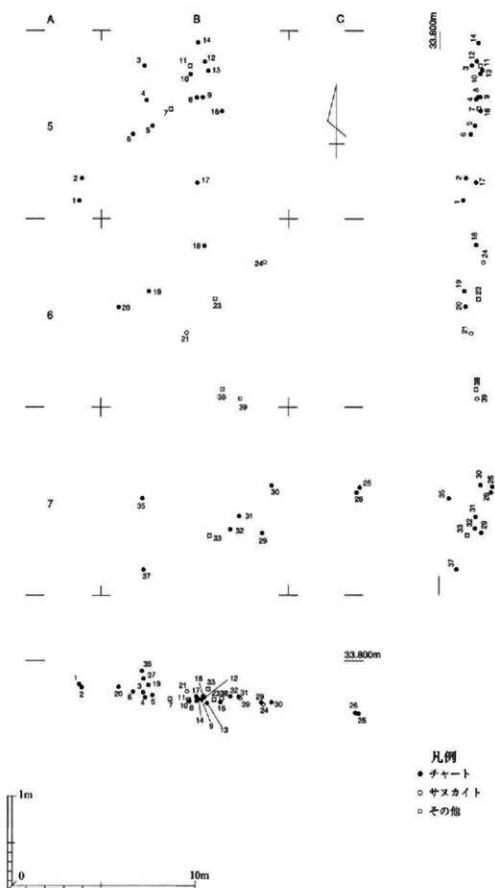
16点の遺物で構成されている。北東から南西に延びる分布をみせ、長径10m、短径6mを測る。北東部にわずかながら分布密度が高い傾向がうかがわれる。いずれもチャート製の石核・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片を中心に組成されている。



第9図 石器ブロック区分図 (数字は個体番号)



第10図 石器分布図 (器種別: 数字は個体番号)



第11図 石器分布図（石材別：数字は個体番号）

ブロック2

9点で構成されている。長径10m前後の分布範囲に、石器類がごく散漫に分布している。チャート製石核・砂岩製ハンマーストーン等を組成するが、本ブロックの特徴は、サスカイトを含むことにある。今回の調査で出土したサスカイト製石器は、確認調査分も含めて6点であるが、うち出土位置を確認できたもの4点はすべてブロック2に属する。このうちには、サスカイト製台形石器を含む。

ブロック3

加古川に面する急斜面手前に位置する。12点で構成され、東西10m、南北3mの細長い分布をみせ、やはり分布状況は散漫である。破砕礫が多いが、チャート製台形石器・石核を含む。

第4節 遺物

1 組成

器種分類

出土した石器は、ナイフ形石器・台形石器・削器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片・砕片・石核・破砕礫に分類した。各器種の分類基準は下記のとおりである。

ナイフ形石器

剥片の打面側縁に二次加工を施し、相対する側縁に一次剥離の縁辺を残置したものをナイフ形石器とした。ただし、遺物の項でも触れるように、勝手野遺跡で出土した本器種は、二次加工においてナイフ形石器の一般的定義から逸脱する部分がある。

台形石器

剥片の一次剥離による縁辺を一部に残置し、他の部位に調整剥離・折断等の二次加工を施して、略台形・三角形に成形した石器を本器種に分類した。一次剥離の縁辺（刃部）は、二次加工が施された縁辺に対して直交または斜交する。

削器

剥片に連続的な二次加工を施して、刃部を形成した石器を本器種とした。

二次加工のある剥片

剥片に二次加工を施した石器のうち、加工度が低く、不連続で特定器種に分類しえないものを本器種に一括した。

使用痕のある剥片

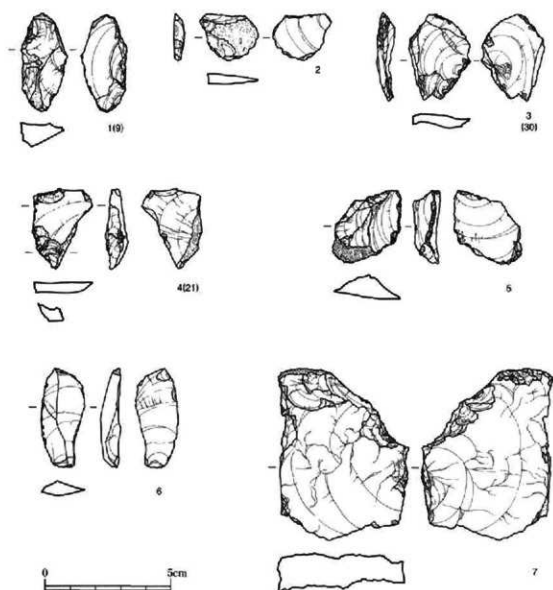
剥片の縁辺に、微細な剥離痕が観察されるもので、明確な二次加工が施されていないもの（摩耗痕の検鏡、微細剥離痕の分析を実施しておらず、すべてが真正の使用痕と認識されるわけではない）である。

剥片・砕片

剥離された破片で二次加工が施されていないもののうち、最大長が1cm以上のものを剥片、これに満たないものを砕片とした。

石核

剥片を剥離することが目的と考えられる剥離痕が認められるものを石核とした。



第12図 石器 (1:()内は個体番号)

破砕礫

礫の一部に、人為的破砕により生じたと思われる面が認められるもの。破砕面は剥離面とは異なり、打撃点を特定できず、また節理面を境界とした不規則な面となる。大部分が自然面に被われている場合が多い。

組成

組成率は第4表に示したとおりである。碎片の組成率がきわめて低い点が注目される。また、ナイフ形石器・台形石器等定型的ツール類も14%程度と低い組成率を示す。これに対して剥片・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片の組成率が高い。また破砕礫も多数を占めている。

石材組成では、在地石材であるチャートが圧倒的多数を占め、遠隔地石材であるサスカイトがこれに次ぐが、その組成率は15%に満たない。遺跡周辺で獲得できる流紋岩質溶結凝灰岩は、わずか2点を報

ブロック	KN	TR	SC	RF	UF	FL	CH	CO	HS	CS	CH	SN	OM	合計
1	1	0	1	0	4	2	3	2	0	4	15	0	2	17
	6	0	6	0	23	12	18	12	0	23	88	0	12	100
2	0	1	0	0	0	2	2	3	1	1	3	4	3	10
	0	10	0	0	0	20	20	30	10	10	30	40	30	100
3	0	1	0	0	1	2	0	1	0	4	9	0	0	9
	0	11	0	0	11	22	0	11	0	44	100	0	0	100
合計	1	2	1	0	5	6	5	6	1	9	27	4	5	36
	3	6	3	0	14	16	14	16	3	25	75	11	14	100

第4表 ブロック別石器組成表 (下段は%)

KN:ナイフ形石器 TR:台形石器 SC:削器 RF:二次加工のある剥片

UF:使用痕のある剥片 FL:剥片 CH:砕片 CO:石核 CS:破砕礫

HS:ハンマー SN:サヌカイト CH:チャート OM:その他の石材

告しうのみであるが、本来、結晶質で石器製作に向きな岩質であることから、当然の結果といえるかもしれない。

母岩は、チャートにおいて2個体7点が識別された。母岩1が5点、母岩2が2点であり、チャート全体に対する占有率は24%程度である。他は単独資料と判断された。

各遺物の計測値・出土座標・畑ブロック等については、第35表に一括して記載する。

なお、挿入中で()内に示した数字は、石器取り上げ時の個体番号であり、これを示さないものは確認調査時に出土した資料及び出土位置が特定できなかったものである。

2 遺物 (第12~15図)

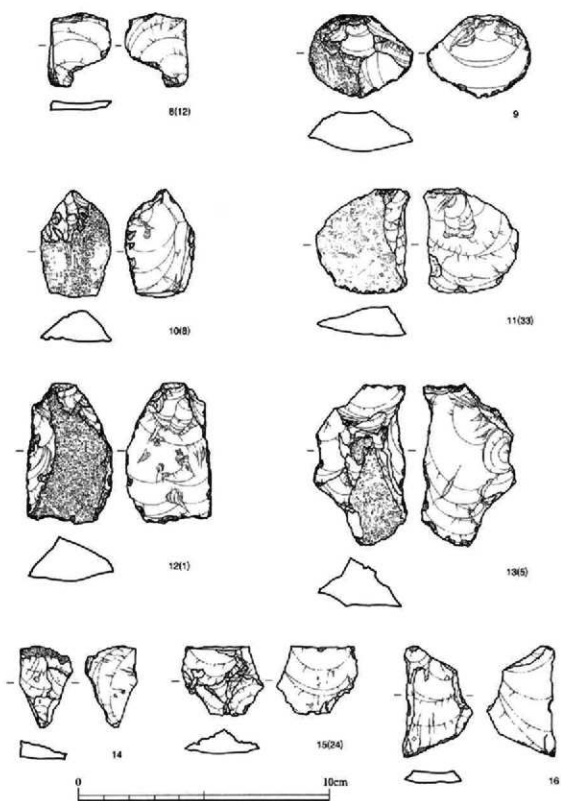
(1) ナイフ形石器 (1)

1はチャート製ナイフ形石器である。横長剥片の打面側縁に、背面側から浅い角度の二次加工を施して、打面を除去している。刃縁には微細な剥離痕が認められる。背面側の剥離痕は、腹面側と同一打面及び対向する打面上から剥離されている。

二次加工の技術的特徴は、「主として腹面側からの急斜度の二次加工」というナイフ形石器の一般的な定義から逸脱する部分を認めざるをえない資料であるが、二次加工が素材剥片の打面側を除去を意図している点、背面に相対する縁辺を刃部とする点を勘案して、本器種に分類した。ナイフ形石器に類する資料は、平成4年の確認調査の際にも1点(24)が出土している。

(2) 台形石器 (2~4)

2はチャート製台形石器である。小型の剥片を素材とし、その縁辺に主として腹面側から急斜度の二次加工を施している。基部には背腹両面から二次加工が施される。刃縁には、微細な剥離痕が観察される。背面側には広く自然面が付着しており、河川の転搬を素材とした石核から剥離されたことがわかる。背面に認められる剥離痕は、いずれも腹面側と同一打面上から剥離されたものと思われる。平成4年の確認調査の際に出土した資料であり、出土位置・ブロックを特定できなかった。



第13図 石器 (2 : () 内は個体番号)

3もチャート製台形石器である。平坦打面をもつ小型の剥片を素材とし、その末端側を折断し、さらに腹面側より急斜度の二次加工を施している。背面側基部付近にも、腹面側から浅い角度の二次加工を施している。刃縁には微細な剥離痕が不連続に認められる。

4はサマカイト製台形石器である。自然面を打面とする剥片の末端側を折断し、さらに背面側基部付近に折断面から平坦剥離を施している。また、刃縁側にも数回の二次加工が認められるが、これは刃縁の形態を整えるためのものであろうか。

(3) 削器 (5)

5は、チャートの剥片を素材とした削器である。剥片の打面側を折断し、その一側縁に腹面側から細かな二次加工を施している。二次加工が施されなかった刃縁にも、微細な剥離痕が不連続に観察され、使用痕と判断される。剥片の背面側末端部に、河川礫の自然面をとどめる。平成7年の確認調査の際、TP4で出土した資料で、ブロック1に帰属するものと思われる。

(4) 二次加工のある剥片 (6・7)

6はチャートの縦長剥片を素材とする。打面付近に背面側から二次加工を施してこれを除去したもので、石刃状の均整のとれた形態をみせる。背面側左側縁には、微細な剥離痕が連続して認められる。背面側の剥離痕は、いずれも腹面側と同一打面上から剥離された縦長剥片の剥離痕である。

7は赤色チャートの大型剥片を素材としている。剥片の側縁に、平坦な二次加工を施している。剥片の末端側は強い椀状剥離となっているが、これとはほぼ直交する縁辺に、一次剥離による刃部が形成されており、わずかながら摩耗がみとめられる。

(5) 使用痕のある剥片 (8~13)

いずれもチャートを用いている。自然面を打面ないし背面側にとどめる例が多いが、その観察から、いずれも河川の転礫を用いたものと判断される。

8は自然面打面をもつ剥片の腹面側縁辺の一部に、微細な剥離痕が連続的に認められる。背面側の剥離痕も、腹面側とはほぼ同一打面からの剥離である。

9は青緑色の良質なチャート(母岩2)を用いている。平坦打面をもつ厚手の剥片である。一次剥離によって扇形の刃縁が形成されており、背・腹両面に微細な剥離痕が認められる。

10も9と同一母岩を用いる。素材剥片は、平坦打面から剥離されており、弧を描く剥片の刃縁に、不連続な微細剥離痕が観察される。背面側はほぼ自然面によって被われている。

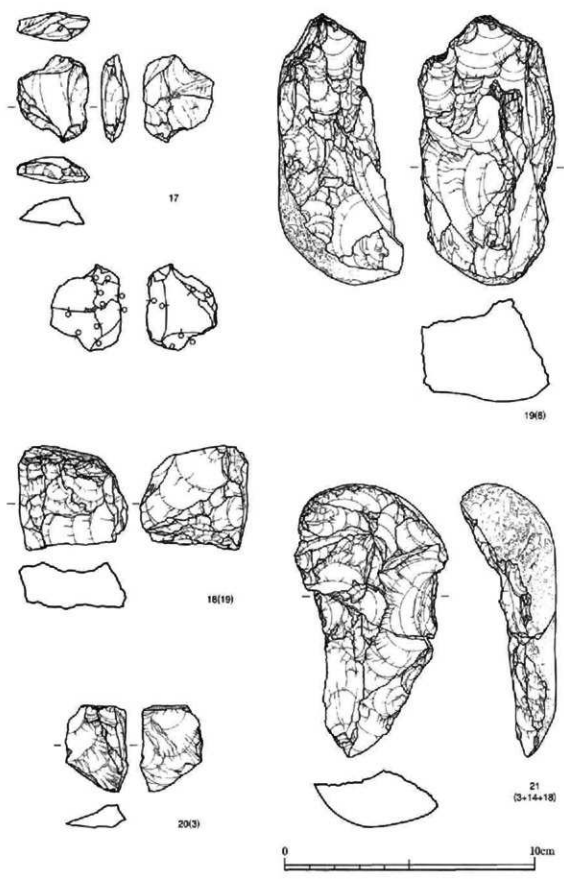
11はふい黄褐色のやや粗質のチャートを用いる。自然面打面から剥離された剥片の末端部刃縁に、微細な剥離痕が不連続に認められる。

12はきわめて良質の黒色チャートを用いている。平坦打面をもつ厚手の縦長剥片の両側縁に、微細な剥離痕が連続している。背面側は広く自然面をとどめる。

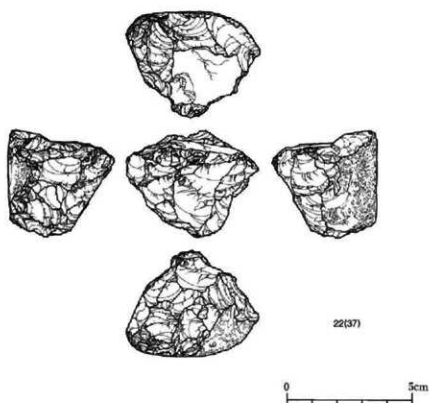
13は不整形な大型剥片のほぼ全周に、微細剥離痕が観察される例である。また、腹面側の打面下には、背面側から施された二次加工の剥離痕が1面のみ認められる。背面側の剥離痕は、多方向からのものである。母岩2に属する。

(6) 剥片 (14~16)

チャート・サマカイト両者の剥片が出土している。チャート剥片に関しては、その主要なものがいずれも使用痕のある剥片で記述しているので、ここではサマカイト製剥片の記述を行う。



第14回 石器 (3 : () 内は個体番号)



第15図 石器（4：（ ）内は個体番号）

14は打面部が折れた剥片である。腹面側は横長の形態をみせるが、背面側の剥離痕は多方向からの剥離を示しており、打面転移が顕著に行われたことを示している。一部に自然面をとどめており、その性状から、河川の転搬を素材とした石核から剥離されたことがわかる。

15も打面部が折れた剥片である。縦長の形状を示している。背面側の剥離痕には、腹面側と同一方向及び対向方向からのものが認められる。

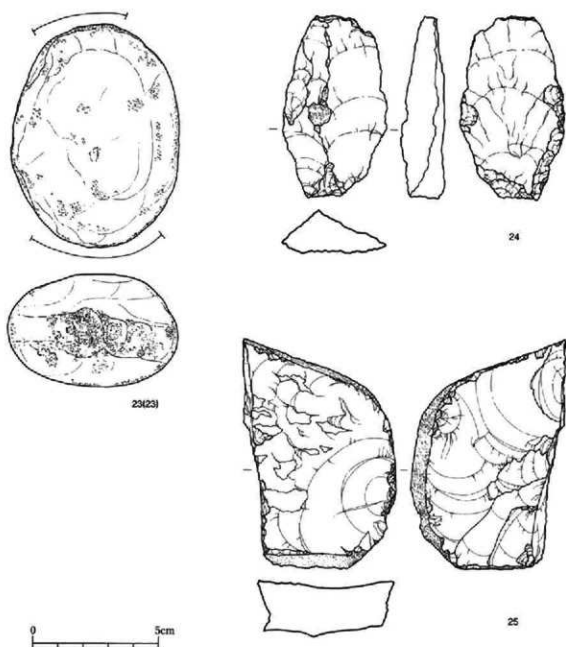
16も打面部が折れた剥片である。縦長の形状をみせ、背面側の剥離痕はいずれも、腹面側と同一方向からのものである。風化の進行が顕著である。

（7）石核・接合資料（17～22）

石核は計5点が出土した。

17は唯一のサヌカイト製横長剥片石核である。厚手の剥片を素材とし、主に素材剥片の打面側縁辺より剥離を進行させている。剥離作業面は素材剥片の腹面側に設けられ、山形の打面調整を施した後にその頂部を打撃することによって石核と同一層の横長剥片を獲得している。この際に剥離された剥片は、石核素材剥片の腹面の一部を底面として付着させる形態を示すであろう。また、石核素材剥片の側面から行われた数回の小剥離痕も認められる。

石核の末端部及び側面の一部には、底面側から剥離された細かな剥離痕が連続的に認められる。これらは最終段階の剥離痕と考えられ、掻器あるいは剥器としての石核再利用にともなう加工であった可能性がある。

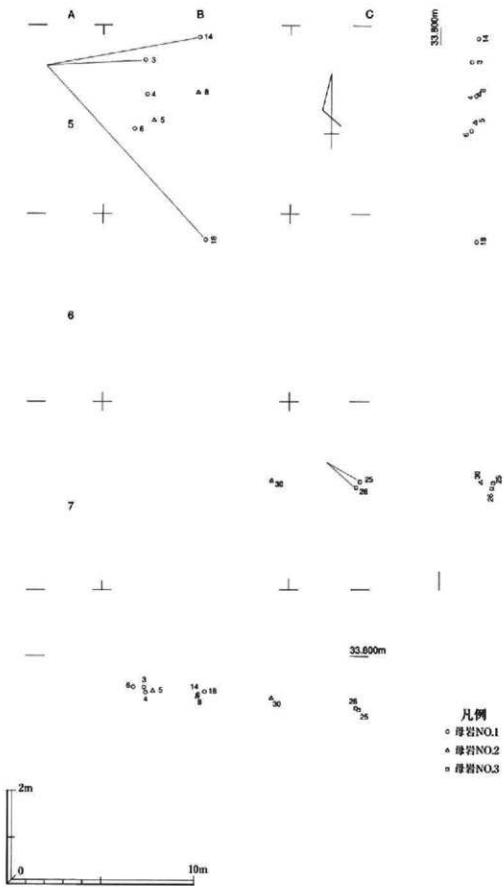


第16図 石器(5:()内は個体番号)

18は細粒の流紋岩質溶結凝灰岩を用いた石核である。先述のように、勝手野遺跡が立地する丘陵の基盤岩が流紋岩質溶結凝灰岩であり、石材は遺跡周辺で獲得されたものと思われる。直方体を呈する石核の1面では、平坦打面から縦長傾向の不定型な剥片を剥離している。表面では側面を打面として、同様の剥片を剥離している。

19・21はチャートの亜円礫を用いた石核である。同一母岩に属するものであるが、直接の接合関係はない。いずれも、自然面を打面として石核の全周から剥離を行っており、不定型な剥片が得られている。20は折損した石核が接合し、さらにチャート製剥片20が接合する。

22は赤色のチャートを用いた石核である。一部に残された礫面から、素材が河川の転石であったこと



第17図 接合・母岩別資料分布図 (数字は個体番号)

が理解される。頻りに打面転移を行って、石核の5面から剥片を得ているが、打面調整を特に判別することはできない。剥離痕の観察からは、小型の不定型な剥片が得られたものと思われる。

23は砂岩製ハンマーストーンである。楕円形の河川礫を使用しており、その両端に弱い打撃痕が認められる。

3 接合資料・母岩別資料(第17図)

母岩は2個体12点が識別され、うち母岩1の石核2点、剥片1点が接合した。

母岩別資料1

母岩別資料1は、石核3点(19・21)、剥片1点(20)、砕片4点から構成される。暗緑灰色を呈する比較的良質なチャートの長形の亜円礫である。大きく2分割されて石核とされたもので、自然面を打面として分割面側から剥片を剥離している。石核20は剥離作業が進行し、その途上で折損している。この石核20に、剥片20が接合する。20は自然面を打面として剥離された不定型な剥片である。

石核19と21には直接の接合関係はない。しかし、この間隙を埋める剥片類が出土していないこと、及び剥離作業を示す砕片類が少数であることから、母岩別資料1は、剥離が進行した状態で本遺跡に持ち込まれ、わずかに剥離作業を行った後に遺棄されたものと思われる。

接合関係のある石核破片1点がブロック2に含まれるほかは、いずれもブロック1から出土している。また、砕片3点は8号墳付近からの出土であり、位置は確定できないがブロック1に帰属すると考えてよい。

母岩別資料2

母岩別資料2は、青緑色の良質なチャートである。使用痕のある剥片3点(9・10・13)と台形石器1点(3)で構成される。接合関係はなく、砕片も伴っていないことから、すでに剥離された状態で遺跡内に持ち込まれ、使用・遺棄されたものと判断される。

台形石器(3)がブロック3に含まれるが、他はいずれもブロック1出土の資料である。

母岩別資料3

チャート破砕礫2点から構成される。近接して出土している。

4 採集遺物(第16図)

確認調査および勝手野古墳群・宮跡群調査の際に、少数の石器が採集されている。ここでは旧石器時代に属すると思われるもののみ記述する。

(1) ナイフ状石器(24)

24は平成4年の確認調査の際に、トレンチの構土から採集された。流紋岩質溶結凝灰岩を用いているが、直径が1~2mmの結晶を多く含む粗質の石材のため、剥離痕の観察が困難である。幅広い縦長剥片を素材とし、その打面部付近と一側縁の下半部に、背面側から平坦な二次加工を施している。背面側の剥離は、いずれも腹面側と同一打面から行われたものである。先端部にもわずかな剥離痕が認められるが、二次加工が否か判断に苦しむ。また、先端には新欠もみられるが、風化部と新鮮面の色調差は明瞭である。

(2) 剥片 (25)

勝手野遺跡調査の際、2号墳丘除去後に採集された資料である。大型のチャート要円礫を輪切りにするような形で、連続的に剥離されたと考えられる剥片である。石核の素材として用いられるような性格の資料であろうか。緑灰色を呈する良質のチャートである。剥片の下半部は折損している。

第5節 小結

1 石器群の時期

勝手野遺跡出土の石器群は、給良Tn火山灰層の下位より出土し、台形石器を主体とする石器群である。兵庫県内で同時期の資料をさがすならば、春日町七日市遺跡¹⁾、篠山市板井・寺ヶ谷遺跡下位文化層²⁾、三田市溝口遺跡³⁾などがあげられる。これらの遺跡で出土した石器群に共通する石器組成として、ナイフ形石器・台形石器・刃部磨製石斧があげられる。また板井・寺ヶ谷遺跡、溝口遺跡では、サヌカイト製横長剥片石核が出土している。これらの石器群は、台形石器・サヌカイト製横長剥片石核という点で、勝手野遺跡出土の石器群と共通するが、勝手野遺跡出土の石器群は、典型的なナイフ形石器を含まない点、刃部磨製石斧を含まない点で異なっている。ただし、勝手野遺跡出土の石器総数が著しく少ないことを勘案するならば、単純な対比には慎重であるべきだろう。

現時点では、勝手野遺跡出土の石器群は、これまでに県内で知られている給良Tn火山灰層下位の石器群と、ほぼ同一の傾向をもつものと理解しておきたい。

2 石器群の技術

(1) 剥片剥離技術

剥片剥離技術1

サヌカイト製石核 (17) にみられる横長剥片剥離技術である。サヌカイト製石核にみられる技術要素は、①剥片素材石核、②山形の打面調整、③石核素材剥片の裏面を石核底面とする、④石核幅に等しい剥片剥離を行うといった瀬戸内技法と共通するものである。石核の最終剥離における剥片の形態は、翼状剥片にきわめて近似したものであったと考えられる。

勝手野遺跡では、このような技術的特徴を示す遺物は石核 (17) 1点のみであり、こうした状況で瀬戸内技法の有無のみを論じても意味はないだろう。したがって、ここでは敢えて剥片剥離技術1に対して、瀬戸内系剥片剥離技術という呼称を与えておくが、それは瀬戸内技法にきわめて近い内容を持つことを指摘しておきたい。

こうした瀬戸内技法の複数の技術要素をもつ剥片剥離技術は、板井・寺ヶ谷遺跡下位文化層出土の資料群に類例を求めることができる。これらはすでに「プロト瀬戸内技法」としての評価がなされているが⁴⁾、勝手野遺跡の資料についても同様の評価が可能である。

なお、勝手野遺跡出土の遺物中では、瀬戸内技法の技術要素を見出しうる資料は他になく、他のサヌカイト製遺物は、いずれも不定型ないし縦長傾向の剥片剥離技術に伴うものである。

剥片剥離技術2

赤色チャート製石核 (22)、流紋岩質溶結凝灰岩製石核 (18) にこの技術が適用されている。粗密な

打面転移により、石核が多面体を呈する赤色チャート製石核(22)が、典型的な例と言ってよい。このような剥片剥離技術で生産される剥片は、石核面上の剥離痕の観察からは、小型で不定型な貝殻状ないしは縦長傾向の剥片であったと考えられる。

剥片剥離技術3

母岩別資料1にみられる石材の分割面を剥離作業面として、石核全周から剥離を進めるものである。生産される剥片は、横長傾向から縦長傾向をみせるものまで多様で、不定型なものと考えられる。母岩別資料2の一群も、本技術に帰属するものと思われる。また、サマカイト製剥片(14・15)にも、これに類する剥離技術が適用されていた可能性があろう。

剥片剥離技術4

サマカイト製剥片(16)にみられる縦長剥片剥離技術である。剥片背面側の観察からは、打面と剥離作業面の位置が固定され、比較的整った縦長剥片を連続的に剥離する技術が想起される。使用痕のある剥片(12)も、この技術による可能性がある。他に検討する資料が出土しておらず、石核もみないため詳細は明らかにしたい。

今回の調査で出土した資料に含まれる資料からは、複数の剥片剥離技術の存在が看取される。それらの技術が、石器群中でどのような位置を占めているかは、資料数の制約により明らかではない。また、どのような器種の技術基盤として、これらの剥片剥離技術が適用されたかは、部分的に理解しうのみである。しかし、あえて検討を行うならば、表面は横長傾向を示すにもかかわらず、背面には多方向の剥離痕をみせるナイフ形石器(1)の素材は、剥片剥離技術3による可能性を指摘しう。このほかにも、使用痕のある剥片(13)、また、チャート製台形石器(2・3)については、剥片剥離技術2ないし3の適用が考慮されよう。剥片剥離技術1との関連を示す資料は出土していない。

(2) 石器製作技術

急斜面調整剥離

調整剥離の角度が、打面に対して90°に近くなるものを急斜面調整剥離と呼称する。一般にナイフ形石器の二次加工に適用されるが、勝手野遺跡では、ナイフ形石器は出土しておらず、台形石器の二次加工にこの技術が適用された例(2・3)があるのみである。

平坦剥離

調整剥離が器面に沿って広がるものを、平坦剥離と呼称する。勝手野遺跡ではその剥離角は140°～160°の間にある。ナイフ形石器及び台形石器の二次加工に適用されており、前者では打面側縁の二次加工に、後者では主として基部付近の二次加工に適用されている。

3 遺跡の性格

勝手野遺跡の特徴は、まずその規模にある。これまでに、兵庫県内をはじめとする近畿地方で発掘調査された後期旧石器時代遺跡としては、最も規模の小さい遺跡と見てよいだろう。さらに、石器製作活動がほとんど行われなかったとしても、遺跡内に残された遺物の稀少さは、本遺跡の性格を考える上で重要な示唆を与えている。現状で推測可能な選択肢は、居住した集団がきわめて小規模であったか、ごく短期間のキャンプ地であったかのいずれかであろう。

前者の場合、小規模な集団が常態であったか、あるいは母集団から何らかの理由で分離して活動する

集団であったのか、母集団からの分離活動がなぜ必要であったかという問題が派生する。

後者の場合、どのような生活形態に基づいて、そうした短期逗留が必要とされたかという問題が生ずるだろう。

勝手野遺跡周辺には、他に集落立地が可能な、より規模の大きい段丘面が分布しており、現にそうした地点でも遺物が採集されている。にもかかわらず、西側を丘陵で遮られ、ほぼ加古川側にしき眺望のきかない本地点が、キャンプ地として選定された理由も含めて、検討すべき課題である。

旧石器時代の集団が移動する理由には、遠隔地石材の直接獲得、他の集団との連絡、特定の自然資源の獲得等、いくつかの推論があろうが、勝手野遺跡において、出土遺物からこれを検証することはできない。遺跡規模と立地という相関する問題を提起しておきたい。

勝手野遺跡で出土した後期旧石器時代の遺物には、遺跡の直下ないしは至近地で獲得できる流紋岩質溶結凝灰岩、加古川水系に河川礫として広く分布し、在地石材と考えてよいチャート及び遠隔地石材である二上山・讃岐産のサヌカイトが組成される。

播磨地域は、石材に関していえば一種のエポケットである。地理的には瀬戸内地域に属するとはいえないながら、サヌカイト産地である二上山・讃岐は直線距離で100km前後の距離があり、瀬戸内海が存在しなかったとしても、急峻な「古瀬戸内渓谷」を降らなければ獲得できない。勝手野遺跡で出土したサヌカイトが、いずれも母岩を再にする搬入資料であった点、横長剥片石核が非常に小型である点などは、サヌカイトの入手困難性を示しているであろうか。また、丹波山地のチャートも、加古川水系に転運として豊富に存在するとはいうものの、河川礫は石器製作に不適当な場合が多く、現在、我々が調査しても良質なものの獲得はきわめて困難である。後期旧石器時代当時においても、この状況はそれほど大差なかったであろう。良質のチャート獲得のためには、チャート岩脈の存在する丹波山地付近にまで移動する必要があった可能性が高い。遺跡の後背丘陵から供給される流紋岩質溶結凝灰岩も、結晶質の岩石であり、剥離作業や刃部の形成・強度において、チャート・サヌカイトに大きく劣ることは否めない。こうした状況から、後期旧石器時代に播磨地域に居住した集団は、石材・技術の選択幅を広くする必要があったと推察される。また、良質な石材獲得のためには、少なくとも丹波山地南端付近から、古瀬戸内渓谷底付近までを移動領域に含める必要があり、その遊動距離は少なくとも半径50km以上に達するであろう。勝手野遺跡にみられる複数の剥片剥離技術は、このような状況にある集団の適応戦略の一つであったと考えられる。

〔注〕

- 1) 兵庫県教育委員会「七日市遺跡(Ⅰ)(旧石器時代遺跡の調査)」平成2年
- 2) 兵庫県教育委員会「板井・寺ヶ谷遺跡(旧石器時代の調査)」平成3年
- 3) 前古代学協会「兵庫県三田市 溝口遺跡—北摂工業地区—」昭和56年
- 4) 松藤和人「大阪府のあけほの」『大阪府史』別巻 平成3年

第4章 勝手野古墳群の調査

第1節 勝手野古墳群周辺の古墳時代の様相

1 周辺遺跡の概要

本節では、古墳群の周辺地域の加古川下流域である北半部にあたる加古川市北東部、中流域南部にあたる小野市、美濃川下流域にあたる三木市西部を中心とする後期古墳及び律令期寺院を中心として概観を行い、この地域の古墳時代後期の特徴に触れておく。なお、この地域では近年、『市史』、『市内遺跡詳細分布地図』などが刊行されているほか、市域各地での発掘調査の成果が多く蓄積されており、その成果は発掘調査報告書やシンポジウム、展示会などで公表されている。本節の記述もそれらの業績に負うところが大きいことを付言しておきたい。

勝手野古墳群周囲の小野・加古川・三木の3市域で、現在確認されている古墳数は、小野市域では約400基、加古川市域では約300基、三木市域内で最新の資料では約430基で、この地域における古墳総数は1,100基程度が存在していることになる。既に失われた古墳や未発見の古墳も数多くある予想されるので、実数はさらに多いと考えられる。ただし、その大半は後期古墳であろう。

2 古墳時代前・中期の様相

加古川下流域にあたる加古・印南両郡域は古墳の分布状況から、揖保川下流域とももに古代播磨地域の中心的な勢力圏にあったとみられるが、前・中期の古墳の築造は、左岸の印南郡域が優勢している。前期の前方後円墳に先行した弥生時代末の墳墓として、長直子孫内行花文鏡の出土した西条52号墓が存在する。古墳時代前期になり、前方後円墳を主体とした首長墓系譜の古墳群として日岡古墳群（第18回51）がある。丘陵頂の日岡山1号墳（52・陵墓参考地、全長85.5m）、勢塚古墳（全長54.5m）、西大塚古墳（全長67m）、三角縁紋文帝三神三獣鏡の出土した南大塚古墳（全長90m）、北大塚古墳（前方部破壊のため全長不明、後円部径52.5m）の5基の前方後円墳のほか、西車塚古墳、三角縁唐草文帝三神二獣鏡・方規規矩鏡・変形七獣鏡、碧玉製石鏡が出土した東車塚古墳、狐塚古墳などの円墳から形成されている。日岡古墳群は前期末もしくは中期初頭の北大塚古墳を最後に築造を停止し、日岡古墳群から東へ約2kmほど移動した全長99mの前方後円墳である行者塚古墳（49）へ引き継がれる。行者塚古墳は5世紀前半に築造されたとみられ、金銅製帯金具など朝鮮半島との関わりが深い副葬品が出土している首長墓である。西条古墳群（48）では行者塚古墳に後続する人塚、尾塚古墳は帆立貝式古墳とみられ、その後、急速に衰退し、後続の大型古墳は築造を停止する。

一方、右岸の加古郡域では左岸に比べ、前・中期古墳は散在的な分布を示している。前方後円墳では船載の内行花文鏡などが出土している長慶寺山古墳（40・全長34.5m）、円墳では2基の壑穴式石室から仿製獣形鏡・画文帯神獣鏡が各1面ずつ出土した天坊山古墳（39・径16m）などの前期古墳が築造されるが、右岸地域に比べると小規模な古墳で、日岡古墳群を築造した首長に対し、従属的位置にあった地域小首長墓ではないかと考えられる。中期以降も大型の前方後円墳はみられず、画文帯神獣鏡が出土した里古墳（42・全長33m）のような、出土地輪から5世紀後半の築造とみられる小型の前方後円墳が

築造される程度である。

加古川中流域にあたる賀毛郡東部域では、小野市域の前期の様相は不明確であるが、加古川右岸の柳葉形銅鏡が出土した粟生三ツ塚古墳群(24)、東条川流域に築造された方墳で墓石を巡らす舟木南山古墳(一辺14m)がある程度で、傑出した地域首長墓は形成されていないようである。中期では、郡西北部域では大型の前方後円墳である玉丘古墳(2・全長109m)、小山古墳(全長79m)などからなる玉丘古墳群(1)があり、加古川下流域の行者塚古墳と拮抗した勢力が存在したことが考えられ、播磨鴨国造家の本拠地であったのではないかとする説もある。この二つの勢力に挟まれた小野市域では、左岸の段丘に沿って南北に分布する大型円墳からなる大部古墳群(16)が築造されている。大部古墳群はその多くが昭和初期以降の開墾によって破壊されたらしく、現在、数基を残すのみとなっている。北端に位置する敷地大塚(17)は損壊が著しいが、復元径54mの円墳とみられ、船載の方格規矩鏡2、仿製の内行花文鏡1・四獣鏡1・珠文鏡2・振文鏡1の計7面の銅鏡のほか、碧玉製勾玉・ガラス製小玉が出土しており、前期後半から中期前半の築造と考えられる。大部古墳群の南端付近の小野王塚古墳(18)は、径50m、高さ8mほどの円墳で、幅10mの空濠があり、墳丘斜面には墓石が施され、埴輪列が二重に巡らしている。埋葬施設は割竹形木棺を据えた堅穴式石室(長さ4.8m、幅0.9m)で、棺内から六獣鏡1、眉庇付冑1・短甲2・頸甲1・肩甲1のほか、刀・鉄鍬・刀子・碧玉製三輪玉、棺外から槍・鏃・刺など、豊富な副葬品が出土している。こうした大部古墳群の被葬者は、小野市域中心部を勢力下においた地域首長墓なのであろう。また、右岸の万願寺川との合流点付近の山頂上に5世紀後半の阿形山塚古墳(25・円墳、径16m、堅穴式石室)があり、仿製神人画像鏡・乳文鏡各1面と三環鈴、人物埴輪などが出土している。

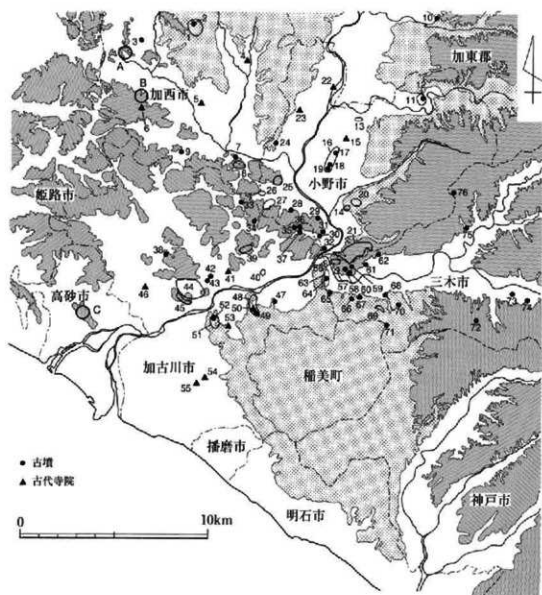
加古川の支流である美濃川流域にあたる美濃郡では、美濃川と加古川との合流点の南側にある丘陵頂に前方後円墳である愛宕山古墳(64・全長約95m)が築かれている。古墳の内容は明らかでなく、前期後半に遡るとされているが、後続する前方後円墳は存在しないようである。付近には愛宕山古墳に後続する中期の箱式石棺等を埋葬施設とする大型の円墳群があり、下石野古墳群(63・王子古墳群)と呼ばれているが、詳細は明らかでない。

中期では、美濃川右岸に沿った丘陵部にある年ノ神古墳群(62)で、丘陵稜線上に位置する4基の古墳の調査が行われた。特に、年ノ神6号墳は割竹形木棺を埋葬施設とした長辺13.0m、短辺9.9m、高さ0.85mの方墳で、棺内から四獣鏡、三角板葺短甲・頸甲・肩甲、ガラス小玉・翡翠製勾玉、彫刻、漆塗製品、大刀・鉄剣・鉄鍬、農具が出土し、棺外からは鉄剣・鉄鍬、鉄斧・鋤先が出土した。5世紀前半の築造で、美濃川下流右岸域の小首長墓であろう。

以上のような加古川下流・中流域の前・中期古墳の様相からすれば、前期は加古川下流域の日岡古墳群が突出しており、中流域にはそれに拮抗する勢力は存在せず、小地域首長が割拠していた状況にあったようである。中期に入ると、下流域の西条古墳群と新たに賀毛郡域に玉丘古墳群の勢力が登場するが、その中間地域である賀毛郡東南部域では、中小首長が一系譜として存続していたことが考えられる。

3 古墳時代後期の様相

古墳時代後期に入ると、加古川下流域では右岸に古墳分布の中心を移すことがわかっている。その代表的な後期古墳群である平荘岡古墳群(44)は、70基ほどが確認されているが、100基を超える加古川



【加西市】

A 高砂石塔・B 長石石塔 1 平石古墳群（古墳中期）・2 玉丘古墳（古墳中期）・3 石籬戸古墳（古墳群末）・4 粟島寺（奈良前期）・5 野島寺（奈良前期）・6 古法寺（奈良前期）・7 船山古墳群（古墳後期）・8 萩賀山古墳群（古墳後期～終末）・9 後藤山古墳（古墳後期）

【加古郡】

10 名草古墳群（古墳後期）

【小野市】

11 船木中層古墳群（古墳後期～終末）・12 妙見塚古墳（古墳中期）・13 南山古墳群（古墳後期）・14 赤塚山古墳群（古墳後期）・15 飯高寺（奈良前期）・16 太郎古墳群（古墳中期）・17 敷島大塚古墳（古墳中期）・18 芝塚古墳（古墳中期）・19 王子2号墳（古墳中期）・20 徳山古墳群（古墳後期）・21 徳山古墳群（古墳後期）・22 河合寺（奈良前期）・23 大寺岡寺（奈良前期）・24 粟生三ツ塚古墳群（古墳前期）・25 阿部古墳群（古墳前期）・26 福留古墳群（古墳後期）・27 野宮古墳群（古墳後期）・28 藤原古墳（古墳後期）・29 下米古墳群（古墳後期）・30 妻田古墳群（古墳後期）・31 毛賀山古墳群（古墳後期）・32 藤子野古墳群（古墳後期）

【高砂市】

33 高砂近江古墳群（古墳後期）・34 大島谷山古墳（古墳後期）・35 キノ牧古墳群（古墳後期）・36 神子谷古墳群（古墳後期）・37 大谷山古墳群（古墳後期）・38 穴蔵古墳（古墳後期）・39 天竺山古墳群（古墳後期）・40 具樂山古墳群（古墳後期）・41 山角寺（奈良前期）・42 長石古墳（古墳中期）・43 西山大塚古墳（古墳中期）・44 平丘岡古墳群（古墳中期～後期）・45 丹田山古墳群（古墳後期）・46 中西寺（奈良前期）・47 宮山古墳群（古墳後期）・48 西原古墳群（古墳中期）・49 行徳古墳群（古墳中期）・50 西原寺（奈良前期）・51 日岡古墳群（古墳後期）・52 日岡寺（古墳後期）・53 石守寺（奈良前期）・54 野口寺（奈良前期）・55 古大内遺跡（奈良前期）

【三木市】

56 平谷寺古墳群（古墳後期）・57 正法寺東院古墳群（古墳後期）・58 フェリス・西岡塚古墳群（古墳後期）・59 天王山古墳群（古墳後期）・60 栗山山古墳群（古墳後期）・61 妙野寺古墳群（古墳後期）・62 牟ノ野古墳群（古墳中期～後期）・63 了正野古墳群（古墳前期）・64 栗山古墳（古墳後期）・65 玉子山古墳群（古墳後期）・66 石野古墳群（古墳後期）・67 鹿沢古墳群（古墳後期）・68 近田寺古墳群（古墳後期）・69 巴古墳群（古墳後期）・70 高木古墳群（古墳後期）・71 舞山古墳群（古墳後期）・72 鹿野野之塚古墳群（古墳後期）・73 藤原塚古墳（古墳後期）・74 藤原寺古墳（古墳後期）・75 毛谷古墳群（古墳後期）・76 久留米オニ塚古墳（古墳後期）

【高砂郡】

C 龜山石塔

第18図 勝手野古墳群周辺の主要古墳・寺院跡

下流域最大の後期古墳群であつたらしい。古墳群は6つの支群からなり、中期後半から築造を開始しているが、多くは6世紀以降の横穴式石室を埋葬施設としている円墳で構成されている。東端にある池尻2号墳は墳形は明らかでないが、埋葬施設は堅穴式石室とされる。甲冑、初期形式の金銅装馬具などの副葬品とともに、2個の甕を連結させた連結甕などの初期須恵器が出土し、5世紀中葉の築造とみられる。カンス塚古墳は帆立貝式古墳（径30m）で、墳丘には円筒埴輪を巡らしている。埋葬施設は堅穴式石室で、変形四獣鏡、馬具、横刺板鍔短甲、金製垂飾付耳飾、胡鍔金具、鉄製鍛造具（鉗・鋸・鑿）、瓦石などのほか、TK216型式の須恵器が出土している。両古墳の出土品である初期馬具、金製垂飾付耳飾などの出土品は渡来系要素を強くうかがわせ、埋葬施設は堅穴系横口式石室である可能性も指摘されている。

升田山15号墳（45）は計35mと推定される円墳で、全長14.2m〔玄室長5.07m、幅2.19m〕の両袖式の横穴式石室をもち、心葉形容室などの馬具、金糸、三輪玉などが出土している。池尻16号墳は稚児ヶ窟古墳とも呼ばれる1辺42mの方墳で、全長13.8m（玄室長6.4m、幅3.03m）の両袖式横穴式石室をもち、大型の竜山石製割放式家形石棺が伴う。平荘湖古墳群の周辺には小規模な横穴式石室を埋葬施設とする古墳群があり、山陽自動車道建設に伴って調査が行われた大亀谷山古墳（34）は、一辺10mほどの方墳で、両袖式の横穴式石室を埋葬施設し、玄門に接する後遺部に箱式石棺を納めている。奥新田東古墳群（33）は2基の無袖式の横穴式石室が調査され、箱式石棺と家形石棺を併用している。

神子谷古墳群（36）、カメ焼谷古墳群（35）は勝手野古墳群のある谷筋の奥部にあり、距離的にも近接している。神子谷古墳群は8基、カメ焼谷古墳群は7基から形成され、外護列石を巡らすものがある。いずれも無袖式の横穴式石室を埋葬施設とし、この地域の後期古墳に類例の多い小型の箱式石棺を納めているものがある。副葬品は概して少なく、耳輪、刀子、須恵器などがあるのみである。加古川市域には、他に中山古墳群、野尻古墳群、上原古墳群など横穴式石室をもつ中規模の後期群集墳がある。

加古川中流域の小野市域では、後期に入ると左岸で大型の群集墳が築造され始める。左岸の万勝寺川と山田川に挟まれた丘陵上にある焼山古墳群（20）は、学史上でも著名な古墳群である。100基以上からなる木棺直葬の古式群集墳で、6世紀初頭から築造を開始し、ほぼ100年間にわたって造営されている。櫻山古墳群（21）は焼山古墳群の山田川を挟んだ南にあり、150基ほどが確認されている。ほとんどが10m未満の木棺直葬墳であるが、なかに径34mの大型円墳1基が存在する。また、群内には少数であるが横穴式石室をもつ古墳が含まれている。焼山古墳群と櫻山古墳群の間にも、同時期の木棺直葬墳である市場南山古墳群（14）などがある。東桑川右岸の台地上に100基以上から構成されていたらしい船木中番古墳群（11）がある。なかに全長35mの前方後円墳で周囲に濠を巡らす妙見塚古墳（12）があり、6世紀前半の築造ではないかと考えられている。妙見塚古墳に後続するのは船木古墳群であつたらしく、木棺直葬、小石室、箱式石棺を埋葬施設としていたらしい。昭和36年には中番古墳群の28基が調査され、横穴式石室、小石室ないし箱式石棺、竈室などを埋葬施設とする7世紀前半の群集墳であることが判明し、妙見塚古墳、船木古墳群、中番古墳群と変遷をたどららしい。

一方、右岸には来住町に全長9mの両袖式の横穴式石室である2号墳を含む6世紀後半の築造とみられる岩倉古墳群（27）がある。2号墳も全長6.7mの横穴式石室であつたらしい。来住地区周辺にはそのほかにも、福向古墳群（26）、陣塚古墳（28）、下來住古墳群（29）など横穴式石室を埋葬施設とする古墳群がある。黍田町域では勝手野古墳群の谷を挟んだ北側斜面に昭和53年度に調査された毛無山3号

墳(31)がある。1・2号墳については、その存在が疑われている。3号墳は昭和26年に行われた工事によって家形石棺の底石が出土し、古墳付近に放置されていた。古墳は損壊が著しかったが、調査の結果、家形石棺をもつ横穴式石室を埋葬施設とすることが判明している。また、平成12年度には赤田白雲谷古墳(30)が調査された。無袖式の横穴式石室を有する径10mの円墳で、裝飾付須恵器が出土している。以上のように、小野市域では加古川左岸側では木棺直葬墳が主流であるの比べ、右岸側では6世紀後半以降、横穴式石室墳へと移行したという特徴がみられる。

三木市域では、美濃川右岸では加古川との合流点付近の北側の丘陵部に正法寺古墳群(56)がある。さらに、右岸丘陵部に正法寺東尾根古墳群(57)、フルムシヨ南西尾根古墳群(58)、天王山古墳群(59)、愛宕山古墳群(60)、妙善寺古墳群(61)、年ノ神古墳群(62)など、後期の横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が築造されている。これらの古墳群の北側には櫻山古墳群等の木棺直葬墳が先行して築造されていることから、おそらく6世紀後半以降に横穴式石室墳に移行したと考えられる。一方、対岸の美濃川左岸では、印南野台地の北端部に沿って王子山古墳群(65)、石野古墳群(66)、花尻古墳群(67)、在田寺裏古墳群(68)、巴古墳群(69)、高木古墳群(70)、興治古墳群(71)、広野野之池古墳群(72)などがある。高木古墳群・野之池古墳群などを除くと、詳細は明らかでないが、いずれも木棺直葬を主体とする古墳群で、横穴式石室墳は、現在のところその存在が知られていない。このように美濃川下流域の両岸では、埋葬施設が対照的なあり方を示していることが挙げられる。

美濃川上流域の支流である志染川流域で、最近調査が行われた窟屋1号墳(74)は、径15mほどの円墳で、全長約11mの大型の無袖式横穴式石室をもつ。特に注目される副葬品に加古川流域では唯一の金銅装束風式銅頭が出土し、「記紀」、『播磨国風土記』の記述との関連性をうかがわせる古墳である。

また、古墳時代を中心として長持形石棺や家形石棺の供給が、加古川下流域の高砂市・竜山(A)、中流域の加西市・高室(B)、同・長(C)などから行われ、広く分布している。

4 古代寺院の様相

加古川市域では、左岸地域の西条古墳群に接して7世紀後半の創建である法隆寺式の伽藍配置をもつ西条庵寺(50)があり、西条古墳群との関係が注目される。また、日岡古墳群の立地する丘陵上には法隆寺式の伽藍配置をもつ8世紀前半の創建である石守庵寺(53)がある。印南野台地の西端には野口庵寺(54)があり、8世紀前半の創建とみられる。野口庵寺の南には古代山陽道の賀古駅家に比定されている古大内遺跡(55)がある。一方、右岸地域には7世紀後半の創建とみられる中西庵寺(46)があり、『播磨国風土記』の「石作連」との関係が深い。加古川を挟んで日岡丘陵の対岸には、7世紀後半の創建とみられる山角庵寺(41)の存在が推定されている。

小野市域には加古川両岸にいくつかの古代寺院が建立されている。右岸の河合庵寺(22)は7世紀第3四半期に遡ると考えられ、播磨地域でも最も古い時期の創建とみられている。河合庵寺の南西1.5kmの位置に新部大寺庵寺(23)があり、7世紀後半に創建された薬師寺式の伽藍配置が想定されている。また、来住町域で近年、奈良時代の古瓦の出土があり、この地域にも古代寺院が存在しているらしい。左岸では、大部古墳群の北側に7世紀後半の創建になる薬師寺式の広渡庵寺(15)が造営されている。

三木市域では、古代寺院は知られていないが、交通の要衝であった加古川下流域は無論、中流域においても数多くの古代寺院が造られていることは、賀毛郡域が古墳時代後期以降に、それ以前とは異なる

新たな勢力の台頭があったことを示しているのではなからうか。

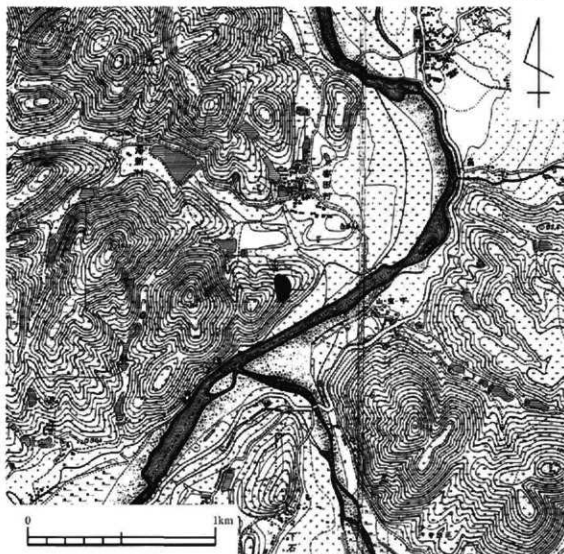
第2節 古墳群の分布と構成

1 古墳群の立地（第19・20図）

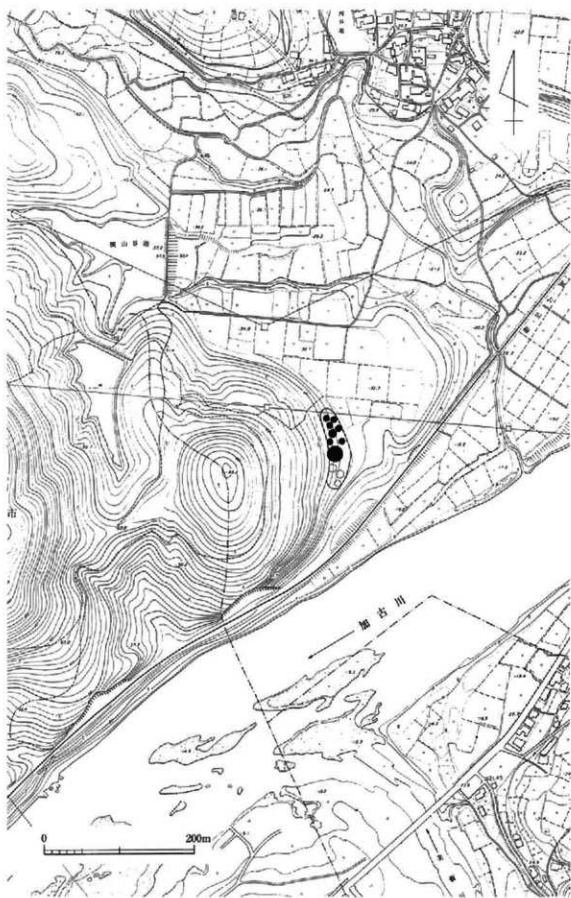
勝手野古墳群は播磨東部を南北に貫流する加古川現河口から、上流へ約15kmほど遡った加古川に面した右岸丘陵裾部に位置している。行政上の所在地は小野市委田町にあたるが、古墳群から南へ約100mほどで加古川市域となり、事実上、小野・加古川両市の境界に位置するといえる。また、加古川を挟んで対岸南側は三木市域にあたる。

勝手野古墳群が属する委田町は、『加東郡誌』によれば、朝廷の御料地に属し、黍を栽培していたことから委田と名付けられたとされ、中世は垂井荘に属していた。近世から明治22年までは加東郡委田村であったが、明治22年から昭和29年までは米住村の大字となり、昭和29年の市制施行に際して、小野市委田町となり、現在に至っている。

現在の行政区画は、おおむね古代律令郡域を踏襲したもので、その郡域にあてはめれば、加古郡・



第19図 勝手野古墳群の位置（1/20,000：明治19年 帝國陸軍製）



第20図 勝手野古墳群の位置 (1/5,000 : 昭和44年小野市製1/2,500図をもとに作成)

印南郡（加古川市域）、賀毛郡（小野市域）、美濃郡（三木市域）の境界線上に位置していることになる。小野市域は賀毛郡に包摂されるので、律令制郡域では賀毛郡の南端部に位置し、南西に印南郡、南東は加古郡に接し、加古川対岸は美濃郡ということになる。

勝手野古墳群は播磨東部ほぼ南北に貫流する加古川の下流域と、中流域を分ける主要な支流の一つである美濃川の合流点から、やや上流側の右岸に接した丘陵部と段丘面に築造されている古墳群である。

この地は、加古川河口から加古川下流域の播磨平野を上流に通り、初めて南岸に山塊が迫る地点にあり、以南部分の加古・印南郡域と、中流域に区分される以北の賀毛郡域東部、美濃川流域の美濃郡を明瞭に区分できる地勢にある。

現在の行政区画上では、小野市委田町字勝手野に所在する。小野市域を南流する加古川は、法華山地に沿うように加西市方面から流れる万願寺川合流点付近から南東方向に流れを変え、さらに、小野市委田町付近ではほぼ直角に南西に方向を変える。勝手野古墳群はこの加古川が南西方向に直角に屈曲した箇所やや下流部西岸にあり、対岸には三木市方面から西流する美濃川の合流点がある。

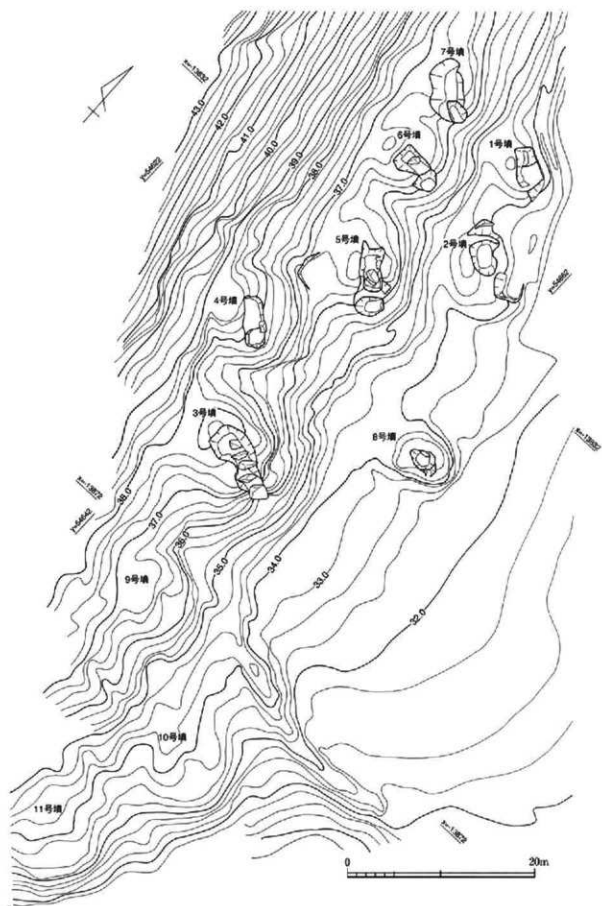
勝手野古墳群は西方から延びる法華山地の東端にある加古川に面した標高85.2mの通称「坊主山」の北東山麓部と高位段丘面に位置する。「坊主山」は播磨地方東部を南流する加古川右岸の加西市域から加古川市域北部にかけて分布する標高150～180m程度の緩やかな法華山地の東端にあり、加古川西岸に接している。

法華山地は小野市域では來往山地とも呼ばれ、東端の委田町では加古川に向かって開析する谷部を挟んで南側と北側に山塊が縦く。勝手野古墳群はこのうち南側の山塊の山麓部にあり、北側の山塊山麓部には毛無山3号墳や白雲谷古墳などが存在し、委田町の主要な集落域もこの山麓部にある。勝手野古墳群のある坊主山の山頂部には、径5mの円墳である坊主山古墳が単独で存在するとされているが、その内容は明らかでなく、古墳かどうか疑わしい。対岸の美濃川合流点の南側には、前期古墳とみられる全長95mの前方後円墳である愛宕山古墳が築かれており、北側には横穴式石室を埋葬施設とする正法寺古墳群が存在する。正法寺古墳群の北側には150基から構成される木棺直葬を主体とする櫻山古墳群がある。また、正法寺古墳群の位置する正法寺山付近からは中畿^①類に属する銅剣が出土し、弥生時代以降、この場所が重要視されていたことは間違いない。

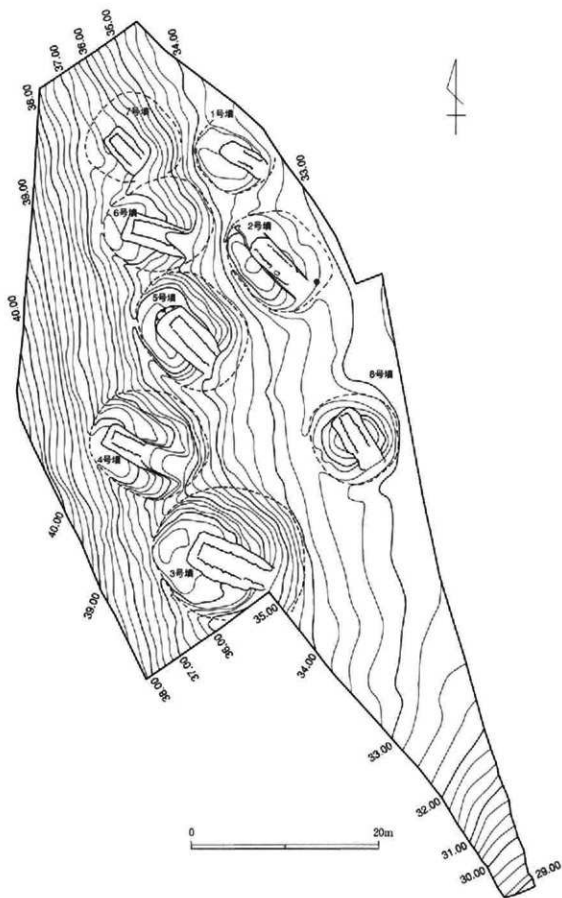
古墳群の北側は現在、水田となっているが、かつては段丘面が加古川に沿うように北東方向に続いており、水田化されたのは最近のことであろう。明治19年に陸地測量部によって作成された地形図（第19図）では、一見、山塊が北東方向に延びるように図示されている。おそらく段丘面が北東方向に延びていることを表していると考えられる。その名残は現在も認められることでき、段丘縁部は山林のままとされている。段丘下には取加古川線が加古川に沿うように敷設されている。坊主山の西端は加古川によって崖部が削り取られ、切り立った溶結流紋岩質凝灰岩が露頭している。勝手野古墳群の横穴式石室に使用されて石材は同じ石質であることから、この地点から採取された可能性が高い。

2 古墳群の構成（第21・22図）

勝手野古墳群は11基から構成される後期群集墳である。そのうち、工事によって消滅する8基の古墳の発掘調査を行った結果、横穴式石室を埋葬施設とする円墳であることが判明した。工事範囲外の3基の古墳も表面観察から、8基の古墳と同様、横穴式石室を埋葬施設とする円墳とみられる。



第21图 勝手野古墳群測量図（調査前）



第22図 勝手野古墳群測量図（表土除去後）

勝手野古墳群は確認できた11基以外にも北東下方に続く段丘面上に古墳の存在を想定する考えもあるが、後述のように、古墳群構成のあり方、発掘調査結果からみて、元々11基で構成され、下方の北東側段丘面下に11基以外の古墳が、かつて存在したことを想定することは難しい。

発掘調査時に確認できた11基の古墳は、東に向かって下降する独立丘陵状の標高85.2mを測る通称「坊主山」山麓部の、ほぼ南北方向の等高線に沿った標高32～38mの高差の間に造営されている。その中間点にあたる標高35m付近に傾斜の変換点があり、標高35mより上方は、比較的傾斜のある「坊主山」の山麓斜面部、それより下方は緩やかな傾斜の段丘面となっている。また、未調査古墳である9～11号墳の位置する東側は、加古川に沿うように等高線はわずかに南側に回り込み始め、東側は急崖となっており、直下に加古川の河道が接している。

11基の古墳は、標高35～38mの山麓斜面基部に6基（北から7・6・5・4・3・9号墳）、それより下位の段丘面上にあたる標高35～32m間に5基の古墳（北から1・2・8・10・11号墳）が築かれおり、ほぼ上下2列に築造されていることになる。なお、標高38mより上方は傾斜がさらに急となり、古墳は築造されていないことが判明している。

11基の古墳は等高線に沿った南北方向では、約100mの距離の間にあり、特に北半部の古墳は墳丘裾部を接するように築造されており、後出の古墳が先行の古墳の間に無理に押し込まれたような位置に築かれているという特徴がある。

北端の7号墳の北側、南端の11号墳の南西側には古墳の存在を確認することができない。北側に続く山麓斜面は古墳築造場所と変わりのない地形となっているが、大きな地形変化も受けていないことから、古墳は築かれなかったとしてよい。南側は加古川の河道によって急崖となっており、古墳を築造できるほどの場所的余裕はない。以上のことから、等高線に沿った南北両方向では11基以外の古墳が築かれることはなかったといえる。わずかに西側の段丘面下方に古墳が築造されていた可能性を残すが、古墳群のうち先行して築かれるのが、斜面上方に位置する古墳であること、古墳築造が7世紀中葉にまで下降することなどから、11基に先行するもしくは後出する古墳の存在を想定することは難しく、勝手野古墳群は元々11基の古墳から構成されていたと考えられる。

各古墳は北側に同様の地形があるにもかかわらず、特に北側に位置する1～7号墳の7基は極めて限定された場所を占地している。段丘面にある8号墳のみは、やや他の古墳と距離を開けている。工事範囲外のため未調査である9～11号墳は先の7基と比較すると、わずかに間隔を開けているようにもみえるが、発掘調査を実施していないことから、どの程度の墳丘規模を有するのか明らかでなく、実際には近接していることも考えられる。以上のように、勝手野古墳群は加古川下流と中流を分ける地勢の変化する地点の右岸に築造され、墓域の設定は加古川に面することを意図し、極めて限定された狭小な範囲に造営されていることになる。

【参考文献】

- 小野市教育委員会編『小野市遺跡分布地図—小野市内遺跡詳細分布調査報告書—』平成4年
- 加古川市教育委員会編『加古川市遺跡分布地図 第2版』平成6年
- 三木市教育委員会編『三木市遺跡分布地図』平成13年
- 神戸新聞社会部編『祖先のあしあと』Ⅲ 昭和35年
- 神戸新聞社会部編『祖先のあしあと』Ⅳ 昭和36年
- 兵庫県史編纂専門委員会編『兵庫県史』考古資料編 兵庫県 平成4年

小野市史編纂専門委員会編『小野市史』第4巻 史料編Ⅰ 小野市 平成9年
加古川市史編さん専門委員会編『加古川市史』第4巻 史料編Ⅰ 加古川市 平成8年
三木市編『三木市史』三木市役所 昭和45年
岡村健二・岡本道夫『三木市の古墳』三木市文化財保護委員会 昭和41年
栗田哲郎・高橋克憲他『行者塚古墳発掘調査概報』加古川市教育委員会 平成9年
小野市教育委員会編『シンポジウム 行政マンが語る古墳時代—加古川流域を中心として—記録集』平成12年
小野市立好古館編『小野市立好古館特別展図録17 ここまでわかった古墳の世界—加古川流域を中心に—』平成10年
小野市立好古館編『小野市立好古館特別展図録10 古代買毛郡を探る』平成7年
榎本誠一・松下勝『日本の古代遺跡3 兵庫南部』保育社 昭和59年
高島信之他『兵庫県小野市 毛無山3号墳発掘調査報告書』小野市教育委員会 昭和54年
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『年ノ挿6号墳現地説明会資料』平成6年
加東郡教育会編『加東郡誌』大正12年

第3節 1号墳

1 墳丘（第23図～第25図）

1号墳は、古墳群の北東端にあり、墳丘の大部分は北東に向かって緩やかに傾斜する段丘面に築かれているが、西側墳丘の一部と墳丘上部を画する弧状の溝は、山麓斜面の下端に及んでいる。段丘面上にあたる石室開口部側の南東方向には2号墳、西側の山麓斜面には南西側に6号墳、北西側に7号墳があり、それぞれ墳丘裾を接している。

調査前の地形観察では、横穴式石室墳通有の高い墳丘盛土は認められず、標高34～35mの等高線付近で舌状に張り出した部分がみられた程度である。残存する墳丘高は約0.8mと低く、後世の乱掘等によって墳丘は大きく損傷を受けていると予想された。特に、斜面下方にあたる東側墳丘が大きく崩れ、石室の位置とみられる陥没部分が東側に偏っていることなどから、斜面下方にあたる東側墳丘は、土取りや石材抜き取りによって大きく損なわれていること、また、墳丘中央部は大きく陥没しており、陥没の形状から、横穴式石室の石材はかなりの部分が抜き取られていると考えられた。一方、斜面上部の西側の標高34.5m付近で等高線が内彎する凹地部分があることから、墳丘上部を画する弧状の溝が開削されていることが想定できた。

1号墳は、外環列石等の外表施設をもたないことや、墳丘の破損が著しいため、墳形及び規模については確実性に乏しいが、石室主軸方向にあたる長径は約8.6m、短径は石室が墳丘中央部に築かれていると仮定すると6.9mほどであったと復元され、やや石室主軸方向に長い円墳であったと想定できる。斜面上部の弧状溝底から墳丘盛土の残存部分の最も高いところまでは0.9mほどで、本来の墳丘盛土の多くは失われていることが明らかである。

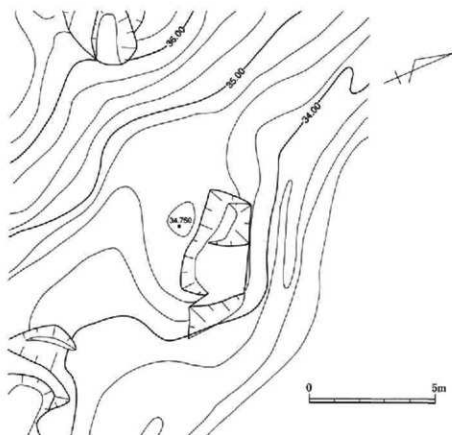
山麓斜面地にあたる西側墳丘には、平面形が弧状を呈するように断面形が緩やかなU字形に整形した溝が掘られ、背面側と西側の墳丘裾を画している。1号墳の弧状の溝の外側に接するように6号墳及び7号墳の墳丘が築かれていて、特に、6号墳の墳丘は、1号墳の弧状溝を埋めていることが観察され、1号墳が6号墳より先行して築造されたことを示している。

墳丘は、斜面下方側は大きく墳丘が損壊され、わずかに痕跡の一部が残るのみで、墳丘盛土の状況は明らかでない。斜面上方側も残存状況はよくないが、主として斜面上部の弧状の溝の掘削土を用いて、石室構築に合わせ、石室側から墳丘裾部に向かって、順次盛土されていったことが観察される。調査を行った各古墳と同様、盛土は多くは黄褐色系の地山土で積み上げられていることから、明確な互層に積み上げられた痕跡は観察できず、明確な旧表土層も確認することはできなかった。

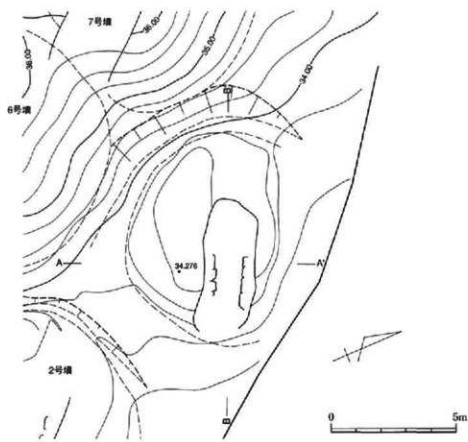
なお、1号墳では古墳の損壊が著しく、前庭部の状況は明らかにすることができなかった。

2 横穴式石室（第26図）

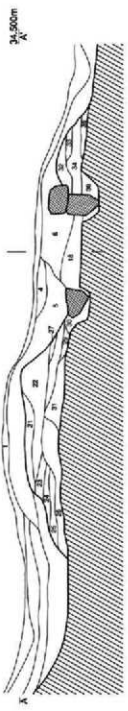
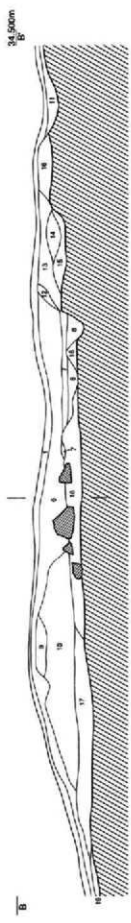
1号墳は大きく損傷を受けていたことから、埋葬施設は側室の一部がかろうじて残存しているだけであったが、石室墓壇の状況から、南東方向に開口する無軸式の横穴式石室であることが判明した。復元主軸の方位は、S-65°31'-Eで、後述の3・4号墳と近似した開口方向をとっている。調査の結果、石室の大部分は損壊を受けているものの、床面と想定できる地山面が乱掘された形跡はなく、おおむね石室床面は旧状を保っていると考えられる。



第23回 墳丘（調査前）

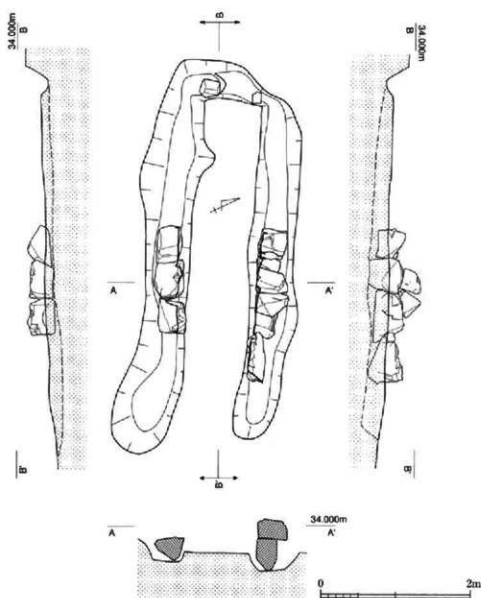


第24回 墳丘（表土除去後）



- | | | | | | |
|----|---------|---------------------|----|---------|----------|
| 1 | 10TR5/4 | にんい黄褐色細砂 (表土) | 19 | 25Y 5/4 | にんい黄褐色細砂 |
| 2 | 25Y 8/3 | 黄褐色細砂 1cm以下の層を含む | 20 | 10TR5/4 | にんい黄褐色中砂 |
| 3 | 10TR5/3 | にんい黄褐色細砂 1cm以下の層を含む | 21 | 25Y 5/6 | 黄褐色細砂 |
| 4 | 10TR5/6 | 黄褐色中砂 1cm以下の層を含む | 22 | 10TR5/2 | 灰褐色中砂 |
| 5 | 10TR4/4 | 褐色中砂 2cm以下の層を多く含む | 23 | 10TR4/2 | 灰褐色細砂 |
| 6 | 10TR6/4 | にんい黄褐色細砂 | 24 | 25Y 4/2 | 細砂 |
| 7 | 10TR6/4 | にんい黄褐色細砂 | 25 | 10TR4/2 | 灰褐色細砂 |
| 8 | 25Y 7/4 | にんい黄褐色細砂 | 26 | 10TR4/3 | にんい黄褐色細砂 |
| 9 | 25Y 7/4 | 黄褐色細砂 | 27 | 10TR6/3 | にんい黄褐色細砂 |
| 10 | 10TR6/3 | にんい黄褐色細砂 | 28 | 10TR5/4 | にんい黄褐色細砂 |
| 11 | 10TR4/3 | 灰褐色細砂 | 29 | 10TR6/4 | にんい黄褐色細砂 |
| 12 | 10TR4/3 | にんい黄褐色細砂 | 30 | 10TR5/4 | にんい黄褐色細砂 |
| 13 | 10TR4/3 | にんい黄褐色細砂 | 31 | 10TR5/4 | にんい黄褐色細砂 |
| 14 | 10TR5/3 | にんい黄褐色細砂 | 32 | 25Y 5/2 | 明灰褐色細砂 |
| 15 | 10TR5/4 | 褐色細砂 | 33 | 10TR5/6 | 灰褐色細砂 |
| 16 | 10TR5/4 | 褐色細砂 | 34 | 10TR5/6 | 灰褐色細砂 |
| 17 | 10TR5/4 | にんい黄褐色細砂 | 35 | 10TR5/4 | にんい黄褐色細砂 |
| 18 | 10TR5/3 | にんい黄褐色細砂 | 36 | 10TR5/4 | にんい黄褐色細砂 |

第25図 墳丘断面



第26図 横穴式石室

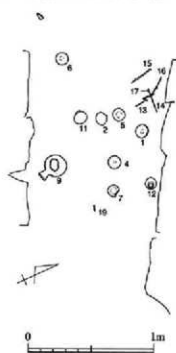
石室は大半が失われているものの、かろうじて基底石を据えるための墓壁の下部を検出することができた。墓壁面方は、残存幅2.0mほどの隅門のコ字形を呈し、石室床面を掘り残して、断面形が台形をなすように溝状に掘り込んでいる。墓壁底と床面との比高差は約15~30cmで、溝状に掘り込んだ墓壁底に石室基底石を据えている。残存する墓壁から、石室全長は約4.5m程度であったと推定され、最大でも5mを超えることはなかったと考えられる。床面幅は、奥壁部で1.0m前後、側壁残存部で約1.1mを測る。墓壁の形状からみて、本来、奥壁幅と開口部幅は、それほど差異が無かったとみられる。

床面には、排水溝、敷石等の施設はなく、地山面を直接、床面として利用している。床面の高さは、奥壁付近で標高33.7m、石室中央部にあたる側壁残存部中央で33.6m、開口部で33.45mで、奥壁と開口部では25cmほどの比高差があり、床面は緩やかに開口部に向かって下降していることがわかる。

石室内の地層は、石室中央部の側壁残存部付近で、乱掘りから免れた自然地層と考えられる比較的良好な黄褐色砂（第18層）の地層がみられ、その土層下部にあたる石室床面から土器、鉄器等の遺物が出土したが、その他の部分では取り残された壁体石材に混じって、床面付近まで攪乱土が充満していた。

石室壁体は、調査を行った8基の古墳中では最も残存状況が悪く、石室中央付近の両側壁の一部を残すのみで、天井石、奥壁及び側壁の大部分は失われている。残存する側壁の石材は、付近で産出する流紋岩質溶結凝灰岩を用いて構築されている。他の古墳の石室石材からみて、石室はすべて流紋岩質溶結凝灰岩で構築されていたのであろう。石室は、右側壁で石室中央付近の基礎石が3石、左側壁では右側壁とは対称の位置に、基礎石4石と2段目の2石が残存していたのみである。残存部分の基礎石は、いずれも横方向に据えられている。なお、石室開口部外側の前庭部の状況も残存状況が悪く、墓道等は検出されていない。

3 遺物の出土状況（第27・28図）



第27図 遺物出土状況

両側壁の一部がわずかに残存する石室中央部の床面付近に、かろうじて攪乱土から免れた遺物が残されていた。その他、石室内及び墳丘攪乱土から、若干の須恵器が出土している。

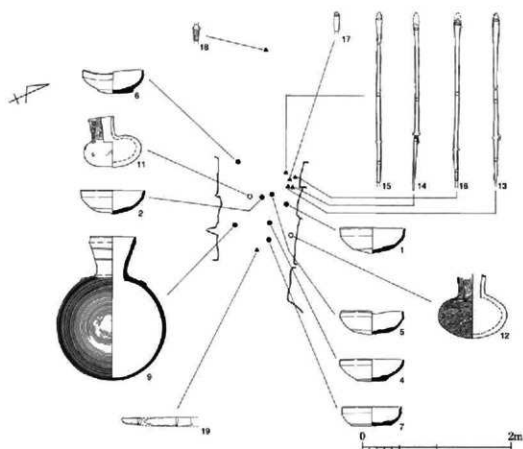
石室中央部床面に残された遺物には、須恵器・土師器、鉄器がある。左側壁の奥壁に寄って鉄鍬（13～17）が4本まとめて出土した。鉄鍬の刃部の向きには、ばらつきがあるが、いずれも長頭鍬であり、あまり大きくは移動されておらず、副葬時の位置を保っていると考えられる。土器は、須恵器の坏Ⅰ（1・2・4～7）・提瓶（9）、土師器では小型の長頸壺（12）と平瓶（11）が完形に近い状態で検出されたが、やや散漫な出土状況を示していることから、直ちに副葬時の位置を保っているとは言い難い。石室の前後が失われており、残された部分の遺物の出土状況からだけでは、その性格を判断できないが、鉄鍬がまとめて出土している点を考慮すれば、奥壁に近い埋葬に伴うものであるのかもしれない。

4 出土遺物（第29・30図）

1号墳から出土した遺物は、古墳に伴う遺物と後世の再利用に伴う遺物がある。古墳造営に伴う出土遺物のそれぞれについては、以下のとおりである。なお、石室の再利用時に残された遺物については、他の古墳も含め、第6章で一括して扱うことにしたので、この項では記述しない。

(1) 土器

須恵器（坏Ⅰ・坏G・平瓶・提瓶）	10点
土師器（長頸壺・平瓶）	2点



第28図 遺物出土状況（模式図：土器1/8・鉄器1/4）

(2) 武器・工具（鉄・刀子）

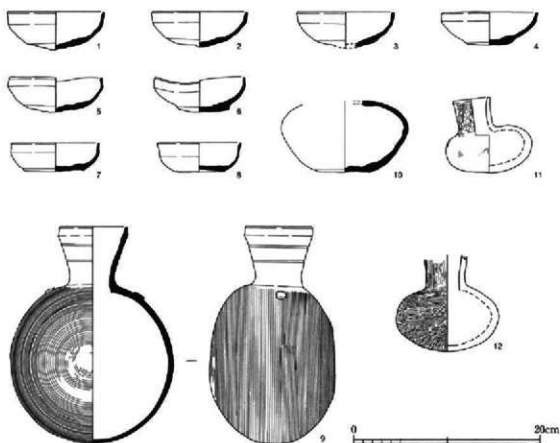
5点以上

(1) 土器

須恵器

坏I（1～7）

古墳時代以来の蓋受けの立ち上がりのある坏（坏H）身とセットとなる坏蓋を、逆転させたような形態をもつ坏身で、本報告では坏Iと呼称する。坏Iは、この地域では古墳時代後期後半頃から古墳、集落等を問わず一般的にみられる器種である。勝手野古墳群出土の坏Iは、口縁部と底部の境界が明確でなく、口縁部をわずかに内方へ屈曲させ、端部は丸く収めているという共通した特徴がある。古墳時代以来の坏H蓋とは形態的には区別しがたい個体もあるが、坏H蓋としたものに比べると、口径が小さく、底部がやや扁平であり、調整手法も、底部外面はヘラ切り後不調整のものを基本とすることなどの特徴が挙げられる。1号墳からは、立ち上がりのある坏H身が出土していないことから、すべて坏Iであろうと考えた。口径9.3～10.2cm、器高3.1～4.0cmの小型品で、内方に折れ曲がるもの（5～7）と、屈曲の程度が少ないもの（1～3）と、やや不明瞭なもの（4）がある。底部外周に補助削りがみられるもの（2・3）があるが、ヘラ切りまま不調整のものがやや多い。4～6は底部外面をヘラ切り後、粗い静止ナデ調整を行っている。6は底部内面に仕上げナデを施している。



第29図 出土土器

環G (8)

平らな底部から屈曲してわずかに外反しながら外上方に延びる口縁部をもつ小型の坏身で、宝珠つまみを付ける身受けのかえりのある蓋が伴う坏身と形状がよく似ている。セットとなる蓋は出土していないことから、前記の坏Iと同種として扱うべきかもしれない。坏Iと形態に差異があることと、セットとなる蓋を伴わないということからすれば、「類坏G」とでもすべき器種ではあるが、煩雑さを避ける意味から、本報告では仮に坏Gと呼称し、坏Iと一応、区別しておきたい。昭和28年出土の坏(第1図8・9)に類似のものがある。いずれも底部外面は、ヘラ切りのまま不調整である。

提瓶 (9)

やや開き気味に直口する口縁部は、端部を内彎させている。口縁部を3分割するように2条の沈線を巡らしているが、沈線の終端は始点と食い違っていて、丁寧さに欠けている。体部は外面を丁寧にカキ目調整した後、肩部に把手が退化したボタン状の粘土を貼り付けている。中型提瓶の部類に属し、5号墳出土の異形の提瓶を除くと、勝手野古墳群出土の提瓶中では大型品に属する。

平瓶 (10)

口縁部を欠いている。平底気味の底部をもち、体部は倒卵形で肩部との境界は不明瞭である。勝手野古墳群出土中の平瓶では、中型品に属する。底部はヘラ切り後、粗く静止ナデ調整を施している。

土師器

平瓶 (11)

長頸壺と同様の小型品で、長頸壺とともに、須恵器の形状を模倣したものであろう。扁平な球形の体部に直立する口縁部を付けている。須恵器の平瓶にみられる体部を塞ぐ円盤充填技法はなく、口縁部を直接、体部に付けている。体部器表は摩滅しているが、外面全体にハケ目調整が施こされているなど、須恵器とは異なる成形・調整手法をとっている。

長頸壺 (12)

小型の長頸壺で、須恵器の同種の器形を模倣したものであろう。やや扁平な球形の体部に直立する口縁部を付ける。口縁部上半を欠いているが、4号墳出土例を参考にすれば、口縁部上半は八字形に開くと思われる。外面全体にハケ目調整の後、ミガキ調整を施しているなど、土師器の成形・調整手法を踏襲している。

(2) 武器・工具

鉄鏃 (13~18)

鉄鏃は残片を含めて6点出土している。完形に近い13~16は、いずれも長い頸部と、茎の境の両部に棘状の突起をもつ尖根系の長茎鏃である。鏃身部及び茎部端が欠損しているものがあり、全長の判明するものはないが、残存長が18cm前後であることから、本来の長さは20cm前後であったと推定される。鏃身部の形状は、錆化が著しく不明瞭であるが、おそらく両丸造であろう。頸部長は10.5cm前後のもの(13・14)と、12cmを超えるもの(15・16)の2種がある。茎が完存している14は、長さ5.9cmで、矢柄の木質が残存している。頸部長に若干の差があるが、ほぼ同大の規格化された製品であるといえる。他に鏃身片と茎部の棘状突起部分の破片が、それぞれが1点ずつある。17は直接接合しないが、出土位置から鏃身部の欠損した14の鏃身先片の可能性がある。

刀子 (19)

刀子の切先と身部とみられる残片は接合しないが、ほぼ同じ地点から出土しており、同一個体とみて間違いないだろう。刃部の幅は1.0cmで、長さは7.4cm以上である。

5 小結

1号墳は、後世の破壊が著しいことから、墳丘・石室とも残存状況が悪く、本来の規模は不明瞭であるが、復元径約8.6m、縦径約6.9m程度の主軸方向に長い円墳であったとみられる。斜面上部側には弧状の溝を掘り込み、墳丘が囲われている。1号墳は、南方に2号墳、背面側に6・7号墳が接しており、



第30図 出土鉄器

出土遺物等からみて、2・7号墳に後出する古墳であると考えられ、6号墳が1号墳の溝を一部集めて築造されていることから、6号墳に先行する可能性が高い。

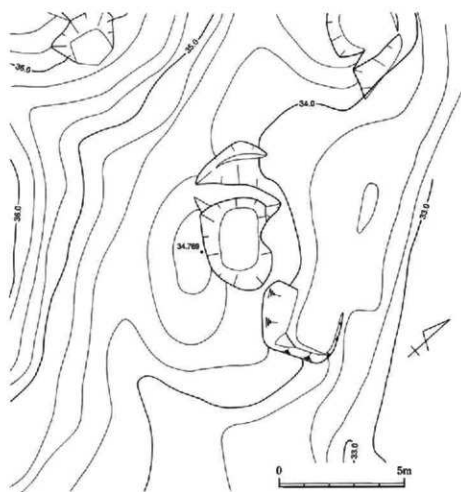
石室は南東方向に開口し、3・4号墳と類似する開口方向である。残存度は悪く、わずかに基礎石を据え付けるための墓壇から、復元長約4.5m、幅約1.1mほどの規模をもつ無袖式横穴式石室であったと推定される。床面は排水溝等の施設をもたないが、開口部に向かって緩やかに傾斜させている。

遺物は、石室内床面と機乱土及び墳丘周辺から出土している。1号墳に確實に伴う遺物である石室中央部付近の床面に残された遺物には、須恵器・土師器等の土器と鉄器がある。石室内で出土した須恵器の坏身は、古墳時代以来の立ち上がりをもつ坏H身が認められず、小型の坏Iのみで構成されている。1号墳出土の坏Iは、形態・法量に大差がないことから、同一型式と考えてよく、蓋受けの立ち上がりのある坏Hを伴う2・3・5・7号墳より、後出するとみられる。提瓶はやや大型品であり、古相を呈する可能性があるが、出土状況からすると、時期的差異はないと考えておきたい。土師器の小型の長頸壺・平瓶は、須恵器の形状を模倣したミニチュア品とみられ、3・4・5号墳でも同種の土師器が出土していることから、これらの古墳間での親縁性が感じられる。鉄器は、いずれも長巻鏃で比較的古まった出土状況を示し、ほぼ副葬時の位置を保っていると考えられ、須恵器の型式とも矛盾しない。石室の床面以外から出土した須恵器も石室内出土の須恵器と型式的に近似し、1号墳に伴っていたものとみて大過ないであろう。

以上のように、1号墳は、勝手野古墳群中では遅れて築造された小規模古墳であり、追葬があったかどうかは明らかに行うことができなかったが、石室規模と出土遺物に明確な型式差がみられないことから、単葬墓であった可能性を指摘しておきたい。

第4節 2号墳

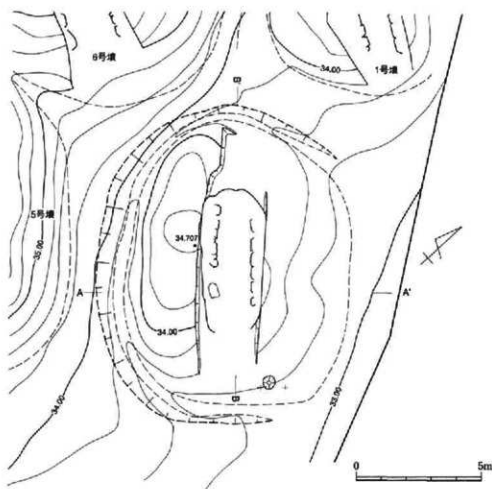
1 墳丘 (第31~34図)



第31図 墳丘 (調査前)

2号墳は、古墳群の北東部にあり、第2節で述べた1号墳の南側に接して築かれている。1号墳と同様、北東に向かって緩やかに傾斜する段丘面に位置し、墳丘の一部は山麓斜面の下端に及んでいる。段丘面上の南東側には、やや距離をおいて8号墳があり、西側の山麓斜面には、北西側に6号墳と南西側に5号墳が近接している。

調査前の地形観察では、1号墳と同様、標高34~35m付近の等高線で舌状に張り出した部分があり、約0.8mほどの墳丘状の高まりが認められた。墳丘中央部には石材抜き取り跡とみられる大きく陥没した部分があり、横穴式石室を埋葬施設とする円墳と想定されたが、残存する墳丘の状況から石室は大きく損壊を受けていることが予想された。特に、斜面下方にあたる東側墳丘が大きく崩れていること、石室の位置とみられる陥没部分が東側に偏っていることなどから、斜面下方にあたる東側の墳丘封土が大きく損なわれているのではないかと考えられた。一方、斜面上部にあたる西側墳丘では、墳丘を囲する弧状の凹地が認められ、比較的墳丘の旧状を保っているのではないかとみられた。



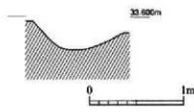
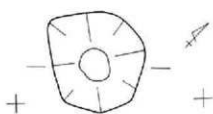
第32図 墳丘（表土除去後）

2号墳は、外周列石等の外表施設をもたないことや、後世の乱掘によって墳丘の損壊が著しいため、墳形及び規模は確実性に乏しいが、石室主軸方向にあたる長径は約11.3m、短径は9.0mほどと推定できる長円形の古墳であり、1号墳よりやや大型の墳丘規模を有する。

山麓斜面地にあたる西側の墳丘裾には、平面形が弧状を呈するように、旧表土を緩やかなU字形に整形した溝が掘られ、背面側と西側の墳丘裾を囲っている。また、後述の8号墳ほどではないが、墳丘の大部分が比較的平坦な段丘面に築かれているため、墳丘の3分の2程度まで溝状の掘り込みが確認された。この弧状溝は、石室開口部より斜面下方側にまで及んでいることから、周溝状の掘り込みに近いといえる。

斜面上部の弧状溝底から墳丘封土の残存部分のもっとも高いところまでは1.1mほどであり、元の墳丘封土の上半部は失われていると思われる。墳丘の構築は、斜面上部では旧表土層を部分的に掘り残し、その上部を主として斜面上部の弧状の溝の黒削土である黄褐色ないし暗褐色系の地山土を用いて盛土されていることが観察できた。盛土は、石室構築に合わせて石室側から外方の墳丘裾に向かって積み上げているようである。一方、斜面下方の東側の墳丘は、多くが失われており、盛土の状況は明らかにすることができなかった。

墳丘及び石室の破壊が著しく、石室前面の前庭部の状況は明らかにすることができなかつたが、石室左



第33回 須恵器埋設坑

側壁の延長線上からやや東側に寄った墳丘裾部付近で、径1.0mほどの不整形円形に掘り込まれた土坑が検出された。調査の不手際のため、検出状況を記録できなかったが、土坑内からは、須恵器の裏(23)が破砕された状況で出土した。石室の延長上にあることから、古墳構築後に執り行われた葬送儀礼に関わる遺物であろう。

2 横穴式石室(第35回)

2号墳の埋葬施設は、残存状況は極めて悪いが、調査の結果、南東方向に開口する無軸式の横穴式石室であることが判明した。石室主軸は、S-45°53'-Eの方位をとり、5・7号墳の開口方向と近似し、等高線に近い方向に開口している古墳の一つである。石室の残存状況は悪く、天井石及び奥壁は失われており、左右両側壁も大部分の石材が抜き取られ、かろうじて両側壁の基底石と2段目の石材1石が残存しているだけである。調査中に、石室を構成していた石材の多くが確認できなかったことから、石材は抜き取られた後に持ち去られたのであろう。なお、小野南中学校及び奈田コミュニティセンターで保管されている須恵器、家形石棺材などが、今回の調査で出土した2号墳の遺物に共通の特徴があり、2号墳の石材や遺物の多くが、昭和28年に持ち出された可能性が高いことが判明した。

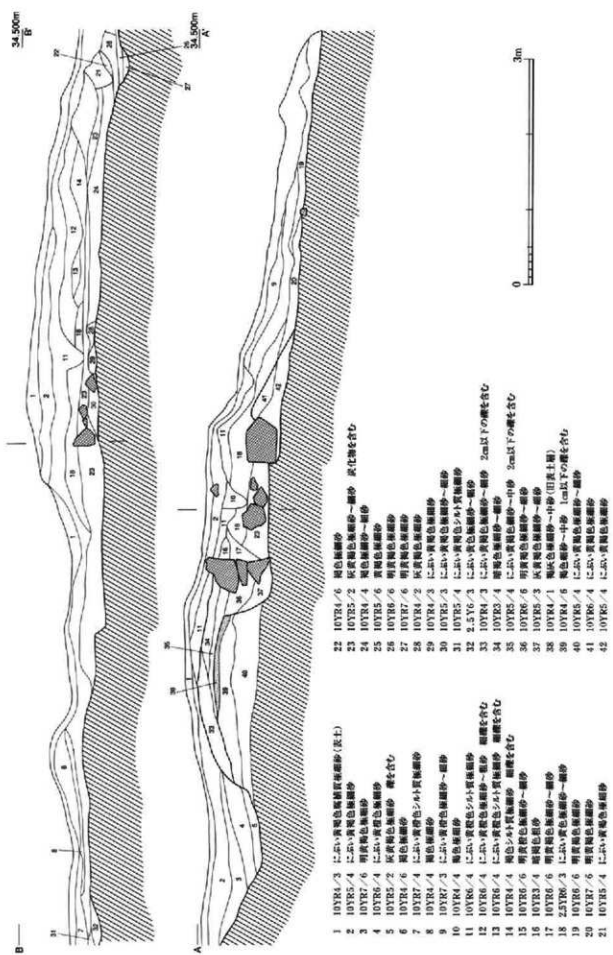
石室内の埋土は、11~23層は昭和28年の乱掘前後以降の堆積土と考えられ、石室全体が抜き取られた箇所では床面にまで攪乱が及んでいる。この層からは、散乱した石材に混じって家形石棺材片が多く出土している。その下層にあたる24層は、古墳造営中止後に自然堆積した土層で、石室開口部付近と中心として出土した遺物を包含していた。

墓室は、奥壁部と右側壁部のみし字形に掘り込まれ、斜面下方の左側壁部は検出することができなかった。本来、隅円のコ字形に掘り込まれていたのか、あるいは明確な掘り込みがなかったのかは不明である。右側壁部では残存長5.0m、上端幅0.7m前後で、検出面からの深さは奥壁部で約0.3mほどで、石室床面が台状に掘り残され、墓室底に石室基底石の下部が据えられている。

床面は攪乱が著しいことから不明確ではあるが、奥壁部で標高33.55m、石室中央部で33.55m、開口部で33.5mで、ほぼ水平である。なお、床面には散石、排水溝等の内部施設は確認できなかった。

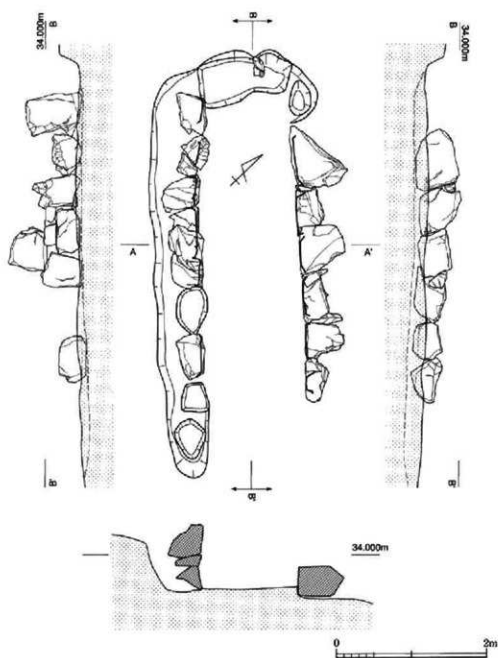
石室残存長は、石材抜き取り坑を含めて、右側壁で約5.0m前後、左側壁で約4.1m前後、幅は奥壁部分で約1.20m、中央部で1.35m、開口部で約1.35m前後であるとみられる。

奥壁は残存しないが、抜き取り痕跡を検出することができた。奥壁を据え付ける際に、高さを調整するために置かれたとみられる小礫が残されている。抜き取り痕跡からすれば、奥壁基底部は2石で構成され、右側に大型の石材を使用し、左側に小型の石材を据え付けていた可能性が高い。左右両側壁は、基底石を失っている部分があるが、左側壁開口部を除いて抜き取り坑が検出でき、右側壁は9石で構成されていることが判る。左側壁は7石が確認され、開口部の欠損箇所をふくめると、少なくとも、8石から構成されていたとみられる。両側壁で残存長が異なるが、他の古墳の状況から左右の石室長は、



第34図 墳丘断面

- | | | | | | |
|----|----------|------------------|----|----------|------------------------|
| 1 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色細砂(表土) | 22 | 10YR4/6 | 褐色細砂 |
| 2 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色細砂(表土) | 23 | 10YR5/2 | 灰褐色細砂-細砂 炭化物を含む |
| 3 | 10YR7/6 | 明黄褐色細砂 | 24 | 10YR4/4 | 褐色細砂-細砂 |
| 4 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色細砂 | 25 | 10YR5/6 | 黄褐色細砂 |
| 5 | 10YR5/2 | 灰褐色細砂 礫を含む | 26 | 10YR6/6 | 明黄褐色細砂 |
| 6 | 10YR4/6 | 褐色細砂 | 27 | 10YR7/6 | 明黄褐色細砂 |
| 7 | 10YR4/4 | にぶい黄褐色少中質細砂 | 28 | 10YR4/2 | 灰黄褐色細砂 |
| 8 | 10YR4/4 | 褐色細砂 | 29 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色細砂 |
| 9 | 10YR7/3 | にぶい黄褐色細砂-細砂 | 30 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色細砂 |
| 10 | 10YR4/4 | 褐色細砂 | 31 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色少中質細砂 |
| 11 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色少中質細砂 | 32 | 2.5 YG/3 | にぶい黄褐色細砂-細砂 2cm以下の礫を含む |
| 12 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色細砂-細砂 礫を含む | 33 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色細砂-細砂 |
| 13 | 10YR4/4 | 褐色少中質細砂 礫を含む | 34 | 10YR3/4 | 暗褐色細砂-細砂 |
| 14 | 10YR4/4 | 褐色少中質細砂 礫を含む | 35 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色細砂-中砂 2cm以下の礫を含む |
| 15 | 10YR6/6 | 明黄褐色細砂-細砂 | 36 | 10YR6/6 | 明黄褐色細砂-細砂 |
| 16 | 10YR3/4 | 暗褐色細砂 | 37 | 10YR5/3 | 明黄褐色細砂-細砂 |
| 17 | 10YR6/6 | 明黄褐色細砂-細砂 | 38 | 10YR4/1 | 黄褐色細砂-中砂 (旧土層) |
| 18 | 2.5YR6/3 | にぶい黄褐色細砂-細砂 | 39 | 10YR4/6 | 褐色細砂-中砂 1cm以下の礫を含む |
| 19 | 10YR6/6 | 明黄褐色細砂 | 40 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色細砂-細砂 |
| 20 | 10YR7/6 | 明黄褐色細砂 | 41 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色細砂 |
| 21 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色細砂 | 42 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色細砂 |



第35図 横穴式石室

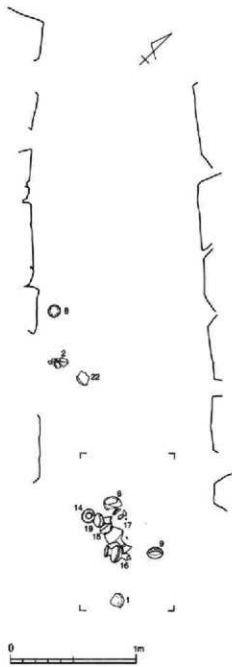
同規模であったと想定すれば、石室全長は5mほどであったと考えておきたい。

側壁は、左側壁では石材が横長方向に据えられ、奥壁側に行くにしたがってやや大きな石材を使用している傾向がある。一方、右側壁の石室奥半部では、石材を縦方向と横方向に交互に据えられている。2段目まで残存している部分は、右側壁中央部付近の1石にすぎないが、縦方向に据えられた石材と横方向に据えられた石材との高さを合わせるために、小さな石を詰めて高さを調節していることが観察できた。なお、前庭部には、墳丘裾を囲する弧状溝があり、墓道等の施設は検出することができなかった。

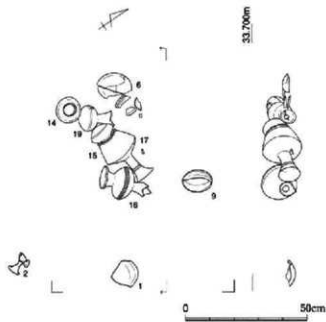
3 遺物の出土状況 (第36～38図)

石室の破壊が著しく、残された遺物は多くはないが、石室中央部から開口部付近にかけて乱掘りから取り残された遺物が床面上に残されていた。石室中央部に近い位置の一群(2・8・22)は、出土状況がやや散漫であり、原位置を保っているかどうかは明らかでない。その中の例品に乏しい蓋と考えられる小型の須恵器(8)は、同種ものが昭和28年出土とされる遺物中にも5個体(第1図1～5)が存在し、他の古墳からは出土していないので、これらの須恵器は2号墳出土であった蓋然性が高い。

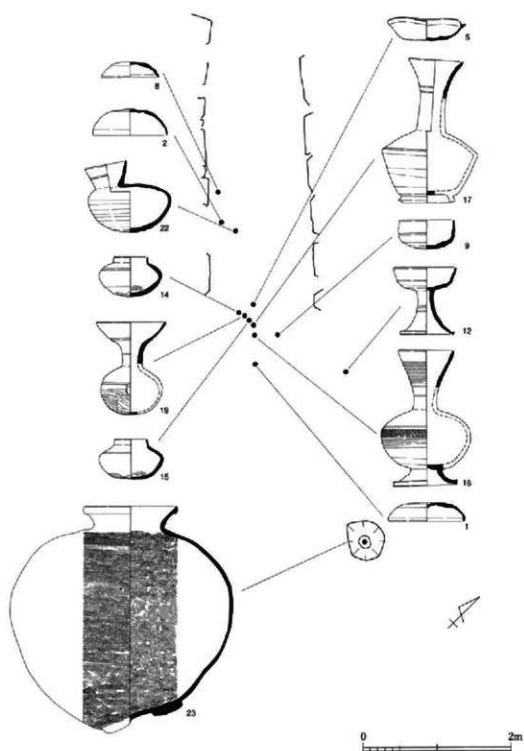
開口部付近からは、完成品に近い須恵器がまとまって出土している。特に石室主軸線上から右に寄った位置の検出された一群の須恵器(14～17・19)は、一列に並べられている状況が看取できた。先端の長頸壺(16)の体部肩に沿わせて高台付長頸壺(17)があり、その底部に口縁部を密着させた短頸壺(15)が倒位で、さらに同じく倒位の皿(19)、最後尾に短頸壺(14)が口縁部を斜上方に向けた状態で検出された。また、この一群に接して、開口部寄りに須恵器の坏皿蓋(1)と柄(9)、奥壁寄りに坏皿(6)がほぼ完形で出土している。これらの須恵器群は、扁平な2枚の石材に覆われて出土し、1石は少なくとも長頸壺(16)の上位に覆い被さっていることと石材が斜方に傾いていることから、倒置石材の転落石とみる方が妥当性が高いように観察されたが、転落石であるとすれば、



第36図 遺物出土状況



第37図 遺物出土状況(部分)



第36図 遺物出土状況（模式図：土器1/8）

須恵器が破砕されず残されていることに疑問が残る。こうした点に加え、群中の2個体の長頸壺に、型式差があるとみられることから、後世に石室内の副葬品が取り片付けられた後、何らかの意図をもって配列しなおされた可能性も考慮しておくべきかもしれない。また、墳丘の項でも述べたように、石室開口部前方の墳丘裾付近には、円形土坑内に破砕されたと考えられる須恵器の甕（23）が覆かれ、甕片は

ほぼ完全に近く復元することができた。

4 家形石棺 (第39・40図)

墳丘表土、石室内及び前庭部から、黄灰色もしくは緑黄灰色を呈する流紋岩質凝灰岩製の家形石棺材片が破砕された状態で数多く出土したが、原位置をとどめる例はない。

出土した破片は、かつて『毛無山3号墳発掘調査報告書』¹⁾で「碑」と認識されたように、業理に沿って厚さ1~1.5cmほどの板状に剥離していて、その剥離面は人為的加工が行われたかのように極めて平滑な面をなしているが、今回の調査によって家形石棺の断片であることが明らかとなった。人為的な破砕に加えて、石棺材自体の性質による風化・破砕もあったと考えられ、すべてが数10cm以下の破片となっていることから、家形石棺の置かれた位置、石棺の規模・形態等は不明である。この石棺材が極めて細粒であることなどの特徴から、勝手野古墳群の北西約14kmの加古川を越った支流の下里川流域にある加西市高室から産出されたものであると考えられる。

1・2はともに、溝切りがなされた石棺材である。1は底込溝の底幅約3.7cm、溝外縁の幅約2.7cm、深さ約1.0cm、2は底込溝の底幅約5.0cm、溝外縁の幅約3.2cm、深さ1.2cmを測る。1の左縁・下縁、2の右縁・下縁は、ともに加工面をとどめているが、裏面は業理に沿って剥離している。溝が石材端部に達していることから、後述する3号墳と同形式の家形石棺であるとすれば、小口板ということになる。溝内底面には、幅広の工具痕が鮮明に観察される。

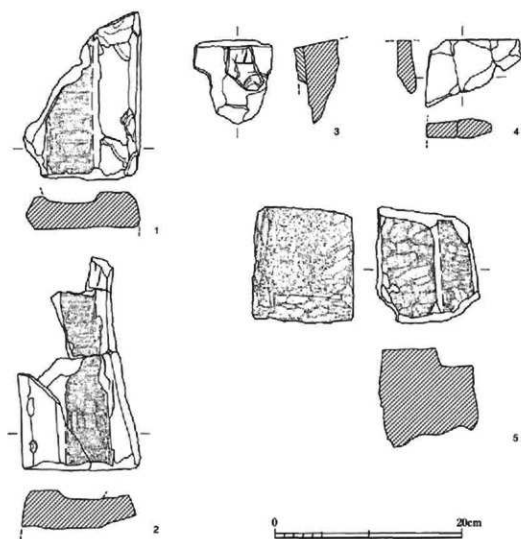
3・4は剥離の激しい破片であるが、表面の一部と側面に加工面をとどめている。4はやや鈍角をなす隅隅のコーナー部をとどめていることから、側板ないしは小口板の一部と推定される。

5は小口板かと推定される重厚な破片である。底込溝途中で破損しているため、溝幅は不明であるが、溝の深さは1.9cm前後を測る。厚さは最大で10.8cmを測る。表面に曲刃で幅の狭い工具による溝状の加工痕、手斧状の加工痕をとどめる。

6~11は蓋材の破片と思われる一群である。いずれもごく細粒の石材を用いており、業理に沿って1~2cmの厚さで剥離しているが、業理に対して斜交するように面的な加工がなされている。通常、石材の破損は業理に沿って起こりやすく、業理に対して直交する方向で石棺材を切り出して使用したとは考えにくいことから、これらは層積形を呈する蓋材の斜面部に相当する可能性が高いだろう。加工痕には、手斧がけ状のもの(10・11)、細い溝状に抉られたもの(9)、研磨と思われるもの(8)などが認められる。

12~24はやはり業理に沿って剥離した破片である。厚さ1cm前後のもので占められている。6~11と同一の石材を用いたものと考えられることから、蓋材の一部である可能性が指摘できる。既述のように、これらはかつて「碑」と報告されていたものである。同様の破片は他にも出土しているが、ここでは1面に加工痕をとどめるもののみを図示した。業理に斜交する加工面をとどめるものを、蓋の斜面部とする推定が正しければ、業理に平行な面を加工するこれらの例は、蓋材の頂部である可能性があらう。

加工痕のうち、特に注目される例は溝状の抉りで、12・19~24で観察される。このような加工痕からは、曲刃の彫刻刀状の工具が推定される。詳細に観察すると、溝底に工具が断続的に動いた結果生じる細かな段差がみられるもの(19・20・22~24)がある。こうした段差は、工具の尾端を打撃することによって生じたと思われる。さらに19・20~24では、研磨と思われる擦痕が溝状の工具痕を塗り消してい



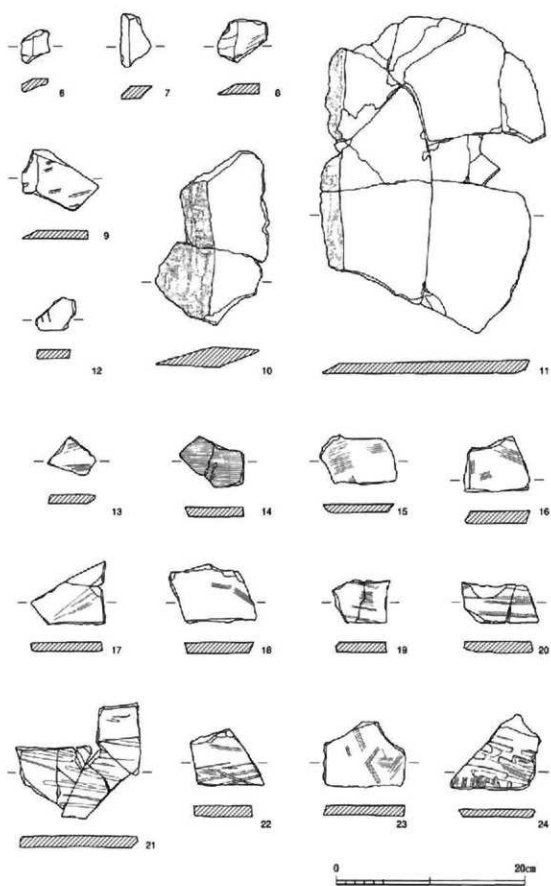
第39図 家形石棺（1）

る状況が観察される。13～18では研磨痕のみが認められる。特に、14では1面全面が細かな捺痕に被われており、丁寧な研磨を示している。

今回出土した石棺材で、こうした丁寧な研磨が認められるのは、後述する3号墳出土石棺底石の一面のみであり、他の側板・小口板等には認められない。蓋石の全容がわかる資料が出土していないことから、即断は避けねばならないが、研磨加工は、蓋上面など特に目立つ部位に施されたものであったのかもしれない。

今回の調査で、2号墳より出土した石棺材の総重量は、8.071kgほどである。重量の測定は、質量2kgを超えるものについては測定精度200gで、これ以下のものについては測定精度5gで実施した。他の古墳出土の石棺についても、測定方法は同様である。

栗田町コミュニティセンターに保管されている資料を加えたとしても10kgを超えないものと思われ、家形石棺1個体分としてはごく一部と言わざるを得ない。したがって石棺材の大部分は、破壊に伴って持ち出されたものと思われる。調査時の取材では、昭和28年ごろに行われた石室石材の持ち出しの際に、



第40圖 冢形石棺(2)

石棺が掘り出されたという情報は得られていないことから、当時すでに石棺は破壊されており、それとわかるような状況をとどめていなかったであろう。

5 出土遺物（第41・42図）

2号墳に伴う出土遺物は、以下のとおりである。

（1）土器

須恵器（坏H蓋・坏H身・坏I・輪蓋・輪・高坏・短頸壺蓋・短頸壺・長頸壺・直口壺・罎・平瓶・甕）23点

（1）土器

須恵器

坏H蓋（1～3）

古墳時代以来の受部に立ち上がりのある蓋坏のセットは、通例の器種分類にしたがい、坏Hと呼ぶ。2号墳出土の坏H蓋は、口径11.6～11.8cm、器高3.0～4.2cmである。1は天井部が扁平で、2は天井部が丸味をもっていることから、器高に差異がみられる。3も丸味のある天井部をもつものであろう。いずれも天井部と口縁部の境は明瞭でなく、口縁部を下方に屈曲させ、端部を丸く収めている。出土個体数は少ないが、天井部外面の観察できるものには、回転ヘラ削り調整を行うものがみられず、ヘラ切り後ナデ調整されているだけである。

坏H身（4・5）

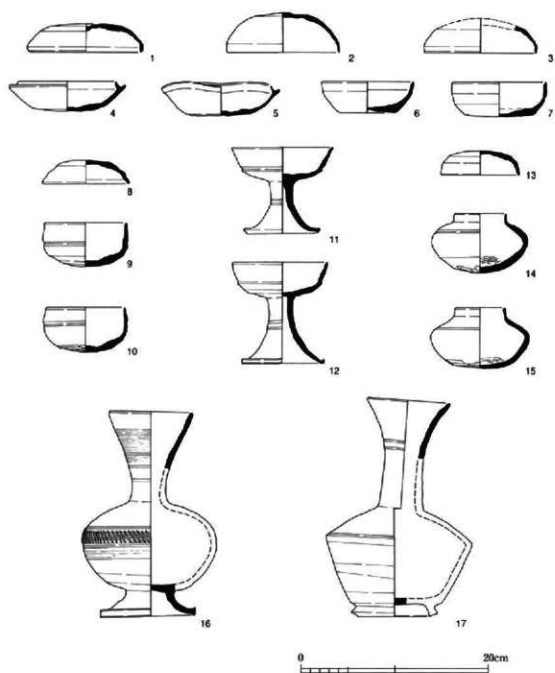
坏H身は、扁平な底部に緩やかに外方に開く体部を付ける。受部は斜上方に延び、内傾する矮小化した短い立ち上がりをもつ。口径10.3cm、受部径12.5cm、器高3.3cm、立ち上がり高0.5cm前後の法量で、小型化の傾向が著しい坏Hである。蓋との個体別の組み合わせは明らかでないが、法量からみて、蓋との組み合わせに矛盾はない。4はヘラ切り不調整であるが、5はヘラ切り後わずかにナデ調整を施した痕跡がみられる。

坏I（6・7）

扁平な底部に内彎気味の口縁部を付け、端部を内方に屈曲させているため、直立気味である。口径9.7cm、器高3.5cm前後で、いずれも底部外面は、ヘラ切りのまま不調整である。

輪（8～10）

8は口縁部が2段に屈曲し、口縁端部は内外面とも外方に開き、内面端部には緩やかな稜をもつ例の少ない須恵器である。器形の特定が困難な器種であるが、後述の輪と胎土・焼成等に類似性が認められることから、輪の蓋としておきたい。なお、昭和28年出土品にも、同器種が5個体出土している。昭和28年出土品したものを含めれば、口径9.0～9.6cm、器高2.5～2.9cmで、規格的な法量をもつといえる。第1図1は、径高指数（器高/口径×100）が31で、25～28前後の他のものと比べると、器高が高く、端部内面の突出が不明瞭であるが、同種の器形として差し支えないであろう。天井部外面は不定方向にヘラ状工具で丁寧に静止ナデ調整されている。天井部内面は、不定方向のナデ調整が施されている。輪（9・10）とした器形は、丸味をもつ底部に直立する口縁部を付ける。昭和28年にも同様の輪が2個体（第1図6・7）出土している。それらのものを合わせると、口径8.0～8.6cm、器高4.5～4.7cmである。

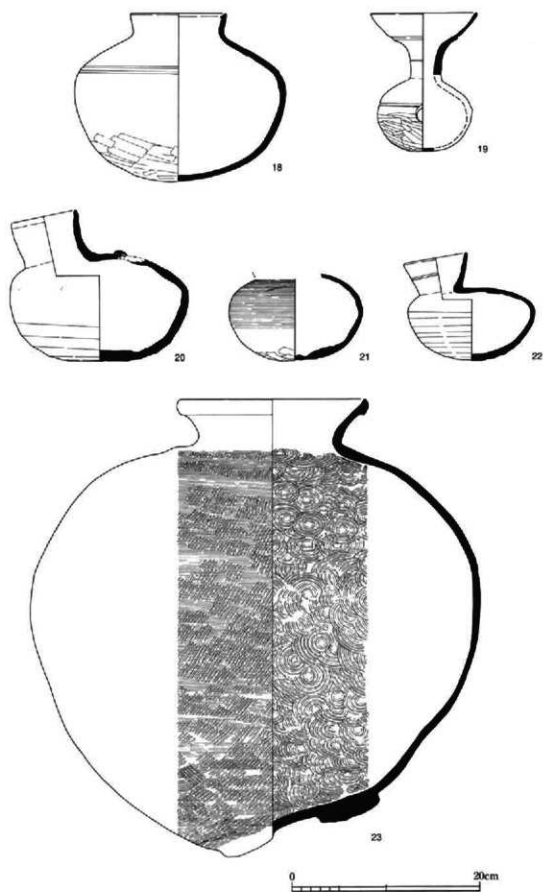


第41図 出土土器(1)

口径からすると、蓋としたものとうまく組み合う大きさである。口縁部中に1条の浅い沈線を巡らしているが、始点と終端が食い違っているものもあり、丁寧な作りとは言えない。底部外面はヘラ切り後静止ナダを施すもの(9・第1図6・7)と、手持ちヘラ削りを行っているもの(10)とがある。

高坏(11・12)

勝手野古墳群出土の高坏は、すべて無蓋高坏で、脚部の形態から大きく3種類に区分することができる。2号墳出土の高坏は、長脚の無蓋高坏のうちでも脚部が低脚化し、透かしを穿たない無蓋高坏で、便宜的に高坏Ⅱ類と呼称することにする(高坏Ⅰ類、Ⅲ類については、3号墳で記述)。脚高指数(脚



第42圖 出土土器(2)

高/器高×100)は、60前後である。2号墳出土の高坏Ⅱ類は、扁平な底部に外方に開く口縁部を付け、坏部の底部と口縁部の境は稜を突出させて段をつくる。11は稜の突出が明瞭で、口縁端部を外方に屈曲させている。胴部は底平坦し透かしはなく、胴部中央にふいふい2条の沈線を巡らしているだけである。脚端部は下方に拡張させるもの(11)と、上方に折り曲げ突出させるもの(12)がある。

短頸壺 (13~15)

13は短頸壺の蓋であろう。天井部外面は、外周に補助削り痕がみられ、不定方向の静止ナデ調整が施されている。短頸壺(14・15)は、底部と肩部は大きく屈曲させた扁平な体部に、短く直立する口縁部を付ける。体部肩中央には1条の沈線を巡らしている。底部外面は外周に補助削り痕がみられ、不定方向の静止ナデ調整を行っている。底部内面には同心円叩き目の痕跡がわずかに残っている。

長頸壺 (16・17)

16は球形の体部に端部を上下に肥厚させた低い脚部を付ける。口頸部には端部と体部との接合部付近を除いてカキ目調整が施され、下半に3条の沈線を巡らしている。体部の中央にはカキ目調整の後、2条の沈線間に右下がりの列線文が巡らされている。底部下半は回転ヘラ削り調整されている。17は底部端に近く、外方に踏ん張った高さ1.2cmの低い高台が付く。体部はいわゆる算盤玉形で、扁平な底部から屈曲した直線的な胴部と、さらに鋭く屈曲する内彎気味の肩部からなっている。直立して長い頸部に大きく開く口縁部を付け、口頸部上半に2条の沈線を巡らしている。胴部との境界付近の肩部には1条の沈線が巡り、胴部下半は回転ヘラ削り調整が施されている。

直口壺 (18)

やや扁平な球形の体部をもち、肩部には2条の凹線が巡らされている。肩部から緩やかに、短く直立する口縁部が付く。口縁端部は内傾する端面をもち、わずかに内方に肥厚させている。短頸壺に分類すべきかもしれないが、短頸壺に分類したものに比べると、大型の器形であり、口縁部が長いことから、短頸壺とは区別し、直口壺(壺Ⅱ類)とした。底部外面は不定方向の静止ヘラ削り調整を行っている。

甕 (19)

体部径を上回る口径をもつ口縁部は、頸部から大きく外反する受け口状の屈曲によって区分される。頸部と口縁部の境に沈線を巡らし、口縁端部は丸く取っている。体部は比較的球形に近く、中央に沈線を1条巡らしている。底部外面は最大径付近まで丁寧な不定方向の静止ヘラ削り調整が施されている。勝手野古墳群出土の甕のうちでは、最も大型品に属する。

平瓶 (20~22)

20は口縁部と体部の一部が、今回の調査で出土し、体部は昭和28年に出土したもので、両者が同一個体であることが判明した。体部はわずかに稜をもち、底部は平底気味である。肩部には、ボタン状の粘土塊を貼り付けている。21は全体に丸味をもつ倒卵形の体部片で、口縁部は確認できなかった。体部上半はカキ目調整が施され、底部外面は不定方向の静止ヘラ削り調整を行っている。22は扁平な肩部をもつ体部に、八字形に拡がる短い口頸部を付けている。口頸部には1条の沈線が巡らされているが、体部には加飾はみられない。底部は肩部へ屈曲する付近まで回転ヘラ削り調整を行っている。

甕 (23)

周溝に近い前庭部前方に穿たれた土坑から、破砕された状態で出土した。口径19.6cm、器高47.7cm、体部径47.5cmの中型甕である。外方に開く短い口縁部を付け、端部を上下に肥厚させている。体部外面

は縦格子叩き目の後、カキ目調整を施している。内面は、同心円叩き目が明瞭に残っている。底部外面には焼成時に付着した土器片が癒着し、焼け歪みがみられる。

6 小結

2号墳は1号墳と同様、後世の破壊が著しく、墳丘・石室ともに残存状況が悪いが、長径11.3m、短径9.0mの長円形を呈する円墳で、全長5.0m、幅1.2mの無袖式横穴式石室を埋葬施設とすると推定できる。斜面上部から下方に向かって、墳丘の約3分の2程度を巡る弧状溝が廻り込まれ、墳丘を画している。

石室は残存状況が悪く、その特徴を指摘できるほどではないが、右側壁の基底石は、高さの異なる石材が交互に使用されているようである。床面は敷石や排水溝は認められない。

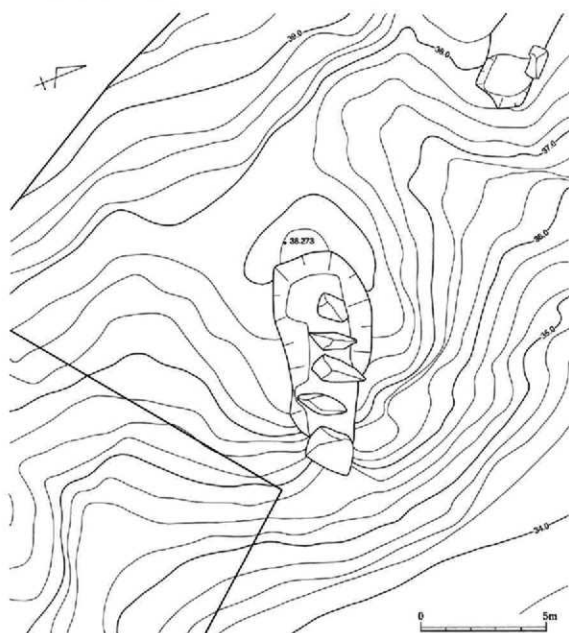
石室内には加西市高室産である家形石棺の破片が多く出土していることから、家形石棺を埋葬施設としていたことは明らかであるが、初葬か追葬のものかは定かでない。かつて、この家形石棺材は三田市・青龍寺1号墳とともに兵庫県における磚を用いた古墳として報告されていたが、今回の調査で家形石棺であることが明らかとなった。

出土遺物は、床面の2カ所から、まとまりのある土器が出土している。いずれも須恵器であり、1号墳のように土師器、鉄器等は検出されていないが、石室の残存状況からみて、その他の遺物がなかったとは言い切れない。ちなみに昭和28年には金張りの耳環が1点出土したとされており、2号墳出土の可能性が高い。出土した須恵器のうち、長瀬産は型式差を認めたいが、並び合わせるように置かれた出土状況を勘案すれば、土器自体の型式的差異と副葬時が必ずしも一致しない例も多くみられ、そのことをもって追葬を示しているとは即断できない。ただし、古墳時代以来の環蓋のセットである環Hと蓋は、立ち上がりをもたない小型の環身である環Iとが共存しないとすれば、追葬のあった可能性が高いと考えてよい。

家形石棺がどの程度の大きさであったか、どの位置に置かれていたのが全く不明であり、型式差を持つ須恵器が出土していることから、追葬が行われた可能性を考えているが、石棺がいずれであったかは明らかでない。

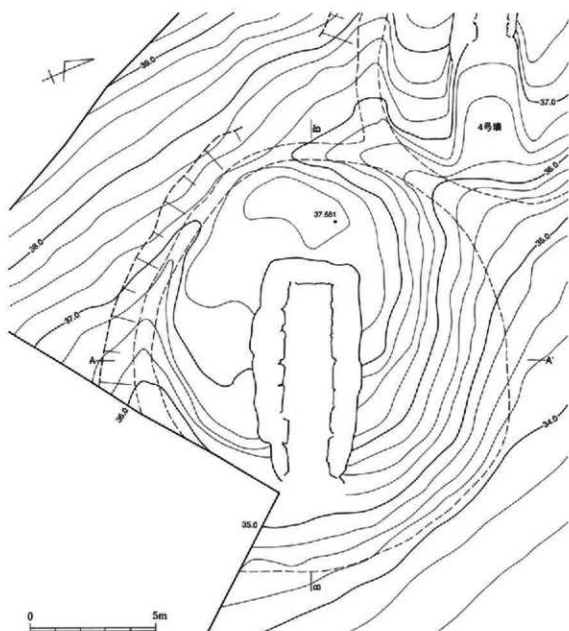
第5節 3号墳

1 墳丘 (第43~45図)



第43図 墳丘 (調査前)

3号墳は、古墳群の中央部からやや南に寄った位置にある。主として山麓斜面の裾部に築かれ、斜面下方にあたる東側墳丘端は、傾斜変換点下の段丘面に及んでいる。3号墳の背面にあたる北西側に4号墳、南側に未調査の9号墳が現し、段丘面の下方には、やや距離をおいて8号墳が築かれている。なお、墳丘の南西部分は、工事範囲外のため発掘調査を実施していない。また、3号墳西側の山麓斜面には須恵器を焼成した1号窯があり、墳丘上部を囲する弧状溝が灰塚として利用されている。勝手野禽跡群に

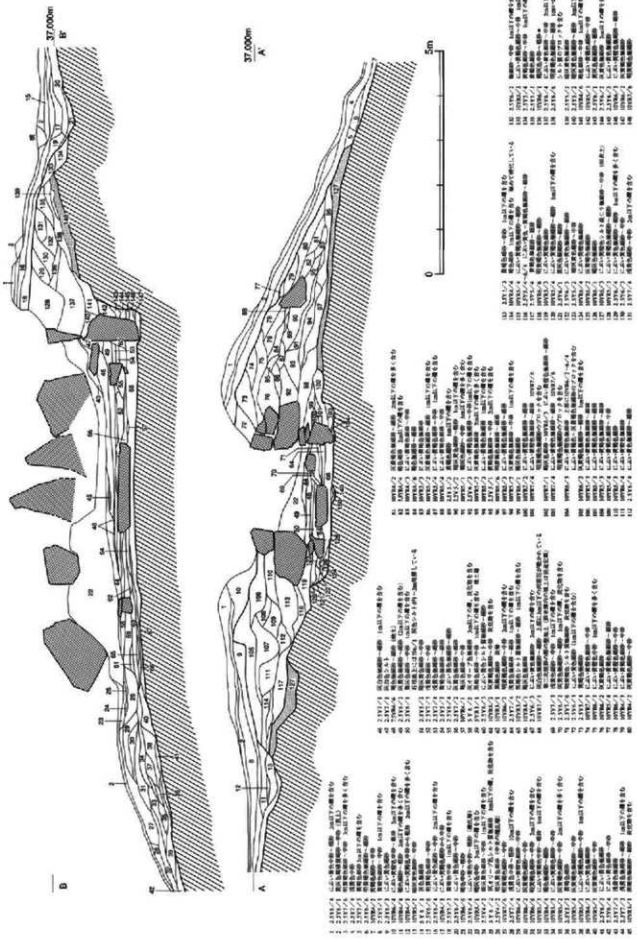


第44図 墳丘（表土除去後）

については、別に第5章で触れるので、本節では言及しない。

3号墳の墳丘及び石室は、今回発掘調査を実施した8基の古墳のうちでは、最も残存状況が良好であった。外環列石等の外表施設はもたないことから、墳丘端の確定は困難であるが、石室主軸方向にあたる長径は約16.5m、短径は14.2mほどと推定される石室主軸方向に長い円墳であり、勝手野古墳群中では墳丘規模が最も大型の古墳である。斜面上部の弧状溝底から墳丘の残存部分のもっとも高いところまでは0.5m、斜面下方の西側では推定墳丘裾から3.5mほどであり、本来の墳丘盛土のうち上半部は、後世の流失及び石材の持ち出しによる乱掘等で失われていると考えられる。

調査前の地形観察でも、明確な墳丘状の高まりが観察でき、地元の人たちから墳墓として認識されていたのであろうか、かつて墳丘上に小さな祠が祀られていたと伝えられている。これを裏付けるように



第45図 墳丘断面

墳頂部表土層からは、土師器Ⅲ・埴輪器、瓦などが出土（第137図1038～1056・1058～1061）している。墳頂部の土が近世末に掘ることが明らかで、少なくともこの時期には、なお天井石が石室内に構築されていたことが判る。調査開始当時、墳丘中央部は陥没し、5石の天井石が石室内に落ち込んだ状態であった。斜面上部にあたる墳丘西側では、墳丘を画する弧状の凹地が認められ、墳丘も他の古墳と比べ高いことから、比較的墳丘の残存状況はよいのではないかとみられた。

墳丘の南西隅は調査区外にあるため、発掘調査を行っていないが、他の古墳と同様、山麓斜面地の上方にあたる墳丘西側には、平面形が弧状を呈するように旧表土を断面縦やかなじ字形に整形した溝が掘られ、背面側と東側の墳丘裾を画していると考えられる。

墳丘の盛土は、石室の両側とも旧表土を掘り残し、その上部に直接盛土を行っている。盛土は主として斜面上部の弧状の溝の掘削土を用いたのである。盛土各層の土質にあまり差異がなく木根などの擾乱があることから分層が困難で、連続した土層堆積が観察できなかったが、原則的には黄褐色系の地山土を石室から外方の墳丘裾に向かって積み上げていることが観察できた。

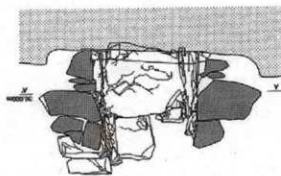
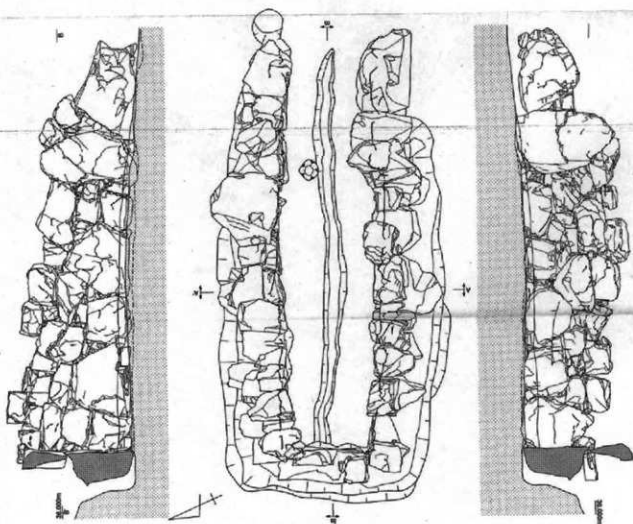
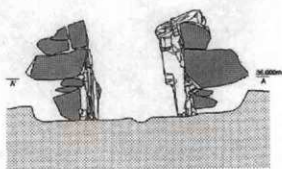
2 横穴式石室（第46・47図）

3号墳の埋葬施設は、東南東方向に開口する右片袖式の横穴式石室で、発掘調査を行った古墳では、唯一、袖部をもっている。主軸方位はS-66°16'-Eの方位をとり、等高線方向から開口部を東に傾け、斜面下方を意識した方向に築かれている古墳である。石室は天井石の一部が石室内に落ち込んでいたが、調査を行った8基の古墳のうちでは最も残存状況がよいといえる。

石室内は他の古墳に比べると埋土の堆積は多くなかったことから、おそらく近年まで天井石が残存しており、石室の空間が利用されていたのであろう。石室内の埋土は、おおむね3時期に区分することができる。22～25層は確実に近世以降の堆積土と考えられ、砲烙（第137図1067）が出土している。26・58・56・60層下面を境とする以下の土層は、中世期の再利用以降の堆積土で、須恵器の椀・鉢・皿・壺（第132図）などが出土し、竊葬の作業場として利用されていた可能性が高い。

石室の床面積は、各部位で使用された石材の凹凸が著しく正確な計測が難しいが、全長7.95m、玄室長は袖石の玄室側の端部を玄門とすれば、5.20m、羨道部として幅が狭くなった部位をとると、5.4m程度の長さとなる。奥壁幅は1.72m、玄門前壁幅2.0mである。奥壁幅が玄室幅を、袖石の玄室側端が玄室平面形を規定しているとすれば、玄室平面形はおおよそ1:3として企画されたのであろう。玄室の残りのよい奥壁付近では高さ2.35mで、天井石の残存する同規模の横穴式石室の玄室高を参考にすれば、おおむね玄室高は2.3～2.5m程度と推定され、ほぼ天井石が構築されていた付近まで残存しているのであろう。玄室床面積は、奥壁幅と玄門前壁幅を加味すれば9.7㎡ほどであるが、奥壁幅だけを考慮すれば8.9㎡程度となる。いずれにせよ、3号墳は勝手野古墳群中では最大規模の横穴式石室で、小野・三木市などの周辺地域の横穴式石室としては、大型石室の部類に属するといえる。玄室は、右側壁部のみを袖の突出幅に合わせて、玄門部に向かってやや開くように築かれているため、奥壁幅と羨道玄室部幅がほぼ同じである。袖の張り出しは30cm程度しかない。袖石は袖の屈曲は直角でなく、鈍角の石材が使用されていることから、玄室長については計測する部位で先述のとおり、20cmほどの誤差が生じる。

羨道は玄室長5.2mとすれば、左側壁で長さ2.8m、右側壁で2.6mである。幅は玄門部で1.65m、羨門部で1.6mであり、玄室長と羨道長は比率は、ほぼ2:1となっていて、玄室長に比べ羨道長は極端に



SCALE: 1/1000

短い。羨門部は左右の側壁でやや異なり、左側壁は約20cm前方に長い、右側壁では明確な石材の抜き取り痕跡が検出できなかったことや、前庭部が傾斜をもって下降すること、排水溝、遺物の検出状況からみて、現状の石室残存部分が羨門にあたると思われる。

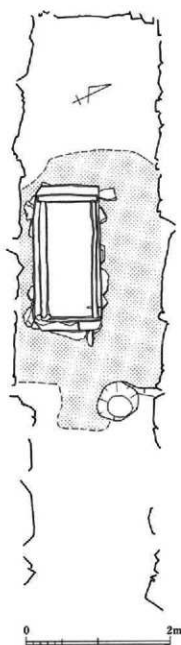
石室の石材は他の古墳と同様、加古川に囲した古墳群の位置する坊主山の南東側斜面に露頭する流紋岩質溶結凝灰岩が用いられている。石室内の石材表面は平滑にするための剝離調整が行われているが、石目に沿って剝離する特徴があり、個々の石材には凹凸が激しく、大きさや規格性に乏しい。

奥壁は基本的には2段積みであった可能性が考えられる。基底部に幅約1.5m、床面からの高さ1.2m、厚さ50~60cmの大型石を据えている。側壁の残存状況からみて、奥壁高の半分を占めていたと考えられる。基底石の上部には左側壁側に高さ0.8mほどの石材を載せているが、厚さが30cmで基底石の約2分の1程度の厚さである。2段目より上部は失われているが、側壁の状況からみて、おそらく天井石を構築する際の高さ調整のための石材が積まれていた程度であろう。

左側壁は奥壁から羨門までの基底石は、7石で構成されている。そのうち、玄室部は5石で構成され、幅1.5m程度の大振りな石材と、0.7~1.0mほどの小振りな石材を交互に据えている。奥壁から6石目は右側壁の袖石に対応する位置にあり、高さ1.7mの立柱石状の石材が据えられている。羨道基底石は立柱石を含めて2石から構成され、羨門部には大型の石材が使用されている。2段目以上は上部に行くにしたがって石材が小振りとなる傾向がみられる。基底石に高低差があるため、2段目以上にも目地が通っている部分は認められないが、構築順序からすれば、奥壁から玄門に向かって傾斜するような順序で石材が積み上げられていることが観察できる。

右側壁は袖石によって玄室と羨道に区分され、玄室部の基底石は5石で構成されている。奥壁側の第1石は左側壁と同様、高さ1.3mの大型の石材を縦積みしている。この第1石目は玄室床面内側にせり出していることから、奥壁部の幅は玄室のその他の部分の幅に比べて30cmほど狭くなっている。基底石第2・3石目は高さ0.8~0.9m程度、第4・5石は0.6~0.5mと、玄門方向に行くにしたがって小型化の傾向がみられ、左右側壁で使用された基底石の石材の大きさが異なっている。壁体は3~4段目まで残存しているが、使用された石材が左側壁とは異なり、大きさの揃った石材が用いられ、目地を通そうとする意図がうかがわれる。袖石は高さ1.9mの立柱石で、袖部は袖石の形状から直角に折れ曲がらず、玄室側壁との角度は約130°で鈍角となっている。このため、玄室部と玄門部との間には約0.2mのズレが生じている。羨道は袖石を含め2石で構成され、羨門の石材は長さ1.6mの大型石材を用いているのは左側壁と同様である。

墓壇場方は、隅円のコ字形に掘り込まれ、幅約4m、深さは最も深く掘り込まれている奥壁背面部で1.1mを測り、石室床面が台状に掘り残されている。玄室床面は2面が検出された。初葬時と考えられる第1次床面は、直接、地山面を用いている。この第1次床面には奥壁中央部を起点とし、袖のある右側壁に平行して玄室中央部に幅約50cm、深さ10cmの断面が緩やかなU字形を呈する排水溝があり、羨道側壁が終わる羨門で途切れ、前庭部には延びていない。石室床面中央を通す意図があったとみられ、玄門付近で彎曲させ、羨道床面中央部を通してしている。玄室第1次床面の上部は、厚さ10cmのよく締められた粘質の敷き土が置かれ、その上面に径5cm前後の円礫を交えた砂利を敷いて敷石とし、第2次床面を形成している。敷石下から馬具、須恵器の出土があるので、追葬の際に敷かれたものであることが明らかである。3号墳玄室の敷石は、円礫が使用される割合は少ないことから砂利敷と呼ぶ方がよ



第47図 敷石残存状況(網点部)

は後世の破壊のため明らかでないが、復元長は85cmほどと推定される。重量は、直接測定することができなかった。体積の測定も困難なため正確な値とは言い難いが、複数の底石破片で測定した乾燥比重である 2.02 g/cm^3 を平均断面法によって求めた底石の概算体積 $290,000\text{ cm}^3$ に乗じた結果、580kg前後の値を得ている。実際の乾燥重量は、これよりやや少ないのではないかと推測している。平面形は、概ね長方形を呈するが、羨道側の両端と奥壁側の側壁側端は面をなすように隅切りされている。

底石は羨道側の小口部を、後世の破壊によって失っているが、底石上面の4周には側石、小口石を

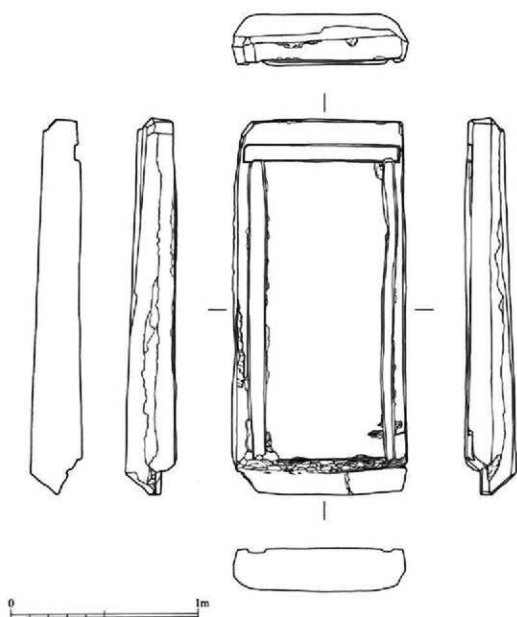
く、敷石と呼ぶには異質である。敷石の残存部分は支室の約3分の2にすぎないが、本来、支室奥壁側にも敷かれていたのであろう。この敷石上には、右側壁に沿わせ、支室の中央からやや玄門に寄った位置に支室主軸方向に向けた組合式の家形石棺が埋葬されている。家形石棺は底石しか残存していないが、石棺底石の下部周囲には、20~50cm程度の板石をかませるように置き、石棺の安定を図っている状況が観察できた。石棺は後世に移動された痕跡はなく、当初の埋葬位置のままであると考えられる。

3 家形石棺 (第48~52図)

支室右側壁に沿って設置された組合式家形石棺1基が検出された。石棺は右側壁から20mほどの間隔を空け、奥壁から小口までは2.3m、玄門から小口までは0.9mを測り、支室内でもやや羨道寄りに据えられていることになる。側石・小口石・蓋石は、奥壁側小口石基部端が、底石の嵌込溝内に残存していたのを除き、完全に破壊されているが、構成部材の残片が石室内外から出土し、そのうち支室内から出土した小口石片は、わずかに残存していた小口石と接合した。底石四周には、棺の安定を保つために置かれたと思われる20cm程度の流紋岩質溶結凝灰岩の板石が敷かれていて、底石自体は後世に移動はなかったものと判断された。底石は比較的締まりのよい流入土に被覆されていたが、棺床直上で平安時代後期の須恵器筒が出土したことから、窟跡の作業場として石室を利用した際に、底石を除いて破壊されたものと思われる。また、底石の羨道側小口部の上面には、手斧状の工具によって、削り取られた痕跡がみられた。

底石 (第48図)

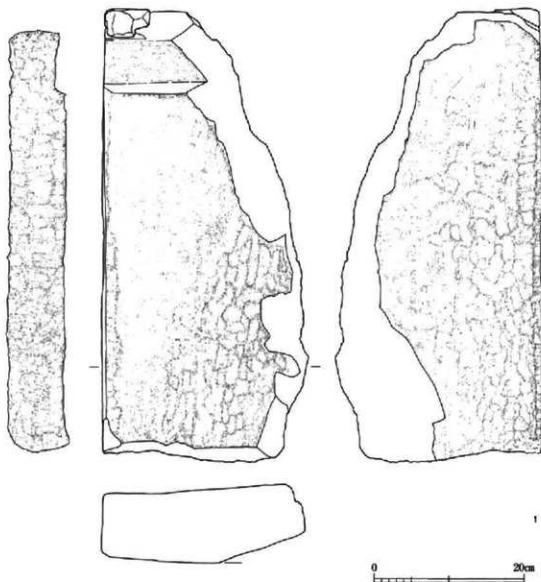
底石は、一般的に「高室石」と呼ばれる加西市高室産の流紋岩質凝灰岩を用いた1枚の板石からなり、最大長199cm、奥壁側小口幅80cm、最大厚27cmを測る。なお、羨道側小口幅



第48図 家形石棺意石

嵌め込むための溝が彫り込まれていたと考えられる。側板の溝は、直線的でない部分があり、幅も一定しない部分が見られる。特に、左側壁側の溝は彎曲部があり、予め製作されていた側板の形状に合わせて、溝幅などを調整したものであろう。両側石と小口石の嵌込溝には、1cmほどの段差があり、小口石の溝が一段、深く彫り込まれ、切り合い関係から、少なくとも両側石溝が奥壁側小口溝より後に彫り込まれていることが判明した。残存する3方の溝は右側壁側で、残存長157cm、上幅7~10cm、下幅6~8cm、深さ3.3~3.8cm、左側壁側は、残存長159cm、上幅6cm、下幅4~5cm、深さ2.3~3.3cmで、奥壁側小口溝は、長さ83cm、上幅9cm、下幅8cm、深さ1.9~2.6cmである。嵌込溝外縁よりも、棺床面側が1~8mm高く作られている部分ほとんどで、棺床面の方が低い部分はわずかである。

石棺の断面形は、平底の船底形を呈し、最大厚は27cmを測る。棺側面から底面に至る部位には、多数



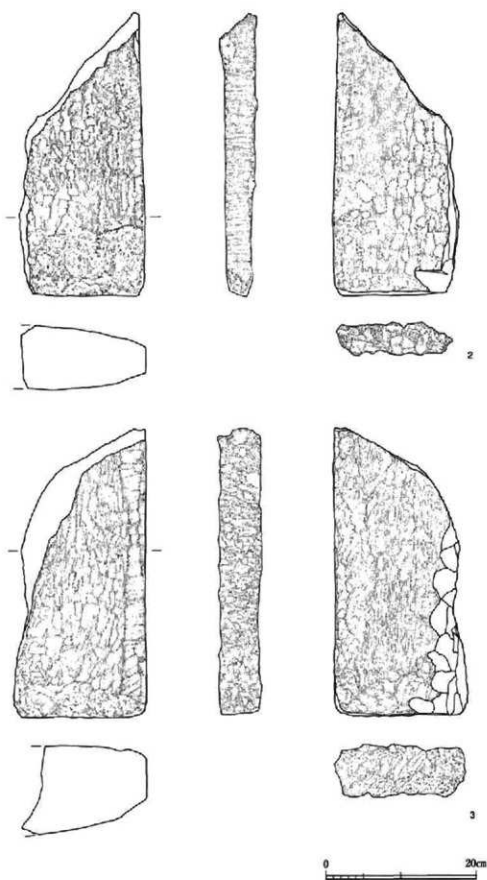
第49図 家形石棺（1）

の深く粗い工具痕が残されており、棺の整形というよりは棺材の切り出しを想起させる。底面には加工痕はまったく認められず、岩脈から業理に沿って剥離した状況を示している。

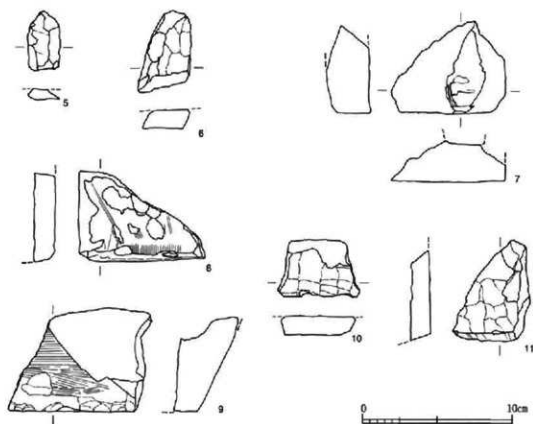
棺上面には緩やかな凹凸が存在し、これを平滑に調整するための工具痕が部分的に明瞭に認められる。棺上面は工具痕部分を除けば、平滑に仕上げられており、痕跡は識別できないものよく研磨されている。底石側面には多数の工具痕が認められる。特に、玄室側面は極めて丁寧な仕上げが施されており、対面する側面に接する側面が粗い加工しか行っていないのと好対照をなしている。石棺を据え付ける位置が、予め石棺生産時に定められていたとは考え難く、石棺を据え付ける際に視覚的に目立つ側面を丁寧に処理したものと考えれば、石室内に石棺を据え置いた後に、石室内において最終的な仕上げを行ったものと考えられる。

その他の石棺材（第49～51図）

石室内及び前庭部から、細かく破砕された多数の棺材片が出土した。石材は底石と同様、すべて加西



第50回 冢形石棺(2)



第51図 家形石槽 (3)

市高室産の流紋岩質凝灰岩製である。出土した棺材片は、想定される棺材全体からすると極めて少量で、蓋石は破片すら見出せなかったことから、石材の多くが遺跡外に持ち出されたものと思われる。

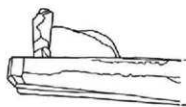
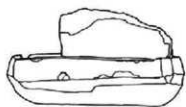
なお、この項では、出土した棺材片の特徴のみを記述し、工具痕跡の観察の詳細については、第9章第5節で触れることとし、ここでは詳しく述べない。

1は側石破片で、破断面から人為的な打撃による破壊と推定される。側石を底石溝に嵌込む部位は、石材中央部より厚みを減らすように面取りがなされている。材の内外は不明であるが、図の表裏両面及び下面に工具痕が、顕著に認められる。

2も側板破片であるが、石材の形状と大きさから、左側板奥壁側と判断される。1と同様、棺材を底石溝に嵌込む部位は、石材中央部より厚みを減らすように面取りがなされており、この部位には工具痕が顕著に観察される。片面からの人為的破壊を受けている。

3は奥壁側小口板である。石棺底石上に残存していた小口石端の小破片と接合することから、元の位置を確定することができた。表面には、工具痕が顕著に認められる。側石を嵌め込むための上幅約7.6cm、下幅約6.8cm、深さ約1.9cmの溝の一部をとどめており、ここに前述2の側板が嵌め込まれていたものと思われる。破断面の形状から、棺内側から外側に向かった打撃により破砕されたものと判断される。

4(図版78)は、3号墳に近接する、勝手野遺跡上層の土坑1より出土した。1面に側板嵌込溝が穿たれており、小口板の一部と判断された。奥壁側の小口板は石室内で出土していることから、後遺側の



第52図 家形石棺組み合わせ復原状況

小口板と考えられる。石棺小口側は、破壊の程度が著しく、石棺材の大部分が、破壊された後に石室外へ搬出されている。本資料の出土状況からも、こうした破壊の一端を読み取ることができよう。

5・6は表面が剥落した石棺材の一部で、部位の特定は困難である。表裏とも多方向からの剥落面に覆われており、石棺破壊の激しさを示している。このような部位不明の破片は、図示したほかにも多数出土しているが、石棺全体の推定重量には大きく及ばない。

7は嵌込溝をもつことから、小口板と考えられるが、厚さが奥側側小口石と大きく異なることから、羨道側小口板の破片と考えてよからう。器表面には工具痕が明瞭に認められる。

8は表裏ともに平滑に仕上げられた破片である。小口板・側板に比べ著しく薄く、部位は不明である。

9は大型の破片であるが、部位を示す特徴は認められない。

側板の一部かと思われる。

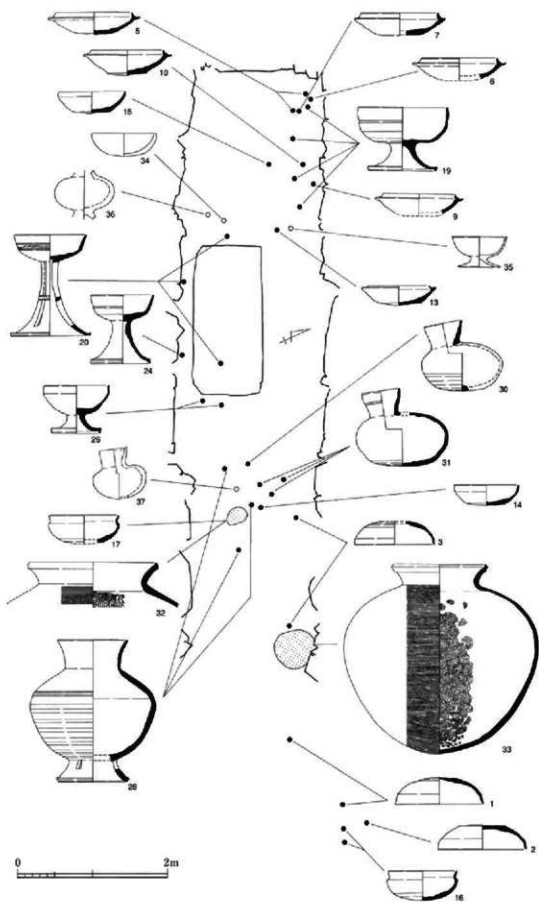
10・11は表裏ともに剥離している。石棺破壊の際には、こうした破片が多数発生したと思われるが、調査で出土した数量は多くない。なかに石棺底石との接合する小片がある。

12(図版79)も業理に沿って剥落したもので、部位は不明である。片面に工具痕の密集した凹部をもち蓋石と考えられなくもないが、他に類似の破片を見出すことができず、部位を特定しがたい。

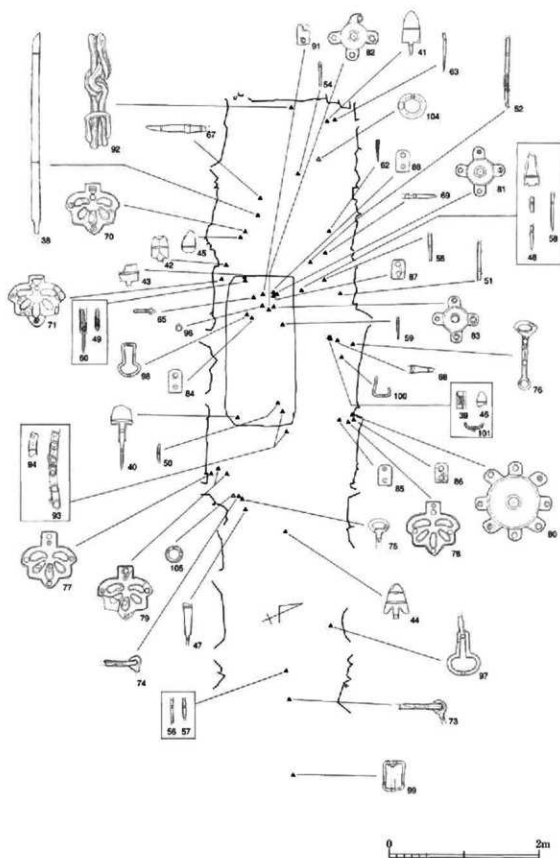
3号墳より出土した石棺材の重量は、底石を除いて45.207kgである。側板・小口板がおよそ4分の1にも満たない出土量であることを勘案し、蓋材が底石と同様の規模をもつと仮定すれば、石棺総重量は1.2~1.5tに達することになる。

4 遺物の出土状況(第53~56図)

石室内擾乱土中から、古墳時代の土器等が検出されているが、二次的に移動したものであろう。石室床面と考えられる敷石面では、玄室の右側壁に接するように、家形石棺の底石が検出された。石棺の側板・蓋石等はすでに失われているものの、底石は周囲に安定を図るための石材が詰められている状況がみられ、元の位置を保っていると考えてよい。この石棺の玄門側小口部は、破損された痕跡が認められ、底石以外の家形石棺片は、小口石・側石・底石などが残片となって石室内各所から出土しているもの、出土した石材片の総量は石棺1基分に満たず、石材の大部分は古墳外へ持ち出されたものと思われる。なお、3号墳丘陵裾部の腐跡群に関連するとみられる土坑1から、3号墳のものと思われる小口板の破片が出土している。石棺底石が後世に破壊もしくは移動されなかったことは、腐跡の作業場として利用するために、あえて破壊しなかった可能性が高い。石棺周辺からは、平安時代後期の須恵器が出土したほか、玄門付近から羨道部にかけて、再利用時の擾乱が著しく、床面に土坑状の掘り込みがみられた。玄室部では中世の遺物は希薄であったが、古墳時代の遺物は散乱した状況で検出されており、やはり腐跡形成の時期に擾乱を受けているものと判断された。また、この面では、刀・鍔等の武器類、馬具類が



第53圖 土器出土状況（模式圖：土器1/8）



第54図 鉄器出土状況 (模式図：鉄器1/4・38：1/8)

検出されたが、馬具類は、後に触れるように、石棺下層からも出土したことから、本来、第1次床面に伴うものであり、第2次床面上の石棺の設置に伴って移動された後、さらに後世の擾乱によって移動されたものと判断される。

敷石及び家形石棺を除去したところ、その下層から遺物が出土し、第1次床面が存在することが明らかとなった。この第1次床面には、奥壁に近い左側壁に沿って、破砕された坏H(5・7)・脚付椀(19)などの須恵器が出土し、まとまりのある型式を示している。第2次床面形成時に掻き出された遺物のうち、比較的元の位置に近い部分に取り残されたものではないかと推測される。

石棺周辺及び底石下部から、高坏(20)、金銅製の馬具などが出土した。3号墳出土遺物のうち、特徴的な馬具は石室内各所から散乱した状況で出土している。奥壁に沿って甕を構成する兵車鎖(92)、玄室右側壁側では奥壁と石棺の中間で鏡板(70)、右側壁と石棺長側壁の間で、鏡板(71)、石棺底石下面の奥壁側で、辻金具(81~83)・鉸具(98)・革金具(84・87・88・91)、玄室側で鞆金具(93)が出土した。このほか石棺底石下からは、鏃(40・43・49・50・59・60)、弓鏃金具(65)などが出土している。玄門部袖石付近では杏葉(77・79)、轡組連部(74・75)のほか、耳環(106)、鏃(47)がみられた。左側壁側では、玄室中央部で、轡の引手(76)、鉸具(100)が、玄門寄りでも、杏葉(78)・雲珠(80)・革金具(85・86)がまとまりをもって出土している。後室部では、敷石が存在しなかったことと、擾乱等によって、層位的に不確かではあるが、鞆(97)、轡組連部(73)が出土している。金銅製の馬具のうち、少なくとも鏡板と杏葉及び雲珠と辻金具は、同一の意匠を有しているものであり、セット関係にあったと考えられるが、玄室内の各所に散乱している。それ以外の馬具類は、さらに石室内のほか、前庭部の広範囲に散乱している状況にある。少なくとも金銅製馬具類は、1セットをなしていたものと考えられる。他の馬具類がセットとして存在していたとすれば、甕が奥壁に沿って出土していることから、少なくとも馬具類は、初葬に伴って、奥壁付近に置かれていたのではないかと推定される。

第1次床面では石室主軸線に沿うように排水溝が検出され、その埋土中から、辻金具(81~83)・革金具(88)などのはか、土器片が出土し、追葬による第2次床面形成時には、排水溝がまだ溝として機能していたことが考えられ、初葬と追葬の時間差が近接していたことを示している。

以上のように、初葬の一部を除いて、古墳時代の遺物の大部分は、副葬位置を保っているものはないと考えられる。

後門の左側壁に接して、甕(33)が破砕された状況で検出された。甕は径50cm、深さ10cmの円形の浅い土坑内に埋置されていた。甕底部は土坑底に接して検出され、各破片も押しつぶされたような状況で出土していることから、意図的に破砕されたものではなく、浅い土坑状の掘り込み上に立位で据え置かれていたとみられる。出土位置は異なるが、2号墳でも、前庭部から甕が据え置かれた土坑が検出され、さらに、5号墳でも同大の甕が出土していることから、埋葬儀礼として後門部あるいは前庭部に、甕が供献されていたのであろう。

5 出土遺物(第57~63図)

3号墳に伴う遺物は、以下のとおりである。

(1) 土器

須恵器(坏H・坏I・鉢・脚付椀・高坏・短頸密蓋・台付直口壺・壺・平瓶・甕)



	33点以上
土師器(坏・高坏・長頸壺・平甗)	4点以上
(2) 武器・工具(直刀・鉄鏃・弓筒金具・刀子)	32点
(3) 馬具(金銅張鏡板付轡・轡・金銅張容業・金銅張雲珠・金銅張江金具・金銅張革金具・絞具・金銅張鞍鏡金具・鞍金具・兵庫鎖)	32点以上
(4) 装身具(銀張耳環)	2点

(1) 土器

須恵器

坏H蓋(1~4)

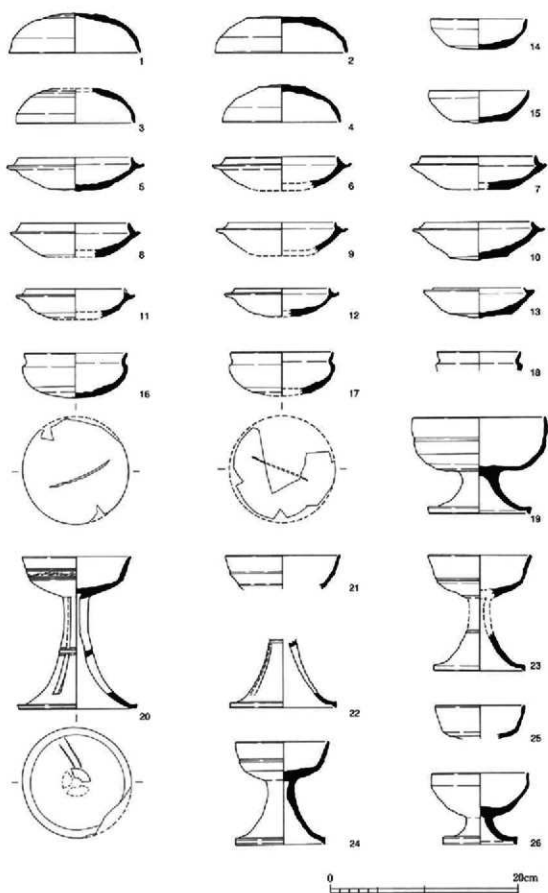
古墳時代以来の受部に立ち上がりのある坏H身とセットとなる蓋である。出土個体数が4個体と少ないが、口径には大小2種がみられる。1・2は口径13.7~13.8cm、器高4cm前後のもので、天井部と口縁部の境は明瞭でないが、端部を内方に屈曲させる口縁部を付けている。1は3とともに、天井部がやや丸味をもち、天井部を回転ヘラ削り調整している。勝手野古墳群出土中の坏蓋で回転ヘラ削り調整がみられるものは、7号墳出土の坏H蓋の2点を合わせても4点にとどまり、勝手野古墳群出土の須恵器型式を考える上での重要な要素であろう。2はヘラ切り不調整であるが、天井部外周に補助削り痕が残っている。3・4は口径が一回り小さく、12.5cm前後、器高3.8cm前後である。4の天井部外面はヘラ切り後ナデ調整が施され、内面には不定方向の仕上げナデがみられる。

坏H身(5~13)

受部に矮小化した立ち上がりをもつ坏Hが、少なくとも図示した9個体分を確認することができた。図示した坏H以外にも図化できなかった小片が存在することから、さらに1~2個体程度の坏Hがあったとみられる。扁平な底部に緩やかに外方に開く体部を付け、受部は斜上方に延び、内傾した短い立ち上がりをもつ。口径は9.6~12.1cm、器高3.0~4.0cm前後で、底部外面に回転ヘラ削り調整を行うものはみられない。3号墳の坏Hは、およそ3種に細分することができよう。5~7は口径12cm、受部径14.7cm、器高3.5cm、立ち上がり高0.9cmほどで、最も大きな口径をもつ。底部外面はヘラ切り不調整のままのものとヘラ切り後仕上げナデ調整を施しているものがみられる。7は確実に内面に不定方向の仕上げナデ調整を行っている。8~10は口径11.3cm、受部径14.0cmで、5~7に比べると、一回り小型化している傾向がうかがわれる。ヘラ切り不調整のままのものとヘラ切り後ナデ調整を施しているものがある。ただし、これら2種に調整手法に変化がみられないことから、細分にせずに一群のものとするほうがよいかもしれない。また、坏H蓋の大型品としたもの(1・2)と組み合わせる口径をもつ坏Hが存在しないことも注意される。ただし、坏H蓋の小型品のもの(5・6)と9・10は、胎土・色調に類似性があり、生産時のセット関係にあった可能性が高いことが指摘できる。11~13は口径10cm以下、受部径12cm前後で、勝手野古墳群出土の坏Hのなかでは、最も小型品である。特に12は口径9.6cm、立ち上がり高も0.3cmで、小型化の傾向が一層顕著である。なお、これに組み合わせる蓋は、出土品中では認められなかった。

坏I(14・15)

扁平な底部に内彎気味の口縁部を付け、端部を屈曲させることで直立気味となる。口径10cmほどの小



第57圖 出土土器 (1)

型品で、底部外面はヘラ切りのまま不調整のもと、ヘラ切り後ナデ調整を行うものがある。

鉢 (16-18)

丸味をもつ底部に、短く外上方に延びる口縁部を付けるもので、短頸壺に含めるべきかもしれないが、口径に対して器高が低いことから貯蔵具とはせず、本報告では鉢と呼称する。比較的類例の少ない器種である。16・17は口径10.8cm、器高4.7cm前後とはほぼ同一の法量で、底部外面を回転ヘラ削り調整が施した後、底部中央付近に1本線のヘラ記号を付けている。胎土・色調も酷似していることから同一産地の可能性が高い。18は肩部の屈曲が明瞭であるが、小片のため、口径、縮き等の復元に不安が残る。

脚付椀 (19)

口径13.9cmの椀に短い脚部を付けている金属器写しとされる須恵器である。非常に堅緻に焼成され、椀部に焼けひずみによる亀裂が走っている。椀口縁部中央には1条の沈線が巡っている。底部外面は丁寧な回転ヘラ削り調整が施され、内面には不定方向の仕上げナデがみられる。脚部は高さ4.4cmと短いが、外唇気味に大きく開き、端部を下方につまみ出して端面を作っている。

高坏 (20-26)

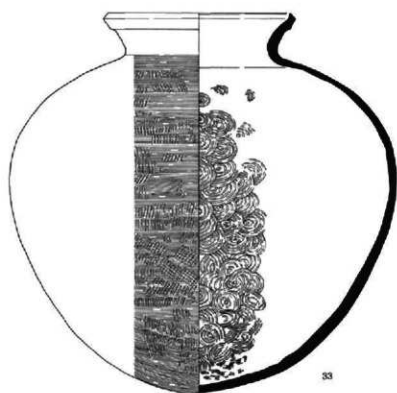
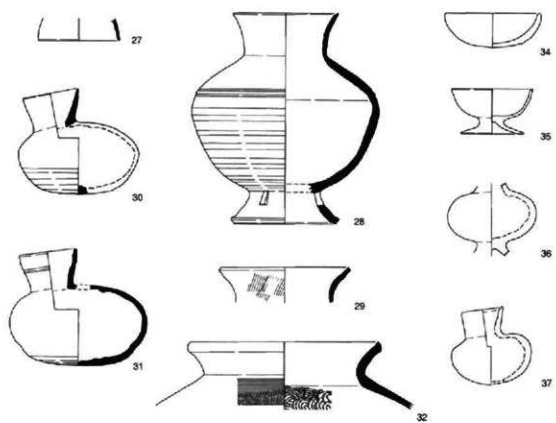
いずれも無蓋高坏であるが、脚部の形状から3種に区分することができる。20は長脚2段3方透かしの無蓋高坏で、高坏Ⅰ類とする。高坏Ⅰ類の出土した古墳は3号墳のみである。坏部は口径11.4cmと小型で、底部と口縁部の境は沈線によって区画され、屈曲させて真直ぐ外上方に延びる口縁部を付ける。口縁部中位にも沈線が巡らされ、沈線面を斜行列線文で飾っている。脚部は高さ11.8cmで2段に穿たれた透かし間には2条の沈線を巡らしている。脚端部はわずかに上方に拡張させ、端面を作っている。22は同様に長脚2段透かしの高坏脚部片であろうが、小片であり脚径、縮き等に不安が残る。また、透かし間の残存状況から、3方透かしと復元したが4方透かしかもしれない。21も小片のため、全体の形態は明らかでないが、内唇しながら外上方に延びる口縁部外面に2条の突出した稜を作り出している。形態からみて高坏の坏部であろうと考えられる。なお、胎土、色調からすれば、22と同一個体の可能性も考えられる。23・24は高坏Ⅱ類である。23は坏部と脚部片であるが、胎土・色調からみて同一個体とした。ただし、器高については不安が残る。坏部は底部と口縁部の境を1条の沈線を巡らすことで区分している点は、2号墳出土の高坏Ⅱ類とは異なり、後出的な要素がみてとれよう。脚部は端部を下方に拡張させ端面を作る。脚筒部には1条の沈線が確認できるが、複数条であるかもしれない。24は口縁部中位に1条の沈線を巡らしている。脚筒部はやや太く、筒部の沈線はみられない。25は底部と口縁部の境は屈曲するが、沈線は巡らされていない。坏底部外面は回転ヘラ削り調整を施している。小片であるが、脚部の接合痕跡がみられることから高坏であろう。端部は内方に肥厚させている。26は器高の高い坏Ⅰの形状に似た坏部に、高さ3.0cmの短い脚部を付ける脚高指数40ほどの無蓋高坏で、高坏Ⅲ類に区分される。坏部の屈曲させた口縁端部は、わずかに外反し、底部外面は回転ヘラ削り調整されている。脚端部は下方に拡張させている。

短頸壺 (27)

小片であるが、器形、復元口径からみて短頸壺の蓋であろう。口径8.5cmで、比較的高い器高をもつと考えられる。

壺 (28・29)

28は脚付の壺である。外反する口縁部とやや肩の張った球形の体部に外反する短い脚を付ける。短頸



第58圖 出土土器 (2)

壺を含めてもよいかもしれないが、比較的長い外反する口縁部をもつことから異なる器種として扱い、直口壺とする。体部の肩付近には2条の沈線が巡らされ、下半部は丁寧な回転ヘラ削り調整が行われている。脚部は径10.8cm、高さ3.3cmと短く、体部に接して方形の透かしは3方に穿たれている。脚端は上方に肥厚させ、面を作っている。29は壺の口縁部片であろう。復元口径13.4cmで、端部は内方にわずかに肥厚させ端面を作っている。器表には縦方向のハケ目痕がみられる。

平瓶 (30・31)

丸味をもつ倒卵形の体部に真っ直ぐ上方に開く口縁部を付ける平瓶である。30はやや肩の張った体部の下半部を回転ヘラ削り調整している。口縁部は外上方に真っ直ぐ開き、端部は丸く収めている。31は肩部の屈曲がなく、緩やかに底部から肩部に移行する体部をもつ。底部にのみ回転ヘラ削り調整を行っている。口縁部は直立気味で、中位に1条の沈線を巡らし、端部は丸く収められている。

壺 (32・33)

中型壺が2個体ある。32は口縁部付近の破片のみであるが、外反気味に開く口縁部は、端部を内側に肥厚させ、丸味をおびた端面を作っている。体部は外面を縦格子叩き目の後、ハケ目調整を行い、内面は同心円叩き目痕が残る。口径が33と類似しており、ほぼ同法量の体部をもつとみられる。33はほぼ完形に復元できた個体で、外反気味に開く口縁部端を内側に鋭く肥厚させ内彎する端面を作る。体部外面は32と同様、外面を縦格子叩き目の後、カキ目調整を行っている。内面は同心円叩き目痕が残る。

土師器

坏 (34)

球形を呈する胸形の器形であるが、本報告では坏と呼称する。器表の摩滅が著しく調整は観察できない。底部に比べ口縁部はやや器壁が厚く、端部は丸く収めている。

高坏 (35)

坏部は扁平な底部から緩やかに外上方に延び、大きく開く短い脚部を付ける小型の高坏である。器表の摩滅が著しく調整手法は観察できない。器壁は本来、もう少し厚手であったとみられる。

長頸壺 (36)

口縁部・脚部ともに欠損しているが、倒卵形の体部をもつ長頸壺と考えられる。器表の摩滅が著しく調整は観察できない。図示した以外にも異なる土師器の脚部が数個体別に確認でき、他に脚付長頸壺があったことが考えられる。

平瓶 (37)

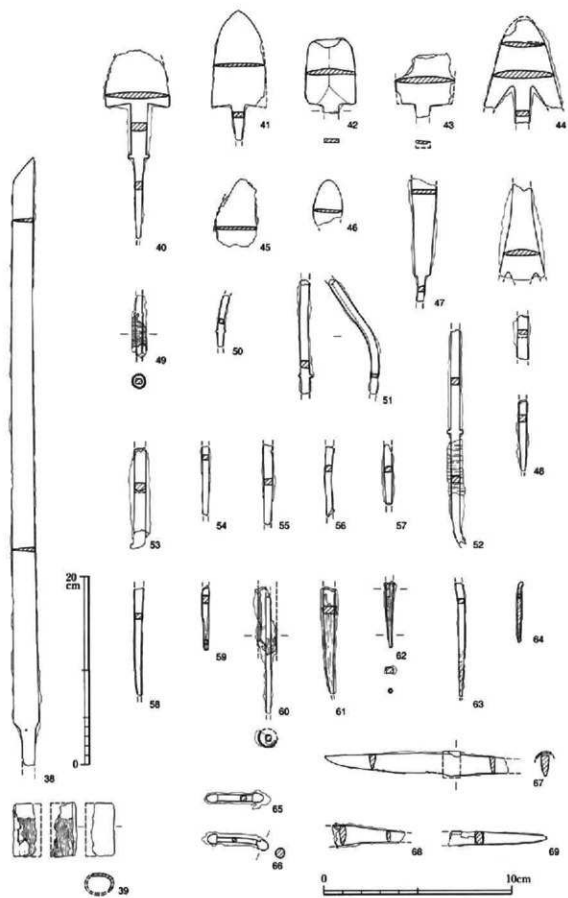
1号墳出土の平瓶に比べ、外方に開き気味の短い口縁端部の内方をナデによって面を作っている。

器表の摩滅が著しく、調整は観察できない。

(2) 武器・工具

直刀 (38・39)

基部先端を欠損しているが、残存長64.4cmの両関形式の直刀である。切先から関までの長さは、59.7cm、刃幅は切先付近で2.3cm、関付近で2.7cm。断面は二等辺三角形の平造りで、背幅0.5cmである。茎部は残存長4.2cmで、先端を欠損している。関部に目釘穴が1穴確認できる。なお、刀身からは遊離しているが、関部に装着されたとみられる長さ5.7cmの楕円形を呈する鞘口金具の残片 (39) がある。外面には鞘の木質が付着している。



第59圖 出土鉄器 (1)

鉄錘 (40~64)

鐵身の形態の確認できるものは、すべて平根系の鉄錘 (40~48) であるが、完存するものはない。49~64は頭部もしくは茎部片で、棘状突起あるいは矢柄が残存し確実に錘と判断できるもの (49~52・60) 以外は、他種類の鉄器の可能性もある。鐵身部が残存している鉄錘では、40~43は三角式錘、44は扇状式三角形式錘で、いずれも断面は薄い凸レンズ状を呈する。40は頭部があり、茎部との境に棘状の突起をもつ。47は鐵身先端を欠いているが、方頭式の可能性がある。48はどの形式の鉄錘か判断に苦しむが、鐵身部の形状はX線の観察に基づいたものである。同一個体と考えられる茎部片が付近から出土しているが、茎部長は明らかでない。49~64は錘の頭部あるいは茎部としたものである。51・52は長い頭部をもつことから、尖根系の長頭錘の可能性もある。63・64は木質が残存していることから鉄錘としたが、先端部が極めて細いことから、鉄錘でないかもしれない。

弓筋金具 (65・66)

弓筋金具と推定される鉄器が2点出土している。65は全長3.1cmで、長さ1.9cm、径0.4cmの細い鉄棒の両端に幅0.5cmの半球状の頭部が付く。66は折れ曲がっているが、全長3.3cmで、長さ2.3cm、径0.2cmの中軸の両端には幅0.5cmの半球状の頭部を付けている。いずれも錆化による膨張のため木質等の観察はできなかった。

刀子 (67~69)

刀子の残片が3点出土している。67は茎部を欠損するが、比較的残りのよいものである。残存長9.8cmで、刃部長は6.5cmで、断面は二等辺三角形を呈し、刃幅は基部で1.1cm、背幅は0.3cmである。根部に幅0.9cmの貫金具が残存している。茎部は背部側でやや幅広い台形状を呈する。67・68は茎部片であろう。

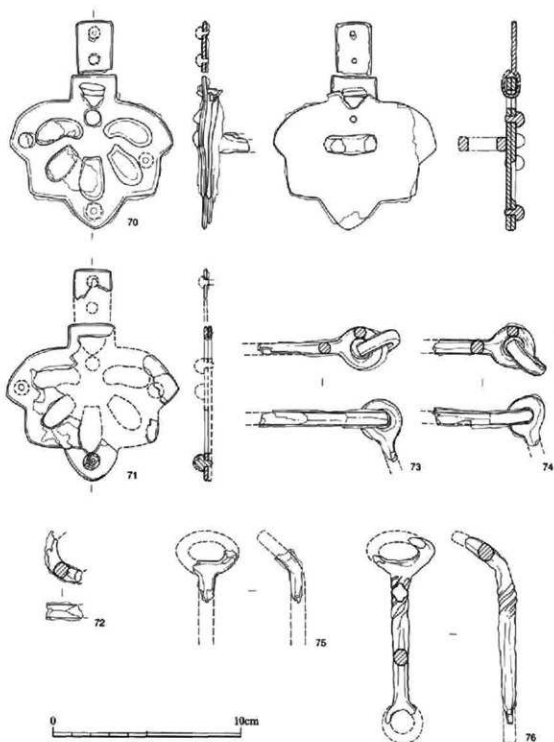
(3) 馬具

鏡板付轡 (70~76)

轡には金鋼張鏡板と吊手金具・銜・引手・銜連結環の残片が出土している。銜の残片は同形のもものが2組あり、出土状況、セット関係から金鋼張鏡板・吊手金具・銜・引手・銜連結環は1組のものと考えられるが、銜が2セット存在する可能性も否定できない。

ほぼ同形・同大の鉄地金鋼張の鏡板 (70・71) は左右1組のもので、同形の意匠をもつ杏葉と共作りのセットとなっている。全高8.2cm、長方形立開を除く高さは6.9cm、幅8.7~9.1cmで、形状は例のない五弁の楓葉状を呈し、文様板の上部には左右対称に彎曲した長楕円形の凹文が2カ所と、下部には隅を切った長楕円形の凹文が3カ所配されている。70には、裏面中央に銜の連結環とみられる環状の鉄軸が残存していることから鏡板と判断した。71は地板がなく文様板片しか残存していないが、立開の形状からみて70とセットとなる鏡板であろう。また、72は断面形状からみて、71の裏面に付く銜連結環の残片の可能性が高い。

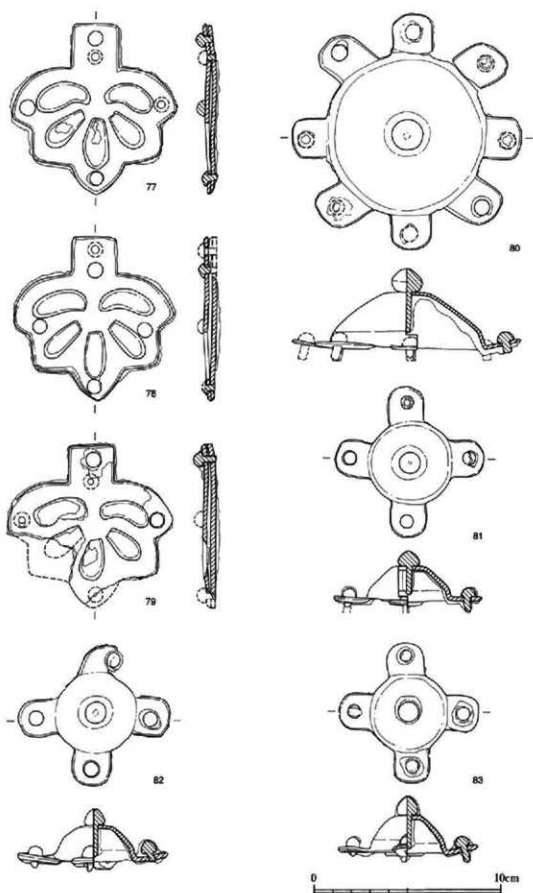
鏡板は厚さ0.2cmの鉄製地板に、同厚の文様板を周縁部に相く上下左右各2箇所づつ4箇の笠蓋で留め、文様板の表面に1枚の金鋼板で覆っている。銜受部は鏡板表面に露出せず、半球形隆起をもたない。銜連結環の接合方法は、端部に突起を作り出し、地板に穿たれた連結孔に挿入してかしめられているのであろうが、鉄錆のため判然としない。立開孔は隅円の三角形を呈し、70には鈎状吊手金具片が残存している。吊手金具本体は残存していないが、長方形を呈する板状の金具が存在し、一方が折損しているこ



第60図 出土鉄器 (2)

とから吊手金具として復元した。70の鏡板に付けた吊手金具は、長さ2.9cm、幅上部2.0cm、下部1.8cm、厚さ0.2cmの鉄地金銅張で、径0.7cm、高さ0.5cmの笠鉤が縦に2個が打たれている。残存状態の悪い71についても吊手金具の可能性のある残片があり、復元的に図示している。

銜の部品とみられる残片が2組 (73・74) ある。いずれも環状の組込部に取り付く鉄軸で、軸途中で



第61图 出土铁器(3)

欠損している。銜は二連式のもので、一組の銜セットとすれば、片方が銜軸であり、もう一方が銜外環と引手の組み合わせと判断される。組違部の環径は2.4cmで、断面隅円方形を呈している。

75・76は引手金具である。75は小片であるが、環状の痕跡があり、鉄軸とは屈曲した角度をもっていることから引手壺であろう。76は残存長9.9cmの引手壺、先環の環状部をわずかに残している。環状部分を復元すれば、全長11cmほどと推定される。引手先環での残存部分は、先にふれたいずれかが引手先環であろう73・74の環部とは厚さが異なるが、錆化によって腫ったものとみておきたい。76は引手軸の引手壺側にのみ、捻りが増えられているものの、75にはみられない。あるいは引手が2組存在していたことを示しているのかもしれない。

杏葉 (77-79)

鏡板と同形の意匠をもつ金鋼張杏葉が3個体出土している。全高8.7-9.1cm、最大幅8.8cmで、文様板は左右と下端の3箇所で銜留されている。左右の銜の位置は個体によって部位が異なっていることは、鏡板も同様である。方形の立間は高さ2.0-2.4cm、幅2.4cmで、立間孔をもたず、縦に2銜を直接、銜留する構造である。

雲珠 (80)

鉄地金鋼張で、銜部は半球形で稜をもつ半球状有稜銜である。銜部の稜は脚部付近と頂部にみられ、体部断面は直線的である。銜部径8.5cm、高さ3.7cmで、頂部に径1.6cm、高さ1.2cmの宝珠形飾りを付けるが花形座はもたない。脚は幅2.2cm、長さ2.0cmの半円形8脚で、銜と一体に作られ、径0.9cm、高さ0.5cmほどの銜で1カ所を留める。

辻金具 (80-82)

3個体出土している。雲珠を小型化したもので、形類は酷似している。いずれも鉄地金鋼張で、銜部は半球形で稜をもつ半球状有稜銜である。銜部の稜は脚部付近と頂部にみられ、体部断面は直線的である。銜部径は4.3cm、高さ3.0cmで、頂部に径1.0-1.1cm、高さ0.4cmの宝珠形飾りを付ける。脚は幅2.0cm、長さ1.7cmの半円形4脚で、銜と一体に作られ、径0.8cm、高さ0.4cmほどの1銜で留める。

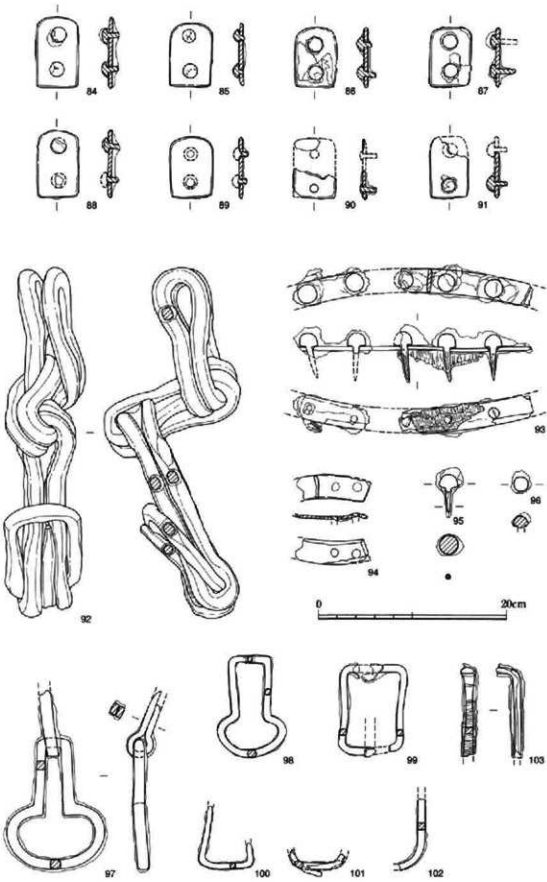
葎金具 (84-91)

いずれも鉄地金鋼張のもので、8個体が出土している。半円形を呈し、縦に2銜で留めている。84・88は長さ3.7cm、幅2.1cm、厚さ0.2cmで、85-89は長さ3.3cm前後で一廻り小型である。銜は径0.8cm、高さ0.3-0.4cmの笠銜である。

鞍轡縁金具 (93・94)

わずかに内彎した幅1.2cm、厚さ0.2cmの鉄地金鋼張の縁金具で、およそ2.5cm間隔に銜が打たれている。93は2片に分離しているが、出土状況が近接していることから1連のものとして間違いない。94はやや離れて出土しているが、形状からみて93と同一個体のものであろう。ただし、銜の間隔は1.2cmで、93に比べると狭くなっている。銜は完存するもので径0.9cm、高さ0.7cmの甲高の円形で、脚長は1.8-2.0cmほどである。裏面には鉄脚に平行した木目が残存しており、木部の小口側に打ち込まれていることが明らかで、鞍端に露出した居木に直接打ち込まれたものであろう。縁金具以外の覆輪・磯金具・洲浜がみられないことから、遺跡周囲の縁金具だけを有する木炭酸に分類されるものとみられる。

なお鞍轡縁金具(93・94)に付着していた木質については、京都大学木質化学研究所の伊藤隆夫教授に依頼して樹種同定を試みたが、「銕による硬化が著しく、樹種同定は不能」との結果であり、酸材を



第62圖 出土鉄器(4)

明らかにすることはできなかった。

鞍 (97)

鞍の輪につく鞍金具であろう。凸字形で左右に張り出す線金と鞍の輪に打ち込まれる扁平な鉄棒の基部がみられるが、刺金をもたない。鞍金具は欠損している。線金の長さは7.3cm、環部の幅は5.5cmで、基部に幅0.6cm、厚さ0.3cmの扁平な鉄板を巻き込んでいる。

鈎具 (98~102)

98は凸字形を呈する鈎具で、線金の長さ5.5cm、環部の幅は3.7cmである。99は方形の鈎具で、断面方形の鉄板を一周させて線金を作り、刺金の痕跡が残っている。長さ5.0cm、最大幅3.6cm。100~102は残片であり、特定できないが、鈎具片かと考えられる。

金銅張紙 (95・96)

鉄地金銅張の紙で、95は脚の長さから鞍轡線金具などにつく紙であろう。

鎖 (92)

刺金をもつ鈎具と三連の兵庫鎖からなるが、錠吊金具は欠損している。鈎具は断面方形の鉄棒で、長さ5.9cm、幅4.0cmの長方形に折り曲げて作られ、長さ5.9cmの刺金を据める。兵庫鎖は断面方形の鉄板を折り曲げた3連作りで、幅は3.0cmほどであるが、長さに長短がある。鈎具に取り付けられた鎖は長さ11.8cmと長く、他の2連は長さ7.2cmと短い。

不明鉄製品 (103)

L字形を呈するもので、軸に直交する木質が残存している。

(4) 鉄身具

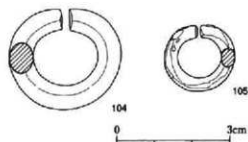
耳環 (104・105)

銅芯銀張の耳環が2個出土している。大きさに大小があり、104は径3.0×2.7cmで、断面は楕円形を呈する。105はやや小型のもので、径1.9×1.8cmを測り、断面形は楕円形を呈する。いずれも聞き部に銀の張り合わせ痕がみられる。

6 小結

3号墳は、勝手野古墳群中の最大の墳丘・石室規模を有する古墳で、出土遺物の内容からみても古墳群築造の端緒となった古墳であり、盟主的位置にある古墳であろう。古墳群のほぼ中央に位置し、後続する古墳は、3号墳を取り巻くように築造されている。墳丘の長径は16.5m、短径は14.2mほどで、ややびつてはいるが、径15mを超えるとみてよい円墳である。播磨地域における古墳時代後期の円墳では、墳丘規模が15m程度を境に埋葬施設の規模、副葬品の優劣がみられる傾向があり、一応、大型円墳の範疇に属するとしてよいだろう。

埋葬施設は勝手野古墳群中では唯一の片袖式の横穴式石室で、全長約7.96m、玄室長5.2m、奥室幅1.7



第63図 出土鉄身具

m、玄門前壁幅2.0mで、袖石の突出分にあわせて、玄室幅を狭めている。後道は2.8mと短く、幅は奥壁幅とほぼ同じ1.6mほどである。玄室面積は10㎡程度で、周辺地域の大型横穴式石室である岩倉2号墳、正法寺山1号墳とはほぼ同規模である。床面は確実に2面存在し、初葬である第1次床面は、地山面を直接利用し、石室中央に排水溝を設けている。

追葬である第2次床面は、小腰を疎らに置き、砂利を敷いている。右側壁に寄って置かれた家形石棺は、この敷石上にあり、追葬に伴うものである。

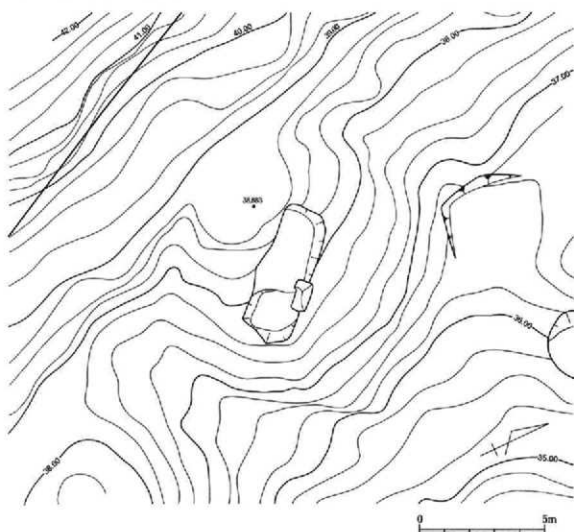
家形石棺は組合式のもので、一枚石からなる底石のみが残存し、側石、蓋石は破砕された小片が出土したのみである。底石は長さ199cm、幅80～85cm、内法長157cm、幅63cmの大型品で、加古川流域の組合式家形石棺の底石としては、加西市王野町所在の底石よりは幾分、小型ではあるものの、加西市中富町、多可郡中町村東山古墳、加古川市東神吉町丹田、同西神吉町宮前例などに匹敵する加古川流域で知られている組合式家形石棺では、最大級の部類に属するものである。また、側石を嵌め込むための溝を四周に彫っている特徴から、十河良和氏による加古川流域の組合式家形石棺の形式分類にしたがえば、「側石の乗るすべて位置に溝を彫り、一枚作りのもの」で、B-2-A類に相当し²⁾、B-2類が加西市を中心とした中流域に多いという傾向と一致する。加西市方面での底石形状と一致することは、石材の枚状観察によって高室産と推定したことを裏付ける。

出土遺物では、初葬に伴う金鋼張馬具が一式が出土していることが特筆される。鏡板と咨葉は楓葉形の同心の意匠をもつ特異なもので、銜連結環の接合方法は、端部に突起を作り出し、地板に穿たれた連結孔にかしめて取り付けられていると考えられる。この接合方法は心葉形・花形・刺葉形鏡板にみられるもので、大久保奈奈氏分類のC類2式にあたるものであろう³⁾。雲珠・辻金具も半球形有縁鉢に分類されるもので、宝珠飾が大型の鉄状で、1鉢の半円形脚であることから、宮代栄一氏のⅡ期に相当すると考えられる⁴⁾。また、鞍磯緑金具は、鞍の構造を加味して、宮代栄一氏のいう木装束有縁金具鞍取付鞍⁵⁾に分類できるもので、鉄の形状、緑金具の幅、鉄打ちの間隔等から、TK43～TK217型式期に比定されている。以上のように3号墳出土の馬具は、いずれもTK209～TK217型式期とされるものに該当し、出土須恵器の年代観とも矛盾しない。

須恵器は第1次床面のものと第2次床面のものに、わずかに型的差異が認められる。第1次床面のものは、坏日蓋の天井部に回転ヘラ削りがあるものが存在し、長脚2段透かしの高坏がみられる。一方、第2次床面のものは、後世の擾乱が著しく明確ではないが、法量の小型化、坏日外面の手法などから、後出的要素が読みとれる。このように3号墳は、加古川流域の横穴式石室としては最大級とは言いが、賀毛郡東部・美濃郡など加古川中流域の横穴式石室としては、大型の部類に属し、金鋼張馬具、追葬ではあるものの大型の組合式家形石棺を有するなど、地域首長墓とみてよい内容を有している。

第6節 4号墳

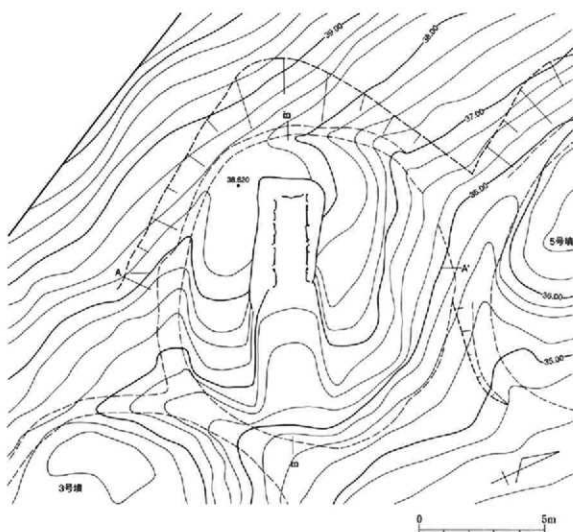
1 墳丘 (第64~66図)



第64図 墳丘 (調査前)

4号墳は古墳群の中央からやや北に寄った位置にある。勝手野古墳群の築造された範囲のなかでは、最も標高が高い箇所に築造されていることから、墳丘はすべて山麓傾斜面を利用して築かれている。4号墳の前方にあたる南東側には3号墳、北東側に5号墳がそれぞれ墳丘裾部を接して築かれていて、この2基の古墳に挟まれるような位置にある。4号墳も外護列石等の外表施設をもたないことから、墳丘裾の確定は困難であるが、石室主軸方向で12.3m、横断方向で10.8mで、主軸方向にやや長い円墳と考えられる。墳丘上部を削るように関割された弧状の溝からの墳丘残存高は0.2m、墳丘の最も低い部分からの残存高は3.0mで、元の墳丘は石室石材の抜き取り等によって、相当程度失われているとみられる。

調査開始前の観察では、標高37~38m付近で舌状に張り出した部分があり、斜面側上部に溝状の一段

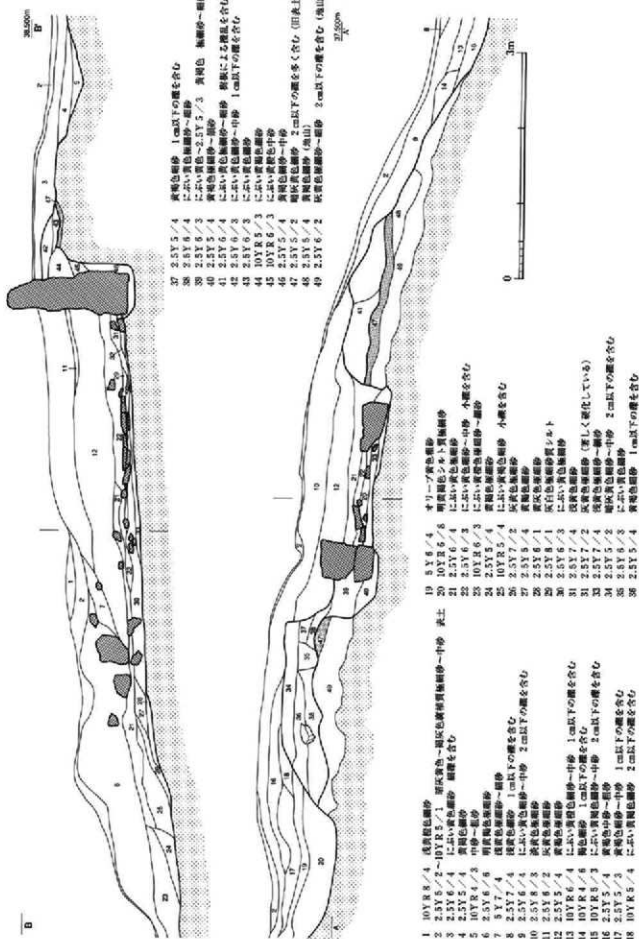


第65図 墳丘（表土除去後）

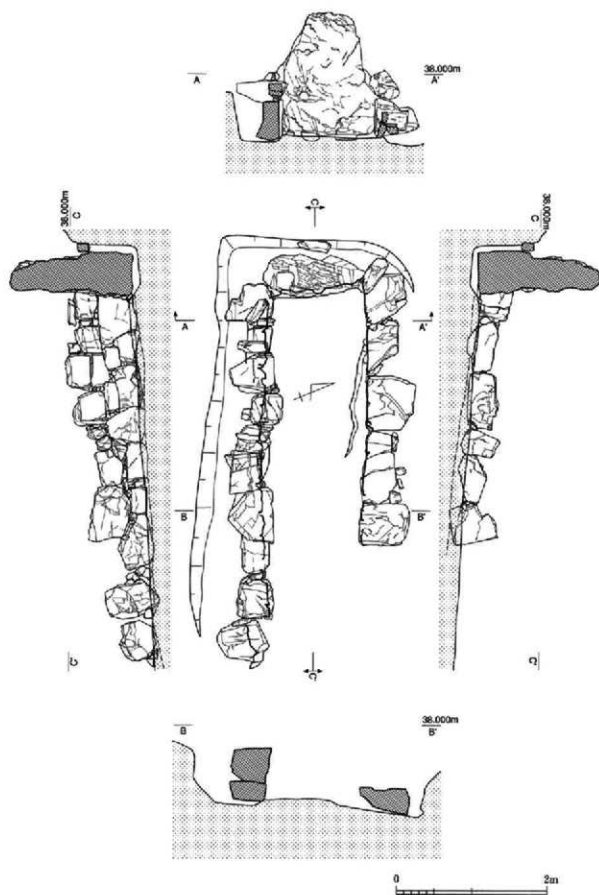
低い部分が存在していることから、古墳の存在は比較的容易に認められた。墳丘の中央部には長さ5.5 m、幅2 mほどの陥没した部分に石材が露出し、横穴式石室を埋葬施設とする古墳であり、石室を構成していた石材が相当持ち出されていると予想された。

墳丘の斜面上方面は、石室の開口方向に合わせて、等高線に斜行するように弧状に溝を掘り込んで墳丘上部を画している。4号墳は、3号墳と5号墳の墳丘に接していることから、両古墳の弧状溝と一部重複している。4号墳の弧状溝によって、3号墳の弧状溝の一部が削られていて、4号墳が3号墳に後出することが判明した。一方、5号墳の弧状溝との関係は、発掘調査では明確にすることができなかったが、出土遺物等からみて5号墳の溝を切っていると考えられる。

墳丘盛土は後世の擾乱によって多くが失われ、墳丘上部の構築方法は明らかでないが、墳丘下部では旧表土層を掘り残し、墳丘周囲を削り込んでいることが観察でき、盛土は旧表土上に直接盛り上げていることが判明した。残された墳丘盛土の堆積状況からすると、墳丘盛土は石室構築に合わせて、順次、上部に盛土していったものと考えられる。



第66図 墳丘断面



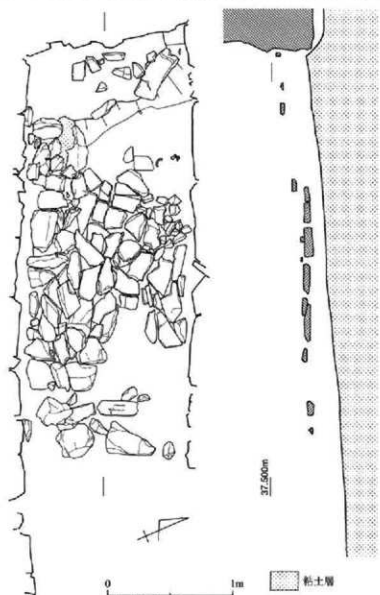
第67図 横穴式石室

2 横穴式石室 (第67・68図)

4号墳の埋葬施設は、南東方向に開口する無袖式横穴式石室である。主軸方位は、S-67°16'-Eで、等高線の方向に対して約60°程度斜行している。3号墳と近似した主軸方位をとっており、斜面下方を意識した方向に築かれているといえ、先行して存在する3号墳・5号墳の墳丘裾部の鞍部に開口方向を設定しようとした結果、等高線に斜行するような石室開口方向となったのであろう。

石室構築前に基底石を据え付けるために掘り込まれた墓壇掘方は、調査上の不手際のため、斜面上部側の右側壁部と奥壁部の2方向のみしか検出できず、斜面下方側の左側壁部では、床面を形成するために段を付けるようにL字形に掘り下げてしまったが、断面観察では、墓壇外周部側の立ち上がりを確認していることから、本来、コ字形に墓壇が掘り込まれていたことが判かる。

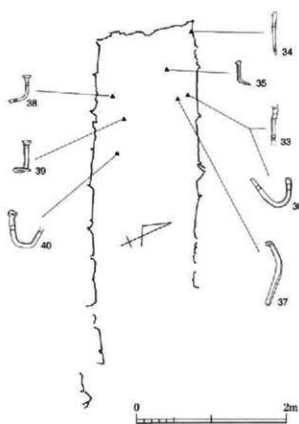
石室床面の規模は、右側壁で長さ4.8m、左側壁は開口付近の石材が3石ほど抜き取られていると考えられ、残存長は3.5mと短い。石室幅は奥壁部で1.25m、側壁が残存する部分の開口部に最も近い部分



第68図 第2次床面検出状況

で1.3m、石室中央部の最も広い箇所が1.4mほどである。石室の平面形は奥壁が石室主軸に対して直角に据え付けられず、約10°ほどの傾きを有しており、右側壁に対して約100°で奥壁が据え付けられている。また、右側壁では開口部端の石材が後方にずれているのを除けば、石室中央部から開口部に向かってわずかながら幅を狭めている。同様の傾向は開口部付近を失っている左側壁でも看取され、開口部幅は今少し狭かったと考えられる。左側壁の開口部端の石材が後方へのずれの要因は、本来の形状であるかどうかは明らかでないが、他の古墳の開口部の形態をみれば、開口部を後方にずらし前庭部を形成するような墓体の構築法は採られていないことが指摘できる。

奥壁基底石は1石で構成され、幅1.36m、高さ1.65m、



第69図 第2次床面鉄器出土状況(模式図:鉄器1/4)

群の石室床面では、開口部に向かって最も傾斜を有している古墳である。

床面は2面検出することができた。第1次床面は掘り残された進山面で、排水溝等の施設をもたない。この第1次床面の上部に約5cm程度の黄色砂を置いて開層とし、その上面に15~30cm程度の比較的大きさの整った板石を敷いている。板石は攪乱のため必ずしも残存状況はよくないが、右側壁7石目端まで残存し、その部分で途切れているようにみえる。右側壁の開口部付近の8・9石目が基礎底面に接していないことから、天井石が構築されていないことが考えられるので、敷石は天井石の構築されていた部位の床面に対応することになろう。敷石は奥壁部と開口部に近い左側壁部分で攪乱のため検出されていないが、本来、全面に敷かれていたのであろう。この敷石面では古墳時代のもので明確に断定できる遺物がなく、所属時期に疑問が残る鉄釘のほか、近世以降の砲塔(第137図1062)が出土し、第2次床面とした敷石が近世以降の遺物とも考えられるが、丁寧に板石を敷いていることと簡単構造との関係から、追葬に伴って板石を敷きつめた第2次床面とみておきたい。

石室開口部前面から2.5mほど離れた箇所から古墳時代の遺物が検出され、石室から掻き出された遺物とみられるが、前庭部の明確な遺構は検出できなかった。

3 遺物の出土状況(第70・71図)

4号墳の遺物は、攪乱層及び後世の石室地積層出土のものを除くと、第1次床面と第2次床面である敷石上から出土している。敷石上面からは、石室中央より奥壁側に寄った左側壁に沿って5点(33~37)、

厚さ0.55mの大型の石材を縦積みしている。奥壁上部部は後世に打ち欠かれた痕跡があり、旧状はもう少し高さがあった可能性がある。8基の古墳のなかでは奥壁基礎底石は最も高く、奥壁が1石で構成されていたと考えられる。

右側壁基礎底石は9石で構成されている。壁体は3段目まで残存している箇所があり、残存高は最も高いところで1m弱である。左側壁は基礎石しか残存していない。基礎石は6石が残存し、右側壁との対応関係から開口部付近の3石が抜き取られたものとみられる。使用された石材は流紋岩質溶結凝灰岩で、平滑に剥離した面を石室内面に用いているが、大きさは不揃いで、両側壁とも比較的小型の石材が使用されている傾向がある。

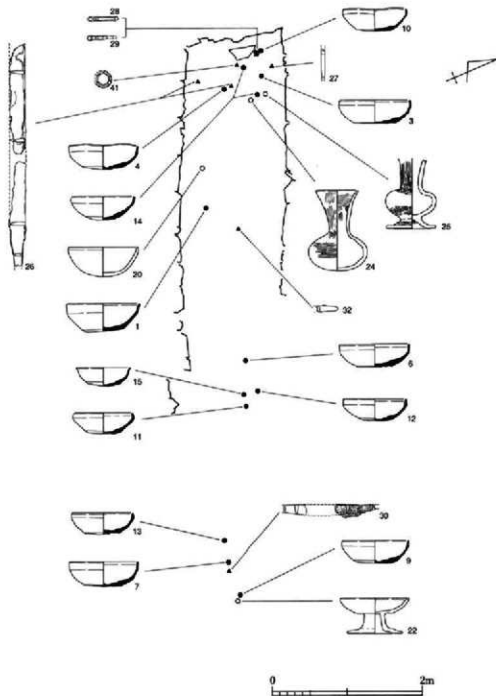
床面は石室が等高線に対して角度をもっているためであろうか、奥壁部と開口部の比高差は0.35mほどあり、勝手野古墳



第70図 第1次床面遺物出土状況

右側壁に沿って3点(38~40)の鉄釘が出土している。多くは釘抜き状の工具で抜かれたように大きく曲がっている個体であり、意図的に抜かれた際に折れ曲がったとみられ、木箱の緊締具として使用されたとすれば、極めて不自然な形状である。さらに、敷石上面からは他に古墳時代に伴う遺物が出土していないこと、敷石上からは近世の砲塔が出土していることから、これらの鉄釘を古墳時代のものとするには疑問が残る。

敷石下層の第1次床面からは大きく分けて、石室奥壁付近・石室中央部・開口部付近・前庭部の4カ所でまとまりのある遺物群が出土している。奥壁付近では、奥壁に接して棺台とみられる扁平な石材周辺で、須恵器の坏Ⅰが4点(3・4・10・14)、土師器の長頸壺(24・25)、鉄刀(26)、鉄鍬片(27)、



第71図 第1次床面遺物出土状況（模式図：土器1/8・鉄器1/4）

弓飾金具（28・29）、銀環耳環（41）が出土している。ただし、刀・鉄片はいずれも残片であり、土器もやや離れた地点で出土した破片が接合している。石室中央部では散漫な出土状況であるが、須恵器の坏Ⅰ（1）・土師器の坏（20）、刀子片（32）がみられる。開口部付近では須恵器の坏Ⅰ（6・11・12・15）の4個体が比較的ままと出土している。6はやや石室側に寄っているが、他の3個体は近接した状況を示している。前庭部出土のものは開口部から約2.5m離れた地点で、須恵器の坏Ⅰ（7・9・13）と土師器の高坏（22）及び刀子（30）が出土している。これらの遺物は、石室内から掻き出された

ものであろうが、二次的な移動があったとも考えられる。

4 出土遺物（第72～75図）

4号墳に伴う出土遺物は、以下のとおりである。

（1）土器

須恵器（坏I・坏G・高坏・平瓶）	17点
土師器（坏・高坏・長頸甕）	8点
（2）武器・工具（弓鉤金具・刀子・釘）	14点
（3）袷身具（銅芯銀張耳環）	1点

（1）土器

須恵器

坏I（1～14）

4号墳から出土した坏の15個体中14個体と、大半が坏Iで占められている。いずれも底部と口縁部の境は不明瞭で、口縁部を内方に屈曲させている。底部は概して扁平なものが多く、口縁端部は肥厚するもの（2・5・8）と、丸く取るものの2種がある。なお、端部が肥厚するものは、10号墳からも出土している。口径の大きなものなかには、坏蓋との判別が困難なものもあるが、1号墳と同様、蓋受けのある立ち上がりをもつ坏H身の出土がないことから、坏身として機能していたと考えられる。口径9.1～11.4cm、器高3.4～4.3cm、径高指数は33～39で、平均は36前後である。1～7のように口径が11cm前後のものと、8～14のように10cm前後のものに分かれる。勝手野古墳群出土の坏Iのうち、口径11cm前後の大型品は4号墳に集中し、他の古墳出土の坏Iとは法量で異なっているという特徴がみられる。法量の差異が時期差を示している可能性もあるが、出土状況からすれば両者は混在しており、一概に時期差とみるべきではないだろう。なお、口径の大きなものも、勝手野古墳群で坏H蓋としたものの口径を上廻るものは認められない。底部外面はヘラ切りのまま不調整のものが多いが、わずかにナデを施すもの、底部外周を回転ヘラ削りしたものが少数認められる。底部内面には仕上げナデ調整を施すものと施さないものがある。

坏G（15）

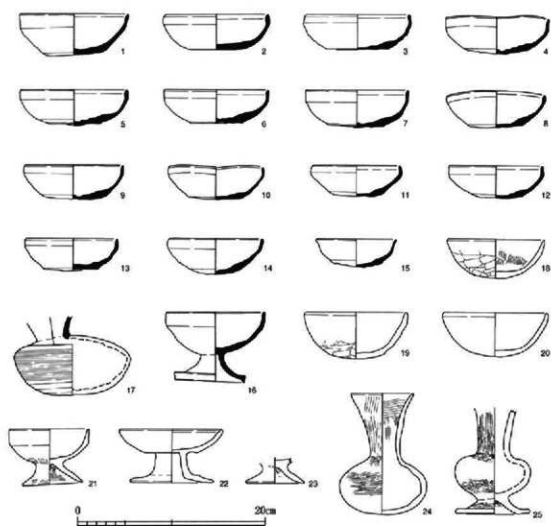
口径8.5cmと小器品で、勝手野古墳群で出土した坏では最小である。端部が外反しながら開口縁部をもつ坏身で、坏Gとはやや形態が異なるが、坏Gに含めた。

高坏（16）

高坏目類に分類される無蓋高坏である。坏部高4.4cmと比較的深く、口縁部が内方に屈曲する坏部に、短く低い脚部を付けている。脚端部は下方に鋭く拡張させ内彎気味の面をもつ。3号墳出土の高坏目類とは口縁端部に若干の差異があるが、よく似た形態の特徴をもっている。

平瓶（17）

口縁上半部が欠損しているが、外方に開く口縁部が付くのであろう。体部は扁平な倒卵形を呈し、底部と肩部の屈曲は比較的明瞭である。底部は回転ヘラ削り調整され、肩部から底部上半は丁寧なカキ目調整が施されている。



第72図 出土土器

土師器

平 (18～20)

丸底で外方に開く口縁部をもつ。口径10.2～10.9cm、器高4.1～5.0cmで、近似した分量をもっている。3号墳出土の平に比べ、やや口径・器高が大きい。18・19は石室攪乱土中の出土であるが、石室下層床面出土の20と形態的に差異がないので、古墳時代のものとしておきたい。器表の摩滅の著しく調整手法の観察ができない20を除いて、底部は不定方向に静止ヘラ削り調整され、18は口縁部付近まで及んでいる。また、18の内面には放射状にハケ目調整された痕跡が残っている。

高平 (21・22)

21は須恵器の無蓋高平を模倣した器形であると考えられる。口縁部を内方にわずかに屈曲させた平部と、短く外方に真っ直ぐ開く脚部からなる。器表はハケ目調整の後、ヨコナデ調整されている。22は口縁部が大きく開く浅い皿形の平部で、端部内面には浅い凹部が通る。脚部は太い筒状の上半部から大きく屈曲して開く脚端部をなす。脚接合部、脚端部にハケ目の痕跡を残しているが、脚部内面にはハケ目調整のままである。

長頸壺 (23-25)

長頸壺の脚部の可能性がある破片を含め3点あり、須恵器の形態を模倣したものであろう。24は倒卵形の体部に外反しながら開く長い口縁部をもつ。底部が円形に剥離している痕跡がみられることから、脚付のものであった可能性が高い。口縁部外面は縦方向、内面は端部を横方向、頸部を縦方向にハケ目調整され、体部は横方向にハケ目調整されている。25の体部は、口縁部によって押しつぶされたような倒卵形を呈する。口縁部は端部が欠損しているが、24と同様に八字形に開くものであろう。口縁部は体部中央に付かず、平飯のように偏った位置につけられている。脚部は外方に大きく開き、ほぼ水平に折れ曲がる脚端部の形状は22と類似している。器表外面と口縁端部内面は丁寧にヘラミガキ調整が行われている。23は脚部片で、短く外方に開いている。24の脚部ではないことは明らかであるが、24はこの形態の脚部が付くことが考えられる。

(2) 武器・工具

直刀 (26)

刀身と茎部の残片で、本来の長さは不明である。大きく二つの部分に分離し、錆化が著しく残存状況はよくないが、おそらく同一個体であろう。刀身部の破片は、断面二等辺三角形を呈する平造りで残存長17.7cm、背幅0.6-0.7cm、刃幅2.5cmである。もう一つは、刀身基部から茎部にかけての残片である。茎部先端は欠損しているが、刀身部残存長12.4cm、茎部残存長4.0cmである。背側の面は明瞭に観察できるが、刃部側は観察できず、茎部先端に向かって緩やかに幅を減少させている。残存している茎部先付近の幅は1.5cmである。目釘穴はみられない。

鉄鏃 (27)

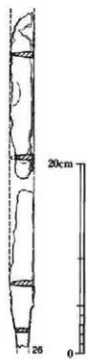
鉄鏃の茎ではないかとみられる残片であるが確証はない。残存長2.8cmで、片方がやや細くなっている。断面は方形で0.4cmほどである。

弓飾金具 (28-29)

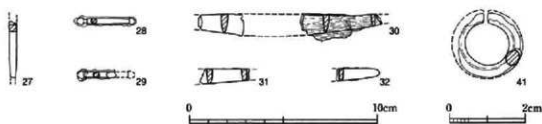
3号墳出土のものと同様類似した鉄製品で、細い円柱状の鉄棒の両端に半球形の頭部がつく。28は全長3.3cmで、長さ2.7cm、径0.2cmの中軸の両端に幅0.3cmの半球形の頭部を付けている。29は片方の頭部付近を欠損し、残存長2.1cmであるが、3と同程度の長さのものであろう。

刀子 (30-32)

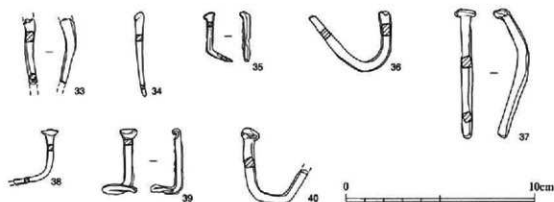
刀子の残片が4片ある。30は切先付近と刃基部から茎部付近の破片の2片からなるが、出土位置からみて同一個体であろう。残存長2.4cmで、刃幅に大小があり、切先付近の破片とみられる。刃幅の一方は0.8cm、もう片方は1.2cmである。断面二等辺三角形で、背幅は0.4cmである。もう一方の破片は、長さ4.4cmで、断面が二等辺三角形の部分と方形の部分があることから、刃基部と茎部であろうと判断されるが、明確な間部はみられない。刃幅は1.0cm、背幅は0.3cmである。基部は幅0.6cm、厚さ0.2cmで、全体に木質が残存している。31は小片であるが、断面が二等辺三角形を呈することから、刀子片とした。32は片方の断面が方形を呈し、茎部であろう。



第73図 出土鉄器 (1)



第74図 出土鉄器(2)・装身具



第75図 出土鉄器(3)

鉄釘 (33~40)

敷石上面の出土であり、古墳時代の遺物とは断定できず、近世の可能性のある鉄釘が8点出土している。いずれも折れ曲がっており、意図的に抜かれたものであろう。長短2種があり、長いもの(36・37・40)は、全長8cm以上で、幅0.5cmほどである。短いもの(33~35・38・39)は長さ4~5cm程度、幅は0.4cmほどである。

(3) 装身具

耳環 (41)

銅芯銀貼の耳環である。錆化による腐食のため残存状況はよくないが、わずかに銀貼が残っている。復元長径1.9cm、短径1.8cm、開き部は0.1cmで、接合面には銀箔の張り合わせ痕がみられる。断面は長径0.4cm、短径0.35cmの楕円形を呈する。

5 小結

4号墳は、3号墳の背後に築造された長径12.3m、短径10.8mの長円形を呈する円墳で、全長4.8m、幅1.25mの無袖式横穴式石室を埋葬施設とする。横穴式石室は石室上部を失っているが、奥壁基底石は1石で構築され、高さのある石材を用いているなど他の古墳と異なる特徴を有する。奥壁基底石は高さ1.65m以上あり、石室規模が同程度で天井高の明らかな加古川市・奥新田東1号墳のように、1石で構成されていた可能性が指摘できる。

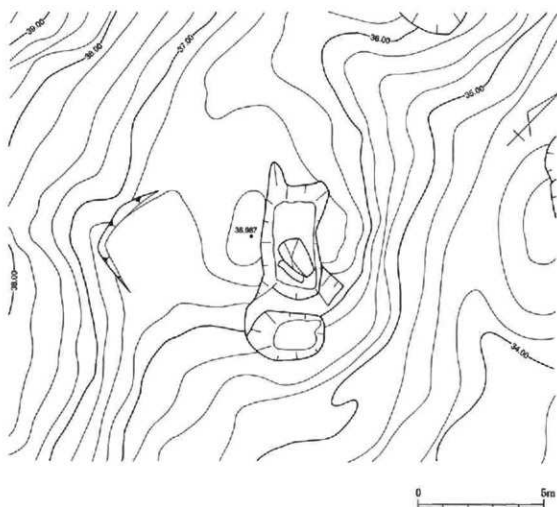
3・5号墳のわずかな空間の山麓部の傾斜地に築かれていることから、斜面上方に開削された墳丘を

画する弧状の溝は、3・5号墳の弧状溝を切り込んでいて、同古墳より築造時期が遅れることが明らかとなった。床面構造も古墳とは異なり、第2次床面に敷石を有する。敷石面から古墳時代の遺物が出土していないため、敷石の埋込時期は踏躐されるが、古墳時代のものとみておきたい。

古墳群中での築造順序は、奥壁の構成にみられる石室構造や出土遺物からもみとれる。4号墳の出土須恵器がすべて坏Iで構成され、坏目を伴っていないことは後出的要素を示しているといえよう。前庭部の遺物群は石室内から掻き出されたものと判断されるが、奥壁付近の一群との関係は明らかでなく、石室第1次床面上から出土した土器群と前庭部から出土した土器群との形態的な差異を識別することは難しい。第2次床面を形成する際に、第1次床面の遺物が一部掻き出されたものであろうか。出土遺物では刀、弓筒金具、須恵器の形態を模倣した土師器などがあり、3号墳と共通した構成をもっているといえる。特に、弓筒金具を有していることは、群小古墳においても副葬される場合があったことを示す例であろう。

第7節 5号墳

1 墳丘 (第76~78図)

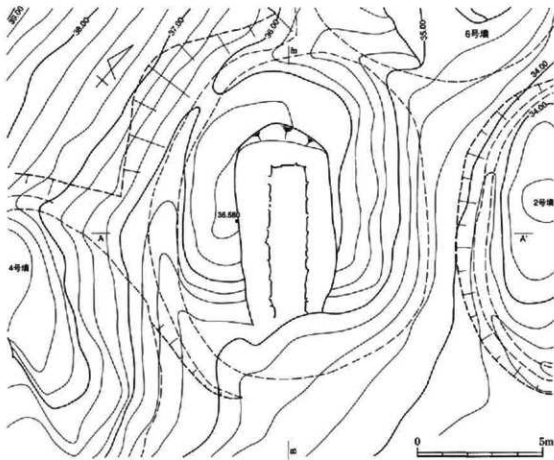


第76図 墳丘 (調査前)

5号墳は古墳群の中央部から北よりにあり、墳丘の大部分は山麓緩斜面に築かれている。南西側に4号墳、北東側に2号墳、北西側に6号墳がそれぞれ墳丘裾を接している。特に、5号墳の背面に位置する6号墳とは極めて接近し、墳丘上部の弧状溝を共有している。

調査前の観測では、標高36m付近で等高線が舌状に張り出して、幾分、墳丘状の高まりがみられ、古墳の存在は比較的容易に判断することができた。墳丘状の高まりの中央部には、大型の石材が露出し、その周囲は不整な長方形に大きく陥没し、横穴式石室の石材が抜き取られていると予測された。

5号墳も葺石・外周列石などの外表施設をもたないことから、墳形・墳丘規模については確実性に乏しいが、石室長軸方向の長径が12.8m、直交方向の短径10.0mの楕円形を呈する円墳であると考えられる。表土除去後の墳丘高は、斜面上部の弧状溝底からは0.6mで、斜面下方の推定墳丘裾からは2.3mほどである。石材の抜き取り等の攪乱によって、墳丘上部は相当程度失われているとみられるが、調査を



第77図 墳丘（表土除去後）

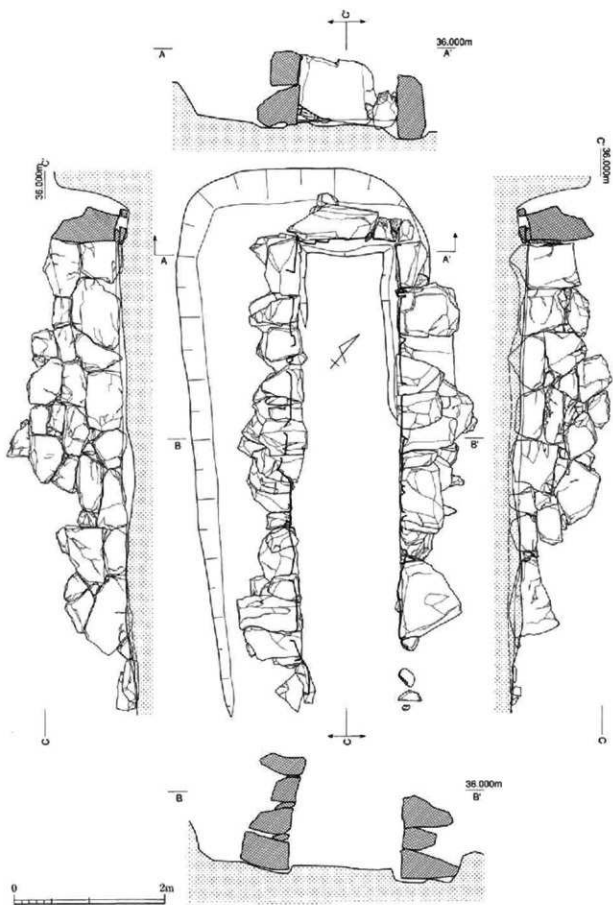
行った8基の古墳のうちでは比較的よく残存しているといえる。斜面上部側には、断面がU字形を呈する溝が弧状に掘り込まれ、墳丘裾部を画している。

墳丘は、側壁の2段目程度の高さまで、奥壁側では基底石上端付近まで、旧表土層が掘り残されていることから、石室墓は他の古墳より深く掘り込まれている。旧表土層の上位は、盛土によって墳丘が構築されていて、斜面下方側の墳丘は大部分が盛土によっている。墳丘の構築は、墳丘周辺の地山である黄褐色系の礫混細砂の地山によって行われている。

2 横穴式石室（第79図）

埋葬施設は、東南東方向に開口する無袖式横穴式石室である。石室主軸方位は、 $S-44^{\circ}30'-E$ で、調査を行った8基の古墳では、開口部方向を等高線から、やや斜面下方に向ける2・7号墳と近似した石室主軸方位を採っている。石室は天井石を失っているが、調査古墳中では機体の残存状況は比較的良好といえる。

石室は、調査開始時点には天井石の大部分が抜き取られ、天井石と考えられる大型の石材2石が石室



第79図 横穴式石室

中央付近に落下した状態で残されていた。石室内には天井石の抜き取りに伴って、二次的な流入土が堆積し、石室内過半を埋めている。石室内堆積土では、床面直上に堆積した灰色極細砂（40層）がよく締まっています、自然堆積層とみられる。その上層は締まりの悪い堆積層であったことから、石室内は天井石が抜き取られるまで、きわめて堆積物の少ない状況であったと推定される。

墓壇幅方は、幅3.6m、奥壁部中央では深さ0.95mほどで、石室床面を高さ15cmほど掘り残して、平面形がコ字形を呈するように掘り込まれている。掘り残された石室床面は、墓壇の中央から斜面下方側に寄っていて、斜面上方側の墓壇底は幅が広く、右側壁の背面向に空間が存在する。一方、斜面下方側にあたる左側壁では、墓壇幅が狭く、石材を据え付けるための幅のみが削ぎられているのみである。この墓壇幅方と石室床面の関係は、6号墳等でもその傾向を看取できるものの、5号墳ではその偏りが大きい。

石室の残存長は、右側壁で6.0m、左側壁で5.4mで、奥壁幅1.3m、中央部で1.55m、開口部付近で1.4mを測る。

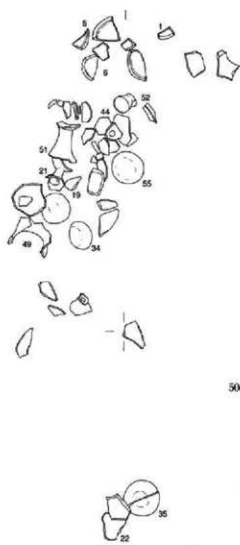
奥壁は基礎石のみが残存しているだけであるが、幅1.2m、高さ0.85m、幅0.45mの大型の石材を右側壁側に基礎石として据え、左側壁との隙間を小型の石材を充填して壁面を構成している。右側壁基礎石は、確実なものとして8石が残存するが、開口部には小型の石材がみられることから、本来、9石で構成されていたと考えておきたい。側壁は最も残りのよい中央部付近で、4段目程度まで残存し、高さ1.52mを測る。左側壁基礎石は8石が残存する。抜き取り穴は確認できなかったものの、右側壁の状況と基礎石の安定を保つための小礫が存在することから、開口部にはさらに1石が据えられていた可能性が高く、元は9石からなっていたと想定されるので、石室全長は6.0mほどであったとしておきたい。側壁基礎石は、奥壁側に比較的大型の石材を据え、開口部に近い8石目も大型の石材を用い、奥壁側2石が縦方向に、開口部側では横方向に積まれている。

床面の奥壁部と開口部付近との比高差は、0.2mを測り、開口部に向かってわずかに傾斜を有している。また、側壁2段目の高さを右側壁でみられるように、奥壁頂部にそろえる意図があったものと思われる。

3 遺物の出土状況（第80・81図）

石室は長期間開口しており、その間に石室の2次的利用を含む攪乱があったと考えられる。石室内では床面から4cmほど上位の40層上面で、石室内再利用時とみられる焼土層が検出されている。この焼土層からは須恵器の輪（第135図1027）が出土していることから、平安時代後期に石室再利用があったことを示している。また、奥壁付近では、天井石抜き取り後に再び盗掘が行われた痕跡があり、遺物の残存状況は全般的によくはない状況にあった。

床面付近の出土遺物では、盗掘のため奥壁付近と石室中央部では遺物はほとんど出土しなかったが、石室中央部の奥壁寄りと開口部付近の2カ所から比較的まとまった状況で遺物が出土している。ただ、この位置からの出土遺物も多くが破砕され、小片となっているものが多い。石室内奥壁寄りでは、馬具、鉄鎌などの鉄器類、玉などが出土し、出土状況からみて、後世に移動があったと考えられるものの、奥壁付近の埋葬に伴う遺物であった可能性がある。開口部に近い部分では、須恵器が出土している。なかには、坏（12）・長頸壺（46）など、完形に近いもののほか、同形態の高坏が多く含まれている。以上の



第80図 遺物出土状況（前庭部）

ように、5号墳石室内の遺物は、主に天井石が抜き取られる以前の地盤と思われる40層以下で出土しているが、出土遺物の多くが小片となっていた。

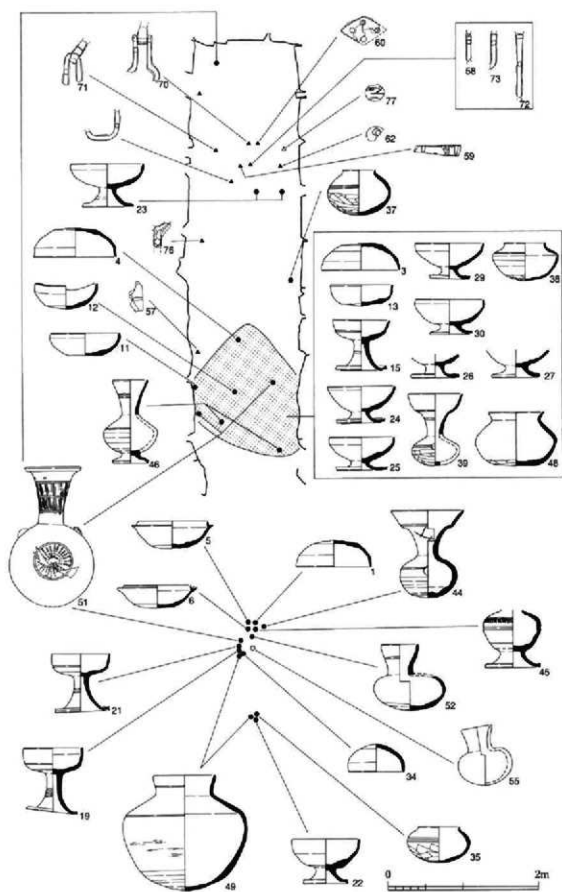
遺物はおおむね2群からなる出土状況を示している。前庭部の石室主軸線上の石室開口部端から2mほど離れた地点と、3mほど離れた地点の2カ所から、須恵器と土器器がまとめて出土した。石室側の一群は、50cmほどの範囲の中に、須恵器の坏H（1・5・6）・高坏（19・21）・短頸壺（34）・屋（44）・提瓶（51）・脚付長頸壺（45）・直口壺（49）・平瓶（52）、土器の平瓶（55）からなる12個体ほどが集中し、もう1群には、須恵器の高坏（22）・短頸壺（35）・直口壺（49）が、それぞれ各1個体ずつ出土している。このうち、直口壺（49）片はこの2群のいずれにも含まれていることから、前庭部の2つの土器群は同一のまとまりと考えてよいだろう。これらの中には提瓶（51）のように、石室開口部付近や奥壁付近で出土した破片と接合するものがみられることから、これらの土器群は、石室内から追跡の際に掻き出されたものであると考えられる。このことは、石室内開口部付近の一群は混在しているものも含まれるが、全般的には、前庭部出土の土器群より新相を示していることと矛盾せず、前庭部出土のものが初葬、石室開口部付近のものが追葬期であったと考えておきたい。

4 家形石棺（第82図）

石室内及び前庭部から、いわゆる高室石といわれる流紋岩質溶結凝灰岩製の石棺材が出土した。出土量がごく僅少であるうえ、いずれの破片も粉砕され、加工面をとどめている破片が少数であるため、どの部位のものであったのかすら推定することが困難であり、据え付けられた位置も知る事ができなかった。しかし、使用石材の共通性から家形石棺と判断するのが妥当と考えられる。

1・2は、人為的打撃によって剥離ないしは業理に沿って剥落した破片である。いずれも細粒の凝灰岩を用いており、本来、同一の個体であったと思われるなお、後述の5も、同一個体に属する可能性がある。本来の器表面をとどめておらず、部位は不明である。5号墳では、他にも2号墳でみられたような、厚さ1cm前後の板状を呈する破片が出土している。

3は断面三角形の破片で、2面に加工痕をとどめる。約140°の鈍角をなす2面に「手斧状」の加工痕および研磨痕が認められる。このように鈍角をなす加工面は、家形石棺では墓材の屋根部分に相当する



第81图 遺物出土状況 (模式图: 土器1/8・鉄器1/4)

可能性がある。石材の3分の1ほどは、被熱により赤化している。

4は打撃により剥離した破片で、平坦な片面に研磨痕をとどめている。図石の破断面は、被熱により赤化している。部位不明。

5は1・2に近似した細粒の石材を用いている。剥離面に被われ、加工痕をとどめていない。

6は側板または小口板の隅部分と考えられる破片である。表裏と2側面に加工面をとどめており、手斧状の加工痕が鮮明に観察される。最大厚は11cm前後を測る。3号墳と同一形式の家形石棺であるならば、底込溝が穿たれていないことから側板と判断してよからう。

7(図版80)は厚さ約8cmを測る破片である。一面に研磨痕が認められるが、他は剥離面によって被われており、部位を判断することはできない。

8は5号墳出土の石棺材中、最大の破片である。片面と小口面に工具痕をとどめるが、他の面はことごとく破壊を受けている。加工痕の残る一面が非常に平坦であり、小口面には端部の面取りが認められないことから、底石ないし蓋石の一部かと推測される。

5号墳より出土した石棺材は、図示しなかったものを含めて23.967kgである。これは3号墳で推定した家形石棺の全体重量からみるならば、5%程度と思われる。したがって石棺材の大部分は、破壊とともに持ち出されたものとみてよいだろう。ただ、石棺の破壊によって生じた剥片・破片の出土数が少ないことから、破壊があまり進まない状態で持ち出された可能性が高い。この推測が正しいとすれば、5号墳に攜えられた石棺は、破壊程度が軽くとも搬出可能であったのであろう。換言すれば、規模が小さかった可能性を指摘してよいだろう。

5号墳からは、勝手野原跡群の時期に相当する須恵器輪が出土し、また、石室内からは焚火跡を示す焼土が検出されている。こうしたことから、石棺は中世段階には相当の破壊を受け、搬出されていたものと思われる。

5 出土遺物(第83~87図)

5号墳から出土した遺物は、古墳に伴う遺物と後世の再利用に伴う遺物がある。出土遺物は以下のとおりである。

(1) 土器

須恵器(坏H蓋・坏H身・坏I・高坏・短頸甕蓋・短頸甕・長頸甕・甕・罎・罎・提瓶・平瓶・横瓶・甕)

54点以上

土師器(平瓶)

2点以上

(2) 武器・工具(鉄鏃・刀子)

3点

(3) 馬具(轡・鞆・鞍具・革金具・銅金具・不明)

13点

(4) 装身具(ガラス製丸玉・滑石製小玉)

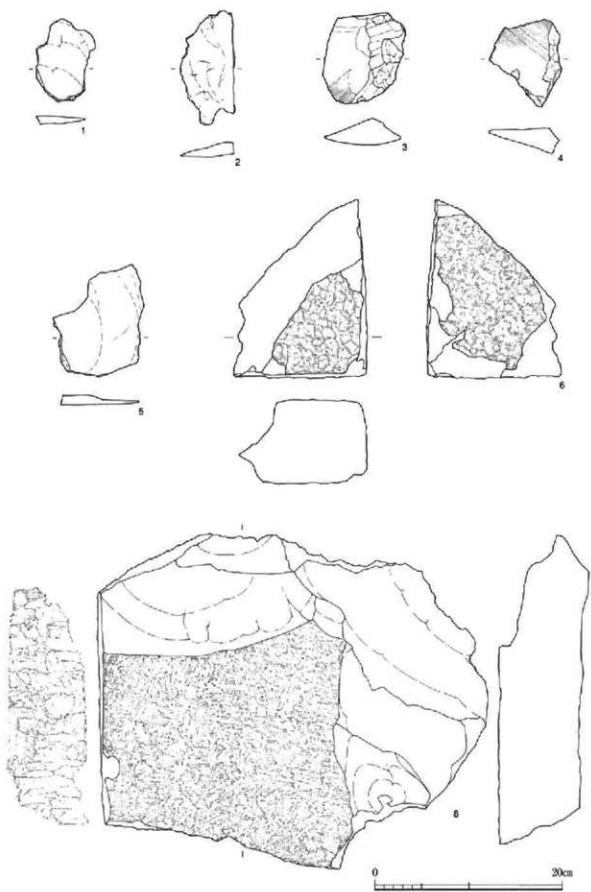
5点

(1) 土器

須恵器

坏H蓋(1~4)

5号墳から出土した坏H蓋は、4個体である。天井部と口縁部の境は明瞭でないが、口縁端部を内方



第82図 家形石棺

に屈曲させている。口径は11.7~12.8cm、器高は復元のものを含め、4.2~4.7cmである。口径、器高とも径高指数35前後で大差ないが、口径12.8cm、器高4.5cm前後のもの(2・4)と、口径12cm、器高4.2cm前後のもの(1・3)の二つに区分することができる。調整手法は天井部外面に回転ヘラ削り調整がみられず、ヘラ切り後ナデ調整を施していることで共通している。3は天井部外周に補助削りがみられる。小型の1・3は内面に仕上げナデ調整を施す。1は天井部に1本線のヘラ記号が刻まれている。

坏H身(5~10)

受部に立ち上がりのある坏H身が、5個体確認できた。扁平な底部に短い矮小化した立ち上りをつけている。口径10.1~11.6cm、受部径12.1~13.6cm、器高3.6~4.3cmである。5は径高指数39で、他のものが34前後であるのに対し、口径に比して器高が高い。7は口径11.6cmで、胎土、色調に共通性はないが、2・4の蓋と組み合わせ量である。6は底部に1本線のヘラ記号があり、1の蓋とセットとなるのであろう。底部外面は6・7はヘラ切り後ナデ調整されているが、8はヘラ切りのまま不調整である。

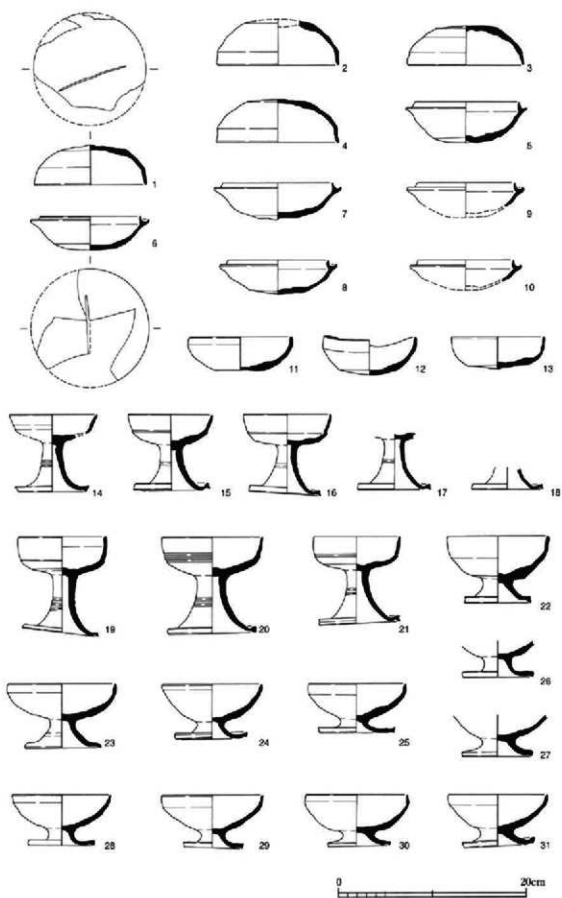
坏I(11~13)

小型の蓋をもたない坏身が3個体ある。11はやや大型で口径10.8cmであるが、12・13は口径10cm以下である。11・12は口縁端部を屈曲させているが、13は扁平な底部から直立気味に口縁部を付ける坏Gの形態に近い。底部はヘラ切りのまま不調整か、わずかにヘラ切り後ナデを行っている。

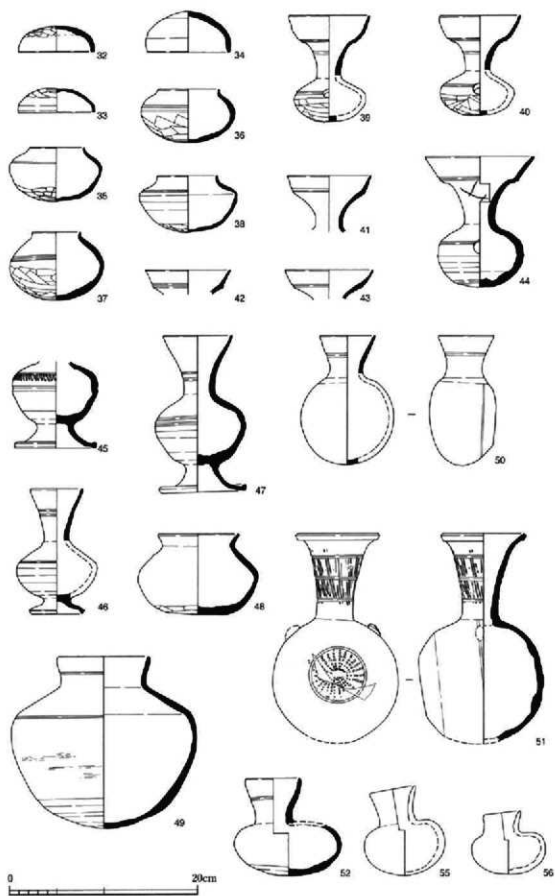
高坏(14~31)

5号墳の出土遺物の特徴は、高坏の占める比率が高いことで、17個体あり、出土須恵器の3分の1を占めている。高坏Ⅱ類とした低脚化し、透かしをもたない脚高指数60前後の長脚の高坏(14~21)は、脚部片を含めて8個体確認できた。5号墳出土の高坏Ⅱ類の坏部の形態には2種存在する。14~16・19は坏部の口径が9cm前後と小型で、底部と口縁部の境に線を突出させ段をつくっている。線の明確なもの(15・16)と不明瞭なもの(14・19)がある。14~16は外上方に延びる口縁部をもつ。脚部は肩部が大きく外方に開き、下方に拡張させて内彎気味の面を作り、脚筒部中央には1~2条の浅い沈線を巡らしている。19は口縁部を内彎気味に直立させ、坏部の形態は後述の20・21に近い。脚部は脚端部の下方への拡張が小さく、脚筒部には3条の沈線を巡らしているようにもみえるが、完周せず2条の部分があり、本来は2条とする意図があったのかもしれない。20・21は直立気味の口縁部で、底部との境を沈線を巡らすことで区切っている。20は坏部の口径が他のものより大きく、底部と口縁部の境の沈線は2条巡っている。脚筒部は太く、端部を上方に三角形状に肥厚させている。いずれも脚筒部中央付近に2条の沈線を巡らしている。17・18は脚部片であるが、高坏Ⅱ類のものであろう。

22~31は短脚化した高坏で、高坏Ⅲ類に分類される。5号墳出土の高坏Ⅲ類は、脚高指数35以上のもの(22・23)と脚高指数26~31のもの(24・25・28~31)の大きく2形態に区分できる。22は器高の高い坏I形に近い坏部に、高さ2.5cmの短い脚部を付けている。端部は下方に拡張し、面を作っている。23は坏部の口径がやや大きく、坏H蓋を逆転させたような形状を呈している。脚端部は上下いずれかに拡張させることなく、わずかに下方に彎曲気味に丸く収めている。24・25・28~31は脚高2cm以下のきわめて低い脚部を付ける。この種の脚高の低い高坏は5号墳のみで見られる。坏部は口径10cmほどで、坏Iの形態とよく似ている。脚部は水平方向に長く延びるものと、比較的短く終わるものがある。端部はわずかに下方に拡張して面を作るものが多い。高坏Ⅲ類のうち、24・25・27・28の4個体の口縁部付近にベンガラの塗布された痕跡がみられた。塗布された範囲は口縁部の一部で、範囲も明確ではな



第63回 出土土器 (1)



第84图 出土土器(2)

いが、他の個体にはみられないことから、意図的に塗布されたものと考えられる。

短頸壺 (32~38)

短頸壺の壺は3個体ある。32・33は口径・器高ともほぼ同一の法量で、天井部外周は静止ヘラ削り調整が施されるなど類似している。34は口径からみて短頸壺の壺であろう。天井部が丸く、器高が高い。35~38は短頸壺である。体部が球形に近いもの(36・37)と扁平で形の張ったもの(35・38)がある。いずれも体部肩に浅い1~2条の沈線を巡らしている。口縁部の高さは低く、体部との境が不明瞭なものもある。底部はすべて静止ヘラ削り調整されている。

壺 (39~44)

壺は6個体確認できたが、うち、完形に復元できたのは3個体である。39・40は法量・調整手法・胎土ともよく似ていることから、同一生産地から供給されたものであろう。やや扁平な体部に、体部径を上回る口縁部は、頸部から内彎気味に大きく外反し、沈線を巡らせる受け口状の屈曲によって区分され、頸部にも浅い沈線を1条巡らせている。体部肩には沈線を1条巡らせ、沈線付近まで静止ヘラ削りされている。44はやや大型の壺で、球形の体部に、体部径を上回る直線的に外反する受け口状の口縁部を付けている。頸部と口縁部の境と体部肩に1条の沈線を巡らしている。底部は体部最大径付近まで回転ヘラ削り調整が行われている。41~43は、口縁部片である。いずれも受け口状の口縁部は、口径8cm前後で、頸部との境に沈線を巡らせている。口径からすれば、小型の壺である可能性が高い。

長頸壺 (45~47)

いずれも脚付の小型の長頸壺で、3個体確認できた。45・47は肩部の不明瞭な球形に近い体部をもつ。脚部は高さ3cm前後で、脚端に向かって大きく外反し、頸部は上方に丸く拡張させている。45は口縁部を欠損するが、体部肩に巡る2条の沈線間に右下がりの斜行列線文を施している。47は体部肩に2条の沈線を巡らせ、上半部で大きく外傾する口縁部を付けている。頸部には2条の沈線を巡らせている。46は丸い底部から屈曲して直線的に延びる肩部をもつ体部に、直線的に延びる口縁部を付ける。体部肩に1条、頸部に2条の沈線を巡らしている。脚部は高さ1.4cmで、外方に内彎気味に踏ん張る高台状で、脚部は下方にわずかに拡張させ、面を作っている。46・47は底部を回転ヘラ削り調整を施している。

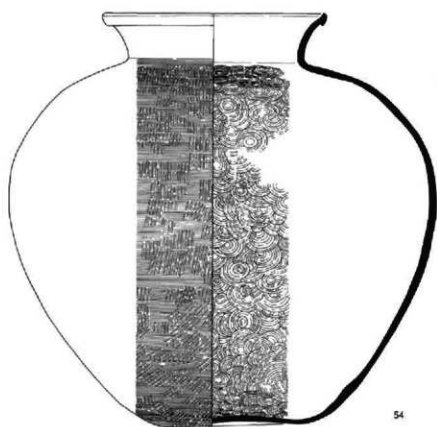
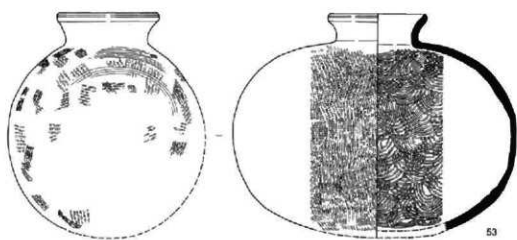
壺 (48・49)

小型の壺と中型の壺の2個体ある。48は扁平な底部に肩部で屈曲する体部に、短く外反する口縁部を付けている。短頸壺に分類した方がよいかもしれないが、口縁部が直立しないことから短頸壺とは区別し、壺I類とする。底部は内側にわずかに肥厚させ、丸い面を作っている。底部は静止ヘラ削り調整されている。

49はいわゆる直口壺で、2号墳出土の壺(第42図18)とともに、壺II類としたものである。肩のやや張った体部の最大径は上位にあり、肩部に1条の沈線を巡らせている。口縁部は短く直立し、頸部は丸く収めているなど、2号墳の直口壺とは肩部の張り、口縁部部の作りで異なっている。口縁部中位には1条の沈線を巡らせている。底部は回転ヘラ削り調整され、体部下半には部分的にカキ目調整痕がみえる。2号墳のものに比べ、口縁部が丸く収められていること、壺肩部が張っていることなど後出の要素を示している。

提瓶 (50・51)

小型と中型の提瓶がそれぞれ1個体ある。50は器高13.7cmの小型品で、八字形に外上方に延びる口縁



第85圖 出土土器(3)

部中位と体部に縦方向の1条の沈線を巡らせている。51は県内では類例のない異形の提瓶である。体部が円盤充填されていることと片側の側面が扁平であることから提瓶とした。片側は扁平であるが、全体的には体部側面は球形に近い体部をもつ。両側中央には径5.8cmの沈線を円形に巡らせ、その内部を放射状に刻突文で飾っている。肩部には小さな粘土塊を貼り付けていた痕跡がみられる。長頸甕のように長い口縁部の上半部は大きく外反し、端部は段を付けている。頸部は間隔を開けた沈線を3条巡らせ、その間をやや右下がりの粗い斜行列線文を施している。精良な胎土と堅緻に焼成され、全面に自然釉が付着し、断面が赤褐色を呈するなど、他の須恵器と異なった特徴がある。

平瓶 (52)

小型の平瓶である。扁平で倒卵形を呈する体部に直立する口縁部を付ける。口縁端部は内彎し、中位に1条の沈線を巡らせている。底部は回転ヘラ削り調整されている。

横瓶 (53)

短く外反する口縁部を付け、端部を上方にわずかに肥厚させている。底部を欠損しているが、体部外面は、縦方向に縦格子叩き目がみられ、内面には同心円叩き目が施こされている。横長の側面には粘土板を充填した痕跡が内面に残っている。なお、横瓶は5号墳から出土しているだけである。

甕 (54)

外方に開く短い口縁部を付ける中型甕である。口縁端部は上下に肥厚させ、内彎する端面を付ける。体部外面は縦格子叩き目の後、粗いカキ目調整を施している。内面は同心円叩き目が明瞭に残っている。法量は、2・3号墳出土の甕とよく似ている。

土師器

平瓶 (55・56)

小型の須恵器模倣とみられる平瓶で、同種のもが1・3号墳からも出土しているが、5号墳出土のものは、口縁部がわずかに外反している。

(2) 武器・工具

鉄鏃 (57・58)

残片であり、鉄鏃とは断定できないが、57は断面の端部が薄くなっていることから、鏃身部の可能性がある。58は頸部片であろうか。

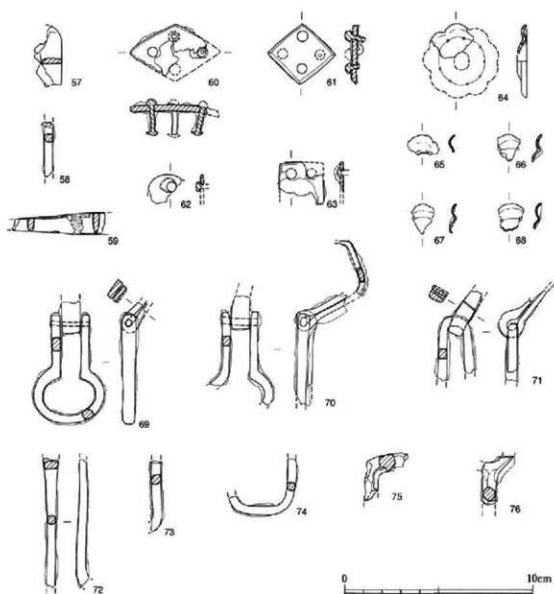
刀子 (59)

残存長5.0cmの刃部と茎部の刀子残片である。断面二等辺三角形の刃部は、刃幅1.2cm、背幅は0.4cm。茎部は断面が方形で、厚さは背側で0.3cm、刃側で0.2cmである。関節付近に木質が残存している。

(3) 馬具

鍔金具 (60・61)

菱形の鍔金具で、錆化が著しく金鋼張は確認できない。60は横長のもので、復元長4.8cm、幅3.0cm、厚さ0.3cmである。径0.6cm、高さ0.3cmの円頭鉋が各隅に4鉋打たれていたようである。鉋の先端は叩き潰されており、地板との間隔が1.1cmほどある。鉋の長さからすると革金具ではないかもしれない。61は長さ3.6cm、幅3.2cm、厚さ2.3cmで、径0.6cm、高さ0.3cmの円頭鉋が各隅に4鉋打たれている。鉋の先端は、地板に沿うように折り曲げられている。



第66図 出土鉄器

革金具 (62・63)

62は残片であるが、厚さ0.3cmの爪形のものであろう。径0.5cmの円頭部がみられ、鉄位置からすれば、2筋であった可能性が高い。63は残存部では復元幅2.4cmで方形を呈するが、原形は不明である。厚さ0.2cmの地板の横方向に径0.5cm、高さ0.2cmの円頭部が2筋が打たれている。いずれも錆化のため、金剛張は確認できない。

鞍 (64～71)

鞍の輪に付く鉄金具であろう。64～68は、花形を呈する座金具の残片である。69～71の鉸具に付くものであろうが、特定できない。座金具は、推定復元を行った64を参考にすれば、径2.5cm前後の円座の周辺に一段下がる9葉の花弁様の座を付ける。花弁座の断面は丸く曲がり、径4cm前後であろうか。円座の外周には径1mmの孔が穿たれている。69・70は刺金をもたない組合式のものである。69は縁金が完

存しており、凸字形の縁金の全長は6.0cm、円環部は径0.5～0.6cmの楕円形で、基部は長さ0.7cm、幅0.5cmある。70も残存部の形状と大きさからみて、69とセットとなるものであろう。基部は径0.3cmの鉄棒を差し込み、幅1cm、厚さ0.4cmの扁平な鉄板を巻き込んでいる。いずれも鉄板は2～3cmのところで折れているが、元はさらに延びて鞍の輪の木質に打ち込まれていたものであろう。鞍の輪に固定するために折り曲げられた鉄板とみられる残片があり、接合しないが70に模式的に示した。71は断面方形の鉄棒を一周させて縁金を作るタイプで、基部だけが残存している。幅0.9cm、厚さ0.3cmの扁平な鉄板を巻き込んでいるが、3cm程度のところで欠損している。

轡 (76)

環状の密部の残片であろうとみられるが、歯片か引|手片かは、残存部だけでは判断できない。

不明鉄器 (72～75)

いずれも残片であり、用途は明らかでない。72は径0.6cmの円棒の先を、断面が幅0.9cm、厚さ0.5cmの長方形に延ばしたような形状で、一方の先はやや折れ曲がっている。73も径0.5cmほどの円棒で、一方が折れ曲がっている。74は断面径0.5cmの円棒状でコ字形を呈し、鉸具の可能性が考えられる。75は断面0.8cmの方形で折れ曲がっている。

(4) 装身具

ガラス製丸玉 (77)

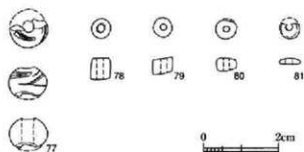
濃緑色を呈するガラス製丸玉が1点だけ出土している。約2分の1弱が欠損しているが、推定径1.0cm、厚さ0.8cm、孔径0.3cmで精美な球形を呈している。

滑石製小玉 (78～81)

黄褐色を呈する滑石製小玉が4点出土している。直径は0.4～0.5cm、厚さ0.1～0.6cm、孔径0.2cmで、直径、孔径とも正円ではなく、厚さも左右にばらつきがある。

6 小結

5号墳は、3号墳の北側に築かれた長径12.8m、短径10.0mほどの長円形を呈する円墳で、全長6.0m、奥壁幅1.3mの無袖式横穴式石室を埋葬施設としている。周囲には2・4・6号墳の3基の古墳が墳丘を接して築かれている。石室は天井石等の上部を失っているが、石室規模は3号墳に次ぐ規模を有している。石室内は後世の再利用のため、遺物の残存状況はよくない。2・3号墳とともに、家形石棺を包蔵しているが、破砕され細片となっていて、石棺の規模・形態は明らかでない。



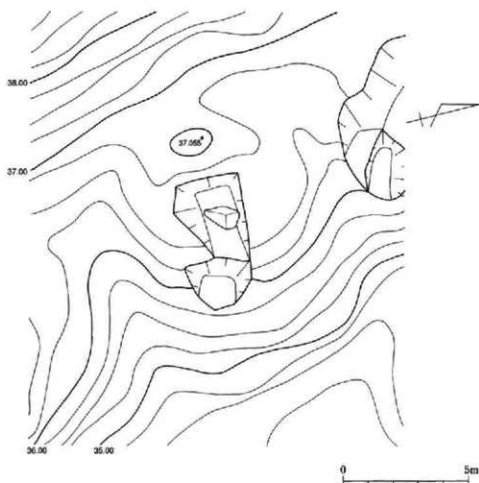
第87図 出土装身具

遺物では、3号墳とともに馬具が副葬されていることが特徴である。轡・革鍔金具・鞆・鉸具程度であり、3号墳の馬具に比べると、見劣りすることは否めない。装身具では、勝手野古墳群中では6号墳とともに玉類が出土し、ガラス製丸玉は、濃緑色を呈する透明度の高い優品である。出土須恵器では、高坏の占める割合が高く、少なくとも17個体を確認

できた。また、皿も5個体出土し、出土須恵器量が相対的に少ない勝手野古墳群では、異例に多い個体数で、他の7基の古墳と須恵器構成比率が相異している。須恵器のうち、坏日は蓋・身のいずれも、外面はヘラ切り不調整もしくはヘラ切り後ナデ調整を施しているのみで、回転ヘラ削り手法はみれなかった。このことは、3号墳下層と後述の7号墳出土の坏日蓋に回転ヘラ削り手法が認められることから、5号墳の坏日は、それらのものより後出的要素を示しているといえよう。また、3号墳下層の坏日Hに比べ、焼分、法量の小型化の傾向がみられ、こうしたことも、後出的要素と考えられる。

第8節 6号墳

1 墳丘 (第88~91図)

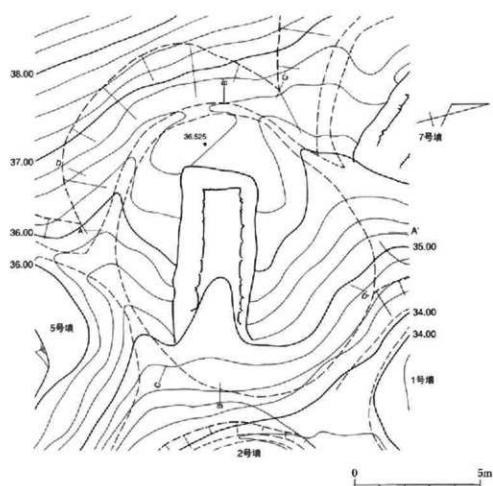


第88図 墳丘 (調査前)

6号墳は古墳群北西部の山麓斜面裾付近に位置する。ほぼ同じ標高には、南側に5号墳、北側に7号墳、下方の段丘緩斜面にあたる南及び東側に1号墳・2号墳がそれぞれ墳丘を接して、4基の古墳に挟まれた極めて狭い範囲に築かれている。特に、ほぼ同標高に存在する5・7号墳の斜面上部側の弧状溝を切っていること、また、墳丘盛土は下方の1号墳の弧状溝を埋めていることが明らかで、6号墳を取り巻く4基の古墳より、築造時期が後出していることが判明した。

調査前の観察では、墳頂部に天井石かとみられる大型の石材が露出しており、その周辺には石材を抜き取った際の攪乱坑とみられる窪地がみられた。墳丘の高まりは比較的明瞭で、墳頂部の高さは、5・7号墳と概ね同様の標高37mほどである。

墳丘の断面観察では、墳丘築造前の旧表土以下の堆積層は認められず、築造時に旧表土層を含めて削り取って墳丘基底部を整形したと考えられる。墳丘の盛土は、石室の構築と併行して行われたものと考えられるが、異なった土壌を交互に積み上げるといった意図は、見出すことはできなかった。



第89図 墳丘（表土除去後）

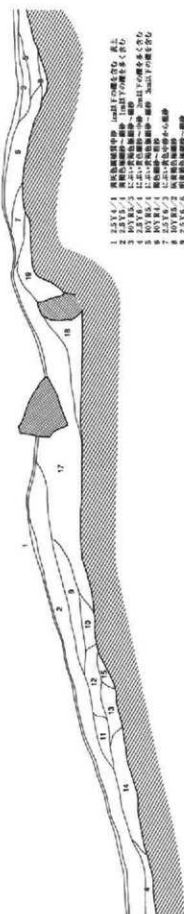
墳丘規模は、長径10.9m、直交方向の短径10.5mで、いびつな楕円形を呈している。6号墳の長径は、石室主軸方向と一致せず、石室開口方向は大きく東に振れているという特徴があり、勝手野古墳群における他の古墳が、石室主軸方向が墳丘長径に概ね一致しているのとは異なっている。このことは、6号墳が先行して築造されていた5・7号墳の間の狭小な隙間に築かれ、十分な空間を確保できなかったためではないかと推察され、勝手野古墳群のうちの最終段階に築かれたことに起因するであろう。なお、勝手野古墳群では6号墳をはじめとして、各古墳が極めて限定された範囲内に築造されているという特徴がある。隣接する地域に、古墳を築造できる十分な空間が存在しているにも関わらず、狭隘な空間があてて選択されていることから、古墳群内において築造位置に強い規制が働いていたのではないかと考えられる。墳丘の高さは、斜面上方側の弧状溝底から0.2m、斜面下方の墳丘裾から2.3mを測る。

2 横穴式石室（第92図）

6号墳の埋葬施設は、南東方向に開口する無軸式の横穴式石室で、石室の全長は5.4m、奥室幅1.4m、石室中央部付近で1.5m、開口部で1.7mを測り、平面形態は開口部に向かってわずかに閉気味である。主軸方位は、S-75°44'-Eの方位をとり、等高線方向に対して開口方向を東に傾け、斜面下方を意識

37,000m
C

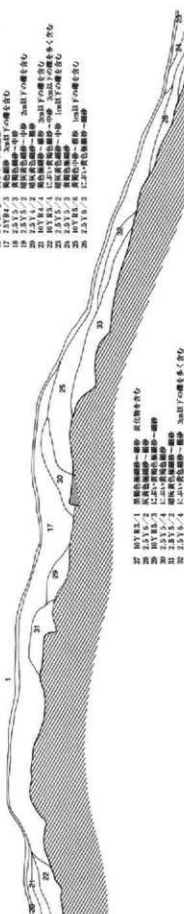
C



- 1 2.5V1/1 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 2 2.5V1/2 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 3 10V1B1/3 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 4 10V1B1/4 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 5 10V1B1/5 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 6 10V1B1/6 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 7 10V1B1/7 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 8 10V1B1/8 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 9 2.5V1/6 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 10 2.5V1/7 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 11 10V1B1/4 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 12 2.5V1/4 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 13 10V1B1/3 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 14 10V1B1/4 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 15 2.5V1/3 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 16 2.5V1/4 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 17 2.5V1B1/3 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 18 2.5V1/2 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 19 2.5V1/1 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 20 2.5V1/1 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 21 10V1B1/4 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 22 2.5V1/4 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 23 10V1B1/3 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 24 2.5V1/3 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 25 2.5V1/2 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 26 2.5V1/1 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む

37,000m
D

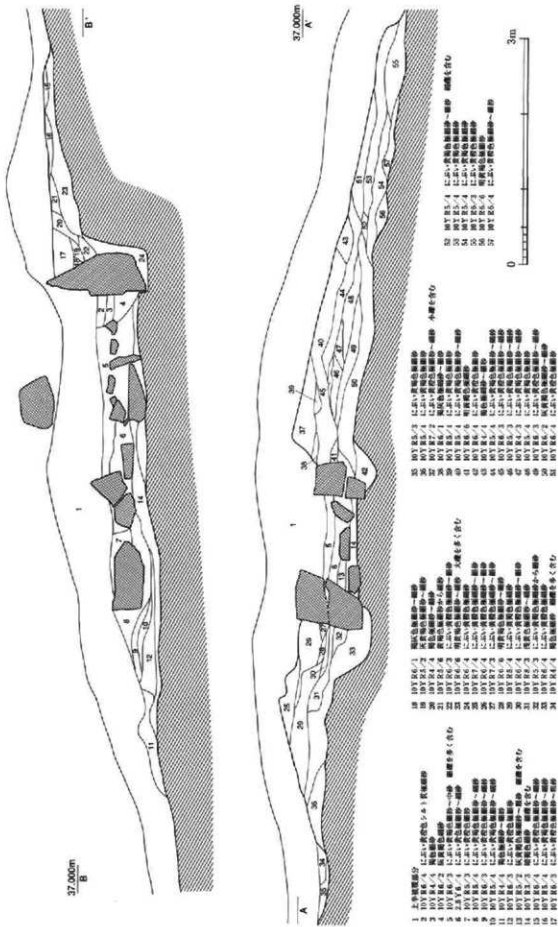
D



- 27 10V1B1/1 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 28 2.5V1/2 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 29 10V1B1/3 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 30 2.5V1/4 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 31 2.5V1/5 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 32 2.5V1/6 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 33 10V1B1/2 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 34 10V1B1/3 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 35 10V1B1/4 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 36 10V1B1/5 12.2-11 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 37 10V1B1/6 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 38 10V1B1/7 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 39 10V1B1/8 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む
- 40 10V1B1/9 扇状地縁部中層 扇状地の礫層を多く含む



第90図 墳丘断面（上半）



第91回 横丘断面 (下半)

した方向に石室を築造している。6号墳の開口方向は、最も近い開口方位をとる4号墳とも7°ほどの相違があり、他の古墳との類似性が認められない。このことは、先にふれたとおり、先行する古墳の間の狭い空間に築造したことによるものと考えられる。

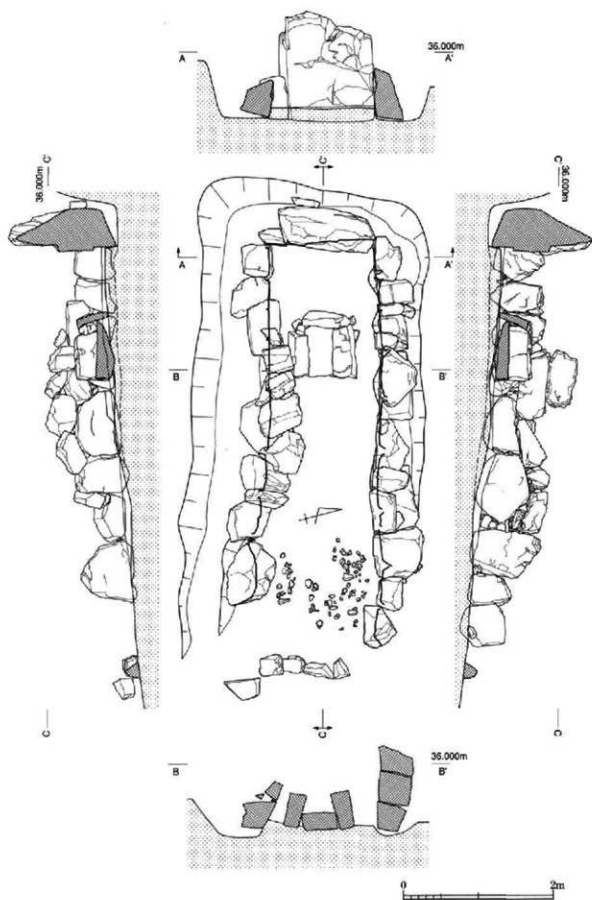
調査前にみられた天井石は、左右側壁上に架っていたもので、非常に不安定な状況であり、石室築造当初の位置を保っているとは考えられず、石室破壊の途上で残置されたものと考えたほうがよいだろう。石室内は、流入した土砂では完全に埋没していたが、6号墳石室内では明治時代初期の半壊とともに、鉄鉢（第138図1070）、陶器蓋付小壺（第137図1063・1064）が出土していることから、石室内が長期にわたって利用されており、石材の抜き取りによる石室の破壊が明治時代以降に行われ、その後埋没したものである。

石室墓壇は、山麓斜面をコ字形の溝状に開削し、石室基礎石を据えている。右側壁にあたる斜面上方では掘り込みの規模が大きく、深さ約0.75mに及ぶ部分がある。

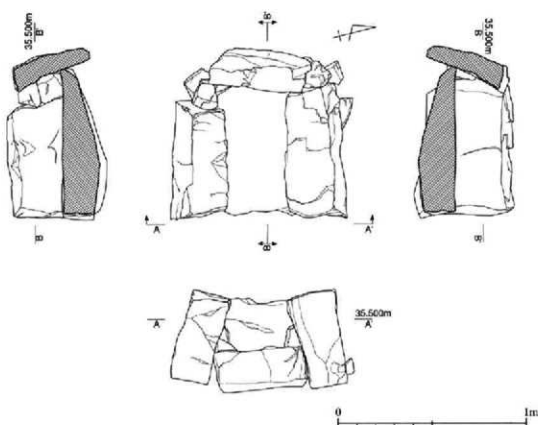
石室奥壁は、基底部に幅1.25m、高さ1.3m、最大厚さ0.55mの長方形を呈する大型の石材が据えられ、右側壁との間隙を小型石材で埋め合わせ、奥壁幅としている。側壁は上部を失っており、右側壁の中央付近で2段、左側壁で3段程度が残存しているものの、奥壁・開口部付近は、基礎石が残されるのみである。左側壁の残存高は、1.1mほどであるが、右側壁は、斜面上部部からの土圧によって、石室内側に向かって大きく彎曲しながら傾斜し、元の石室の高さを失っている。右側壁基礎石は8石が残存し、長さ4.7mで、奥壁側から2石と奥壁から6石目・8石目を石材を縦積みを用いている。左側壁基礎石は9石で構成され、長さ5.4mを測る。両側壁残存長が0.7mほど異なっているものの、抜き取り痕は検出できなかったことから、左右の石室長が異なっていた可能性も捨てきれないが、墓壇の掘り込み状況から類推して、右側壁開口部でもう1石が存在したことが考えられる。奥壁側の3石と7石目は、石材を縦方向に用いている。左右側壁とも開口部方向に向かって、大型の石材が使用されている傾向がみられる。左右側壁とも対称の位置ではないものの、開口部に近い部分の相対する位置に、大型の石材が縦に据えられているようにもみえ、右側壁では開口部の石材の可能性が高いが、左側壁では軸を意識したもののかもしれない。

床面は、奥壁部と左側壁開口部では0.5mほどの比高差をもって、開口部方向に向かって緩やかに傾斜し、基本的には地山面を利用している。石室開口部付近で華大以下の角礫が散漫な状況で検出された。石室床面が後世の再利用による改変を受けていることなど、石室内床面の状況を勘案すると、敷石の可能性は低いとみておきたい。一方、閉塞石とする考え方もあろうが、石室が大きく破壊されている現状と、他の古墳に石室を閉塞した確実な証左が得られていないことを考え合わせると、判断は留保せざるをえない。

左側壁開口部端から0.25mの距離をおいて、石室開口部を塞ぐように、石室主軸の直交した小型の石材4石が、横1列に並んで検出された。なお、この4石からなる石列の右側に隅を接して、この石列と平行しないやや大型の石材1石が検出された。この石材は、4石の石列と高さを異にしていることと、右側壁の延長線上にあり、一連の石列とすると右に寄った感があることから、石列に伴うものものかどうかは明らかでないが、その可能性を指摘しておきたい。この石列は、墓域である石室と後述のように裝飾付須臾器を樹立するような墓前祭祀を執り行う前庭部の境界として敷設されたものであろう。さらに、この石列から開口方向へ1.6mほど前方の左側壁の延長線上付近で、長さ0.8m、幅0.5mほどの範囲



第92図 横穴式石室



第93図 箱式石棺

で石敷が検出された。第95図のように、検出された範囲が小規模であるが、この石敷付近に装飾付須恵器の破片が散乱していることから、墓前祭祀を執り行うための施設である可能性を指摘しておきたい。

3 箱式石棺（第93図）

石室奥中央に設置された組合式箱式石棺1基を検出した。調査を実施した8基の古墳中では箱式石棺を有する古墳は6号墳のみで、家形石棺をもつ2・3・5号墳とも異なった棺構造である。

奥壁から石棺小口外端部までの距離は0.9mあり、右側壁とは0.25m、左側壁とは0.35mの間隙があり、石室主軸線上からやや右側に寄った位置に据えられているが、おおむね石室中央に据え置くことを意図したものともみておきたい。石棺は奥壁側小口石・左右側石・底石が残るのみで、開口部側を失っており、蓋石も検出されなかった。小口石・両側石は底石を挟み込むように設置されているが、蓋石を失ったためか、いずれも石棺内側に傾いている。石棺残存内法規模は、底石とはほぼ一致し、幅0.47m、長さ0.76m、復元高0.23mである。箱式石棺に用いられた石材は、石室石材と同様の流紋岩質溶結凝灰岩で、小口石・側石・底石ともに平滑な面を石棺内面に用いている。底石と側石の長さが合致し、開口部側の現存端からみて、側石・底石は複数の石材を組み合わせて構成していたと考えられる。側石は厚さ0.2m、底石は厚さ0.2mの厚手の石材が用いられている。右側石は長さ0.63m、左側石0.71mで、右側石が8cmほど短いことから、小口石との隙間を上下2段に小型の石材を組み合わせて充填し、左側石との長さを

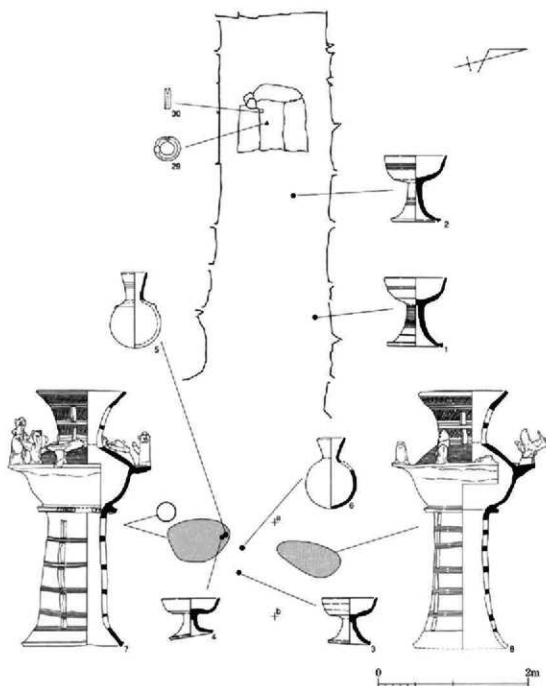
調整している。小口石は厚さ0.1mと比較的薄手の石材を用い、左側石と接する部分の隙間に小型の石材を埋め合わせている。底石は厚さが不揃いの石材であるが、平滑な面を棺内側に用い、小口側石の間隙には小型の石材が充填されている。箱式石棺は開口部側を失っているため、元の長さは明らかでないが、石棺幅が約50cmほどであることから、概ね半分程度を失っていると考えることができれば、約1.5m程度の長さを有していた可能性が高い。

石棺内には、石室破壊後の流入土が堆積していたが、これを取り除くと棺底直上に良く締まった極細砂～シルトの薄い堆積が認められ、底石直上から銅芯金環耳環・碧玉製管玉が各1個出土している。

4 遺物の出土状況 (第94・95図)

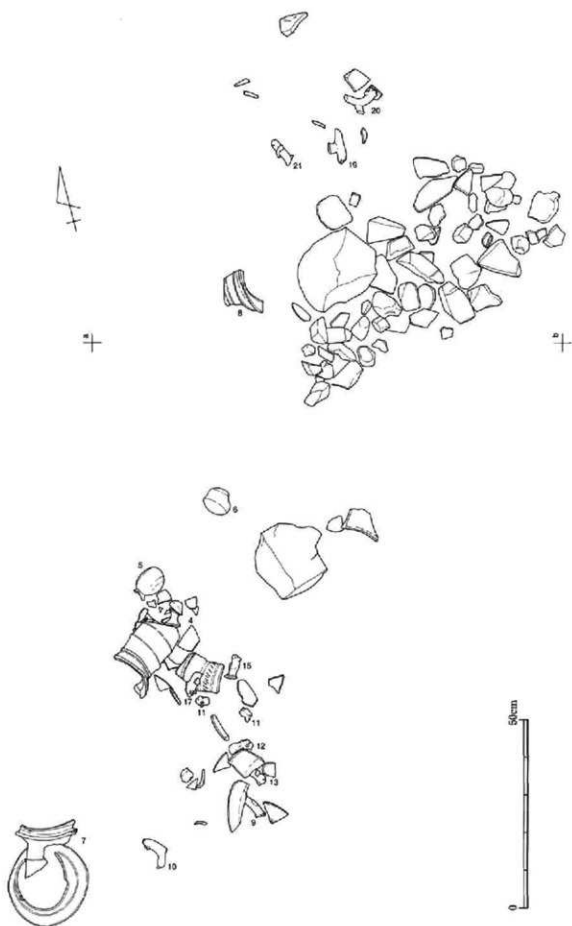
古墳時代の遺物は、石室内・石室内石棺・前庭部にみられるが、石室内からの遺物の出土は限られている。後世に再利用された痕跡がみられ、古墳時代に伴う遺物はほとんど残されていないことから、本来、どの程度の遺物が存在したかは不明である。石室内は、後世の再利用によってほとんど遺物が残されていない。わずかに床面では中央部に近い石棺前方で高坏(2)の脚部と、開口部に近い位置で高坏(1)の脚部が出土している。これらの高坏片は開口部付近及び前庭部で出土した破片と接合することから、破片の一部が前庭部に掻き出されているとみてよい。床面中央に据えられた箱形石棺内からは、底石に接して奥壁側小口板と右側板のコーナー付近に管玉(30)、奥壁側小口板から40cmの位置で耳環(29)が出土している。これらの遺物が出土した層位はよく締まった底石直上の堆積土中であり、石棺の残存度はよくないが、それほど移動していないのではないかと判断され、被葬者の近辺に置かれたものであろう。高坏(3・4)、提瓶(5・6)は大部分の破片が、前庭部の石室主軸線に近い位置で出土しているが、接合する小片が石室内堆積土中からも出土していることから、本来石室内に置かれていたものであろうと判断される。

前庭部からは装飾付須恵器(7・8)が2個体が出土した。2個体の装飾付須恵器はいずれも細片となっていたが、おおむね石室開口部から1.6～1.9mほどの距離を置いた側壁の延長線上で左右の個体がそれぞれまわりをもって出土していることから、2個体が前庭部の左右に置かれていたと考えられる。特に、前庭部右側のもの(7)は、脚端部が正位で検出され、脚部の破片が脚端部の上に直下に崩落したように重なって出土した。このような出土状況からすれば、脚端部が検出された位置に置かれていて、元の位置を保っていることを示している。この位置から北東側にあたる石室主軸線方向に向かって、小像・壺部・脚部など、装飾付須恵器(7)を構成する部位の破片が幅0.55～0.8mの範囲でまわりをもって繋がっている。また、このなかに提瓶(5)・高坏(4)が同一レベルで混在していることから、装飾付須恵器が崩壊した時期と石室内から提瓶や高坏が掻き出されたのが、ほぼ同じ時期であったことが判る。一方、左側の装飾付須恵器(8)は、7の出土位置と石室主軸線を挟んで対称の位置にあたる左側壁の延長線上で、一定のまわりをもって検出された。7ほどのまわりをもたず散漫な出土状況で、破片の一部は、約10m程度離れた2号墳の弧状溝の堆積土上層や、1号墳の石室内流入土中からも若干の破片が出土していることなどから、斜面下方へ流れ込んでいることが判明した。こうしたことから、装飾付須恵器は、2号墳の弧状溝が一定程度埋没した後に、崩落して南東側へ流れ込んだことを示している。また、1号墳石室内埋土からも破片が出土したことは、下方へ流出後に、攪乱があったことを想定できる。



第94図 遺物出土状況（模式図：土器1/8）

以上のような出土状況を勘案すれば、左右の装飾付須恵器が対称の位置に置かれていたとみて間違いない。石室開口部から前方へ約1.3mの位置に、石室主軸線から左右対称に約1.25mの距離を置いて、2個の装飾付須恵器が石室を護るようになら置かれていたと想定できる。



第95回 裝飾付須惠器出土状況

5 出土遺物（第96～102図）

6号墳に伴う出土遺物は以下のとおりである。

(1) 土器

須恵器（高坏・提瓶・裝飾付須恵器）

8点

(2) 工具（鉄釘）

3点

(3) 装身具（銅芯金貼耳環・碧玉製管玉）

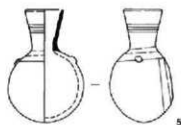
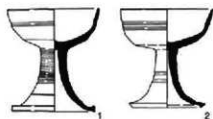
2点

(1) 土器

須恵器

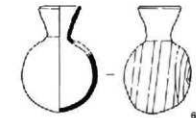
高坏（1～4）

低脚化した長脚の高坏Ⅱ類が4個体出土している。1の坏部は丸味をもった底部から境目の不明瞭な外反する短い口縁部を付ける。底部と口縁部の境は、1条の沈線を巡らし区画されている。脚部部に2条と端部に近く1条の沈線が巡らされ、筒部はカキ目調整されている。端部は上方に拡張させ面を作っている。2は底部から屈曲して立ち上がる口縁部をもつ坏部で、坏Gの形態に近い。口縁部中に2条の沈線を巡らしている。1・2とも沈線の位置は坏部の高い位置にあり、沈線によって境界を画する意図は、希薄さがある。脚部は筒部に2条の沈線を巡らせ、端部は下方に拡張している。3・4も底部から屈曲して外上方に真っ直ぐ延びる口縁部を付ける坏部で、底部と口縁部を画する沈線は巡らされていない。脚部は比較的短く、端部の上下への拡張、筒部の沈線はみられない。



提瓶（5・6）

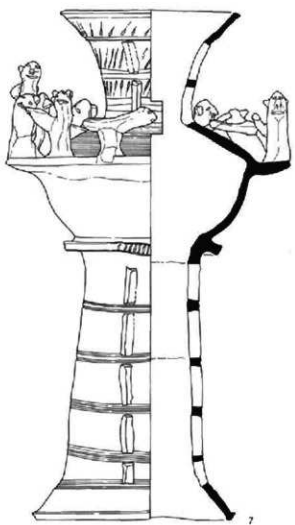
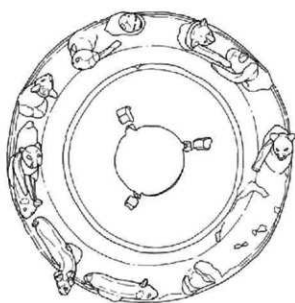
小型の提瓶が2個体出土している。5は直立する長い口縁部をもち、中に2条の沈線を巡らしている。体部側面も球形に近く、肩部にボタン状の円盤を貼り付けている。6は口縁部と体部が直接接合しないが、同一個体として復元した。口縁部は八字形に拡がり、体部側面はさらに球形に近い。



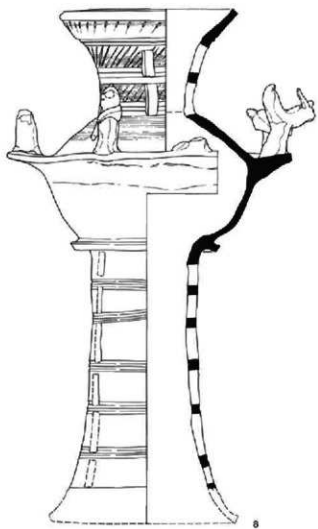
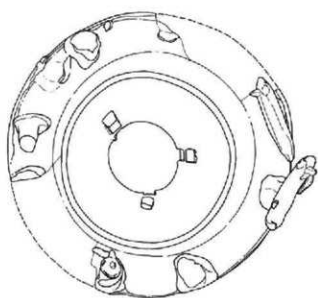
第96図 出土土器

裝飾付須恵器（7・8）

高坏形器台のような長い脚部に、壺を結合するほぼ同形・同大の裝飾付須恵器が2個体出土している。出土位置が特定でき、裝飾付須恵器の使用方法が判明する数少ない事例であることは前項で記したとおりであるが、さらに、裝飾付須恵器本体の形態が特異であり、かつ、運動的な小像を残して、裝飾付須恵器の研究上極めて重要な資料であるといえる。



第97图 裝飾付須惠器 (右個体)



第96図 裝飾付須惠器 (左側体)

7は前庭部右側から出土し、ほぼ完形に復元できた。前庭部左側の8は脚端部を欠損しているが、おおよそ同形・同大のものとみられる。完形に復元できた7は、口径18.0cm、器高54.3cm、脚径21.7cmの大壺品である。外反する口縁部は、高さ12.0cmで、2条の凹線によって受口状を呈し、端部を外側にわずかに肥厚させて外傾する面を作っている。壺体部との接合部付近及び頸部に2条の凹線を巡らせ、3区画している。この区画内に粗い左下がりの斜行列線文を施文した後、頸部側の2区画に長方形の3方透しを2段に穿っている特異な形態の口縁部である。したがって、口縁部は脚部用に製作されたものを口縁部に転用したとみて差し支えないであろう。

壺体部は内彎する下半部から屈曲して直線的に延びる肩部からなり、高さ12.3cm、胴径22.5cm前後で、肩の張った扁平な感があり、壺としては後出の要素を含んでいるといえる。肩部には粗雑なカキ目調整が施されている。壺部の最大の特徴は、壺の底部がみられないことである。底部は欠損もしくは焼成後の穿孔ではなく、明らかに土器製作時から意図的に底部を付けていない。

壺体部の中位に幅4cm、厚さ1cm前後の鐮状突帯もしくは胴部突帯と呼ばれる突帯が、肩部屈曲点に上面を合わせるように付けられている。突帯端部は断面形が方形を呈し、0.6cmほどの面を作る。下面は指ナデの痕跡が明確に残り、壺部との接合面は内側に窪んでいる。この胴部突帯上に後述する動物・人物から構成される小像が飾られている。

壺部と脚部の接合部分には、長さ1.2cm、厚さ1.0cmの、端部がわずかに肥厚した内彎気味の面を作る斜下方に突出するタガ状突帯が付けられている。このタガ状突帯端部の面のうち、長さ9cmほどの範囲にのみ、左下がりの刻み目が0.5~0.8cmの間隔で施文されており、この刻み目のある部分を石室前方に向けて置かれていたことが出土状況から判明している。この部位にのみ刻み目が付けられている意味を歌えて牽強附会するなら、土器の正面観を示していた可能性が考えられよう。

脚部は高さ30.0cmの筒状を呈し、脚端部が外方に大きく開き、端部は上方に拡張され、内彎気味の面を作っている。筒部は2条ずつの凹線によって5段に区分され、凹線間に長方形の3方透しが穿たれている。凹線間は下方に行くにしたがって幅を狭めており、最上部で5.5cm、最下部で2cm前後となっている。壺部との接合面は、反時計回りに強く粗い静止削りのようにナデ付けられている。

小像は9像が残存し、鐮状突帯上面の剥落痕からみて、さらに2~3像が存在したと考えられ、本来11~12像からなっていたとみられる。鐮状突帯に接合する小像は、タガ状突帯端部の刻み目を正面とすれば、右向きの猪→同牡鹿→同騎馬人物→左向きの男性→右向きの女性→左向きの男性→同男性→右向きの男性→左向きの男性の順に8像が並ぶ。残る男性1像は出土位置から、この個体に伴うものと考えられるが、直接接合しない。接合する8像の左側には大→小の2カ所の剥落痕が続き1周する。大きな剥落痕は、長さ7.0cm、幅4.3cm程度と観察され、一つの剥落痕とすれば、接合している8体の小像のような基部の形態ではないので、単独の小像が置かれたものではないだろう。一方、大きな剥落痕が2分割され、2像が存在した可能性も否定できない。ただし、その場合は2像は極めて近接していたと解釈されよう。その次の小さな剥落痕は、接合した人物像のような程度の大きさの小像が付くと考えられる。

脚端部を欠損している8も、細部で法量などが異なる部分が見られるが、基本的には7と同様の形態をとっているため、形態的特徴については省略する。

7と8が最も異なる相違点は、脚部の透かし形態にある。脚筒部は7に比べやや径が細く、凹線によって6区分され、凹線間に6段の透かしが穿たれている。ただし、凹線間の間隔を、4~5cm程度と狭く

設定していることから、脚長はほぼ同規模であったとみられる。7より透かしを1段多く、6段としたためか、透かし孔の幅は、0.5~0.7cm前後と狭くなっているのは、バランスを保つためであろう。

小像が乗る鐙状突帯は、遊接合部で2.3cm、端部で0.8cmの台形状を呈し、厚くなっている。壺部と脚部との境には、幅1.5cm、厚さ1cm前後の器台の名残とみられるタガ状の突帯を巡らせ区画されている。なお、壺体部と脚部接合部の境にあるタガ状突帯端部端部には、7に付けられている刻み目はみられない。

小像は残存率が悪く、欠損しているものを含め、4像分が確認できるだけである。右個体と同様、猪を先頭とすれば、右向きの猪→同社鹿→剥落痕(騎馬人物?)→左向きの人物→突帯欠損部のため不明→剥落痕→右向きの人物→剥落痕→剥落痕→剥落痕→剥落痕→突帯欠損部のため不明の順序で、残存部分では同じ構成をとっているとみられる個所もあるが、小像間隔を勘案すれば、部分的に異なる構成をとっていたと考えられる。

次に、各小像に欠損部分があるものの、それぞれ特徴ある表現がなされていることから、類雑ではあるが、欠損部分を復元しながら、その特徴について触れてみたい。

小像は前庭部右個体(7)ではおおよそ全形が判明するもので像が接合し、ほかに1像が壺本体から遊離しているが、右個体に付いていた可能性が高いことが判明している。左個体は残存状況が悪く、全形の判明している小像は3像で、体部のみが残存している小像が1像ある。その他、各小像に接合しない人物像の腕片が3個体ある。なお、各小像展開図(第97図)はa面が壺外方、b面は動物像では上方、騎馬人物像を含む人物像では前方、c面が土器内方、d面が後方からの図示である。

右前庭部出土鉄輪付壺(7)

① 猪(9)

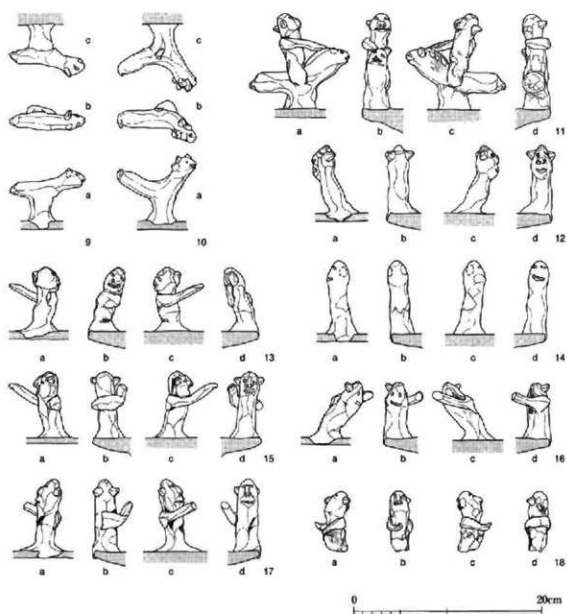
右向き。高さ5.5cm。右耳を欠損している。頭部を左に傾け、尻尾は右方に短く巻き気味である。

② 社鹿(10)

右向き。残存高7.1cm。両角は基部を残し欠損しているが、角が存在したこと明らかで、社鹿であることは間違いない。胴部を彎曲させることで、頭部は右外上方を見上げ、尾部は上げている。尻尾は右上方に短く屈折させ表現している。c面胴部に残存長1.2cm、最大幅0.9cmの三角形を呈する粘土塊が貼り付けられ、斜上方に向けて剥落痕跡がみられる。同様の粘土塊は左個体でも確認できることから、土器製作時に偶然付着したのではなく、制作者が意図的に貼り付けたことが明らかである。鹿後方の騎馬人物像からみて、矢が刺さっていた可能性が極めて高い。

③ 騎馬人物像(11)

右向きの男性。残存高10.0cm。人物の体部はやや後方に傾けている。両側頭部に三角錐状の粘土塊が貼り付けられている。耳ではなく美豆良を表現したと考えられることから、男性像であろう。左腕を欠損しているが、剥落痕から斜上方に向いていたことが判る。社鹿に矢が刺さっていたとすれば、野口1号墳のように弓を携えていた可能性が指摘できよう。右腕は馬の鬣に接するように前方に延び、手綱を引いているとみてよい。顔先と鬣はわずかに空隙があり、直接接していない。鼻は三角形に隆起させ、刺突して鼻孔を開けている。隆鼻した人物と鼻孔のみを表現した人物、鼻の表現をもたない人物の三様があり、各情景に一人ずつ隆鼻した人物が配されていることから、各情景の中心人物を表しているであろう。



第99図 磁器付須恵器小像（右側体）

馬は右耳が欠損している。頭部は手綱を引かれているためか、わずかに右に傾いている。背には粘土をつまみ出して鬣が表現されている。尻尾は右下方に向かって剥落痕かと思われる黒斑があり、先端が欠損しているかもしれない。

④ 人物 (12)

左向きの男性。高さ7.2cm。美豆良があり、男性像であろう。対面する人物像 (13) にすり寄るように、体部は前傾している。顔部は大きく、面長で、頭頂は尖り気味に突出させている。隆起した鼻は、別突によって鼻孔が開けられている。腕は明確な剥落痕がみられないが、前方に向く腕が欠損しているであろう。

⑤ 人物 (13)

右向きの女性像。高さ6.8cm。体部は壺側に内傾している。後頭部に鬘とみられる長径1.5cm、短径1.2cmの長円形の粘土塊を貼り付けていることから、女性像であろう。この像の最大の特徴は、両腕を後方に向けていることである。右腕は欠損しているが、いずれも斜上方に向けている。鼻は隆起がなく、刺突による鼻孔が表現されているだけである。

⑥ 人物 (14)

左向きの男性像。高さ7.7cm。両美豆良・両腕を欠損している。美豆良の剥落痕があり男性像であろう。腕は剥落痕から前方に向けていたことが判る。顔と体部の境が不明瞭で、鼻は全く表現されていないことから、中心人物でないことが判る。口は他の人物像と同様、薄い板状の工具で横方向に開けられているが、下唇は顎部側に拡張されていることから、口を開けているようにもみえる。

⑦ 人物 (15)

左向きの男性像。高さ7.1cm。美豆良があり、男性像で、左腕は欠損しているが、右腕は次像⑧の側頭部を押さえ込むよう前上方に延びている。欠損する左腕は、前下方に向けていたとみられる。隆起した鼻をもち、刺突によって鼻孔を開けている。

⑧ 人物 (16)

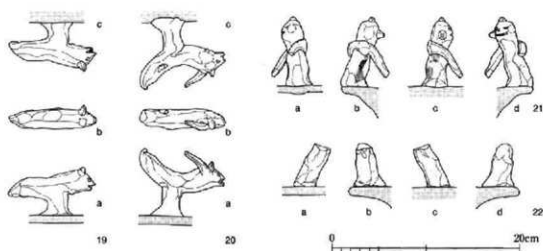
右向きの男性像。高さ6.0cm。⑦の人物像と一体となった人物像である。⑦の男性の右腕によって顔部を押さえつけられていることから、体部は大きく前傾し、今にも倒れそうになっている。左側の美豆良は剥落しているが、右側の美豆良の存在から男性像であろう。右手は欠損しているが、剥落痕から前方に延びていたことが判る。顔と体部の境が不明瞭であり、鼻の表現がないことから、中心人物ではないだろう。

⑨ 人物 (17)

左向きの男性像。高さ7.7cm。両側頭部に美豆良があり、男性像であろう。顔部はわずかに上方に向け、顔部は大きく面長で、居丈高である。頭頂部はやや尖り気味である。右腕は先端を欠損しているが、前斜上方に延びる。左腕は欠損しているが、剥離痕から前方に向いていたことが判る。隆起した鼻をもち、刺突によって鼻孔を開けている。中心人物であろう。

⑩ 人物 (18)

向き不明の男性像。残存高6.4cm。右腕を欠損しているが、美豆良があり、男性像であろう。鐙状の突帯に接合しないが、出土位置からみて右側の裝飾付壺に伴うものであろう。隆起させた鼻を付け、刺突によって鼻孔を開けているが、口は表現されていない。この人物像は、他の人物像とは異なる形態をとっている。第1の特徴は、体部底面に折損した痕跡がみえず、底面両側をわずかに突出させている。体部底面は鐙状突帯もしくは体基部と接合面をもたず、この面は遊離していたのではないかとみられることである。第2点目には、体部前方にM字形に粘土塊を貼り付けていることである。粘土塊中央部から剥落痕があり、元の形状は明らかでないが、この部位で鐙状突帯と接合していた可能性がある。とすれば、髯の人物像であったとも考えられるが、欠損部分がどのような形状であったのか明らかでなく、立位であった可能性も否定できない。したがって、図は左向きの立位として示しているが、像の向き、角度とも不明である。第3点目は両腕の形状が異なることである。右腕は先端を欠損しているが、体部前方に彎曲させ、さらに、先端を掌状に上方に屈曲させている。左腕は短く斜下方に延びている。



第100図 裝飾付須恵器小像（左個体）

左前庭部出土裝飾付壺（8）

㊶ 猪（19）

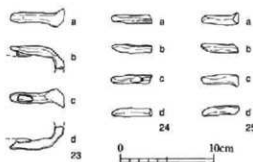
右向き。高さ5.0cm。右耳を欠損している。胴部は右個体の猪に比べ、体部が一回り太く、上唇部を指押さえされ、鼻部状の面を作っていることなど、猪を表現していることが明確に判る。

㊷ 牡鹿（20）

右向き。高さ7.0cm。右側の角が残存していることから、牡鹿と判る。左の耳と角は欠損している。体部を彎曲させているが、頭部は前方を向いているので、尾部が斜上方に大きく跳ね上がっている。尻尾は上方に小さく巻き込んで表現されている。右個体にはない鼻孔が刺突によって開けられ、猪とともに、丁寧なつくりである。c面の体部後方に残存長0.8cm、最大幅0.5cmの三角形状の粘土塊が貼り付けられ、斜上方に向かう剥落痕があることから、右個体と同様、欠が刺さっていた可能性が高い。

㊸ 人物（21）

左向きの男性像。高さ7.4cm。左側の美豆良を欠損しているが、男性像であろう。体部は壺側に傾いている。この男性像の最大の特徴は、頭頂部に小さな突起を作り出されていることである。この突起が何を表現したものが明らかでないが、右個体の㊹の男性像の頭頂部と共通性があるのかもしれない。左腕の先端を欠損しているが、両腕とも下方に向けている。鼻部は表現されていない。



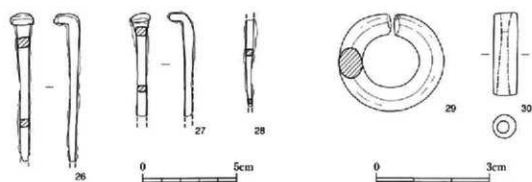
第101図 裝飾付須恵器小像（腕残片）

㊹ 人物（22）

右向きの人物像。残存高4.6cm。頭部を欠損しているが、残存する胴部は大きく前傾し、右個体㊸の男性像と共通していることから、欠損した対面する男性像と一体となった男性像であろう。

腕残片（23～25）

人物像に伴う腕の残片が3点検出されている。いずれも残存する人物像には接合面をもたない。



第102図 出土鉄器・装身具

23は別個的人物像から延びる右腕と左腕の先端が接合している破片である。このような接合している腕を有するのは、対面して、互いに組み合う人物像が想定できる。胴背面に廻る部位が残存していることを勘案すれば、右側体の人物像⑦・⑧の腕の可能性はなく、人物像⑨と欠損している対面する男性像の腕とみるのが妥当であろう。

(2) 工具

鉄釘 (26～28)

石室内黒土中から鉄釘が3点出土した。いずれも完存するものはなく、残片である。26・27は身部の断面は長方形を呈し、端部を打ち延ばして、長側面側に折り曲げて頭部としている。28は鉄釘と判断できる頭部がなく、断面が方形を呈していることから、鉄釘ではないかもしれない。いずれも、木質は確認することができなかった。

(3) 装身具

耳環

勝手野古墳群では耳環の出土が4点と少ないが、そのうち唯一の鋼芯金張耳環で、石棺底石に接して出土した。金箔の残存度は良好である。長径2.8cm、短径2.5cmで、開き部の間隔は0.3cmで、断面は長径0.8cm、短径0.6cmの楕円形を呈する。

管玉

碧玉製管玉が石棺底石に接して出土した。長さ2.2cm、径0.6cmで、両面から穿孔されている。

6 小結

6号墳は、4基の古墳に挟まれた山麓傾斜面の狭小な場所に築かれた無袖式の横穴式石室で、長径10.9m、短径10.5mの円墳である。石室の長さは5.4m、奥室幅1.4mで、8基の古墳中では3・5号墳に次ぐ石室規模を有している。6号墳は5・7号墳との弧状溝の切り合い関係、墳丘が1号墳の弧状溝を埋めていることから、これらの古墳に遅れて築造されたことは間違いない。また、2号墳の弧状溝の堆積土上面に裝飾付須恵器片が流れ込んでいることから、2号墳にも後出する可能性が高い。このような状況から、少なくとも6号墳を取り巻く4基の古墳より遅れて築造され、調査を実施した8基の古墳の中でも、最終段階で築造された古墳であることを示している。

6号墳石室内奥壁寄りの中央には8基の古墳で唯一、組合式箱式石棺が置かれている。石棺は過半を失っているが、棺長76cm以上、幅47cmの規模のもので、石室内攪乱土中に、石棺材とみられるものがあったことから、棺長は残存長のおおよそ2倍程度の長さがあった可能性が想定され、石室中央部付近までを占めていたこととなる。このように考えれば、岸本一宏氏が集成した播磨地域の小型石棺の一例⁴⁾として加えられていた勝手野6号墳の箱式石棺は、小型石棺の範疇で含まれるものではなく、横穴式石室の中心的な埋葬施設であったと考えられる。このような想定が許されるなら、6号墳の石室規模は、家形石棺を有する3基の古墳のうち、大型の横穴式石室である3号墳を除いて、2号墳を上回り、5号墳と遜色のないことから、2・5号墳の家形石棺の規模と少なくとも、変わらない石棺規模であったと想定できる。ただ、装飾付須恵器をもちながらも、6号墳では家形石棺が採用されず、付近で採取される石材を用いた組合式箱式石棺であることは、墓造が後出していることと無関係ではないだろう。

6号墳構造のもう一つの特徴は、石室開口部から約0.25m距離をおいて、石室主軸と直交して置かれていた、少なくとも4石からなる墓域を区切るための仕切り石状の石列が存在したことである。渡邊邦雄氏がいう山口県・岩谷古墳、京都府・小玉岩1号墳等でみられる列石や石列で前庭部空間を確保するため施設とみられ、横穴式石室の前庭部構造を分析した渡邊邦雄氏分類のに従えば、A2類と考えられる⁵⁾。渡邊氏は、この石列の性格について、石列が横一列に並んで前庭部を画しており、祭祀空間というより、墓域を明示する意識が顕著な施設と見なすことができるとし、さらに、祭祀の痕跡は確認されておらず、墓前祭祀の儀礼そのものとは直接関係しない施設であろうとする。6号墳では、この石列の前に2個の装飾付須恵器が樹立されていて、その付近で石敷きが存在することから、装飾付須恵器が生死の世界を分ける標識としての機能をはたすとともに、墓前祭祀が石列外の空間で執り行われたことを示す例になろう。

古墳時代の出土遺物は、前庭部の装飾付須恵器以外は、取り立てて特徴的なものはなく、出土量も少ない。須恵器では坏の出土がないことから時期の特定は難しいが、高坏Ⅱ類・小型提瓶の形態からみて、2・3・5・7号墳で出土した坏は伴わない時期のものであろうとみられ、墳丘の切り合いからみた6号墳の築造順序と矛盾しない。装飾付須恵器については、第6章でふれることにするので、ここでは詳しく述べないが、出土位置、土器自体の形態的特徴、小像群の情景など、装飾付須恵器の研究上、多くの情報を提供している。

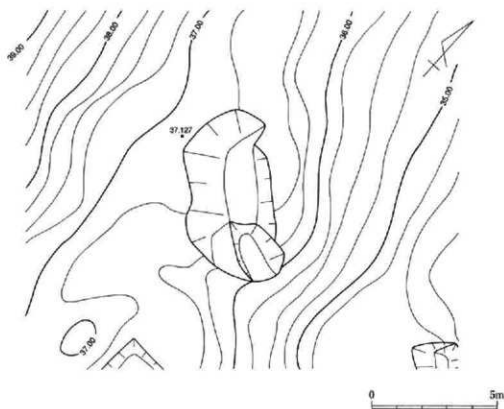
第9節 7号墳

1 墳丘 (第103~105図)

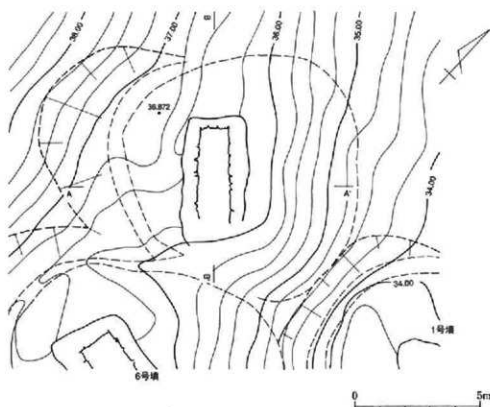
7号墳は古墳群の北側の最奥部にあたる位置にあり、東に向かって傾斜する山麓斜面裾部に築かれている。7号墳の前方の南側に接する6号墳によって、7号墳の墳丘前面が埋り取られている。また、1・6号墳は7号墳の石室開口部を塞ぐような位置にあり、2基の古墳の築造によって、開口部前面の視界が完全に塞がれている状況にある。

調査前の観察では、標高36.5m付近で等高線が舌状に張り出した平坦面がみられ、標高36.5~35m前後で北東に向かって円弧状に墳丘が緩やかに下降していることが確認された。墳丘裾は1号墳の墳丘が接していることから、比較的明瞭に観察できた。また、墳丘の中央部は長さ7m、幅3mほどにわたって陥没し、石室石材が抜き取られていることが予測された。

7号墳も外護列石等の外表施設をもたないことから、墳形及び規模については確実性に乏しいが、石室主軸方向である南北径が9.5m、東西径9.4mほどのいびつな円形を呈している。傾斜地に石室が築かれていることから、石室は墳丘中央から斜面上方側に偏っている。斜面上方は、旧地表を弧状に削り出して墳丘を築し、下端は幅60~70cmほど溝状となっているのは、他の古墳と同様である。墳丘盛土は旧表土上に直接盛られ、斜面下方は概ね盛土によって形成されている。残存する墳丘の高さは、約1.6mほどであるが、残存する墳丘傾斜からすれば、本来、2.5~3m前後の墳丘高があったと考えられる。



第103図 墳丘 (調査前)



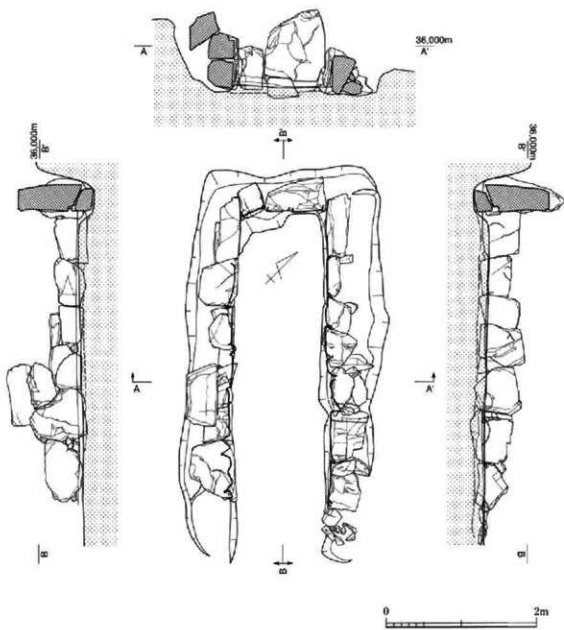
第104図 墳丘（表土除去後）

2 横穴式石室（第106図）

7号墳の埋葬施設は、等高線方向からやや東にずれた南東方向に向けて開口する無袖式の横穴式石室である。主軸の方位は $S-46^{\circ}21'-E$ で、床面の高さは35.5mほどである。

石室の残存状況はよくなく、側壁の一部を除いて、基底部だけがかりうじて残っていた。基底石は開口部の左右1石ずつが抜き取られているが、抜き取り底を含めると復元全長4.5m、奥壁幅1.15m、中央部幅1.25m、開口部幅1.28mの平面規模をもつ。奥壁基底部は2石から構成され、斜面下方側に幅0.8m、高さ0.95m、厚さ0.35mの大型の石材を幅え、右側壁との隙間を縦に小型の石材で埋めている。奥壁は石材形状の関係から下底部が水平に据え付けられなかったようで、片側は小型の石材を置き、側面が垂直になるように調整している。奥壁は上部が後世に打ち割られた可能性があり、本来の高さを示していないと考えられる。

側壁は右側壁で6石が据えられ、残存長3.7m、左側壁で7石が存在し、残存長は3.9mである。開口部でそれぞれ各1石が抜き取られているので、元は右側壁7石、左側壁8石で基底部が構成されていたと考えられる。両側壁はともに比較的良好な大きさの石材が使用されているが、右側壁の奥壁から5石目は大型の石材が立てられている。奥壁側でかりうじて2段目の石材が残存しており、2段目の高さに合わせたとみられ、石材の位置からすると軸石を意識したものであろう。



第106図 横穴式石室

3 遺物の出土状況 (107~109図)

7号墳では奥壁に沿って坏H身が6個体(5~10)、坏H蓋(1~3)が3個体出土している。奥壁付近の堆積土はよく締まり、攪乱土とはみなしがたいので、出土状況とはほぼ完形に復元できたことも合わせると、おおむね埋葬当時の状況を保っていると考えられる。坏蓋と身に限定されるという特徴をもっているが、組み合ったものはみられず、元々、蓋と身が個別に調製された可能性がある。奥壁の一群から、やや離れて坏H蓋が1点(4)みられたが、奥壁部分の3と酷似していることから、奥壁部分のものとして捉えられよう。この付近で鉄釘の残片が出土しているが、原位置を保っているかどうかは定かでない。石室中央部付近で刀子とその基部分かと思われる鉄片が出土している。



第107図 遺物出土状況

また、石室中央部から開口部によった付近で須恵器の高坏がみられた。いずれも残片であり、原位置を保っているかどうかは疑問である。7号墳では石室内・前庭部及び墳丘からは、それ以外の副葬品の出土がなく、後世の擾乱時に持ち出されたことも考えられるが、他の古墳の状況を踏まえれば、埋葬当時から副葬品が限られていたとみえようがよいかもしれない。

4 出土遺物 (第110・111図)

7号墳に伴う出土遺物は、以下のとおりである。

(1) 土器

須恵器 (坏H蓋・坏H身・高坏) 12点

(2) 工具 (刀子・釘) 5点

(1) 土器

須恵器

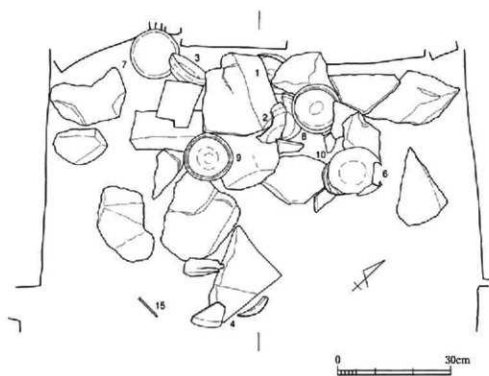
坏H蓋 (1~4)

7号墳から出土した坏は、受部に立ち上がりのある坏と、それに伴う蓋のセットからなる坏H類のみで構成される。出土状況を踏まえれば、7号墳出土の坏Hは、数少ない同一埋葬に伴う一括性の高い一群と考えてよく、勝手野古墳群出土の坏Hの型式を考える上で指標となるものであろう。坏H蓋 (1~4) は口径12.0~12.8cm、器高3.7~4.0cmではほぼ同様の法量を示している。1・2は天井部と口縁部の境を浅く凹線状に窪ませ、口縁端部を外方に彎曲させている。勝手野古墳群出土の坏蓋のなかでは天井部と口縁部の境が明瞭なものの一つである。

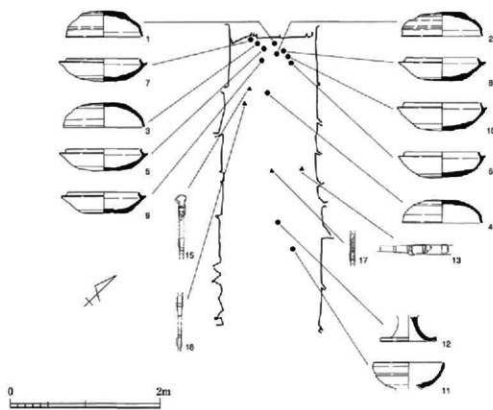
焼成も極めて堅緻で、天井部外面の3分の1程度を左回りの粗い回転ヘラ削りが行われているなど、類似した特徴をもっている。3・4は天井部と口縁部の境をわずかに屈曲させているが、1・2ほど明瞭ではない。天井部内面は仕上げナデが施されている。1と2、3と4はそれぞれ法量、手法とも酷似し、同一工人の手になる製品の可能性が考えられる。

坏H身 (5~10)

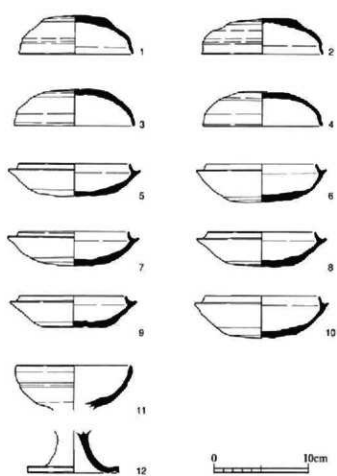
口径11.2~12.1cm、受部径13.3~14.3cm、器高3.3~4.5cm、立ち上がり高0.6~0.8cmで、器高のわずかに高い10を除くと近似した法量をもっている。調整手法の明らかな個体では、底部外面を左回りに補助削りし、ヘラ切り後粗くナデしているだけで、回転ヘラ削り調整はみられない。内面は仕上げナデが施されている。5・6は法量、手法、色調が坏H蓋3・4と似ており、セットとなる可能性が高い。また、7・8・9はよく似た特徴を有していることから、同一窯から供給されたと考えられる。



第108図 遺物出土状況（奥壁付近）



第109図 遺物出土状況（模式図：土器1/8・鉄器1/4）



第110図 出土土器

高坏 (11・12)

坏部片 (11) と脚部片 (12) である。出土状況からすれば、坏目との関係は明らかでない。11は内彎しながら外上方に坏部の中位に沈線を通らせ底部と口縁部を画している。脚の形態は明らかでないが、高坏Ⅱ類とした脚部が付くものであろう。12は脚端部を下方に拡張し増面を作る。坏部と接合面は残存していないが、上端は外上方に彎曲気味であることから、4.7cmほどの脚高であるとみられ、高坏Ⅱ類の脚であらう。

(2) 工具

刀子 (13)

刀子の残片で、刃部先端と茎基部を欠いている。他に小片があり、刃部の一部をなすものであろう。大きな破片は、刃部と茎部付近の残片である。残存長は5.4cm、刃部幅は1.0cmで、断面二等辺三角形を呈し、背幅は0.3cmである。茎部は断面長方



第111図 出土鉄器

形を呈する。間部には幅1.0cmの鍔金具が付く。小片は、刃部の残片であらう。

釘 (14~18)

鉄釘は奥敷に近い床面から出土しているものの、他の古墳の状況から勝手野古墳群で用いられた木棺が釘を使用している確証はない。したがって7号墳出土の鉄釘も、確実に古墳時代のものと断定できない。出土した鉄釘は頭部と身部の残片で、断面長方形で木質が残存し、釘であることは間違いないであ

ろう。16-18は、断面が長方形の残片で、釘と断定できず、鉄製の可能性もある。17は木質が付着している。

5 小結

7号墳も他の古墳と同様、石室は基底石を残すのみで残存状況は良好とはいえない。墳丘も石室石材の抜き取りのために上部が損壊を受けていることが判明した。墳丘は径9.5mほどのいびつな円形を呈するが、円墳としてよいであろう。埋葬施設は無袖式の横穴式石室で、石室残存長3.9m、奥壁幅1.16mであるが、開口部で石材が抜き取られていることから、復元長は4.5mほどであったと推定される。

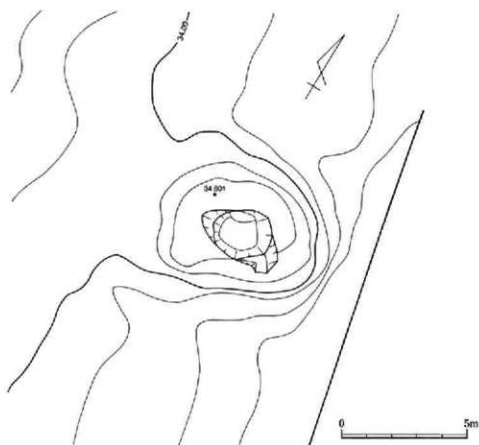
右側壁には袖石を意識した縦長の石材が用いられ、袖石の名残を留めている。床面は開口部に向かってわずかに下降させることで、石室内の排水機能をもたせたのであろう。

7号墳の石室規模は、調査を行った8基の古墳のなかでも、1号墳とともに小型の部類に属し、石室幅や遺物の出土状況からみて、単葬墓であった可能性が高い。

7号墳から出土した遺物は多くないが、奥壁付近で須恵器の坏日が一括で出土した。勝手野古墳群では遺物残存状況がよくないことから、勝手野古墳群の築造時期を考える上で重要な遺物といえよう。この一群の坏日は、3号墳第1次床面出土の坏日と類似性があり、7号墳が勝手野古墳群では早い時期に築造されたことを示している。また、7号墳の開口部前方を1・6号墳が塞ぐように築かれていることから、7号墳が1・6号墳の2基に先行する古墳であることが想定される。鉄器は極めて少なく、刀子と鉄釘のみである。土器とともに後世に持ち出されたことも考えられるが、当初から多くの鉄器が崩壊されていたとは考えにくい。なお、釘の帰属する時期には不安がある。

第10節 8号墳

1 墳丘 (第112~114図)

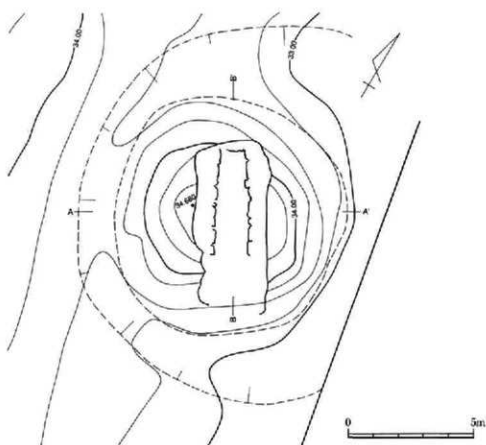


第112図 墳丘 (調査前)

8号墳は古墳群中では最も低位に築かれた古墳で、唯一、墳丘すべてが段丘面の緩やかな傾斜面に築かれている。また、他の7基の古墳が互いに墳丘裾を接するように築かれているのに対し、斜面上方の3・4・5・2号墳が8号墳を中心として円弧状に取り巻くように、12~18mほどの距離を置いて築かれている。そのため、他の古墳との直接的な切り合い関係は認められなかった。墳丘の東側は、開墾により一部削平を受けているが、墳丘はおおむねよく保存されている。墳丘西側斜面には平安時代後期の勝手野2・3号竈が築造されており、墳丘外周の溝が灰取となっている。なお、勝手野2・3号竈については、第5章で記述するので、本節では記述しない。

調査前の観察では、標高34m付近で高さ1mほどの墳丘状の高まりが確認でき、墳丘中央部には長さ3.5m、幅2.1mほどの楕円形を呈する落ち込みがあり、天井石かとみられる石材が露出していたことから、石材が抜き取られた横穴式石室を埋葬施設とする円墳であると想定された。

8号墳の墳丘外周には周溝状の掘り込みが間断されていて、東側の削平部分を除き、墳丘規模は比較的明確に把握することができた。石室主軸方向及び直交方向の墳丘径は、いずれも9.4mほどで、ほぼ正円形に近い平面形を呈している。墳丘の外周には、山麓斜面に築かれた古墳が斜面上方側にのみ弧状



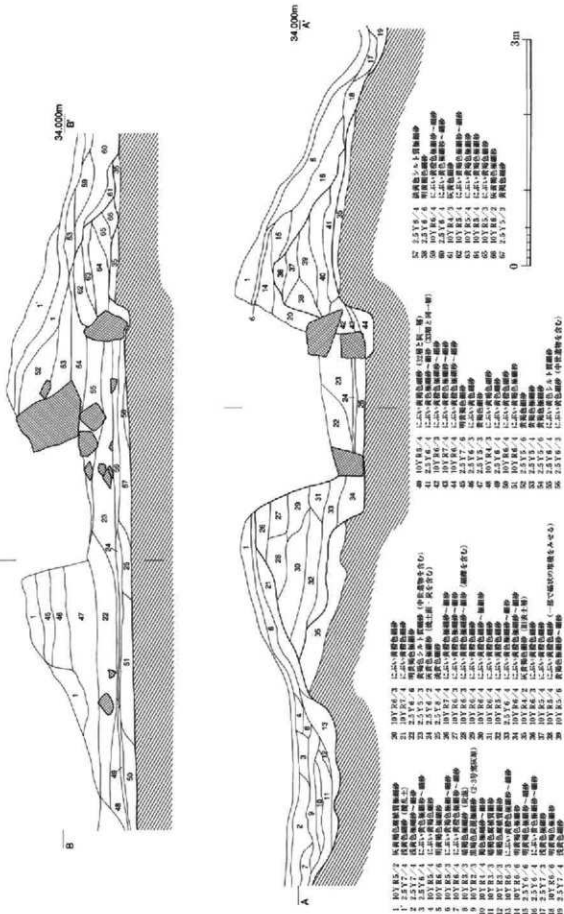
第113図 墳丘（表土除去後）

に溝を開削するのに対し、斜面下方側にも溝が掘り込まれていて、周溝状に廻っているようにみえる。ただ、東側の斜面下方が削平されていることから、東側の状況は不明瞭であるが、斜面下方に向かうにしたがって溝幅が拡がり、深さも浅くなる傾向があることを考慮すれば、東側部分では溝は存在せず、完周していなかったことが考えられる。この溝は石室開口部前面も開削されていて、墓道部分を掘り残しているような痕跡は確認できなかった。同様の状況は、段丘面に築かれた2号墳でもみられ、各古墳で前庭部及び墓道を明確に検出できなかったことから、勝手野古墳群では墓道として通路を設置することが、明確に意図されていなかったのではないかと想定できる。

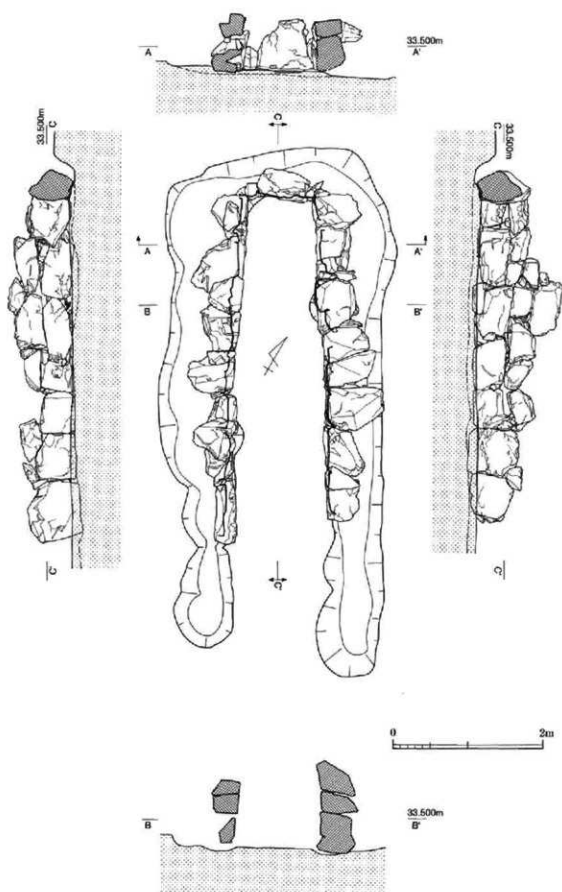
墳丘は外周列石等の外表施設をもたず、盛土によってのみ築かれている。墳丘盛土は、溝の開削土を用いたとみられる黄褐色系の土であり、石室の構築に合わせ、墳丘周囲から石室方向に向かってわずかに傾斜をもちながら、順次積み上げられているらしいことが観察できた。なお、墳丘頂部付近は石室の破壊によって相当程度の損壊を受け、築造時の墳丘高は明らかでない。

2 横穴式石室（第115図）

8号墳の埋葬施設は、南東方向に開口する無袖式の横穴式石室である。石室主軸方位は、 $S-30^{\circ}12'-E$ で、調査を行った8基の古墳では、最も南向きの開口方向を採り、開口方向では他の古墳との類似性が認められず、南から東へ 45° 前後の2・5・7号墳とも 15° 程度、1・3・4号墳とは 35° ほどと相当



第114圖 墳丘断面



115圖 横穴式石室

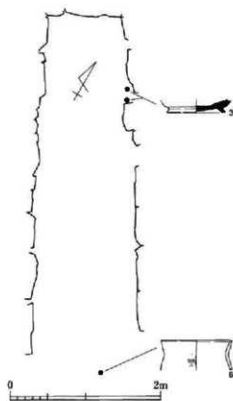
の違いがある。

横穴式石室の基礎石を据えるための墓床は、石室床面を掘り残して、幅3.0m、左側壁部長6.3m、右側壁部長6.0mと左右でやや長さが異なったコ字形に掘り込まれている。墓床の溝幅は、0.8～1.0mほどで比較的一定している。

石室残存長は右側壁で4.6m、左側壁で4.3mで、奥壁幅1.0mを測る。開口部付近の両側壁基礎石が左右とも2石程度が抜き取られていることが墓床から観察でき、石室復元長は6.0mほどであったと推定される。壁体も左側壁の一部で3段目まで残存している程度で、全般的には残存状況はよくないが、他の古墳と同様、付近で採取された流紋岩質溶結凝灰岩を用いている。奥壁は幅0.8m、高さ0.7m、最大厚0.95mの大型の石材を縦積みにし、側壁との間隙を小型の石材を縦積みで補って基礎部としているが、その上部の石積みについては明らかでない。側壁は左右とも基礎石は7石が残存し、先に触れたように、開口部付近の2石程度が抜き取られていると考えられる。壁体は3段目まで残存する部分では、高さ1.1mほどである。基礎石は比較的均質大きさの石材を横積みにしており、2段目は基礎石より小型の石材を用いているが、比較的高さをそろえていて、少なくとも残存する2段目までは目地を通そうとする意識があったのではないかとみられる。床面はわずかに開口方向に向かって傾斜しており、奥壁と開口部の比高差は5cmほどである。床面には敷石、排水溝等の施設は確認できず、本来、そうした施設を作らなかったであろう。

3 遺物の出土状況（第116図）

8号墳は、中世の墓跡として利用されていたことから、石室内は直近の作業場として利用されていたらしく、古墳時代の遺物の出土はほとんどみられない。特に、石室床面から出土した遺物の多くは中世の土器のみで、土師器甕（6）片が石室開口部付近から出土しているのみである。その他、石室埋土中からは平瓶（4）片が出土し、前庭部、墳丘表土からの出土片と接合している。8号墳出土として扱っている坏H蓋（1）は、出土位置が8号墳背面の馬溝付近からの出土である。なお、8号墳背面側に坏Hを伴う2・5号墳が存在することから、それらの古墳に伴う可能性を考慮した方がよいと考えられる。また、坏B蓋（2）は平成4年度に実施した確認調査14トレンチ出土のもので、坏B（3）が8号墳前庭部から出土しているのが、奈良時代の遺物が8号墳周辺から出土していることになるが、この土器も8号墳に伴う確証はない。甕片（5）も前庭部からの出土である。以上のように、8号墳出土として扱う遺物のうち8号墳の遺物として確実なものは皆無で、須恵器の平瓶と土師器甕がその可能性を指摘できるだけである。



第116図 遺物出土状況（模式図：土器1/8）

4 出土遺物（第117図）

8号墳に伴う出土遺物は以下のとおりである。

（1）土器

須恵器（坏日蓋・坏B・坏B蓋・平瓶）	5点
土師器（甕）	1点

（1）土器

須恵器

坏H蓋（1）

出土状況の項でも指摘したように、8号墳に伴う確証はない。口径11.5cmで、分量からすれば2・5号墳出土の坏日蓋とみても矛盾はない。底部外面をヘラ切り後ナデ調整を行っていることと内面を仕上げナデ調整しているものは2号墳出土の坏日蓋にはなく、5号墳では一般的である。ただし、両古墳とも出土数量が限られていることから、いずれに帰属するものかは断定できない。

坏B蓋（2）

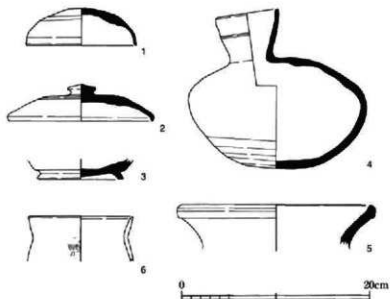
平坦な頂部から周縁にかけて丸味をもち、下方に屈曲する短い縁部からなる蓋で、擬宝珠状のつまみが付く。

坏B（3）

底部片であるが、おそらく高台の付く坏Bであろう。底部は回転ヘラ削り調整を行い、内面には仕上げナデがみられる。

平瓶（4）

扁平な倒卵形の体部をもつ平瓶である。体部上面の円蓋充填を切って口縁部が付けられ、頸部に1条



第117図 出土土器

の沈線が巡っている。口縁端部はやや内彎気味である。底部は回転ヘラ削り調整されている。

甕(5)

口縁部片である。口径20cmほどで、2・3号墳出土の甕の口径に近いことから、中型甕であろう。端部は丸く上下に肥厚している。

(2) 土師器

甕(6)

口縁部付近の破片であり、口径・傾きに不安が残る。口縁端部は尖り気味に収めている。体部には縦方向のハケ目痕が残る。体部下半は球形のものであろう。

5 小結

8号墳は段丘緩斜面に築造された径9.4mほどの円墳で、石室は上部が破壊されていて残存状況はよくないが、南東に開口する復元長6.0m、幅1.0mの無袖式横穴式石室であることが判明した。墳丘外周には傾斜面下方にあたる東側を除いて、周濠状の溝が巡らされ墳丘を画している。平安時代後期には、墳丘斜面が小型の竈として利用され、石室内もその作業場として再利用されたためか、石室内には古墳時代の遺物は少数の須恵器を除いて、ほとんど残されていない。そのため、古墳の築造時期は不明確であるが、5号墳から流れ込んだ可能性の高い坏皿蓋を除外すると、床面出土ではないものの、平甕は倒卵形を呈する体部をもち、頸部に沈線を巡らせる特徴を有していることから、勝手野古墳群出土の平甕としては古相を呈していると考えられる。

第11節 未調査の古墳(9～11号墳)

1 墳丘

工事対象範囲外のため、調査を実施しなかった古墳が3基存在する。いずれも3号墳の南側にあり、加古川に最も近い位置にある。

9号墳は、3号墳の南側に隣接した標高36m付近に存在し、墳頂部には南東方向に盗掘坑がみられる。墳丘は石材の抜き取りのため、大きく崩れていて墳丘規模は明確でないが、斜面上部には弧状の落ち込みがかるうじて確認することができるので、径10m程度の円墳であるとみられる。石材の露頭はみられないが、抜き取り坑の痕跡から、埋葬施設は横穴式石室であることは間違いないであろう。

10号墳は、9号墳の南東側にあたる標高33～34m付近の段丘面に築かれている。墳丘は他の古墳と同様、石材が抜き取られているため、大きく崩れていて、規模は不明確であるが、概ね径10mほどとみられる。なお、本調査地区の南端から須恵器坏Iが2個体出土した。調査を実施した古墳からは相当の距離があり、最も近い3・8号墳からでも30～40m以上離れていることから、3・8号墳のものとは考えがたい。10号墳が土器出土地点に最も近接し、かつ、石室開口方向にあたることを考慮すれば、10号墳の横穴式石室から抜き出された土器と考えるのが妥当であろう。

11号墳は勝手野古墳群最南端に存在する古墳である。標高33～34mの位置に存在し、標高からすれば、段丘面に築かれた古墳のうちの1基であるが、加古川に面した崖際にあることから、この付近では段丘面が顕著に認められない。墳丘は残存状況が悪く、墳頂部には石材の抜き取り坑がみられる。わずかに

残る墳丘の状況からすれば、径10mほどの円墳で、埋葬施設は横穴式石室であると考えられる。なお、11号墳の南側には古墳を築造するスペースがなく、南側にはそれ以外の古墳は存在しない。

11号墳の墳丘南端からは、山塊が加古川に遮られて、等高線が西側に廻り込み、加古川に面した山麓斜面下は急崖となっている。なお、この急崖付近では、勝手野古墳群の横穴式石室に使用された石材である流紋岩質溶結凝灰岩の露頭がみられ、石室の石材がこの場所から切り出されたのであろうと推定される。

2 出土遺物

(1) 土器

須恵器(環I)

2点

環I(1・2)

出土した土器はすべて環Iである。1は緩やかに屈曲して直立気味の口縁部を付ける。端部はわずかに肥厚する。2は口縁部片である。口縁端部は短く、内方に屈曲し、内側に肥厚気味である。端部を肥厚させる環Iは、2号墳・4号墳出土のものと形態的によく似ている。10号墳石室から掻き出されたとみられる遺物は、即断はできないが、2・4号墳と近似する造営時期を考慮しておく。



第118図 出土土器

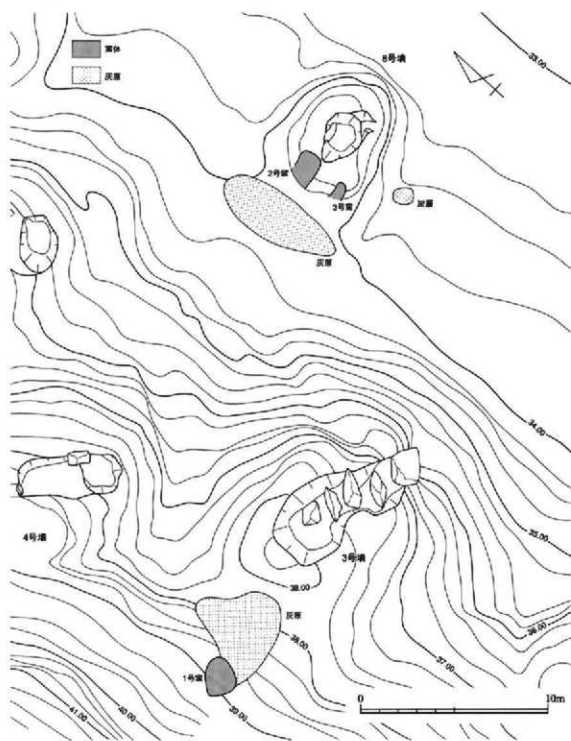
[注]

- 1) 高島信之祐『毛無山3号墳発掘調査報告書』小野市教育委員会 昭和54年
- 2) 十河良和「加古川流域産家形石棺についての一考察—組合式家形石棺身について—」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』平成5年
- 3) 大久保奈奈「金銅装の髹」『古代探叢』Ⅲ 早稲田大学出版会 平成3年
- 4) 宮代栄一「中央部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』第30号 平成5年
- 5) 宮代栄一「古墳時代の金属装飾の研究—跣地金銅装飾を中心に—」『日本考古学』第3号 平成8年
- 6) 岸本一実「石室内に小型石棺を内蔵する古墳について」『奥新田東古墳群』兵庫県教育委員会 平成13年
- 7) 渡邊邦雄「横穴式石室前庭部における祭祀施設」『古代文化』第54巻第2号 古代学協会 平成14年

第5章 勝手野窯跡群の調査

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯



第119図 窯跡の位置

勝手野窯跡群は、勝手野古墳群内に位置する平安時代後期の窯跡3基の総称である。窯跡群は、山陽自動車道建設に先立つ埋蔵文化財分布調査の段階では知られていなかったが、平成4年に実施した確認調査の際、3号墳西側の山腹に設定したNo13トレンチで、被熱面と炭層が検出されたことを端緒として、その存在が明らかとなった（1号窯）。その後、勝手野古墳群の本発掘調査途上、8号墳の墳丘西斜面で2・3号窯が相次いで検出され、勝手野窯跡群と呼称することとなった。

2 調査の概要（第119図）

本発掘調査着手時点ですでに知られていた1号窯は、古墳群調査に先がけて調査を実施し、本発掘調査途上に検出された2・3号窯は、8号墳の石室及び墳丘の調査と併行して調査を実施した。

調査にあたっては、各窯跡の推定される長軸方向を基準とした任意の座標系を設定し、長軸とこれに直交する方向に断面観察用の畦畔を残しながら、調査を行なった。設定した任意座標系の基準点に対しては、国土座標を基準とした座標値を与えている。

第2節 1号窯

1 遺構（第120図）

（1）窯体

1号窯は、3号墳西側の山腹斜面に築造されている。平成4年の確認調査の際に、被熱面の一部が検出されたことを端緒として、存在が明らかとなった。

調査の結果、検出したのは、わずかに遺存した被熱面である。この被熱面の斜面下方は3号墳の周溝となっており、周溝部分を含め広範な炭層の堆積が認められた。このことから遺存していた被熱部分は窯の焚き口付近、炭層は灰原に相当するものと判断した。

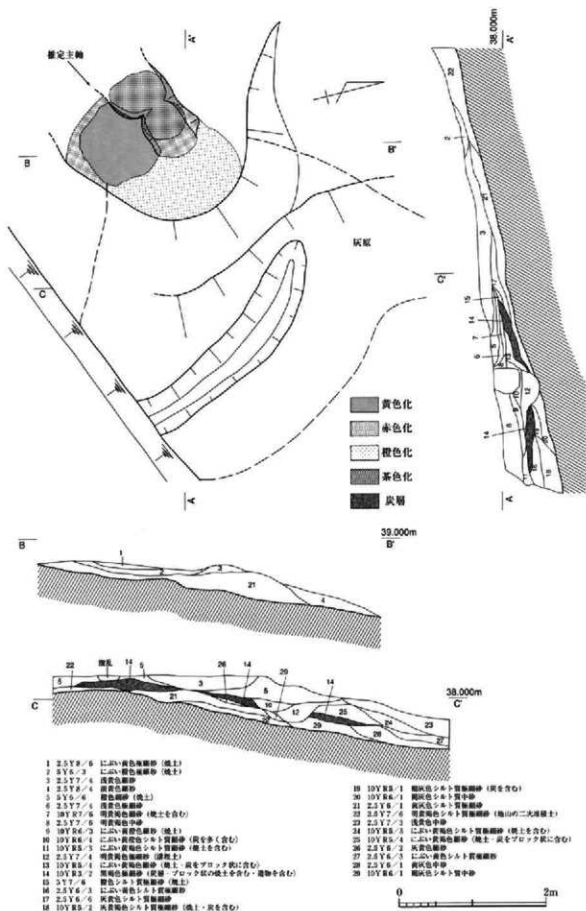
遺存する焚き口部分は、標高38.5m～39.0m付近にあって、長径2.1m、短径1.76m、形状は楕円形を呈する。焚き口付近における山腹の平均傾度は約22°であり、床面は樹根等の影響で著しく劣悪な状態であった。被熱面は、最大厚0.2mが遺存していたが、この中からは遺物は出土していない。焚き口部西側は、一部擾乱を受けており、焼成度の異なる複数の層が露頭していた。

窯体は焚き口付近のみ遺存していた。焼成部等の窯体はその上方にあったと考えられるが、現状ではその痕跡すらみいだすことができなかった。残存していた部分では還元状態の部分はみられず、いずれも橙色・黄褐色～暗赤褐色を呈する酸化状態であった。また、窯壁も酸化状態のものがわずかに出土しただけである。

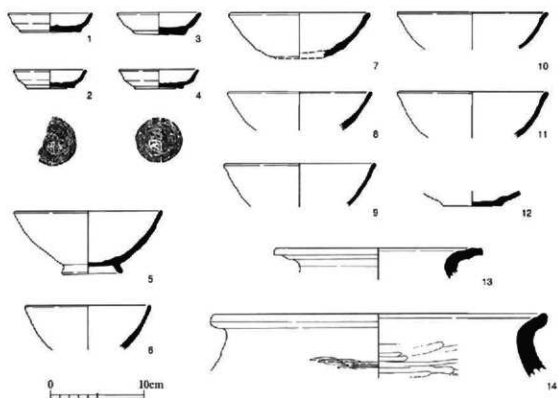
（2）灰原

被熱面の下方には厚い炭層の堆積が認められた。炭層は被熱面に接する位置から堆積が始まり、緩やかな傾斜をもって3号墳周溝内の堆積土を覆っている。炭層の上面には、これを掘り込んで窯体の長軸方向に直交する溝が設けられており、その内部及び上層にも炭泥じりの堆積土が認められた。

灰原を形成する炭層の分布範囲は、長さ4.6m、幅3.0m、厚さ0.2m、面積は10㎡強で焚き口付近を軸にして、狭い扇形の範囲を占める。灰原からはコンテナ3箱の須恵器が出土した。



第120図 平面・断面



第121図 灰原出土土器(1)

2 遺物(第121~123図)

1号窯灰原では、須恵器の鉢を中心として、小皿・碗・甕が出土した。土器には、酸化焙焼成のものと、還元焙焼成のものとがみうけられるが、片口鉢・甕等大型の器種が焼成されていることから、1号窯は須恵器窯と判断し、酸化焙焼成状態のものも須恵器として図示している。

小皿(1~4)

口径7.5~8.7cm、器高2.0~2.4cm、底径5.1~6.5cmで、平底から体部が屈曲しながら立ち上がり、口縁部をつまみだす形態で、底部と体部の境は明瞭である。内外面とも回転ナデが施され、底部切り離しは回転ヘラ切りを行っている。焼成は不良で、酸化焙焼成状態のものがある。

碗(5~12)

完形のものがないため、形態については不明である。器高が高い輪高台のものと、器高が低い平底のものがある。

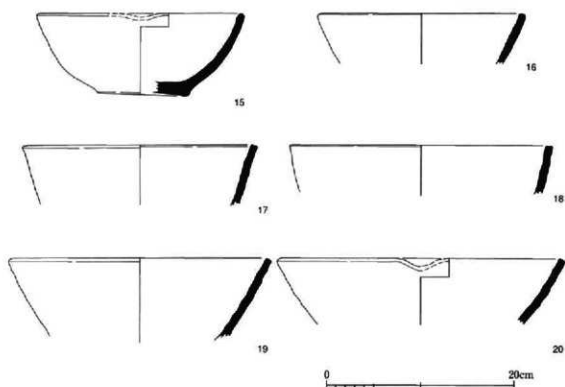
5は、底部にハの字に開く輪高台が付く。体部は丸味をもち、口縁部外面はやや強いナデを施す。焼成は良好で還元焙焼成である。

7~12の碗は、口径14.5cm~15.8cm、底径5.3cm~5.5cm、器高4.8cm。平底で体部は丸みをもち、口縁部外面はナデが施されて少し外反している。還元焙焼成のものと酸化焙焼成状態のものがある。

甕(13・14)

口縁部のみ残存する。いずれも口縁部内面に凹みをもつ形態である。

13の口縁部は平坦面をもち、断面は方形を呈する。



第122図 灰原出土土器(2)

14は短い頸部をもち、口縁端部をつまみあげる形態である。他に体部の破片が出土している。焼成はいずれも酸化焙焼成状態である。

鉢 (15-27)

1号窟の中で最も多く出土した器種である。口径によって、20cm前後の小型の鉢(15・16)、24cm以上(17-26)の大型の鉢の2タイプに分類できる。

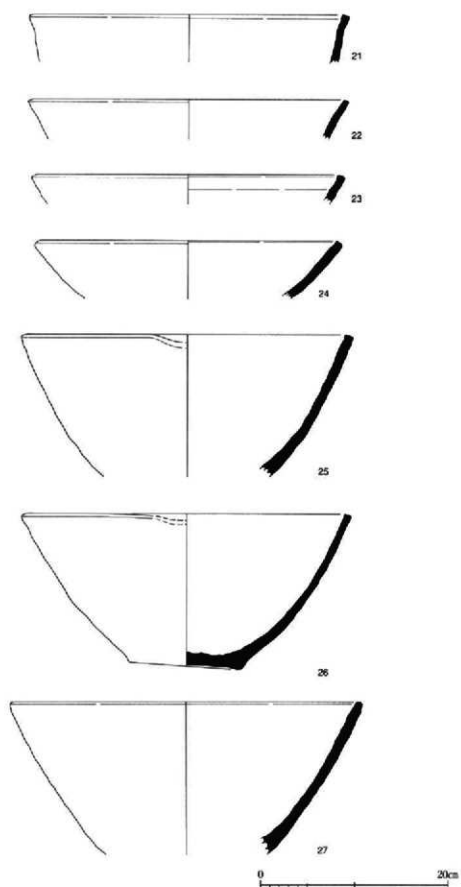
小型の鉢は、口径21.2cm~21.3cm、器高8.5cm。平底から体部がやや内彎しながら立ち上がる。口縁端部は平坦に仕上げられており、断面は方形を呈する。焼成は良好である。

大型の鉢は、口径24cm~36.5cm、底径12.2cm。すべて平底から体部が直線的に口縁部まで伸びる形態である。口縁端部は平坦に仕上げられており、断面は方形を呈する。口径に対して器高が高く、立ち上がりは急斜度である。すべての個体が、酸化焙焼成の状態である。

3 小結

窟構造については、山腹の岩盤の掘りこみが浅いこと、また斜面上方に窟体の痕跡がほとんど無いことから、地上部の構造が占める割合が高かったと推測できる。このことが崩壊を早めたためか、調査時にはわずかな被熱面しか検出せず、地上部の構造は不明である。

焚口と考えられる被熱面では窟廃絶後の自然堆積層がみられるが、その中には、酸化状態の糜炭は含まれるものの、還元状態の糜炭は含まれておらず、周辺でも出土していない。また、出土遺物も酸化焙



第123图 灰厚出土土器(3)

焼成状態の比率が高い。こうしたことから、1号窯では、還元焙焼成を意図したものの、還元状態に達することができない状況であったと考えられる。

出土遺物については、総じて鉢の存在が顕著で、碗・小皿の個体数は少ない。このことから1号窯は、大型器種の焼成を目的としていたと考えられるが、既述のように還元焙焼成そのものは失敗に終わっている。灰原で出土した遺物量も、一般的な須恵器窯としては極めて少量であることから、焼成は1回のみであった可能性があらう。

第3節 2号窯

1 遺構 (第124図)

(1) 窯体

8号墳の墳丘に構築されている。8号墳の表土除去中に、多数の還元された窯壁破片とともに、窯体が検出された。窯体の遺存状態は、窯廃絶後の樹液の影響で非常に劣悪であった。当初、床面は1面と考えていたため、床面を検出し、図面作成後、縦横断面の断ち割りを行った。その結果、下位に床面の存在を確認したため、これを第1次床面、上位の床面を第2次床面と呼称する。断ち割りによる影響のため、第1次床面は残存する窯体の4分の1の記録しか行えなかったため、平面図では反転復元を行っている。

2号窯は、8号墳北西部の墳丘に位置し、半地下式構造の窯である。窯の残存長は1.60m、幅1.35m、深さ0.20m、斜面の傾斜角度は30°である。

表面が還元された高熱が部分的に残っていたが、他は酸化した赤褐色層が露呈していた。壁面及び床面には、スサ入り粘土を5cm程度貼り付けている。またこの窯壁には、布目痕が残っていた。

窯体は焼成によって、表面が青灰色に還元しているため、2号窯は、還元焙焼成された窯と考えている。天井部はすでになく、構造物も不明である。

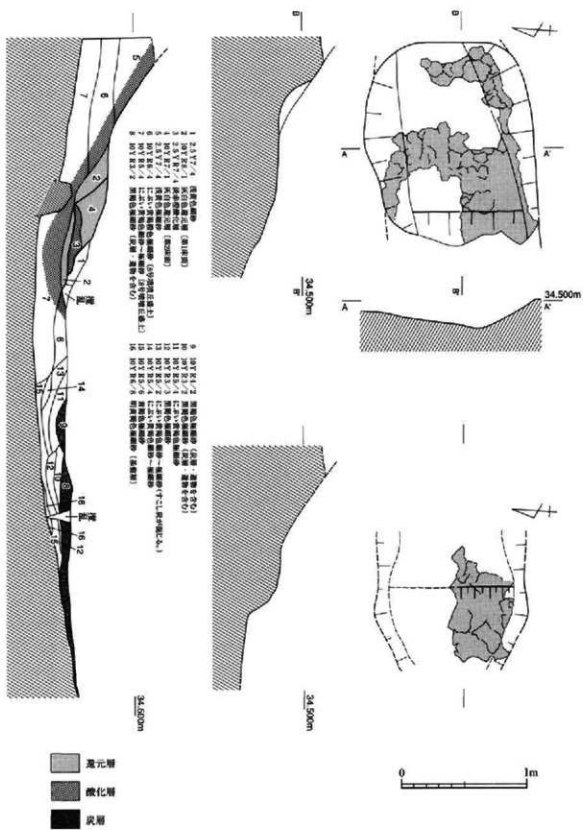
床面は2面確認した。2面とも検出範囲のはほぼ中央で段をもつ構造である。いずれも下段部に炭が多く検出されたことから、下段部は熱焼部であると推測でき、この段を境に焼成部と熱焼部が分かれた構造と考えている。

第1次床面は、焼成部長0.4m、熱焼部長0.9m、段差は約0.2mを測る。第2次床面は、焼成部長1.2m、熱焼部長0.4m、段差0.16mである。第2次床面は、第1次床面の熱焼部に貼り床をし、新たに焼成部を拡張しているため、2回以上の焼成が行われていたと推定できる。窯体からはコンテナ2箱の須恵器が出土した。

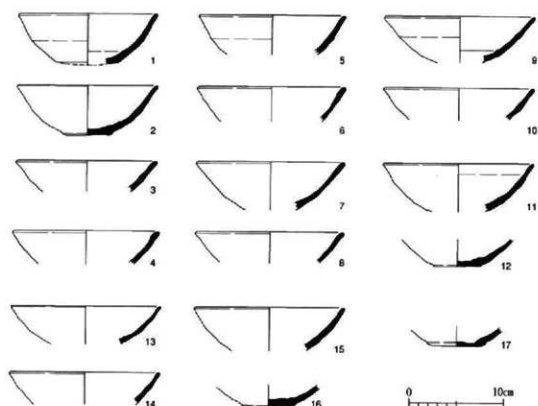
(2) 灰原

灰原は、8号墳の周溝部分に位置している。当初、2号窯の調査時には、後述する3号窯が隣接することが判明していなかったが、調査途中で2号窯に隣接して3号窯が新たに発見され、2号窯と3号窯の灰原の位置が重なっていることが判明したため、2号窯本来の灰原の平面形、及び規模を確認することはできなかった。

こうした経過から出土遺物についても、2号窯・3号窯の区別なく、層位のみを記録して取り上げを行っている。したがって灰原出土の遺物は2・3号窯の遺物が混在している状況であったが、3号窯灰



第124図 平面・断面



第125図 竈体出土土器

原の層位と出土遺物の検討で、3号窯の灰原に2号窯の灰原が堆積していることが判明した。2号窯の灰原堆積物の厚さは0.1mを測り、灰原からはコンテナ3箱分の土器が出土した。出土遺物は、須恵器碗・小皿・鉢などである。

2 遺物 (第125・126図)

(1) 竈体内

竈体から出土した遺物はすべて須恵器碗である。完存しているものは少ない。

第2次床面の須恵器

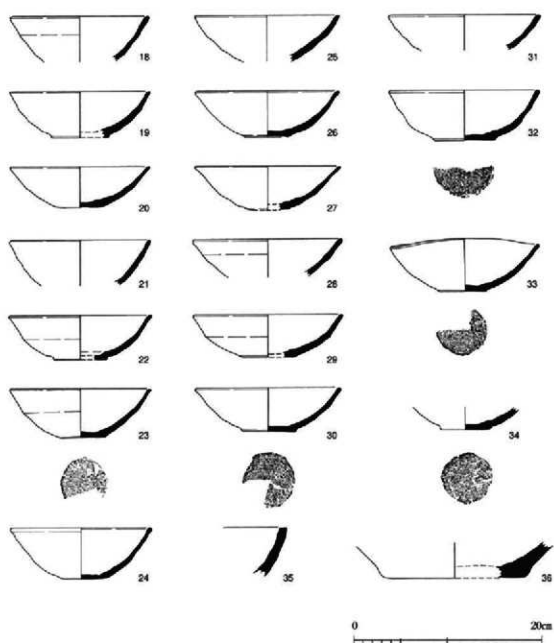
碗 (1~12)

口径14.5cm~15.8cm、底径5.3cm、器高5.3cmを測る。形態は平底で、体部はやや丸味をもち、口縁端部は丸く収める。第1次床面のものと同様、体部のほぼ中位で外面にやや強いナデを施すものがある。焼成は不良で、部分的に還元されていないものがみられる。底部は回転糸切りである。

第1次床面の須恵器

碗 (13~17)

口径15.6cm~15.9cm、底径5.7cm~6.3cmを測る。形態は平底で、体部はやや丸味をもち、口縁端部は丸く収める。体部はほぼ中位で、外面にやや強いナデを施すものがある。焼成は不良で、部分的に還元されていないものがある。底部は回転糸切りである。



第126図 灰瀬出土土器

(2) 灰瀬

出土土器は、腐体の土器と同様、ほとんどが須恵器柄である。完存しているものは少ない。

概 (18-34)

口径14.4cm~15.8cm、底径4.0cm~6.8cm、器高4.3cm~5.6cm。形態は、19・22・30・34等の底部と体部の境が明瞭で、体部が丸味をもつものと、20・27・29などの底部と体部の境が不明瞭で、そのまま立ち上がるものが共存する。体部はほぼ中で、外面にやや強いナデをもつものがある。また、底部切り離し技法に、回転糸切り技法と静止糸切り技法の両方が認められた。

35の口縁端部は、平州に仕上げる。断面は方形である。36は、底部の破片である。

3 小結

2号窯は断面などから、窯の遺存状況は悪かったが、残存状況から窯構造を推測すると、古墳の墳丘斜面という立地条件から、全長は最大でも3mを超えないと考えられ、小型の穴窯の域をでない。したがって、残存部分から近い場所に排煙部が敷設されていたと推定できる。また、2次の床面とも中央に段をもつ構造である。これは古墳の墳丘という立地上の制約があり、当初から小型窯で還元焙焼をめぐしたため、焼成部と燃焼部の境に段をつけることによって、直に火を受けない工夫を行っていたのであろう。また、1号窯と違い、半地下式の構造であったため、床面がかりうじて検出できた。

遺物については、第1・2次床面とも須恵器碗を中心に焼成しており、2つの床面の土器については、形態から明確な相違がみうけられなかった。また、焼成についても良好とはいえないが、かりうじて還元焙焼を行ったことが判明した。

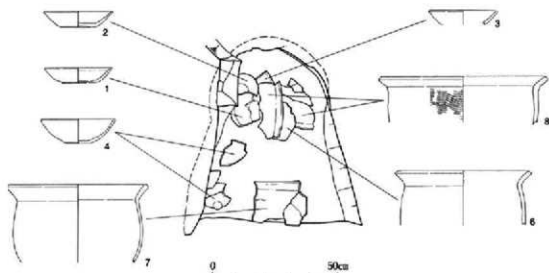
第4節 3号窯

1 遺構 (第127・128図)

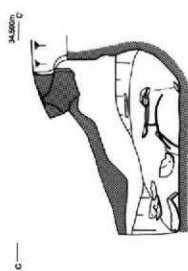
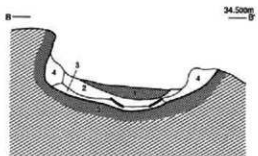
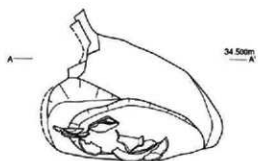
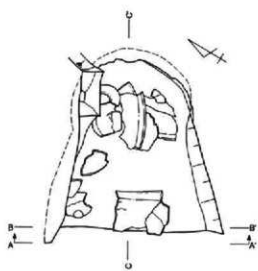
(1) 窯体

2号窯と同様、8号墳の墳丘に存在する。墳丘表土の除去途上、赤褐色の焼土が検出されたが、この時点では3号窯の存在に気付かなかった。その後、墳丘断ち削り時に、断面が3号窯の窯体中心付近に設けられたため、焼土混入土層(第1層)が検出され、窯跡であることが確認された。

3号窯は、8号墳南西部墳丘に位置し、2号窯の南側に隣接する墳丘を掘り込んだ地下式の構造である。平面形は馬蹄形を呈し、窯の残存長は0.75m、焼成部幅0.46m、燃焼部幅0.75m、深さ0.20~0.50m。窯体付近での墳丘斜面の傾斜角度は30°を測るが、窯床面は水平である。窯壁及び床は、スサ入り



第127図 窯体内土器出土状況(土器1/8)



1. 10YR 6/3 1.2-1.1 腐植質層 (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%)
2. 7.5Y 6/3 腐植質層 (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%)
3. 10YR 6/3 腐植質層 (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%)
4. 10YR 6/3 腐植質層 (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%)
5. 2.5Y 6/3 腐植質層 (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%)
6. 2.5Y 6/3 腐植質層 (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%)
7. 5Y 6/3 腐植質層 (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%)
8. 10YR 7/3 腐植質層 (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%)
9. 10YR 6/3 腐植質層 (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%)
10. 10YR 6/3 腐植質層 (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%) (腐植質土) (20-25%)

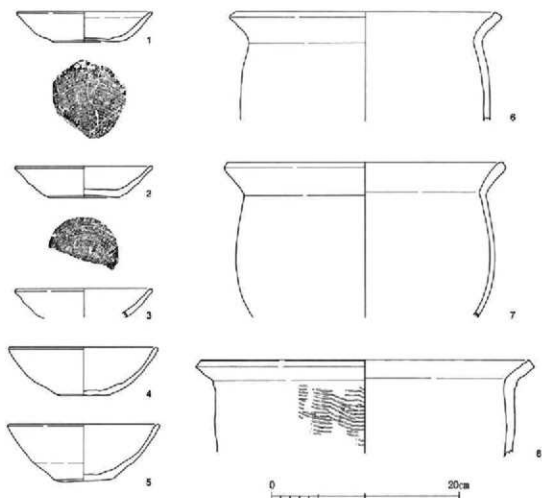
第128図 平面・断面

粘土の貼り付けはなく、壁面・床面が赤褐色を呈していることから、酸化焙焼されたものと考えられる。なお、調査当初に検出された焼土層（第1層）は、全面赤褐色であったため、崩落した天井部であった可能性がある。その他は残りがよく、排煙部も辛うじて残存していた。ただし、3号窟の存在を確認するためのトレンチ掘削により、箕口部と灰原の一部を記録することができなかった。

窟体からは土師器の杯・椀・鍋が出土している。出土状況は、土師器鍋は比較的床面に近いところで破損した状態で出土している。特に鍋（7）については舟底状の床面に沿って、鍋の内面を上に向けた状態で出土した。

（2）灰原

3号窟の灰原は、2号窟同様、8号墳の周溝部分に位置している。前述したとおり、2号窟と3号窟の灰原は、位置が重なっていたため、3号窟本来の灰原の平面形及び規模を確認することはできなかった。炭層の厚さ0.5cm、灰原からはコンテナ2箱分の土器が出土している。出土した土器は、土師器の小皿・杯・椀・鉢などである。



第129図 窟体出土土器

2 遺物 (第129・130図)

(1)窯体内

窯体から出土した遺物はすべて土師器である。器種は碗・皿・鍋である。

坏 (1～3)

口径14.0cm～14.3cm、底径8.1cm、器高3.2cm～3.3cmである。平底から体部が直線的に開き、口縁端部内面に強いナデを施す。底部は、静止糸切りである。

碗 (4・5)

口径15.5cm～15.7cm、底径5.7cm～6.5cm、器高5.2cmを測る。平底から体部は丸味をもち、口縁端部は丸く収める。形態は須恵器碗に類似する。

鍋 (6～8)

いずれも頸部が字状に屈曲して口縁部が開き、口縁端部には平坦面をもつ形態である。胴部最大径は口径を下回る。口径20.0cm～25.0cm。8は外面に平行タキが施されている。いずれも底部は欠損していた。

(2)灰塵

出土土器は、土師器の小皿・托・杯・鍋、須恵器の柄・鉢である。中に須恵器の器種があるが、3号窯は土師器焼成窯と考えられるため、1号窯の製品の混入の可能性がある。また、須恵器と形態・手法が同じ器種があるが、酸化焙焼成であるものはすべて土師器と同様に図化し、明らかに還元焙焼成の場合のみ、須恵器として図化を行っている。

小皿 (9～17)

小皿は、口径7.6cm～8.7cm、底径5.2cm～6.4cm、器高1.0cm～1.5cm、底部からそのままみ上げる形態である。内外面右回転ナデ、底部切り離しは回転ヘラ切りを行っている。

坏 (18～20)

口径14.6cm～15.1cm、底径7.9cm、器高2.9～3.6cmである。18・19は、口縁端部に強いナデを施し外反する。20は、平底から直線的に開く形態である。

托 (21～23)

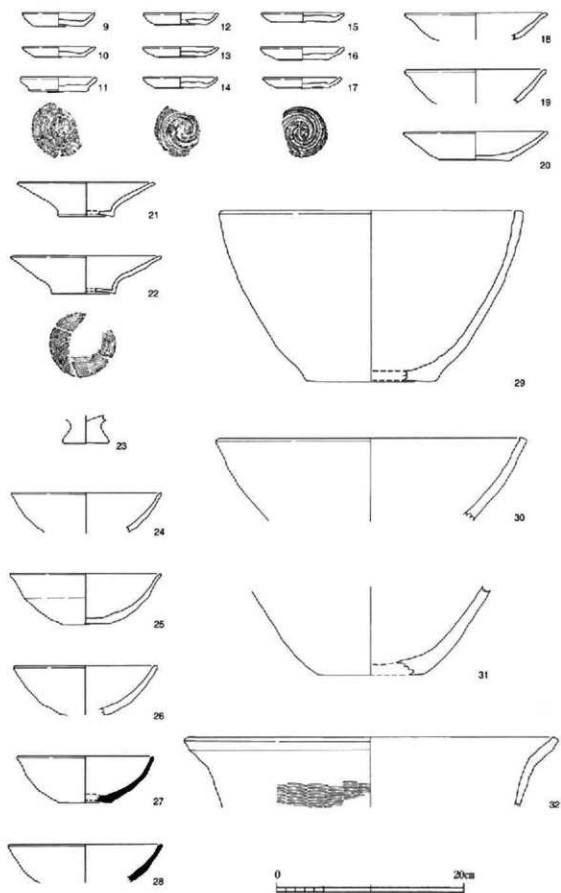
見込み部分が深いもの(21・22)と、高台の付くもの(23)の2種類がある。21～22は、口径14.3cm～14.6cm、底径6.0cm～6.9cm、器高3.6cm～4.0cm。平底で、屈曲して強く外反する体部をもつ。23は底径3.3cm。底部は静止糸切りである。

碗 (24～28)

酸化焙焼成のもの(24～26)と還元焙焼成のもの(27～28)があり、口径14.4cm～16.1cm、底径4.9cm～6.5cm、器高5.2cm～5.7cmを測る。平底で、体部がやや丸味をもち、口縁端部丸く収めるものと、体部外面中にやや強いヨコナデをもつものがある。また、底部が残存している碗の切り離し技法に、静止糸切り技法のものが認められる。

鉢 (29～31)

いずれも酸化焙焼成状態の遺物であり、口径31.3cm～31.7cm、器高18.0cm、底径14.2cm、平底からやや丸味をもって立ち上がる体部をみせ、口縁端部は平坦面をもつ。



第130图 灰原出土土器

土師器鍋 (32)

口径31.0cm。頸部はく字状に屈曲して開き、口縁端部は平坦面となる。体部外面に平行タタキを施す。

3 小結

3号窯は、土師器焼成窯である。このような形態の窯は、いわゆる煙管状窯・キセル窯と呼ばれ、平面形がほぼ円形を呈し、燃焼部の上に焼成部が作られる直竈式の小型窯とされる。しかし、3号窯では燃焼部と焼成部の間仕切りとなる構造物は確認できなかった。

窯体内からは土師器鍋などの大型製品が出土しているが、これらの土器すべての底部が欠損していることから、施設の一部か窯道具として設置されていた可能性がある。

3号窯は、窯体の規模からみて、基本的には小型製品を中心に焼成した窯と考えられる。灰原出土遺物の一部には、須恵器や鉢等の大型製品がみうけられるが、その形態・焼成とも1号窯出土遺物に極めて類似しており、同窯からの流出遺物の可能性があろう。器種組成については、土師器の器種はもちろん、須恵器鉢とはほぼ同じ形態をもつ碗も、土師器として焼成している点の特徴といえよう。製作技法では、腕・托で静止糸切りが、小皿でヘラ切りが用いられていることが特徴である。器種により、異なる技術が適用されたこと理由は明らかではないが、ロクロの使用方の違いなどに対応する可能性が考慮される。

第6章 古墳群再利用時の遺構と遺物

第1節 調査の概要

勝手野古墳群では、古墳時代の遺物のほかに、それ以降に再利用された痕跡が認められた。本章では、古墳再利用時の遺物を中心に概観することとする。

調査を実施した8基の古墳石室内等で、再利用の痕跡が認められたのは、2号墳を除いた7基である。概ね平安時代後半の遺物であるが、一部、近世・近代の遺物がみられる。

第2節 1号墳

1 石室内遺物出土状況（第131図）

1号墳の石室は、石室の大半が失われていたが、かろうじて残っていた石室側壁の石室の備縁が残っている部分の西側（奥側）から、火打金が出土した。石室内の土層のうち、火打金を出土した第8層は、床面直上の堆積土である。火打金が出土した周辺は、床面まで攪乱を受けており、元の状況は把握できない。

2 石室内出土遺物（第137図）

火打金（1065）

平面形が凸形で、突出した部分に紐穴をもつ山型の火打金である。打撃部の長さ1.5cm、幅5.9cmを測り、突出した部分の長さ2.5cm、厚さ0.3cmである。

火打金については、中尾城跡での山田清朝氏の分類がある¹⁾。これによると1号墳出土の火打金は、AⅡ類に分類でき、この形態は、古くは12・13世紀から認められ、16・17世紀まで確実に存在しているとされる。形態が存続する時期幅が広いため、明確な時期決定は困難である。また、この火打金が1号墳の攪乱の時期に関係するのかも判然としない。

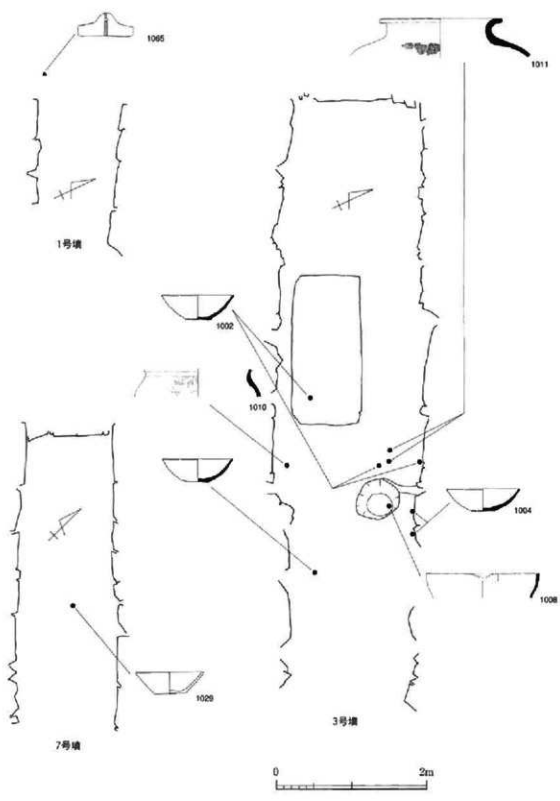
第3節 3号墳

1 石室内遺物出土状況（第131図）

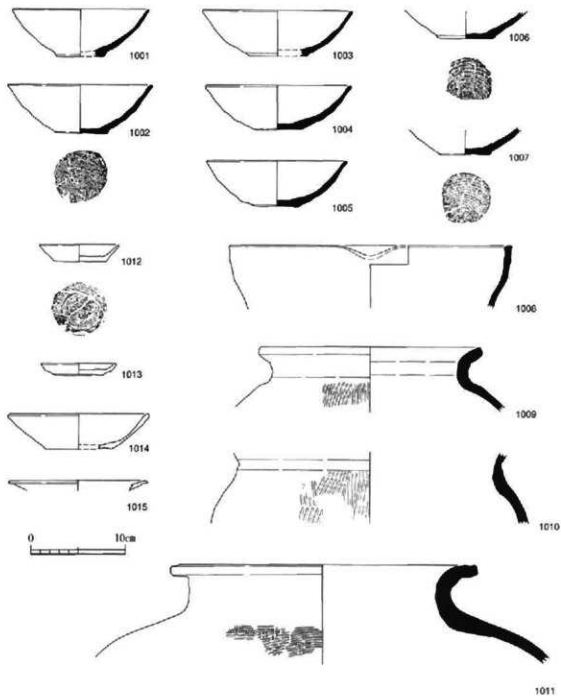
3号墳の石室は勝手野古墳群の中で、最も残りがよい石室である。石室壁土の状況から、22・24・25・27・28層ラインが近代以降の堆積土、その下から石棺底石床面68層直上ラインまでが中世～近世の堆積層と考えられることは、第4章第5節で触れたとおりである。

この再利用時の土層堆積では美道周辺で、炭の堆積（第59・62層）が認められた。また、支室と美道部の境には土坑が検出され、その中から須恵器の鉢が出土している。

再利用時の遺物は、ほとんどが平安時代後半の1～3号窯のものと考えられる遺物であるが、近世の磁器が1点出土している。これらは、いずれも美道側から出土し、一部石棺上からも出土した。



第131図 1・3・7号墳再利用時の土器出土状況(土器1/8・鉄器1/4)



第132図 3号墳石室内再利用時の土器

2 石室内出土遺物 (第132・137・138図)

平安時代後期の土器

須恵器椀 (1001～1007)

いずれも須恵器である。口径14.5cm～15.7cm、底径5.3cm～6.6cm、器高4.7cm～5.0cmを測る。1001～1003などの平底から体部やや丸味をもち底部と体部の境が明瞭なものと、1004～1005などの不明瞭なものがある。底部切り離し技法に一部、静止糸切りが認められるもの (1006・1007) がある。

須恵器鉢 (1008)

片口の付いた口縁部のみ残存する。口縁部は平坦面となり、断面は方形を呈する。体部に強いナデを施す。

須恵器壺 (1009～1011)

口縁部が大きく外反する形態である。1009の頸部は、強いナデが施され、口縁部は外反し、口縁部断面は方形を呈する。体部外面に縦方向の平行タタキを施す。1010は体部のみの残存で、体部外面に縦方向の平行タタキを施す。1011は頸部に強いナデを施し、口縁部は外反する。内面がやや窪んだ形態で、口縁部断面は方形を呈する。体部外面に格子タタキを施す。

土師器小皿 (1012・1013)

口径7.8～8.3cm、底径5.4～5.6cm、器高1.3～1.8cm。底部から体部をつまみ上げる形態である。底部は、回転ヘラ切りを行う。

土師器杯 (1014～1015)

1014は底部から直線的に開く体部で、底部は回転ヘラ切りを行う。1015は口縁部が外反する形態であり、皿と分類したが、細片のため詳細は不明である。

近世以降の遺物

炮烙 (1057)

椀が付着し、相対する2か所に2孔ずつ貫通しない凹孔が、一方は外面に、他方は内面に穿たれている。

不明鉄器 (1066～1068)

用途不明鉄器が3点出土している。1066は、石室後遺部から出土した。残存長7.1cm、幅2.9cm、厚さ0.2cmの薄い鉄板に径0.5cm、残存長0.9cmの鉄が打たれている。

1067は、残存長2.7cm、幅2.5cm、厚さ0.2cmの薄い鉄板に径0.5cm、残存長0.3cmの鉄が打たれている。

1068は、弧状の鉄板で、長さ14.2cm、幅3.1cm、厚さ0.4cmを測る。長軸の一方は端部を曲げている。

煙管 (1069)

壺首部分(火皿部と頸部)の一部が出土した。頸部は欠損している。火皿部は、口径1.6cm、頸部径0.6cm。火皿部と頸部が一体で作られていた。内側にはたばこの灰が残存している。

3 墳丘の遺物出土状況

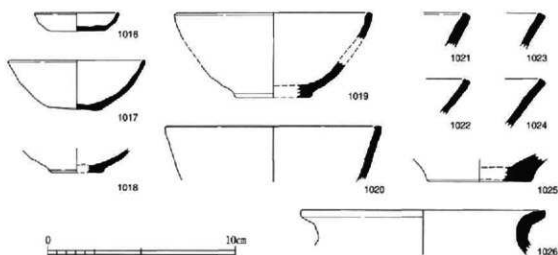
墳丘上からは、中・近世の遺物が出土している。勝手野3号墳の墳丘には、明治時代頃まで、明神が祀られていたと伝えられる。特に墳丘から出土した近世以降の遺物は、この勝手野明神関連の遺物と考えられる。

4 墳丘出土土器 (第133図・第137図)

平安時代後期の土器

須恵器小皿 (1016)

平底からつまみ上げる形態である。底部切り離しはヘラ切りである。



第133図 3号墳墳丘出土土器

須恵器椀 (1017～1018)

1017は平底で体部はやや丸味をもち、口縁部は丸く収める。底部と体部の境が明瞭でない形態である。

須恵器鉢 (1019～1025)

小型鉢と大型鉢がある。1019の小型鉢は、平底から体部が直線的に立ち上がるものと、やや丸味をもつものがある。口縁端部には平坦面をもつ。いずれも細片である。

須恵器壺 (1026)

口縁部が大きく外反する形態である。頸部に強いナデを施し、口縁端部の断面は方形を呈する。体部外面に平行タタキを施す。

近世以降の遺物

土師器皿 (1038～1056)

口径4.9cm～6.5cm、底径2.9cm～4.5cm、器高0.6～1.2cm。ロクロは右回転で、底部は回転承切りである。透明釉（柿釉）が施されるもの（1038～1047）と、無釉のもの（1048～1056）がある。口縁部に煤が付着している例が多くみられ、灯明皿として用いられたものであろう。

染付磁器小杯 (1058)

高台を持った底部から、丸みをもつ体部が立ち上がる。口縁端部は丸く収める。内外面は透明釉が施されるが、口縁端部（畳付）は露胎し、外面に笹の文様が描かれている。

染付磁器瓶 (1059)

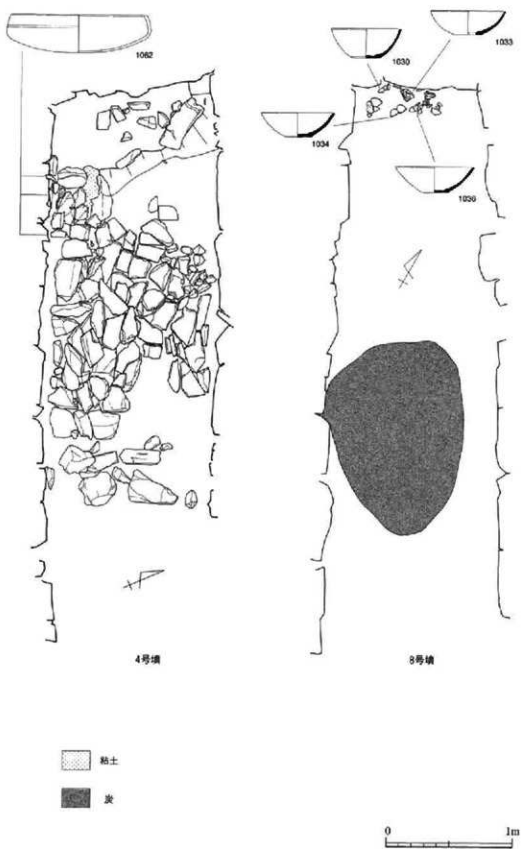
細く長い形態から鶴首瓶と呼ばれる器種である。頸部から口縁部までは直線的な立ち上がりを見せる。外面には透明釉を施し、内面・高台端部（畳付）は露胎である。外面には若松が描かれている。

染付磁器皿 (1060)

器高4.5cm。型打ち成形を行った輪花の皿で、底部は蛇ノ目形高台、口縁端部には鉄銜が施される。内面には山水が描かれている。

軒平瓦 (1061)

残存長7.2cm、残存幅15.0cm、厚さ1.5cm、瓦当幅3.0cm、内区幅1.6cm。瓦当文様からの反転復元幅は、



第134図 4・8号墳再利用時の遺物出土状況 (土器1/8)

20.0cmである。頸部は段頸、文様は中央に橘文を置く均整唐草文で、花葉を2対配している。

第4節 4号墳

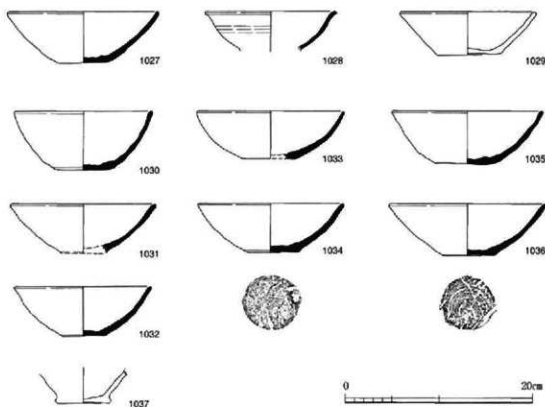
1 石室内遺物出土状況（第134図）

4号墳の再利用面は、第4章第6節で触れた第2床面上である。この第2床面の敷石は、奥壁側から2右目の側壁付近まで擾乱を受け、欠落している。敷石残在部の右側壁で、砲塔が敷石に落ち込んだ状況で出土した。

2 石室内出土遺物（第137図）

砲塔（1058）

外面にヨコナデを施し、体部に1条の凹線を施す。外面には煤が付着し、相対する2か所に2孔ずつ貫通しない円孔が、一方は外面に、他方は内面に穿たれている。



第135図 5～8号墳再利用時の土器

第5節 5号墳

1 石室内遺物出土状況

5号墳は、大きく攪乱を受けており、再利用面を確認することができなかった。

2 石室内出土遺物 (第135図)

須恵器椀 (1027)

平底から直線的に伸びる形態である。

第6節 6号墳

1 石室内遺物出土状況 (第136図)

再利用の遺物は、石室埋土と石室内の箱式石棺の前で出土している。埋土からは須恵器が出土している。箱式石棺は、古墳時代のものだが、それを甕するために白磁小壺と施釉陶器蓋、鉄鉢、明治時代の半銭兩貨が出土した。

2 石室内出土遺物 (第135・137・138図)

須恵器椀 (1028)

丸味をもつ体部から口縁端部は外反する。体部外面に3条の強いヨコナデが施され、凹線状になっている。

白磁蓋 (1063)

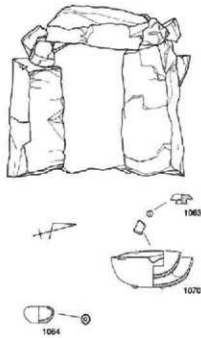
1064の陶器の小壺とセットになっていたと考えられる。胎土は白色で、上面外面には透明釉がかかる。ねじ山をきっている。本来は陶器蓋の蓋であったものを、転用したのであろう。

施釉陶器小壺 (1064)

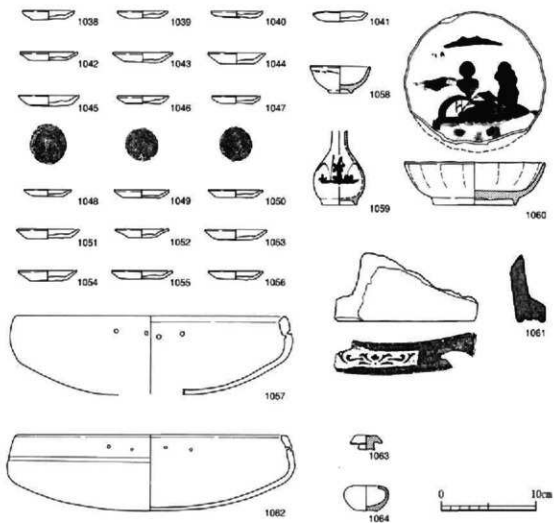
外面に透明釉のかかった施釉陶器である。黄褐色で産地は瀬戸もしくは京・信楽系の陶器と考えられる。

鉄鉢 (1070)

鉄製の片口鉢である。相似形の大小2個体が重なった状態で出土した。2個体は、錆のために密着している。外側の鉢は、径6.5cm、器高3.0cmで底部は3足である。内側の鉢も片口鉢で、口径4.9cm、器高2.5cmを測る。



第136図 6号墳再利用時の遺物出土状況
(土器1/4・鉄器1/8)



第137図 近世以降の遺物

第7節 7号墳

1 石室内出土状況

石室中央部分の石室埋土から土師器杯1点が出土した。

2 石室内出土遺物（第135図）

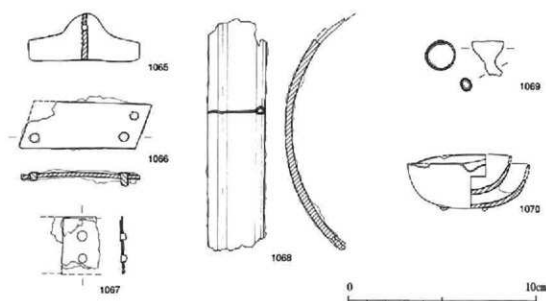
土師器杯（1029）

平底から直線的に口縁部まで延びる形態である。

第8節 8号墳

1 石室内遺物出土状況（第134図）

8号墳は、墳丘に2・3号室が存在するためか、再利用時に古墳時代の遺物が片付けられたと推測され、石室内から出土した土器は、ほとんどが平安時代後期の土器である。再利用時の床面は、石室の床



第138図 再利用時の鉄器

面と同一で、石室内中央には、炭が広がっていた。

2 石室内出土土器 (第137図)

須恵器椀 (1030~1036)

口径14.4cm~16.5cm、底径5.0cm~6.8cm、器高5.2cm~6.3cm。平底から直線的に口縁部まで伸びる形態で、底部は静止糸切りである。

土師器 (1037)

底部であるが細片のため器種は不明である。

第9節 小結

勝手野古墳群では、2号墳を除く、古墳で石室等が再利用されていた。再利用の時期は大きく、平安時代後期、近世、近代に分けられる。

平安時代後期

平安時代後期には、3・8号墳墳丘周辺で窯が構築されていたことから、3・8号墳の石室が、作業スペースとして利用されていたと考えられる。

特に再利用時に3号墳の石室内では、石棺の上に須恵器が置かれた状況で出土し、この段階ではすでに石棺の上部が失われていた可能性が高い。

また8号墳においても、窯と同時期の須恵器椀が石室奥壁付近から出土し、古墳時代の土器がほとんど残存していない点を考えると、石室内が相当の頻度で利用されていたのであろう。

3号墳石室内からは、2号窯のものと思われる底部静止糸切りの椀、1号窯で焼成されたであろう酸化還元成の鉢・甕、3号窯で焼成された土師器の小皿・杯が出土している。また、3号墳墳丘からは、

隣接する1号窯の製品と思われるものも出土している。

8号墳の遺物は、ほとんどが甕であり、2号窯の製品である可能性が高い。

5・6号墳の石室内からは須恵器碗が、7号墳石室内からは土師器碗が、それぞれ出土しているが、石室再利用時の状況を把握するには至らなかった。5・7号墳出土の遺物については、勝手野原跡群の時期に相当する遺物であることから、作業空間等として利用されていたと推定しておきたい。

近世

3・4号墳石室内からは、形態の類似した砲塔が出土している。砲塔については、大阪城跡における積山洋氏の考察¹⁾や、明石城武家屋敷の遺物から²⁾、17世紀後半のものと考えられる。

4号墳の第2床面は、砲塔の出土地点のすぐ西側は擾乱を受けており、砲塔がこの擾乱の時期を示す可能性がある。また、図示していないが、火打石が出土していることから、石室内で煮炊きが行われていたであろう。

近代

3号墳墳丘より、近世末以降の陶磁器・土器が多数出土した。1058～1060の染付磁器は、肥前磁器と考えられ、大橋編年V期（1780～1860）にあたる³⁾。ロクロ成形の土師器小皿については、17世紀から見受けられるが、明石城武家屋敷の遺物の検討から、口径が5cm前後と小型化するものは、19世紀前半代の時期が与えられている⁴⁾。また軒平瓦については、明石城跡の瓦の分析から、中心飾りの花頭が彫むものは19世紀代と考えられている⁵⁾。

以上のように、3号墳墳丘出土の近世の遺物は、概ね19世紀代のもものと判断される。これは、かつて墳頂に勝手野明神の祠が祀られ、それが現在の位置に合祀されたのが明治初期と伝えられることも一致する。したがって、3号墳墳頂出土遺物の大部分は、明神社に関連するものと思われる。

6号墳石室内では、古墳時代の箱式石棺を祀った状況が検出できた。出土した白磁小壺と施軸陶器蓋については、産地が判断できず、時期が明確ではない。しかし、施軸陶器蓋におじ山が切られており、もともと陶器瓶の蓋でそれを転用したものと考えられること、また、明治時代の半銭が出土していることから、明治時代以降の祭祀と考えられる。

また、1号墳石室内から出土した火打金については、これのみで時期を特定することが困難である。

〔注〕

- 1) 山田清朝『中尾城跡』兵庫県教育委員会 平成元年
- 2) 積山洋『近世大阪出土の土師器編年、素楠』『研究紀要』3 財団法人大阪府埋蔵文化財協会 平成7年
- 3) 村上幸樹『明石城武家屋敷跡』兵庫県教育委員会 平成4年
- 4) 大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社 平成元年 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』平成12年
- 5) 井上智代『明石城武家屋敷跡出土の土師皿』『歴史と神戸』210 平成10年
村上幸樹『明石城武家屋敷跡』兵庫県教育委員会 平成4年
- 6) 池田征弘『明石城跡』Ⅲ 兵庫県教育委員会 平成10年

第7章 その他の遺構と遺物

第1節 勝手野遺跡（上層）の遺構と遺物

1 遺構（第139～142図）

調査を実施した範囲では、きわめて不整形な土坑数基のほか、溝状遺構が検出されたが、その形状・配置には企画性を見出すことはできなかった。遺物も、わずかな数の土師器破片が出土したのみであり、時期・性格を確定することはできない。

土坑の大部分は、その形状と埋土の堆積状況から人為的なものではなく、風倒木痕などの自然要因で形成されたものと思われる。

また調査区東側には、幅2～4m、延長約26mの土塁が存在した（第21図）。土塁は段丘の傾斜変換点付近に設けられていたが、調査着手時点で取材したところでも、すでにその性格についての伝承はなかった。平成4年度の確認調査において、土塁中央で断面観察を実施した際、盛土中より中世の須恵器が少数出土し、構築年代がこれ以降であることを検証し得たのみである。

勝手野古墳群の調査範囲では、3号墳北東裾の平坦部で、土坑2基とピット1基が検出された。これらは形態の企画性、遺物を埋設する等の点から、人為的な遺構であることが明らかである。

土坑1

長径2.5m、短径2.0m、深さ25cmを測る不整形な土坑である。埋土中より3号墳のものであったと考えられる家形石棺の小口石片が出土した。石棺の破壊が行なわれた時期は、石室の再利用が活発であったと思われる、勝手野宮跡群築造時と推測されることから、本土坑もこの時期に掘削されたものと思われる。

土坑2

長径1.9m、短径1.1m、深さ28cmを測る楕円形の土坑である。遺物は出土しなかった。

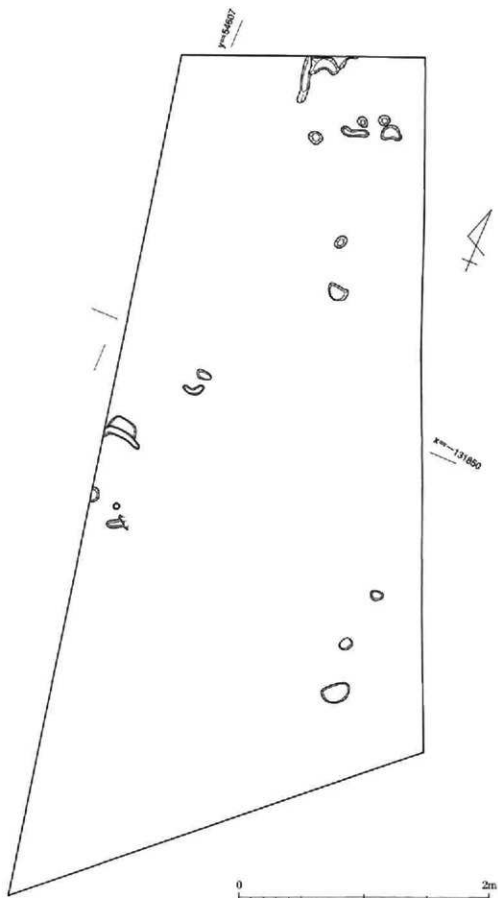
ピット1

直径35cm、深さ29cmの、やや不整な円形のピットである。ピット内には、焼成不良の須恵器甕体部の破片が埋設されていた。破片類はピット上面（検出面）から下底に至るまで、密集した状態で埋設されており、ピット上面は破片によって塞がれていた。埋設状況には、特徴すべき企画性は認められなかった。周辺の精査では他に遺構が検出されなかったことから、建物を構成する柱穴とは考えがたいが、ピットの機能・性格について判断する材料に欠ける。

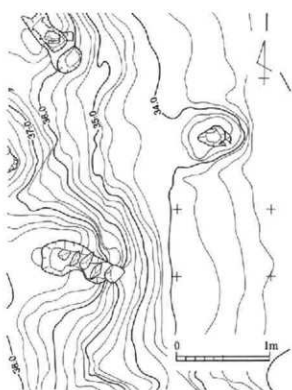
2. 遺物

家形石棺（図版78-4）

土坑1から出土した流紋岩質凝灰岩製の家形石棺片である。全体にやや緑色がかかった黄白色を呈し、器表面に二次的移動による磨耗等がほとんど認められないことから、3号墳から掘り出された可能性が最も高い。この推測が正しければ、3号墳の石棺型式からこの破片は小口板と判断される。3号墳では、石棺の奥壁側小口板が石室内で出土しており、当該破片は奥壁側小口板と考えるとよからう。



第139圖 遺 構



第140図 3号墳付近遺構位置

土器（第142図）

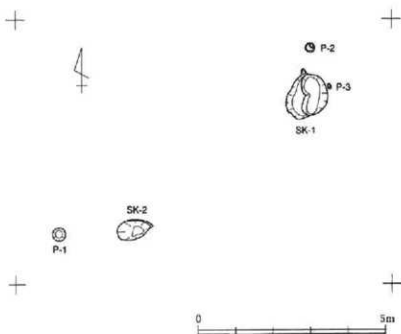
運土中より、須恵器製破片及び土師器托が出土した。

罎（図版86-1071）は、器壁が厚いことと、破片の曲率から大型品と推定できるが、体部の破片のみであるため口径その他は不明である。破片はいずれも焼成不良で橙黄褐色を呈しており、器表面には粗い平行タタキが施されている。

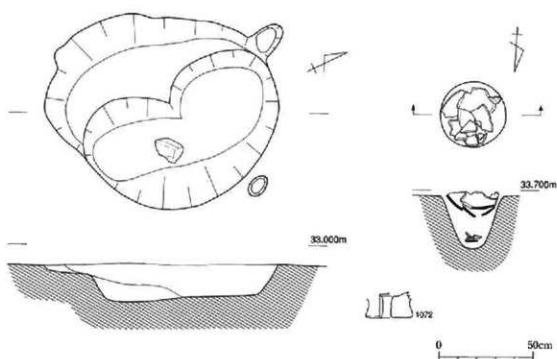
土師器托（1072）は、底部のみの破片である。中央からややずれる位置に、焼成前穿孔が行われている。

遺物は周辺の遺構からみて、勝手野塚跡群に由来する可能性が高い。土師器托の形態からも、大きな時期的矛盾を見いだすことはできない。

他に柱穴が検出されなかったことから、建物跡を構成する柱穴ではないと思われるが、その機能は判然としない。



第141図 3号墳付近遺構配置



第142図 土坑1・ピット1と土器（土器1/4）

3 小結

勝手野遺跡（上層）で検出された遺構・遺物はわずかであり、遺構相互の関連や個々の性格についても明らかではない。また遺構として調査した土坑・溝状遺構の一部は、自然の要因（倒木など）によって形成されたものである可能性も高い。したがって、勝手野遺跡（上層）において人為的に形成されたことが確実な遺構は、1に述べたもののみといえよう。これらの遺構群の所属時期は、明確に断定しうる遺物に欠けているが、破壊された石棺を出土した土坑1と、土器を埋設したピット1から勝手野遺跡群採集期と推定するのが妥当であろう。

ある程度の平坦面が存在するにも関わらず、勝手野遺跡（上層）における遺構・遺物の密度は非常に小さく、後期旧石器時代以降古墳群築造以前、竈跡群形成以降の土地利用度はごく低いものであったと思われる。また土地利用の形態も、第6章で触れたように、古墳の石室・墳丘を利用した祭祀的なものが主体となっている。これは、勝手野遺跡の領域が古墳群であることが認識され、一種の不可侵領域として維持されていたことを示すものかもしれない。

第2節 縄文・弥生時代の遺物

今回の調査では、ごく少数ながら縄文・弥生時代に属する遺物が出土した。当該期の遺構が全く検出されていないことから、近隣の遺跡から持ち込まれた資料と思われる。

1 弥生土器 (第143図)

器表面の風化・剥落が著しい破片であるが、中期後半に属する壺の口縁部と思われる。外反しつづ広がる口縁部で、端部は下方につまみ出されている。

2 ハンマーストーン (第143図)

3号墳石室内より出土した流紋岩製のハンマーストーンである。細長い種の間端を使用しており、痕跡が明瞭に観察される。一部が赤化しており、火熱を受けた可能性が考慮される。

所属時期について判断する材料に欠けるが、弥生時代以前を想定する必然性はない。古墳時代ないしは中世の所産である可能性を考慮してもよいのではないだろうか。

3 石鏃 (第144図)

いずれも、6号墳の装飾付須恵器破片の回収を目的とした跡がけに伴って採集された。したがって、出土地点も6号墳周辺と考えてよい。石材はすべてサヌカイトである。

1は、先端と脚端を結ぶ平面形が正三角形に近く、両側縁が直線的な形態を呈する凹基無基式石鏃である。基部の挟りは器長の1/3程度に及び、脚端部はやや丸味をおびた形態をみせる。

2も凹基無基式石鏃である。両側縁はわずかに彎曲し、先端部は両側縁がなすよりも鈍い角度で尖らされている。基部の挟りは器長の1/4程度で、脚端部は尖る。

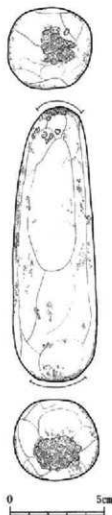
3は平基式石鏃である。先端を欠損している。基部は器長軸に対して斜交している。全体に二次加工は粗雑な印象を受ける。

4は平基式石鏃であるが、ほぼ平行する両側縁をもち基部付近で器幅が大きくなるという、魚形を呈するものである。先端部は古く欠損したものであると思われる。断面形は扁平で、薄い凸レンズ状を呈する。他の石鏃と比較して、風化が進行している。

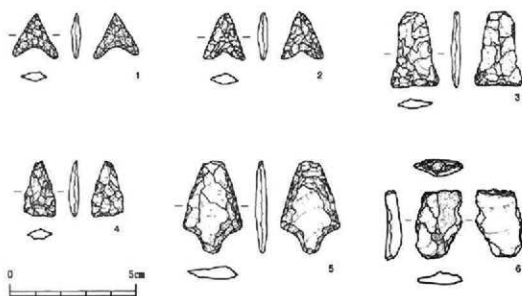
5は有基式石鏃である。一見して讃岐産と判断できるサヌカイトを用いている。二次加工はやや粗雑な印象を受ける。身部・基部とも、断面は扁平な凸レンズ状を呈し、板状に剥離しやすい讃岐産サヌカイトの特徴をよく示している。形態から、弥生時代の所産と推定される。

4. 二次加工のある剥片 (第144図)

6は、勝手野遺跡の北東に広がる段丘面上(勝手野北遺跡)で採集された黒曜石製の二次加工のある剥片である。縦長剥片の打面部を、背面側からの二次加工によって除去しているほか、両側縁にも微細な剥離痕がみられる。採集地が畑であったため、器表面には風化度の異なる剥離痕が多数認められるが、主要剥離面は風化により黒灰色の磨



第143図 弥生土器・ハンマーストーン



第144図 表面採集の石器

りガラス状を呈しているが、未風化部は夾雑物を含まない緻密な黒色ガラス質を呈している。

本資料については、藁科哲男氏に分析を依頼し、その結果を第8章に示している。

5 小結

本節で記載した遺物は、いずれも遺跡に共存しておらず、その意味付けを行なうことに困難を伴うものである。

弥生土器については、遺跡外からの持込による短期的な作業に伴う可能性を、石蔵については狩猟場における使用と喪失の結果である可能性などを指摘するにとどめたい。ただし、ごく限定的に実施された跡いかけによって5点の石鏃が見いだされたことから、勝手野遺跡全域では、相当数の石鏃が散布していた可能性はあろう。勝手野遺跡に隣接する段丘上では、弥生時代中期の遺跡は知られていないが、その探索は今後の課題である。

ハンマーストーンについては、旧石器～弥生時代の遺物が、後世、人為的に石室内に持ち込まれた可能性も否定しえないが、古墳時代ないしは中世の所産である可能性も捨象できないだろう。中世において家形石棺の破壊に際し、手近な道具として利用されたものとも想像できる。いずれにしても結論は留保しておきたい。

第8章 自然科学的分析

第1節 勝手野遺跡の地形環境

青木 哲哉
(立命館大学)

1. はじめに

地表は、人間の活動舞台であり、そこに現出する地形環境は、人間生活に大きな影響をおよぼす。地形環境は、過去を通して変化を遂げてきた。特にその変化は、段丘や沖積平野などの地形が形成される時期に着しかった。人間は、時代の流れとともに進展する自らの生活を、そうした地形環境に巧みに対応させて活動を続け、時には地形環境を改変することがあった。変化する地形環境と進展する人間活動とは、密接に関わってきたと考えられ、故に地形環境は、人間活動や遺跡の立地などを理解する上で重要な要素となる。

人間活動に対応する地形環境は、それに見合う細かいオーダーで考察する必要がある。そのためには、地形環境を考古遺跡の発掘にともなって調査することが有効な手段となる。地形環境を明らかにするには、少なくとも微地形と堆積物について調査しなければならない。考古遺跡の発掘調査区では、そうした微地形と堆積物を直接に観察できるため、過去の詳細な地形環境を復元することが可能である。

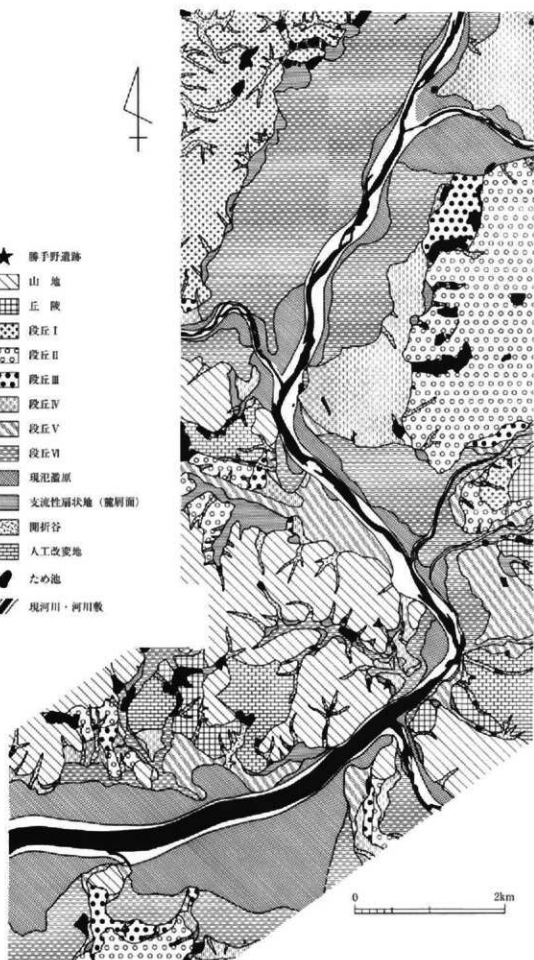
復元された地形環境の時期については、多くの場合発掘によって検出された考古遺物から知られる。ただし、旧石器時代の遺跡では、石器の形状からその製作・使用時期を判定しにくい場合がある。そのため、地形環境の時期は、各種年代測定や火山灰の同定などといった他の手段で決定する必要がある。いずれにせよ、考古遺跡における調査によって地形環境の変遷が明らかになる。それに考古学的な発掘調査成果を加味することによって、地形環境と人間活動との関係をも考察できるのである。

本稿では、加古川中流部に位置する勝手野遺跡の地形環境を明らかにしたい。地形環境に対する考察は、加古川中流部に発達する地形の分類、および勝手野遺跡付近における微地形と詳細な堆積物の把握を主な柱に進めた。前者については、1万分の1空中写真の判読と現地踏査に基づいて行った。後者の微地形は、遺跡調査区での観察と400分の1空中写真の判読によって、また堆積物に関しては、遺跡調査区におけるセクション断面と、古墳時代の遺構検出面から掘削したトレンチ地質断面の観察などを通じて把握した。これらに基づいて明らかにした地形環境に、本遺跡の発掘調査で検出された石器（旧石器）や古墳（6世紀末～7世紀前半に築造）の分布状況を考え合わせ、地形環境と人間活動との関連を考察した。

2. 遺跡調査区周辺の地形（第145図）

第145図は、加古川中流部における遺跡調査区周辺の地形分類図である。本遺跡の付近は、山地が加古川に迫る狭幸部にあたり、それより上流側と下流側には、平野が比較的広くみられる。これらの平野には、段丘、現犯蓋原、および流线性扇状地などが認められる。中でも、段丘がよく発達しており、遺

- ★ 勝手野遺跡
- 山地
- 丘陵
- 段丘Ⅰ
- 段丘Ⅱ
- 段丘Ⅲ
- 段丘Ⅳ
- 段丘Ⅴ
- 段丘Ⅵ
- 規范氾濫原
- 支流性扇状地(麓斜面)
- 開析谷
- 人工改変地
- ため池
- 規河川・河川敷



第145図 地形分類図

跡調査区の周辺には少なくとも6つの段丘が確認される。本稿では、それらを高位のものから順に段丘Ⅰ、段丘Ⅱ……段丘Ⅵと呼ぶことにする。本遺跡の調査区は、それらのうち段丘Ⅳの上に形成された支流水扇状地に位置している。遺跡調査区の周辺に分布する各地形の特徴は、次のとおりである。

①山地 この地形は、第145図の範囲において、遺跡調査区付近を西北西-東南東に延びる。加古川がこの山地を横切る地点では、狭窄部となっている。遺跡調査区付近の山地は、流紋岩質溶結凝灰岩からなり、そこでは標高130~170mの山頂をもつ小規模な山々が点々と分布する。山地には、数多くの間析谷が割まれている。

②丘陵 これは、加古川より東方でよく発達しており、加古川の本流沿いには部分的にみられるだけである。ここでは、ゴルフ場や新興住宅地が造成され、人工改変が激しい。間析谷が割まれ、起伏が大きいもの、山地に比べて緩やかで標高が低い。

③段丘Ⅰ この段丘は、第145図の範囲において、加古川と万願寺川の合流点より上流の加古川西岸に広く発達する。これは、青野ヶ原台地と呼ばれる。段丘面は、加古川の現河床より50m前後高く、また比較的よく侵食されている。そのため、他の段丘面に比して起伏が激しく、間析谷が数多く割まれている。段丘上には水田がほとんどなく、自衛隊の青野ヶ原演習場や国立療養所などの建設によって、段丘面の人工改変が進んできた。この段丘は、第145図の南東側にも認められる。

④段丘Ⅱ これは、遺跡調査区の周辺でよく発達している段丘のひとつである。特に、広い段丘面が小野市の市街地から北方にかけて分布し、他でも断続的ながら点在する。段丘面は、加古川の現河床より25m前後高く、段丘Ⅲとは約5mの崖で接している。面上には、王塚古墳や西条古墳群などが立地する。この段丘は、第145図の南側にみられる印南野台地においても広く発達する。

⑤段丘Ⅲ 遺跡調査区の周辺において、この段丘の発達はよくない。第1図の範囲では、上流から下流までこの段丘が散在するものの、多くの場合小面積の段丘面が、段丘Ⅱの周囲に断続的に分布するだけである。これは、段丘Ⅲの形成後に、加古川およびその支流によって大きく侵食されたためである。段丘面は、加古川の現河床よりおよそ20m高い。

⑥段丘Ⅳ この段丘は、加古川中流部において断続的であるものの、全域によく分布する。遺跡調査区付近より上流において、段丘面の発達が比較的好く、下流では加古川の支流によって侵食された小面積の段丘面が数多くみられる。段丘面は、加古川の現河床より10~15m高い。本遺跡が位置する垂田谷川の流域では、この段丘がよく分布する。

⑦段丘Ⅴ 第145図の範囲におけるこの段丘は、加古川と万願寺川との合流点より下流にのみ認められる。これは、段丘形成後に侵食されたためである。特にこの段丘は、加古川の支流が割んだ谷の中によく分布する。段丘面は、加古川やその支流の現河床より5~6m高く、段丘Ⅵとは比高2~3mの崖で接している。段丘Ⅴは、形成時期が定かでないものの、2万~1万8,000年前に段丘化した立川面に相当すると推定される。

⑧段丘Ⅵ この段丘は、沖積平野の完新世段丘にあたると思われる。段丘面は、加古川の現河床より3~4m高く、現記蓋原との比高が数10cm~1mである。これは、加古川中流部において連続的に分布しており、特に遺跡調査区より上流の平野で、その発達が著しい。

⑨現記蓋原 これは、沖積平野に位置する地形面のひとつで、加古川の本流、ならびに支流の中でも比較的大きな東条川、万願寺川および美養川に沿って形成されている。この地形面は最も低く、そこでは

河川が氾濫した際、洪水がおよぶ。

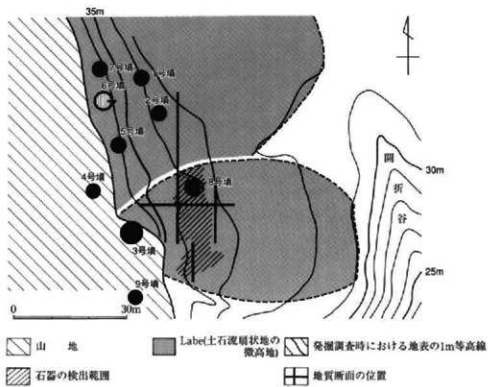
⑩支流性扇状地 この地形は、麓扇面¹⁾に該当するもので、加古川中流部においては山地の麓や、段丘ⅠとⅡの段丘地下に分布する。地表の傾斜は比較的急で、ほとんどのものが小さい面積である。これらは、背後の山地や段丘から供給された堆積物によって形成されたと考えられる。

3. 遺跡調査区付近の微地形と堆積物

(1) 微地形について

本遺跡の調査区は、加古川中流部の狹窄部付近に形成された支流性扇状地（麓扇面）に位置する。調査区は、加古川の支流である垂田谷川がつくった小規模な谷の出口付近にあたり、谷中には段丘Ⅳ、段丘Ⅴおよび段丘Ⅵが分布する。段丘Ⅳは、段丘Ⅴより5～6m、また段丘Ⅴは段丘Ⅵより2～3m高い。調査区が位置する支流性扇状地は、段丘Ⅳを被覆して形成されており、土石流扇状地に相当する。支流性扇状地の背後には、流紋岩質溶結凝灰岩からなるボウズ山がみられ、そこから堆積物が供給された結果、支流性扇状地が形成されたと考えられる。扇状地は、ボウズ山の山麓から東方へ傾斜する。傾斜は、平均およそ55%と急である。山地側では、それよりさらに急な傾斜を呈し、東へは傾斜変換線を経て緩やかになる。

第146図は、遺跡調査区付近の微地形、石器の検出範囲、古墳ならびに地質断面の位置などを示したものである。遺跡調査区では、古墳の築造にともなう人工改変によって、微地形が判然としないうもの、土石流扇状地の微高地であるLobeが、調査区の北部と南部に分布するように思われる。Lobeの境界は、谷状にやや低くなっており、それは概ね東北東へ延びる。そこからLobe頂部までの比高は、およそ50cmである。Lobe上面の傾斜も、支流性扇状地と同様で、西部において急傾斜であるものの、東部では傾斜変換線を経て緩やかなものとなる。

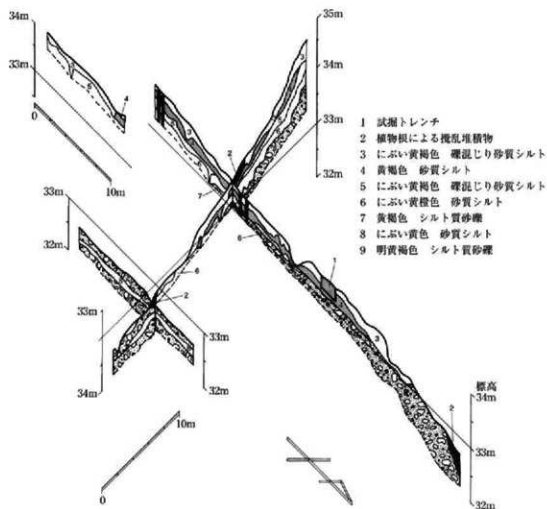


第146図 勝手野遺跡付近の地形と石器・古墳の分布

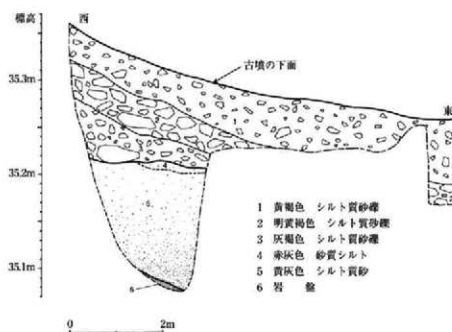
石器は、南部のLobe上から検出される。その地点の傾斜は、傾斜変換線よりやや東側の比較的緩やかなところである。他方、古墳は2つのLobeにまたがって認められる。調査区北部のLobe上には1号墳、2号墳、4号墳、および5～7号墳が、また3号墳と8号墳は南部のLobe上に立地する。これらの古墳は、8号墳を除いて、傾斜変換線より西側の標高が高いLobe西部にみられる。そこは、加古川の現河床より約10m高く、北東方向から南東方向にかけての平野を眼下に眺望できる。なお、勝手野古墳群に属するものの、遺跡調査区外に位置する9～11号墳は、すべて支流性扇状地より西側の山地斜面に立地している。

(2) 堆積物について

①段丘IVの堆積物 遺跡調査区周辺の露頭観察によると、段丘IVの堆積物は、灰褐色の砂礫とその上位に位置する細粒堆積物である。これらは、大阪層群に相当する灰色のシルト上に、不整合に堆積している。灰褐色の砂礫は、河成堆積物で段丘礫層にあたる。その厚さは、およそ1.1mと薄い。礫は、径6cm前後のものが主体で、粒径が揃っている。亜円礫が多く、礫の円磨度は比較的大さい。砂礫は、約20cmの厚さで見られる黄灰色の砂質シルトによって薄く被覆されている。



第147図 調査区における堆積物のパネルダイヤグラム



第148図 6号墳下の地質断面図(スケッチ)

②支流性扇状地の堆積物 第147図は、遺跡調査区における地質断面のパネルダイアグラムである。これは、古墳時代の遺構検出面より下位の地質断面を、北東から眺めた状況を表している。古墳時代の遺構検出面以下に存在する堆積物には、次のような基本層序が認められる。すなわち、下位から順に明黄褐色のシルト質砂礫、にぶい黄色の砂質シルト、黄褐色のシルト質砂礫、にぶい黄褐色の砂質シルト、にぶい黄褐色の礫混じり砂質シルト、黄褐色の砂質シルト、およびにぶい黄褐色の礫混じり砂質シルトである。これより上位には、第147図に示されていない暗黄褐色の砂質シルトと表土が存在する。

明黄褐色のシルト質砂礫は、土石流堆積物である。これは、径20cm以下の角礫を主体とし、粒径の比較的大きな礫が多く含まれる。最大で径50cmの巨礫がみられ、淘汰は非常に悪い。無層理で、およそ40cmの厚さをもつ。にぶい黄色の砂質シルトは、調査区東部の標高が低いところに認められる。径5cm程度の礫を含み、上部は土質化している。黄褐色のシルト質砂礫は、下位に位置する明黄褐色のシルト質砂礫と同様、土石流堆積物である。径4cm以下の角礫を主体とし、径17cmの礫が最大である。淘汰は悪く、層理がみられない。この堆積物は、調査区北部のLobeを構成する。これは、遺跡調査区のはほぼ全域に分布するものの、北部でその上面が高くなる。

シルト質砂礫より上位の堆積物も、土石流によるものである。これらは、下位のシルト質砂礫に比べて細粒であり、3度前後にわたる流速の小さい土石流によって堆積したと考えられる。各堆積物には層理がなく、径1cm以下の礫が比較的多く混入する。全体として50~80cmの厚さを持ち、よく締まっている。これらのうち、下位に位置するにぶい黄褐色の砂質シルト、にぶい黄褐色の礫混じり砂質シルト、および黄褐色の砂質シルトは、調査区南部に分布するLobeを構成する。中でも、黄褐色の砂質シルトは旧表土であり、石礫が含まれる。

その上位にみられるにぶい黄褐色の礫混じり砂質シルトは、遺跡調査区のはほぼ全域に広く分布する。

堆積物中には、A T火山灰の火山ガラスが比較的多く集積している¹⁾。これは、この濃混じり砂質シルトがA T火山灰の降灰期頃に堆積したことを示す。こうしたことから、石器を含む砂質シルトより下位の堆積物は、A T火山灰の降灰期である2万4,000～2万5,000年前以前に堆積したと考えられる。

さらに、表土の下位に位置する暗黄褐色の砂質シルトには、古墳時代後期（6世紀末～7世紀前半）の遺物が含まれる。これは土壌化しており、少なくともその時期には表土であったと考えられる。古墳時代後期の遺物検出面は、この堆積物の下面になる。表土は、黒灰色の砂質シルトで、腐植がある程度進んでいる。

第148図は、6号墳が位置する地点で、古墳の下を深く掘削した際の地質断面図である。ここでは、下位から順に岩盤、黄灰色のシルト質砂、および灰褐色のシルト質砂礫、明黄褐色のシルト質砂礫、および黄褐色のシルト質砂礫が観察される。これらのうち、上位にみられる明黄褐色のシルト質砂礫と黄褐色のシルト質砂礫は、第147図に示した2つのシルト質砂礫にそれぞれ連続する。

岩盤は流紋岩質溶結凝灰岩で、遺跡調査区の西側に存在するボウズ山を構成するものである。その上位にみられる黄灰色のシルト質砂は、約1.3mの厚さをもつ。これは、段丘Ⅳの堆積物に連続する河成堆積物と考えられる。この堆積物に含まれる砂は、比較的均質な細砂で、グレーディング構造がみられる。下部では細砂であるものの、上部に行くにしたがって徐々に細粒化し、砂質シルトとなる。最上部においては土壌化しており、このシルト質砂が堆積した後、上面が一定期間地表になっていたと考えられる。

灰褐色のシルト質砂礫は、土石流堆積物に相当する。これは、礫とシルトが混在する無層理の堆積物である。礫の淘汰は悪く、径5cm以下の角礫を主体とするものの、最大で径50cmの巨礫がみられる。約30cmの厚さをもつこの堆積物には、下位のシルト質砂がブロックで混入する。これは、シルト質砂礫を堆積させた土石流が激しいもので、下位の堆積物を塊状に侵食したことを物語る。

4. 地形環境の変遷

これまでに述べた事柄に基づいて、勝手野遺跡付近における地形環境の変遷を考察した。その結果、地形環境は次のような6つのステージを経て変遷したことが明らかになった。

ステージ1 加古川流域で段丘Ⅲが形成された後、黍田谷川の谷では砂礫が堆積した。その後、細粒堆積物がこの砂礫を薄く被覆した。この間、ボウズ山の東麓に位置する勝手野遺跡の調査区では、山地を構成する流紋岩質溶結凝灰岩の岩盤上に、黍田谷川または加古川の洪水によって、シルト質細砂が堆積した。こうして、黍田谷川の谷中に平野が形成された。

ステージ2 加古川流域の平野は、加古川およびその支流によって下刻され、段丘化した（段丘Ⅳの段丘化）。黍田谷川の谷中でも、同様の現象が起り、段丘が形成された。

ステージ3 段丘Ⅳの形成後、ボウズ山の東麓では支流性扇状地が形成されはじめた。遺跡調査区付近では、背後のボウズ山から土石流が3度発生し、その度に無層理のシルト質砂礫が堆積した。その結果、遺跡調査区の北部を中心にLobeが形成された。

ステージ4 支流性扇状地では、その後もボウズ山から土石流が発生した。遺跡調査区の南部には、流連の小さい土石流によって小さな礫を多く含む砂質シルトが堆積し、再びLobeが形成された。Lobe上では、その形成後まもなくして、人間が生活した。人間の生活は、東方へ高度を減じるLobe上面にお

いて、傾斜が緩やかになる中央付近で名なされ、そこには石器が残された。

ステージ5 人間が遺跡調査区付近で生活した後の2万4,000～2万5,000年前になると、A T火山灰が降灰した。調査区が位置する支流性扇状地では、その後も土石流が発生し、礫の混じった砂質シルトが搬出された。

ステージ6 2万～1万8,000年前の最終氷期最盛期には、海水準が著しく低下し、黍田谷川の谷中をはじめ加古川流域に広がる平野が段丘化した（段丘Vの段丘化）。遺跡調査区が位置する支流性扇状地では、土石流が発生せず、安定した地形環境が続いた。

ステージ7 安定した地形環境の下で、やがて6世紀末～7世紀前半になると、支流性扇状地上では古墳の築造が相次いだ。1号墳、2号墳、4号墳および5～7号墳は調査区北部のLobe上に、また3号墳と8号墳は南部のLobe上につくられ、いずれも標高の高い山地側のLobe西部に立地した。

5. おわりに

勝手野遺跡は、加古川とその支流である黍田谷川との合流点付近に立地する。そこは、加古川中流部において流路に山地が迫る狭窄部であり、その上流側と下流側には段丘の発達する平野が、比較的広く認められる。人間が加古川に沿って移動する場合、本遺跡付近は通過しやすい要衝の地と考えられる。

遺跡調査区は、段丘Vを覆う支流性扇状地に位置する。石器を使用した人々が調査区付近で生活した頃、そこにはすでに段丘化していた段丘IVの上に、支流性扇状地（麓斜面）が発達していた。これは、A T火山灰の降灰期（2万4,000～2万5,000年前）前後に、背後の山地（ボウズ山）から供給された土石流堆積物によって形成されたものである。この支流性扇状地は、段丘上に存在するため、加古川や黍田谷川の洪水はおよばなかった。その上、石器が検出されたのは、遺跡調査区の南部に形成されたLobe（土石流扇状地の微高地）の中央付近である。そこは、高嶺で水はけがよく、Lobe上において傾斜が緩やかであった。このような地形環境下で、Lobeの形成後まもなく、人間は一時的な生活を営んだと考えられる。

一方、6世紀末～7世紀前半に築造された古墳も、主に支流性扇状地のLobe上に立地する。ただし、それらは石器の検出地点より山地側の高所にみられる。そこは、北東方向から南東方向にかけての平野を眺望できるものの、この時期古墳がよくつくられた山地にはない利点が認められる。すなわち、支流性扇状地では山地と比べて傾斜がやや小さく、また堆積物の掘削が容易で、墳丘に使う盛土が得やすいことである。後者に関しては、岩盤の上を表土が薄く覆うだけの山地と大きく異なっている。さらに、本遺跡の調査区に古墳群が立地した重要な要因として、安定した地形環境があげられる。この支流性扇状地では、それが形成されてから6世紀末～7世紀前半に至るまでの約2万年間、土石流が発生しなかったのである。

勝手野遺跡では、以上のような点で地形環境と人間活動が関わり合っていた。本遺跡における旧石器時代の人間生活や、6世紀末～7世紀前半における古墳の築造は、それぞれ当時の地形環境をうまく利用してなされたといえよう。

1) 田中眞吾は「兵庫県・多紀連山地域の麓斜面」地理学評論59-5 1986年

2) 植原・山下・奥野「勝手野遺跡における土壌中テフラ抽出分析」本書第8章第2節所収 2002年

第2節 勝手野遺跡における土壤中テフラ抽出分析

植原 徹・山下 透・奥野博子
(株式会社京都フィッシュントラック)

1. 試料

今回の試料は、兵庫県教育委員会歴史文化財調査事務所の発掘担当者により採取された、3本の柱状試料である。各柱状試料は、実見室内で深度方向に10cmスパンで切りわけられ、スパン間に欠落がないように試料採取をおこなった。その結果、勝手野遺跡サンプル1 (10個)、サンプル2 (4個)、サンプル3 (5個)の合計19試料を採取し測定に供した。なお測定結果は柱状図とともにまとめ、後掲の第12～14表に示した。

2. 分析方法

分析方法は、第149図の通りの工程により実施した。



第149図 土壤中火山灰(火山ガラス)抽出分析処理順序

次に処理工程について説明を加える。

(1) 前処理

まず未処理試料50~100gを白紙上にとり、新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修、1970）により判定表示する。

次に半湿潤状態の生試料を適宜採取質量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、2イビーカー中で数回水替えしながら水洗し、そのうち超音波洗滌を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を濃度1~2%程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗滌水の交換を繰返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、3段階の篩別（60、120、250mesh）を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120~250mesh（1/8~1/16mm）粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤（ $N_d = 1.54$ ）を用いて岩石用薄片を作成した。

(2) 火山ガラス含有率測定

前処理で作成された岩石用薄片を検鏡し、特に火山ガラスの含有率や特徴を中心に以下の各項目について測定・チェックを行った。

①火山ガラス含有率

鏡下で火山ガラス・重鉱物・軽鉱物（土粒子やアモルファス粒子を含む）を識別し、各含有率を測定した。

②火山ガラス型

吉川（1976）¹¹ の分類に準拠して、含有される火山ガラスの形態を多いものから半定量的に求め表示した。なお吉川の分類に含まれないものについては、不規則型として一括した。

③プラント・オパール含有

鏡下でしばしばプラント・オパールが識別されるため、その有無と、比較的多い場合には全粒子に対するプラント・オパール含有率を半定量的に示した。

④色付きガラスの有無

淡褐~淡紫色を呈する色付きガラスの有無は、広域テフラの識別の際に特徴の一つとなる場合がある。そこで、色付きガラスの有無を示した。なおここでいう色付きガラスには、スコリア（塩基性火山砕屑物）中にしばしば含まれる赤褐、褐、黄、緑色などのガラスは含まれない。

(3) 重鉱物分析

主要重鉱物であるカンラン石（Ol）・斜方輝石（Opx）・単斜輝石（Cpx）・褐色普通角閃石（Ghb）・緑色普通角閃石（Ghb）・不透明（鉄）鉱物（Opq）・カミングトン閃石（Cum）・ジルコン（Zr）・黒雲母（Bt）・アバタイト（Ap）を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有が少ない試料は重液処理により重鉱物を凝集することが行われるが、風化による比重変化や粒径の違いが組成分布に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

(4) 火山ガラスの屈折率測定

前処理により調製された120~250mesh（1/8~1/16mm）粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置（RIMS）²¹ を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、制度を高めるため原則として1試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数とな

る場合もある。

具体的なデータは第150図～第158図にまとめて示し、以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名 (SeriesおよびSample Name) が示され、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。火山ガラスの屈折率 n_d の式は浸液温度から対応する屈折率を換算するもの、 n_d は屈折率、 t は温度を示す。

温度変化型屈折率測定法¹⁾は、火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた浸液温度と屈折率の換算式から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法である。(As.+De.)²⁾は液温制御の際の上昇時 (Ascent) と下降時 (Descent) の平均値を意味する。煩雑さを避けるためここでは測定温度を表示せず、各火山ガラス片毎の屈折率のみを表示した。

測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。count、min、max、range、mean、st.dev、skewnessはそれぞれ屈折率の測定回数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。*一つが1個の火山ガラスの測定結果を示す。

3. 分析結果および考察

今回得られた分析結果を集約し、第8～11表に表示した。これらの分析情報の中で、考古学的に価値をもつものは、羅年上意味のあるテフラ (広域テフラ) の降灰層準を合理的に認定する根拠を与える情報である。具体的にはテフラ起源物質として明確に同定される火山ガラスの特徴や含有量比の情報が最も重要となる。

一般に土壌中に含まれる重鉱物の分析が広く行われているが、重鉱物分析結果をテフラ降灰層準との関係で議論する場合には十分な注意が必要である。その理由は、土壌中の重鉱物は母岩起源のものを含むのが普通であり、必ずしもテフラ起源のみを特定することができないからである。しかも同一種類の鉱物でも、組成上かなりの多様性をもつことが普通であり、純粋にテフラ起源の重鉱物のみを識別することは困難が多い。このため、今回の分析結果の考察においては、重鉱物分析結果から得られる情報は参考程度として低く扱わざるを得ないことをお断りしておきたい。

さて火山ガラスから得られる情報に注目すると、今回の試料中に少なくとも3種類の火山ガラスが識別される。それらは、各火山ガラスの特徴をもとに、町田・新井 (1992)³⁾の火山灰アトラスと対照すると、降灰年代の古いものから順に、始良-Tn (AT)、大山系、鬼界アカホヤ (K-Ah) 由来のガラスと判断される。各火山灰の特徴と分布層準は次ページ以下の表5～7に示す。

なお今回検出された土壌中の火山ガラスにつき、堆積過程において生じたと考えられるバイアスの存在を一言付記しておきたい。それは1. 全体に軽石質のものが非常に少なく、2. 気泡の入ったガラスも少ないことである。ATやK-Ahのようにバブルウォール型が特徴とされるガラスには、もともと軽石質のものが少ないのは当然だが、決して含まれないわけではない。風成火山灰の測定例から考えて、初生的には少なくとも10%以上の軽石質ガラスが含まれると推定される。しかし同じ火山灰が水成堆積すると、ガラスが水中で比重分離され、軽石質のものや気泡の入ったガラスが選択的に除去される。そのため再堆積層中の火山ガラスには、軽石質のものや気泡の入ったガラスが少なくなると考えられる。したがって今回の検出ガラスは再堆積した可能性もあり、厳密な降灰層準の決定には注意を要する。分析データを解釈する上で、この点に十分な配慮が必要である。

また分析を行った19試料すべてにベータ石英 (β -Qz; しばしば球形状の高温型石英の仮品を呈する石英結晶) が含まれることが特記される。広域テフラでベータ石英を含むものは鬼界層 (K-Tz: 約10万年前のテフラ) がよく知られており、このテフラ中の火山ガラスの形態や屈折率はATテフラと識別が困難である。したがってもしK-Tzテフラが勝手野遺跡の土壌に含有されるとすると、福年上大きな問題を提起することになる。しかし詳しく観察すると、今回の分析ではベータ石英で火山ガラスに包埋されるものは1例も検出されず、通常はK-Tz中のベータ石英が火山ガラスに包埋されること明らかに異なる。一方勝手野遺跡の背後には中生代に噴出した流紋岩で構成された山塊が迫る。この流紋岩中にベータ石英が含有される可能性は十分あり、遺跡背後から風化により単純したベータ石英が遺跡土壌中に恒常的に混入すると考えた方が、分析結果を無理なく説明する。以上の点を考慮した上で、次に各採取地点における火山灰の降灰層準について考察する。

注)

- 1) 吉川剛作 (1976) : 大飯層群の火山灰層について 地質学雑誌82 (8) pp 479-515
- 2) 横山卓雄・榎原 徹・山下 達 (1986) : 温度変化屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定 第四紀研究 25 (1) pp 21-30
- 3) Danbara T., Yamashita T., Iwano H. and Kasuya M. (1992): An improved system for measuring refractive index using the thermal immersion method. Quaternary International. 13/14, pp89-91
- 4) 榎原 徹 (1993) : 温度変化屈折率測定法 日本第四紀学専号 第四紀試料分析法2 研究対象別分析法 pp 149-157 東京大学出版会
- 5) 町田 洋・新井房夫 (1992) : 火山灰アトラス [日本列島とその周辺] 東京大学出版会

火山ガラス抽出層準				屈折率 (Nd)	主な火山ガラス型	* (5) 対比される 広域テフラ	* (6) 降灰年代	備 考
分布層準	最大遺棄層準	No. 1 深 度	地層名					
No.1 0 cm ~ 10 cm	No.1 0 cm ~ 10 cm	1~2 層	1.508 ~ 1.514 最傾値 =1.510	H型 (扁平型)	鬼界アカホヤ 火山灰 (K-Ah)	6,300B.P.	No.1 試料で検出されるのみが分布の詳細は不明。降灰層準は No.1 試料層準かより上位にあるものと推定される。ガラス型はH型を主とし濃い色付きガラスを含む。火山ガラスの屈折率がかなり高いのが特徴。水和層厚は約5 μ m	
No.6 50 cm ~ 60 cm	—	—	1.505	C.it型 (中盤型) ~ 下 部 割 型	火山系火山灰型	—	微量だが No.6 試料で検出される降灰層準決定は困難。火山ガラスの特徴と層準から火山系テフラの高堆積と推定されるが詳細は不明。水和層厚は5-10 μ mでAT火山灰より若いと判定された。下位層への落ち込みによるコンタミの可能性が高い。	
No.1 ~ No.10 100 cm	No.2 10 cm ~ 20 cm	2層 下部	1.498 ~ 1.501 最傾値 =1.500	H型 (扁平型)	給良 Te 火山 灰 (AT)	24,000 ~ 25,000 B.P.	今回の全分析層準で検出されるが、No.2 試料層準で遺棄が認められ、降灰層準が同層準に近いと推定される。無色透明な扁平 (バブル・ウォール) 型ガラスを主とし、亀/甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。火山 g 1 は水和が完了する。	

第5表 勝手野遺跡サンプル1地点における火山ガラス遺棄層準とその特徴

火山ガラス検出層帯				顕著率 (No.)	主な火山 ガラス型	* (5) 対比される 広域テフラ	* (5) 降伏年代	備 考
分布層帯 ワダNo.	標高	最大遺棄層帯 ワダNo.	深度 地層名					
No.3 ～ No.4	20 cm ～ 30 cm	No.3 0 cm ～ 10 cm	5層 下部	1.505 ～ 1.515 最顕著 =1.510	H型 (扁平型)	鬼界アカホヤ 火山灰 (K-Ah)	6,300D.P.	No.3 試料で少量検出されるのみであり詳細は不明。火山ガラスの含有が少なく、降伏層帯の決定は困難。ガラス型はH型を主とし濃い色けきガラスを含む。火山ガラスの顕著率がかなり高いのが特徴。水和層厚は約5μm。
No.1 ～ No.4	0 cm ～ 40 cm	— — —	— — —	1.502 ～ 1.505	C, B型 (中間型 ～不規則 型)	大山系火山灰	—	微量だが全分析試料で検出される降伏層帯決定は困難。火山ガラスの特徴と層序から大山系テフラの再堆積と推定されるが詳細は不明。水和層厚は5～10μm。
No.1 ～ No.4	0 cm ～ 40 cm	30 cm ～ 40 cm	8層	1.498 ～ 1.501 最顕著 =1.500	H型 (扁平型)	給負 Ta 火山 灰 (AT)	24,000 ～ 25,000 B.P.	今回の全分析層帯で検出されるが、No.4 試料層帯で比較的弱い濃度が認められる。降伏層帯はNo.4 試料層帯より下位と推定される。無色透明な扁平（バブル・ウォール）型ガラスを主とし、亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。火山 g 1 は水和完了。

第6表 勝手野遺跡サンプル2地点における火山ガラス遺集層帯とその特徴

火山ガラス検出層帯				顕著率 (No.)	主な火山 ガラス型	* (5) 対比される 広域テフラ	* (5) 降伏年代	備 考
分布層帯 ワダNo.	標高	最大遺棄層帯 ワダNo.	深度 地層名					
					H型 (扁平型)	鬼界アカホヤ 火山灰 (K-Ah)	6,300D.P.	本試料では検出されず。
No.1	0 cm ～ 10 cm	— — —	— — —	1.502 ～ 1.505	C, B型 (中間型 ～不規則 型)	大山系火山灰	—	No.1 試料でのみ微量検出される。降伏層帯決定は困難。火山ガラスの特徴と層序から大山系テフラの再堆積と推定されるが詳細は不明。水和層厚は5～10μm。
No.1 ～ No.3	0 cm ～ 30 cm	— — —	8層	1.498 ～ 1.501 最顕著 =1.500	H型 (扁平型)	給負 Ta 火山 灰 (AT)	24,000 ～ 25,000 B.P.	今回の分析層帯の上位で検出されるが、含有は微量で濃度は認められず。降伏層帯の決定は困難。層序から分布層帯より上位に降伏層帯が推定される。無色透明な扁平（バブル・ウォール）型ガラスを主とし、亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。火山 g 1 は水和完了。

第7表 勝手野遺跡サンプル3地点における火山ガラス遺集層帯とその特徴

No.	試料名	処理生試料 乾燥重量 (g)	篩別試料重量 (g)			色調判定
			> 1/4mm	1/4 ~ 1/8mm	1/8 ~ 1/16mm	
1	勝手野遺跡 サンプル 1 0 ~ 10 cm	34.1	13.02	1.46	1.11	2.5Y8/2 & 2.5Y7/8
2	勝手野遺跡 サンプル 1 10 ~ 20 cm	32.4	5.85	1.15	1.06	10YR8/1 & 10YR6/8
3	勝手野遺跡 サンプル 1 20 ~ 30 cm	31.5	13.42	0.81	0.72	10YR7/2, 8/8 & 10YR6/4
4	勝手野遺跡 サンプル 1 30 ~ 40 cm	29.9	8.45	1.10	0.87	2.5Y8/3 & 2.5Y7/6
5	勝手野遺跡 サンプル 1 40 ~ 50 cm	34.2	8.00	1.37	1.26	2.5Y8/3 & 2.5Y7/6
6	勝手野遺跡 サンプル 1 50 ~ 60 cm	41.6	10.88	1.73	1.60	2.5Y8/3 & 2.5Y7/3
7	勝手野遺跡 サンプル 1 60 ~ 70 cm	39.5	10.76	1.69	1.38	2.5Y8/3 & 2.5Y7/3
8	勝手野遺跡 サンプル 1 70 ~ 80 cm	37.4	11.48	1.62	1.37	2.5Y8/3 & 2.5Y7/3
9	勝手野遺跡 サンプル 1 80 ~ 90 cm	38.6	13.05	1.50	1.20	2.5Y8/3 & 2.5Y7/3
10	勝手野遺跡 サンプル 1 90 ~ 100 cm	53.7	25.08	1.75	1.58	2.5Y8/1 & 2.5Y8/3
1	勝手野遺跡 サンプル 2 0 ~ 10 cm	34.5	15.16	1.20	1.03	2.5Y8/2 & 2.5Y7/6
2	勝手野遺跡 サンプル 2 10 ~ 20 cm	33.0	8.56	1.44	0.83	2.5Y8/1, 8/3 & 2.5Y6/8
3	勝手野遺跡 サンプル 2 20 ~ 30 cm	38.6	8.29	1.55	1.48	2.5Y8/1, 8/3 & 2.5Y6/8
4	勝手野遺跡 サンプル 2 30 ~ 40 cm	39.6	9.43	1.62	1.42	2.5Y8/2 & 2.5Y6/8
1	勝手野遺跡 サンプル 3 0 ~ 10 cm	39.5	31.94	0.28	0.30	2.5Y8/2 2.5Y6/8 2.5Y6/2
2	勝手野遺跡 サンプル 3 10 ~ 20 cm	41.1	20.51	1.42	1.31	2.5Y8/2 2.5Y8/4 2.5Y7/8
3	勝手野遺跡 サンプル 3 20 ~ 30 cm	33.2	9.06	2.27	2.23	2.5Y8/4
4	勝手野遺跡 サンプル 3 30 ~ 40 cm	34.6	7.18	2.11	2.11	2.5Y8/1 & 2.5Y8/8
5	勝手野遺跡 サンプル 3 40 ~ 50 cm	33.5	11.45	1.84	1.86	2.5Y8/1 & 2.5Y8/8

第 8 表 保存用試料一覧表

- 注 1) 表中の数字は保存試料の重量を示す。
 2) 1/8~1/16段階の保存試料は、一部薄片作成に使用したため実際よりわずかに少なくなっている。
 3) 色調判定は、新版標準土色候（農林省農林水産技術会議事務局監修 1970）による。

No.	試料名	重 鉱 物 組 成 * (1)											
		Ol	Pyroxene			Amphibole		Opq	Cum.	Zr	Bi	Ap	total
			Opx	Cpx	BHo	GHo							
1	サンプル 1	—	17	1	2	96	77	2	3	2	—	200	
	上段より 0 ~ 10 cm	0.0	8.5	0.5	1.0	48.0	38.5	1.0	1.5	1.0	0.0	100.0	
2	サンプル 1	—	12	4	2	80	83	3	6	5	—	200	
	上段より 10 ~ 20 cm	0.0	6.0	2.0	1.0	40.0	44.0	1.5	3.0	2.5	0.0	100.0	
3	サンプル 1	—	20	3	—	59	98	—	5	—	—	185	
	上段より 20 ~ 30 cm	0.0	10.8	1.6	0.0	31.9	53.0	0.0	2.7	0.0	0.0	100.0	
4	サンプル 1	—	11	2	1	22	55	—	4	1	—	96	
	上段より 30 ~ 40 cm	0.0	11.5	2.1	1.0	22.9	57.3	0.0	4.2	1.0	0.0	100.0	
5	サンプル 1	—	8	1	1	49	96	1	6	3	—	165	
	上段より 40 ~ 50 cm	0.0	4.8	0.6	0.6	29.7	58.3	0.6	3.6	1.8	0.0	100.0	
6	サンプル 1	—	7	—	—	35	75	—	8	1	—	126	
	上段より 50 ~ 60 cm	0.0	5.6	0.0	0.0	27.8	59.5	0.0	6.3	0.8	0.0	100.0	
7	サンプル 1	—	1	1	1	62	89	1	3	2	—	160	
	上段より 60 ~ 70 cm	0.0	0.6	0.6	0.6	38.8	55.7	0.6	1.9	1.2	0.0	100.0	
8	サンプル 1	—	4	1	—	56	82	—	6	4	—	153	
	上段より 70 ~ 80 cm	0.0	2.6	0.7	0.0	36.6	53.6	0.0	3.9	2.6	0.0	100.0	
9	サンプル 1	—	3	—	—	63	105	—	6	9	—	186	
	上段より 80 ~ 90 cm	0.0	1.6	0.0	0.0	33.9	56.5	0.0	3.2	4.8	0.0	100.0	
10	サンプル 1	—	4	—	1	84	97	—	5	9	—	200	
	上段より 90 ~ 100 cm	0.0	2.0	0.0	0.5	42.0	48.5	0.0	2.5	4.5	0.0	100.0	
11	サンプル 2	—	8	—	—	35	39	—	3	7	—	92	
	上段より 0 ~ 10 cm	0.0	8.7	0.0	0.0	38.0	42.4	0.0	3.3	7.6	0.0	100.0	
12	サンプル 2	—	1	1	—	37	52	—	4	9	—	104	
	上段より 10 ~ 20 cm	0.0	1.0	1.0	0.0	35.6	49.9	0.0	3.8	8.7	0.0	100.0	
13	サンプル 2	—	3	2	—	24	45	—	1	7	—	79	
	上段より 20 ~ 30 cm	0.0	1.5	1.0	0.0	30.4	56.8	0.0	1.3	8.9	0.0	100.0	
14	サンプル 2	—	3	2	—	115	60	2	2	6	—	200	
	上段より 30 ~ 40 cm	0.0	1.5	1.0	0.0	57.5	30.0	1.0	1.0	3.0	0.0	100.0	
1	サンプル 3	—	5	—	—	28	53	1	5	9	—	101	
	上段より 0 ~ 10 cm	0.0	5.0	0.0	0.0	27.7	52.4	1.0	5.0	8.9	0.0	100.0	
2	サンプル 3	—	—	—	—	16	46	—	6	5	—	73	
	上段より 10 ~ 20 cm	0.0	0.0	0.0	0.0	21.9	63.1	0.0	8.2	6.8	0.0	100.0	
3	サンプル 3	—	2	—	—	4	25	—	3	2	—	36	
	上段より 20 ~ 30 cm	0.0	5.6	0.0	0.0	11.1	69.4	0.0	8.3	5.6	0.0	100.0	
4	サンプル 3	—	1	1	—	9	47	—	3	7	—	68	
	上段より 30 ~ 40 cm	0.0	1.5	1.5	0.0	13.2	69.1	0.0	4.4	10.3	0.0	100.0	
5	サンプル 3	—	1	—	—	4	44	—	6	3	—	58	
	上段より 40 ~ 50 cm	0.0	1.7	0.0	0.0	6.9	75.9	0.0	10.3	5.2	0.0	100.0	

第 9 表 重 鉱 物 組 成

注)

(1) 上段 計測粒子数 下段 %

なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol: カンラン石 Opx: 斜方輝石 Cpx: 单斜輝石 BHo: 褐色普通角閃石 GHo: 緑色普通角閃石

Opq: 不透明 (鉄) 鉱物 Zr: ジルコン Bi: 黒雲母 Ap: アバタイト Cum.: カミントン閃石

No.	試料名	屈折率範囲 ¹⁾	屈折率 ²⁾	測定 ³⁾	屈折率 ⁴⁾	火山ガラス ⁵⁾	備考 ⁶⁾
		最大-最小	平均値	個体数	最頻値		
1	勝手野遺跡 サンプル1 0～10 cm	1.497 - 1.500	1.4988	29	1.4991	H C	含有：C 水和完了が 主
		1.510	1.5102	1			
2	勝手野遺跡 サンプル1 10～20 cm	1.497 - 1.501	1.4988	30	1.498 ~ 1.499	H C	含有：C 水和完了
3	勝手野遺跡 サンプル1 20～30 cm	1.498 - 1.501	1.4988	30	1.499	H C	含有：C 水和完了
4	勝手野遺跡 サンプル1 30～40 cm	1.497 - 1.500	1.4989	30	1.499	H C	含有：VR 水和完了
5	勝手野遺跡 サンプル1 40～50 cm	1.498 - 1.500	1.4990	6	-	H C	含有：VVR 水和完了
6	勝手野遺跡 サンプル1 50～60 cm	1.497 - 1.501	1.4988	10	-	H C	含有：VR 水和完了
		1.504	1.5036	1		C	
7	勝手野遺跡 サンプル1 60～70 cm	1.497 - 1.498	1.4972	2	-	H C	含有：VVR 水和完了
8	勝手野遺跡 サンプル1 70～80 cm	1.497	1.4969	1	-	H C	含有：VVR 水和完了
9	勝手野遺跡 サンプル1 80～90 cm	1.499 - 1.501	1.5000	3	-	H C	含有：VVR 水和完了
10	勝手野遺跡 サンプル1 90～100 cm	1.499 - 1.501	1.4998	5	-	H C	含有：VVR 水和完了

第10表 火山ガラス屈折率測定結果一覧表(1)

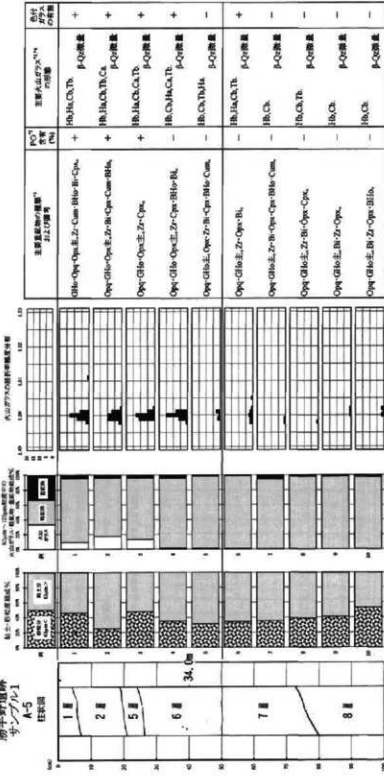
- 1) 屈折率範囲：個体ごとの屈折率測定値を四捨五入し、小数点第3位までで表示する。
その際グループが異なるとみなされるものは、グループごとに表示する。
- 2) 屈折率平均値：同一グループに属するとみなした場合の個体ごとの平均屈折率値。
- 3) 測定個体数：測定対象とした個体数。
- 4) 屈折率最頻値：ヒストグラム中で最頻値を判断し、四捨五入により小数点第3位までで表示する。
(ex. 1.500 : 1.4995 ≤ nd < 1.5005)
- 5) 火山ガラス形態：吉川(1976)に準拠し、形態をH：扁平型、C：中間型、T：多孔質型に分け、定性的に示す。
またいずれにも属さないものを、I：不規則として一括する。
- 6) 備考：火山ガラス含有、水和の程度を定性的に示す。また、その試料固有の特徴について記す。
火山ガラスの含有は、VA(≥95%)、A(≥50%)、C(≥10%)、R(≥5%)、VR(≥1%)、
VVR(<1%)、N(0%)の7段階に分類する。

No.	試料名	屈折率範囲 ¹⁾	屈折率 ²⁾	測定 ²⁾	屈折率 ²⁾	火山ガラス ²⁾	備考 ⁶⁾
		最大-最小	平均値	個体数	最頻値	形態	
1	勝手野遺跡 サンプル2 0～10 cm	1.497 - 1.501	1.4989	29	1.499	H C	含有：R 水和完了が 主
		1.503	1.5033	1		C	
2	勝手野遺跡 サンプル2 10～20 cm	1.496 - 1.501	1.4988	30	1.499	H C	含有：R 水和完了
3	勝手野遺跡 サンプル2 20～30 cm	1.498 - 1.501	1.4989	15	1.499	H C	含有：VR 水和完了が主
		1.502	1.5022	1		C	
		1.511	1.5108	1		H	
4	勝手野遺跡 サンプル2 30～40 cm	1.497 - 1.501	1.4989	29	1.499	H C	含有：C 水和完了が主
		1.503	1.5027	1		C	
1	勝手野遺跡 サンプル3 0～10 cm	1.498 - 1.500	1.4993	29	1.500	H C	含有：VR 水和完了が主
		1.503	1.5029	1		C	
2	勝手野遺跡 サンプル3 10～20 cm	1.498 - 1.500	1.4987	7	—	H C	含有：VVR 水和完了
3	勝手野遺跡 サンプル3 20～30 cm	1.499	1.4985	1	—	$\beta - Qz$ に 付着	含有：VVR 水和完了
4	勝手野遺跡 サンプル3 30～40 cm	—	—	0	—	—	含有：N 火山ガラス 検出されず
5	勝手野遺跡 サンプル3 40～50 cm	—	—	0	—	—	含有：N 火山ガラス 検出されず

第11表 火山ガラス屈折率測定結果一覧表(2)

- 1) 屈折率範囲：個体ごとの屈折率測定値を四捨五入し、小数点第3位までで表示する。
その際グループが異なるとみなされるものは、グループごとに表示する。
- 2) 屈折率平均値：同一グループに属するとみなした場合の個体ごとの平均屈折率値。
- 3) 測定個体数：測定対象とした個体数。
- 4) 屈折率最頻値：ヒストグラム中で最頻値を判断し、四捨五入により小数点第3位までで表示する。
(ex. 1.500; 1.4995 ≤ nd < 1.5005)
- 5) 火山ガラス形態：吉川(1976)に準拠し、形態をH：扁平型、C：中間型、T：多孔質型に分け、定性的に示す。
またいずれにも属さないものを、I：不規則として一括する。
- 6) 備考：火山ガラス含有、水和の程度を定性的に示す。また、その試料固有の特徴について記す。
火山ガラスの含有は、VA(≥95%)、A(≥50%)、C(≥10%)、R(≥5%)、VR(≥1%)、VVR(<1%)、N(0%)の7段階に分類する。

勝手野遺跡
サンプル1



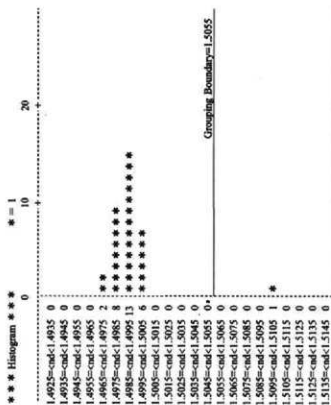
41. 各層物とその層物は以下のように対応します。
 01: カンラン石 Opa: 緑角輝石 Oca: 緑色普通角閃石 Cam: カンラン石内閃石 Cca: 緑色普通角閃石
 02: 黒曜石 Ope: 掌状石 Za: ツルコン Ao: アバタ石 Ia: イダインダサイト Oop: 毛羽状輝石 03: 緑ラン石
 42. 04本層はブロンズ・ネーデルの含有量 (%) を示します。
 43. 火山ガラス層とその層物は以下の層に以下のように対応します。
 Ia, Ib: 黒平型 (インフル・クォーツ型) Ca, Ch: 中型型 (黒石型)
 44. なお、04層 (1970) 以外のガラス層については次の層物を用います。
 56: スユリア質ガラス It: 不規則型

第12図 勝手野遺跡サンプル1の土壌中火山灰抽出分析結果

Sample Name : 1 地表面より0-10 cm (サンプル1)
 Analyst : Yamashita
 Material : VCI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000387 · t)
 Group: 01

	1.4970	1.4974	1.4977	1.4979	1.4980	1.4982	1.4983
count	1	1	1	1	1	1	1
min.	1.4970	1.4974	1.4977	1.4979	1.4980	1.4982	1.4983
max.	1.5003	1.4985	1.4986	1.4986	1.4986	1.4987	1.4987
mean	1.5102	1.4985	1.4986	1.4986	1.4986	1.4987	1.4987
median	1.5102	1.4985	1.4986	1.4986	1.4986	1.4987	1.4987
st.dev.	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
skew.	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000

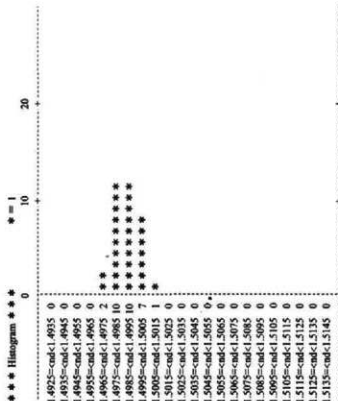
Group 01: 29 1.4970 1.5003 0.0033 1.4988 1.4986 0.0008 0.0045
 Group 02: 1 1.5102 1.5102 0.0000 1.5102 1.5102 0.0000 0.0000
 Total : 30 1.4970 1.5102 0.0132 1.4991 1.4987 0.0022 4.3620



Sample Name : 2 地表面より10-20 cm (サンプル1)
 Analyst : Yamashita
 Material : VCI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000387 · t)

	1.4999	1.4994	1.4991	1.4988	1.4984	1.4980	1.4992	1.4979
count	1	1	1	1	1	1	1	1
min.	1.4999	1.4994	1.4991	1.4988	1.4984	1.4980	1.4992	1.4979
max.	1.5002	1.4998	1.4995	1.4990	1.4984	1.4980	1.4980	1.4975
mean	1.4999	1.4994	1.4991	1.4988	1.4984	1.4980	1.4992	1.4979
median	1.4999	1.4994	1.4991	1.4988	1.4984	1.4980	1.4992	1.4979
st.dev.	0.0010	0.0010	0.0010	0.0010	0.0010	0.0010	0.0010	0.0010
skew.	-0.1567	-0.1567	-0.1567	-0.1567	-0.1567	-0.1567	-0.1567	-0.1567

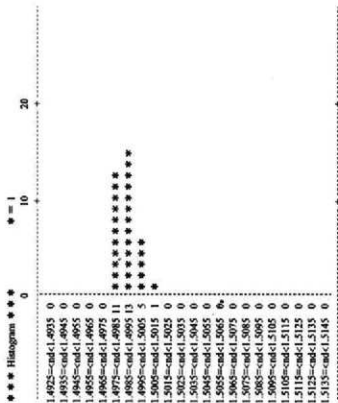
Total : 30 1.4969 1.5006 0.0037 1.4988 1.4989 0.0010 -0.1567



Sample Name : 3 島尻郡より 20-30 cm (サンプル 1)
 Analyst : Yamashita
 Material : V.GI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.00037 · t)

	count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
1.4983	1.4986	1.4987	1.4989	1.4990	1.4992	1.4994	1.4997	
1.4976	1.4979	1.4983	1.4989	1.4988	1.4980	1.4981	1.4986	
1.4988	1.4994	1.4997	1.5001	1.5005	1.4975	1.4977	1.4983	
1.4985	1.4992	1.4981	1.4983	1.4988	1.5002			

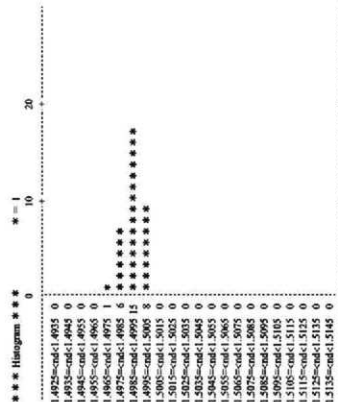
Total : 30 1.4975 1.5005 0.0030 1.4988 1.4987 0.0008 0.3692



Sample Name : 4 島尻郡より 30-40 cm (サンプル 1)
 Analyst : Yamashita
 Material : V.GI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.00037 · t)

	count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
1.4992	1.4991	1.4989	1.4985	1.4983	1.4976	1.4998	1.4996	
1.4988	1.4994	1.4988	1.4981	1.5003	1.4997	1.4992	1.4989	
1.4985	1.4981	1.4977	1.5000	1.4986	1.5000	1.4987	1.4981	
1.5004	1.5001	1.4993	1.4983	1.4986	1.4968			

Total : 30 1.4968 1.5004 0.0036 1.4989 1.4989 0.0009 -0.2804

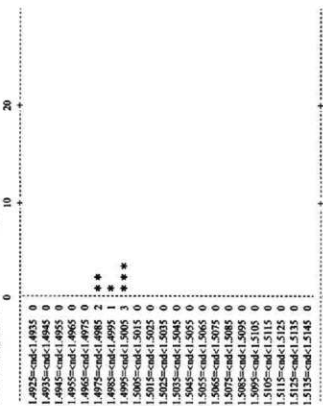


Sample Name : 5 地表面より 40-50 cm (サンプル 1)
 Analyst : Yamashita
 Material : V-GI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000387・t)

Group: 01
 1.4996 1.5001 1.4975 1.4983 1.4991 1.4995

count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
Total : 6	1.4975	1.5001	0.0026	1.4990	1.4993	0.0010	-0.7810

*** Histogram *** * = 1

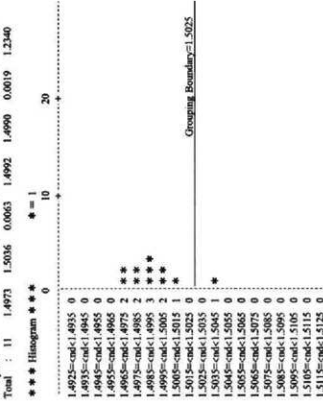


Sample Name : 6 地表面より 50-60 cm (サンプル 1)
 Analyst : Yamashita
 Material : V-GI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000387・t)

Group: 01
 1.4973 1.4974 1.4977 1.4978 1.4986 1.4990 1.4990 1.5000
 1.5004 1.5009

count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
Group 01: 10	1.4973	1.5009	0.0036	1.4988	1.4988	0.0013	0.4019
Group 02: 1	1.5036	1.5036	0.0000	1.5036	1.5036	0.0000	0.0000
Total : 11	1.4973	1.5036	0.0063	1.4992	1.4990	0.0019	1.2340

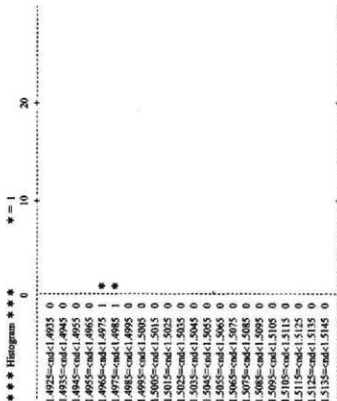
*** Histogram *** * = 1



Sample Name : 7 地表面より 60-70 cm (サンプル1)
 Analyst : Yamashita
 Material : V.GI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000387 · t)

1.4978 1.4965

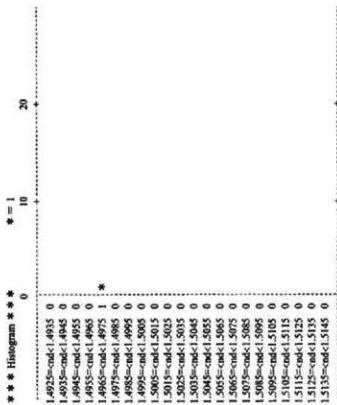
count min. max. range mean median st.dev. skew.
 Total : 2 1.4965 1.4978 0.0013 1.4972 1.4972 0.0009 0.0000



Sample Name : 8 地表面より 70-80 cm (サンプル1)
 Analyst : Yamashita
 Material : V.GI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000387 · t)

1.4969

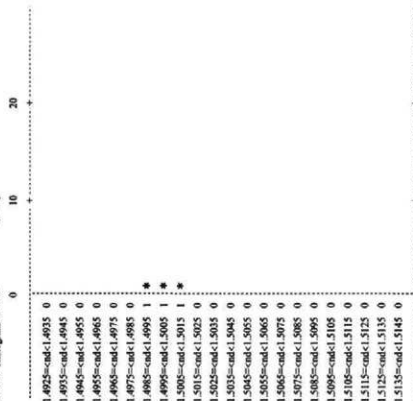
count min. max. range mean median st.dev. skew.
 Total : 1 1.4969 1.4969 0.0000 1.4969 1.4969 0.0000 0.0000



Sample Name : 9 地表面より 05-90 cm (サンプル1)
 Analyst : Yamashita
 Material : V.GI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000387 · t)
 1.4992 1.5005 1.5044

count min. max. range mean median st.dev. skew.
 Total : 3 1.4992 1.5005 0.0013 1.5000 1.5004 0.0007 -1.6949

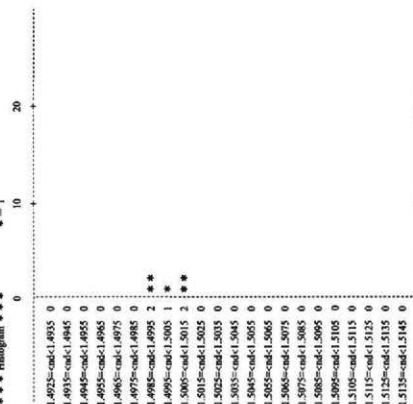
*** Histogram *** * = 1



Sample Name : 10 地表面より 90-100 cm (サンプル1)
 Analyst : Yamashita
 Material : V.GI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000387 · t)
 1.4998 1.5006 1.5009 1.4986 1.4991

count min. max. range mean median st.dev. skew.
 Total : 5 1.4986 1.5009 0.0023 1.4998 1.4998 0.0010 -0.1034

*** Histogram *** * = 1

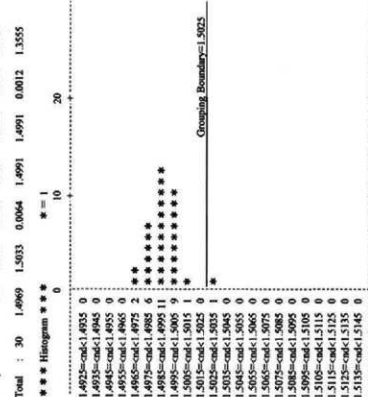


第154図 分析ターゲット (5) 9 · 10

Sample Name : 1 鉄線蓋より0-10 cm (サンプル2)
 Analyst : Yamashita
 Material : V,Cl
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000387・i)

Group: 01	count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
1.4969	1.4974	1.4978	1.4978	1.4981	1.4982	1.4982	1.4982	
1.4985	1.4986	1.4989	1.4989	1.4989	1.4990	1.4992	1.4992	
1.4992	1.4993	1.4994	1.4995	1.4995	1.4995	1.4996	1.4996	
1.4998	1.4998	1.5002	1.5008					

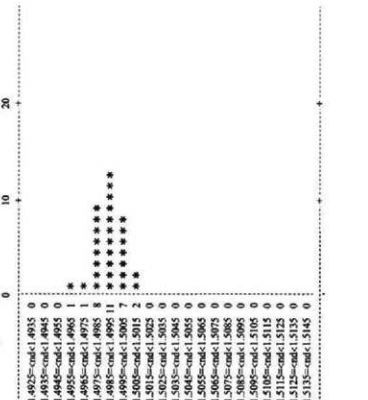
Group: 02
 1.5033
 Group.01: 29 1.4969 1.5008 0.0039 1.4989 1.4990 1.4990 -0.2818
 Group.02: 1 1.5033 1.5033 0.0000 1.5033 1.5033 0.0000 0.0000
 Total : 30 1.4969 1.5033 0.0064 1.4991 1.4991 0.0012 1.3555
 *** Histogram *** * = 1



Sample Name : 2 鉄線蓋より10-20 cm (サンプル2)
 Analyst : Yamashita
 Material : V,Cl
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000387・i)

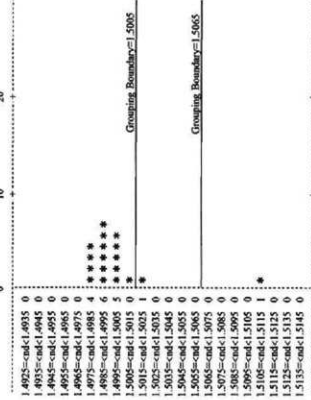
Group: 01	count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
1.5000	1.5005	1.4960	1.4985	1.4985	1.4986	1.5004	1.4974	1.6984
1.4989	1.4988	1.4993	1.4981	1.4978	1.5001	1.4989	1.4985	
1.4992	1.4979	1.4999	1.4995	1.4992	1.4988	1.4986	1.4979	
1.4997	1.4989	1.4986	1.4979	1.4975	1.5005			

Total : 30 1.4960 1.5005 0.0045 1.4988 1.4987 0.0010 -0.3392
 *** Histogram *** * = 1



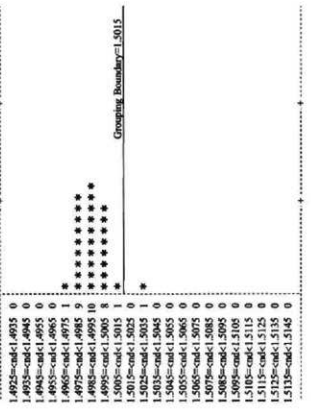
Sample Name : 3 地表面より 20-30 cm (サンプル 2)
 Analyst : Yamashita
 Material : V.GI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000387 * t)
 Group_01 : 1.4978 1.4978 1.4979 1.4981 1.4985 1.4985 1.4986 1.4987
 1.4992 1.4994 1.4996 1.4997 1.4999 1.5001
 Group_02 : 1.5022
 Group_03 : 1.5108

count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
Group 01: 15	1.4978	1.5001	0.0023	1.4989	1.4987	0.0008	0.0131
Group 02: 1	1.5022	1.5022	0.0000	1.5033	1.5022	0.0000	0.0000
Group 03: 1	1.5108	1.5108	0.0000	1.5108	1.5108	0.0000	0.0000
Total : 17	1.4978	1.5108	0.0130	1.4998	1.4992	0.0030	3.3099



Sample Name : 4 地表面より 30-40 cm (サンプル 2)
 Analyst : Yamashita
 Material : V.GI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000387 * t)
 Group_01 : 1.4972 1.4975 1.4978 1.4980 1.4982 1.4982 1.4982 1.4983
 1.4984 1.4986 1.4986 1.4986 1.4987 1.4989 1.4989 1.4989
 1.4991 1.4993 1.4994 1.4996 1.4996 1.4997 1.4998 1.4999
 1.5002 1.5003 1.5003 1.5006
 Group_02 : 1.5027

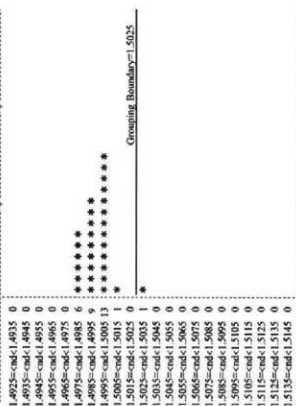
count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
Group 01: 29	1.4972	1.5006	0.0034	1.4989	1.4989	0.0009	0.1186
Group 02: 1	1.5027	1.5027	0.0000	1.5027	1.5027	0.0000	0.0000
Total : 30	1.4972	1.5027	0.0055	1.4991	1.4989	0.0011	1.1274



Sample Name : 1 鉛筆油より0-10 cm (サンプル3)
 Analyst : Yamashita
 Material : V.GI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000187・t)
 Group: 01

	count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
Group 01:	29	1.4977	1.5005	0.0028	1.4993	1.4994	0.0008	-0.4765
Group 02:	1	1.5029	1.5029	0.0000	1.5029	1.5029	0.0000	0.0000

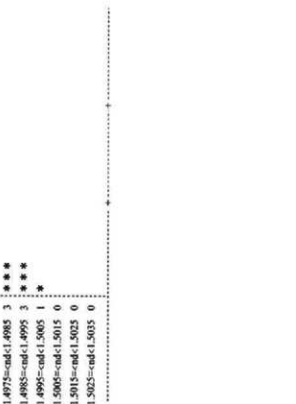
Total : 30 1.4977 1.5029 0.0052 1.4994 1.4995 0.0010 0.9949
 *** Histogram *** * = 1
 0 10 20



Sample Name : 2 鉛筆油より10-20 cm (サンプル3)
 Analyst : Yamashita
 Material : V.GI
 Immersion Oil : No.3.8 (nd=1.51915-0.000387・t)

	count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
Group 01:	7	1.4975	1.4995	0.0020	1.4986	1.4987	0.0007	-0.4264

Total : 7 1.4975 1.4995 0.0020 1.4986 1.4987 0.0007 -0.4264
 *** Histogram *** * = 1
 0 10 20



第157図 分析データシート(8) 15・16

Sample Name : 3 地表面より 20-30 cm (サンプル 3)
 Analyst : Yamashita
 Material : V.GI
 Immersion Oil : No.3,8 (nd=1.51915-0.000387・t)

1.4985
 count min. max. range mean median st.dev. skew.
 Total : 1 1.4985 1.4985 0.0000 1.4985 1.4985 0.0000 0.0000

*** Histogram ***

* = 1

0 10 20

1.4965=cnd<1.4975 0

1.4975=cnd<1.4985 0

1.4985=cnd<1.4995 1 *

1.4995=cnd<1.5005 0

1.5005=cnd<1.5015 0

*サンプル 3 の、Sample Name : 4 地表面より 30-40 cm および 5 地表面より
 40-50 cm からは、火山ガラスは検出されなかった。

*各サンプルの「地表面より」とは、現地表面ではなく柱状サンプルの上層からの深度。

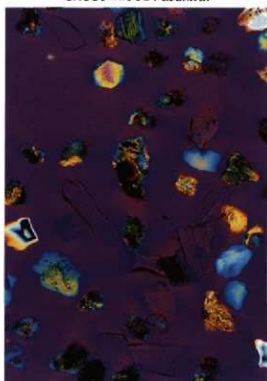
第158図 分析データシート (9) 17

OPEN NICOL



サンプル1 (A-5) 0~10cm、1層

CROSS NICOL+鋭敏検板



同 左



サンプル1 (A-5) 10~20cm、2層



同 左

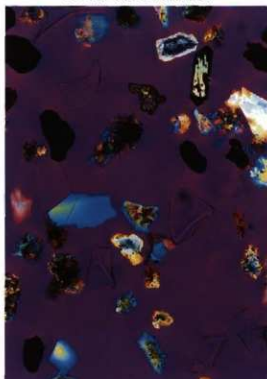
写真1 分析サンプル偏光顕微鏡写真(1)

OPEN NICOL

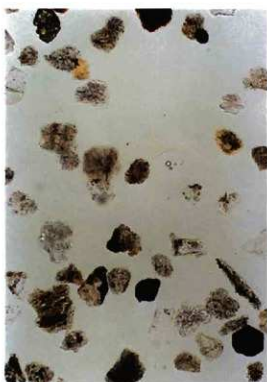


サンプル1 (A-5) 20~30cm、5~6層

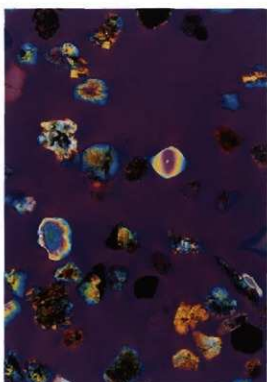
CROSS NICOL+斜稜核板



同 左



サンプル1 (A-5) 50~60cm、7層



同 左

写真2 分析サンプル偏光顕微鏡写真(2)

第3節 勝手野遺跡出土サヌカイト製遺物および黒曜石製遺物の原産地分析

藁科 晋男

(京都大学原子力実験所)

1. はじめに

石器石材の産地を自然科学的手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石の石材産地推定を行なっている¹⁾²⁾。地質時代に自然の力で移動した岩石の出発露頭を元素分析で求めるとき、岩石と露頭原石の組成が一致すれば、その露頭から流れた岩石であると言うことは、自然法則に従って流れたルートを証明できる。産地分析では「石器とある産地の原石が一致したからと言って、その産地のものと言い切れないが、一致しなかった場合その産地のものでないと言い切れる」が大原則である。人が移動させた石器の組成とA産地原石の組成が一致したからと言って、産地と出土遺跡の間に地質的関連性がないため、移動ルートが自然の法則に従って証明できず、その石器がA産地の原石と決定することができない。従って、石器原材と産地原石が一致したことが、直ちに考古学の資料とならない、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなったが、B、C、Dの産地でないとの証拠がないために、A産地だと言い切れない。A産地と一致しなかった場合、結果は考古学の資料として非常に有用である。それは石器に関してはA産地と交流がなかったと言い切れる。考古学は、様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式として、形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの素材があり一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な結果である。地質など自然科学の場合は、自然科学的方法(物理・化学的方法)に従って、産地を特定するが、分析装置を使用すれば科学的分析と誤解している科学者がみられるが、装置は物差しにすぎず、得られた結果を自然の法則に従って処理し産地を特定しなければならない。考古学者は考古学を基準にして、例えば産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する、または原産地地方との交流が石器以外の他の遺物で証明されているなどの条件を考えて、石器の石質と一致する最も近い産地の原石を肉眼観察を基準にして推測する。この結果が信用される場合は、石質の一致よりも、産地との交流を推測しても考古学条件に無理がないためである。これは、遺跡から500km以上離れた産地の石材が石器と一致しても、遠距離の産地を言わず、近くの一致した産地しか言わないことから分かる。従って、実際に遠距離から伝播した原材でも、近くの産地のものとして処理している。日本中の露頭の石材を観察すると、とても肉眼観察で産地を特定することはできないと思う。また地質学者に聞いても、とても肉眼観察で産地など特定できないと言う人が多い。石器原材の岩石名、産出産地を述べる場合客観的なデータに基づいて決定した結果を記さなければ、報告書全体が正確さを欠くように思われる。黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原産地の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を特定する。蛍光X線分析法は

試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。今回分析した遺物は兵庫県小野市黍田町に位置する勝手野遺跡出土の後期旧石器時代前半のサヌカイト製台形石器が1個、石核が1個、剥片が4個および表面採集資料の黒曜石製遺物1個の合計7個について産地分析の結果が得られたので報告する。

2. 安山岩、黒曜石原石の分析

安山岩、黒曜石両原石の自然面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。

塊状試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それをもって産地を特定する指標とした。

2.1. サヌカイト原石

サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srの比量を指標として用いる。サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて32ヶ所の調査を終えている。第159回にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多く地点からは良質なサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数個の群に分かれる。近年、九鬼市の双子山の南嶺から産出するサヌカイト原石が双子山群を確立し、またガラス質安山岩は細石器時代に使用された厚材で善通寺市の大麻山南からも産出している。これらの原石を良質な原石を産出する産地および原石産地不明の遺物を元素組成で分類すると100個の原石群に分類でき、その結果を表15～17表に示した。香川県内の石器原材の産地では金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6個の群、城山群および双子山群に、またガラス質安山岩は金山奥池・五色台地区産は五色台群の単群に、大麻山南産は大麻山南第一、二群の2群にそれぞれ分類され区別が可能であることを明らかにした。金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にはほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が表18に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される(第19表)。また和歌山市梅原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない(第20表)。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、第18～20表のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心とした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、第19表



第159図 サヌカイト原産地の分布

のそれぞれの群に帰属される傾度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

b. 黒曜石原石

黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比量を産地を区別する指標をしてそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地を第160図に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成によってこれら原石を分類し第21表に示す。この原石群に原産地は不明の遺物で作った遺物群を加えると204個の原石群になる。中信高原地域の黒曜石産地の中で、霧ヶ峰群は、長野県下諏訪町金明水、星ヶ塔、星ヶ台の地点より採取した原石でもって作られた群で、同町観音沢の露頭の原石も、霧ヶ峰群に一致する元素組成を示した。和田峠地域原産の原石は、星ヶ塔の西方の山に位置する旧和田峠トンネルを中心にした数百メートルの範囲より採取され、これらを元素組成で分類すると、和田峠第一、第二、第三、第四、第五、第六の各群に分かたれる。和田峠第一、第三群に分類された原石は旧トンネル付近より北側の地点より採取され、和田峠第二群のものは、トンネルの南側の原石に多くみられる。和田峠第四群は男女会側の新トンネルの入り口、また、和田峠第五、第六群は男女会側新トンネル入り口左側で、和田峠第一、第三の両群の産地とは逆の方向である。男女会原産地の原石は男女会群にまとも組成は和田峠第五群に似る。鷹山、星費峠の黒曜石の中に和田峠第一群に属する物が多数みられる。麦草峠群は大石川の支流および麦草峠より採取された原石で作られた。これら中信高原の原産地は、元素組成で和田峠、霧ヶ峰、男女会、麦草峠の各地域に

山形の魚津、石川県の比叡、福井県の三上山、安島の各原産地が調査されていて、比叡、魚津産黒曜石が石器原料として使用されている。山陰地方の原産地は隠岐島の久見、津井、加茂に代表される石器原料としては小さすぎる豆粒大の黒曜石の露頭が福津地区にある。また、兵庫、鳥取の県境の雨滝地区から発見されている黒曜石は微小で石器原料としては使用できない。九州北部地方では佐賀県の豊岳地域および大分県の都島地域の鏡音峠、両瀬の両地区は黒曜石の有名な原産地で、都島地域ではガラス貫安山岩もみられ、これについても分析を行った。また、長崎県、壱岐島も若ヶ浦、久喜ノ辻、角川、貝瀬など地点から黒曜石が採取できる。西北九州地域で似た組成を示す黒曜石の原石群は、豊岳、古里第一、松浦第一の各群（豊岳系と仮称する）および淀姫、中町第一、古里第三、松浦第四の各群（淀姫系と仮称する）などである。また、古里第二群原石と肉眼的および成分的に似た原石は福岡県松尾地区でも採取でき、この原石は輝島産乳灰色黒曜石と同色調をしているが、組成によって都島産の黒曜石と容易に区別できる。もし似た組成の原石で遺物が作られたとき、この遺物は複数の原産地に帰属される原石産地を特定できない場合がある。たとえ遺物の原石産地がこれら豊岳系、淀姫系の原石群の中の一群および古里第二群のみに帰属されても、この遺物の原石産地は豊岳系、淀姫系および古里第二群の原石を産出する複数の地点を考えなければならぬ。角隈の黒曜石の原産地は豊岳および淀姫で、円礫は松浦、中町、古里（第二群は角隈）の各産地で産出していることから、似た組成の原石産地の区別は遺物の自然面から円礫か角礫かを判断すれば原石産地の判定に有用な情報となる。また、九州中部地域の塚瀬と小国の原産地は隣接し、黒曜石の生成マグマは同質と推測され同産地は区別できない。また、熊本県の雨間、轟、冠ヶ岳の各産地原石はローム化した阿蘇の火砕流の層の中に含まれる最大で数指大の黒曜石で、非常に広範囲な地域から採取される原石である。

3. 結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサスカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行った。一方黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水合層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水合層の影響は、軽い元素の分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行った場合、また除かずに産地分析を行った場合同定される原産地に差はない。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやや不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した勝手野遺跡から出土したサスカイト製石器、剥片および黒曜石製剥片の分析結果を第27表・第28表に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するために数値統計の手法を用いる。例えば試料番号75899番の遺物ではRb/Zrの値は0.381で、久見群の [平均値] ± [標準偏差] は、0.386 ± 0.011である。遺物と原石群の差を標準偏差 (σ) を基準にして考えると遺物は原石群から0.45 σ 離れている。ところで久見原産地から100個の原石を採ってきて分析すると、平均値から±0.45のずれより大きいものが65個ある。すなわち、この遺物が久見群の原石から作られていたと仮定しても、0.45 σ 以上離れる確率は65%であると言える。だから、久見群の平均値から0.45 σ しか離れていないときには、この

遺物が久見群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を佐賀県腰岳産地の原石と比較すると、腰岳群の平均値からの隔たりは、約 14σ である。これを確率の言葉で表現すると、腰岳群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 14σ 以上離れている確率は、百分の一であると云える。このように、百分個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、腰岳群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は久見群に65%で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから久見産原石が使用されいと同定され、さらに腰岳群に対しては一先分の1%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから腰岳産原石でないと同定される」。遺物が一か所の産地（久見産地）と一致したからと言って、例え久見群と腰岳群の原石は成分が異なっているとしても、分析している試料は原石でなく遺物でさらに分析誤差が大きくなる不定形（非破壊分析）であることから、他の産地に一致しないとは言えない。同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地（久見群）に一致したと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を第15~17表の204個すべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて久見産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯一個の変量だけでなく、前述した8個の変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならぬ。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量が少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出すようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのD₂乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する⁴¹⁾。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石製では204個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、これら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち、隠岐島の久見産原石と判定された遺物について、北朝鮮の会寧遺跡で使用された原石と同じ組成の原石とか信州和田峠産の原石の可能性を考慮する必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみの結果を第29表に記入した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには原石群の元素組成のパラッキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原石産地（確率）の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離D₂乗の値を記した。この遺物については、記入されたD₂乗の値が原石群の中で最も小さなD₂乗値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ていると言えるため、推定確率は低いながらも、その原石産地と考えてはば間違いないと判断されたものである。今回分析した遺物は兵庫県小野市妻田町に位置する勝手野遺跡の表探面採取資料の黒曜石遺物には久見産黒曜石と同定された。また後期旧石器前半の時期と推測されたサヌカイト製遺物6個には、二上山産、岩屋第1群、岩屋第2群、因分寺群に同定された（第29表）。これら同定された遺物は複数の

原石産地から転産として採取できる。二上山産原石は奈良県二上山原産地以外に和泉・岸和田産地から採取でき、採取の確率は6%で、確率的には低くないと思われる。仮に和泉・岸和田産地から今回分析した6個全て採取したと考えると、遺物の結果の中に不明(採取確率54%)がない、和泉群(採取確率13%)がないなどの理由から、二上山に同定された遺物は奈良県二上山産地から勝手野遺跡に供給されたと推測される。また、岩屋第1群、岩屋第2群についても、遺物の結果の中に不明がない、和泉群がないなどの理由から、和泉・岸和田(第19表)、梅原(第20表)産地から採取された可能性が低いと考えられる。従って、岩屋第1群は岩屋産地以外に淡路島南部(岩屋第2群なし)の原産地からも採取されるが、遺物の中に岩屋第2群が見られることから、岩屋産地の可能性を推測者が矛盾がない。ここで岩屋第2群と国分寺または蓮光寺に同定された遺物は香川県金山・五色台原産地の西分台遺跡(白峰産地)、蓮光寺遺跡(国分寺・蓮光寺産地)から遺跡に伝播可能性が推測される。しかし旧石器時代でも比較的多用された金山産原石が遺物の中に見られないことが、直ちに金山・五色台地域原産地との交流を否定する理由にはならない。これは金山産原石に見られる板状剥離の性質が旧石器の製作技法に適さなかったために排除された可能性が否定できない。ここで遺物全体から考察すると岩屋第1群、第2群がそれぞれ2個、また、岩屋産地(第18表)では国分寺、蓮光寺群に一致する原石の採取確率は合計14%で岩屋第1群の採取確率の約1/2で、遺物も国分寺または蓮光寺に同定された1個は岩屋第1群の2個に対して1/2となり二上山を除く5個は全て岩屋産地または岩屋産地に続くサヌカイトを含む垂水磯福から採取された可能性を推測した。結果として、今回分析した勝手野遺跡出土の後期旧石器時代前半の分析番号75893番のサヌカイト製台形石器には奈良県二上山産サヌカイトが、75898番の石核および75894、75895、75896、75897番の剥片には、岩屋産原石が使用されていると同定されたことにより、勝手野遺跡の先史人は遺跡から南部、東部地方との交流とか移動があったと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

[参考文献]

- 1) 藤科哲男・東村武信(1975)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学、8:61-69
- 2) 藤科哲男・東村武信・鎌本義昌(1977)、(1978)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)。(IV)。考古学と自然科学、10,11:53-81:33-47
- 3) 藤科哲男・東村武信(1983)、石器原料の産地分析。考古学と自然科学、16:50-89
- 4) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77-90
- 5) 東村武信(1980)、考古学と物理化学。学生社

原産地	分析標識	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
北海道	イトカ	0.359±0.020	0.430±0.014	0.081±0.005	5.884±0.223	0.165±0.011	0.120±0.013	0.883±0.030	0.015±0.013	0.013±0.001	0.137±0.007
	山	0.351±0.011	0.288±0.010	0.089±0.005	5.964±0.140	0.174±0.011	0.096±0.009	0.903±0.028	0.015±0.012	0.015±0.001	0.141±0.005
新潟県	堀野	0.231±0.008	0.349±0.028	0.141±0.015	10.218±0.328	0.141±0.012	0.139±0.011	0.819±0.042	0.019±0.012	0.012±0.001	0.124±0.005
	山	0.194±0.070	0.360±0.028	0.129±0.014	9.205±1.153	0.080±0.034	0.085±0.042	0.458±0.082	0.009±0.010	0.013±0.001	0.123±0.032
長野県	八風川	0.183±0.007	0.340±0.017	0.133±0.017	11.018±0.328	0.118±0.011	0.157±0.013	0.721±0.030	0.019±0.009	0.012±0.001	0.113±0.005
	山	0.274±0.028	0.324±0.010	0.069±0.008	9.905±0.505	0.104±0.006	0.101±0.033	0.012±0.009	0.018±0.002	0.018±0.002	0.168±0.014
神奈川県	火打沢	0.092±0.005	0.285±0.009	0.166±0.009	12.406±0.332	0.022±0.006	0.111±0.008	0.483±0.023	0.005±0.007	0.012±0.001	0.012±0.001
	山	1.576±0.065	0.227±0.011	0.038±0.004	7.766±0.004	0.277±0.020	0.031±0.013	0.504±0.024	0.005±0.009	0.052±0.003	0.060±0.025
奈良県	二上山	0.286±0.010	0.215±0.005	0.071±0.006	4.629±0.270	0.202±0.012	0.065±0.009	0.620±0.022	0.004±0.010	0.016±0.001	0.144±0.005
	山	0.484±0.023	0.325±0.025	0.058±0.004	4.050±0.148	0.286±0.021	0.065±0.010	0.706±0.025	0.038±0.010	0.022±0.001	0.164±0.006
兵庫県	岩手山	0.515±0.021	0.254±0.012	0.057±0.005	3.610±0.189	0.265±0.015	0.065±0.012	0.846±0.026	0.027±0.017	0.013±0.001	0.165±0.007
	山	0.300±0.017	0.154±0.005	0.054±0.007	3.350±0.261	0.138±0.012	0.041±0.023	0.274±0.021	0.012±0.007	0.018±0.001	0.159±0.008
香川県	寺山	0.457±0.011	0.251±0.007	0.052±0.005	3.574±0.122	0.311±0.019	0.043±0.018	0.270±0.033	0.038±0.015	0.015±0.001	0.149±0.005
	山	0.524±0.015	0.252±0.005	0.052±0.005	3.235±0.129	0.348±0.019	0.043±0.015	0.271±0.037	0.024±0.009	0.016±0.001	0.159±0.004
岡山県	山	0.397±0.009	0.239±0.004	0.069±0.005	4.619±0.127	0.277±0.012	0.069±0.011	1.148±0.029	0.031±0.013	0.015±0.001	0.130±0.004
	山	0.488±0.012	0.222±0.004	0.079±0.005	4.617±0.126	0.316±0.012	0.067±0.011	1.186±0.033	0.029±0.015	0.017±0.001	0.155±0.005
愛媛県	山	0.405±0.009	0.216±0.005	0.082±0.005	4.808±0.125	0.282±0.017	0.064±0.011	1.059±0.025	0.029±0.011	0.015±0.001	0.133±0.006
	山	0.402±0.011	0.216±0.005	0.079±0.005	4.741±0.138	0.289±0.014	0.068±0.016	1.065±0.029	0.021±0.014	0.013±0.001	0.115±0.003
徳島県	山	0.380±0.007	0.233±0.005	0.074±0.006	4.888±0.169	0.261±0.014	0.061±0.014	1.063±0.035	0.023±0.016	0.011±0.002	0.105±0.004
	山	0.842±0.046	0.127±0.006	0.024±0.006	2.087±0.088	0.469±0.020	0.018±0.018	0.722±0.047	0.045±0.013	0.036±0.003	0.234±0.024
高知県	山	0.641±0.032	0.135±0.007	0.033±0.007	2.471±0.135	0.201±0.028	0.021±0.017	0.634±0.067	0.028±0.011	0.028±0.003	0.221±0.027
	山	0.827±0.032	0.128±0.006	0.028±0.006	3.119±0.061	0.485±0.022	0.016±0.018	0.731±0.060	0.043±0.014	0.036±0.003	0.221±0.027
高知県	山	0.852±0.040	0.131±0.007	0.027±0.006	2.083±0.068	0.498±0.026	0.029±0.016	0.705±0.045	0.069±0.014	0.035±0.006	0.233±0.023
	山	0.603±0.022	0.169±0.007	0.041±0.010	2.782±0.180	0.473±0.043	0.054±0.021	0.665±0.061	0.044±0.012	0.029±0.003	0.244±0.028
高知県	山	0.902±0.041	0.124±0.009	0.034±0.011	2.370±0.138	0.691±0.024	0.021±0.022	0.774±0.032	0.054±0.015	0.039±0.004	0.265±0.016
	山	0.458±0.041	0.124±0.007	0.073±0.009	5.169±0.157	0.393±0.022	0.108±0.017	1.473±0.021	0.057±0.021	0.020±0.008	0.219±0.006
高知県	山	0.188±0.007	0.178±0.005	0.011±0.001	9.016±0.023	0.032±0.002	0.001±0.002	0.177±0.005	0.004±0.002	0.015±0.001	0.111±0.005
	山	0.442±0.012	0.444±0.044	0.061±0.008	3.570±0.027	0.109±0.008	0.060±0.006	0.886±0.032	0.078±0.006	0.027±0.003	0.236±0.006

坂本県石炭地層は岡山理科大学白土純氏見の原産地 (近日正式発表予定)

第15表 各リノサイトの原産地における磨石群の元素比の平均値と標準偏差値 (1)

原 石 群 名	分析標本	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	高 B/Sr 比	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca	
江刺群	60	0.485±0.021	0.382±0.014	0.046±0.004	3.322±0.104	0.174±0.009	0.029±0.009	0.462±0.017	0.182±0.010	0.025±0.002	0.281±0.006	
	61	0.501±0.028	0.379±0.018	0.025±0.003	1.247±0.027	0.047±0.013	0.038±0.005	0.028±0.002	0.019±0.006	0.019±0.001	0.171±0.008	
	51	0.540±0.028	0.319±0.031	0.039±0.001	1.407±0.050	0.059±0.008	0.033±0.005	0.336±0.041	0.025±0.009	0.021±0.001	0.171±0.006	
	29	0.323±0.019	0.363±0.031	0.019±0.001	1.407±0.050	0.243±0.011	0.024±0.014	0.024±0.014	0.024±0.014	0.024±0.014	0.024±0.014	0.311±0.021
	28	1.116±0.061	0.472±0.022	0.022±0.002	2.228±0.080	0.243±0.011	0.024±0.014	0.024±0.014	0.024±0.014	0.024±0.014	0.024±0.014	0.311±0.021
山口群	45	0.184±0.009	0.190±0.006	0.112±0.031	7.203±0.346	0.170±0.015	0.077±0.011	0.691±0.040	0.026±0.010	0.011±0.001	0.467±0.004	
福留群	50	1.825±0.041	0.644±0.024	0.053±0.007	2.125±0.073	0.453±0.019	0.107±0.017	1.477±0.049	0.044±0.022	0.040±0.003	0.500±0.012	
	1	1.592±0.066	0.609±0.020	0.061±0.005	3.075±0.123	0.534±0.039	0.111±0.020	1.671±0.134	0.049±0.014	0.043±0.003	0.419±0.014	
	50	3.144±0.069	0.724±0.036	0.073±0.009	2.919±0.096	0.625±0.048	0.181±0.005	2.820±0.114	0.072±0.020	0.074±0.026	0.617±0.040	
	50	1.822±0.108	0.581±0.050	0.064±0.005	3.033±0.102	0.607±0.015	0.122±0.017	1.897±0.068	0.050±0.015	0.050±0.004	0.469±0.018	
	50	1.822±0.108	0.581±0.050	0.064±0.005	3.033±0.102	0.607±0.015	0.122±0.017	1.897±0.068	0.050±0.015	0.050±0.004	0.469±0.018	
佐賀群	53	0.831±0.047	0.404±0.013	0.056±0.007	4.718±0.225	0.510±0.037	0.052±0.019	0.820±0.033	0.222±0.018	0.016±0.003	0.303±0.011	
	21	0.834±0.055	0.396±0.016	0.063±0.010	5.342±0.317	0.569±0.047	0.081±0.028	0.856±0.045	0.212±0.023	0.016±0.003	0.303±0.011	
	8	1.097±0.232	0.350±0.028	0.065±0.014	4.488±0.943	0.701±0.084	0.084±0.025	0.826±0.062	0.239±0.019	0.021±0.003	0.263±0.046	
	62	0.207±0.051	0.310±0.013	0.058±0.010	3.643±0.225	0.794±0.039	0.081±0.022	0.824±0.032	0.265±0.032	0.028±0.009	0.458±0.050	
	30	0.620±0.043	0.310±0.010	0.070±0.008	5.600±0.323	0.825±0.052	0.052±0.017	0.644±0.052	0.182±0.018	0.014±0.002	0.157±0.010	
	17	0.453±0.019	0.331±0.005	0.068±0.010	7.489±0.249	0.307±0.024	0.081±0.015	0.586±0.023	0.106±0.020	0.028±0.002	0.257±0.016	
	47	0.717±0.036	0.410±0.012	0.061±0.009	5.312±0.241	0.383±0.024	0.094±0.013	0.810±0.039	0.028±0.003	0.028±0.003	0.261±0.014	
	42	0.770±0.032	0.320±0.009	0.042±0.007	3.683±0.122	0.431±0.021	0.077±0.016	0.554±0.023	0.110±0.021	0.028±0.003	0.377±0.014	
	42	0.675±0.016	0.390±0.010	0.073±0.007	4.968±0.218	0.348±0.021	0.078±0.012	0.581±0.041	0.087±0.023	0.029±0.003	0.260±0.013	
	12	0.538±0.011	0.403±0.007	0.076±0.010	5.271±0.189	0.284±0.019	0.075±0.015	0.537±0.024	0.075±0.009	0.028±0.002	0.227±0.016	
	37	0.744±0.014	0.409±0.010	0.069±0.010	5.176±0.202	0.389±0.020	0.092±0.015	0.877±0.027	0.086±0.023	0.028±0.003	0.303±0.010	
	長崎群	26	1.111±0.118	0.140±0.009	0.055±0.009	1.620±0.232	0.253±0.015	0.011±0.017	0.490±0.038	0.025±0.002	0.026±0.005	0.497±0.039
16		1.072±0.042	0.144±0.008	0.041±0.007	1.759±0.182	0.223±0.014	0.011±0.017	0.490±0.038	0.025±0.002	0.026±0.005	0.497±0.039	
30		0.784±0.092	0.345±0.026	0.060±0.008	4.561±0.236	0.873±0.132	0.220±0.028	0.727±0.053	0.206±0.039	0.016±0.003	0.188±0.021	
13		0.594±0.048	0.338±0.013	0.068±0.010	7.759±0.411	1.114±0.104	0.348±0.031	0.989±0.071	0.086±0.041	0.012±0.001	0.144±0.010	
56		0.468±0.030	0.302±0.011	0.067±0.005	4.225±0.181	0.220±0.018	0.076±0.010	0.814±0.048	0.035±0.012	0.012±0.002	0.133±0.008	
9		0.820±0.012	0.329±0.007	0.065±0.011	7.251±0.314	0.211±0.029	0.081±0.012	0.714±0.048	0.034±0.017	0.014±0.001	0.109±0.011	
25		0.512±0.014	0.317±0.008	0.084±0.011	7.157±0.312	0.594±0.037	0.301±0.027	0.874±0.043	0.431±0.033	0.011±0.001	0.158±0.004	
68		0.382±0.026	0.252±0.023	0.052±0.006	4.106±0.227	0.160±0.018	0.076±0.009	0.434±0.039	0.048±0.011	0.016±0.001	0.107±0.007	
14		0.596±0.115	0.310±0.010	0.073±0.014	5.167±0.749	0.320±0.058	0.077±0.018	0.659±0.064	0.036±0.027	0.012±0.002	0.163±0.031	
42		0.642±0.071	0.310±0.010	0.070±0.008	5.329±0.320	0.498±0.051	0.081±0.018	0.656±0.039	0.030±0.028	0.028±0.006	0.248±0.029	
15		2.006±0.258	0.646±0.052	0.064±0.011	2.065±0.334	0.481±0.068	0.105±0.028	1.657±0.107	0.052±0.012	0.057±0.010	0.067±0.009	
14		0.593±0.189	0.514±0.070	0.061±0.008	3.067±0.441	0.289±0.066	0.064±0.013	1.043±0.182	0.043±0.034	0.025±0.005	0.263±0.041	
42	0.678±0.057	0.458±0.020	0.063±0.005	3.457±0.206	0.194±0.018	0.072±0.009	0.728±0.050	0.025±0.010	0.018±0.012	0.185±0.015		
JG-1 ¹⁾	56	1.327±0.021	0.266±0.006	0.058±0.006	2.817±0.074	0.750±0.015	0.183±0.024	0.750±0.033	0.078±0.014	0.038±0.003	0.448±0.011	

平均値±標準偏差。
 * : 黒川群から取られた。
 a) : Ando, A., Kurazawa, H., Choshi, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GSJ geochemical reference sample JG-1, granodiorite and JG-1 basalt. *Geochimical Journal* Vol. 8, 175-182.

表16 新ササガイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差 (2)

遺物名	分析機	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
北海道	35	0.352±0.029	0.291±0.021	0.054±0.012	5.375±0.721	0.170±0.015	0.103±0.016	0.674±0.101	0.018±0.011	0.156±0.021	0.156±0.021
石川県	39	0.475±0.016	0.596±0.012	0.067±0.023	5.229±0.168	0.160±0.010	0.110±0.015	1.282±0.033	0.001±0.006	0.325±0.017	0.228±0.075
岐阜県	56	0.632±0.022	0.393±0.013	0.045±0.005	2.234±0.070	0.170±0.009	0.046±0.003	1.030±0.041	0.039±0.006	0.023±0.002	0.215±0.010
長野県	55	0.407±0.010	0.304±0.005	0.040±0.005	1.862±0.041	0.089±0.005	0.033±0.006	0.671±0.030	0.023±0.005	0.018±0.002	0.177±0.005
新潟県	53	0.799±0.009	0.512±0.010	0.060±0.005	2.540±0.096	0.221±0.014	0.207±0.011	1.213±0.039	0.034±0.007	0.026±0.002	0.240±0.009
富山県	52	0.319±0.014	0.178±0.004	0.032±0.002	3.322±0.052	0.117±0.004	0.117±0.004	1.200±0.067	0.138±0.027	0.167±0.015	2.528±0.081
福井県	51	0.319±0.014	0.178±0.004	0.032±0.002	3.322±0.052	0.117±0.004	0.117±0.004	1.200±0.067	0.138±0.027	0.167±0.015	2.528±0.081
滋賀県	52	0.354±0.018	0.177±0.008	0.075±0.016	3.775±0.133	0.441±0.024	0.137±0.010	1.118±0.053	0.152±0.028	0.153±0.019	7.589±0.159
愛知県	38	0.354±0.004	0.362±0.005	0.067±0.009	3.895±0.130	0.084±0.005	0.084±0.005	0.782±0.044	0.057±0.009	0.017±0.002	0.147±0.010
徳島県	37	0.018±0.022	0.382±0.012	0.043±0.005	4.187±0.141	0.477±0.019	0.009±0.020	1.722±0.058	0.058±0.026	0.032±0.009	0.557±0.021
大阪府	30	0.298±0.003	0.180±0.003	0.075±0.005	4.965±0.089	0.184±0.010	0.063±0.010	0.588±0.019	0.010±0.011	0.015±0.001	0.127±0.002
奈良県	30	0.310±0.003	0.203±0.003	0.052±0.004	3.734±0.074	0.238±0.019	0.059±0.010	0.610±0.021	0.011±0.012	0.017±0.001	0.147±0.002
和歌山県	30	0.333±0.003	0.228±0.003	0.069±0.004	4.363±0.080	0.242±0.014	0.068±0.011	0.618±0.019	0.013±0.011	0.017±0.001	0.142±0.002
三重県	30	0.230±0.003	0.145±0.003	0.055±0.004	4.292±0.085	0.239±0.019	0.139±0.009	0.728±0.015	0.010±0.010	0.016±0.001	0.138±0.002
京都府	30	0.230±0.003	0.145±0.003	0.055±0.004	4.292±0.085	0.239±0.019	0.139±0.009	0.728±0.015	0.010±0.010	0.016±0.001	0.138±0.002
兵庫県	30	0.600±0.005	0.297±0.004	0.048±0.004	3.077±0.060	0.383±0.014	0.048±0.012	1.088±0.022	0.022±0.019	0.028±0.002	0.254±0.054
徳島県	30	0.133±0.002	0.117±0.002	0.069±0.008	6.365±0.096	0.112±0.007	0.044±0.010	0.328±0.020	0.009±0.009	0.011±0.001	0.102±0.002
香川県	33	0.281±0.004	0.253±0.004	0.053±0.007	3.105±0.070	0.238±0.106	0.063±0.014	0.684±0.025	0.057±0.005	0.018±0.001	0.170±0.004
岡山県	43	0.257±0.008	0.227±0.008	0.044±0.009	2.350±0.050	0.211±0.010	0.058±0.009	0.671±0.024	0.023±0.008	0.018±0.001	0.176±0.005
広島県	43	0.257±0.008	0.227±0.008	0.044±0.009	2.350±0.050	0.211±0.010	0.058±0.009	0.671±0.024	0.023±0.008	0.018±0.001	0.176±0.005
山口県	48	0.240±0.002	0.268±0.005	0.058±0.007	4.106±0.087	0.160±0.010	0.059±0.009	0.682±0.027	0.022±0.009	0.018±0.002	0.126±0.004
鳥取県	48	0.481±0.008	0.524±0.009	0.040±0.005	2.278±0.047	0.098±0.005	0.045±0.007	0.629±0.017	0.065±0.006	0.029±0.002	0.222±0.009
島根県	48	0.324±0.007	0.308±0.007	0.040±0.005	2.659±0.079	0.086±0.006	0.051±0.006	0.625±0.025	0.048±0.006	0.021±0.002	0.152±0.005
鳥取県	70	0.211±0.006	0.296±0.007	0.062±0.014	7.108±0.245	0.088±0.011	0.071±0.012	0.552±0.038	0.021±0.008	0.031±0.001	0.118±0.005
新潟県	44	3.461±0.177	2.341±0.134	0.158±0.041	17.561±1.079	1.099±0.048	0.268±0.036	2.124±0.106	0.157±0.035	0.118±0.012	1.201±0.085
富山県	60	0.190±0.003	0.286±0.005	0.060±0.010	6.872±0.311	0.082±0.008	0.064±0.008	0.828±0.021	0.017±0.005	0.014±0.001	1.02±0.005
石川県	48	0.161±0.004	0.272±0.004	0.069±0.009	7.548±0.241	0.082±0.007	0.060±0.009	0.931±0.023	0.013±0.005	0.012±0.001	0.099±0.003
福井県	48	0.161±0.004	0.272±0.004	0.069±0.009	7.548±0.241	0.082±0.007	0.060±0.009	0.931±0.023	0.013±0.005	0.012±0.001	0.099±0.003
香川県	30	0.307±0.004	0.258±0.005	0.067±0.005	4.726±0.096	0.235±0.010	0.060±0.014	0.640±0.023	0.020±0.013	0.016±0.006	0.138±0.004
徳島県	60	0.684±0.012	0.248±0.006	0.066±0.012	4.139±0.120	0.429±0.019	0.077±0.022	1.178±0.040	0.053±0.013	0.029±0.002	0.282±0.007
高知県	37	0.610±0.017	0.223±0.004	0.197±0.005	4.598±0.120	0.325±0.016	0.063±0.010	1.131±0.028	0.019±0.014	0.020±0.002	0.108±0.005
宮崎県	48	0.293±0.007	0.237±0.003	0.050±0.005	3.976±0.127	0.161±0.010	0.061±0.010	0.658±0.026	0.024±0.006	0.017±0.002	0.127±0.007
宮崎県	48	0.440±0.005	0.190±0.002	0.026±0.005	6.571±0.066	0.022±0.002	0.027±0.007	0.657±0.047	0.059±0.008	0.039±0.017	4.867±0.543

注：岡山遺跡、下山No.5, No.11群、中ノ杜遺跡、六ツ目遺跡、松ノ木遺跡、朝日遺跡、春日遺跡、野原遺跡、野原遺跡No.2, 283群、栗生野原遺跡、水辺2遺跡、岩城2遺跡の遺物の分析
 個数は1個の遺物の分析場所を算入した回数であらわす。下山遺跡No.4, No.14, No.15、平田遺跡No.12, No.13、鹿の谷遺跡、野付遺跡、岩向遺跡の遺物の分析
 個数はそれぞれ2, 3個の遺物の分析場所を算入した回数であらわす。

表17 表 原石産地不明の組成の仮た石材で作られた遺物の元素比の平均値と標準偏差

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
岩屋第一群	20個	30%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	22	33	白峰群に一致
	6	9	法印谷群に一致
	5	8	国分寺群に一致
	4	6	趣光寺群に一致
	3	5	金山東群に一致
	2	3	和泉群に一致
	4	6	不明（どこの原石群にも属さない）

第18表 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
岩屋第一群	12個	17%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和泉群	9	13	＃、＃、＃
岩屋第二群	6	8	白峰群に一致
	4	6	二上山群に一致
	1	1	法印谷群に一致
	1	1	金山東群に一致
	39	54	不明（どこの原石群にも属さない）

第19表 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
和泉群	10個	48%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第一群	1	5	＃、＃、＃
	10	48	不明（どこの原石群にも属さない）

第20表 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

調査地	分析単位	Cs/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K		
北海道	114 名寄第二	0.478±0.011	0.121±0.005	0.035±0.007	2.011±0.063	0.614±0.020	0.574±0.022	0.120±0.017	0.024±0.016	0.093±0.002	0.451±0.010		
		0.309±0.015	0.103±0.006	0.021±0.006	1.774±0.056	0.696±0.044	0.265±0.011	0.301±0.022	0.028±0.020	0.028±0.007	0.384±0.010		
	石狩	120 山越	0.173±0.014	0.051±0.003	0.079±0.013	2.145±0.142	1.849±0.108	0.203±0.019	0.241±0.030	0.073±0.026	0.028±0.002	0.374±0.010	
			0.138±0.004	0.024±0.002	0.054±0.012	1.616±0.181	1.262±0.136	0.287±0.019	0.475±0.046	0.071±0.032	0.028±0.002	0.268±0.043	
		30 白老	0.130±0.010	0.028±0.002	0.105±0.012	3.123±0.127	1.848±0.066	0.105±0.010	0.475±0.046	0.103±0.027	0.027±0.002	0.369±0.007	
		23 白老加島	0.139±0.009	0.023±0.001	0.099±0.014	2.975±0.102	1.794±0.077	0.104±0.010	0.470±0.037	0.077±0.027	0.027±0.002	0.369±0.007	
			0.142±0.010	0.022±0.001	0.101±0.014	3.038±0.125	1.787±0.076	0.115±0.010	0.457±0.035	0.076±0.044	0.027±0.002	0.369±0.007	
	支庁	30 五支合第一	0.519±0.013	0.165±0.006	0.081±0.010	3.265±0.117	0.604±0.031	0.941±0.030	0.165±0.020	0.039±0.016	0.039±0.002	0.457±0.008	
		107 五支合第二	0.517±0.011	0.098±0.005	0.067±0.009	2.773±0.097	0.813±0.037	0.818±0.024	0.197±0.020	0.081±0.015	0.039±0.002	0.447±0.008	
		31 三川	0.514±0.012	0.098±0.005	0.066±0.014	2.785±0.125	0.814±0.068	0.815±0.042	0.198±0.020	0.078±0.008	0.054±0.002	0.443±0.011	
		51 秋田	0.249±0.017	0.128±0.006	0.078±0.011	1.613±0.068	0.958±0.023	0.235±0.024	0.623±0.021	0.023±0.004	0.022±0.013	0.354±0.013	
		31 津川	0.253±0.018	0.129±0.006	0.077±0.009	1.613±0.090	1.017±0.045	0.459±0.026	0.234±0.026	0.058±0.016	0.022±0.003	0.371±0.013	
		15 津川	0.510±0.015	0.098±0.005	0.068±0.009	2.749±0.072	0.803±0.019	0.812±0.019	0.194±0.026	0.022±0.023	0.030±0.004	0.393±0.031	
		55 津川	0.249±0.008	0.128±0.006	0.045±0.006	1.613±0.062	0.824±0.024	0.454±0.020	0.179±0.025	0.044±0.020	0.039±0.002	0.412±0.010	
		58 津川	0.464±0.018	0.138±0.005	0.049±0.008	1.795±0.072	0.449±0.024	0.407±0.022	0.133±0.019	0.028±0.014	0.028±0.002	0.458±0.010	
		68 津川	0.575±0.056	0.110±0.011	0.051±0.011	2.585±0.088	0.593±0.058	0.635±0.027	0.187±0.027	0.037±0.020	0.030±0.003	0.397±0.013	
		65 津川	0.676±0.011	0.146±0.006	0.058±0.014	2.631±0.126	0.608±0.030	0.712±0.032	0.170±0.028	0.030±0.013	0.030±0.003	0.392±0.010	
	十勝	40 十勝第一	0.266±0.018	0.074±0.005	0.053±0.010	2.281±0.087	1.073±0.055	0.534±0.023	0.338±0.029	0.064±0.025	0.029±0.002	0.395±0.013	
		42 十勝第二	0.269±0.020	0.124±0.007	0.052±0.010	2.821±0.181	1.073±0.055	0.534±0.023	0.338±0.029	0.064±0.025	0.029±0.002	0.395±0.013	
		28 十勝第三	0.593±0.036	0.144±0.012	0.056±0.010	3.028±0.251	0.763±0.040	0.764±0.051	0.197±0.026	0.038±0.022	0.034±0.002	0.449±0.009	
		根室	50 根室第一	0.254±0.029	0.070±0.004	0.066±0.010	2.213±0.104	0.969±0.060	0.438±0.024	0.249±0.024	0.058±0.023	0.027±0.002	0.371±0.009
			75 根室第二	0.273±0.019	0.148±0.007	0.069±0.015	1.764±0.075	0.538±0.027	0.607±0.026	0.153±0.031	0.025±0.017	0.023±0.002	0.374±0.007
	40 根室第三		0.277±0.009	0.133±0.006	0.055±0.008	1.723±0.018	0.518±0.019	0.513±0.018	0.177±0.016	0.007±0.015	0.039±0.005	0.451±0.010	
48 根室第四	0.285±0.026		0.087±0.005	0.183±0.032	1.834±0.182	2.043±0.224	1.475±0.207	0.260±0.068	0.083±0.031	0.031±0.004	0.347±0.011		
35 根室第五	0.190±0.015		0.075±0.007	0.049±0.008	1.575±0.086	0.241±0.046	0.318±0.014	0.141±0.033	0.076±0.031	0.030±0.002	0.348±0.010		
釧路	35 釧路第一	0.246±0.022	0.132±0.007	0.221±0.019	2.268±0.085	0.663±0.044	1.105±0.054	0.399±0.038	0.179±0.031	0.039±0.003	0.469±0.013		
	36 釧路第二	0.080±0.008	0.097±0.011	0.013±0.002	0.697±0.021	0.128±0.008	0.062±0.002	0.064±0.007	0.035±0.004	0.028±0.002	0.379±0.010		
	41 釧路第三	0.077±0.006	0.098±0.005	0.013±0.002	0.701±0.018	0.138±0.005	0.062±0.002	0.064±0.007	0.034±0.006	0.027±0.005	0.384±0.009		
	青森	250 青森第一	0.250±0.024	0.069±0.003	0.068±0.012	2.358±0.257	1.168±0.062	0.521±0.063	0.272±0.065	0.076±0.025	0.028±0.002	0.367±0.015	
		28 青森第二	0.084±0.006	0.104±0.004	0.013±0.002	0.691±0.021	0.123±0.006	0.062±0.002	0.060±0.010	0.033±0.005	0.025±0.002	0.369±0.007	
23 青森第三		0.344±0.017	0.132±0.007	0.232±0.023	2.261±0.143	0.861±0.052	1.081±0.030	0.280±0.039	0.186±0.037	0.037±0.002	0.466±0.018		
30 青森第四		0.273±0.019	0.103±0.006	0.057±0.011	1.448±0.106	0.768±0.108	0.268±0.108	0.288±0.037	0.149±0.036	0.028±0.005	0.383±0.018		
35 青森第五		0.473±0.079	0.203±0.149	0.267±0.217	21.048±1.500	0.699±0.021	1.709±0.102	0.159±0.015	0.169±0.031	0.033±0.002	0.358±0.068		
岩手	67 岩手第一	0.253±0.016	0.097±0.006	0.077±0.029	2.519±0.148	1.147±0.065	0.358±0.037	0.268±0.035	0.047±0.040	0.028±0.003	0.383±0.018		
	61 岩手第二	0.505±0.243	0.248±0.202	0.161±0.018	7.570±0.336	0.668±0.014	1.621±0.063	0.244±0.022	0.027±0.014	0.124±0.014	1.609±0.044		
	43 岩手第三	0.236±0.008	0.087±0.004	0.219±0.017	1.671±0.077	1.503±0.072	0.939±0.054	0.284±0.048	0.108±0.034	0.028±0.006	0.367±0.009		

表21 各調査地の原産地における母石群の元素比の平均値と標準偏差値(1)

原産地	分析標識	Ca/K	Ti/K	Mn/zr	Fe/zr	Rb/zr	Sr/zr	Y/zr	Nb/zr	Al/K	Si/K
山形県	44	0.285±0.031	0.132±0.007	0.183±0.015	1.806±0.068	0.906±0.049	1.022±0.071	0.271±0.026	0.118±0.023	0.033±0.002	0.443±0.014
山形県	48	0.335±0.034	0.115±0.005	0.048±0.011	1.806±0.064	0.906±0.045	1.022±0.071	0.214±0.020	0.093±0.019	0.036±0.003	0.469±0.016
岩手県	25	0.539±0.033	0.187±0.012	0.052±0.007	1.764±0.061	0.905±0.046	0.431±0.021	0.206±0.016	0.045±0.014	0.041±0.003	0.594±0.014
岩手県	30	0.613±0.035	0.180±0.016	0.056±0.007	1.751±0.062	0.906±0.033	0.421±0.051	0.229±0.079	0.045±0.016	0.041±0.005	0.594±0.016
岩手県	32	0.569±0.048	0.177±0.018	0.058±0.006	1.742±0.072	0.914±0.019	0.420±0.025	0.232±0.016	0.044±0.013	0.041±0.003	0.594±0.030
宮城県	21	2.174±0.068	0.349±0.017	0.057±0.005	2.544±0.149	0.116±0.009	0.658±0.024	0.138±0.015	0.020±0.013	0.073±0.003	0.954±0.040
宮城県	37	4.828±0.385	1.630±0.104	0.178±0.017	11.363±1.150	0.168±0.018	1.298±0.063	0.158±0.016	0.037±0.018	0.077±0.002	0.729±0.032
栃木県	40	0.728±0.067	0.203±0.010	0.044±0.007	2.016±0.110	0.381±0.025	0.502±0.028	0.190±0.017	0.023±0.014	0.036±0.002	0.516±0.012
東京都	56	0.381±0.014	0.126±0.005	0.102±0.011	1.728±0.073	0.471±0.027	0.689±0.021	0.247±0.021	0.090±0.026	0.036±0.003	0.504±0.017
東京都	23	0.317±0.016	0.120±0.006	0.114±0.014	1.833±0.069	0.615±0.039	0.656±0.050	0.303±0.034	0.107±0.026	0.033±0.002	0.471±0.006
東京都	40	0.318±0.020	0.120±0.005	0.118±0.014	1.805±0.066	0.614±0.036	0.664±0.045	0.291±0.029	0.093±0.039	0.034±0.006	0.478±0.012
神奈川県	30	5.765±0.254	2.219±0.057	0.228±0.019	9.283±0.025	0.018±0.017	1.767±0.061	0.253±0.017	0.025±0.016	0.105±0.006	1.258±0.046
神奈川県	41	2.658±0.064	0.603±0.019	0.076±0.007	2.912±0.104	0.062±0.007	0.620±0.029	0.202±0.011	0.011±0.010	0.030±0.006	1.258±0.046
神奈川県	31	1.663±0.071	0.381±0.019	0.056±0.007	2.138±0.097	0.073±0.008	0.629±0.025	0.154±0.009	0.011±0.008	0.067±0.005	0.904±0.020
静岡県	21	1.329±0.078	0.284±0.018	0.041±0.006	1.697±0.068	0.087±0.009	0.581±0.023	0.138±0.011	0.010±0.009	0.039±0.004	0.858±0.018
静岡県	35	1.110±0.068	0.082±0.004	0.291±0.038	1.211±0.039	0.115±0.012	0.191±0.022	0.474±0.017	0.097±0.009	0.037±0.004	0.663±0.020
静岡県	40	0.441±0.052	0.108±0.014	0.079±0.021	2.251±0.138	0.794±0.155	1.222±0.088	0.137±0.041	0.097±0.033	0.015±0.004	0.412±0.025
富山県	25	0.278±0.013	0.065±0.004	0.084±0.006	2.084±0.065	0.906±0.037	0.541±0.046	0.194±0.014	0.102±0.021	0.027±0.002	0.372±0.009
富山県	35	0.219±0.017	0.113±0.006	0.049±0.006	1.728±0.063	0.745±0.032	0.665±0.029	0.171±0.026	0.074±0.031	0.015±0.014	0.392±0.018
富山県	40	0.219±0.017	0.203±0.006	0.050±0.011	1.816±0.063	0.745±0.032	0.665±0.029	0.171±0.026	0.074±0.031	0.015±0.014	0.392±0.018
富山県	45	0.441±0.052	0.108±0.014	0.079±0.021	2.251±0.138	0.794±0.155	1.222±0.088	0.137±0.041	0.097±0.033	0.015±0.004	0.412±0.025
長野県	171	0.138±0.009	0.066±0.003	0.104±0.011	1.338±0.057	1.076±0.047	0.360±0.023	0.275±0.030	0.127±0.023	0.026±0.002	0.361±0.013
長野県	143	0.167±0.008	0.049±0.008	0.117±0.011	1.346±0.055	1.076±0.047	0.360±0.023	0.275±0.030	0.127±0.023	0.026±0.002	0.361±0.013
長野県	62	0.248±0.018	0.064±0.012	0.114±0.010	1.520±0.124	0.823±0.140	0.492±0.046	0.492±0.046	0.192±0.024	0.025±0.002	0.326±0.016
長野県	37	0.444±0.017	0.063±0.004	0.094±0.009	1.373±0.085	1.311±0.037	0.206±0.030	0.263±0.038	0.090±0.023	0.023±0.002	0.331±0.019
長野県	53	0.175±0.019	0.075±0.010	0.073±0.011	1.282±0.086	0.933±0.196	0.275±0.058	0.184±0.042	0.096±0.023	0.021±0.002	0.308±0.013
長野県	119	0.158±0.011	0.055±0.005	0.096±0.012	1.333±0.094	1.323±0.093	0.134±0.031	0.273±0.039	0.010±0.017	0.021±0.002	0.313±0.013
長野県	119	0.223±0.006	0.102±0.010	0.059±0.006	1.568±0.081	0.905±0.050	0.046±0.019	0.156±0.039	0.042±0.012	0.026±0.002	0.379±0.010
長野県	68	0.263±0.020	0.138±0.011	0.046±0.008	1.403±0.069	0.532±0.048	0.764±0.031	0.101±0.018	0.056±0.016	0.027±0.002	0.401±0.017
長野県	68	0.252±0.027	0.128±0.007	0.059±0.010	1.630±0.179	0.669±0.052	0.802±0.058	0.111±0.024	0.097±0.032	0.027±0.002	0.401±0.017
長野県	42	1.481±0.117	0.466±0.021	0.042±0.006	7.300±0.135	1.882±0.011	0.841±0.044	0.106±0.010	0.099±0.006	0.033±0.005	0.459±0.012
長野県	41	0.471±0.068	1.071±0.026	0.118±0.015	2.067±0.366	0.136±0.016	0.633±0.040	0.186±0.015	0.023±0.012	0.045±0.005	0.513±0.021

表22 各原産地の原産地における磨石の元素比の平均値と標準偏差(2)

原	産石名	成分	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Str/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	AI/K	Si/K
新潟県	佐渡一 石川 上 氣 白 泉 川	34	0.228±0.013	0.078±0.006	0.020±0.005	1.492±0.079	0.621±0.047	0.288±0.018	0.148±0.018	0.049±0.017	0.094±0.004	0.338±0.013
		45	0.263±0.032	0.070±0.003	0.020±0.006	1.501±0.073	0.717±0.046	0.326±0.026	0.091±0.022	0.046±0.015	0.026±0.002	0.336±0.009
		44	0.252±0.011	0.068±0.003	0.019±0.017	2.178±0.110	1.772±0.098	0.773±0.042	0.038±0.027	0.182±0.023	0.026±0.007	0.359±0.009
		44	0.331±0.011	0.067±0.037	0.030±0.007	1.718±0.069	0.618±0.027	0.283±0.012	0.035±0.018	0.029±0.002	0.029±0.002	0.440±0.014
		35	0.183±0.019	0.053±0.005	0.049±0.011	1.354±0.058	1.613±0.063	0.884±0.012	0.309±0.036	0.100±0.028	0.023±0.007	0.340±0.030
石川県	比	17	0.370±0.014	0.067±0.004	0.060±0.009	2.699±0.167	0.639±0.028	0.534±0.023	0.172±0.028	0.062±0.018	0.032±0.002	0.396±0.017
		17	0.407±0.007	0.123±0.005	0.038±0.005	1.628±0.061	0.975±0.030	0.611±0.020	0.118±0.020	0.061±0.016	0.032±0.002	0.450±0.010
福井県	三	21	0.350±0.018	0.123±0.008	0.038±0.005	1.561±0.081	0.608±0.031	0.746±0.039	0.098±0.020	0.062±0.013	0.028±0.002	0.381±0.008
		30	0.216±0.005	0.063±0.002	0.048±0.007	1.828±0.056	1.794±0.066	0.813±0.045	0.397±0.012	0.097±0.021	0.024±0.007	0.365±0.006
兵庫県	香	40	0.278±0.012	0.100±0.004	0.048±0.007	1.794±0.066	0.813±0.045	0.397±0.012	0.112±0.020	0.138±0.024	0.028±0.002	0.446±0.012
		20	0.166±0.006	0.093±0.008	0.014±0.003	0.899±0.031	0.278±0.017	0.006±0.003	0.051±0.015	0.154±0.018	0.020±0.001	0.249±0.016
鳥取県	加	30	0.161±0.008	0.132±0.182	0.015±0.003	0.940±0.041	0.301±0.014	0.015±0.005	0.069±0.013	0.144±0.008	0.020±0.002	0.244±0.008
		31	0.185±0.008	0.061±0.003	0.021±0.004	0.980±0.023	0.368±0.011	0.007±0.003	0.109±0.013	0.238±0.011	0.020±0.002	0.315±0.006
香川県	高	51	1.202±0.077	0.141±0.010	0.032±0.008	3.126±0.170	0.686±0.065	1.350±0.082	0.026±0.026	0.065±0.019	0.041±0.004	0.507±0.011
		50	1.585±0.126	0.194±0.018	0.035±0.007	2.860±0.180	0.423±0.058	1.044±0.077	0.024±0.019	0.042±0.013	0.045±0.004	0.500±0.013
		20	1.224±0.081	0.144±0.011	0.035±0.012	3.138±0.183	0.669±0.078	1.335±0.091	0.023±0.020	0.061±0.020	0.041±0.003	0.500±0.012
		32	1.489±0.130	0.203±0.038	0.043±0.016	3.122±0.183	0.704±0.061	1.069±0.088	0.029±0.025	0.073±0.021	0.041±0.005	0.500±0.014
		34	1.018±0.053	0.118±0.012	0.043±0.014	3.305±0.199	0.885±0.048	1.256±0.050	0.029±0.020	0.072±0.018	0.038±0.004	0.479±0.012
福岡県	八	68	0.281±0.010	0.211±0.007	0.033±0.003	0.788±0.027	0.338±0.013	0.283±0.013	0.077±0.009	0.034±0.008	0.024±0.006	0.279±0.009
		39	0.267±0.007	0.087±0.003	0.027±0.005	1.619±0.083	0.628±0.028	0.348±0.015	0.103±0.018	0.075±0.018	0.023±0.007	0.321±0.011
佐賀県	中	40	0.345±0.007	0.104±0.003	0.027±0.005	1.525±0.039	0.455±0.017	0.387±0.014	0.068±0.016	0.056±0.014	0.026±0.006	0.328±0.008
		39	0.667±0.014	0.202±0.005	0.071±0.013	4.239±0.205	1.046±0.063	3.099±0.058	0.104±0.032	0.380±0.047	0.028±0.006	0.345±0.009
		44	0.211±0.009	0.051±0.005	0.075±0.019	2.572±0.212	1.800±0.080	4.114±0.042	0.311±0.046	0.294±0.043	0.025±0.002	0.338±0.008
		40	0.660±0.067	0.153±0.010	0.125±0.013	4.682±0.381	1.770±0.111	2.023±0.129	0.171±0.035	0.252±0.047	0.030±0.007	0.378±0.009
		40	0.953±0.027	0.307±0.010	0.126±0.013	6.666±0.342	1.556±0.073	1.907±0.119	0.141±0.029	0.194±0.028	0.033±0.008	0.383±0.010
大分県	高	41	0.216±0.017	0.043±0.003	0.028±0.007	6.897±0.806	1.829±0.230	1.572±0.180	0.322±0.088	0.622±0.099	0.035±0.002	0.418±0.011
		32	0.624±0.047	0.165±0.010	0.114±0.028	6.114±0.378	1.962±0.187	3.667±0.189	0.144±0.051	0.569±0.141	0.038±0.002	0.419±0.009
		10	1.013±0.140	0.210±0.026	0.126±0.016	3.491±0.231	3.035±0.057	4.602±0.174	0.109±0.021	0.137±0.028	0.040±0.004	0.471±0.017
		29	1.074±0.110	0.234±0.024	0.122±0.012	3.460±0.301	0.286±0.048	4.010±0.197	0.101±0.023	0.133±0.025	0.040±0.003	0.468±0.014
		25	0.653±0.065	0.141±0.016	0.189±0.030	4.388±0.455	0.609±0.096	3.204±0.264	0.151±0.023	0.245±0.050	0.047±0.002	0.448±0.015
熊本県	高	50	0.313±0.023	0.127±0.006	0.065±0.010	1.489±0.051	0.686±0.052	0.586±0.082	0.175±0.018	0.102±0.020	0.028±0.002	0.371±0.008
		50	1.615±0.042	0.670±0.013	0.046±0.008	5.509±0.269	0.284±0.031	1.526±0.053	0.097±0.016	0.032±0.018	0.022±0.005	0.310±0.011
		64	0.482±0.035	0.286±0.015	0.051±0.008	1.361±0.095	0.303±0.019	0.712±0.043	0.089±0.018	0.055±0.021	0.012±0.010	0.288±0.018
		64	0.482±0.035	0.286±0.015	0.051±0.008	1.361±0.095	0.303±0.019	0.712±0.043	0.089±0.018	0.055±0.021	0.012±0.010	0.288±0.018

第23表 各県産石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(3)

原	原	分	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Str/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
北	山	57	0.241±0.021	0.107±0.005	0.018±0.006	1.298±0.077	0.630±0.015	0.153±0.009	0.140±0.015	0.008±0.013	0.018±0.012	0.325±0.042
山	山	58	0.453±0.011	0.135±0.006	0.041±0.007	1.765±0.045	0.448±0.021	0.419±0.010	0.310±0.015	0.015±0.019	0.034±0.010	0.500±0.015
山	山	59	0.643±0.012	0.124±0.008	0.058±0.007	2.547±0.032	0.330±0.032	0.689±0.032	0.156±0.015	0.004±0.008	0.029±0.011	0.407±0.047
山	山	60	0.355±0.061	0.106±0.012	0.058±0.006	0.857±0.061	0.357±0.061	0.685±0.029	0.166±0.021	0.016±0.022	0.027±0.006	0.373±0.043
山	山	44	0.201±0.043	0.078±0.010	0.051±0.009	2.540±0.115	0.339±0.057	0.281±0.023	0.154±0.021	0.017±0.023	0.023±0.006	0.282±0.037
山	山	32	0.898±0.032	0.221±0.007	0.054±0.006	2.840±0.101	0.226±0.018	0.802±0.023	0.106±0.013	0.017±0.021	0.037±0.003	0.447±0.019
山	山	56	1.103±0.050	0.146±0.007	0.081±0.008	2.845±0.133	0.314±0.053	0.775±0.062	0.133±0.016	0.019±0.021	0.043±0.007	0.516±0.015
山	山	38	0.359±0.027	0.154±0.005	0.048±0.010	2.852±0.092	0.352±0.028	1.111±0.040	0.107±0.010	0.023±0.016	0.042±0.008	0.519±0.010
山	山	52	0.514±0.011	0.077±0.005	0.047±0.010	1.751±0.051	0.536±0.038	0.498±0.021	0.189±0.019	0.023±0.028	0.025±0.007	0.345±0.010
山	山	62	0.277±0.008	0.097±0.005	0.049±0.013	2.565±0.126	0.460±0.041	0.446±0.028	0.384±0.042	0.059±0.028	0.024±0.012	0.337±0.015
山	山	48	0.185±0.007	0.049±0.003	0.040±0.013	2.163±0.122	1.031±0.041	0.435±0.025	0.263±0.028	0.050±0.019	0.023±0.002	0.260±0.009
山	山	31	0.238±0.011	0.131±0.005	0.048±0.008	1.639±0.065	0.418±0.028	1.441±0.015	0.482±0.024	0.029±0.028	0.020±0.015	0.481±0.068
山	山	25	0.225±0.005	0.105±0.005	0.075±0.009	1.571±0.082	0.718±0.035	0.292±0.017	0.284±0.029	0.024±0.029	0.021±0.009	0.383±0.015
山	山	29	0.209±0.005	0.115±0.005	0.075±0.009	1.571±0.082	0.718±0.035	0.292±0.017	0.284±0.029	0.024±0.029	0.021±0.009	0.383±0.015
山	山	107	0.251±0.014	0.121±0.006	0.053±0.007	1.581±0.071	0.477±0.020	0.219±0.014	0.216±0.015	0.054±0.017	0.029±0.011	0.475±0.040
山	山	60	0.252±0.014	0.121±0.006	0.053±0.007	1.581±0.071	0.477±0.020	0.219±0.014	0.216±0.015	0.054±0.017	0.029±0.011	0.475±0.040
山	山	41	1.519±0.025	0.277±0.010	0.078±0.006	2.849±0.073	0.467±0.010	0.526±0.017	0.251±0.011	0.008±0.012	0.088±0.017	0.929±0.024
山	山	61	3.141±0.074	0.562±0.021	0.080±0.008	2.752±0.063	0.694±0.069	0.716±0.019	0.246±0.011	0.008±0.014	0.083±0.029	1.353±0.049
山	山	61	0.890±0.013	0.215±0.004	0.117±0.009	4.306±0.026	0.909±0.026	0.248±0.026	0.014±0.016	0.028±0.006	0.360±0.009	0.960±0.009
山	山	122	1.650±0.059	0.474±0.025	0.097±0.007	2.052±0.077	0.383±0.006	0.531±0.010	0.111±0.013	0.064±0.025	1.041±0.105	0.941±0.105
山	山	42	0.277±0.006	0.097±0.005	0.051±0.009	3.791±0.108	0.117±0.010	0.822±0.026	0.241±0.012	0.006±0.012	0.091±0.020	1.234±0.052
山	山	48	2.300±0.050	0.741±0.016	0.118±0.010	3.922±0.077	0.117±0.012	0.906±0.026	0.246±0.013	0.008±0.017	0.083±0.013	1.195±0.029
山	山	63	0.479±0.014	0.132±0.005	0.054±0.008	1.561±0.075	0.400±0.017	0.440±0.015	0.169±0.019	0.061±0.015	0.033±0.005	0.427±0.016
山	山	36	0.251±0.016	0.081±0.003	0.042±0.013	2.091±0.076	0.494±0.035	0.406±0.020	0.499±0.020	0.108±0.023	0.036±0.003	0.419±0.007
山	山	36	0.251±0.016	0.081±0.003	0.042±0.013	2.091±0.076	0.494±0.035	0.406±0.020	0.499±0.020	0.108±0.023	0.036±0.003	0.419±0.007
山	山	48	0.206±0.012	0.078±0.004	0.056±0.010	2.058±0.171	0.801±0.048	0.731±0.045	0.172±0.038	0.048±0.016	0.028±0.030	0.538±0.017
山	山	48	0.745±0.013	0.110±0.004	0.140±0.015	3.176±0.212	0.728±0.039	1.582±0.080	0.104±0.030	0.038±0.013	0.036±0.003	0.396±0.010
山	山	57	0.360±0.019	0.163±0.007	0.066±0.011	1.827±0.064	0.467±0.021	1.691±0.021	0.102±0.021	0.041±0.028	0.008±0.003	0.500±0.014
山	山	56	0.381±0.015	0.138±0.005	0.038±0.012	1.611±0.103	0.721±0.039	0.497±0.065	0.128±0.022	0.047±0.018	0.023±0.003	0.331±0.013
山	山	40	0.330±0.010	0.103±0.003	0.042±0.012	1.751±0.083	1.048±0.027	0.518±0.034	0.186±0.018	0.068±0.018	0.022±0.003	0.326±0.011
山	山	48	0.087±0.008	0.059±0.002	0.010±0.003	0.877±0.023	0.470±0.097	0.906±0.062	0.128±0.012	0.202±0.010	0.022±0.002	0.337±0.010
山	山	48	0.298±0.010	0.026±0.002	0.055±0.013	1.745±0.121	1.149±0.082	0.297±0.029	0.202±0.037	0.177±0.022	0.021±0.002	0.298±0.007

第25表 各原標石の産地における異種石類濃度比の平均値と標準偏差 (5)

分析 番号	元 素 比										
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca	
75893	0.286	0.234	0.087	4.236	0.213	0.063	0.647	0.015	0.018	0.131	
75894	0.630	0.257	0.055	3.496	0.369	0.072	0.871	0.025	0.030	0.234	
75895	0.447	0.255	0.060	3.575	0.288	0.054	0.965	0.049	0.020	0.179	
75896	0.502	0.279	0.050	3.420	0.291	0.060	1.026	0.051	0.026	0.202	
75897	0.533	0.272	0.053	3.057	0.347	0.048	1.068	0.053	0.026	0.211	
75898	0.591	0.299	0.048	3.557	0.359	0.068	0.830	0.042	0.029	0.219	
JG-1	1.314	0.297	0.060	2.711	0.723	0.196	0.721	0.033	0.034	0.438	

第27表 勝手野遺跡サヌカイト製石器、剥片の元素比分析結果

分析 番号	元 素 比										
	Ca/ K	Ti/ K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/ K	Si/ K	
75899	0.150	0.060	0.017	0.990	0.381	0.006	0.095	0.246	0.022	0.286	
JG-1	0.768	0.210	0.081	4.054	1.003	1.346	0.285	0.047	0.025	0.328	

JG-1: 標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192 (1974)

第28表 勝手野遺跡採集黒曜石製剥片の元素比分析結果

分析 番号	部 位 針-跡, 調査番号	原 石 産 地 (確率)	判 定	器 種	備 考
75893	1-021 950288	二上山(79%)	二上山	台形石器	後期旧石器前半
75894	2-24 950228	岩屋第1群(92%)	岩 屋	剥片	後期旧石器前半
75895	3-39 950228	国分寺(67%), 蓮光寺(79%)	岩 屋	剥片	後期旧石器前半
75896	4-40 920356	岩屋第2群(17%), 蓮光寺(13%), 白峰(1%)	岩 屋	剥片	後期旧石器前半
75897	5-41 950288	岩屋第2群(40%), 白峰(23%)	岩 屋	石核	後期旧石器前半
75898	6-42 950288	岩屋第1群(2%)	岩 屋	剥片	後期旧石器前半
75899	7-無し 表面採掘	久見(95%)	久 見	剥片	

注意: 近年産地分析を行う所が多くなりましたが、同定標準が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各産地の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っています。判定基準の異なる研究方法(土器様式)の基準も研究方法で異なるようにも関わらず、似た産地名のために同じ産地のように思われるが、全く関係(相互チェックなし)ありません。本研究結果に確認させるには本研究で再分析が必要で、本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察する必要がある。

第29表 勝手野遺跡出土のサヌカイト、黒曜石製石器、石片の産地推定結果

第4節 勝手野古墳群出土須恵器、土師器の蛍光X線分析

三辻 利一

(大谷女子大学)

1) はじめに

土器の産地推定とは指紋合わせの考え方で消費地遺跡出土土器を生産地(窯跡)へ結びつけることである。その場合、どの元素に着目するかは重要な問題である。とくに、土器(素材は火成岩類から風化して生成した粘土)のように、多数の元素が含まれている場合には、無鉄磁に分析していると、データ解析は混迷に陥り、あげくの果ては挫折してしまうだろう。だからこそ、どの元素(指紋元素という)に着目するのか、その元素はどのような性格をもっているのかといった基礎研究が必要だったのである。ここに、単なる検査とは違って、実験データの積み重ねの上に、指紋元素を絞り出してくる研究が必要だったのである。この研究を遂行するためには、従来の常識を破る大量の土器片の分析が必要であろうと予測された。しかも、この研究対象には全国各地に生産地(窯跡)が残っており、そこからは大量の破片が出土するような土器が必要だった。この研究に必要なすべての条件を備えた土器が窯跡出土須恵器であった。1970年代の日本国土の開発の波によって、各地で須恵器窯が発掘され、その分布調査も行われた。まさに、行政発掘という日本独特の発掘調査法がこの研究を支える背景を準備していたのである。さらに、これに位相を合わせるように、完全自動式の蛍光X線分析装置が市販されたのである。この装置を使えば、年間、10,000点を越す試料を分析することができる。この研究にうってつけの装置だったのである。筆者は、この装置を使って、10年以上の年月をかけ、全国各地の窯跡出土須恵器を大量に分析し、K、Ca、Rb、Srの4元素が多数の窯を少数の窯群に整理し、かつ、その地域差を有効に表す指紋元素であることを発見した。現在、生産地への対応法である2群判別図も開発され、須恵器産地推定法は出来上がっている。この方法を使って、須恵器の伝播、流通の研究も推進されている。さらに、4指紋元素は窯跡が残っていない埴輪、土師器、弥生土器、縄文土器の胎土研究にも応用されている。

本報告では、勝手野古墳群出土須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。また、その参考資料として、中世の勝手野古墳群出土の中世陶器、土師器を分析した結果についても併せて報告する。

2) 分析方法

須恵器片試料はまず、表面を研磨して表面付着物を除去したのち、タングステンカーバイド製の乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕された。粉末にするのは試料を均質化し、一定形状の測定用試料を調整するためである。粉末試料は塩化ビニル製のリングを枠にして高圧をかけてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成した。蛍光X線分析では実試料と標準試料の蛍光X線強度の比較によって、定量分析が行われる、いわゆる、相対分析である。そのために、標準試料も含めて、一定形状の測定用試料が調整される。錠剤試料は小型試料容器に固定された。このような小型試料容器が48個、自動試料交換機に並べられた。48個の中の1個はかならず、標準試料としての岩石標準試料、JG-1である。JG-1を含む20種ほどの岩石標準試料は日本地質調査所で調整されており、岩石はじめ、多くのケイ酸塩試料の元素分析の標準試料として広く使用されている。一般に、分析値は標準試料を通して、%やppm濃度で表示されるが、本研究では%やppm濃度表示による分析値は必要ではなく、標準試料に対する蛍光X線

の相対強度比で十分である。それをJG-1による標準化値としている。この分析値を使って、通常、産地推定のためのグラフ化や統計計算が行われる。そのほうがデータ解析に都合がよいからである。

3) 分析結果

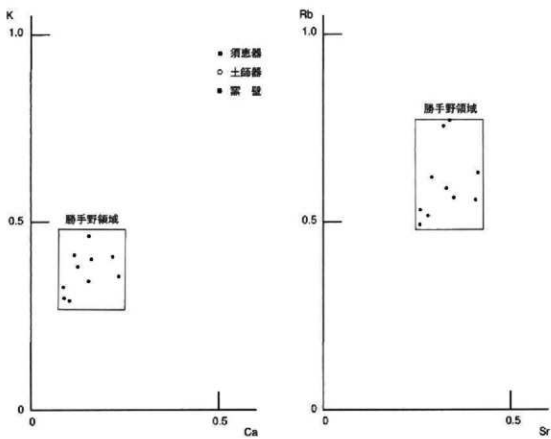
今回分析した試料の分析データは第30・31表にまとめられている。全分析値は同時に測定したJG-1による標準化値である。分析データは図形化するほうが理解し易い。そのため、通常使用されるのがK-CaとRb-Srの両分布図である。両図の上で窯(群)の地域差が表されるから、両図は指紋図といってもよい図である。通常、この図の上に分析値をプロットしてからデータ解釈の方針を決める。これまでの研究によると、5～6世紀代初頭の高墳出土須恵器の産地問題は地元産か陶邑産を問う2群判別分析で決着がつく場合が多い。これに対して、6世紀代後半から7世紀初頭にかけての高墳出土須恵器については陶邑産が検出されない場合が多い。それも、この時期の窯跡が残っていないれば、判別分析が適用できるが、今回のように、同時期の窯跡が残っていない場合にはすぐ判別分析にかけず、両分布図を描いて胎土の比較を行い、判別分析の準備をするに止めた。

第161図には、勝手野1号窯出土の中世須恵器の両分布図を示す。そして、これらの点を包含するようにして、勝手野領域を描いた。この領域は描き易いように長方形で描いてあり、比較対照には便利であるが、統計学的な意味をもって描かれていないので、産地推定には使えない。判別分析にかけなければならない。もし、中世の勝手野窯群の近くに古代の須恵器窯があれば、その須恵器の胎土も勝手野窯群の中世須恵器と同じ胎土をもつはずである。第162図には勝手野2号窯の中世須恵器の両分布図を示す。中世須恵器はすべて、勝手野領域に分布することがわかる。土師器もほぼ、類似した胎土をもつことがわかる。しかし、窯体壁はRb量が高くと、土器の素材粘土とは異なることを示す。第163図には勝手野3号窯の中世須恵器の両分布図を示す。中世須恵器も土師器もともに、勝手野領域に分布し、中世須恵器も土師器も同じ粘土を素材として使用したことを示している。このように、勝手野窯群の中世須恵器、土師器の胎土が同じであることは在地の素材粘土を使用したことを示唆していると考えられよう。

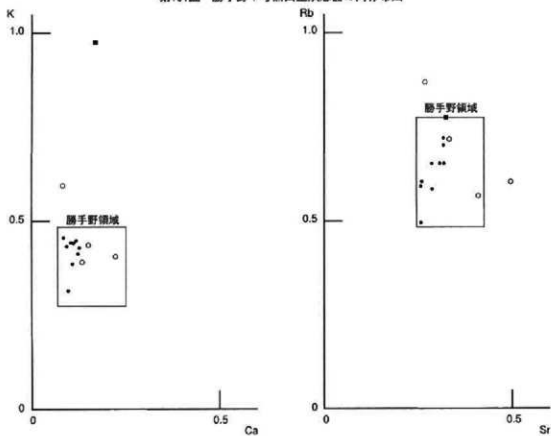
つぎに、勝手野古墳群出土の須恵器の両分布図をみてみよう。第164図には勝手野1号墳出土須恵器の両分布図を示す。2点とも勝手野領域に分布し、在産の須恵器であることを示している。もっとも、1号墳に在産の須恵器が供給されていたと推定するにはもっと多くの試料の分析が必要であろう。第165図には勝手野2号墳出土の須恵器の両分布図を示す。K-Ca分布図ではNo3を除いて他は勝手野領域に分布するが、Rb-Sr分布図ではNo3、8の2点が勝手野領域をずれる。このことから、No3、8を除いて他の4点の須恵器は勝手野窯群周辺で作られたものと推察される。No3、8については産地不明であり、今後、類似の胎土をもつ須恵器が出土したときに考えることにする。第166図には勝手野3、4、5号墳出土須恵器の両分布図を示す。大部分の試料はまとまって分布することは同じ素材粘土を使用したこと、すなわち、粘土採集場所が同じであることを示唆している。さらに、大部分の試料は勝手野領域の一部に偏在するが、1、2号墳の須恵器の分布とは少しずれることがわかる。このことは3、4、5号墳の須恵器も在産と推定されるが、1、2号墳の須恵器とは別場所で採集された粘土が素材となったことを示している。同じ地域内の別場所で採集した粘土を素材として須恵器を製作したものと推察される。粘土採集場所の違いは恐らく、粘土の採集時期が少しずれていることが考えられる。そうすると、

3、4、5号墳はほぼ同時期の古墳である可能性があるが、逆に、1、2号墳とは時期が少しずれるのではなからうか。No10、12、13の3点の試料には他のもの比べて、CaとSrの量が多い。このことはこれら3点は別の粘土を素材とした可能性がある。No25の試料も同様である。産地不明としておく。第167図には6、7、8号墳の須恵器の両分布図を示す。K、Ca、Rb、Sr量が少ないNo58、65の2点の胎土は他の須恵器の胎土とは異なる。第166図に示した5号墳のNo25と同じ胎土である。これら3点の須恵器は同じ窯で製作された須恵器と推定される。第167図のRb-Sr分布図をみると、Rb量が比較的多い試料と少ない試料の2群に分かれることがわかる。Rb量が多いのは8号墳の中世陶器と土師器である。Rb量が比較的小さいのは6、7号墳の古墳時代の須恵器である。時代による胎土の違いを示している。製作年代が異なれば当然、粘土の採集場所も異なると考えられる。No58も奈良時代の須恵器であり、他の古墳時代の須恵器とは素材粘土が異なる。勝手野領域をずれるNo46の試料も産地不明である。第168図には正法寺古墳群と白雲谷古墳出土須恵器の両分布図を示す。勝手野領域をずれるNo0、72、75の3点の試料はこれまでも産地不明としてしばしばでてきた須恵器と同じ胎土の須恵器であるが、集中して現れず、散発的にしかでてこないで、その産地については今後の宿題としておきたい。K、Ca、Rb、Sr量の少ない5点の試料は正法寺1号墳のNo. 66、67、68と11号墳のNo73。それに、白雲谷古墳のNo74である。両分布図では第167図のNo58とはほぼ同じ位置に分布し、同じ胎土であることを示す。もし、同じ胎土であれば、これらの須恵器は奈良時代の須恵器である可能性がでてくる。第169図には和田神社遺跡から出土した須恵器の両分布図を示す。3点の試料は勝手野領域をずれるが、他の3点には在産の須恵器である可能性を示している。

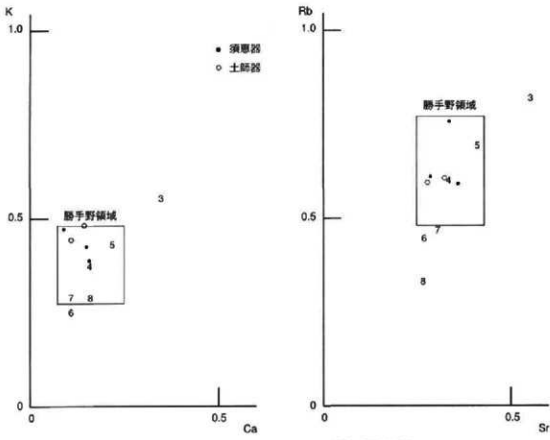
今回は勝手野古墳群の須恵器は在産が多いだろうと考えて地元の中世須恵器の産地である勝手野古墳群の試料に対応させてデータ解釈を試みた。勝手野古墳群の須恵器の多くは予想通り、勝手野領域に対応し、在産の須恵器である可能性を示唆した。それでも、古墳群の須恵器はすべて同じ胎土という訳ではなく、古墳によっては両分布図で偏在し、同じ地域内の別場所で採集した粘土を素材とした須恵器もあることも推察された。また、奈良時代と推定される須恵器は古墳時代と推定される須恵器の胎土とは異なることも明らかになった。このことは時代によって、同じ地元でも粘土の採集場所が異なることを示すと考えられた。6世紀代から7世紀にかけての古墳出土須恵器は在産が多く、それも産地は1か所ではなく、何ヶ所かあった可能性が十分ある。このことを踏まえて、今後、研究を進めることが必要であろう。なお、FeとNaは有効な差違が認められなかったため、使用しなかった。



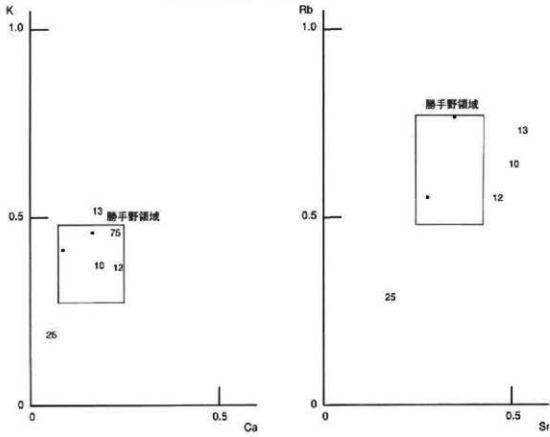
第161図 勝手野1号窯出土須恵器の两分布図



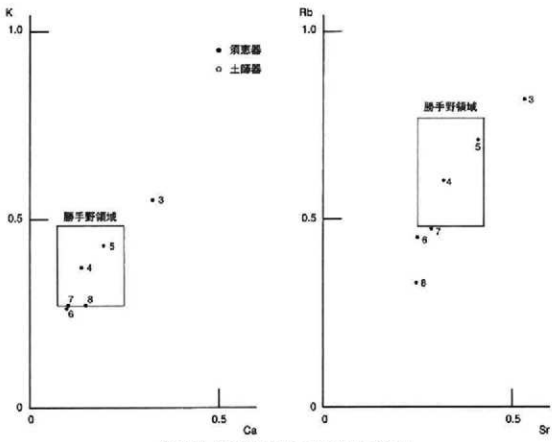
第162図 勝手野2号窯出土須恵器の两分布図



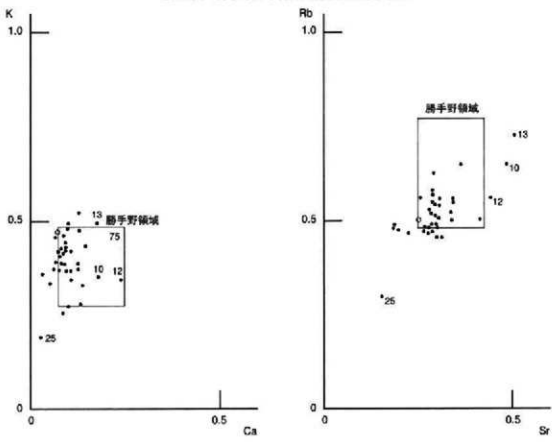
第163図 勝手野3号窟出土須恵器の両分布図



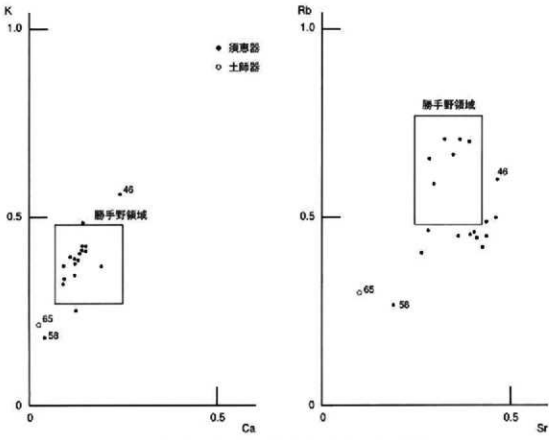
第164図 勝手野1号増出土須恵器の両分布図



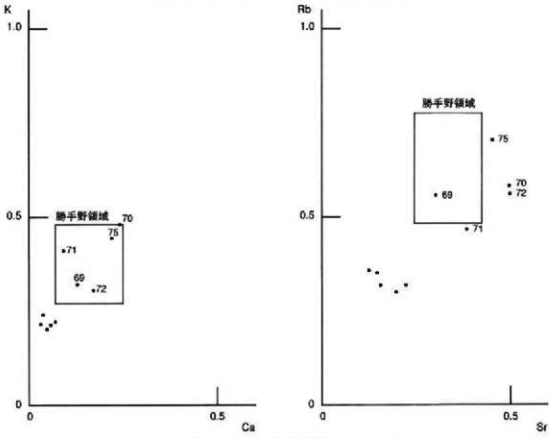
第165図 勝手野2号墳出土須恵器の両分布図



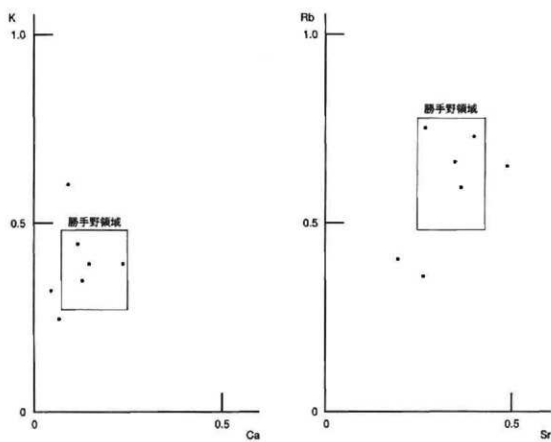
第166図 勝手野3～5号墳出土須恵器の両分布図



第167図 勝手野6～8号出土須恵器の两分布図



第168図 正法寺古墳他出土須恵器の两分布図



第169図 和田神社遺跡出土須恵器の成分分布図

試料番号	古墳番号	土器番号	分析番号	種別	器種	時代	K	Ca	Fe	Pb	Sr	Na
1	1号墳	5	B-2153	須恵器	坏I	古墳	0.411	0.095	1.75	0.553	0.282	0.114
2		8	B-2154	須恵器	坏I	古墳	0.463	0.166	1.54	0.768	0.357	0.121
3	2号墳	12	B-2155	須恵器	高坏	古墳	0.549	0.327	1.65	0.822	0.535	0.155
4		4	B-2156	須恵器	坏H身	古墳	0.368	0.135	1.86	0.599	0.323	0.142
5		10	B-2157	須恵器	椀	古墳	0.430	0.204	1.83	0.711	0.417	0.163
6		11	B-2158	須恵器	高坏	古墳	0.259	0.104	1.75	0.452	0.252	0.095
7		20	B-2159	須恵器	平皿	古墳	0.262	0.096	1.46	0.478	0.288	0.075
8		21	B-2160	須恵器	平皿	古墳	0.273	0.190	2.23	0.333	0.244	0.058
9	3号墳	19	B-2161	須恵器	脚付椀	古墳	0.367	0.096	1.61	0.489	0.187	0.057
10		26	B-2162	須恵器	高坏	古墳	0.350	0.177	1.55	0.646	0.490	0.170
11		1	B-2163	須恵器	坏H蓋	古墳	0.365	0.075	1.57	0.563	0.262	0.137
12		24	B-2164	須恵器	高坏	古墳	0.335	0.236	1.84	0.564	0.447	0.174
13		30	B-2165	須恵器	平皿	古墳	0.491	0.180	1.54	0.732	0.510	0.252
14		32	B-2166	須恵器	壺	古墳	0.361	0.031	2.34	0.479	0.176	0.112
15		31	B-2167	須恵器	平皿	古墳	0.367	0.097	2.41	0.626	0.285	0.098
16		17	B-2168	須恵器	鉢	古墳	0.251	0.076	2.23	0.477	0.200	0.065
17	4号墳	3	B-2169	須恵器	坏I	古墳	0.325	0.049	1.61	0.486	0.225	0.066
18		8	B-2170	須恵器	坏I	古墳	0.424	0.078	1.60	0.578	0.288	0.110
19		1	B-2171	須恵器	坏I	古墳	0.277	0.140	1.89	0.496	0.423	0.127
20		19	B-2172	土師器	坏	古墳	0.473	0.075	1.56	0.502	0.255	0.136
21		18	B-2173	土師器	坏	古墳	0.456	0.070	1.57	0.498	0.261	0.132
22	5号墳	31	B-2174	須恵器	高坏	古墳	0.422	0.084	2.02	0.490	0.281	0.129
23		28	B-2175	須恵器	高坏	古墳	0.408	0.087	2.05	0.474	0.291	0.123
24		27	B-2176	須恵器	高坏	古墳	0.481	0.096	1.93	0.517	0.344	0.135
25		22	B-2177	須恵器	高坏	古墳	0.192	0.031	1.43	0.303	0.155	0.039
26		25	B-2178	須恵器	高坏	古墳	0.409	0.088	1.84	0.489	0.291	0.109
27		35	B-2179	須恵器	短頸壺	古墳	0.378	0.085	1.90	0.474	0.280	0.113
28		45	B-2180	須恵器	長頸壺	古墳	0.368	0.129	1.46	0.582	0.307	0.094
29		3	B-2181	須恵器	坏H蓋	古墳	0.330	0.137	1.67	0.505	0.308	0.109
30		52	B-2182	須恵器	平皿	古墳	0.378	0.088	2.21	0.528	0.279	0.098
31		38	B-2183	須恵器	短頸壺	古墳	0.436	0.065	1.84	0.511	0.302	0.125
32		15	B-2184	須恵器	高坏	古墳	0.366	0.093	2.27	0.538	0.313	0.105
33		20	B-2185	須恵器	高坏	古墳	0.432	0.150	1.46	0.646	0.366	0.110
34		23	B-2186	須恵器	高坏	古墳	0.381	0.065	1.71	0.483	0.267	0.084
35		24	B-2187	須恵器	高坏	古墳	0.489	0.102	1.90	0.503	0.339	0.139
36		44	B-2188	須恵器	鉢	古墳	0.274	0.104	2.23	0.453	0.299	0.127
37		21	B-2189	須恵器	高坏	古墳	0.405	0.083	2.18	0.528	0.281	0.094
38		37	B-2190	須恵器	短頸壺	古墳	0.415	0.106	1.74	0.489	0.298	0.105
39		51	B-2191	須恵器	短頸壺	古墳	0.371	0.109	2.04	0.536	0.303	0.158
40		46	B-2192	須恵器	長頸壺	古墳	0.473	0.129	1.62	0.561	0.346	0.123
41		50	B-2193	須恵器	短頸壺	古墳	0.381	0.227	1.43	0.549	0.345	0.093
42		49	B-2194	須恵器	大口壺	古墳	0.455	0.077	1.44	0.550	0.293	0.111
43		54	B-2195	須恵器	壺	古墳	0.520	0.128	1.72	0.565	0.394	0.173
44		34	B-2196	須恵器	短頸壺	古墳	0.425	0.083	1.99	0.446	0.305	0.127
45		53	B-2197	須恵器	短頸壺	古墳	0.342	0.110	2.21	0.479	0.299	0.111
46	6号墳	2	B-2198	須恵器	高坏	古墳	0.958	0.247	1.71	0.597	0.473	0.144
47		3	B-2199	須恵器	高坏	古墳	0.475	0.145	1.53	0.504	0.457	0.205
48		5	B-2200	須恵器	高坏	古墳	0.335	0.091	2.18	0.655	0.293	0.090
49		7	B-2201	須恵器	裝飾付壺	古墳	0.375	0.127	1.62	0.463	0.406	0.188
50		7	B-2202	須恵器	裝飾付壺	古墳	0.419	0.138	1.55	0.488	0.437	0.211
51		7	B-2203	須恵器	裝飾付壺	古墳	0.399	0.136	1.61	0.453	0.439	0.196
52		8	B-2204	須恵器	裝飾付壺	古墳	0.383	0.131	1.63	0.423	0.433	0.168
53		8	B-2205	須恵器	裝飾付壺	古墳	0.384	0.125	1.62	0.450	0.418	0.182
54		8	B-2206	須恵器	裝飾付壺	古墳	0.393	0.110	1.59	0.458	0.396	0.179
55	7号墳	11	B-2207	須恵器	高坏	古墳	0.368	0.087	1.46	0.495	0.285	0.070
56		4	B-2208	須恵器	坏H蓋	古墳	0.369	0.090	3.01	0.414	0.272	0.113
57	8号墳	4	B-2209	須恵器	平皿	古墳	0.247	0.124	1.76	0.449	0.365	0.141
58		2	B-2210	須恵器	坏H蓋	奈良	0.181	0.041	1.50	0.286	0.192	0.045
59		3	B-2211	須恵器	椀	鎌倉	0.338	0.116	1.76	0.588	0.297	0.128

第30表 須恵器胎土分析試料および分析結果(1)

試料番号	古墳番号	土器番号	分析番号	種類	器種	時代	K	Ca	Fe	Pb	Sr	Na
60		5	B-2212	須恵器	椀	鎌倉	0.418	0.153	1.58	0.709	0.370	0.157
61		8	B-2213	須恵器	椀	鎌倉	0.369	0.187	1.61	0.712	0.327	0.148
62		10	B-2214	須恵器	椀	鎌倉	0.412	0.150	1.72	0.666	0.347	0.148
63		12	B-2215	土師器	椀	鎌倉	0.411	0.137	1.88	0.702	0.395	0.153
64	5号墳	15	B-2216	須恵器	椀	鎌倉	0.259	0.037	1.65	0.367	0.141	0.043
65	7号墳	18	B-2217	土師器	椀	鎌倉	0.222	0.024	1.47	0.300	0.104	0.123
66	正法寺1号墳		B-2218	須恵器	坏身	古墳	0.221	0.073	2.33	0.317	0.226	0.103
67			B-2219	須恵器	坏身	古墳	0.211	0.064	2.33	0.298	0.202	0.096
68			B-2220	須恵器	坏身	古墳	0.235	0.038	2.74	0.383	0.151	0.070
69	正法寺2号墳		B-2221	須恵器	坏蓋	古墳	0.330	0.127	2.75	0.568	0.311	0.105
70	正法寺6号墳		B-2222	須恵器	壺	古墳	0.480	0.241	2.53	0.584	0.502	0.276
71	正法寺10号墳		B-2223	須恵器	坏身	古墳	0.411	0.092	2.19	0.488	0.388	0.191
72			B-2224	須恵器	坏蓋	古墳	0.301	0.170	1.60	0.561	0.500	0.205
73	正法寺11号墳		B-2225	須恵器	高坏	古墳	0.261	0.050	2.38	0.318	0.161	0.057
74	白鹿谷古墳		B-2226	須恵器	壺	古墳	0.219	0.028	2.02	0.361	0.133	0.051
75			B-2227	須恵器	壺	古墳	0.437	0.219	1.70	0.704	0.459	0.164
76	1号室	1	B-2228	須恵器	壺	鎌倉	0.434	0.148	1.66	0.751	0.323	0.107
77		2	B-2229	須恵器	椀	鎌倉	0.291	0.098	1.89	0.492	0.260	0.089
78		3	B-2230	須恵器	壺	鎌倉	0.382	0.120	1.54	0.590	0.327	0.126
79		4	B-2231	須恵器	壺	鎌倉	0.405	0.217	1.67	0.630	0.419	0.114
80		5	B-2232	須恵器	壺	鎌倉	0.460	0.147	1.65	0.774	0.340	0.128
81		6	B-2233	須恵器	椀	鎌倉	0.293	0.096	1.99	0.515	0.277	0.088
82		7	B-2234	須恵器	椀	鎌倉	0.410	0.111	1.85	0.616	0.298	0.076
83		8	B-2235	須恵器	椀	鎌倉	0.326	0.085	1.94	0.534	0.259	0.087
84		9	B-2236	土師器	椀	鎌倉	0.398	0.164	1.86	0.587	0.352	0.141
85		10	B-2237	須恵器	椀	鎌倉	0.350	0.236	1.85	0.568	0.407	0.119
86	2号室	1	B-2238	須恵器	椀	鎌倉	0.445	0.095	1.69	0.603	0.259	0.132
87		2	B-2239	須恵器	椀	鎌倉	0.381	0.113	1.77	0.649	0.313	0.134
88		3	B-2240	須恵器	鉢	鎌倉	0.425	0.128	1.61	0.662	0.318	0.110
89		4	B-2241	須恵器	鉢	鎌倉	0.414	0.126	1.83	0.650	0.298	0.106
90		5	B-2242	土師器	鉢	鎌倉	0.585	0.080	1.42	0.869	0.274	0.181
91		6	B-2243	須恵器	椀	鎌倉	0.436	0.115	1.64	0.720	0.321	0.100
92		7	B-2244		甕	鎌倉	0.967	0.167	1.51	0.775	0.328	0.293
93		8	B-2245	須恵器	椀	鎌倉	0.439	0.124	1.69	0.701	0.304	0.111
94		9	B-2246	須恵器	椀	鎌倉	0.438	0.107	1.79	0.579	0.286	0.125
95		10	B-2247	須恵器	椀	鎌倉	0.432	0.096	1.68	0.588	0.263	0.127
96		11	B-2248	須恵器	椀	鎌倉	0.311	0.097	1.92	0.486	0.263	0.083
97		12	B-2249	土師器	椀	鎌倉	0.400	0.220	2.02	0.603	0.504	0.158
98		13	B-2250	土師器	椀	鎌倉	0.426	0.148	1.86	0.568	0.407	0.165
99		14	B-2251	土師器	椀	鎌倉	0.376	0.117	2.00	0.707	0.331	0.152
100	3号室	1	B-2252	土師器	椀	鎌倉	0.472	0.092	1.75	0.611	0.280	0.146
101		2	B-2253	須恵器	椀	鎌倉	0.442	0.105	1.85	0.596	0.284	0.130
102		3	B-2254	土師器	鉢	鎌倉	0.378	0.160	1.86	0.590	0.361	0.135
103		5	B-2255	須恵器	椀	鎌倉	0.483	0.143	1.86	0.612	0.326	0.130
104		6	B-2256	土師器	壺	鎌倉	0.424	0.148	1.66	0.761	0.343	0.176
105			B-2257			鎌倉	0.549	0.200	1.55	0.666	0.382	0.139
106	和田神社遺跡		B-2258	須恵器			0.436	0.120	1.56	0.729	0.400	0.202
107			B-2259	須恵器			0.385	0.236	2.49	0.652	0.487	0.170
108			B-2260	須恵器			0.391	0.156	1.77	0.657	0.348	0.130
109			B-2261	須恵器			0.253	0.069	1.55	0.360	0.298	0.070
110			B-2262	須恵器			0.598	0.091	1.73	0.754	0.270	0.183
111			B-2263	須恵器			0.315	0.052	2.34	0.401	0.290	0.042
112			B-2264	須恵器			0.349	0.125	1.55	0.586	0.365	0.134

第31表 須恵器胎土分析試料および分析結果(2)

第5節 金銅装馬具の分析

第8章 第5節は
公開していません

第9章 総括

第1節 後期旧石器時代初頭における勝手野遺跡の位置付け

1 東播磨における後期旧石器時代遺跡

播磨地域は、瀬戸内海沿岸地域から中国山地南部までを含む広い範囲を占め、その間に、山地から沖積平野まで多様な地形が分布している。さらに、瀬戸内海に注ぐ河川が南北に流れ、地域を分断している。なかでも最大の河川である加古川は、峠越えをおこなわず、川沿いに丹波・但馬地域、さらには丹後地域への移動が可能であり、瀬戸内側と日本海側を結ぶ重要な交通路となっている。

加古川の上流域は丹波に属し、中・下流域は播磨に属するが、これまでに後期旧石器時代遺跡が多数知られているのは、比較的分布調査の行き届いた播磨地域であり、丹波地域で内容が明らかになっている遺跡としては、山良川水系上流部に位置する、春日町・七日市遺跡が知られるにすぎない。

加古川の流域に分布する後期旧石器時代遺跡の密度には、かなり明瞭な濃淡がみられる。これは遺跡の調査密度とも関連するため、単純な判断は慎まねばならないが、下流域では印南野台地、平荘湖周辺に顕著な遺跡分布の集中が認められ、中流域でも青野ヶ原台地上に著名な遺跡が見いだされている¹⁾。

加古川支流のひとつ、瀧瀬寺川上流に位置する加西市・逆池遺跡は、国府型ナイフ形石器・翼状剥片がともに採集されているほか、チャート製ナイフ形石器・搔器等多数の遺物が採集されている。中国山地南端部に位置し、サヌカイト原産地から遠距離にあるにもかかわらず、瀬戸内技法に関連する資料が多数見いだされている点が注目される。

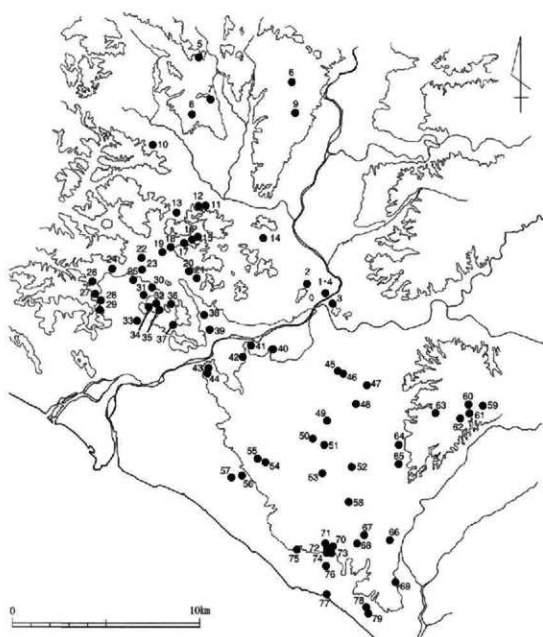
加古川中流域にあたる小野市の鶴池・逆池遺跡²⁾では、サヌカイトを用いた国府型ナイフ形石器・小型横長剥片素材のナイフ形石器等が、また鴨池遺跡³⁾ではファースト・フレイクを素材とした国府型ナイフ形石器のほか、小型切出形ナイフ形石器・搔器等が採集されている。

下流域に相当する加古川市域のうち、北部の低山地帯に位置する志方町・七ッ池遺跡⁴⁾では、サヌカイト製角錐状石器・国府型ナイフ形石器・瑪瑙製台形石器・頁岩製石核等が採集されている。また同町岡山遺跡では、サヌカイト製小型ナイフ形石器を中心に、角錐状石器・石核等が多数採集されている⁵⁾。

播磨平野に面する加古川市平荘湖付近では、又平新田遺跡でサヌカイト製ナイフ形石器・角錐状石器・搔器が、山之上遺跡⁶⁾では国府型ナイフ形石器・翼状剥片等を多数出土している。

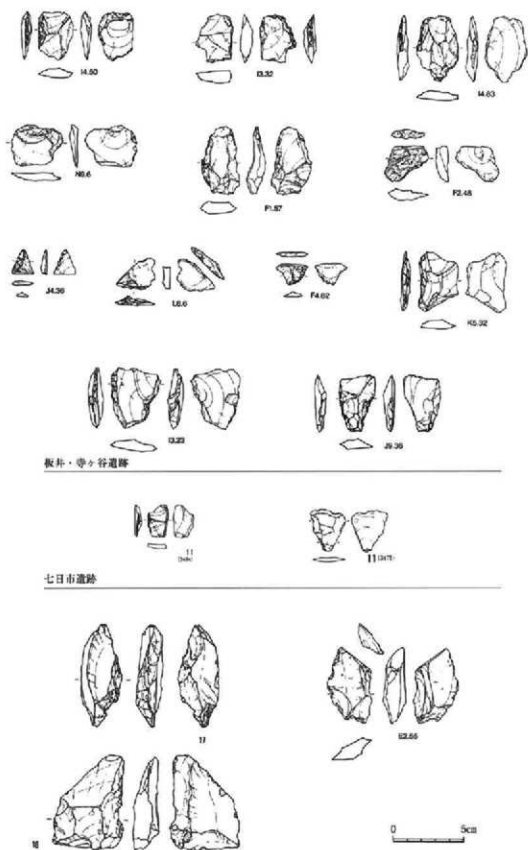
印南野台地では、稲美町・入ヶ池遺跡⁷⁾の採集遺物が注目される。サヌカイト製小型横長剥片素材のナイフ形石器とともに、瑪瑙製縦長剥片素材のナイフ形石器が採集されている。瑪瑙製ナイフ形石器は、幅広い打面をとどめる縦長剥片の1個縁に二次加工を施したもので、七日市遺跡、板井・寺ヶ谷遺跡のAT下位の石器群に組成される同種のナイフ形石器と酷似している。また、これに近い琴池遺跡⁸⁾でも、小型のナイフ形石器が多数採集されている。

以上のように、加古川中・下流域では、遠隔地石材のサヌカイトのほか、在地石材としてとらえられるチャート・頁岩・瑪瑙等多様な石材を用いた遺物が知られている。表面採集遺物が多いため、石器群の所属時期、石材の選択と技術のありかたは明瞭ではないが、それらが大阪平野周辺地域や備前瀬戸地域とは異なるあり方を示す可能性は高い。上述の遺跡は段丘の端部に立地する例が多いが、加古川支流



- | | | | |
|-----------|---------|------------|-------------|
| 1 藤子野 | 21 広尾東 | 41 神野城山 | 61 金神池 |
| 2 白沢 | 22 西蔵院 | 42 栗池 | 62 茄子+鹿+鹿+鹿 |
| 3 正法寺 | 23 泉中 | 43 日岡山 | 63 青池 |
| 4 藤子野北 | 24 永堂 | 44 南大塚 | 64 白蛇池 |
| 5 蓮池 | 25 ノノ木 | 45 下妻 | 65 水原池 |
| 6 高岡・熊中池西 | 26 新大池 | 46 下妻第1 | 66 上埴池 |
| 7 亀倉池 | 27 成身小池 | 47 御野第2 | 67 新築池 |
| 8 草池 | 28 成身山池 | 48 風戸谷池 | 68 喰+池 |
| 9 藪池 | 29 西山新池 | 49 入+池 | 69 野+池 |
| 10 善助池 | 30 岡田 | 50 草池 | 70 鳥+仔 |
| 11 ごきん谷池 | 31 二子池 | 51 西+沢池 | 71 西藤 |
| 12 塚谷池 | 32 横山人 | 52 西崎 | 72 金+崎 |
| 13 倉谷大池 | 33 新築池 | 53 白丁塚 | 73 宮ノ原 |
| 14 藪池 | 34 横山B | 54 野野池 | 74 片山 |
| 15 七ツ池C | 35 神宮大池 | 55 和田上池 | 75 寺山 |
| 16 七ツ池D | 36 校校 | 56 狐野+池 | 76 西大池 |
| 17 七ツ池A | 37 又平新田 | 57 山ノ上(遺跡) | 77 西八本 |
| 18 七ツ池B | 38 西山 | 58 日蓮池 | 78 水白 |
| 19 大沢 | 39 観音堂 | 59 大原池 | 79 松ノ内 |
| 20 次尾新池 | 40 野山 | 60 金神池北 | |

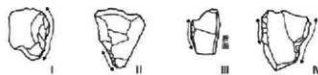
第174図 東播磨地域における後期旧石器時代遺跡の分布



板井・寺ヶ谷遺跡

七日市遺跡

第175図 兵庫県内出土の台形石器



第176図 台形石器の形態分類

によって形成された、伏隆な谷沿いや山稜先端に接する微高地上から遺物が採集される七ッ池遺跡や鴨池遺跡などの例もみられ、勝手野遺跡もその一例と言えるかもしれない(第174図)。丘陵・段丘・河川に沿った低地が古瀬戸内渓谷に連なり、複雑な地形環境を形成する播磨地域では、集落の立地環境と石器群の組成・技術との関連が重要な検討課題であるが、こうした研究は、勝手野遺跡の調査でようやく緒についたところである。小論では、現在認識しうるいくつかの問題点を指摘し、今後の研究方向のひとつを示しておきたい。

2 兵庫県下の始良Tn火山灰層下位の石器群

兵庫県下では、始良Tn火山灰下位の石器群として、但馬地域では温泉町・畑ヶ平遺跡、市島町・梶原遺跡、春日町・七日市遺跡、篠山市・板井・寺ヶ谷遺跡、三田市・溝口遺跡および勝手野遺跡の合計5遺跡が知られている。このうち石器群の内容が明らかにされているのは、七日市遺跡¹⁾、板井・寺ヶ谷遺跡²⁾、溝口遺跡³⁾である。これらの遺跡は、いずれも中国山地帯内に位置する遺跡であるが、石材は在地産のチャートを主体としながらも、サヌカイトを含む点で勝手野遺跡と共通している。一方、近畿地方の瀬戸内海沿岸地域すなわちサヌカイト地帯では、始良火山灰下位の石器群に関する知見は乏しく、大阪市長原遺跡第14層出土の石器群が知られているにすぎない⁴⁾。

以下では、サヌカイト製石器・石核を中心に、その形態と技術的特徴を検討することによって、サヌカイト地帯における後期旧石器時代初頭の石器群と勝手野遺跡出土の石器群について予察をおこなってみたい。

台形石器の形態と技術

勝手野遺跡出土の石器群で、組成を特徴づける器種は台形石器である。台形石器が認識されたのは、兵庫県下では七日市遺跡第Ⅱ文化層の石器群が最初であろう。報告では「小型部分加工石器」という、些か曖昧な名称を付与したが、筆者は現在、これらを台形石器の一類と理解している。同時期に調査された板井・寺ヶ谷遺跡では、報告中でその存在の可能性を指摘されつつも、台形石器という器種分類は行われなかったが、その後山口卓也氏により改めて検討され⁵⁾、ナイフ形石器・削器・二次加工のある剥片等からこの器種が抽出されている。この2遺跡よりはやく調査がおこなわれた溝口遺跡でも、チャート製の二次加工のある剥片中に本器種が含まれている。

第175図にその一部を示すが、報告書で台形石器に分類されなかったものについては、展開の方向が

台形石器の場合とは異なっているものを、そのまま転載した。

山口氏は、板井・寺ヶ谷遺跡で台形石器に分類される一群について、「台形様石器群自体の存在に疑いを有する余地はないが、後期旧石器時代の定型石器とは同列の型式学的安定を果たしていない」と述べ、台形様石器の抽出に対する問題点を指摘している。これは本地域における台形石器の一群に、通底する事柄かもしれないが、製作技術上の要素を抽出してゆけば、台形石器としての型式学的共通性を認識することは、必ずしも不可能とはいえない。七日市遺跡の報告で、「小型部分加工石器」（以下では台形石器と呼称する）を、5類型に分類している。ここでも基本的には、この分類を踏襲しつつ各遺跡出土の資料を検討することとする。ただし、原分類のうち第5類は、第1～4類の定義と異なる基準を用いていたため、これを排し、二次加工の位置を基準とした第1～4類を下記のように再定義しておく。旧分類の第5類は、第1類に含まれる（第176図）。

【台形石器の形態分類】

- 第1類 剥片の1側縁に二次加工を施したもの
- 第2類 剥片の打面部を基部におき、打面部（基部）付近にのみ二次加工を施したもの
- 第3類 剥片の一部を折断し、相対する縁辺に二次加工を施したもの
- 第4類 剥片の2側縁に二次加工を施したもの

ここで記述した二次加工は剥離によるもので、①ナイフ形石器に類する急斜度の二次加工、②器表面に施される平坦な二次加工、③細かな剥離による二次加工、が認められる。これらのうち③は、素材剥片がごく薄い場合に認められるものである。

第176図に示した各遺跡出土のサスサイト製台形石器を検討するならば、板井・寺ヶ谷遺跡下位文化層のI4.50、I3.32、I4.83、N9.6は、第1類に分類できよう。また、河遺跡F1.57、七日市遺跡第Ⅰ文化層の3475は第2類に、七日市遺跡第Ⅱ文化層出土の3484、板井・寺ヶ谷遺跡のI4.36、I.8.6、F4.82、F2.48、K5.32、は第3類に分類できる。さらに、板井・寺ヶ谷遺跡のI3.23、J9.36は第4類に分類されよう。

また勝手野遺跡で出土した台形石器（第12図4）は、第3類に分類できる。

多くの資料では二次加工①が支配的であり、二次加工②は、F1.57、N9.6、J9.36勝手野遺跡4などに認められる。二次加工③はF4.82、3475に見られ、素材の薄い縁辺に対するトリミングが主要な目的であったものと考えられる。

素材剥片

台形石器の素材となった剥片の形態は、多様である。図示した中で、3475、I4.50のように素材剥片の剥離方向が、石器の主軸と合致する例はごく少数であり、多くの例では、腹面側の剥離方向が石器主軸の側方であって、横長傾向の剥片が素材となっていることを示唆している。ただし横長傾向とはいうものの、素材剥片の背面側には多方向からの剥離痕が認められる例が多いことから、定型的な横長剥片剥離技術を基盤とするものとは考えられない。七日市遺跡3475は、横長剥片との接合資料であるが、接合する剥片の背面側には、横方向に連続する剥離痕が認められ、その過程で剥離された不定型な剥片が、台形石器として加工されたことが理解される。

横長剥片剥離技術と石器群

勝手野遺跡のサスカイト製品で注目されるのは、1点の横長剥片石核（第14図17）である。厚手の剥片を素材とし、その腹面側を作業面としていること、素材剥片の打面側から剥離を進行させ、石核幅に等しい横長剥片を剥離していること、打面調整が施されることという、瀬戸内技法に見られる属性を備えた資料であり、本石核から剥離された剥片は、ほぼ翼状を呈すると判断できる。勝手野遺跡では、本石核と同一母岩の資料は認められず、石核のみが遺跡内に搬入されたものと思われる。

勝手野遺跡出土資料に類する例は、溝口遺跡（第176図17・18）、板井・寺ヶ谷遺跡（第176図2.55）でも認められ、剥片剥離技術上、勝手野遺跡例と非常に類似を示している。しかし勝手野、溝口同遺跡では、これらの横長剥片剥離技術が、ナイフ形石器の製作まで包摂する一連の構造を完成していたか否かを判断する根拠をみだすことができない。板井・寺ヶ谷遺跡では、横長剥片を素材としたナイフ形石器の一群が出土しており、横長剥片剥離技術が、ナイフ形石器の基盤となっていたことを示しているが、これは同遺跡でみだされた多様な横長剥片剥離技術全体との関係であって、瀬戸内技法に近似する技術のみが、特異的にナイフ形石器と結合しているわけではない。

現在の資料に基づく限り、瀬戸内技法の起源は始良火山灰降灰以前にあるが、当該時期には複数の横長剥片剥離技術が並列的に存在し、これらがナイフ形石器・台形石器の基盤となっていたと考えるのが妥当であろう。このような段階から、瀬戸内技法へ取組んでゆく過程と、その要因を明らかにすることが、今後に残された課題である。

上述のとおり、兵庫県下のAT下位のサスカイト製石器群は、台形石器の製作・横長剥片剥離技術等において、共通する特徴をもっている。勝手野遺跡出土のサスカイト製造物は少数であるが、これに包摂されるものといえよう。また、チャート製石器にみられる技術上の特徴も、各遺跡間で大きな差異をみだすことはできない。勝手野遺跡では、明確なナイフ形石器が組成されず、刃部磨製石斧が欠落していることから、石器組成には落差があるとはいうものの、石器群の規模を考慮すれば、組成上の差異をそのまま評価することには慎重でありたい。勝手野遺跡出土の石器群は、組成及び技術上、これまでに兵庫県内で知られているAT下位の石器群の範疇におさまるものとして大過ないだろう。

第3章でも述べたように、播磨地域における旧石器石材の選択は多様であり、石器にみられる技術の分布も、モザイク状といっても良い。典型的な国府型ナイフ形石器が、中国山地帯に接する地域で検出される一方、印南野台地で燧瑯製の縦長剥片を素材とするナイフ形石器が採集されるなど、特定の技術や石材を安定的に保持する領域ではなく、石材に乏しいがゆえであろう複雑な状況を示している。石材供給関係と石器製作技術（剥片剥離技術を含む）とが、本地域内でどのように維持され、石器群として展開したのか、そのためにどのような規模の集団が、どのような運動形態をもっていたのかという点が、播磨地域の後期旧石器時代を明らかにしてゆく上で重要な視座となるだろう。

勝手野遺跡は、後期旧石器時代の遺跡としては極めて小規模であるが、それゆえに提起される新たな問題点も存在する。本報告では問題点を指摘し、調査の方向性の一部を示すにとどまったが、今後の調査の進展の中で、こうした方向に沿った検討を行ってゆきたい。

第2節 勝手野古墳群の築造過程

1 横穴式石室について

調査を実施した8基の古墳は、加古川に向かって概ね南東方向に開口する横穴式石室である。各古墳の開口方向を詳細にみれば、1・3・4号墳の3基が南から東に65°程度、2・5・7号墳の3基が同じく南から東に45°前後の開口方向を向け、それぞれまとまりを示している。一方、6号墳は南から75°東、8号墳は南から30°東と先の2グループとは方向を異にしていることが判る。また、山麓斜面裾部に築かれた3・4・5・6・7号墳が、等高線斜下方に開口部を設定する傾向があり、段丘面上の1・2・8号墳は、等高線に平行に開口する傾向がうかがえる。ちなみに、山麓斜面に築かれている未調査の9号墳は、墳丘中央部の盗掘坑の状況から3号墳に近い方向に開口する可能性が高いと思われ、山麓斜面に築かれた6基のうち、少なくとも4基が開口部を等高線斜下方に向けていることを意図しているともよいだろう。ところで、一般的には、開口方向が同方位を採る古墳が、築造時期を同じくする傾向が多いと指摘されている。勝手野古墳群では同じ開口方向を採る2・5・7号墳の3基は、次項で検討するように築造時期が近接し、かつ、須恵器の坏目が出土していることから、勝手野古墳群では3号墳に後続して築造された古墳であると考えられる。こうした意味では、共通性をうかがわせるものの、3基の直前に築造されたこととみてよい3号墳とは、開口方向は同じグループに属せず、3号墳に規制された方向性をとっていないことが挙げられる。一方、3号墳と同方向に開口する1・4号墳は、出土遺物から時間的に後出することが考えられ、開口方向が必ずしも時間的同時性を反映していない。その要因の一つとして、勝手野古墳群の場合、極めて狭小な墓域を設定したこと、4・6号墳のように、墳丘を他の先行する古墳の墳丘に接して相次いで築造が行われた結果、開口方向の設定に制約があったことが想定されるのかもしれない。

各古墳の石室は残存状況が悪く、石室の断面構成が明らかでない部位が多いが、播磨地域の横穴式石室を詳細に検討した中浜久喜氏の分類¹⁾を参考にしながら、勝手野古墳群の横穴式石室の断面構成について、簡単に触れておく。

奥壁は、基底石に側壁2～3段目程度の高さをもつ大型石材1石を縦積みを使用することが基本で、奥壁を1石で構築するとみられる4号墳以外は、側壁との間隙に小型の石材を縦積みで補い、基底部を構成している。奥壁が残存しない1・2号墳も、抜き取り痕跡から同様の基底部構造をもっていたと考えられる。

3・5号墳の奥壁は、基底石に大型石材を用いるが、その高さは玄室高の半程で収まるとする中浜分類の3a類に該当するとみられる。また、8号墳も基底石の高さがそれほどなく、3a類の可能性が高い。一方、それ以外の4・6・7号墳は、基底石が玄室高の過半を占める3b類であった可能性が高い。そのうち、4号墳の奥壁は、床面幅に対応する大型の石材が、1石で基底部を構成し、高さも少なくとも1.55m程度と高く、奥壁を1石で構築しようとする意図がうかがわれ、後出的要素を含んでいると考えられる。

側壁の構築法では、3号墳のみが片袖式石室であり、それ以外はすべて無袖式である。唯一、袖を有する3号墳は、袖幅が0.3mと袖部の突出は少ないが、基底部に縦積みの石や立柱石を用い、上に1～2段積んで天井石を受ける3類とされる袖石構造であろう。なお、左側壁では右側壁の袖石に対面する

位置に立柱石が立てられ、玄室と羨道を区画している。それ以外の無袖式石室では、3号墳に後続するとみられる7号墳の右側壁に、縦長の石が立てられ、袖部の意識がなお残存していたと考えられる。その他の無袖式石室は、袖部の名残を意識したような立柱石はみられず、こうした壁体の構築の違いから、7号墳が他の古墳に先行する要素をもっていると考えられる。

以上のような石室構造からすると、袖部を有する片袖式の3号墳が古く、7号墳が袖部の名残を思わせる立柱石状の大型石材が用いられていることから、古い要素を残しているともみておきたい。一方、奥壁構造では、おそらく天井石付近までを1石で構成する可能性の高い4号墳は、新しい要素をもっていることができる。

次に、加古川流域の横穴式石室と対比しながら、石室規模について検討してみたい。勝手野古墳群のある賀毛郡東部地域の加古川左岸や、同じく加古川左岸の美濃郡では古墳時代後期後半においても、なお、木棺直葬が盛行している地域で、横穴式石室墳そのものが少ない傾向にあり、後期後半によりやく横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が出現するとみられる。したがって、対比すべき横穴式石室の数が限られていることから、加古川流域全体も視野に入れながら、勝手野古墳群の石室規模について賀毛・多可郡域の主要横穴式石室集積した丹羽聖二氏のデータ¹⁰⁾を参考にしながら触れてみたい。

勝手野古墳群で唯一、片袖式の形態をとる3号墳は、墳丘規模、石室規模ともに他の古墳を凌駕していて、金銅張馬具などの優品を副葬品にもつことから、古墳群の盟主墳的位置にあったことは明らかである。羨道長が短く、全長は約8.0mと大型の横穴式石室とは言い難いが、玄室規模は長さ5.2m、奥壁幅1.7mで、10㎡弱の床面積を有し、階層性を示す指標とされる10㎡をわずかに下回っている。

丹羽氏の集積によって加古川流域の横穴式石室の玄室規模をみると、旧賀毛郡域にあたる加西市・銅坂大塚古墳(10.6㎡)、同・後藤山古墳(11.5㎡)、同・鴨谷大塚古墳(11.3㎡)、同・藤塚4号墳(10.5㎡)、同・堂山古墳(10.8㎡)、加東郡東条町・林津5号墳(11.3㎡)、社町・鹿野14号墳(11.8㎡)、同・上三草22号墳(10.1㎡)などが、10㎡を上回る玄室規模を有している古墳とされている。さらに、加古川上流域にあたる多可郡域では中町・東山1号墳(17.5㎡)、下流域の旧印南郡域の加古川市・池尻16号墳(推定18㎡)¹¹⁾など、超大型の横穴式石室をもつ古墳が存在している。一方、同地域の中間地域にあたる賀毛郡・美濃郡では、玄室規模が10㎡を大きく超える東山1号墳・池尻16号墳のような横穴式石室は、現在のところ知られていない。こうしたことから、石室規模が被葬者の階層を表現しているとすれば、賀毛郡東部・美濃郡地域においては、古墳時代後期には郡域を掌握するような傑出した地域首長が存在しなかったことを示している。また、賀毛郡東南部にあたる小野市域、美濃郡西部にあたる三木市域など、勝手野古墳群周辺での横穴式石室の実態は、あまり明確ではなく、比較的大型の部類に属する横穴式石室は限られている。そのうち、同じ加古川右岸に位置し、勝手野古墳群の北側に築造された岩倉2号墳¹²⁾は、両袖式で石室が11は完存している。岩倉古墳群は11基からなるとされるが、実体が明らかでない古墳が多く、比較的散漫な分布状況を示している。そのうち、谷の最奥部にある2号墳が岩倉古墳群中の盟主墳とみられ、石室全長9.0mの両袖式横穴式石室である。玄室規模は、長さ4.5m、奥壁幅1.9m、高さ2.5mで、支室床面積8.6㎡と勝手野3号墳よりやや小型で、中浜氏の分類では、奥壁3b類、前壁2a類、袖石3類、側壁3類に該当する。出土遺物がないことから築造年代は明らかでないが、両袖式で袖の突出が明瞭であることなどの石室構造から勝手野3号墳に先行する可能性が高い。また、岩倉3号墳は詳細が明らかでないが、全長6.7m、玄室長4.3m、幅1.9mの両袖式石室で、鉄

刀・馬具・鉄鎌・須恵器が出土したという。2号墳とはほぼ同じ玄室規模を有しており、築造時期も近接していたのであろう。岩倉古墳群は勝手野古墳群と同じ、旧米住村に属し、『播磨国風土記』の権原里の中心地であったと考えられ、権原里に対応する小地域首長墳であろうか。他に単独の塚塚古墳が調査されている。石室は大きく破壊され、奥壁の付近を残すのみで、奥室幅は1.8mとされ、比較的、大型の横穴式石室であった可能性が指摘できる。

勝手野古墳群の所在する黍田地区には、無袖式横穴式石室をもつ毛無山3号墳¹⁰と黍田白雲谷古墳¹¹が知られ、いずれも比較的小型の横穴式石室である。毛無山3号墳は両側壁の一部しか残存していないが、石室幅1.3mほどの無袖式石室とみられる。石室内には加古川流域の組合式家形石棺身を分類した十河良和氏の分類¹²に従えば、B-1-a型の組合式家形石棺底石を伴っている。黍田白雲谷古墳は、毛無山3号墳の西方にある径8mの円墳で、全長3.5m、幅1mの小型の石室から、裝飾付須恵器が出土している。両古墳の出土須恵器のうち、坏は坏Gの蓋坏のセットが主流で、勝手野古墳群とは異なった須恵器組成を示していることが注意される。

一方、勝手野古墳群とは加古川を挟んで対岸に位置する正法寺山古墳群¹³は、11基程度から構成されていたらしいが、すでに破壊された古墳もあり、9基が確認されている。9基のうち、2基が両袖式石室、3基が片袖式石室、4基が無袖式石室であった。そのうち、両袖式の1号墳が盟主墳と考えられる。10号墳も1号墳と同規模の石室である可能性を含んでいるが、石室の残存状況が悪く、規模は不明である。1号墳は径16mの円墳で、全長8.7m、玄室長4.3m、幅2.1m、高さ2.9mの両袖式石室である。玄室床面積9.0㎡の規模を有し、岩倉2号墳と規模が近似し、また、玄室側壁基部をやや大型の石材を用いて3石で構築するなど石室の構築方法もよく似ている。出土した須恵器はTK43型式からTK217型式のもので、両袖式・片袖式石室の古墳は、勝手野古墳群に先行し、無袖式石室はほぼ同時期に築造されていたと考えられる。

最近、美濃川上流の志染川流域で、調査が行われた窟屋1号墳¹⁴は、『古事記』清寧記、『日本書紀』額宗即位前紀、『播磨国風土記』美濃郡桑の徳計・弘計2王子の伝承記事にみえる縮見屯倉の遺跡地とされる三木市志染町にある復元径16m程度の円墳で、全長10.9m、幅1.6m、残存高2.2mの長大な無袖式横穴式石室を有している。加古川流域初出の単鳳式環頭柄頭のほか、多量の遺物が出土し、これらの記事にみえる縮見屯倉の管理者である縮見屯倉首忍海部造細目、志染村首伊等尾などの地域首長に連なる古墳と考えられる。石室中ほどの左右側壁に立柱石が存在し、両袖式横穴式石室の名残をとどめていて、この部分までを玄室と考えれば、長さ5.7mを測り、10㎡弱の規模であることから、この地域の最も大型の横穴式石室の玄室規模が10㎡程度を目安となっていたのではないかと考えられる。

2 出土須恵器

本項では、調査を行った8基の古墳と未調査の古墳から出土した遺物を検討し、古墳群の築造過程に触れてみたい。

調査を行った8基の古墳は、横穴式石室を埋葬施設とすることから、後世の再利用や擾乱が著しく、追葬による取り片付けを含む古墳造営時の状況を示しているものは少ない。また、各古墳からの出土個体数は、必ずしも多いとはいえない。各古墳から出土した土器については、小片のため器種の特定できないもの、もしくは実測不可能な少数の遺物を除き、できる限り個体把握と図化に努めるとの方針で臨

んだが、確認できた個体数は、昭和28年出土のものを含め、須恵器が160点、土師器が15点であり、資料数が限定されているという制約があった。したがって、出土遺物数がかつて存在したはずの総点数のうち、どの程度の割合で残存しているのかは明らかでない。このような制約を前提とした検討ではあるが、出土遺物のうち、永井信弘氏の鹿跡出土資料¹⁷⁾、栗田哲朗氏らの東山古墳群¹⁸⁾、岸本一郎氏の坂本古墳群¹⁹⁾など、当地域において近年精力的に進められている須恵器編年研究との対応関係を中心として、検討を進めることにしたい。

須恵器の型式分類の中心となるのは坏類であろう。勝手野古墳群出土の坏類は、第4章各節の出土遺物の項でも触れたように、坏H・坏I・坏Gの3種に区分した。勝手野古墳群では坏Hの出土した古墳と坏Hをもたない古墳が明確に区分できた。なお、坏Gとしたものは、識別個体数が少なく、主流の器種ではないことから、検討の対象から除外し、基本的には坏Iに含めて考えておきたい。

坏Hは、古墳時代以来の蓋と、セットとなるに受部に立ち上がりのある坏で、2・3・5・7・8号墳の5基から出土している。ただし、8号墳は坏Hの個体数が1点であり、確実に8号墳に伴うものかどうか判然としないことから、8号墳を除く4基から坏Hが出土しているといえる。このうち、出土状況から一括性が高いと考えられる資料は、3号墳下層（以下、3-5-7・9・10のように表記する。）と7号墳奥壁付近（7-1-10）のものに限られる。

勝手野1期

3号墳では、坏Hは蓋が4個体、身が9個体確認できたが、そのうち奥壁に近い左側下層から出土した坏H身（3-5-7・9・10）のうち、5-7は口径12cmほど、受部径14.5~15cmで勝手野古墳群では最も法量の大きな坏身である。この坏H身に対応するものとして、3号墳前庭部から出土した坏H蓋（3-1・2）が挙げられる。口径が14cm弱で、1は天井部外面を回転ヘラ削り調整されていることから、初葬に伴う遺物が追葬時に掻き出されたものと考えられる。同じ下層から出土したそれ以外の坏H身（3-9・10）は、口径11.3cmとやや小型であり、細分化も可能であろうが、出土層位を優先すれば、この5個体の坏H身は、同一埋葬に伴うものと理解しておきたい。3号墳出土の坏Hで回転ヘラ削り調整が施すものは坏H蓋の1・3の2点のみで、特に坏H身ではすべて回転ヘラ削り手法が省略されている。なお、3は出土層位が上層攪乱土中ではあるが、回転ヘラ削り手法が施され、法量から坏H身9・10が対応するので、下層出土の坏H身と同一型式とみて差し支えないであろう。この下層出土と中心とした坏Hは、法量、形態、調整手法からみて、勝手野古墳群中の最古の一群と位置づけられる。この期のものには、同じ下層から出土している長脚2段3方造しの無蓋高坏（3-20）、脚付碗（3-19）、があるほか、前庭部出土の坏H蓋（3-1・2）、碗（3-16）、奥門部付近で出土した中型壺（3-33）も同期のものであろう。

7号墳からは奥壁付近でまとまった坏H（7-1-10）が出土している。蓋は4個体あり、口径12.5cm前後（12.0~12.8cm）、身は5個体あり、口径11.5cm前後（11.2~12.1cm）、受部径14cm前後（13.3~14.3cm）で、立ち上がり高が0.8cmほどである。蓋には天井部外面を回転ヘラ削り調整するもの（7-1・2）が存在するが、他の蓋2個体と坏身の外面は、切り離しの後不調整のままを原則としている。法量が3号墳下層等のものよりやや縮小化の傾向にあることや、石室構造が無袖式石室に変化していることから、7号墳奥壁出土の一群は、3号墳下層のものより後出することが考えられる。ただし、7号墳では坏H以外の器種が不明確であり、3号墳下層との関係は判然としない。両者の坏蓋に回転ヘラ削り調

整を行うものが存在するという共通性を勘案すると、3号墳下層出土の土器を中心とした最古期の一群を勝手野Ⅰ期古段階、7号墳出土の一群をⅠ期新段階として位置づけられる。

この3号墳下層及び前庭部、7号墳奥壁付近出土の坏Hの法量に近似したものに、5号墳出土の坏H蓋(5-2-4)、身(5-7)がある。これらの坏Hのうち、蓋2個体(5-3-4)は石室内の出土であるが、出土状況にまともがなく、後出の椀形の須恵器が含まれて、一括性を示しているとは考えにくい。5号墳が無袖式石室であることや、3号墳下層のものと比べると法量の縮小化がみられ、出土数の多い高環に長脚2段透しがないことから、3号墳より後出することは明らかである。後述する前庭部出土の一群と区別したが、同一期のものである可能性も含んでいる。

以上のように、3・5・7号墳出土の坏Hは、資料数が少ないものの、回転ヘラ削り調整が少数の蓋を除くと、基本的に省略されるようになった以降のものとしてよいだろう。また、法量の小型化、矮小化した立ち上がりなどの特徴から、勝手野Ⅰ期は永井編年Ⅱ期5A小期、東山Ⅰ期新段階、坂本Ⅱ期におおむね並行するとみておきたい。

勝手野Ⅱ期

勝手野Ⅰ期に後出するとみられる一群は、2号墳及び5号墳前庭部出土の一群を標識とする。2号墳の出土状況からすれば、新古のものが混在している可能性もあるものの、比較的まとまった様相を示していると考えられる。一方、5号墳前庭部出土の坏H(5-1-5-6)、高環Ⅱ類(5-19-21)、高環Ⅲ類(5-22)、短頸壺(5-34-35)、駒付小型長頸壺(5-45)、直口壺(5-49)、罎(5-44)、平瓶(5-52)、土師器ミニチュア平瓶(5-55)の一群は、追葬の際に前庭部に掻き出されたものと理解できる。前庭部の出土状況は、大きく二つのグループがやや距離を置いて出土しているが、壺(5-49)のように両グループから破片が出土しているものがあり、二つは同一期と考えられる。なお、勝手野Ⅰ期として区別した坏Hが初葬に伴うものとするれば、第1次追葬に伴うものと理解される。

2号墳出土の坏Hも出土量が多くはないが、坏H蓋(2-1-3)は口径が12cm未満で、身(2-4-5)は口径10cmを超える程度である。勝手野Ⅰ期とした坏Hと比べると、立ち上がりはさらに矮小化し、0.6cmほど小型化が著しい。外面の回転ヘラ削り調整も完全に行われなくなる。なお、5号墳前庭部の坏H(5-1-5-6)は、2号墳に類似した形態もっている。

2号墳出土の無蓋高環は、長脚2段透しが消滅し、透かしをもたない脚高4~7cm程度の低脚化した高環で、高環Ⅱ類に分類したものに当たる。このうち、2号墳出土の高環(2-11-12)の坏部は、底部と口縁部の境が明瞭に突出した段をなしているのが特徴で、同様のものが5号墳(5-15-16)にみられる。その他、3号墳(3-23-25)、5号墳(5-20-21)、6号墳(6-1-4)7号墳(7-11-12)出土の高環Ⅱ類は、底部と口縁部の境は沈線によって区別されるか、境の不明瞭なもので、このような差異は生産地の差異とも考えられるが、2号墳出土の高環Ⅱ類のような坏部に突出した段をなすものが古相を呈するのかもしれない。2号墳出土のものでは、体部が丸味をもつ大型の平瓶(2-20)、駒付長頸壺(2-16)、直口壺(2-18)、罎(2-19)がこの期のものであろう。

坏H蓋の法量が12cm未満で、坏H身をあわせて外面は切り難し後不調整であることから、勝手野Ⅱ期は、おおむね永井編年Ⅱ期5B小期、東山Ⅱ期古段階、坂本Ⅲ期古段階とに対応するものとみておきたい。

勝手野田期

3・5号墳では、口径10cmほどの小型化した坏H身(3-12・13、5-9・10)が確認された。おそらく勝手野古墳群における坏Hの最終形態を示すものとみられ、Ⅱ期のものとは流量が異なることから、一応、分離しておきたい。ただし、口径10cm未満の坏Hから後述する坏Iへの変化の関係が資料数が極めて少なく不明確で、生産地でも通常、両者が同時に焼成されていることから、型式差を前提とした区別に不安がある。したがって、後述の坏Iの出現の有無によってⅢ・Ⅳ期と区別せず、Ⅱ期のより古相を示すものと考えておきたい。この最小の坏Hをあえて各編年案に充てれば、永井編年Ⅱ期5C小期、東山Ⅱ期新段階、坂本Ⅲ期新段階に対応するのであろうか。

この期の特徴的な坏は、坏Iと呼称する1・4号墳出土の坏に代表される坏H蓋を逆転させたような形態をもつ坏身で、セットとなる蓋を伴わないのが特徴である。坏Iは他に2・3・5・10号墳で出土し、大半の古墳がこの種の器形を有している。播磨・丹波・但馬地域などで、古墳時代以来生産された坏Hを受け継ぐ器形として、少なくとも奈良時代前半までは大きく器形を変えずに存続する。この種のもは、坏Gとして扱われることもある²⁰。宝珠つまみを付け、身受けの返りをもつ蓋とセットとなることを基本とする坏Gの代用器種と考えられるが、セットとなる蓋が存在しないこと、形態的な特徴が異なることから、坏Gとは異なる器種とみるべきである。こうしたことから、坏Gと区別するために坏Ghと呼称されることもある²¹が、Ghとの呼称は大文字のGが優先され、坏Gの一形態としてのH形態と理解されるので、坏Gとは区別すべきであるという趣旨から、坏Gもしくは坏Hとは区別し、旧稿でも呼称したように便宜的に坏Iと呼ぶことにしたい²²。この坏Iと形態の異なる扁平な底部から屈曲して外上方に真っ直ぐ延びる口縁部をもつ坏が少数存在する。坏Gは当地域では出土量が限られており、一般的な器形ではないようである。宝珠つまみを付け、返りのある蓋を伴う基本的組合せを前提として坏Gと呼称されるが、勝手野古墳群ではセットとなるべき蓋が出土していないことから、仮に坏Gとして坏Iと区別しておくことにとどめたい。なお、勝手野古墳群の北側の至近に位置する毛無山3号墳、栗田白雲谷古墳出土の坏は宝珠つまみの付く蓋がセットとなる坏Gが主流で、少数の坏Iが伴う須恵器組成となっており、勝手野古墳群とは異なる組成を有していることが注意され、当地域では、坏Iの出現にやや遅れて坏G出現することを示している可能性がある。

坏H蓋とそれを逆転させてような坏Iの区別は、流量の大小を除けば、形態、製作技法とも大差ないと理解される。坂本古墳群Ⅲ期では坏Iの可能性も考慮しながらも、多くのこの種の器形を蓋と考えられていることは、区別が困難であることを示している。製作技法では、天井部(底部)外面を回転ヘラ切りそのまま調整するのが基本で、内面を仕上げナデを施すものや外面を部分的に補助削りやナデ調整するものがあるなど両者の製作手法に大きな差異は認められない。しかし、勝手野古墳群出土の坏Iは、坏H蓋の口径を上回るものがなく、底部が坏H蓋に比べて扁平で、口縁端部が内彎気味に屈曲するなど、坏H蓋とは流量・形態を異にする特徴を有しており、分別が可能であると考えられる。したがって、両者の区別は困難なものも含まれているものの、坏Hの存在する古墳と坏Iが確認できなかった古墳があり、両者の古墳間に先後関係があったと考えることが妥当であろう。なお、坏Hの存在する古墳における坏Iの分別は、形態的特徴と口径から坏Iを分離した。古墳群出土の坏Hのうち最小のものは、3号墳出土の口径9.6cmの坏H(3-13)で、これが最小の坏Hであるとすれば、口径が1cm前後の坏Iは坏H蓋となる可能性を考慮する必要があるが、1・4号墳の様相からすれば坏Iであったと考え

ておきたい。勝手野古墳群出土の坏Iは、口径9.1~11.4cmのものがあるが、口径10cm、器高3.5cm前後のものが多い傾向がある。1号墳の提墩は勝手野古墳群出土の提墩では法量が大きく、4号墳で共伴する平敷が扁平で肩部が屈曲する後出するタイプであるなど、坏Iに型式差が存在することが十分に予想されるところである。坏Iは一般的に器形変化が顕著でないが、口径の大型化、器高の扁平化の傾向がみられると考えられる。ただし、1・4号墳において型式分類できなかったことから、坏I・坏GはⅢ期新相としてまとめることとどめ、永井編年のⅢ期1A~1B小期、東山Ⅱ期新段階~Ⅲ期、坂本Ⅳ期に対応する可能性が高いとしておきたい。

以上のような須恵器の変化が首肯されれば、勝手野古墳群出土の須恵器は、概ね7世紀代にあたと考えられる。最古期のものは、石室構造を加味すれば、3号墳下層出土の一群であり、長脚2段透かしの高坏、透かしをもつ壺など古い要素を示すものを含むものの、坏Hでは少数のものを除き、基本的に回転ヘラ削り手法がみられないことから、永井編年のⅡ期4B小期とみるよりは、4C小期に対応するとみるべきであろう。一方、勝手野古墳群出土土器の下限は、再利用品を除けば、分類できなかった坏Iのうちの一部と2号墳の肩部が屈曲する高台付長頸壺(2-17)などから、永井編年Ⅲ期1B小期よりさらに下降すると考え、7世紀後半代まで造営されていた可能性を含んでいるといえよう。

3 築造過程

発掘調査を実施した8基の古墳から出土した須恵器の検討から、勝手野古墳群は概ね7世紀代の造営になると考えられた。石室構造は3号墳が右片袖式横穴式石室であることを除けば、他の古墳はすべて無袖式横穴式石室を埋葬施設としており、石室構造からも矛盾はない。また、各古墳の墳丘間で切り合い関係があるものが存在していることなどを加味して、各古墳の築造順序を考えてみたい。

墳丘規模・石室構造及び出土遺物からみて、勝手野古墳群の盟主的な位置にある3号墳が、他の古墳に先立って築造されたとして間違いないであろう。他の7基の古墳は、すべて無袖式の横穴式石室に変化するが、出土須恵器から7号墳と5号墳が3号墳に後続して築造されたことが考えられる。ただし、出土須恵器からすれば、その時間的差はあまりなかったであろう。これらの3基の古墳は、山麓斜面部に間隔を空け、ほぼ等間隔に築かれていることも注意される。

次いで、坏Hをもつ2号墳が築かれたとみられる。また、出土遺物が少なく明確な根拠を示せないが、石室奥壁基礎石の構造からみて、8号墳も2号墳とはほぼ同時期である可能性を考えたい。なお、比較的早い時期に築造された2・3・5号墳が、家形石棺を伴っていることも築造時期を反映していると考えたい。

1・4・6号墳は、墳丘の切り合い関係、石室奥壁構造、出土須恵器からみて、先の不明確な8号墳を含んだ4基に遅れて築造されたのであろう。また、不確かな出土遺物ではあるが、10号墳もこの3基と同時期である可能性がある。特に、装飾付須恵器の出土した6号墳が最も遅れて築造された可能性があることは、第3節の装飾付須恵器の項で触れることにしたい。

このように考えることができれば、調査を行った8基の古墳は、3グループからなっていたとみることができるとはなからうか。すなわち、3号墳の築造を端緒として、まもなく5号墳と7号墳が築造され、その後、2号墳と8号墳、最後に1・4・6号墳が築造されたと想定できる。とすれば、いささか付率強付会への感は免れないが、各古墳の築造位置から、3号墳→8号墳→4号墳、5号墳→2号墳→6

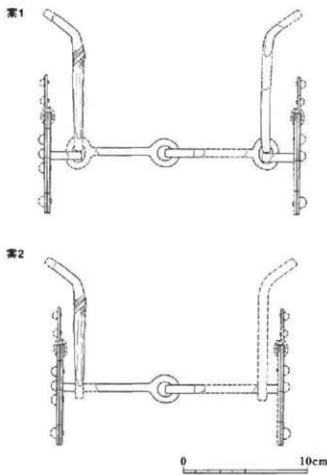
号墳、7号墳→1号墳の変遷があったとしておきたい。このように机上の想像を交えて想定できれば、各グループは、基本的に山麓斜面→段丘面→山麓斜面と築造地点を折り返して、築造位置に一定の規則性が存在したことが読みとれる。

以上のことを再整理すれば、未調査古墳を含めた勝手野古墳群の11基の古墳は、4つの家族単位が、古墳時代後期後半にあたる7世紀初頭以降から築造活動を開始し、各家族が継起的に7世紀後半まで、2～3基を順次築造していったのであろう。

第3節 3号墳出土の馬具

今回の調査のうち、注目される遺物の一つに馬具がある。馬具は3・5号墳の2基から出土しているが、特に、3号墳からは、金銅張馬具がほぼ一式で出土した。本節では、3号墳出土の馬具を中心に、近年の研究成果を参考にしながら触れておきたい。

3号墳出土の馬具には、金銅張板状鏡板付轡・金銅張鞍金具・轡・金銅張杏葉・金銅張雲珠・金銅張辻金具・金銅張革金具などがある。5号墳出土の馬具には、轡の銜残片・鞍金具・鞍具・革金具がある。



第177図 鏡板付轡復原案

3号墳出土の馬具のうち、特に注目されるものは、立間部の構造を除いて、ほぼ同形の意匠をもつ共づくりの金銅張鏡板と杏葉で、裏面に銜連結のための環状金具が取り付けられているものが鏡板である。文様の意匠は、例をみないもので、左右対称に5箇所突起をもつ楓葉形を呈し、突起方向に楕円形状の凹文部を開けている。両者は共づくりとして差し支えないが、立間の構造に大きな相違点がある。鏡板は方形の立間に丸味をおびた三角形の立間孔を開け、縦2銀の方形吊手金具を架けて面繫と結ぶ。杏葉の立間は、直接に縦2銀で銜留構造で、革帯を介して雲珠に繋がるのであろう。また、鏡板は4銀、杏葉は立間銀を除くと3銀で地板と文様板が接合され、杏葉には、銀の打たれた部位に違いがあるものがあり、銀数とともに製作上の簡略化が著しい。

ところで、楓葉形の鏡板が取り付けられる轡は、構成する各部品が石室内

の異なった場所出土し、また、それぞれの部品の残存状況もよくないことから、その組合せは推定復元にならざるを得ず、おおむね2案が想定されるであろう。

まず、出土した轡の構成部品が1セットであるという前提にたてば、復元案1のようになるであろう。この復元案1は、鏡板裏面に取り付けられた別づくりの銜との連結用の環状金具に、銜外環が連結されるとみる場合で、鏡板と銜と引手の連結方法について分類した大久保余々氏のいうB型¹⁹にあたるかと考えてよい。この復元案1では、出土した轡の各部品に過不足なく復元できるものも、以下のような問題点が生じる。3号墳出土の鏡板には、大久保分類のB型の連結方法をとる鏡板の特徴とされる連結環を接合するための表面中央の半球形の突出部、あるいは、規塚古墳例のような文様板が中央に向かって緩やかに高まるような形態を示さず、鏡板の側面観が扁平であることは、B型の連結方法をとる鏡板の範疇から逸脱していると考えられる。さらに、引手軸の形状が左右で異なっていることは補修と考えられなくもないが、違和感があるようにも思える。

3号墳出土の鏡板に裏面に付く環状金具は、東定塚古墳出土の花形鏡板例²⁰、芥内37号横穴出土の刺葉形鏡板例²¹のように、文様板接合前に金具の先端を叩き潰すことで、極めて平滑にかしめて取り付け、文様板には全くその痕跡をみせないように接合されているとみられることから、端部に突起を作り出し、地板に穿たれた連結孔にかしめて取り付けられているとする大久保分類のC型2式にあたりと想定できる。とすれば、この鏡板裏面に取り付けられた環状金具は銜外環であり、復元案2で示したようになるだろう。

3号墳の鏡板・杏葉がどの系統に属するものであるのか決しがたいが、3号墳初葬の年代観からみても、復元案2で示したように、鏡板裏面に直接、銜外環先端をかきつけて接合する方法が採用されているとみた方がより妥当性が高いのではなかろうか。ただし、この場合には、3号墳出土の轡部品のうち、銜環もしくは引手環かとみられる部品(72もしくは73)が、復元案2の組合せでは不要なものとなり、はみ出してしまうことになる。したがって、少なくとも別にもう1組の轡が存在したと想定しなければならぬ。このような考えに立てば、引手壺側の軸の残片(74)に捻りがみられないことから、復元案1で示した左右1組の引手ではなく、2種の引手(74・75)は、それぞれ別の轡のものともみた方がよいだろう。後世の再利用、攪乱等によって、その他の轡部品がすべて失われているということになり、やや消極的であるという観が否めないが、本報告では二つの復元案を示し、復元案2の方が、より妥当性が高いのではないかと指摘しておくに止めたい。

この鏡板・杏葉の意匠を含めた系譜を考える上で想起される杏葉の形式は、心葉形杏葉・花形杏葉・刺葉形杏葉の3種類であろう。3号墳出土の杏葉・鏡板の系譜は、にわかには決し難いが、桃崎祐輔氏は、この鏡板と杏葉を刺葉形のなかで位置づけ、地板+鉄製紋様板+金銅版・銀板被せタイプであるD型に分類し、神奈川県・らちめん古墳→勝手野3号→島根県・放れ山古墳の系譜を考えられている²²。また、鏡板・杏葉の共づくりの出現をTK209型式とし、TK217型式までみられると指摘されている²³。刺葉形杏葉は意匠が多様であり、勝手野3号墳出土の鏡板・杏葉を直ちに刺葉形杏葉とするには、さらに検討が必要であり、心葉形・花形・刺葉形杏葉の3種がどのような関連をもって製作されたのか今後の課題としておきたい。

第4節 6号墳出土の装飾付須恵器

6号墳前庭部の左右から出土した2個体の装飾付須恵器は、出土状況からみれば葬送儀礼の復元、脚付壺の形態的特異性、小像群の情景構成の意図、製作時期など、従来の装飾付須恵器観を覆すような様々な情報を提供した。本節では、これまでに蓄積された装飾付須恵器研究を参考にしながら、勝手野6号墳出土の装飾付須恵器の特徴について記すことにしたい。

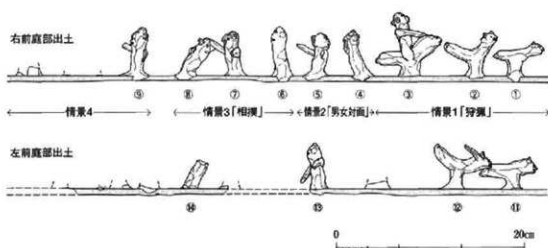
2個体の装飾付須恵器は、器台形の長い筒形の脚部に広口の壺を付け、壺肩部に突帯を廻らせてその上に人物や動物からなる小像で飾っている。柴垣勇夫³⁰⁾、山田邦和³¹⁾両氏の分類にしたがえば、胴部突帯（もしくは鐙状突帯）をもつⅡ形式、脚部は長脚であることからⅠ形式、装飾は小像のみで構成されるb形式ということになり、Ⅱ-1-b形式の装飾付壺に分類される。

この装飾付壺は6号墳前庭部から出土し、特に右側の壺体は据え置かれた位置が特定でき、その他の破片の出土状況から、装飾付壺が石室前庭部の左右に樹立され、石室ひいては被葬者を護持する使命が与えられていたと考えられる。柴垣勇夫氏は6号墳の装飾付壺が墓前祭の祭祀具に用いられたもので、墓前祭の後に石室内に副葬される場合と、墓前祭のままそこに据えられた場合があったと考え、6号墳の場合は後者にあたる事例であったとする³²⁾。山田邦和氏は勝手野6号墳の「装飾付須恵器は、現実の生の世界と横穴式石室内の死の世界とを分かち標識として、または邪悪な霊に死者の安息を妨害させない呪力を発揮するものとして考えられていた」可能性を指摘する³³⁾。6号墳の装飾付須恵器の出土状況は、この種の土器が一過性の葬送祭祀具ではなく、永遠に被葬者を護るための役割も付与される場合があったことを示しているのだろう。

第2点目は、この装飾付須恵器が、形態的特徴が前例のない極めて特異なものであったということである。壺の口縁部は明らかに脚部として製作されたものを転用している。装飾付須恵器の製作者は、本来、長い脚部を付ける意図がなく、短い脚部を付ける予定であったが、製作途中で脚部を長脚に変更し、先に製作していた短い脚部を口縁部に転用した可能性も捨てきれない。また、壺底部も意図的に省略され、壺としての本来的に具有する貯蔵具としての機能を全く果たしていない。底部が省略された装飾付須恵器例は、京都府福知山市・牧正一古墳出土のⅡ-3-cの装飾付壺³⁴⁾があり、本例が2例目となる。牧正一古墳は復元長約34～37mの前方後円墳と考えられ、前方部石室からTK43～TK217型式の須恵器に伴って2個の装飾付須恵器が出土している。底部を省略する装飾付壺が一般的ではないとしても、その存在が確認できる事例である。一方、間瀬直子氏は播磨という地域性を考慮していわゆる出雲型装飾付壺（山田分類Ⅲ-5類）との関連を示唆している³⁵⁾。出雲型装飾付壺は壺底部を省略し、胴部にも穿孔を開けるなど、実用の器とは乖離した独特の形態として発展している。6号墳や牧正一古墳例が、出雲型装飾付壺との直接的関連性があったかどうかは置くとしても、装飾付壺が仮器として認識され、本来もつべき機能が省略されるものが存在していたことは間違いないであろう。

壺胴部突帯上には、人物・動物からなる小像が飾られ、明らかに伝承された物語性を有した複数の情景を構成している。左前庭部の小像は残存状況が悪いことから、小像の構成は、右前庭部の壺体に頼らざるを得ないが、同様の構成部分と異なる構成部分が存在しているのではないかと判断できた。

小像の個別の造形については、第4章第7節で触れたとおりであるが、人物像の顔面の表現に相違があり、隆鼻した人物、隆鼻を付けず鼻孔のみを表現した人物、隆鼻も鼻孔も表現されていない人物が存



第178図 装飾付須恵器小像展開図

在することである。右個体では8体の人物像のうち、隆起させた鼻を有する人物は、③・④・⑦・⑨・⑩の5体、隆鼻を付けず鼻孔のみを表現した人物は⑧の女性像、鼻が全く表現されない人物像が⑤・⑥と右個体の⑬の3体である。また、口唇の表現のない人物像が⑪にみられる。頭頂部にも表現の差異がみられ、尖り頭の人物が④・⑩の2体があり、特に⑩は明らかに突起物を付けている。以上のようにみれば、鼻と口によって人物像性格の軽重が3パターンで表現されていると考えられる。すなわち、隆鼻と口唇を併せ持つ人物が小像群からなる情景の主たる人物像、口唇を有するが隆鼻のない人物もしくは鼻孔表現のみの人物が副次的人物、鼻の表現を全くもたない人物が従属的人物と見なすことができる。このように考えることができるのであれば、右個体は少なくとも4つの情景から構成されていたとみてよいだろう。

情景1

①猪・②牡鹿・③騎馬人物から構成される。一般的には「狩猟」の情景と理解される。右個体は騎馬人物像を欠損しているが、牡鹿の後方にある洞落頭の大きさからみて、騎馬人物像であった可能性が極めて高い。

牡鹿には矢が刺さり、騎馬人物の高く掲げた左手には弓を携えていたと考えたい。間瀬直子によれば、鹿・猪・犬・人で構成される情景は少なくとも10回、弓矢持乗馬人が6例あるという¹⁰⁾。

情景2

④男性・⑤女性から構成される。両像は向かい合っていて、「男女対面」の情景である。男性は女性にすり寄るように前傾し、女性は後ろ手に造形されている。男女対面の情景は、間瀬氏の集成によれば5例が存在する。対面する小像のうち、女性像の腕が後ろ手になっているのは何を表しているのであろうか。後ろ手については、『古事記』に伊弉諾岐命が黄泉国を訪れた時に、八柱の雷神や1,500人の黄泉軍に追われ、十拳劍を抜いて、「後手」に振りながら逃げ帰ったという神話、また同じ『古事記』に火遠理命が、失った釣り針を海神の宮で見つけ、兄火照命に返すときに呪言とともに「後手」に与えたという神話が見え、後ろ手が相手を忌み嫌う所作あるいは相手を困らせる呪術であったのではないかと解釈される。さらに解釈を進めれば、山下隆次氏がいのように「人間と神や悪霊、あるいは生者と死者な

どの間では物品の授受や何らかの動作をする場合、邪気や穢れが他方に移動・伝染するを避けるために後手で行うという後手の呪術を示している」⁴⁹ことを示しているのではないだろうか。

左側体では、この情景が存在したのかどうかは不明である。

情景3

⑥組み合う男性⑦・⑧の男性3像から構成される。一般的には「相撲」の情景と解釈されている。組み合う（腕が欠損しているため、詳細は不明であるが、実際は組み合っていないとみられる。ただし本小像群とは別に、両腕先端が接合している腕片が存在しているので、左側体の小像は組み合っていた可能性が高い。）組み合う2体の男性像は明らかに優劣が存在し、鼻の表現のない人物⑧は、隆鼻の人物⑦の右手によって頭部を押さえつけられ、今にも倒れそうに造形されている。その右傍らに表現の乏しい男性像が、組み合う2体を見守っているようである。「行司」とみてよいだろう。左側体の⑧は頭部を欠損しているが、体部は大きく前傾し、⑧と対応するとみられることから、左側体でも同じ情景が存在したと考えられる。ただし、右側の「行司」は組み合う2体から離れすぎる嫌いがあり、右側の欠損部分あるいは左側に配置されているのかもしれない。

「相撲」の情景は、岡壁葎子氏によれば本例を含めて5例⁵⁰とする。市村高規氏は、勝手野6号墳を除いて6例⁵¹を挙げ、本例を含めると7例ということになる。うち、3例が兵庫県播磨地域で出土し、他に高槻県・鳥取県・岡山県・大阪府に各1例あり、過半近くが播磨出土であることは、岡壁氏がいうように、『日本書紀』垂仁天皇7年条にみえる野見宿弥と當麻蹶速の相撲起源伝承に通じ、特に、須恵器生産に関与した出雲人である野見宿弥が『播磨国風土記』排保部条に記述がみえ、出雲と播磨の交流を示す情景であったことを示しているであろう。

情景4

残存状況が悪く、どのような小像構成となっていたのかは不明であるが、大きく右腕を挙げた男性像が中心人物の一人であるとみられることから、少なくとももう一つ以上の4情景があったことは間違いない。

このように6号墳の小像群が示す情景は、「狩猟」・「男女対面」・「相撲」・「不明」の4つの情景から構成されていることが明らかとなった。とすれば、これまで知られている小像群で構成される情景のうちの、典型的なものが表現されているということになる。播磨地域に例の多い相撲・狩猟・琴の演奏（歌舞音曲）といった情景の意味は、柴垣勇夫氏は、『日本書紀』顯宗天皇即位前紀、『播磨国風土記』美濃郡条にみえる億計・弘計の2王子に関する伝承記事にみられるように、播磨地域に伝承された中央政権と地域集団間の服属儀礼や皇位継承説話に基づくもの⁵²であるとし、播磨地域とその周辺地域に、これに関係する装飾付須恵器の分布が多くみられることと関係しているであろう。しかし、現在のところ、播磨加古川流域では、15遺跡から17個体の装飾付須恵器の出土が知られている⁵³が、小像も持つ装飾付須恵器は確実なものとして、勝手野6号墳のほか、上三草7号墳の2例にすぎず、下流域では小壺を付ける装飾付壺、上流域では子持器台の出土が多い傾向がみられる。一方、明石川流域や市川・排保川流域などの西播磨地域では、小像を付ける装飾付須恵器の割合が高く、地域的な格差が存在しているらしい⁵⁴。

最後に、6号墳の装飾付壺の製作年代について触れてみたい。6号墳は石室の残存状況が悪く、出土遺物も限られているが、石室規模・出土遺物ともに、装飾付須恵器を除くと、特筆されるものはみられ

ない。出土遺物では、型式変化の標識となる須恵器坏が出土していないことから、共存する須恵器から遺存年代を判断することは難しいといわざるを得ないので、出土遺物以外の要素から築造時期を考えてみたい。

その特徴の第1点目は、各古墳墳丘間で切り合いがあり、先後関係が存在していることである。各古墳との関係では、第4号墳でも触れたとおり、6号墳の弧状溝が5・7号墳の弧状溝を削っていること、6号墳の墳丘が1号墳の溝を埋めて築造されていること、2号墳の溝が一定程度埋没した後に、裝飾付須恵器の破片が堆積していることなどが判明している。したがって、こうした調査結果からすれば、6号墳が周辺の古墳に遅れて築造されている可能性が極めて高い。さらに、6号墳は先の4基の古墳間の狭小な空間に無理に押し込められたような位置に築造されたため、開口方向が大きく異なっていることも築造が後出したためと考えられる。第2点目は、無袖式横穴式石室内の中央部奥壁寄りに組合式の箱式石棺が設置されていることである。この種の石室内に設置された小型の箱式石棺は、播磨地域で多くの例が存在することが知られていて、家形石棺と共存している古墳もある。ところで、勝手野古墳群では加西市高室産とみられる家形石棺が2・3・5号墳で検出され、6号墳を除くその他の4基の古墳では、家形石棺・箱式石棺をもたないことが判明している。この3基の家形石棺を伴う古墳は、確実に追葬である3号墳を含め、すべて須恵器坏Hが出土していて、家形石棺をもたない古墳は、7号墳以外、基本的に坏Iしか伴わないという傾向が指摘できる。このことが首肯できれば、家形石棺を伴う古墳は、家形石棺をもたない古墳に比べて、築造時期が先行していたと判断される。そうした意味では、6号墳が家形石棺ではなく、付近で産出する石室石材と同じ凝灰岩質滑結凝灰岩を用いた箱式石棺であることは、須恵器坏H消失後の築造であることを示していると考えられる。

一方、裝飾付須恵器自体の形態も、すでに第4章第7節で述べたとおり、壺淵部肩が屈曲すること、親器の調整手法、文様に加飾に丁寧さを欠くこと、さらに、焼成が軟質であることなども、他の長脚である1形式の裝飾付壺より後出要素を含んでいて、出土須恵器の項で検討した勝手野日期に含まれるものであるとしてよく、製作時期が日期に下ることは間違いないであろう。

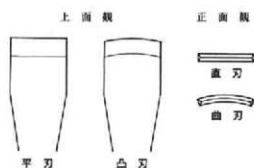
第5節 3号墳出土家形石棺底石に見られる加工痕

1 はじめに

勝手野古墳群では、2・3・5号墳から家形石棺の底石・破片等が出土した。残念ながら石棺全体を復元しうる資料は得られなかったが、3号墳においては、ほぼ完形をとどめる底石と、破壊された罫石・小口石の一部が出土した。これらの資料には、石材切り出し及び棺体整形に伴う加工痕が、鮮明に残存している。発掘調査時点においてすでに、これら加工痕が、複数の工具使用によるものであることを認識していたが、報告にあたって、比較的遺存状態の良い3号墳出土の底石および罫石・小口板の破片を精査したところ、工具痕の種類・使用方法について、いくつかの知見を得ることができた。以下では、石棺表面に残る工具痕をもとに、石棺材の採掘、石棺の整形についてまとめておく。

2 石材

勝手野古墳群で家形石棺に用いられた石材は、古墳群から北西に直線距離で15km離れた、加西市高室



第179図 工具刃部の形態

3 石棺材に見られる工具痕の分類と特徴

工具刃部の形態

石棺表面にみられる工具痕を分類するにあたって、観察した要素は、工具刃部の幅と形態及び使用方法である。その結果、工具刃部の形態には、平面形と正面形という2種類の要素が存在するものと推定された(第179図)。

刃部の平面形は、加工痕の形状からは直線的な刃部と思われるものを直刃、刃部中央が凸形を呈するものを凸刃とした。また正面形は、刃部が平坦な平刃と、刃部が彎曲する曲刃が存在したと思われる。したがって実際の加工用工具刃部の形態は、この2種の要素を相互に組み合わせた4種類ということになる。ただし全ての加工痕において、このような分類に合致する工具刃部の形態が判読できるわけではない。実際には、曲刃であっても平刃か凸刃かの判断ができない場合も少なくない。したがって実際の観察では、これらの要素のうち、加工痕から判読可能な要素のみを抽出するにとどめていることを付記しておきたい。また、この分類からは、工具刃部の厚みという重要な要素が欠落しているが、これを石材に残る加工痕から読み取ることは、極めて困難である。したがって今回は特に判断が可能であった場合を除き、言及しない。

また、この分類は観察の結果のみを分類したものであって、使用による工具そのものの変形の可能性や、使用方法の微妙な変化による、工具痕の形状の変化を十分に読み取れているかといった問題は考慮していない。しかし、ここでの主要な目的は、石棺製作にあたってどのような種類の工具がどのような段階で使用されたかを検討することであるので、さしあたり上記のような問題は捨象しておく。

工具痕の観察と分類

3号墳出土石棺の検討により、識別された工具痕は、下記のとおりである。

工具痕1 (図版82-9)

工具痕の幅 20~25mm

工具痕の深さ 1~1.5mm

で採掘されたと思われる細粒の凝灰岩である。これは「高室石」として知られ、ごく細粒の部分と粗粒の部分が雜理をなす、比較的軟質の石材である。今回、石棺に用いられた石材によって比重を測定した結果、比重は平均約2.2g/cm³であった。

兵庫県産の石棺材としては、高砂市の龜山石が著名である。龜山石は流紋岩質の溶結凝灰岩であり、硬質であるが、高室石はこれよりはるかに軟質で、溶結も顕著ではない部分が見られる。したがって加工の難度を比較すれば、龜山石よりはるかに平易であったと思われる。

刃部の正面形 直刃

刃部の平面形 平刃ないしわずかな凸刃

工具痕の分布 棺床面に分布する。加工方向に企鵞性は認められない。棺床面の凸部に密集する傾向が明らかである。

想定される工具の使用方法 棺床面に垂直に近い角度で打ち込まれ、その後片側に工具を倒すことにより、石材を削り取るのが典型的。刃部の厚みは1～1.5mm程だろう。加工の方向に、企鵞性は認められない。

想定加工意図 棺床面に特徴的に分布すること、工具を打ち込んだ周辺、石材表面が剥離させられていることから、棺床面の整形が主たる目的であったと思われる。棺床面の凸部に密集する傾向も、この想定と矛盾しない。

工具痕2 (図版81-1・2)

工具痕の幅 45～48mm

工具痕の深さ 1mm前後

刃部の先端形 わずかに曲刃か

刃部の平面形 平刃

工具痕の分布 側板・小口板の溝内

想定される工具の使用方法 溝に直交ないし平行する方向で、加工が行われる。使用法は工具1と近似しており、加工面に垂直に近い角度で打ち込まれ、その後、工具を一方に倒すことで、石材表面を削り取っている。同一方向で連続的に使用される例が多い。

想定加工意図 溝底面のみにもみられることから、溝底面の整形を目的とすると考えてよい。工具の使用法からみて、目的は工具痕1と同様のものであったろう。ただ、同一目的ながら溝内のみ、異なった工具を用いた理由は判然としなない。

工具痕3 (図版82-6)

工具痕の幅 20～22mm

工具痕の深さ 浅い

刃部の先端形 直刃

刃部の平面形 平刃

工具痕の分布 棺右側面(奥壁側から後述側向き)および底面

想定される工具の使用方法 棺体に浅い角度で刃部を当て、工具の後部をハンマーで連続的に打撃している。加工はほぼ上→下の方向で行われ、加工単位は横方向に移動している。工具痕の幅と刃部の形態から、工具痕1と同一工具であった可能性もあろう。

想定加工意図 棺の表面を削り落とすことが、主目的と思われる。ただ、分布範囲が棺全体からすると狭い範囲にとどまること、工具痕3自体が見かけ上、粗雑であることから、仕上げの整形が行われる以前の、加工であった可能性が高い。工具幅という要素を除けば、表面の整形が行われていない棺底部のみにもみられる加工痕7に近似している。

工具痕4 (図版81-3・4)

工具痕の幅 7～8mm

工具痕の深さ 浅い

刃部の先端形 曲刃の彫刻刀形

刃部の平面形 不明

工具痕の分布 棺右側側板溝の、内側面の一部にもみられる。

推定される工具の使用法 曲刃の彫刻刀形の工具と思われる。彫刻刀と同様に、石材面に刃部を当てて、削り落としを行っている。ハンマーによる打撃は行われていない。

想定加工意図 側板溝の側面を整形した痕跡である。今回識別した中で、最も刃部幅が小さく、彫刻刀形の工具であったろう。側板を正しくはめ込むための、微細な石材の整形に用いられたものであろう。

工具痕 5 (図版82-8)

工具痕の幅 40mm前後かやや不明瞭 **工具痕の深さ** 浅い

刃部の先端形 直刃 **刃部の平面形** 平刃

工具痕の分布 棺右辺

推定される工具の使用法 平坦な加工が行われている。打ち込みか？

想定加工意図 棺体の整形（側板溝外側上面の厚みを減らす効果があったものと思われる。）

工具痕 6 (図版82-7)

工具痕の幅 30～35mm **工具痕の深さ** 浅い

刃部の先端形 曲刃 **刃部の平面形** 僅かな凸刃の可能性はあるが不明

工具痕の分布 棺左辺

推定される工具の使用法 加工面は平滑であることから、打撃を行わず、切削されたものであろう。

想定加工意図 いわゆる手斧状の工具を用いた加工である。連続した緩やかな凹面がなす、液状の加工痕をみせる。棺体の仕上げ整形を目的とした加工と思われる。

工具痕 7 (図版82-5)

工具痕の幅 15～16mm **工具痕の深さ** 数mmから1cm未満

刃部の先端形 直刃 **刃部の平面形** 平刃

工具痕の分布 棺体下部

推定される工具の使用法 連続的打撃を行うことによって、石材に対して斜めに打ち込んでいる。直刃・肉厚の籃状の工具であろう。

想定加工意図 粗く深い加工痕を呈し、棺底面に特徴的に分布することから、石材の切り出し、岩盤の掘削の際に残されたものと思われる。棺底面は、この他の加工痕跡をとどめないことから、首肯されよう。

工具の種類と使用方法

観察により、7種類の工具痕を識別することができた。同一工具であっても、使用方法の違いによって、異なった工具痕を棺材上に残す可能性があることから、工具痕の種類数が、直ちに工具の種類数を示すものではない。ただし、工具痕の幅のみから考えても、少なくとも4種類以上の工具が用いられたものと思われる。このような加工に用いられた工具は、古墳・遺跡における出土例がなく、近世～近代の石工が用いた工具から推測するほかない。

工具の使用法については、必ずしも確定的な見解を提示できるわけではない。しかし、工具痕自体の観察からは、大別して3種類を想定しうる。

第1は、連続する工具痕内に、工具の加工方向に対して直交する微細な段差が多数認められる例である。これは、工具後部をハンマーによって、連続的に打撃した結果である可能性が高い(工具痕3・7)。1回の打撃によって石材が剥落し、これを繰り返すことで工具先端が停止した位置に微細な段差が多数形成されるということは、鑿の使用の際に我々も体験できる。

第2は工具痕1・2の例である。この場合は、工具刃部が垂直に近い角度で石材面に打ち込まれ、その後、工具を倒すように動かすことで石材表面を剥落させている。工具痕1・2は、工具の相違はあるものの、加工方法は近似している。

第3は工具痕そのものが平滑である例で、工具が打撃を受けず、刃部が比較的なめらかに移動したことを示すものと思われる。このような加工は、表面の削り落としの際に行われており、石棺材が軟質であるがゆえに可能な加工方法と思われる。

石棺材にみられる加工痕については、和田晴吾氏による研究がある⁴⁾。今回識別した加工痕のうち、上述の使用法1は、同氏分類による「ノミ連打法」に、同じく3は「チョウナ削り技法」にそれぞれ相当するであろう。ただし、工具痕3と7とは、工具の幅、工具痕の深さが異なっている。幅が狭く工具痕の深い7では、工具に対してより大きな打撃力が加えられたものと推察される。2のような工具の使用法は、「ノミ叩き技法」に包括されるであろう。

これらの加工方法は、近代の民俗例を参照したものであり、今回識別できた加工痕及び推定される工具の形態に必ずしも合致するものではない。加工対象となる石材の性質により、また、地域的な伝統により、工具の形態・使用方法も変化する可能性は否めず、こうした観点に立てば、今後生産地単位での加工技術の復原が必要となるであろう。

4. 底石石材の切り出し方法

底石石材は、ほぼ業理に沿って切り出されている。きわめて平坦な堆積を示す凝灰岩を、ちょうど地層のままに切り出したという印象を受けるほどである。棺底は平底で、側方のみが楔状に切り込まれた形態を示す。底面には工具痕が全く認められず、業理に沿って剥落した状況を示していることから、原石材の獲得は、まず凝灰岩路頭の上面から地面を掘るように、コ字形ないし方形に溝状の掘削を行ない、さらにその内側を楔状にえぐり込むように掘削し、その後、石材全体に力を加えることによって、層理面から石材を剥離させたものと思われる。このような切り出し方法は、これまでに二上山山麓の石切場遺跡等で知られており⁵⁾、和田晴吾氏により層割技法と呼称されている⁶⁾。業理が明瞭で、業理面に沿って掘削しやすい高室石の場合、もっとも容易に板状の石材を切り出す手法であったろう。

棺底側方に見られる粗い工具痕7は、楔状に岩盤を掘り込んだ際のものである可能性が高い。

小野市・加西市周辺では、これまでも多数の石棺材が知られており、家形石棺の形態分類も行なわれているが、加工痕についての検討は未着手の領域であった。これは本地域における石棺の多くが、古墳から進化した状態(石棺仏など)であったため、器表面に二次的な加工を受け、また風化が進行して加工痕が不鮮明となっていたためであろう。播磨地域には、高砂市竜山と加西市高室という、石棺材産地があってともに多数の石棺を生産している。前者が溶結凝灰岩の特徴をよく示して硬質であるのに対し、後者は軟質で剥離性があるといった石材の性質が、加工・探照技術にどのように反映されているのか比較検討することが、今後に残された課題といえよう。

第6節 勝手野窯跡群の操業時期及び窯の構造

1. 生産土器の時期

現在まで、播磨地域における平安時代後半の須恵器の編年は、神出・三木・魚住の諸窯の発掘調査の成果によって編年案が提示されている。これらの審儀から、特に、椀・鉢を中心に勝手野窯跡の時期を考えた。

1号窯

出土土器の多くは鉢である。鉢は、傾きが急で、直線的に立ち上がる体部をもち、口縁端部は弛張がみられず、平坦面をもつ形態を示す。出土した大型品と小型品ともにはほぼ同形態であり、このような形態は東播磨の須恵器の編年を行っている森田稔氏の編年²⁹⁾では、第1期第一段階（11世紀後半）のものとされる。

これに対して、椀は底部が高台付のものと、平高台は消失するが、見込み部にはかろうじて凹みが残るものが存在し、いずれも体部は丸味をもった形態である。これらの特徴は、森田編年では第1期第二段階（11世紀末～12世紀前半）にあたり、鉢との間に時期差がみられることになる。

しかし、近年調査が行われた三木市の久留美窯跡群の柳谷5号窯や宮の池窯などでは、勝手野1号窯のような形態を示す鉢Ⅰa'と椀Ⅰaとの共存が認められ、11世紀末～12世紀前半の時期が想定されている³⁰⁾。第5章で述べたように、1号窯の焼成が、限られたものであったとするならば、椀と鉢との間に時期差を想定すべきではないだろう。したがってここでは久留美窯跡群の編年観を採用し、1号窯の時期を11世紀末～12世紀前半の中で理解しておきたい。

2号窯

出土土器のほとんどは、須恵器椀によって占められる。形態の特徴としては、底部は平高台がかろうじて残るものと平底のものが存在し、体部はいずれも丸味をもつ。椀にみられるこれらの形態的な特徴は、森田編年では、第1期第二段階（12世紀初頭）のものである。久留美窯跡群と比較すると、柳谷5号窯と同時期であり、11世紀末～12世紀前半のものと考えられる。

3号窯

3号窯は唯一の土師器窯である。器種は、坏・鍋・小皿・椀等の須恵器の器種が混在する。

東播磨の中世土師器の編年については、いまだ確立されていない。しかし、3号窯では、須恵器椀と同様の形態・技術を示す土師器椀が出土していることから、須恵器の編年を用いることが許容されると考えている。また、三木市の久留美窯跡群では、須恵器窯で土師器も焼成されており、これらも対比資料として用いることが可能であろう。

3号窯の坏は、久留美窯跡群宮ノ池窯出土の杯Ⅱ類bと類似しており、宮ノ池窯での編年は11世紀末～12世紀前半とされている。また、椀については、勝手野2号窯出土の須恵器椀と技術・形態とも類似している。

鍋については、窯跡資料が乏しいため、消費地の資料を参考にしたい。3号窯出土の銅に類似する資料は、神戸市玉津田中道跡で、12世紀代の時期が与えられている鍋Aもしくは鍋Bに求められる³¹⁾。北播磨の編年では、1期のもものと同形態である³²⁾。

以上のような点から、3号窯は12世紀前半の範疇と考えておきたい。

第5章で記述したとおり、灰原の堆積物から、3号窯焼成は2号窯に先行するものと考えられる。しかし、両窯跡の灰原堆積物に間層を挟まないこと、出土した輪の形態・技術に差異が認められないことから、2・3号窯はほぼ同時期の操業と考えられる。

また、1号窯は、久留美窯跡群の成果を参考にすれば、鉢の形態はやや古い形態を残しているものの、輪の形態からは2・3号窯と時期差が認められない。

したがって、ここでは1～3号窯は焼成期はあるものの、概ね11世紀末～12世紀前半の中で操業されたと理解しておきたい。

2. 勝手野窯跡群の窯構造

1号窯

1号窯については、焚口の被熱部分と灰原が検出ただけで、構造の手がかりとなる窯体が見つからない。しかし、立地条件や検出状況から、窯の状況を推測してみたい。

1号窯焚き口付近は、標高39m付近の斜面に立地するが、その上方は急斜面になるため窯の構築は困難となる。この間の長さが約4mほどあることから、最長でも4～5mほどの規模であったと考えている。東播磨における平安時代後期の窯の平均的な大きさより、やや小型の窯であった可能性がある。灰原しか残存していなかったとはいえ、出土遺物量がコンテナ3箱と少量であることもこれを裏付けるだろう。

構造については、掘り込みの痕跡がほとんどないことから、地上式の窯が推測できる。地上式の窯については、平安時代後期に加古川流域及び播磨地域の窯に一般的にみられる形態であり、1号窯もそれらの特徴を踏襲している。

2号窯

2号窯は8号墳墳丘に立地することから立地上の制約があり、推定可能長は最大でも3mの小型窯であるが、窯体内に段をもつ形態である。段をもつ形態の窯は、播磨の窯跡では一般的ではなく、そのなかで、時期はやや下るが、神戸市・神出垣内2～4号窯³⁰・神出宮の裏1号窯³¹・明石市・魚住33号窯³²や三本松5号窯³³が有段式の窯としてあげられる。

段を設けるのは、もともと瓦窯の特徴であり、神出・魚住は瓦陶兼業窯・三本松窯跡は、瓦専用窯であることから、これらは瓦窯の影響を類推できるが、2号窯は須恵器焼成窯であり、瓦窯からの直接的な影響の有無は不明である。

構造では、魚住33号窯は段の高さが0.4mと高いが、それ以外は、0.1mほどと低く、2号窯の段の0.25mは、魚住33号窯に次ぐものである。2号窯は他の窯に比べて小型であったため、段で焼成部と燃焼部を区切ることによって、それぞれの空間を確保することを意図したものであろう。また、焼成部と燃焼部の区切る段は、縦斜面を利用して、熱効率を上げる機能を果たすためと考えられており³⁴、2号窯も小型窯のため、焼成室と燃焼室の境に段を設けることによって、直に火を受けず、熱効率のよい工夫を行なったのであろう。

3号窯

3号窯は、8号墳の墳丘を掘り込み、排煙部を粘土で構築している。天井部は削平されていたが、平面形でくびれている部分から焚口部分にかけて、天井を粘土で構築していたと考えられる。間仕切りが

確認できなかったため、焼成部と燃焼部の区別は判然としなない。このような形態の窯は、その縦断面形態が、昔のキセルパイプの形状に類似することから、一般的に「煙管状窯」「キセル窯」と呼称されている³³⁾。

遺 跡 名	規 模		構 造		出土遺物	時 期	遺 跡 番 号	文 献
	長軸	短軸	立地	掘り込み 間仕切り				
小野市 獅子野3号窯	0.75m	0.46m	斜面	地下式	なし	12世紀前半	1基	須恵器窯共存
神戸市 新出山1号窯	0.55m	0.45m	斜面	半地下	不明	12世紀前半	1基	須恵器窯共存か?
神戸市 新出山内6号窯	1.4m	0.4m	水平 平地	半地下	瓦で間仕 切り	12世紀末	1基	須恵器窯共存
神戸市 神出宮の裏4号窯	0.5m	0.5m	水平 平地	地上式	不明	12世紀末- 13世紀初頭	1基	須恵器窯共存 平窯とも呼ばれる
神戸市 神出中ノ谷炊火遺構	1.1m	0.6m			不明	12世紀代?	1基	不明
明石市 魚住38号窯	0.95m	0.71m	斜面	半地下式	角礫で間 仕切り	12世紀初め	1基	須恵器窯共存
明石市 魚住39号窯	1.3m		斜面	地下式?	不明		1基	須恵器窯共存
明石市 蓮久ノ谷8号窯	0.8m	0.7m	不明		なし	10世紀半ば	1基	須恵器窯共存
明石市 橋谷2号窯	直径1 mほど					12世紀代?	1基	須恵器窯共存
三田市 本郡4号窯	0.9m	0.25m	斜面	半地下	角礫で間 仕切り	12世紀	1基	単独か?

第34表 兵庫県の煙管状窯

煙管状窯の定義については諸説あるが、一般的には、円筒形の窯体中位に間仕切り（ロストル）を設けることで、上下に窯室（燃焼部と焼成部）を作る直焰式（昇焰式）の窯であるとされる³⁴⁾。煙管状窯は、瀬戸内海沿岸と九州北部に多くみられ、多くは土師器焼成窯と考えられている。

兵庫県内では、現在までに10基確認でき、特に播磨地域では検出数が多い。煙管状窯の初瀬については、今のところ、相生落矢ヶ谷8号窯が最も古く10世紀代のものとされる³⁵⁾。

また、斜面を利用して半地下式に構築されていることや灰層が形成されていることから須恵器生産の影響が指摘されている。県内についても、須恵器窯跡群内に構築されている例が多い。

近年、土師器焼成遺構についての議論が活発に行われており、検出例から煙管状窯と呼ばれているものにおけるいくつかの分類が試みられている。大きくは、構造が地上式か地下・半地下式であるか、また、燃焼部と焼成部の間仕切りの有無によって、分類されている³⁶⁾。

兵庫県内の煙管状窯についても、いくつかの形態が見受けられる。立地については、多くが、斜面に構築する半地下式もしくは、地下式の構造であるが、神出宮ノ裏4号窯などの平地に構築する地上式の窯が存在する。これらの窯は上部構造が削平されているため、内部構造は不明である。

半地下式もしくは地下式の窯については、魚住38号窯・本郡4号窯などのように、角礫や瓦で間仕切りをしているものと獅子野3号窯のように、調査時に燃焼部と焼成部の間仕切りは確認できず、内部に直接製品をつめたものの両方が存在する。

また、煙管状窯は一般的に土師器焼成窯とされるが、兵庫県内では、土師器の他に須恵器の焼成も行っている例が認められる。兵庫県の場合、今のところ12世紀代に生産のピークをむかえるようである。

このように形状から煙管状窯と呼称されているものであっても構造・生産器種ともに多様であり、構造による分類や、時期の変遷についてもより検討を進めていく必要がある。

3 生産体制

勝手野窯跡群が位置する東播磨は、奈良時代以降の須恵器生産地帯であった。勝手野窯跡群が操業していた12世紀代は、神戸市西区神出や三木市周辺、明石市魚住で多くの窯が操業していた。これらの窯は、数基～10基程度が群集して支群を形成しているとされ、多い窯跡群では100基以上存在していたとされる。これらの窯跡群では、鉢・甕・碗・瓦が生産され、生産品は広範囲に流通し、特に、鉢は広く西日本の各地の遺跡より出土している。また瓦についても播磨地域の寺院にも供給されているが、主要な消費地は平安京内の寺院である。

これらの大規模な須恵器窯跡群では、須恵器とともに土師器が生産されている。しかし、前述したとおり、大規模な須恵器生産地であっても、土師器窯は1～2基しか存在せず、須恵器との生産規模の差は歴然としている。このため、土師器生産に関しては、須恵器のような広域流通を目的とした大規模生産と違い、小規模な在地的需要に対応する生産としての位置づけを考えるべきだろう。

これを表付ける事例として、勝手野窯跡が立地する小野市委田町には勝手野3号窯同様古墳の墳丘に築かれた土師器窯が発見されている²⁰。土器の詳細は不明だが、実見した中には、勝手野3号窯と極めて類似するヘラ切りの小皿が焼成されており、立地の類似性からも、勝手野3号窯と大きく変わらない時期と考えられる。このことから狭い範囲での需要に対応した生産であったと想定できる。

一方、勝手野窯跡群の須恵器生産については、2号窯の高体規模からは、他の大規模須恵器窯跡群のような生産量は推定し得ず、灰原での遺物出土量もこれを裏付けている。こうしたことから、勝手野窯跡群での須恵器生産は、神出・三木・魚住窯などの、大規模須恵器窯跡群とは異なり、土師器生産同様、在地的な需要に対応するものと理解できる。

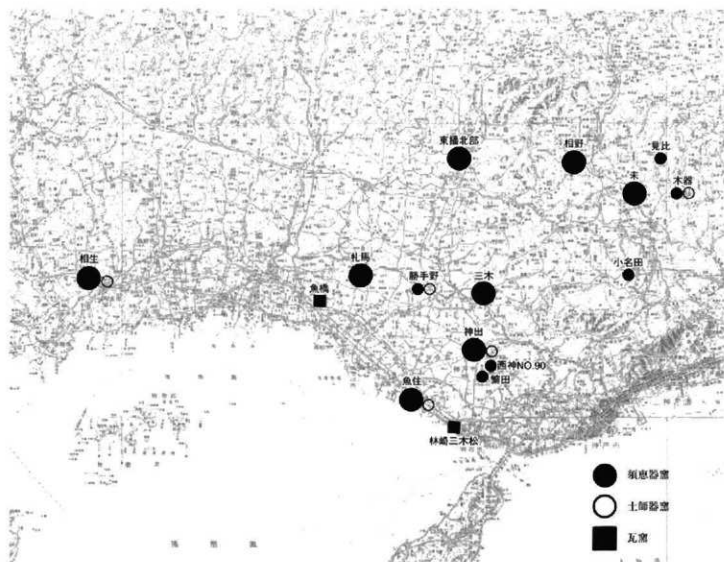
このような、在地生産型と考えられる窯は、兵庫県内においては、勝手野窯跡群の他に、紫田窯跡²¹、西神第90地点遺跡²²、小名田窯跡²³等北摂・東播磨地域に散見され、いずれも単独窯で、碗・小皿を主体として生産を行っている。これらの在地的生産を行なう須恵器窯については、12世紀後半以降、大規模生産地が流通拡大により鉢を主体とした生産に変化してゆく中で、地元の碗・小皿を分担焼成し、大規模生産地を補完する「衛星窯」という位置づけがなされている。また、その中から碗・小皿以外に大規模生産地の鉢を模倣した鉢を生産し、狭い範囲で補完すると指摘されている²⁴。

勝手野窯跡群の場合、生産量や土師器生産との関係などを念頭に置けば、広域に流通する大規模産地の生産を補完するという姿ではなく、本来、在地的なものであった土師器生産の延長上にあると考えた方が妥当であろう。勝手野窯跡群の須恵器生産は、土師器生産と同様な性格を有していたと考えている。

勝手野窯跡群の土師器生産は、技術的には、須恵器生産の影響を大きく受けながら、生産体制においては、土師器生産と同様に在地的な性格を有していると理解できよう。また、須恵器鉢・碗、土師器小皿・杯・托・鍋などがいずれも少量ずつ生産されていることは、在地的な生産の中でもより、自給自足的な生産に近いと考えられる。

このような大規模生産地が近隣に存在しても、同様の器種を在地生産（自給自足的な生産）として行っている状況は、大規模生産と在地生産の流通構造は異なっていたものと判断できる²⁵。

土師器生産を担った操業者については、近隣に集落が見つからないため、今のところ論じるのは困難である。しかし、調査例から土師器生産の場合、単独窯が多く、集落の一角に窯を設ける例が多い²⁶ため、勝手野窯跡群においても、周辺に集落が存在する可能性が高い。



第180図 平安時代の窯跡分布図

近年の研究では、中世の土器の生産について、大規模な商品生産窯と小規模生産された窯が存在するという多様性が示されている。特に、土師器生産は前述したとおり、単独窯が多く、集落内に窯を設ける例が多いため、操業者については、原則として土師器生産を生業にするような集団ではなく、一般の集落にとらえ、これらの焼成窯での生産は自家消費、つまり自給自足を目的とした生産であると指摘されている³⁷。このことは、技術の広域化と普遍化の結果ともいえるだろう。

概ねすべての器種を、小規模生産で自給自足的に生産していた勝手野窯跡群は、大規模生産とは異なる在地生産の一例として、貴重な資料といえよう。

〔注〕

- 1) 上月昭信「志方町およびその周辺と加西市における遺跡の立地と遺物散佈状況」『旧石器考古学』21 昭和55年
- 2) 久保弘幸・園本敏子・竹中英典「家穂遺域における旧石器新資料」『旧石器考古学』52 平成8年
- 3) 注2)と同じ
- 4) 注2)と同じ
- 5) 山中一郎・石橋孝幸「兵庫県印南郡志方町岡山遺跡発掘調査報告」『旧石器考古学』21 昭和55年
- 6) 藤野清尚・浅原重利「加古川市山之上遺跡採集の石器」『旧石器考古学』21 昭和55年
- 7) 注3)と同じ
- 8) 注3)と同じ
- 9) 兵庫県教育委員会「七日市遺跡(1)(旧石器時代遺跡の調査)」平成2年
- 10) 兵庫県教育委員会「多紀郡西紀町坂井寺ヶ谷遺跡—旧石器時代の調査—」平成3年
- 11) (財)古代学協会「兵庫県三田市 溝口遺跡 —北摂工業地区—」昭和61年
- 12) 松澤和人「大阪平野における旧石器編年研究に寄せて」『旧石器考古学』44 平成4年
- 13) 山口卓也「近畿地方古形石器群の一様相—坂井・寺ヶ谷丁位文化層の古形石器—」『旧石器考古学』48 平成6年
- 14) 中浜久喜「播磨における横穴式石室の構造と変遷」『第2回播磨考古学研究会資料集 横穴式石室からみた播磨』第2回播磨考古学研究会実行委員会 平成13年
- 15) 丹羽憲二「託賀郡と賀毛郡域の古墳と編年」『第2回播磨考古学研究会資料集 横穴式石室からみた播磨』第2回播磨考古学研究会実行委員会 平成13年
- 16) 山田郁子「池尻16号墳」『加古川市史』第4巻 加古川市 平成8年
- 17) 岸本直文「小野市の考古資料」『小野市史』第4巻 小野市 平成9年
- 18) 高崎信之雄「毛洲山3号墳発掘調査報告書」小野市教育委員会 昭和54年
- 19) 「赤田白旗谷古墳現地説明会資料」小野市教育委員会 平成12年
- 20) 十河貞和「加古川流域産家形石棺についての一考察—組合式家形石棺身について—」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』平成5年
- 21) 松村正和・小瀬盛「正法寺古墳群」『平成6年度社会教育活動状況報告書』三木市教育委員会 平成7年
- 22) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「須賀1号墳現地説明会資料」平成13年
- 23) 永井恒弘「播磨における古墳時代須恵器の変遷」『小谷遺跡(第6次)』加西市教育委員会 平成7年
- 24) 栗田哲明他『東山古墳群1』中野教育委員会・京都府立大学考古学研究室 平成11年
- 25) 岸本一郎「坂本古墳群」西脇市教育委員会 平成13年
- 26) 森内秀道「西脇古墳群の土器について」『西脇古墳群』兵庫県教育委員会 平成7年
- 27) 注24)と同じ
- 28) 井守徳男「土器」『七日市遺跡(1)—第3分冊—』兵庫県教育委員会 平成3年
- 29) 大久保宗泰「金鋼鉄の甕」『古代探蔵』Ⅲ 早稲田大学出版会 平成3年
- 30) 新納泉・光本順・灘波紀子他「定東原・西塚古墳」岡山大学考古学研究室 平成13年
- 31) 佐藤博重・玉川一郎「宗内古墳群」『母畑地区遺跡発掘調査報告』Ⅲ 福高県教育委員会 昭和54年
- 32) 桃崎祐輔「刺葉形香壺・鏡板の変遷とその意義」『筑波大学先史学・考古学研究』第12号 平成13年
- 33) 栗垣勇夫・野本 浩之「古代の造形美 裝飾付須恵器展」愛知県陶磁資料館 平成7年
- 34) 山田邦和「裝飾付須恵器および特殊須恵器の研究」『須恵器生産の研究』学生社 平成10年
- 35) 栗垣勇夫「裝飾付須恵器の系譜と地域性について」『網崎彰一先生古希記念論文集 網崎彰一先生古希記念論文集刊行会 平成10年
- 36) 注35)と同じ
- 37) 八瀬正雄「牧正一古墳」『福知山市文化財調査報告書』第32集 福知山市教育委員会 平成8年
- 38) 岡田俊子「小瀬付須恵器製作の意匠と背景」『月刊考古学ジャーナル』第476号 平成13年
- 39) 注38)と同じ
- 40) 山下隆次「第16回特別展 葛城の英雄・けはや」香芝市教育委員会二上山博物館 平成12年
- 41) 注39)と同じ
- 42) 市村高英「特別展回顧 野見宿禰と相模」熊野市立歴史文化資料館 平成6年
- 43) 注36)と同じ
- 44) 井守徳男「兵庫県出土の裝飾付須恵器集成(1)—加古川流域—」『田辺昭三先生古希記念論文集 田辺昭三先生古希記念の会 平成14年刊行予定

- 45) 現在、兵庫県内で出土した裝飾付須恵器（出土地不詳を含む）は、67遺跡87例を確認している。そのうち、裝飾付甕は52遺跡66例（不確定なものも含む）で、人物・動物等の小像を付けるは、24遺跡から出土している30例である。ちなみに、裝飾付甕のうち、配像密（b・c類）の比率は、東播磨地域の加古川流域では約20%にあるのに対し、明石川流域では約70%、市川・揖保川・千住川流域の西播磨地域では約40%程度であり、加古川流域では、小像を配する裝飾付甕の比率は極めて低く、勝手野6号墳出土の小像のみで構成されるも類のものは、現在のところ、知られていない。したがって、瀬戸内沿岸部の地域間の格差を想定する必要があるであろう。
- なお、兵庫県出土の裝飾付須恵器の詳細については、別稿を予定している。
- 46) 和田晴吉「石工技術」『古墳時代の研究5 生産と流通Ⅱ』 雄山閣出版 平成3年
- 47) 香芝市二上山博物館「第7回特別展 二上山窯の石が語る世界」 平成7年
- 48) 注47)と同じ
- 49) 森田修「東播磨中世須恵器の成立と展開」『神戸市立博物館 研究紀要』第3号 神戸市立博物館 昭和62年
「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 平成7年
「神出宮跡群の発掘成果」『神戸の歴史』第19号 昭和63年
- 50) 森内秀造・池田延弘・仁尾一人「久留美・跡部宮跡群」 兵庫県教育委員会 平成11年
- 51) 中川涉「中世の土器」『玉津田中遺跡』第6分冊 兵庫県教育委員会 平成8年
- 52) 宮原文隆「門前・上山遺跡」 多可郡中町教育委員会 平成4年
- 53) 久保弘幸・池田延弘・岡本一秀「神山古宮跡群」 兵庫県教育委員会 平成10年
- 54) 丹治康明「神出古宮跡群」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 昭和58年
森田修「神出宮跡群の発掘成果」『神戸の歴史』第19号 神戸市企画調整局 昭和63年
- 55) 大村敬通・水口富夫「魚住古宮跡群」 兵庫県教育委員会 昭和58年
- 56) 山下俊郎「林崎三本松瓦宮跡群第3地点」『明石市文化財年報 平成9年度』 明石市教育委員会 平成11年
- 57) 大村敬通・水口富夫「魚住古宮跡群」 兵庫県教育委員会 昭和58年
- 58) 森隆「中世の焼成窯」『中近世土器の基礎研究』Ⅹ 中世土器研究会 平成6年
- 59) 佐藤竜馬「第2節 近畿以西」『古代の土師器生産と焼成遺構』 窯跡研究会 平成9年
- 60) 森内秀造「相生市・緑ヶ丘宮跡群」 兵庫県教育委員会 昭和61年
- 61) 中村善則「神出古宮跡群基山1号窯」『博物館だより』16 神戸市立博物館 昭和61年
- 62) 浅谷誠吾「神出遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 平成4年
- 63) 寺島孝一・熊野敏夫・植山茂「魚住古宮跡群」 明石市教育委員会・平安博物館 昭和60年
- 64) 松岡秀夫・川原隆彦「橋谷2号宮跡」『兵庫県埋蔵文化財年報』昭和57年度 兵庫県教育委員会 昭和60年
- 65) 高島信之他「木器宮跡群第4号宮跡」『高平土地改良は場整備事業に伴う埋蔵文化財調査の記録』81-89 三田市教育委員会 平成2年
- 66) 佐藤竜馬「園分寺楠井遺跡」 香川県教育委員会 平成7年
「近畿以西」『古代の土師器生産と焼成遺構』 窯跡研究会 平成9年
- 67) 小野市赤田町に所在する白雲谷宮跡である。7世紀代の横穴式石室の墳丘に勝手野3号窯と同形態と考えられる土師器窯が築造されている。小野市の御厚意により焼成土器を実見させていただいた。
- 68) 丸山潔「猪田古窯址発掘調査報告書」 神戸市教育委員会 昭和63年
- 69) 手塚浩・谷正俊「西神90地点」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 昭和61年
- 70) 久保弘幸・仁尾一人「小名田宮跡」 兵庫県教育委員会 平成9年
- 71) 森田修「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 平成5年
- 72) 大村敬通・水口富夫「魚住古宮跡群」 兵庫県教育委員会 昭和58年
- 73) 森隆「中世土師器・瓦器の焼成窯」『古代の土師器生産と焼成遺構』 窯跡研究会 平成9年
- 74) 森隆「中世の焼成窯」『中近世土器の基礎研究』Ⅹ 中世土器研究会 平成6年
草原孝典「三手向原遺跡」 岡山県教育委員会 平成13年

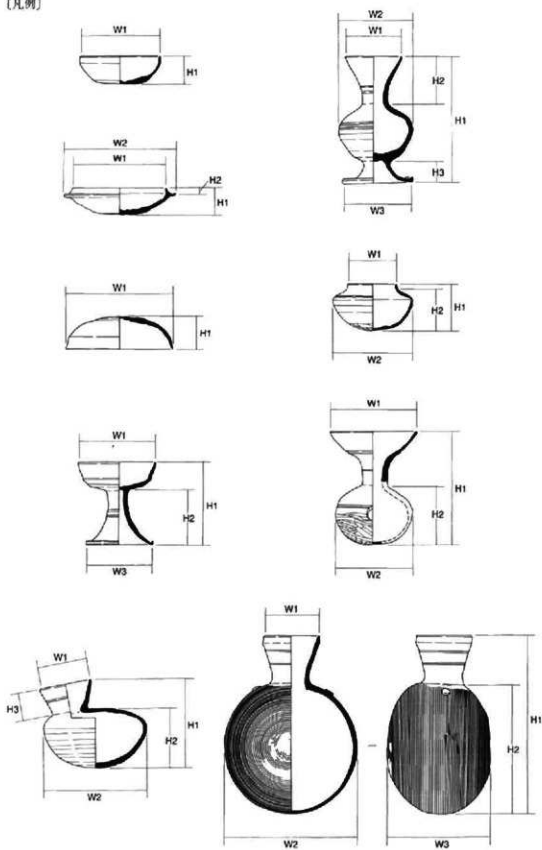
標本番号	器内番号	部類	石材	形状	ブロンク	グリッド	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	容積 X	容積 Y	容積 Z	備考
1		UF	Ch	単体	I	A-5	55.4	34.1	18.3	37.3	-131849.007	5458.794	33.378	
2		F	Ch	単体	I	A-5	33.4	15.9	5.6	2.9	-131847.834	5458.807	33.302	
3		F	Ch	①	I	B-5	34.9	24.4	10.7	8.8	-131841.836	5462.236	33.149	
4		Ch	Ch	①	I	H-5	14.9	15.0	4.5	1.6	-131843.641	5462.237	33.033	
5		UF	Ch	②	I	B-5	64.0	37.4	18.3	37.1	-131845.031	5462.406	33.974	
6		Co	Ch	①	I	B-5	106.7	54.8	49.2	303.3	-131845.488	5461.667	33.176	
7		CS	?	単体	I	H-5	91.3	37.0	27.4	82.5	-131844.122	5463.647	33.966	
8		UF	Ch	②	I	B-5	42.1	28.4	13.5	14.9	-131843.516	5465.062	32.929	
9		Ka?	G	単体	I	B-5	38.5	18.1	10.9	5.4	-131843.524	5465.237	32.968	
10		CS	Ch	単体	I	H-5	16.3	8.1	1.9	6.3	-131842.264	5464.688	32.915	
11		CS	?	単体	I	B-5	115.4	77.7	35.7	470.0	-131841.832	5464.464	32.931	
12		UF	Ch	単体	I	H-5	29.3	25.1	5.0	3.7	-131841.613	5465.476	33.011	
13		Ch	Ch	単体	I	B-5	17.8	15.1	3.5	1.1	-131842.099	5468.642	32.876	
14		Co	Ch	①	I	B-5	55.2	34.1	18.0	51.5	-131840.627	5465.113	32.976	
15	*													欠番
16		CS	Ch	単体	I	B-5	15.3	15.6	7.4	2.2	-131844.218	5466.363	32.903	
17		CS	Ch	単体	I	H-5	42.1	22.4	14.3	12.2	-131845.038	5465.047	33.023	
18		Co	Ch	①	II	H-6	74.9	54.3	23.6	119.0	-131851.399	5465.455	33.630	
19		Co	G	単体	II	B-6	41.5	43.8	20.4	42.3	-131853.835	5462.473	33.335	
20		CS	Ch	単体	II	H-6	32.9	17.2	10.0	7.2	-131854.679	5465.301	33.307	
21		Tr	So	単体	II	H-6	31.4	24.0	9.2	5.1	-131854.967	5464.515	33.162	
22	*													欠番
23		H	So		II	H-6	88.2	66.3	44.5	330.1	-131854.235	5466.023	32.960	
24		F	So	単体	II	C-5	27.5	32.8	10.6	6.7	-131852.283	5466.662	32.852	
25		CS	Ch	単体	III	C-7	56.1	34.4	17.8	28.2	-131864.182	5493.724	32.586	
26		CS	Ch	単体	III	C-7	72.4	31.2	28.4	61.0	-131864.488	5493.575	32.613	
27	*													欠番
28	*													欠番
29		F	Ch	単体	III	B-7	21.8	23.2	6.8	3.8	-131866.828	5498.541	32.825	
30		Tr	Ch	①	III	B-7	34.3	24.4	5.8	4.6	-131864.128	5499.077	32.897	
31		CS	Ch	単体	III	B-7	38.7	21.4	9.1	11.8	-131865.744	5497.353	33.019	
32		CS	Ch	単体	III	B-7	81.5	26.4	28.6	85.0	-131866.498	5498.894	33.047	
33		UF	Ch	単体	III	B-7	41.5	37.6	13.4	19.3	-131866.745	5498.725	33.252	
34	*													欠番
35		F	Ch	単体	III	B-7	33.8	24.7	8.6	7.7	-131864.861	5492.194	33.735	
36	*													欠番
37		Co	Ch	単体	III	B-7	42.3	53.6	42.0	87.3	-131868.576	5492.270	33.518	
38		F	?	単体	III	B-7	28.0	20.5	7.7	4.3	-131869.950	5496.408	33.009	
39		Ch	So	単体	III	B-7	17.6	12.2	2.6	0.5	-131869.500	5497.408	32.999	
40		Co	So	単体	(I)	B-7	28.7	34.4	10.7	9.5				
41	*													欠番
42		So	Ch	単体	(I)		35.5	22.1	9.0	7.2				TP4研製
43		Ch	Ch	単体	*	B-7	11.4	12.7	4.2	1.1				
44		RF	長石	単体	*		68.1	82.2	18.7	58.9				
45		F	Ch	単体	*		91.0	61.3	30.4	187.5				2号機副産
46		RF	Ch	単体	*		39.0	16.9	6.3	4.2				
47		CS	Ch	単体	*		24.2	24.8	21.0	16.2				
48		UF	Ch	単体	*		33.3	41.7	16.0	19.1				
49		F	Ch	単体	*		28.1	17.0	7.3	3.2				
50		CS	Ch	単体	*		18.9	12.5	2.6	0.6				
51		F	So	単体	*		22.6	20.9	7.1	4.2				
52		F	Ch	単体	*		27.2	20.9	5.4	4.3				2号機副産物
53		Ch	Ch	①	(I)		15.6	8.3	3.3	0.6				器内付録
54		Ch	Ch	②	(I)		18.1	13.9	7.0	1.8				器内付録
55		CS	Ch	①	(I)		11.8	16.9	2.6	0.7				器内付録
56		Tr	Ch	単体	*		18.2	23.4	4.4	2.0				器内付録
57		Ka?	G	単体	*		72.2	42.0	17.5	38.9				器内付録
58		RF	So	単体	*		44.5	24.0	4.9	7.8				器内付録
59		CS	Ch	単体	*		30.7	22.7	10.4	10.0				器内付録

第35表 勝手野遺跡旧石器基本データ

		須		罍		器			
H I G		高 环 I 類		高 环 II 類		長 頸 壺		提 甌	
		高 环 III 類		廣 口 甌	橫 甌				
	高 环 IV 類								
碗		廣 口 甌		II 類		III 類			
鉢		廣 口 甌							
提 甌		II 類		III 類					
甌									
甌		土 師 器	环		高 环 類				
			高 环						
			甌		平 甌				

第36表 勝手野古墳群出土土器の器種構成

(凡例)



第37表 勝手野古墳群出土土器觀察表

1号墳

No.	種別	部	種	W1	W2	W3	H1	H2	H3	H4	瓦葺成形・調整手法	内装成形・調整手法	その他の特徴	出土品
1	墳形部	W1		10.2			4.0				ヘラ型り不調整			石製瓦葺(漆黒)
2	墳形部	W1		10.1			3.8				ヘラ型り不調整, 堀割あり(瓦)			石製瓦葺(漆黒)
3	墳形部	W1		*10.2			**3.9				ヘラ型り不調整, 堀割あり(瓦)			石製瓦葺
4	墳形部	W1		10.1			3.5				ヘラ型り瓦ナゲ		外装瓦葺成木	石製瓦葺(漆黒)
5	墳形部	W1		9.7			3.8				ヘラ型り瓦ナゲ		外装瓦葺成木	石製瓦葺(漆黒)
6	墳形部	W1		9.4			3.8				ヘラ型り瓦ナゲ	瓦上げナゲ		石製瓦葺(漆黒)
7	墳形部	W1		9.3			3.1				ヘラ型り不調整			石製瓦葺(漆黒)
8	墳形部	W4		*9.8			*3.2				ヘラ型り不調整			埴土瓦葺, 石製瓦葺
9	墳形部	W6		*7.1	12.6	*13.5	23.2	17.0			ホキ目		(埴土瓦葺の瓦葺, 内装瓦葺)	石製瓦葺(漆黒)
10	墳形部	平版			*13.6			**7.2			ヘラ型り瓦ナゲ, 堀割あり(瓦)			埴土瓦葺
11	土器部	平版		3.7	9.2		8.1	4.7			ハキ目			石製瓦葺(漆黒)
12	土器部	赤銅鍍				10.9		6.7			ヘラゴテ			石製瓦葺(漆黒)

2号墳

No.	種別	部	種	W1	W2	W3	H1	H2	H3	H4	瓦葺成形・調整手法	内装成形・調整手法	その他の特徴	出土品
1	墳形部	W1		*13.8			3.0				ヘラ型り瓦ナゲ			石製瓦葺(漆黒)
2	墳形部	W1		11.7			4.2				ヘラ型り瓦ナゲ			石製瓦葺(漆黒)
3	墳形部	W1		*13.6										石製瓦葺
4	墳形部	W1		10.4	*12.4		3.2	0.6			ヘラ型り不調整			石製瓦葺
5	墳形部	W1		10.2	12.6		3.4	0.8			ヘラ型り瓦ナゲ			石製瓦葺(漆黒)
6	墳形部	W1		*9.6			3.2				ヘラ型り不調整			石製瓦葺
7	墳形部	W1		*9.8			**3.6				ヘラ型り不調整			石製瓦葺
8	墳形部	W6		9.8			2.5				漆黒ヘラ型り	瓦上げナゲ		石製瓦葺(漆黒)
9	墳形部	W6		8.6			4.7				ヘラ型り瓦ナゲ	瓦上げナゲ	1層・包囲境界に1条の瓦葺	石製瓦葺(漆黒)
10	墳形部	W6		8.2			4.7				ヘラ型り瓦ナゲ		1層・包囲境界に1条の瓦葺	石製瓦葺
11	墳形部	W6		10.6		7.5	9.2	3.5			ヘラ型り瓦ナゲ		包囲に2条の瓦葺, 内装瓦葺	石製瓦葺
12	墳形部	W6		*9.9		8.5	10.8	7.1			銅板ヘラ型り		包囲に2条の瓦葺, 銅板に2条の瓦葺	石製瓦葺
13	墳形部	W6		*9.1			**2.1				ヘラ型り瓦ナゲ, 堀割あり(瓦)			石製瓦葺
14	墳形部	W6		3.4	10.2		6.3	3.4			ヘラ型り瓦ナゲ, 堀割あり(瓦)	同心円状多目	包囲に1条の瓦葺	石製瓦葺(漆黒)
15	墳形部	W6		3.1	10.5		6.5	3.6			ヘラ型り瓦ナゲ, 堀割あり(瓦)	同心円状多目	包囲に1条の瓦葺	石製瓦葺(漆黒)
16	墳形部	W6		*8.6	*14.2	9.3	21.7	9.4	2.7		銅板ヘラ型り		包囲に1条の瓦葺, 包囲外周に4目・包囲外周列状瓦葺	石製瓦葺(漆黒)
17	墳形部	W6		8.6	13.5	7.5	23.0	10.2	1.2		銅板ヘラ型り		包囲に2条の瓦葺, 包囲に1条の瓦葺	石製瓦葺(漆黒)
18	墳形部	W6		10.0	22.4		17.9	13.8			漆黒ヘラ型り		包囲に2条の瓦葺	石製瓦葺
19	墳形部	W6		11.0	16.0		14.7	7.7			漆黒ヘラ型り		1層・包囲に1条の瓦葺	石製瓦葺(漆黒)
20	墳形部	平版		6.8				5.3						石製瓦葺
21	墳形部	平版			14.2			9.0			漆黒ヘラ型り		包囲ホキ目	石製瓦葺
22	墳形部	平版		4.5	13.5		11.4	7.8	3.4		銅板ヘラ型り(瓦)		包囲に1条の瓦葺	石製瓦葺(漆黒)
23	墳形部	W6		10.6	47.5		47.7	42.9			銅板瓦葺多目・ホキ目	同心円状多目		埴土瓦葺(包囲部)

3号墳

No.	種別	部	種	W1	W2	W3	H1	H2	H3	H4	瓦葺成形・調整手法	内装成形・調整手法	その他の特徴	出土品
1	墳形部	W1		13.3			4.2				銅板ヘラ型り(瓦)	瓦上げナゲ		瓦葺瓦葺(層1瓦葺), 埴土瓦葺(包囲部)
2	墳形部	W1		*13.7			3.8				ヘラ型り不調整, 堀割あり(瓦)			埴土瓦葺(包囲部)
3	墳形部	W1		12.5			**1.7				銅板ヘラ型り(瓦)	瓦上げナゲ		埴土瓦葺(層1瓦葺), 埴土瓦葺(包囲部)
4	墳形部	W1		*12.4			3.9				ヘラ型り瓦ナゲ	瓦上げナゲ		埴土瓦葺(層1瓦葺)
5	墳形部	W1		12.0	14.6		7.5	0.9			ヘラ型り瓦ナゲ	瓦上げナゲ		埴土瓦葺(層1瓦葺)
6	墳形部	W1		*11.9	14.8		**1.5	0.9			銅板瓦葺(瓦)			埴土瓦葺(層1瓦葺)
7	墳形部	W1		*12.1	*14.5		**1.5	0.9			ヘラ型り不調整	瓦上げナゲ		埴土瓦葺(層1瓦葺)
8	墳形部	W1		*11.4	*13.8		**1.6	1.0			ヘラ型り不調整			埴土瓦葺
9	墳形部	W1		*11.1	*14.0			0.8						埴土瓦葺(層1瓦葺)
10	墳形部	W1		*11.3	*14.0		4.0	0.7			ヘラ型り瓦ナゲ			石製瓦葺(層1瓦葺)
11	墳形部	W1			*12.4						ヘラ型り瓦ナゲ			埴土瓦葺(層1瓦葺)
12	墳形部	W1		*10.0	*12.2		**1.0	0.4			ヘラ型り不調整, 堀割あり(瓦)	瓦上げナゲ		埴土瓦葺(包囲部)
13	墳形部	W1		9.6	11.7		3.2	0.3			ヘラ型り不調整	瓦上げナゲ		埴土瓦葺(包囲部)
14	墳形部	W1		10.1			3.2				ヘラ型り瓦ナゲ			埴土瓦葺(層1瓦葺)
15	墳形部	W1		10.5			3.4				ヘラ型り不調整			埴土瓦葺(層1瓦葺)
16	墳形部	W6		10.7			4.8				銅板ヘラ型り(瓦)			埴土瓦葺(包囲部)

No.	種別	部 隊	W1	W2	W3	日1	日2	日3	日4	日5	日6	外部表彰・顕著手紙	内閣表彰・顕著手紙	その他の表彰	出 上 位 順
17	演習部	機		*10.8									同級へ手紙(1名)		東武平区 (第1次海軍)、実業 2区
18	演習部	機		*9.7											石巻
19	演習部	訓練科	*11.9		10.5	10.1	6.4					同級へ手紙9	海上げナク	口縁部への感謝	宮原1・2区 (第1次海軍)
20	演習部	高坪1	*11.4		12.3	*16.1	11.9							舞鶴海上1区以上2名の 表彰、浮城野内艦にへ 手紙	石巻平・平区 (第1次海軍)
21	演習部	高坪1	*11.0											年口縁部以上2名の賞	東武平区、横山宮原
22	演習部	高坪1			9.7										東武平区
23	演習部	高坪2	*10.7		*10.0										横山宮原
24	演習部	高坪2	*9.8		9.4	*10.9	6.7					同級へ手紙9(名)	海上げナク	口縁部以上1名の表彰	宮原平区 (第1次海軍)、東武 平・平・平区
25	演習部	高坪2	*9.3							**2.6	同級へ手紙9(名)	海上げナク	口縁部以上	宮原	
26	演習部	高坪2	10.1		7.6	*7.6	3.0					同級へ手紙9(名)	海上げナク		宮原平区 (第2次海軍)
27	演習部	訓練科	6.5												太田
28	演習部	機	*11.1	*10.0	*10.9	**12.7	**5.3	**11.6				同級へ手紙9			横山1・平区、石巻平・平区、 横山平区
29	演習部	機	*12.4												横山平区
30	演習部	平艦	5.8	*12.8		11.3	7.2	3.3				同級へ手紙9(名)			宮原平区 (第2次海軍)、 石巻平区
31	演習部	平艦	*5.8	*14.6		12.3	6.7	5.9				同級へ手紙9(名)			横山1区 (第2次海軍)、平・ 平区
32	演習部	機	*10.7												宮原平区、横山平区 (第1次海 軍)、横山平区
33	演習部	機	10.4	41.3		40.4	30.9								横山平区 (第1次海軍)
34	上級部	研	*9.9												宮原平区 (第2次海軍)
35	上級部	高坪	*9.3		6.8	4.8	1.3								宮原平区 (第2次海軍)
36	上級部	高坪			3.4		5.1								宮原平区 (第2次海軍)
37	上級部	平艦	*4.1	*6.4		8.5	5.3								東武平区 (第2次海軍)

4号機

No.	種別	部 隊	W1	W2	W3	日1	日2	日3	日4	日5	日6	外部表彰・顕著手紙	内閣表彰・顕著手紙	その他の表彰	出 上 位 順
1	演習部	研1	11.4			4.3						へ手紙9名表彰、機 加級(1名)		工務機	石巻平区 (第2次海軍)
2	演習部	研1	10.5			**5.7						へ手紙9名表彰		舞鶴海上、内閣表彰 5	石巻平区
3	演習部	研1	10.5			**3.7						へ手紙9名表彰、機 加級(1名)		口縁・東部機務に内閣	石巻1区 (第1次海軍)
4	演習部	研1	10.5			3.9						へ手紙9名表彰			石巻平区 (第1次海軍)
5	演習部	研1	11.2			3.9						へ手紙9名表彰		機務機務	石巻平区
6	演習部	研1	10.9			3.6						へ手紙9名表彰		機務機務	石巻平区 (第1次海軍)
7	演習部	研1	10.9			4.0						へ手紙9名表彰	海上げナク		横山平区 (第2次海軍)
8	演習部	研1	10.2			3.9						へ手紙9名表彰		機務機務	横山
9	演習部	研1	10.3			3.6						へ手紙9名表彰			横山平区 (機務機)
10	演習部	研1	8.9			3.5						へ手紙9名表彰		内閣表彰機務	石巻1区 (第1次海軍)
11	演習部	研1	8.1			3.4						へ手紙9名表彰	海上げナク		石巻平区 (第1次海軍)
12	演習部	研1	9.9			3.4						へ手紙9名表彰			石巻平区 (第1次海軍)
13	演習部	研1	9.6			3.4						へ手紙9名表彰			横山平区 (機務機)
14	演習部	研1	9.7			3.8						へ手紙9名表彰			石巻1区 (第1次海軍)
15	演習部	研G	8.4			3.0						へ手紙9名表彰			石巻平区 (第1次海軍)
16	演習部	高坪	*10.4		7.3	*7.3	2.9					へ手紙9名表彰	海上げナク		石巻平区
17	演習部	平艦		11.3			6.4					同級へ手紙9(名)			横山(機務機)
18	上級部	研	10.2			4.1						機務へ手紙9	ハナ目		石巻平区
19	上級部	研	10.7			5.0						機務へ手紙9			石巻平区
20	上級部	研	10.9			4.7									石巻平区 (第1次海軍)
21	上級部	高坪	*6.3		6.2	*5.9	2.1						機務へ手紙		石巻1区 (第1次海軍)
22	上級部	高坪	10.7		8.4	5.7	3.1								横山1区 (機務機)
23	上級部	機務			5.9										石巻平区
24	上級部	高坪	*6.0	*9.2		**12.0						へ手紙9名	ハナ目		石巻1区 (第1次海軍)
25	上級部	高坪		8.0	*7.5		4.4	1.5				へ手紙9名			石巻1区 (第1次海軍)

5号機

No.	種別	部 隊	W1	W2	W3	日1	日2	日3	日4	日5	日6	外部表彰・顕著手紙	内閣表彰・顕著手紙	その他の表彰	出 上 位 順
1	演習部	研1	11.7			4.2						へ手紙9名表彰	海上げナク	宮原平区にへ手紙9	横山平区 (機務機)
2	演習部	研1	*12.0			**4.7						へ手紙9名表彰	海上げナク		石巻平・平区
3	演習部	研1	12.1			4.2						へ手紙9名表彰、機 加級(1名)			石巻平区 (機務)
4	演習部	研1	*12.1			**4.5						へ手紙9名表彰	不定方向ナク		石巻平区 (機務)、平・平区
5	演習部	研1	11.0	12.5		4.3	0.6					へ手紙9名表彰	不定方向ナク		横山平区 (機務機)
6	演習部	研1	*10.5	*12.6		**11.6	0.6					へ手紙9名表彰	海上げナク	東部機務にへ手紙9	石巻平区、横山平区 (機務機)
7	演習部	研1	*11.6	*12.6		3.9	0.6					へ手紙9名表彰	不定方向ナク		石巻平区、横山平区 (機務機)
8	演習部	研1	*10.6	*12.5		3.7	0.6					へ手紙9名表彰			横山平区

No.	種別	種	第1	第2	第3	第1	第2	第3	第4	所属成績・調整手段	内容成績・調整手段	その他の特徴	出 土 登 録
9	調整部	母仔馬	*10.1	*12.1									埼玉区
10	調整部	母仔馬	*10.1	*11.8				6.9					埼玉区
11	調整部	母	10.8			**1.5				ヘタ部多量ナマ		石塚区 (東部)	
12	調整部	母	9.7			4.1				ヘタ部多量調整		石塚区 (東部)	
13	調整部	母	9.5			3.4				ヘタ部多量調整	位上77ナマ	石塚区 (東部)・宮区	
14	調整部	母仔馬	*9.2			**1.2	3.4			位上77ナマ	調整に2本の尻尾	埼玉区 (東部)	
15	調整部	母仔馬	8.9			*6.0	4.8				調整に1本の尻尾	石塚区 (東部)・宮区	
16	調整部	母仔馬	*9.2	7.6		3.4	3.2			調整ヘタ部ナマ	位上77ナマ	川口調整区	
17	調整部	母仔馬				7.7	3.3					調整に2本の尻尾	埼玉区
18	調整部	母仔馬				7.6							埼玉区 (東部)
19	調整部	母仔馬	*9.1	*8.6		*10.0	3.9			調整ヘタ部ナマ	調整に2本の尻尾	埼玉区 (東部)	
20	調整部	母仔馬	*10.6			9.0	10.2	6.9			調整に2本の尻尾 内1本の尻尾		埼玉区
21	調整部	母仔馬	*8.0	*8.1		*9.3	3.6			調整ヘタ部ナマ	調整に1本の尻尾、調整 部に2本の尻尾	埼玉区 (東部)	
22	調整部	母仔馬	*10.0			6.9	*2.1	2.5			位上77ナマ		埼玉区 (東部)
23	調整部	母仔馬	*11.3			7.9	6.8	3.9		調整ヘタ部ナマ	調整に1本の尻尾	石塚区 (東部)・宮区	
24	調整部	母仔馬	10.5	7.4		3.8	3.8				調整部母仔馬色調ナマ	石塚区 (東部)	
25	調整部	母仔馬	*10.2			7.9	3.2	3.4			調整部母仔馬色調ナマ	石塚区 (東部)・宮区・宮区	
26	調整部	母仔馬				7.4	2.9						石塚区 (東部)
27	調整部	母仔馬				7.4	1.7					調整部母仔馬色調ナマ	石塚区 (東部)
28	調整部	母仔馬	*10.4			7.3	*1.4	1.4				調整部母仔馬色調ナマ	調整部
29	調整部	母仔馬	*10.7	6.1			3.6	3.3			位上77ナマ		石塚区 (東部)
30	調整部	母仔馬	*10.7	*6.3		*1.4	1.4				位上77ナマ		石塚区 (東部)
31	調整部	母仔馬	*10.4			2.3	3.5	1.4			位上77ナマ		埼玉区
32	調整部	調整部母	7.9			**2.7				停止ヘタ部ナマ		石塚区	
33	調整部	調整部母	*6.0			**2.6				停止ヘタ部ナマ		石塚区	
34	調整部	調整部母	8.6			6.3				ヘタ部多量調整、種 別母仔馬	位上77ナマ	埼玉区 (東部)	
35	調整部	調整部	3.7	9.7		3.7	3.3			停止ヘタ部ナマ	調整に2本の尻尾	埼玉区 (東部)	
36	調整部	調整部	6.4	10.0		3.7	3.1			停止ヘタ部ナマ	調整に2本の尻尾	埼玉区 (東部)	
37	調整部	調整部	*6.0	*6.9		**1.7	**6.4			停止ヘタ部ナマ	調整部母仔馬色調ナマ、種 別に2本の尻尾	埼玉区 (東部)	
38	調整部	調整部	6.3	10.4		6.9	6.3			停止ヘタ部ナマ	調整に1本の尻尾	石塚区 (東部)	
39	調整部	馬	*6.3	7.4		11.2	4.5			停止ヘタ部ナマ	調整に1本の尻尾、調整 部に1本の尻尾	石塚区 (東部)、埼玉区	
40	調整部	馬	8.4	7.8		10.6	4.5			停止ヘタ部ナマ	調整に1本の尻尾	石塚区	
41	調整部	馬	*6.7								調整部に1本の尻尾	石塚区・宮区	
42	調整部	馬	*6.8								調整部に1本の尻尾	石塚区	
43	調整部	馬	*6.3								調整部に1本の尻尾	埼玉区 (東部)	
44	調整部	馬	11.8	9.1		13.9	6.6			調整ヘタ部ナマ	調整に1本の尻尾	埼玉区 (東部)	
45	調整部	調整部				9.0	*9.2	2.6				調整に2本の尻尾、調整 部に1本の尻尾	埼玉区 (東部)
46	調整部	調整部	*6.4	*6.5	*1.2	*13.2	1.4	7.6		調整ヘタ部ナマ	調整に2本の尻尾、調整 部に1本の尻尾	石塚区 (東部)	
47	調整部	調整部	7.2	9.7	*1.7	*16.6	2.9	7.2		調整ヘタ部ナマ	調整に2本の尻尾	石塚区	
48	調整部	母	*6.4	12.8		6.6	7.3			停止ヘタ部ナマ		石塚区・宮区 (東部)・宮区	
49	調整部	母	8.6	10.6		18.2	14.9			調整ヘタ部ナマ	調整部母仔馬、調整 部に1本の尻尾	石塚区・宮区、埼玉区 (東部)、調整 部	
50	調整部	調整	*6.0	9.8		13.7	9.1					調整に1本の尻尾	埼玉区 (東部)
51	調整部	調整	8.6	13.3		**23.3	**13.2					調整に3本の尻尾、調整 部に1本の尻尾、調整 部に1本の尻尾、調整 部に1本の尻尾	埼玉区 (東部)・宮区 (東部)、埼玉 区、調整部母仔馬、調整 部に1本の尻尾
52	調整部	調整	6.7	11.4		6.8	10.4			調整ヘタ部ナマ (古)		調整に1本の尻尾	埼玉区 (東部)
53	調整部	調整	10.0	10.0		23.7	**10.9			調整部母仔馬多量ナマ	同心的母仔馬	調整に2本の尻尾、調整 部に1本の尻尾	埼玉区 (東部)、宮区 (東 部)
54	調整部	馬	23.2	43.3		43.9	38.8			調整部母仔馬多量ナマ	同心的母仔馬		埼玉区 (東部)・石塚区
55	土物部	調整	*4.8	*4.6		9.3	5.8						埼玉区 (東部)
56	土物部	調整	3.8	3.8		6.7	4.4						埼玉区 (東部)

6号棟

No.	種別	種	第1	第2	第3	第1	第2	第3	第4	所属成績・調整手段	内容成績・調整手段	その他の特徴	出 土 登 録
1	調整部	高坪馬	9.4	10.8		8.7						調整部母仔馬色調、調整 部に3本の尻尾、中々	石塚区 (東部)
2	調整部	高坪馬	*9.7	10.5		7.2						調整部、調整部に2本の尻尾	石塚区 (東部)・埼玉区 (東部)
3	調整部	高坪馬	9.5	6.4		7.1	4.1			調整ヘタ部ナマ	位上77ナマ		埼玉区 (東部)
4	調整部	高坪馬	*9.0	6.7		*6.0	3.7			調整ヘタ部ナマ	位上77ナマ		埼玉区 (東部)
5	調整部	調整	*3.9	*4.0		12.0	7.6					調整に2本の尻尾、調整 部に1本の尻尾	石塚区 (東部)・埼玉区 (東部)
6	調整部	調整	4.2	**11.1		**1.9				調整ヘタ部母仔馬、中 央調整ナマ			石塚区 (東部)・埼玉区 (東部)

No.	種別	器種	W1	W2	W3	H1	H2	H3	H4	性能規格・調整手段	内装規格・調整手段	その他の特徴	出上位置
7	演奏部	鼓動付機	18.0	24.3		20.4							増設3区（増設部）
8	演奏部	鼓動付機	18.0										増設3区（増設部）

7号機

No.	種別	器種	W1	W2	W3	H1	H2	H3	H4	性能規格・調整手段	内装規格・調整手段	その他の特徴	出上位置
1	演奏部	対応機	12.0			4.0				調整ヘッダ有り(左)			右側1区（増設）
2	演奏部	対応機	12.0			3.8				調整ヘッダ有り(左)	右上げナサ		右側1区（増設）
3	演奏部	対応機	12.5			3.9				ヘッダ有りナサ、調整機能有り(左)	右上げナサ		右側3区（増設）
4	演奏部	対応機	12.5			3.7				ヘッダ有りナサ、調整機能有り(左)	右上げナサ		右側3区（増設）
5	演奏部	対応機	11.8	14.0		3.5	0.8			不明	不明		右側3区（増設）
6	演奏部	対応機	11.8	13.8		4.0	0.7			ヘッダ有りナサ、調整機能有り(左)	右上げナサ		右側1区（増設）
7	演奏部	対応機	11.6	14.0		3.6	0.8			ヘッダ有りナサ、調整機能有り(左)	右上げナサ		右側3区（増設）
8	演奏部	対応機	11.3	13.3		3.7	0.8			ヘッダ有りナサ、調整機能有り(左)	右上げナサ		右側1区（増設）
9	演奏部	対応機	11.2	13.4		3.3	0.6			ヘッダ有りナサ、調整機能有り(左)	右上げナサ		右側3区（増設）
10	演奏部	対応機	12.1	14.3		4.5	0.8			ヘッダ有りナサ、調整機能有り(左)	右上げナサ		右側1区（増設）
11	演奏部	高圧2	12.1							調整ヘッダ有り(右)	右上げナサ	増設に1本の付属	右側3区（増設）
12	演奏部	高圧2		9.6			4.3						右側3区（増設）

8号機

No.	種別	器種	W1	W2	W3	H1	H2	H3	H4	性能規格・調整手段	内装規格・調整手段	その他の特徴	出上位置
1	演奏部	対応機	*11.5			4.0				ヘッダ有りナサ、調整機能有り(左)	右上げナサ		基本
2	演奏部	対応機	15.1			3.9	2.9						増設調整トランプ
3	演奏部	対応機		8.6						調整ヘッダ有り	右上げナサ		右側1区
4	演奏部	平風	*6.4	*16.9		16.9	11.8	5.0		調整ヘッダ有り(右)		増設に1本の付属	右側3区、増設3区（増設部）
5	演奏部	機	*15.7										増設
6	演奏部	機	*11.0										右側3区

10号機

No.	種別	器種	W1	W2	W3	H1	H2	H3	H4	性能規格・調整手段	内装規格・調整手段	その他の特徴	出上位置
1	演奏部	対応機	10.0			3.7				ヘッダ有りナサ		増設増設	増設
2	演奏部	対応機	*9.7							ヘッダ有りナサ		増設増設	増設

昭和28年出土

No.	種別	器種	W1	W2	W3	H1	H2	H3	H4	性能規格・調整手段	内装規格・調整手段	その他の特徴	出上位置
1	演奏部	調整機	8.3			2.9				ヘッダ有りナサ			2号機
2	演奏部	調整機	9.4			2.6				ヘッダ有りナサ	右上げナサ		2号機
3	演奏部	調整機	9.4			2.6				ヘッダ有りナサ	右上げナサ		2号機
4	演奏部	調整機	9.4			2.6				ヘッダ有りナサ	右上げナサ		2号機
5	演奏部	調整機	9.4			2.4				ヘッダ有りナサ	右上げナサ		2号機
6	演奏部	機	8.0			1.5				調整ヘッダ有りナサ	右上げナサ	ホキ目	2号機
7	演奏部	機	8.4			1.7				調整ヘッダ有りナサ			2号機
8	演奏部	対応機	*9.4			*13.6				ヘッダ有りナサ			2号機
9	演奏部	対応機	9.4			1.7				ヘッダ有りナサ			2号機
10	演奏部	調整機	7.8			2.6				ヘッダ有りナサ	右上げナサ		2号機
11	演奏部	調整機	*4.9	8.3		0.1	5.1			調整ヘッダ有り	同心円等分		2号機
12	演奏部	機	9.0	9.1		11.9	5.2			ヘッダ有りナサ			2号機

注) 括弧のつり、*は初期製造機、**は改良機を示す

第38表 勝手野窯跡群出土土器観察表

勝手野1号窯

No.	種別	器種	口径	器高	成形・調整	焼成	出土位置
1	須恵器	小皿	*8.7	2.0	底部内面仕上げナデ、回転糸切り	酸化	灰原
2	須恵器	小皿	*7.5	2.0	底部内面仕上げナデ、回転ヘラ切り		灰原
3	須恵器	小皿	*8.6	2.4	ヘラ切り		灰原
4	須恵器	小皿	8.4	2.1	ヘラ切り		灰原
5	須恵器	碗	*15.5	6.6	底部内面仕上げナデ		灰原
6	須恵器	碗	*13.1	*4.7	底部内面仕上げナデ		灰原
7	須恵器	碗	*14.5	*4.8		酸化	灰原
8	須恵器	碗	*15.1	*4.1		酸化	灰原
9	須恵器	碗	*15.8	*4.6			灰原
10	須恵器	碗	*15.6	*4.9		酸化	灰原
11	須恵器	碗	*15.6	*4.9		酸化	灰原
12	須恵器	底部	—	*1.6	底部糸切り		灰原
13	須恵器	羹	*20.8	*3.0	粘土練成明瞭		灰原
14	須恵器	羹	35.1	6.8	粘土練成明瞭		表土
15	須恵器	鉢	21.3	8.5	底部静止糸切り		灰原
16	須恵器	鉢	*21.2	*5.4		酸化	灰原
17	須恵器	鉢	*23.8	*6.5			灰原
18	須恵器	鉢	*13.6	*5.0			灰原
19	須恵器	鉢	*27.1	*8.8		酸化	灰原
20	須恵器	鉢	*29.6	*7.1	片口部分残存	酸化	壁口付近
21	須恵器	鉢	*32.8	*5.0			表土
22	須恵器	鉢	*33.0	*4.3	口縁部内面に施いナデ		灰原
23	須恵器	鉢	*31.9	*3.1			表土
24	須恵器	鉢	*31.6	*4.2	口縁部内面に施いナデ	酸化	表土
25	須恵器	鉢	*34.0	*15.1		酸化	表土
26	須恵器	鉢	*33.8	*16.1	口縁部内面に施いナデ	酸化	表土
27	須恵器	鉢	*36.5	*16.2		酸化	表土

勝手野2号窯

No.	種別	器種	口径	器高	成形・調整	焼成	出土位置
1	須恵器	碗	*14.5	5.4	底部糸切り		第2次床面
2	須恵器	碗	*14.7	5.3			第2次床面
3	須恵器	碗	*14.8	*3.3			第2次床面
4	須恵器	碗	*15.2	*3.6	仕上げナデ		第2次床面
5	須恵器	碗	*15.2	*4.2	仕上げナデ		第2次床面
6	須恵器	碗	*15.3	*3.7			第2次床面
7	須恵器	碗	*15.4	*5.1			第2次床面
8	須恵器	碗	*15.4	*3.3			第2次床面
9	須恵器	碗	*15.7	*4.9			第2次床面
10	須恵器	碗	*15.5	*3.2			第2次床面
11	須恵器	碗	*15.8	*5.1			第2次床面
12	須恵器	碗	—	*2.9	仕上げナデ		第2次床面
13	須恵器	碗	*15.6	*4.0	仕上げナデ		第1次床面
14	須恵器	碗	*15.7	*3.4			第1次床面
15	須恵器	碗	*15.6	*4.6			第1次床面
16	須恵器	碗	—	*2.3	静止糸切り		第1次床面
17	須恵器	碗	—	*2.1	静止糸切り		第1次床面
18	須恵器	碗	*14.4	*4.9			灰原
19	須恵器	碗	*14.6	4.9	仕上げナデ、糸切り		灰原
20	須恵器	碗	14.7	4.3	仕上げナデ指圧痕		灰原
21	須恵器	碗	*14.7	*4.8	仕上げナデ		灰原
22	須恵器	碗	*15.0	4.7	糸切り		灰原
23	須恵器	碗	14.7	5.1	静止糸切り		灰原
24	須恵器	碗	*14.7	5.5	糸切り		灰原
25	須恵器	碗	*15.1	*4.9			灰原
26	須恵器	碗	15.1	5.0	糸切り、仕上げナデ		灰原
27	須恵器	碗	*15.4	4.8	糸切り		灰原
28	須恵器	碗	*15.6	*4.1	仕上げナデ		灰原
29	須恵器	碗	*15.7	4.6	糸切り、仕上げナデ		灰原
30	須恵器	碗	15.3	4.6	静止糸切り、仕上げナデ		灰原
31	須恵器	碗	*15.8	*3.8			灰原
32	須恵器	碗	*15.7	5.3	回転糸切り		灰原
33	須恵器	碗	*15.6	5.6	静止糸切り、詰め		灰原

No	種別	器種	口径	器高	成形調整	焼成	出土位置
34	須恵器	碗部	—	**2.5	糸切り、仕上げナデ		灰層
35	須恵器	鉢	*23.6	**5.2			灰層
36	須恵器	鉢	—	**3.8			灰層

勝手野3号窯

No	種別	器種	口径	器高	成形調整	焼成	出土位置
1	土師器	杯	*14.0	3.2	静止糸切り、内面に指正痕		灰体内
2	土師器	杯	*14.3	3.3	静止糸切り		灰体内
3	土師器	碗	*14.1	**3.1			灰体内
4	土師器	碗	15.5	5.2	糸切り		灰体内
5	土師器	碗	15.8	6.1	糸切り		灰体内
6	土師器	鍋	*27.6	**11.5	ヨコナデ		灰体内
7	土師器	鍋	*29.0	—	ヨコナデ		灰体内
8	土師器	鍋	*35.9	—	ヨコナデ		灰体内
9	土師器	小皿	*7.6	1.5	ヘタ切り		灰層
10	土師器	小皿	*7.6	1.1	ヘタ切り		灰層
11	土師器	小皿	*7.8	1.8	ヘタ切り		灰層
12	土師器	小皿	*7.6	1.3	ヘタ切り		灰層
13	土師器	小皿	*7.9	1.1	ヘタ切り		灰層
14	土師器	小皿	*7.9	1.2	ヘタ切り、仕上げナデ		灰層
15	土師器	小皿	*8.8	1.0	ヘタ切り		灰層
16	土師器	小皿	*8.7	1.4	ヘタ切り		灰層
17	土師器	小皿	*8.2	1.2	ヘタ切り		灰層
18	土師器	杯	*14.7	**2.9	不定向ナデ		灰層
19	土師器	杯	*14.8	**3.6			灰層
20	土師器	杯	15.1	3.0	静止糸切り		灰層
21	土師器	托	*14.3	3.6	糸切り		灰層
22	土師器	托	*15.6	4.0	静止糸切り		灰層
23	土師器	托	—	**3.3	糸切り		灰層
24	須恵器	碗	*15.6	**4.3		酸化	灰層
25	須恵器	碗	*16.0	**5.4		酸化	灰層
26	須恵器	碗	*15.0	**5.2		酸化	灰層
27	須恵器	碗	14.4	4.9			灰層
28	須恵器	碗	*16.1	**4.1			灰層
29	須恵器	鉢	*31.3	**8.1		酸化	灰層
30	須恵器	鉢	*31.7	**8.8		酸化	灰層
31	須恵器	鉢	—	**9.4		酸化	灰層
32	須恵器	鍋	*38.8	**7.4			灰層

第39表 古墳再利用時の土器観察表

No	種別	器種	口径	高さ	成形・調整	焼成	出土位置
1001	須恵砂	甕	*14.5	5.0			
1002	須恵砂	甕	*15.2	5.3	仕上げナデ、静止糸切り		
1003	須恵砂	甕	*13.7	4.8	傘型		
1004	須恵砂	甕	*13.3	4.7	静止糸切り		
1005	須恵砂	甕	14.8	4.9	静止糸切り後ナデ		
1006	須恵砂	甕	-	*3.0	静止糸切り		
1007	須恵砂	甕	-	*2.6	仕上げナデ、静止糸切り		
1008	須恵砂	鉢	*29.8	*6.7			酸化
1009	須恵砂	甕	*23.0	*6.9	体部外面平行叩き、内面直で具直		
1010	須恵砂	甕	-	*7.6	体部外面平行叩き		
1011	須恵砂	甕	32.1	*10.6	体部外面格子叩き		酸化
1012	須恵砂	小皿	8.3	1.8	回転ヘラ切り		
1013	土師砂	小皿	*7.8	*1.3	回転糸切り		
1014	土師砂	杯	14.5	3.8	回転糸切り		
1015	土師砂	皿?	*14.2	*1.1			
1016	土師砂	小皿	*8.8	*1.9	回転糸切り		
1017	須恵砂	甕	14.2	*5.3	回転糸切り		
1018	須恵砂	甕	-	*2.6	回転糸切り		
1019	須恵砂	鉢	*20.4	*6.0	回転糸切り		
1020	須恵砂	鉢	*22.5	*5.9			
1021	須恵砂	鉢	-	*3.6			
1022	須恵砂	鉢	-	*3.6			
1023	須恵砂	鉢	-	*3.8			
1024	須恵砂	鉢	-	*5.3			
1025	須恵砂	鉢	-	*2.4			
1026	須恵砂	甕	*25.5	*4.9			酸化
1027	須恵砂	甕	15.8	*5.4	回転糸切り		
1028	須恵砂	甕	*13.6	*4.2	体部外面に沈線3条		
1029	土師砂	杯	*14.2	4.5			
1030	須恵砂	甕	*14.4	*6.3	回転糸切り		
1031	須恵砂	甕	*13.3	*5.2			
1032	須恵砂	甕	*14.4	5.2	回転糸切り		
1033	須恵砂	甕	15.5	*5.0	回転糸切り		
1034	須恵砂	甕	*15.4	5.2	回転糸切り		
1035	須恵砂	甕	*15.8	*5.7	回転糸切り		
1036	須恵砂	甕	*16.4	5.4	回転糸切り		
1037	土師砂	底部	-	*3.8	回転糸切り		
1038	土師砂	灯明皿	5.5	0.9	回転糸切り、内外面透明釉、口縁部に雁付着		
1039	土師砂	灯明皿	5.2	0.8	回転糸切り、内外面透明釉		
1040	土師砂	灯明皿	5.3	0.6	回転糸切り、内面透明釉、口縁部に雁付着		
1041	土師砂	灯明皿	5.6	1.0	回転糸切り、内外面透明釉、口縁部に雁付着		
1042	土師砂	灯明皿	6.1	0.9	回転糸切り、内外面透明釉		
1043	土師砂	灯明皿	6.3	1.0	回転糸切り、内外面透明釉		
1044	土師砂	灯明皿	6.1	1.2	回転糸切り、内外面透明釉		
1045	土師砂	灯明皿	6.3	1.1	回転糸切り、内外面透明釉、口縁部に雁付着		
1046	土師砂	灯明皿	*5.4	0.8	回転糸切り、内外面透明釉、口縁部に雁付着		
1047	土師砂	灯明皿	5.1	0.8	回転糸切り、内外面透明釉		
1048	土師砂	灯明皿	4.9	0.7	回転糸切り、口縁部に雁付着		
1049	土師砂	灯明皿	5.8	8.5	回転糸切り、口縁部に雁付着		
1050	土師砂	灯明皿	5.7	6.8	回転糸切り		
1051	土師砂	灯明皿	6.5	1.0	回転糸切り、口縁部に雁付着		
1052	土師砂	灯明皿	*6.5	0.9	回転糸切り、口縁部に雁付着		
1053	土師砂	灯明皿	6.3	1.1	回転糸切り		
1054	土師砂	灯明皿	6.1	1.1	回転糸切り		
1055	土師砂	灯明皿	6.3	0.8	回転糸切り、口縁部に雁付着		
1056	土師砂	灯明皿	5.8	0.9	回転糸切り、口縁部に雁付着		
1057	土師砂	埴器	*28.3	*8.4	2方向に2つづつ貫通しない円孔、外面雁付着		
1058	埴器	小杯	6.3	2.8	外面に笠の文様、内外面透明釉薬、裏付輪薬なし、肥前系磁器		
1059	埴器	鏡首瓶	-	*7.8	外面に若松の文様、内外面透明釉薬、裏付輪薬なし、肥前系磁器		
1060	埴器	皿	*14.7	4.5	型うち成形、輪花皿、山水の文様、内外面透明釉薬、口縁縁部鉄赤、裏付輪薬なし、肥前系磁器		
1062	土師砂	埴器	27.9	8.1	外面縁部一帯の凹線、2方向に2つづつ円孔、外面雁付着		
1063	白磁	甕	3.4	1.5	外面透明釉薬、キザミ		
1064	輪軸陶器	小皿	2.7	2.7	外面下手回転ヘラケズリ、外面透明釉薬		

KATTENO PALAEOLITHIC SITE
KATTENO MOUNDED TOMBS
KATTENO KILN SITES

2002

Board of Education, Hyogo Prefecture, KOBE, JAPAN

1. INTRODUCTION

The Katteno Mounded Tombs and other sites are in the Kibita Town, Ono City, Hyogo prefecture on the mainland of Japan. These sites are located on the terrace that rises to a hill named Bouzuyama. On the south-eastern side of the terrace, the River Kako runs from north to south, through the Harima area (southwest area of Hyogo prefecture), and flows into the Setonaikai Sea. (inland sea of Japan)

The sites are about 32~40 meters above the sea level, and are situated at 134°55'37" east longitude and 34°48'46" north latitude.

The excavation of Katteno Mounded Tombs and other sites was started in May 1995, and finished in March

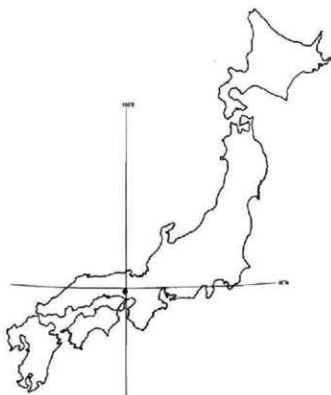


fig.181 The situation of the site

1996. The proposed construction of the Sanyo Express Way, necessitated excavation on account of the foundation of the basement.

2. GEOGRAPHIC ENVIRONMENT

The sites are on the terrace that is located on the right bank of the River Kako. The River Kako is the largest water system in the eastern Harima area. It length is 86.5 km and the River Kako was used as a important river way from Harima to Tamba (midland of Hyogo pref.), Tongo (northern district of Kyoto pref.) and Tajima (northern area of Hyogo pref.).

On the opposite bank of River Kako, there is a Syouboujyama hill. And the width of the River Kako and its alluvium plain is the narrowest in the basin. Then it could be divided into the middlestream and downstream on this point. The Katteno mounded tombs and the other sites locate on this border.

3. KATTENO PALAEO-LITHIC SITE

a. Stratigraphy and Cultural Layer (fig.8)

The layers were recorded on the cross sections based on the grid method. The surface of the terrace, where the Katteno site located, was covered with thick layer of silty-sand from hilly area around the site. The cultural layer was in the yellow-brown rigid silty-sand, and weathered volcanic ash was covered on the cultural layer. By the analysis, the volcanic ash was judged as the Aira-Tanzawa volcanic ash (AT).

According to the latest radiocarbon dating, effected in other sites, AT was dated 28,000 years B.P. or around. Then the cultural layer of Katteno site can be dated before 28000years B.P. The late palaeolithic period of Japan islands thought to have began about 30,000 years ago. Then the industry of Katteno site belongs between 28,000 to 30,000 years B.P.

b. Settlement of the site (fig.9 ~ fig.11)

36 stone ruins were excavated from the site, and 16 were gathered from the surface of the site. Those artifacts were distributed about 1000 square meters and from 35 to 36 meters above the sea level. Stone ruins were divided 3 clusters by their distribution. Simultaneously, a few cobbles were excavated, but those cobbles didn't organize any clusters.

c. Lithic Industries (fig. 12 ~ fig.16)

The assemblage of stone artifacts is shown in the tab.35. This industry mainly includes knife-blades, trapezes and retouched-flakes. These tools are standardly included in the assemblage of early part of latter palaeolithic period of Japan. Stone artifacts are mainly made of chert and a few sanukite (a kind of andesite) and rhyolite. Sanukite has two places of origin. One of them is the Mt. Nijo that situated on the border of Osaka pref. and Nara pref. Another is the northern area of Kagawa pref. Both areas are long way from the site. And the others are local materials. The cores show us two typical flaking techniques. The 1st. technique is for wide-flake. (No.17, fig.14) The core No.17 is made of sanukite. It is quite similar with Setouchi side-blow flaking technique. The 2nd. is the technique with the transposition of platforms. The core No.21 (fig.) is the typical example of this technique. The latter technique is distributed throughout the Cyugoku hilly area (western district

of mainland of Japan), under AT volcanic ash.

4. KATTENO MOUNDED TOMBS

a. Outline of the site

The Katteno Mounded Tombs are settled 11 round mounds. Those mounds are located on the gentle slope at the foot of the Bouzuyama hill, and are 35~40m above the sea level. The height of the mounds contains between 1.0~3.5m. On the excavation, 8 mounds were excavated and other mounds were preserved. The main burial facility of mounded tombs are corridor-style stone chambers. According to the earthware, we suppose that the Katteno mounded tombs were built in the first half of 7th century.

b. Stone chambers

All mounds had corridor-style stone chambers. And only the mound No.3 has a corridor-style stone chamber with one side of the corridor directly in line with one of the chamber's lateral walls. The largest stone chamber is the mound No.3. Its length is . and its width is . All the ceilings of stone chambers were already collapsed, so the exact height of the chambers are uncertain, but supposed below a few meters.

c. House Style sarcophagus

A base stone of the house style sarcophagus was excavated in the corridor-style stone chamber of mound No.3. The sarcophagus was destroyed in the middle age, and its mortuary goods didn't remain. The supposed weight of the base stone is about 600kg. Broken pieces of the house style sarcophagus were excavated from the mound No.2 and No.5.

d. Horse Trappings

A harness set was discovered in the stone chamber of mound No.3. It was structured with a bit (轡: Katsurwa), end plates of the bit (鏡板: Kagamita), a crupper boss (露珠: Uzu), pendants on a harness (杏葉: Gyoyou), strap dividers (辻金具: Tsujikanagu) and other metal parts. All of those iron parts were gold-plated with amalgam gilding.

End plates of the bit are decorative metal plate at the end of horse's bit. They have same design with the pendants, and we couldn't find yet the similar remains in Japan.

e. Sue pots with miniature figures mounted on their shoulders

There were two Sue-pots with miniature figures in front of the burial chamber of No.5. The right sue-pot kept better condition than the left pot. Then, we could reconstruct four different scenes represents by the figures from the right pot. These scenes represent life or thought of the ancient people.

The scene No.1 is structured with three figures, a bore, a deer and a man riding on a horse. The man's left hand grips reins. His right arm was raised already lost. But it seems On the left body of the deer, there is an allowhead. An allowhead strikes on the left body of the deer, then the scene could be interpret that represents hunting.

The scene No.2 is structured with two figures. A man and a woman satands face to face. The woman moves both arms to her back. This scene might represents a man's courtship and a woman's refusal.

The scene No.3 is structured with three figures. Two mans grapple with each other. And another man watch-

ing them. This scene represents "Sumo". The man who is watching two Sumo wrestlers must be "Gyouji" judgment.

The scene No.4 couldn't be reconstructed. It seems to be structured 3 or 4 figures, but only a figure was remained. The figure is a large-face man that raises his right hand. With only a figure, we couldn't interpret this scene. The left pot has quite similar shape with the right pot, so we suppose that it had almost similar figures.

Sue-pots with miniature figures or with miniature jars distributes western area of mainland of Japan. We have 86 the kind of sue pots in Hyogo prefecture.

5. KATTENO KILN SITES

a. Outline of the sites

The Katteno Kiln sites were located on the gentle slope at the foot of the Bouzuyama hill, and the slope on the tomb mound No.8. The sites are settled 2 Sue ware kilns and a Haji ware kiln. And according to the earthenware, we suppose that the Katteno kiln sites were built in 12th century.

b. Sue-Ware and its kilns

The Kiln No.1 and 2 produced sue wares. The Kiln No.1 was built on the natural slope, and the Kiln No. 2 was built on the slope of the Tomb Mound No.8.

The Kiln No.1 was heavily collapsed, so we couldn't comprehend its structure. Judging from its location, the Kiln No.1 could be supposed a kind of climbing kiln. The Kiln No.2 had a step that divides the combustion chamber and the firing chamber. The supposed maximum length of the Kiln No.2 is 3 meters or around. The kiln No.2 is a kind of the updraft kiln, judging from the gradient of the base.

The Kiln No.1 mainly produced large size categories like bowls, big pots and a few small plates. The caliber of bowls are between from 20cm and 36cm. The Kiln No.2 mainly produced small bowls. The quality of fired potteries from the Kiln No.1 were inferior. Generally, sue ware is fired by reducing atmosphere, and its temperature is 1100°C or around. But we suppose that the Kiln No.1 wasn't to be a reductive condition.

c. Haji Ware and its kiln

The Kiln No.3 built on the Mound No.8 was for Haji wares. It kept good condition without the top and chimney. Inside of the chamber was fired by oxidizing atmosphere. The Kiln No.3 was a small scale kiln, then it mainly produced small size categories of Haji ware. Haji ware dishes, cooking pots and small bowls were excavated in the chamber. And from the ash pile, Haji ware small plates, dishes, small bowls and a few Sue ware small bowls were discovered.

6. CLOSING

The excavation of Katteno mounded tombs and other sites brought new historical materials and problems for Japanese archaeology.

The industry of late palaeolithic age possessed techniques and stone materials that distributes Setonaikai sea shore area and Cyugoku hilly area. The industry shows features of both area, and we could suppose it stands for contact of groups lived in both regions.

The "Kagamiita" end plates of the bit and "Gyouyou" pendants, excavated in the mound No.3, shows unique design. Then after this, their producing district and genealogy of their design should be inquired.

Two sue pots with miniature figures settled in front of the corridor-style stone chamber are supposed to use a ceremony in front of the tomb. The Katteno kiln sites show the local production of earthenware in the middle-age of Harima area.

The author expect that the result of this report will be objects of study and make a contribution to the progress of Japanese archaeology.

Contributors are the following : Mr. Tokuo IMORI, Mr. Hiroyuki KUBO, Ms. Chizu MATSUOKA, Mr. Tetsuya AOKI, Mr. Toru DANHARA, Mr. Tetsuo WARASHINA, Mr. Toshikazu MITSUJI. Archaeologists operated the excavation were the following : Mr. Tokuo IMORI, Mr. Hiroyuki KUBO, Mr. Yuuji IMOTO, Ms. Chizu MATSUOKA, Mr. Takashi ISHIMATSU, Mr. Masakazu OOISHI.

This report will be distributed by Archaeology Center of Hyogo Prefecture ; 1-2 Aratacho, Hyogo-ward, KOBE JAPAN.

Our excavation operated since June 1995 to March 1996. In January 1995, Kobe City was badly suffered from the Hanshin Earthquakes. We pray for over 6000 souls killed in the earthquakes.

(Hiroyuki KUBO)

CONTENTS

Color Plates

Chapter 1	PROGRESS of EXCAVATION	Tokuo IMORI
Chapter 2	ENVIRONMENT	Tokuo IMORI
1.	Geographic Environment	
2.	Historical Background	
Chapter 3	THE KATTENO PALAEO-LITIC SITE	Hiroyuki KUBO
1.	Stratigraphy and Cultural Layer	
2.	Settlement of the site	
3.	Stone Implements	
4.	Closing	
Chapter 4	THE KATTENO MOUNDED TOMBS	Tokuo IMORI , Hiroyuki KUBO
1.	The history of study about KATTENO MOUNDED TOMBS	
2.	Mound No.1	3. Mound No.2
4.	Mound No.3	5. Mound No.4
6.	Mound No.5	7. Mound No.6
8.	Mound No.7	9. Mound No.8
10.	Mound No.9,10,11	11.Closing
Chapter 5	THE KATTENO KILN SITES	Chizu MATSUOKA

1. The location of THE KATTENO KILN SITES	
2. Kiln No.1	3. Kiln No.2
4. Kiln No.3	5. Closing
Chapter 6 The features and ruins with re-using of the corridor-style stone chamber	Chizu MATSUOKA
Chapter 7 The other features and ruins	Hiroyuki KUBO
1. THE KATTENO MIDDLEAGE SITE	
2. Other ruins (Jomon and Yayoi period)	
Chapter 8 Analysis	
1. The development of the topography around the site	Tetsuya AOKI
2. The analysis of the volcanic ash in the layer	Toru DANHARA
3. The source analysis of Sanukite by X-ray fluorescence spectrometry	Tetsuo WARASHINA
4. The ceramic petrology of Sue wares by X-ray fluorescence spectrometry	Toshikazu Mitsuji
5. The analysis of gold-plated metal parts excavated from the Mound No.3	
	The Gangouji foundation for study of cultural assets
Chapter 9 Conclusion	
1. Some studies for the late-palaeolithic industry of Katteno site	Hiroyuki KUBO
2. The chronological studies of Katteno Mounded Tombs	Tokuo IMORI
3. Some studies for the harness set excavated from the 3rd mound	Tokuo IMORI
4. Analysis of the scenes represented by the miniature figures	Tokuo IMORI
5. Studies of the structure of the 2nd and 3rd kiln	Chizu MATSUOKA
6. The production of the sue ware and haji ware in Harima district in the middle-age	Chizu MATSUOKA
Plates	
English Summary	Hiroyuki KUBO

写真図版



航空写真（昭和27年米軍撮影）



1 調査着手前の
勝手野古墳群
(平成4年)



2 調査着手前の
勝手野古墳群
(平成7年)

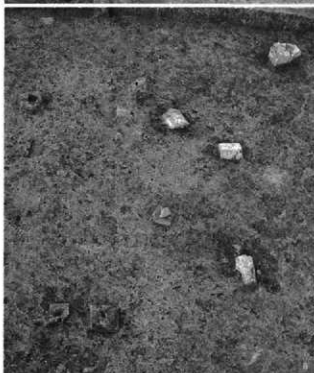


3 確認調査の状況
(平成4年)

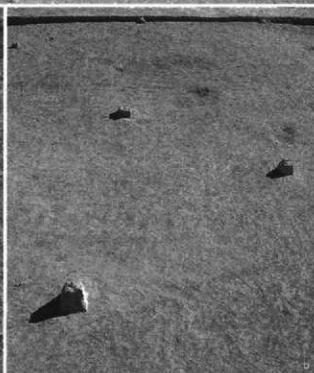
1 旧石器出土状況



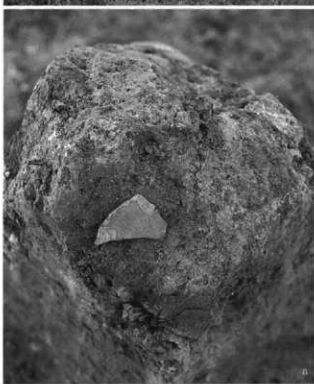
2
a : 旧石器出土状況
(B-5グリッド)



b : 旧石器出土状況
(C-5グリッド)



3
a : 台形石器出土状況
(C-5グリッド)

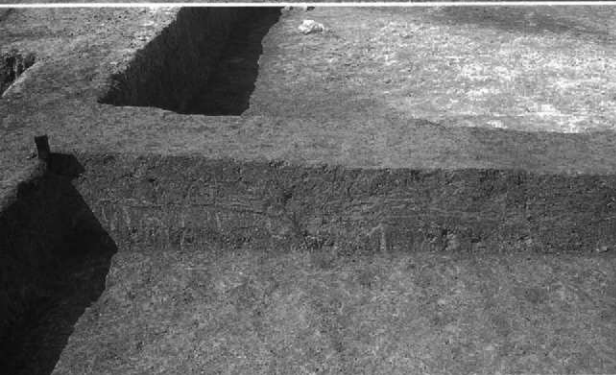


b : 使用痕のある剥片
出土状況
(B-5グリッド)





1 地層断面
(A-5
グリッド南壁)



2 地層断面
(B-5
グリッド西壁)



3 地層断面
(C-5
グリッド西壁)



1 航空写真
(表土除去後)



2 航空写真
(墳丘除去後)



1号墳



1 調査前

2 完掘状況



3 断面



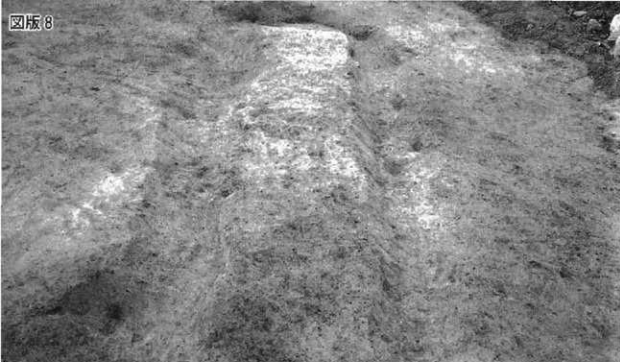
1 右侧面



2 左侧面



3 石室全景



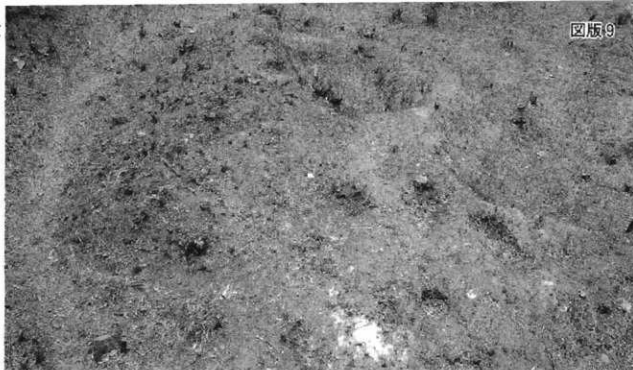
1 墓墳



2 石室内
遺物出土状況



3 石室内
遺物出土状況



1 調査前



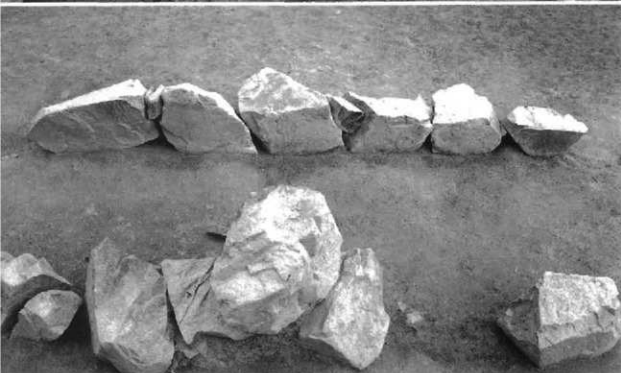
2 完掘状況



3 断面



1 右侧壁



2 左侧壁



3 石室全景



1 墓城



2 石室内
遺物出土状況



3 石室内
遺物出土状況



1 石室内
遺物出土状況



2 石室内
遺物出土状況



3 作業状況



1 調査前



2 発掘状況



3 断面



1 断面
(横断北東側)



2 断面
(横断奥後表)



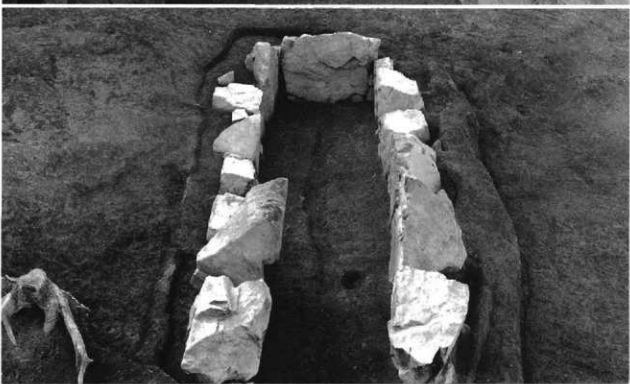
3 右側壁



1 左側壁



2 奥壁



3 石室完掘状況



1 墓壇



2 石槽出土状況



3 石槽出土状況



1 石棺出土状況



2 石棺出土状況



3 石棺出土状況



1
a: 石棺奥壁側
小口板遺存状況

b: 同細部



2 奥壁付近
遺物出土状況



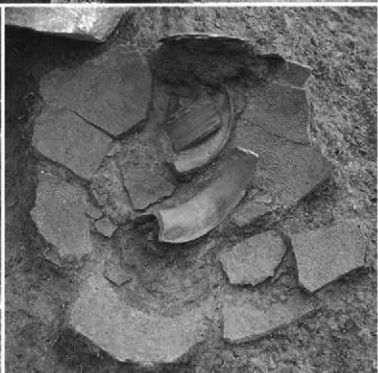
3 奥壁付近
遺物出土状況



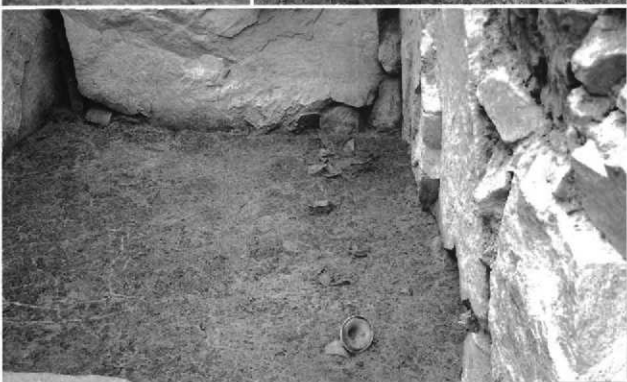
1 石室内断面



2
a : 後門部
出土状況



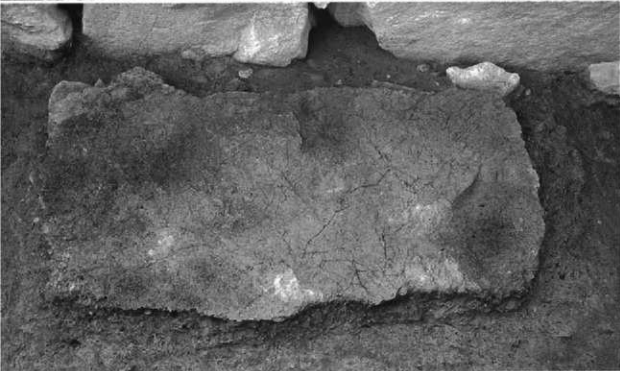
b : 同断面



3 遺物出土状況



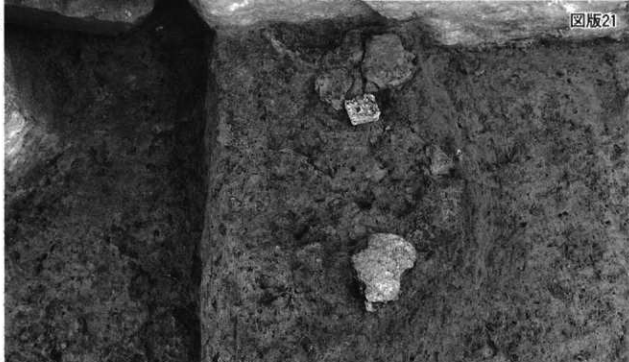
1 遺物出土状況



2 石棺除去後



3 馬具出土状況



1 馬具出土状況



2 馬具出土状況



3 排水溝検出状況



1 調査前



2 発掘状況



3 断面



1 右側壁



2 左側壁



3 奥壁



1 石室全景

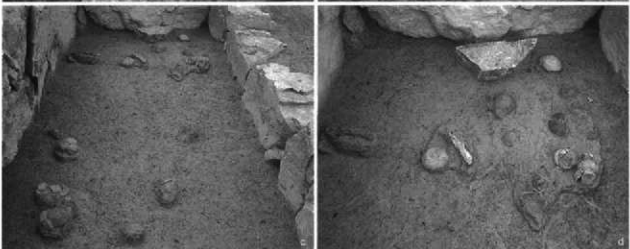
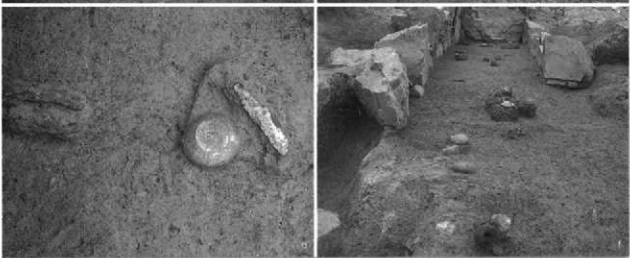


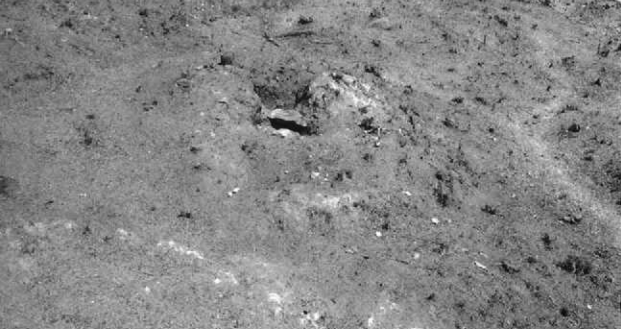
2 墓喉

3 石室
第2次床面

1 石室
第1次床面2
a: 第2次床面
遺物出土状況

b: 石室内断面

c~f:
第1次床面
遺物出土状況



1 調査前



2 完掘状況



3 断面



1 右側壁



2 左側壁



3 奥壁



1 石室全景



2 墓坑



3 石室内
遺物出土状況

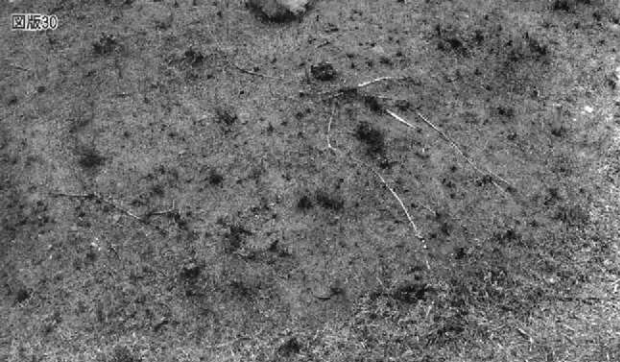


1 石室内
遺物出土状況



2
a ~ f 石室内
遺物出土状況





1 調査前



2 天井
石遺存状況



3 発掘状況



1 断面



2 右側壁



3 左側壁



1 奥壁



2 石室全景
(右側壁修復後)



3 墓墳



1 石棺檢出状況



2 石棺内
装身具出土状況



3 装身付須恵器
出土状況



1 裝飾付須恵器
出土状況



2 裝飾付須恵器
出土状況
(右側体)



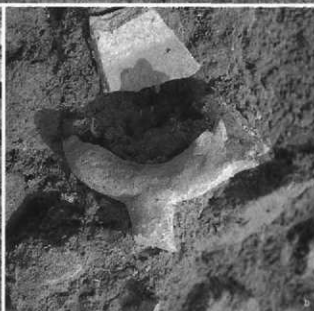
3 裝飾付須恵器
出土状況
(右側体小像)



1 裝飾付須恵器
出土状況(右個体)



2 裝飾付須恵器
出土状況(小像)
a: 左個体猪
b: 左個体鹿
c: 右個体猪
d: 右個体男性





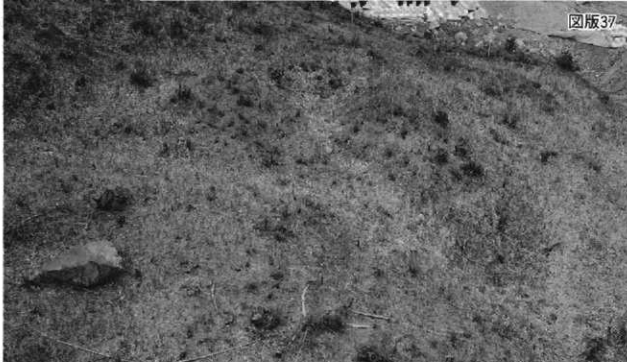
1 裝飾付須恵器
出土状況
(左側体)



2 裝飾付須恵器
出土状況
(左側体)



3 裝飾付須恵器
設置状況
推定復元



1 調査前



2 発掘状況



3 断面



1 右側壁



2 左側壁



3 奥壁



1 墓塚



2 石室内
遺物出土状況



3 石室内
遺物出土状況
(奥壁付近)



1 調査前



2 発掘状況



3 断面



1 右側壁



2 左側壁



3 奥壁



1 石室全般



2 墓蓋



1 石室内断面



2 石室内
遺物出土状況



3 石室内
遺物出土状況



1 調査前



2 竈跡全景



3 断ち割り状況



1 検出状況



2 窯跡全景



3 床面
断ち割り状況



1 検出状況



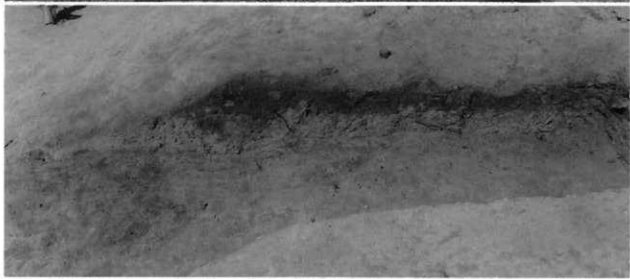
2 横断面



3 窯体内
遺物出土状況



1 窑体内
遺物出土状況



2 灰原土層断面



3 窑体内
遺物出土状況



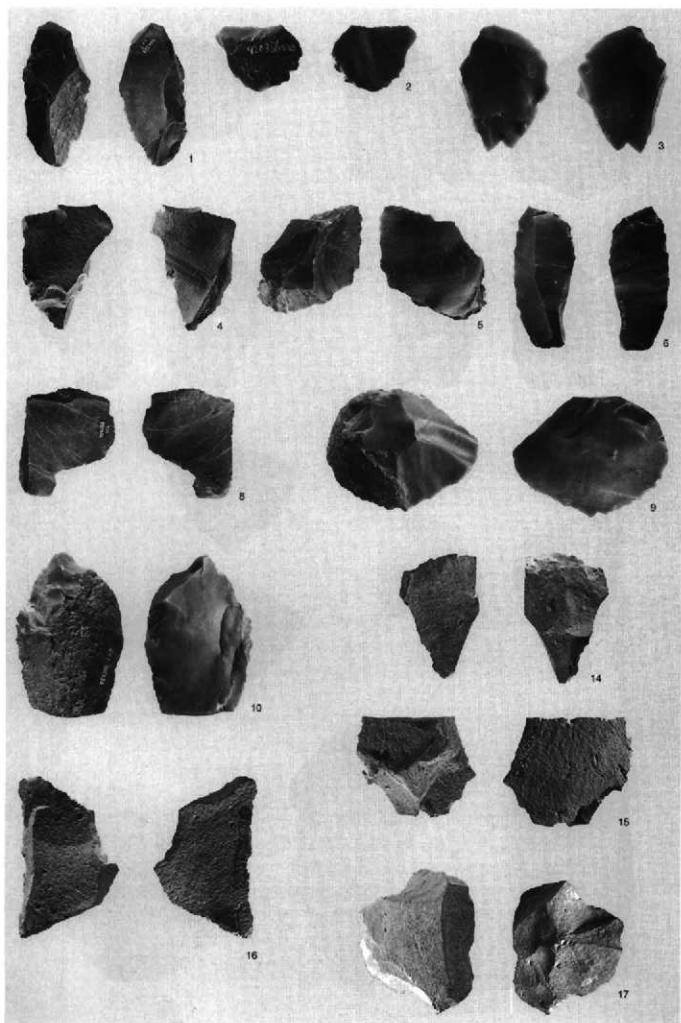
1 全景

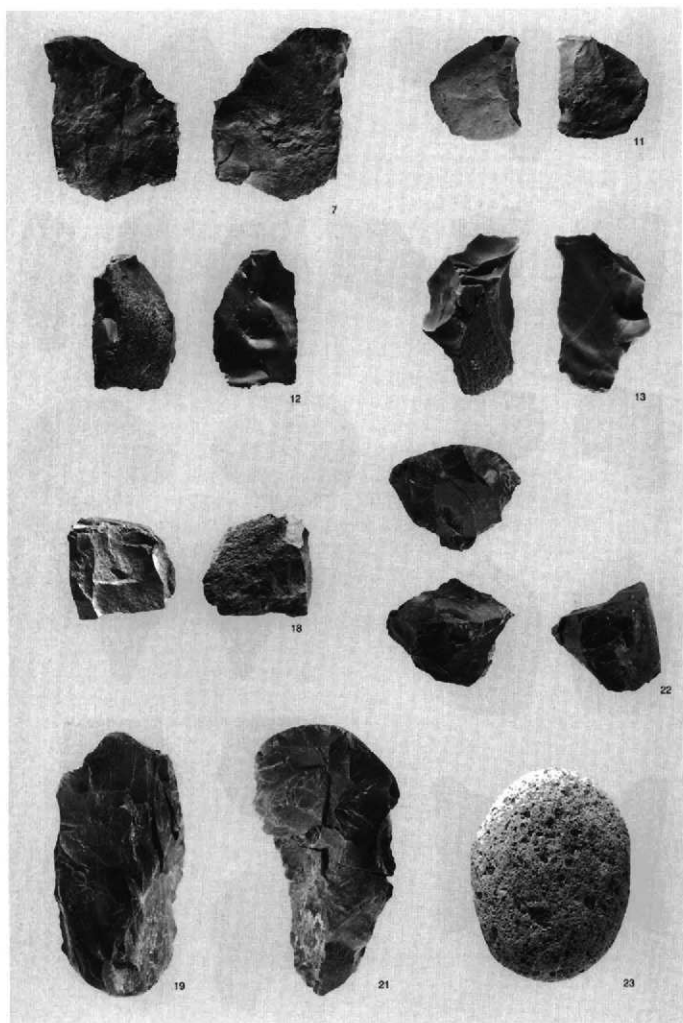


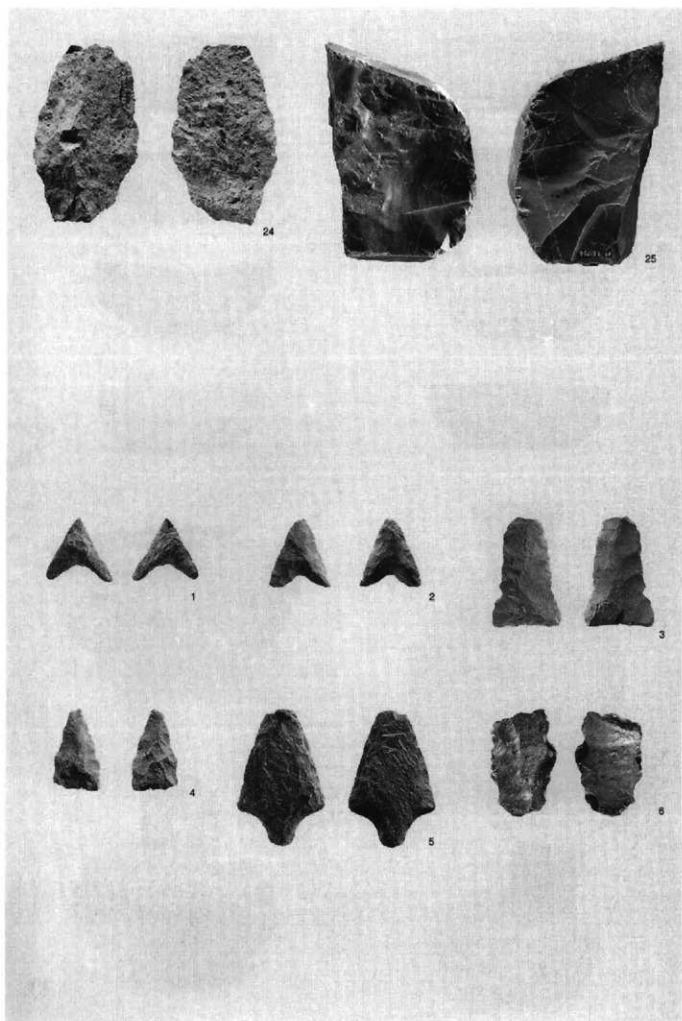
2 ピット1
土器出土状況



3 土坑1石棺材
出土状況









1-1



1-2



1-3



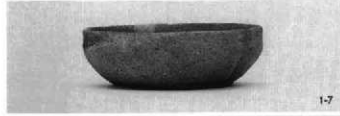
1-4



1-5



1-6



1-7



1-8



1-9



1-10



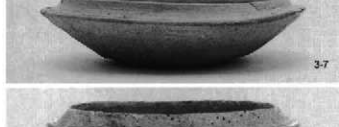
1-11



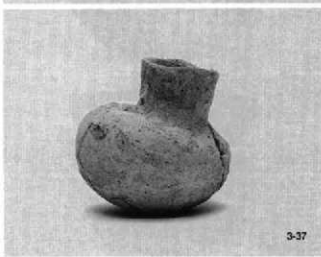
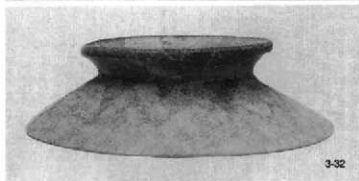
1-12













4-1



4-2



4-3



4-4



4-5



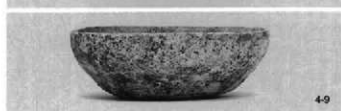
4-6



4-7



4-8



4-9



4-10



4-11



4-12



4-13



4-14



4-15



4-16

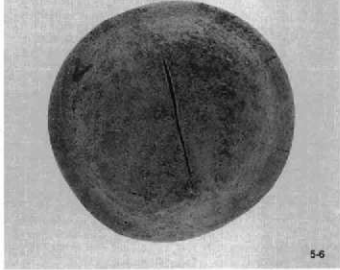
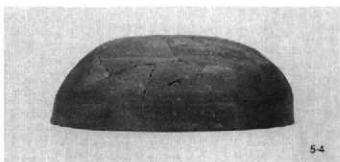


4-19



4-20











5-41



5-45



5-46



5-49



5-44



5-47



5-48



5-51



5-50



5-53



6-1



6-2



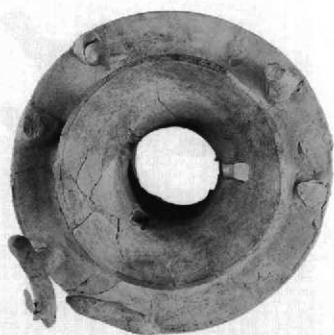
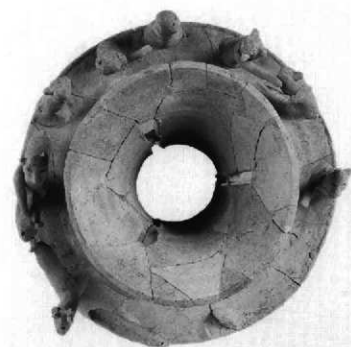
6-5



6-3



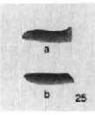
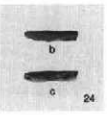
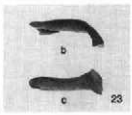
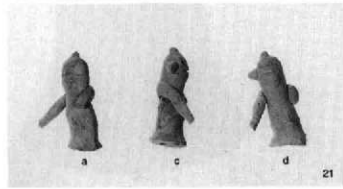
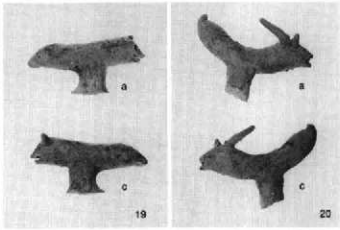
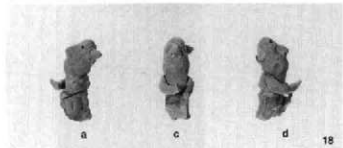
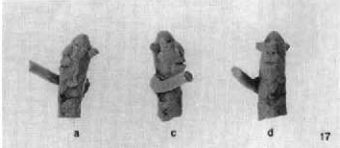
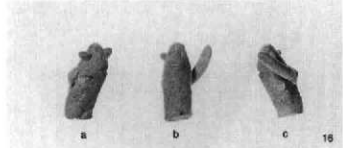
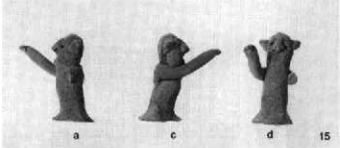
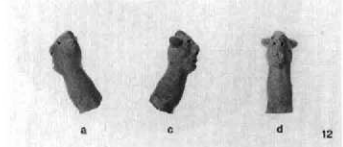
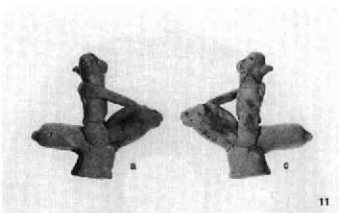
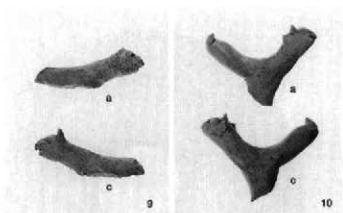
6-4



6-7



6-8





7-1



7-2



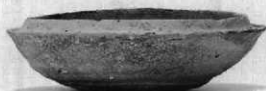
7-3



7-4



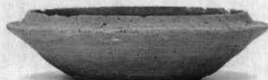
7-5



7-6



7-7



7-8



7-9



7-10



7-11



7-12



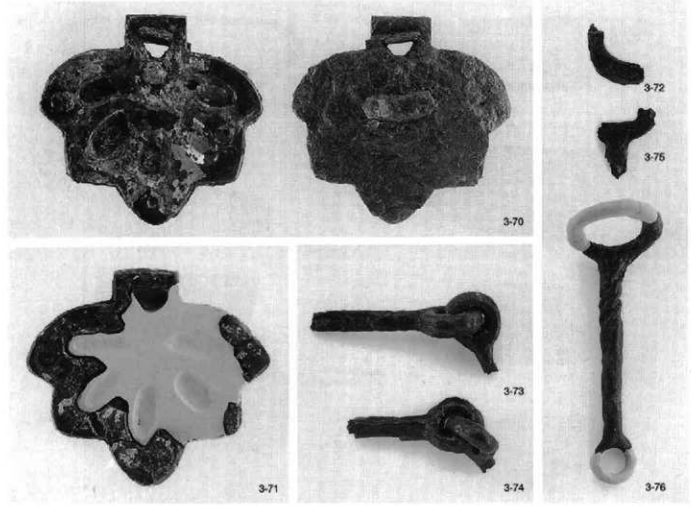
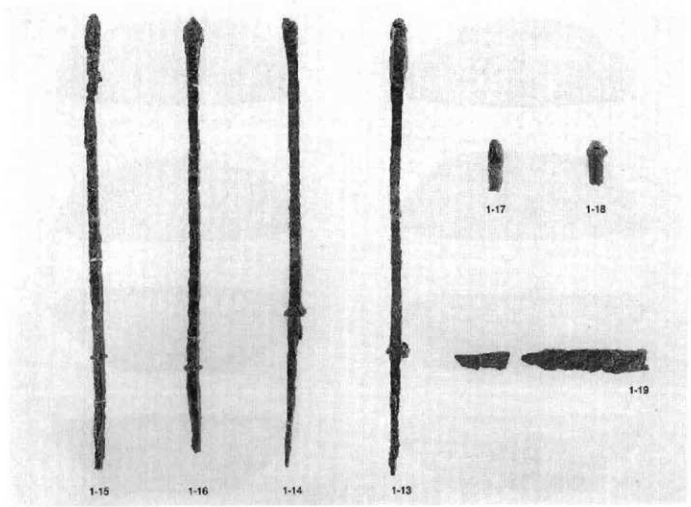
8-1

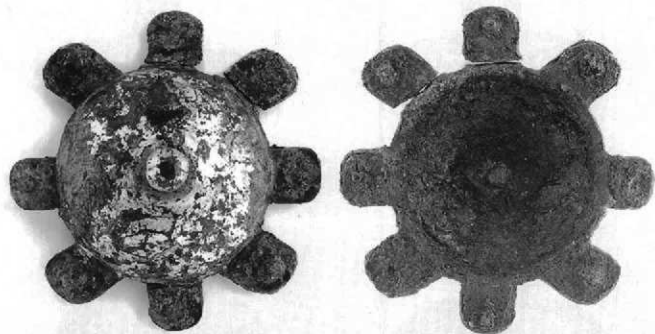


10-1



8-4





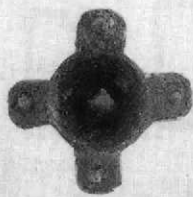
3-80



3-81



3-82



3-83



3-82



3-76



3-77



3-79



3-84



3-86



3-85



3-89



3-88



3-87



3-91



3-90



3-70



3-71



3-93



3-95

3-96

3-94



3-103



3-100



3-98



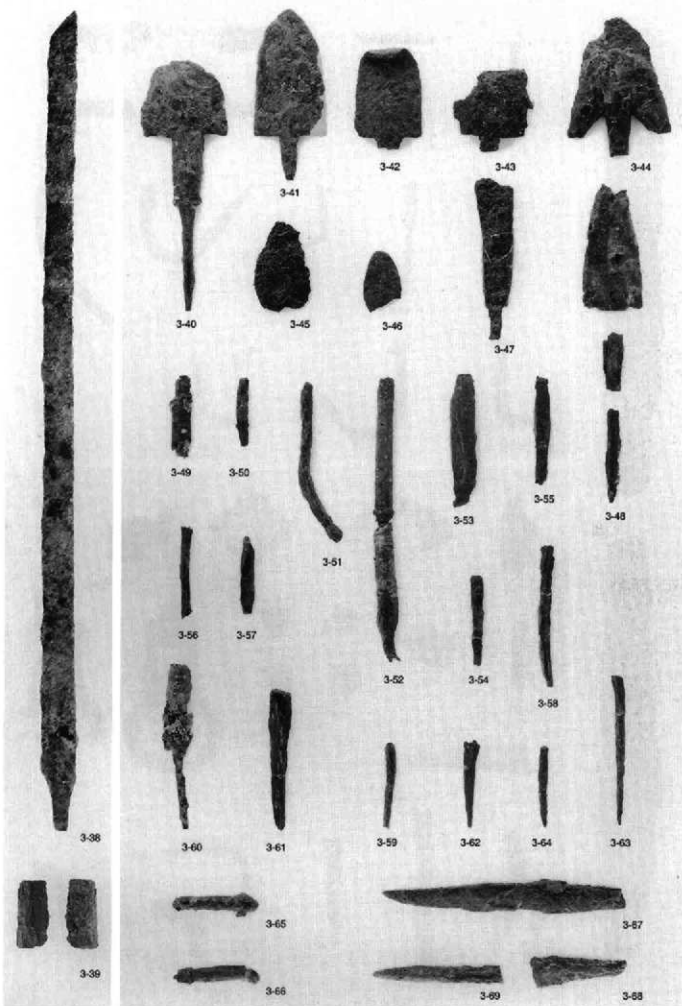
3-99



3-101

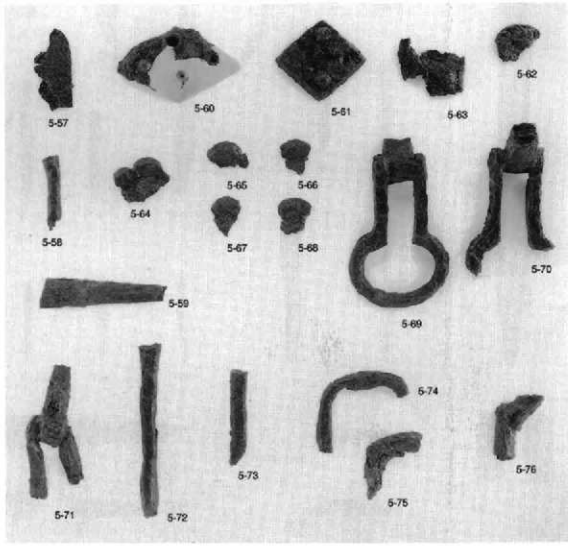
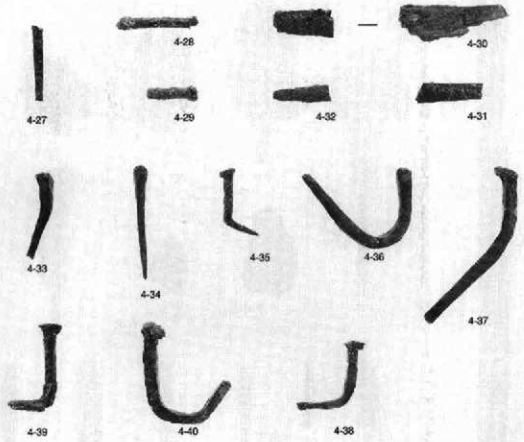


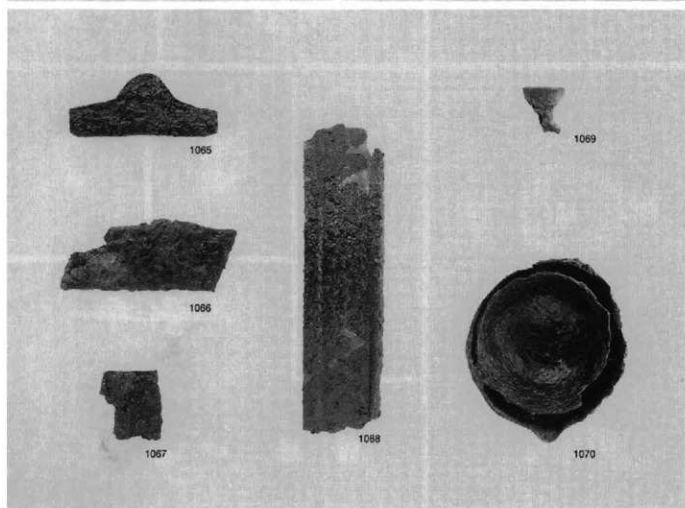
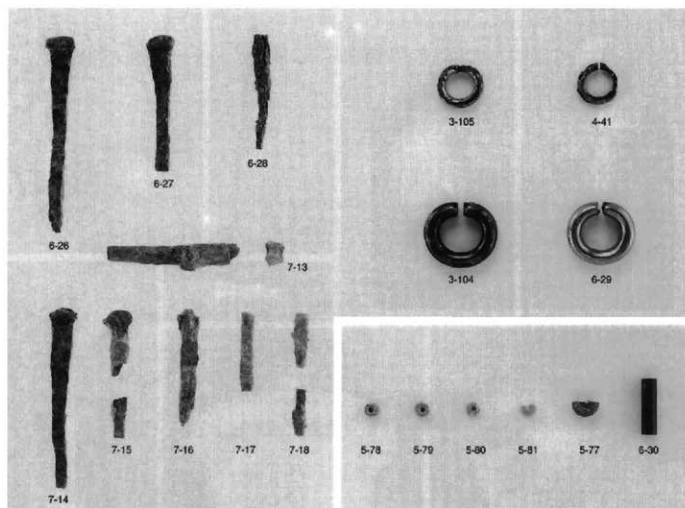
3-102

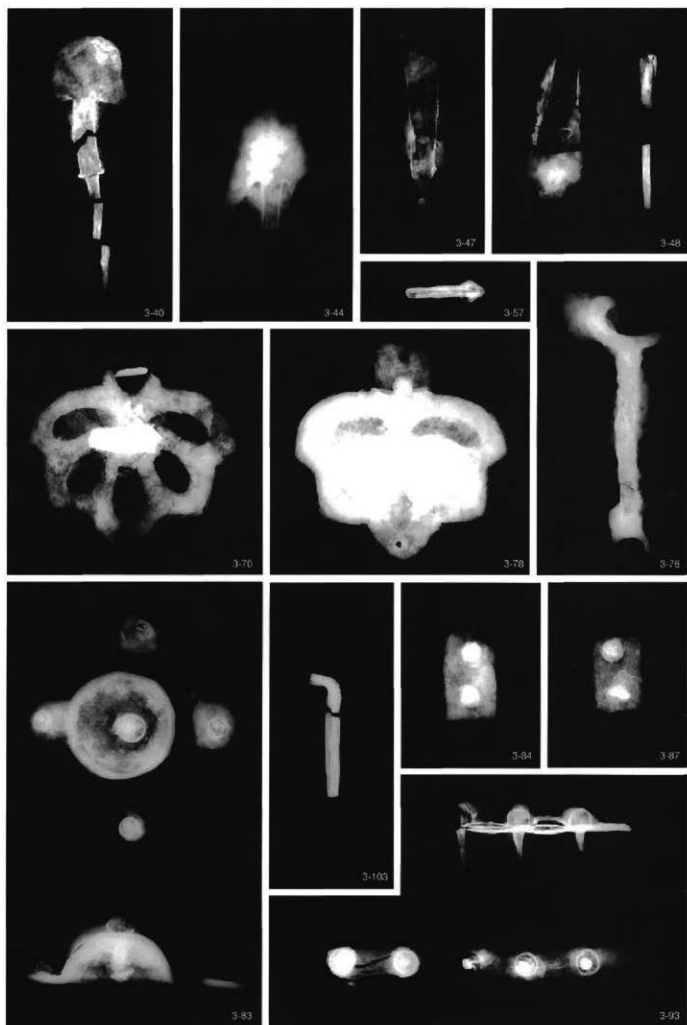


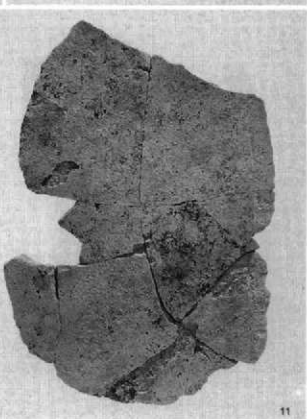
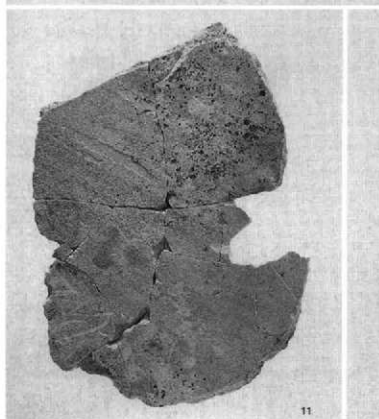
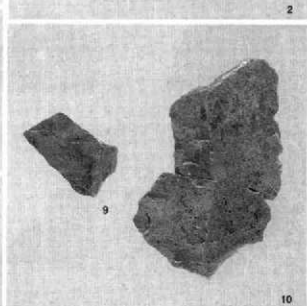
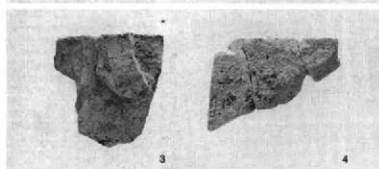
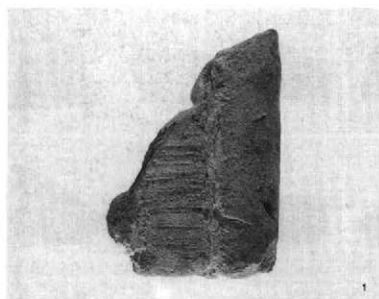


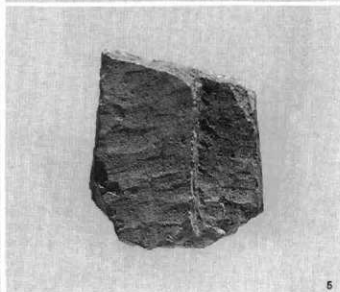
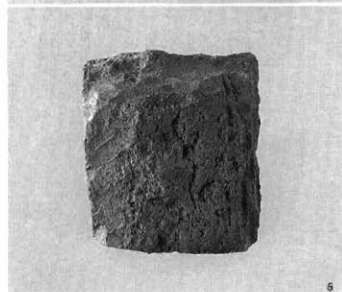
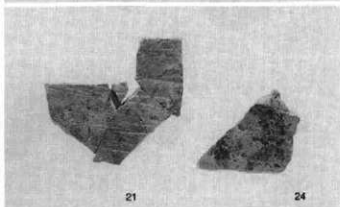
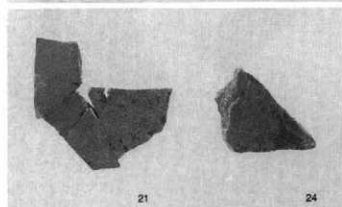
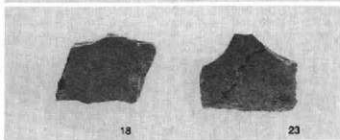
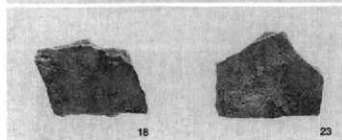
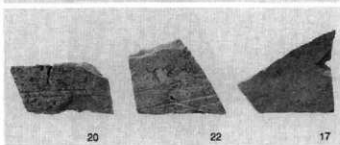
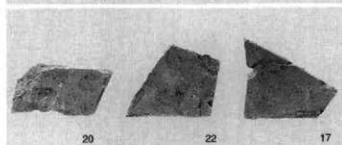
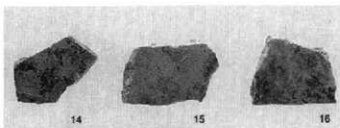
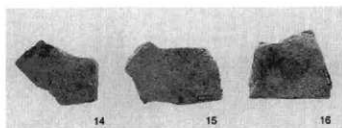
4-26

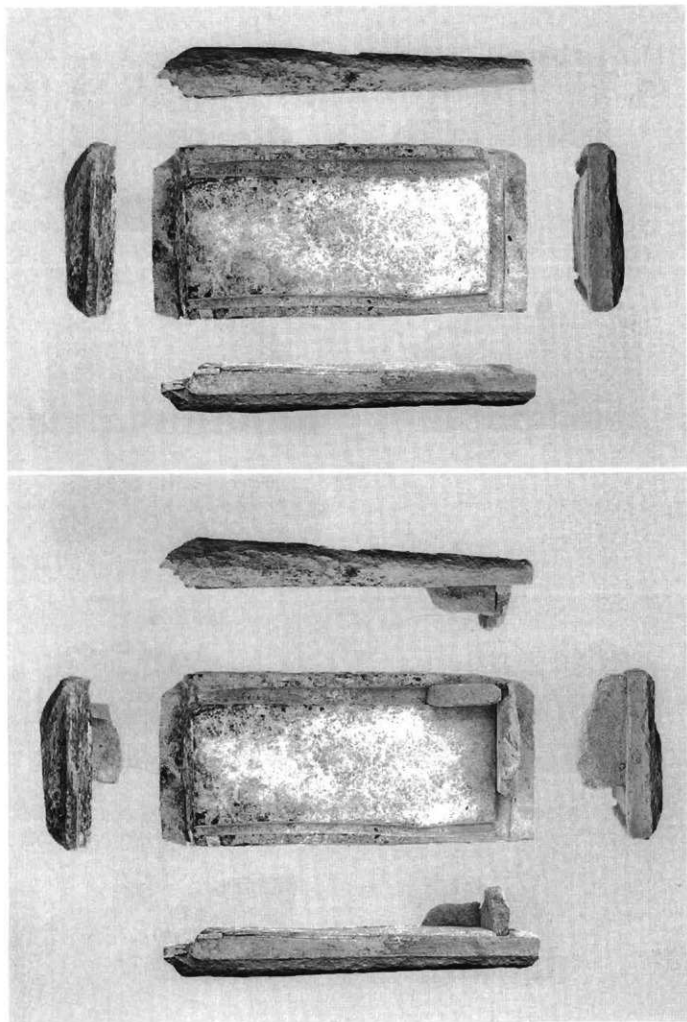


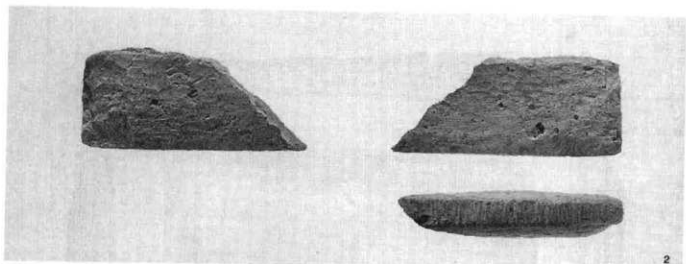




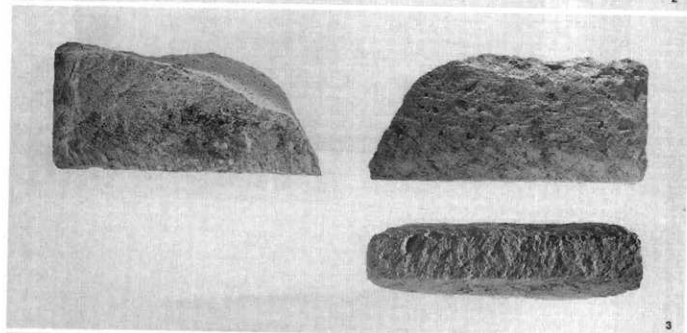




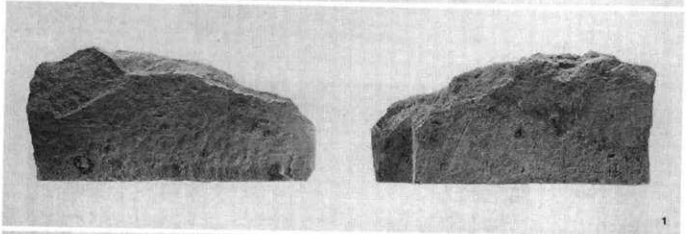




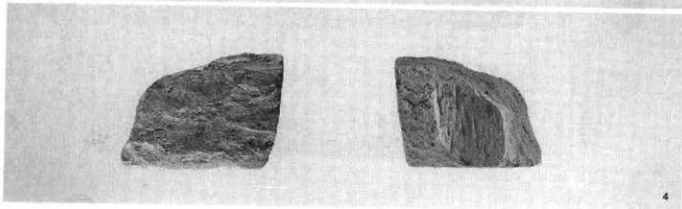
2



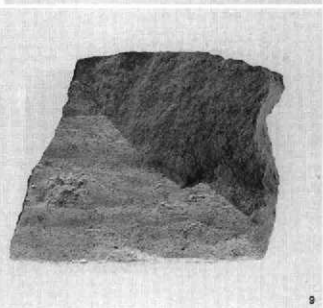
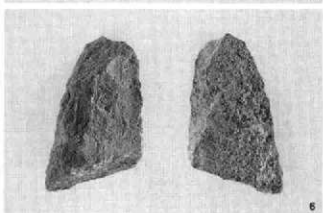
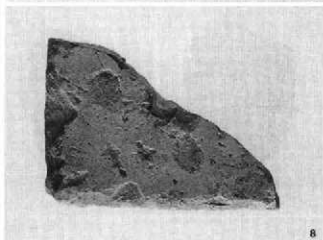
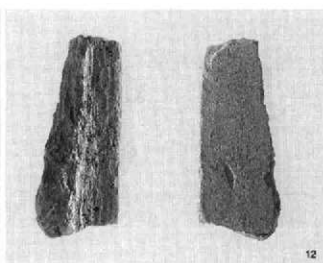
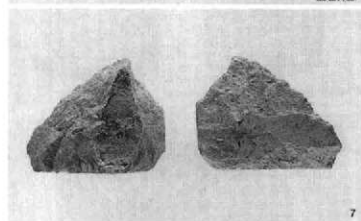
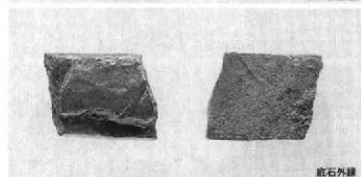
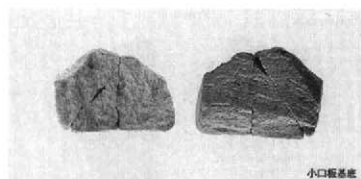
3

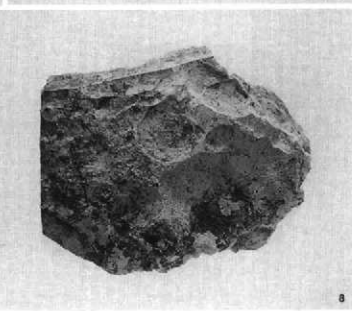
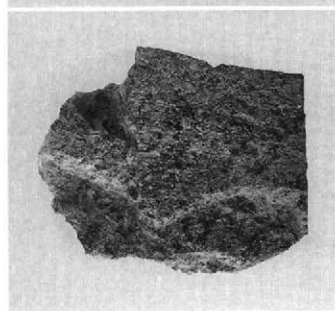
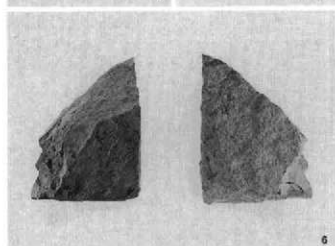
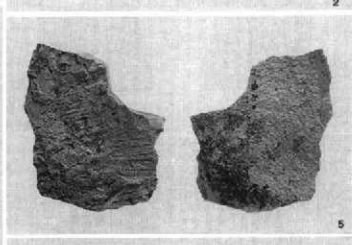
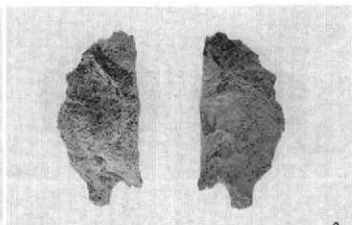
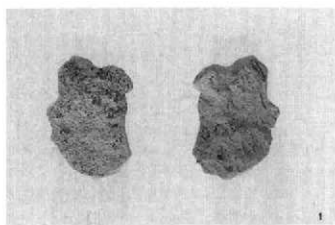


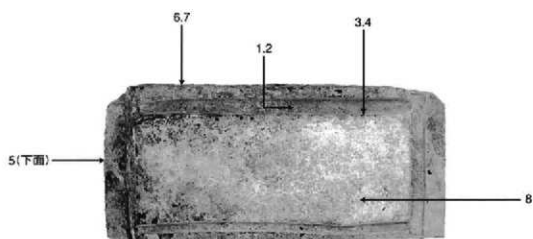
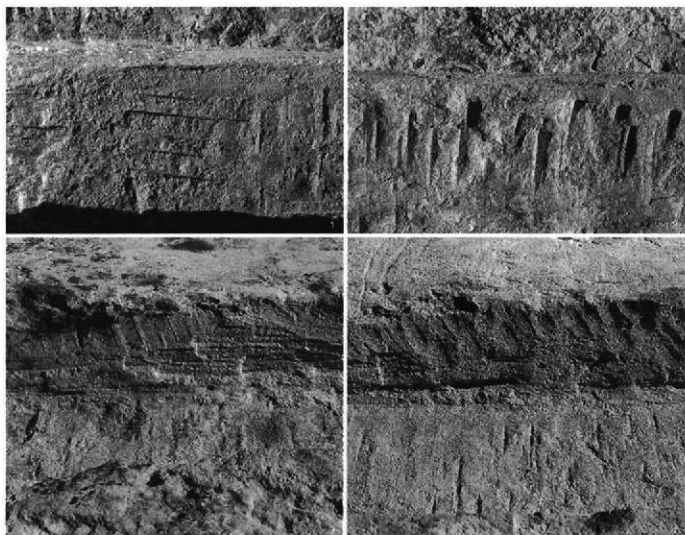
1

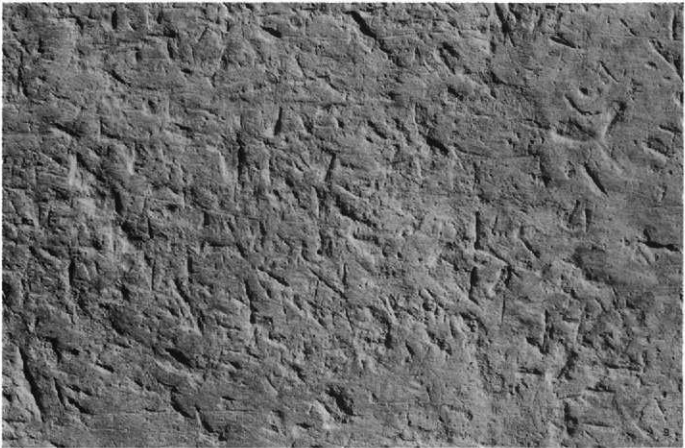


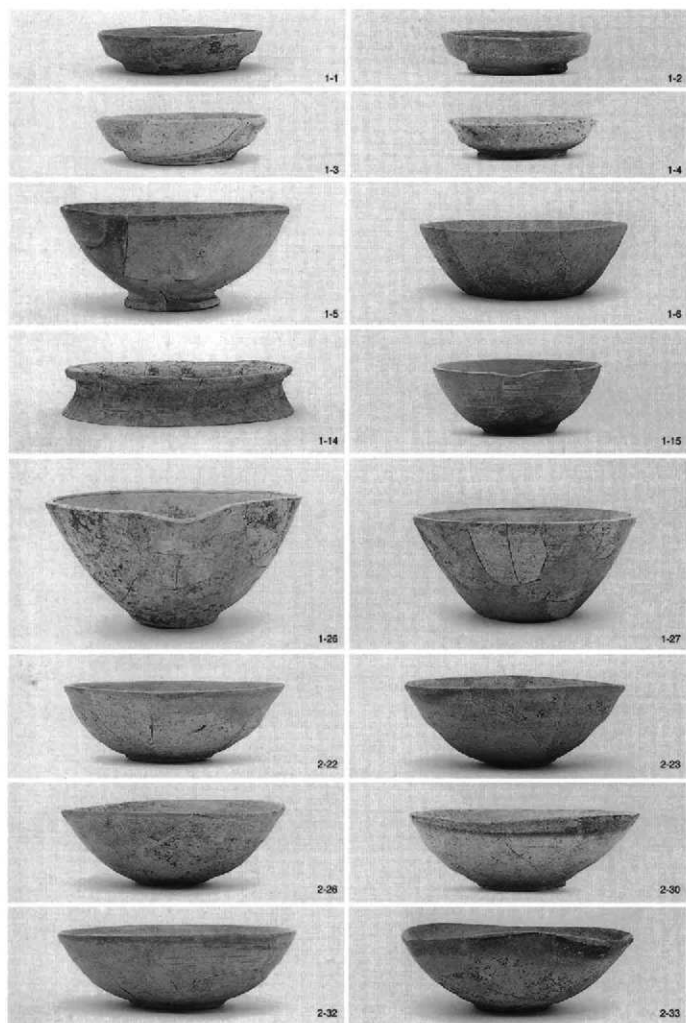
4













3-1



3-2



3-4



3-5



3-8



3-11



3-13



3-14



3-17



3-20



3-21



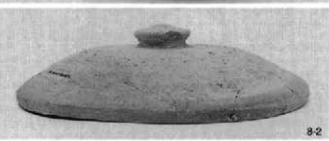
3-22

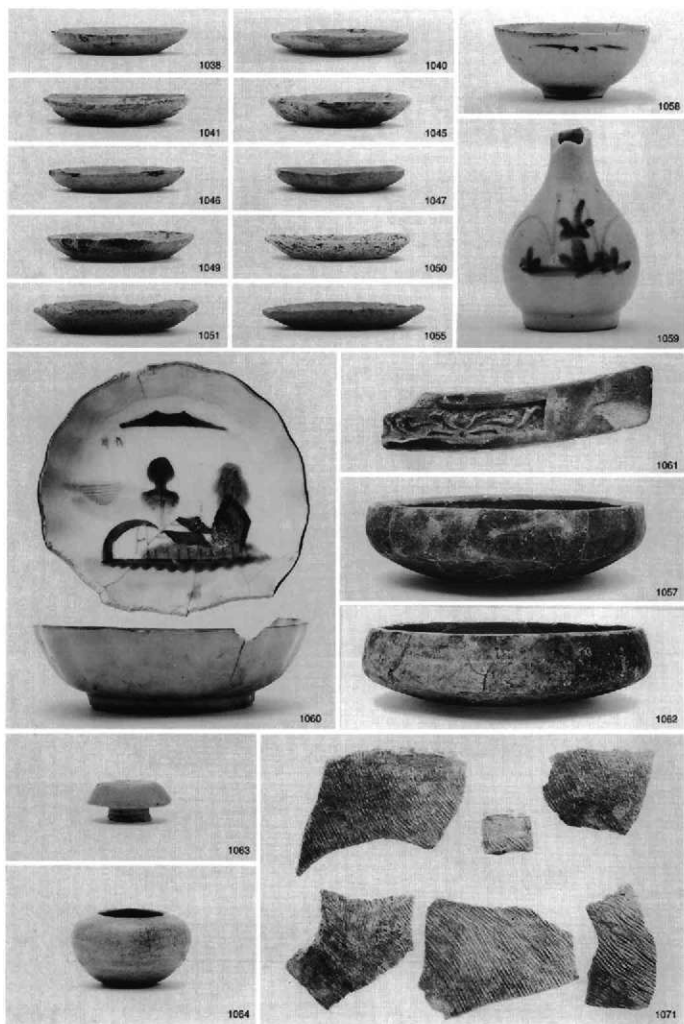


3-25



3-27





報 告 書 抄 録

ふりがな		かってのこふんぐん							
書名		勝手野古墳群							
副書名									
巻次									
シリーズ名		兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号		第239番							
編著者		井守徳男・久保弘幸・松岡千寿							
編集機関		兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地		〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011							
発行年月日		西暦2002年(平成14年)3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村							
勝手野遺跡 勝手野古墳群 勝手野古墳	兵庫県小野市 妻田町 字勝手野	282189		34° 48' 46"	134° 55' 37"	1995年 5月8日 ～ 1995年 3月22日	上層 1,565㎡ 旧石器 1,294㎡ 古墳群 2,152㎡ 竈跡群 古墳群に 包括	山陽自動車道 建設に伴う発 掘調査	
所収遺跡	種別	時代	主な遺構	主な遺物	調査番号	特記事項			
勝手野遺跡	集落	旧石器	石器ブロック	台形石器ほか	950288				
勝手野古墳群	古墳群	古墳	横穴式石室墳11基		950001				
1号墳	古墳	古墳	横穴式石室(無袖)	須恵器・土師器	950182				
2号墳	◇	◇	横穴式石室(無袖) 家形石棺	須恵器・土師器	950183				
3号墳	◇	◇	横穴式石室(片袖) 家形石棺	須恵器・土師器・ 金属器・金銅装具	950184				
4号墳	◇	◇	横穴式石室(無袖)		950185				
5号墳	◇	◇	横穴式石室(無袖) 家形石棺	須恵器・土師器・ 馬具	950186				
6号墳	◇	◇	横穴式石室(無袖) 箱式石棺	須恵器・土師器	950187				
7号墳	◇	◇	横穴式石室(無袖)	須恵器・土師器	950188				
8号墳	◇	◇	横穴式石室(無袖)	須恵器	950189				
勝手野竈跡群	竈跡群	平安	3基						
1号竈	竈跡	平安	竈跡	須恵器	950190				
2号竈	竈跡	平安	竈跡	須恵器	950191				
3号竈	竈跡	平安	竈跡	土師器	950287				

兵庫県文化財調査報告 第239冊

勝手野古墳群

平成14年（2002年）3月29日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 野崎印刷紙業株式会社

〒603-8151 京都市北区小山下総町54-5
